



加賀藩史料

第拾貳編

自文化八年
至文政參年


LIBRARY
APR 19 1968
UNIVERSITY OF TORONTO

加賀藩史料第十二編

文化八年

正月朔日。前田齊廣金澤城に於いて年頭の儀を行ふ。

〔政隣記〕

文化八辛未歳正月朔日、君上今朝御熨斗目・御半袴被爲召、於御居間大福御茶・蓬萊、夫より三献之次第、御熨斗三方等段々上之。御祝相濟、順々引之。畢而服紗御臟煮上之、御熨斗三方等引替之。御祝相濟、二汁五菜之御料理・御茶請・御濃茶等上之、御給仕御奥小將勤之。且御上段に御着座御祝之事。

但、二日・三日朝服紗御臟煮等上之。三ヶ日共朝晝二汁五菜也。

一、御表向一統六時揃に而、年寄中等登城、人持・頭分者同刻於御表式臺に御帳に附。夫々溜所に在之候處、五半時過より夫々列立、御表宜旨御用番從甲斐守言上。四時過御直垂等被爲召、御奥書院御上段に御着座、長甲斐守・本多安房守（前田土佐守は依所勞登城無之、前田伊勢守口中痛同。）大紋之直垂等着用一人宛年頭御禮申上、太刀馬代上之。御作法都而去春之通に而、御都合能相濟候事。

〔金龍公記史料〕

元旦受朝。長甲斐守・本多安房守於奥書院。（前田土佐守・伊勢守因病不朝。）次公於桐之間觀割鶴。奥村左京・横山監物・奥村助右衛門・前田主稅。家老本多勘解由・津田玄蕃・前田織江・前田修理・若年寄前田掃部（家老前田兵部在江戶。）於小書院。人持・諸頭於大廣間上段。奥小將及近習頭部屬於居間書院二之間。表小將於舟之間。是日賜年寄・家老・若年寄・用部屋勤近習頭・用人・臺所奉行鶴羹。近習・奥小將亦與焉。

正月十八日。老臣等に二ノ丸御殿造營竣功するを以て儀式能を觀覽せしむべきことを告ぐ。

〔齊廣樣御傳畧等之內書拔〕

正月十八日年寄中等ゟ今般御規式御能見物、御料理可被下旨被仰出有之なり。

正月廿二日。人持組以下の諸士に儀式能を觀覽せしむべきことを告ぐ。

〔齊廣樣御傳畧等之內書拔〕

御意之趣有之候條、明後二十二日五時過布上下着用可有登城候、以上。

正月二十日　奥村助右衛門

横山監物

奥村左京

人持中幷諸頭殿

猶以病氣等に而難罷出候はゞ、其段名之下に可被書記候、以上。

〔齊廣様御傳略等之内書拔〕

正月二十二日登城候處、於御大廣間左京殿等御列座、助右衛門殿御演述之趣左之通。

御城御造營御成就に付、御家督幷御入國御祝之御含を以、來月二日御能興行、何茂見物被仰付、御料理可被下候事。

一、人持嫡子見物被仰付、御料理可被下候事。

一、來月六日頭分嫡子・人持之二・三男見物、御料理可被下候事。

右之趣可申聞旨御意候事。

但、二日役儀有之頭分以上は、六日見物被仰付候事。

一、御禮幷衣服之儀は御横目可被承合候事。

右同日組・支配有之人々ゟは、於松之間二之間、左之通被仰渡。

御城御造營御成就に付、御家督幷御入國御祝之御含旁御能御興行、御家中之人々見物被仰付、諸役掛之平士は二日目、此外之平士・同代番相勤候せがれ・御歩並之者は三日目より五日目迄

分り候而見物被仰付候間、此趣組・支配之面々江被申聞、交名記御横目所江可被相達候事。

但、御禮衣服之儀は御横目江可被承合候事。

正月二十二日

正月廿四日。儀式能擧行に付き觀覽者の心得を令す。

〔政隣記〕

來る二月御規式御能就被仰付候、日數六日之内五日者御家中見物被仰付、一日者御寺方御招請。右日數之内初日者一統曉七時不遲相揃、二日目より都而六時揃に候事。

一、隱居之面々、幷頭分以上之息方、人持二・三男御目見相濟候人々、右御能見物就被仰付候、被罷出候面々名書、當廿七日迄に御横目所江可被指出候。右名書被指出候以後、病氣等に而不被罷出人々者、其段御申聞可有之候。

一、御用有之初日に不被罷出、二日目に被罷出候人々は、其段御申聞可有之候。

一、御奥小將・御表小將幷御近習頭支配之人々、於瀧之御間見物被仰付候事。

一、頭分以上者前後御目見被仰付、平士者御能初以前迄御目見被仰付筈に候得共、御近邊之面々頭分・平士共右御目見不被仰付候事。

一、初日御能見物被仰付候人持・頭分、幷隱居之面々、人持嫡子、右之面々御大廣間二之間・三

之間・同横御廊下ゟ懸列居、右相揃候席において御菓子被下候筈に候處、右席においては御給事方指支候に付、同御勝手之御間ゟ右之面々五切程に段々繰入、御菓子頂戴之筈に候。且右者御能見物之於席被下候趣に付、御料理頂戴之節与者違、右列居之順に而、座上より段々繰入頂戴之筈に候事。

一、御中入之内御料理頂戴之刻、大勢之儀に付二・三切にも頂戴被仰付候。右に付御料理中者、頂戴相濟候人々も、未相濟人々も、虎之御間に被溜候筈に候事。

一、初日御能見物に被罷出候人々御帳に附、直に御大廣間ゟ被罷越、月次出仕之節列居之通、夫々身當之列居所ゟ可被致着座候。出仕以下之面々も右に准じ、夫々可被致列居候。尤揃之上、惣樣列相しらべ候得共、先右之通御心得可有之候。

一、頭分以上前後御目見被仰付候砌、月次出仕之振之通列居、右列居之儘居直り被致見物筈に候事。

一、初日役儀有之、二日目御能見物被罷出候頭分以上、且又此日被罷出候頭分之嫡子、人持之二・三男御帳に附、直に御大廣間ゟ被溜候筈に候事。

一、御組幷御支配之面々、御能見物被罷出候人々揃之儀、御横目所ゟ御届可有之候。且又右之面々罷出候上、虎之御間ゟ直々御集置、及御指圖候上、列居方年頭御禮之節之通、御組一・

二番之順を以夫々列御立可有之候。御能前御目見相濟、右列居之儘に而居直り、御能見物之筈に候事。
一、御殿詰合に付見物被仰付候面々、都而於實檢之御間に見物被仰付候。列居方不及御指圖候間、身當り列之通夫々可被致着座候事。
一、惣而御能見物人、刀者御進物所に指置候而、刀番人足輕附置候間、人々刀に名札付、右足輕江御渡可被成候。且又人持等表御式臺より登城之人々者、刀出仕等之節之通敷附に而家來江被相渡、爲持可被置候。
一、御能見物被仰付候節、大勢に付退出之節混雜可仕候間、四切・五切にも見合可被致退出事。
一、就幼少未御番も不被相勤人々、幷頭分以上息方、今般御規式御能見物就被仰付候而罷出候人々、同道人不相成候。乍去御城中不案内に而、同道無之而者難罷出人々者、同日見物被仰付罷出候人々江、向寄を以同道被相願、可被罷出候事。
一、年寄中・御家老役・若年寄中之外頭分以上、橋爪御門より内小將一人・草履取一人、平士者都而草履取一人召連可被申候事。
但、右御門内挾箱被持候人々者挾箱持一人、且夜中は提灯持一人雨天之節者手傘相用ひ可

被申事。

一、御能見物被仰付候人々、熨斗目・布上下着用之筈に候事。

但、息方之人々も右同斷。

一、御規式御用掛り外、役儀に而御用有之登城之人々者、人持・頭分幷平侍共、服紗小袖・布上下着用之筈に候事。

一、右之通夫々可申談旨、左京殿等被仰聞候條、御承知被成、御同役御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之内裁許有之面々者、其支配ゟも不相洩相達候樣御申談可被成候、以上。

正月廿四日　　　　御横目

御小將頭衆中

〔政隣記〕

御城御造營御成就に付、御家督幷御入國御祝之御含旁以、御能被仰付候御作法左之通。

一、御能日數六日之內、五日者御家中見物、一日は御寺方御招請に候事。

一、直姬樣・貞琳院樣ゟ初日御料理等被進候事。

但、右御料理被進候儀、幷御見物所御縮等之儀、諸事御近習頭之內より相勤申筈候事。

私に附記、前記去午九月十三日被仰出、圭付御用奥村左京・横山監物山城与其節云。・奥村助右衛門江被仰付。

但、御横目松原牛兵衛・高田久兵衛圭付相勤。

初　日

年寄中等人持・頭分不残、人持以上之嫡子、年寄中・御家老役・若年寄之二・三男等。

二日目

初日役儀有之頭分、御奥小將・御表小將・御大小將、平士之内役懸之人々、頭分之嫡子、人持之二・三男。

三日目

御馬廻。

四日目

定番御馬廻・組外。

五日目

御射手・御異風、右組々代番相勤候せがれ、跡組小頭等、新番小頭幷新番組・御徒・御儒者・御醫師・與力・御歩等。

右組々之者、三ヶ日に分り候而罷出可申候。御醫師之内は、初日・二日目も二・三人宛爲相詰可申候。
一、年寄中初御家中見物之儀被仰付候者、人持・頭分御城江召寄、於御大廣間左京・監物・助右衛門列座可申聞候。且又人持之嫡子は同日見物、頭分之嫡子、人持之二・三男も見物被仰付候段、於席可致演述候事。
但、人持・頭分病氣に而難罷出人々、幷右せがれ共罷出候儀は、其親々迄左京・監物・助右衛門より以紙面可申達候事。
一、遠所に在之人持之せがれは、其者之方迄右三人より以紙面可申遣事。
一、小松御城番・同所御番頭、幷遠所之面々・御徒並以上罷出候事。
一、御近習之頭中者、御奥向之儀に付而、於松之間二之間、左京・監物・助右衛門内可申聞事。
一、支配之人々江二日目御能見物被仰付候段、御奥小將御番頭・御表小將御番頭江、右三人より可申渡候事。
一、御大小將幷諸役懸り之平士は二日目、此外御馬廻以下平侍・御歩並之者迄、三日目より五日目迄三ヶ日に分り候而見物被仰付候段、夫々頭・裁許人江、右三人より可申渡事。
御禮之事

一、人持・頭分幷人持之嫡子御能見物被仰出候爲御禮、年寄中等宅江罷越可申候。御能相濟候以後も、爲御禮登城、夫より年寄中等宅へ罷越可申事。

一、人持之二・三男、頭分之嫡子御能見物被仰付候御禮、幷見物相濟候以後共、何も年寄中等宅江罷越可申事。

一、平侍御能見物之儀、頭々より申渡候以後、幷御能見物仕候以後共、爲御禮頭々迄罷出、共頭・支配人惣代爲御禮、年寄中宅迄罷越可申事。

但、先年平侍之儀者、急度御料理被下与申譯に而は無之、御能見物迄之事に候間、諸事之御禮之儀も省略可仕旨被仰出に付如斯。

一、與力御能見物被仰付候御禮、寄親共與力裁許宅迄罷越、右裁許より年寄中江御禮可申聞候事。

但、與力裁許年寄中宅江罷出候に者及不申事。

一、年寄中與力之儀者、年寄中より與力裁許迄以使者可申達事。

衣服之事

一、御能見物被仰付候人々、熨斗目・布上下着用可仕事。

但、無息之人々も右同斷。

一、右之外役懸御番人等も、御能有之日者熨斗目・布上下着用可仕事。

一、御規式之外之役儀に而、御用有之登城之人々は、人持・頭分も服紗小袖・布上下着用之事。

一、御能初御使、且又要脚廣蓋披露之御奏者番、幷持參之御大小將、熨斗目・長袴着用可仕事。

席附幷御料理之事

初日

一、御奥書院。御料理二汁五菜　年寄中・主稅・御家老役・若年寄・前田龍山。

一、同二之間。御料理二汁五菜　長九郎左衞門・前田右近・村井又六・奥村貞五郎。

一、御大廣間。御料理二汁五菜　人持・頭分・人持之嫡子。

一、檜垣之間。御料理二汁五菜　御家老役嫡子・若年寄嫡子・年寄中・御家老若年寄役二三男等。

二日目

一、御大廣間。御料理二汁五菜　初日役儀有之頭分以上。

一、柳之間。御料理一汁三菜香物　御奥小將・御表小將・御大小將等。但御奥小將を初、御

近習勤仕之人々御料理頂戴之節、屛風圍に而御表向之者与入交不申様可仕候。

一、虎之間・御使者之間。御料理一汁三菜香物　平侍諸役懸・頭分之嫡子・人持之二三男。

三日目・四日目・五日目

一、柳之間・虎之間。御料理一汁三菜香物　平士・右代番相勤候せがれ共・諸組小頭等・新番・御儒者・御醫師　町奉行支配御眼科河合養春・同御鍼立徳田純作。

一、躑躅之間。御料理一汁三菜香物　與力等。但、躑躅之間切に而人數多指支候者、其餘者柳之間江も分可申候。左候者躑躅之間代りと札を張可申候。

一、諸組小頭等常に御賄給候席に而。御料理一汁二菜香物　御徒並・御用相勤候町醫師。

一、御徒並常に御賄給候席に而。御料理一汁二菜香物　御大工・御穴生・御壁塗・町奉行支配之御矢師・御弓打・御弓塗・御鐵炮張・革細工之者。

正月廿五日。前田齊廣石橋の能を演ず。

〔齊廣様御傳略等之内書拔〕

正月廿五日、石橋御能被仰付、平士役掛以上拜見被仰付候なり。

正月廿八日。殿中に演能の行はるゝ日は不急の上申等を指扣ふべきことを告ぐ。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

正月廿八日、御横目ゟ被仰渡候儀左之通り。

前々御能有之日、不指急儀に而茂御用申立罷出候人々有之体に候。左候而者御作法茂猥に相成候條、不指急御用之品は指扣候樣可申談、其上に茂難心得人々も有之候はゞ、樣子相尋、交名承屆可相返旨被仰出候事。

正月廿八日。足輕・坊主・小者にして先に造營の資を献上したる者に之を返却すべきことを告ぐ。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

正月廿八日、定番頭ゟ被仰渡。

御城御造營御成就に付、御家督幷御入國等之御含旁、御祝儀之御能被仰付、御家中之人々見物被仰付候得共、足輕・坊主・小者共御沙汰無之候。依之先般御造營に付志指上候金銀等、御手繰次第可被返下旨被仰出候條、被得其意、金銀等指上候者共ゟ可被申聞候事。

右御用番左京殿御渡之旨、團多太夫より夫々頭・支配中ゟ申談有之なり。

正月廿九日。儀式能擧行の當日に於ける石川・河北兩城門番人の心得を

定む。

〔袖裏見聞録〕

正月廿九日

一、來月二日・六日・十一日・十三日・十五日・十八日御規式御能就被仰付候、右御規式初日石川・河北兩御門曉八時より小扉開き、七つ時より大扉開、二日目より曉七時より小扉開、朝六時より大扉開、御番所張可申、御禮相濟候を見計、大扉しめ可申候。

一、御能爲見物御白洲江罷出候町人共爲差引、横目・肝煎兩御門下へ罷出有之、人數相しらべ、御番人江及屆筈に候間往來無滯、且道惡敷時分木履はかせ可相通候。

一、御能爲見物御白洲江罷出候御郡方之者共爲指引、御扶持人十村沼保村彥四郎等先達而名書相渡置候者之內相添罷出筈に候間、河北御門往來無滯、且道惡敷時分木履はかせ可相通候。

一、右御白洲見物之者共へ被下候御酒・赤飯、簍臺に而指運筈に候間、持參人斷次第兩御門可被相通候。

一、役者へ被下候鳥目、町奉行手合裁領附に而被指出筈に候。斷次第兩御門可相通候。

一、御白洲へ罷出候者共之內、若病人有之、肩に懸御門差出候刻、其手合々指引之者斷

次第兩御門可相通候。

一、右御規式御能に付、御番人曉天交代等往來之人々其外にも、右御規式御用に而往來方差懸候儀は、其品承屆、御用支に相成不申樣可被相心得候。

右之趣被得其意、石川・河北兩御門番人ゟ可申渡旨、口達に而二宮源二郎を以申渡候事。

正月廿九日。江戸に於いて外交を職とする諸士以下の手當支給を停む。

本文の事は正月廿九日に在り

〔政隣記〕

付札、定番頭ゟ

江戸詰人之內御公界向相勤候人々、平士以上ゟ者近年金十兩宛被下、御步等ゟ者五兩宛被下候得共、右被下金是以後被指止候條、此段可申渡旨被仰出候事。

但、當時江戸表に相詰罷在候人々者、兼而心得も有之間敷候間、罷歸候節是迄之通被下候事。

右之趣被得其意、組等之內裁許有之面々ゟも可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

辛未正月

二月二日。第一日の儀式能を擧行す。

疇昔は前夜の意なるべし

〔政隣記〕

二月二日疇昔より之積雪一寸餘、終日風雪烈。但晝後は霽間あり。今日前記之通御規式御能就被仰付候、御表向一統曉七つ時不遲揃に而登城、同刻より同半時迄御大式臺江御帳出、頭分以上幷人持嫡子追々御帳に附候上、御作法書に有之通、直に御大廣間に列居之處、朝六半時頃上之御間御下段也。江御出。但右御出前鶴之庖丁御覽、於桐之間御料理頭篠田萬右衛門勤之、御作法如年頭。御唐紙開之、一統御目見、寛り与見物与御意有之。伺公之年寄中之内より御請被申上、御唐紙建之。御能初之御使御座之間正面階より御舞臺江上り、橋懸りに向座し、扇子を開招之。奥村助右衛門勤之。追付御能初り候に付、列居之人々直に居直り致見物候。脇能相濟、狂言之内より御作法書等に有之候通、追々三切に御菓子被下之、八時頃御中入於御居間二汁七菜等之御料理被遊御祝。之內、左之通披露。

要脚　三百貫文

但、八貫文宛片手に四貫文持之、御小書院横御廊下御縁より階を下り、夫より御舞臺江上り、兩山に積重、都合九山に積之。兩人宛持參に付、都合十八山に相成、委曲繪圖之通持參之。御大小將交名有前記に。

右相濟、御出御上段に御着座、御簾捲上之。御表小將勤之。于時御奏者番奥村左膳正面之御縁階を下り、御舞臺に着座、御大小將廣蓋持參を見懸、頂戴人素袍・烏帽子着用罷出頂戴之。

熨斗目・服紗小袖、但権兵衛迄御紋付御のしめ也。唐織一つ宛御廣蓋に載之持出置付之。頂戴畢而御廣蓋引之。

竹田権兵衛
實生彌三郎
無紋　諸橋権進
のしめ　波吉宮門

右一人宛罷出頂戴之、肩に懸御禮申上候條、左膳儀も御取合之御禮申上、頂戴人肩に懸なから御樂屋に退。熨斗目小袖・服紗小袖一、合て二つ宛御廣蓋に載持出置付之、小袖を取上頂戴人に渡之。受取頂戴之時、左膳御取合之御禮仕。畢而携なから御樂屋に退。

藤本太左衛門　春藤萬右衛門　石井仁兵衛
金春傳藏　山本甚右衛門　小寺金七
松井十左衛門　尾上新右衛門　杉彌兵衛
藤本養五郎　松林小三郎　嶋田源藏
中林吉左衛門　小寺五右衛門　中田猪之助
山田金三郎　糟谷彦次郎　小村千之丞
山田佐左衛門　佐々木壽六　岡次郎右衛門

武部萬藏　松林源三郎　土田孫之丞
松田七五郎　加藤久米五郎　三宅藤九郎
三宅惣三郎　竹中甚助　小杉次三郎
日置長左衛門　古澤幸助　吉田甚右衛門
敷村嘉六郎

右相濟、御簾垂下之、御入被遊。要脚者つれ役等より狂言役迄之內より、御入後出、御樂屋ゟ引之。

熨斗目小袖一つ、服紗小袖一　波吉五郎兵衛

右於鏡間廣蓋に載被下之候段、町奉行申渡之。

御目錄一通宛、追而熨斗目小袖・服紗小袖一つ宛被渡下。

甚右衛門せがれ 山本龜之丞　十左衛門せがれ 松井左一郎　新右衛門せがれ 尾上張十郎
養五郎せがれ 藤本德三郎　吉左衛門せがれ 中林山三郎　猪之助せがれ 中田新之助
佐左衛門せがれ 山田他三郎　惣三郎せがれ 三宅乙九郎　江戸御雇役者 八千九左衛門
京都御雇役者 山田佐次兵衛　同上 皆山利兵衛　同上 宮田彌兵衛

右於鏡間、御目錄町奉行渡之被下候段申渡之。

御目錄一通宛　附記時服二つ宛之御目錄也。追而代銀渡之御例也。

つれ役等　中川忠藏等三十九人

つれ役　柳川全作等廿七人

笛役　藤屋多嘉藏等十二人

小鼓役　金屋專次郎等十四人

大鼓役　飯嶋六之助等十二人

太鼓役　成田金三郎等十一人

狂言役　野口次郎吉等三十八人

地謠等　室橋宗兵衛等五十五人

内　裝束附七人　作物師六人

〆二百八人

都合竹田權兵衛等二百五十九人

附記、前々服紗小袖或時服与有之候者、皆御國染之小袖也。

右於御樂屋被下之候段町奉行申渡、御目錄者町同心渡之。

一、右要脚披露、廣蓋披露共七時前相濟、御前御入之上、御奥書院・同二之間・檜垣之間・御大廣間御料理、御作法書之通に而追々相濟、御大廣間に而者二之間・三之間・同御勝手兩席一度に出之。座列者左之通に而、一番座八十人、人持組今枝內記より御先手岸忠兵衛迄、二番座八十人、人持組藤田五郎より前田木工等並加藤圖書迄、三番座三十九人、志村平丞より關屋中務嫡子定進迄。

附、御奥書院土州殿之外不殘十四人、同二之間長九郎左衛門等四人、檜垣之間前田修理せがれ萬之助等九人。都合二百二十六人也。

右之通頂戴、御料理向詰居付之上、年寄衆被出候後、御座敷奉行左右に分り兩人宛出、寛与頂戴候樣及挨拶、嶋臺出候上、年寄衆被出候後、御振廻奉行同斷及挨拶候。且都而御作法書之通に候得共、二番座御料理頂戴半、最早及暮候故、御能初め候樣被仰出、相初り、三番座頂戴半ば夜五時頃御能相濟。御作法書之通、直々御目見に而者列居に指支候に付、一先御居間に被爲入、右御料理頂戴全相濟、同刻過重而御出、一統御目見被仰付、伺公之年寄中內より御禮被申上候處、規式も首尾克与御意有之、年寄中座上より御請被申上、御唐紙建之、被遊御入候而一統退出之事。

但、御座之間御簾之外板之間に五色青黄赤之三色也。之毛氈敷之、二之間より三之間江懸、御簾之外

板之間に赤色之毛氈敷之、且夜之中并御料理中は御簾下し候。捲下御大小將勤之。將亦御料理之節引物役者、要脚等披露役等之內より勤之。

一、御白洲町・在見物所五十四坪、假屋根掛之板敷、其上に疊敷之、外之方畧交幕張之。尤入口外埒等有之。埒之高四方共畧交幕打有之。

一、風雪に而右毛氈之上江雪溜、御目通之外は坊主掃取。御舞臺江も同斷、シテ役等之後見人共掃取之。御緣之上下等は三十人小頭指引に而、三十人者掃取之候事。

一、御前置之御步小頭等、御舞臺に而者地謡、并御白洲見物人、風雪に而餘程濡候事。

一、御舞臺裝束後見人に至迄、烏帽子・素袍着用之事。

〔政隣記〕

開口　　作者　野尻次郎左衞門

それ朝々には業命を修め、晝其職を考へ、安きにつくの理りも、繼て久しき世々の風、惠みになびく春なれば、むべも富けりさき草の、殿作りせし幾八千代、榮え榮ゆる國とかや。

愚考

國語曰。諸侯朝修天子之業命。晝考其國職。夕省其典刑。夜儆百工使無慆淫。而後卽安。古今集歌に、此殿は宜も富けり幸草の三つ葉四つ葉に殿作りして。

翁
千歳　庄吉
三番三　惣三郎
脇鞁
八郎兵衛
可吉

大黒風流　藤九郎
治郎吉
九郎兵衛
半沾郎
源之助
次六郎
久五郎
萬藏
德次
萬之丞
作平
七三郎
傳三郎

高砂
權兵衛　萬藏
開口
萬右衛門
勇次郎
太右衛門
平右衛門
安左衛門
仁兵衛
彦次郎
金七
彌兵衛

間　八之助

田村
五郎兵衛
金三郎
彦次郎
吉之助
嘉六
勇藏
多嘉藏

間　源之助

羽衣
彌三郎
佐左衛門
信之助
庄之助
傳藏
吉左衛門
太左衛門
甚右衛門

御中入

宮門　三郎右衞門

張良　新右衞門　猪之助　千之丞　五左衞門　養五郎

間　金助

權進

祝言金札　甚助　四郎兵衞　次助　次三郎　山三郎　太郎左衞門　龜之丞

麻生　幸助　恒之丞　八三郎　又四郎

粟田口　惣三郎　九郎兵衞　德次

米市　長左衞門　永藏　理右衞門　三次　金助　三吾　伊右衞門　仁左衞門　勘三郎　久次郎

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

二月二日より御規式御能被仰付。御家中一統・遠所在住暨與力御步並之者迄も拜見被仰付、三州御郡方之者幷地・遠町方之者迄左之通御日取見物被仰付候。

二月二日　六日　十一日　十三日　十五日　十八日

御白洲拜見人指引御扶持人・十村左之者罷出なり。

繪圖略す

沼保村　彦四郎　内嶋村　孫　作　田井村　次郎吉
田中村　小四郎　波佐谷村　久兵衛

右御能拜見之諸士、御能初り前列居之上御目見被仰付候。夫相濟、居直り御能見物なり。誠に稀成御規式どもなり。

二月六日。第二日の儀式能を擧行す。

〔政隣記〕

二月六日天氣宜微陰。今日前記之通御規式二日目御能就被仰付、御表向一統朝六時揃に而、同刻より同半時迄御大式臺ゟ御帳出。初日二日就役儀御料理頂戴等不仕人持・頭分、幷頭分之嫡子、人持之二・三男、追々御帳に附、御大廣間列居。其次組・支配爲指引罷出候人持・頭分、且二日氣滯之處就本復依願今日罷出候人持組岡嶋市郎兵衛。其次少間を隔御大小將・諸役掛平士、年頭御禮列之通。其次頭分嫡子、人持之二・三男列居之處、五時頃御出、一統御目見御意等、幷御能初之御使奥村左京進退等、都而初日同斷に付略す。脇狂言初り御菓子被下候儀、御中入八時頃御料理頂戴之御作法、是又同斷に付略す。

右繪圖之通座列、前田中務より高畠釆男幷岡嶋市郎兵衛（前記之通病氣本復依願今日頂戴に付、末座に列し被下之。）迄御料理頂戴相濟。御作法都而二日之通に付略す。畢而追付春日龍神之御能初り、暮頃蜘盗人之狂言中よ

り御目見之列しらべ有之、暮六時頃祝言之御能相濟。右以前より御大小將等、幷無息之面々、豎組等之爲指引罷出候頭分以上も御勝手ゟ退。今日御能見物御料理被下候表向人持・頭分迄列居、御唐紙開之、一統御目見御意等、是又初日二日之通に而、六時過御首尾克相濟、一統退出之事。

一、柳之間・虎之間等之一汁三菜御料理者、御中入以前五切に出之。最初（御膳居付候上也。）に御座敷奉行等之內兩人充出、寬り与頂戴有之候樣及挨拶候事。

但、御奧小將等ゟ挨拶之儀如何可有之哉之旨、御座敷奉行等より伺有之候處、御作法之儀に候間無構可及挨拶旨被仰出。且右頂戴人都合三百三十二人也。

〔政隣記〕

御能御番組　二日目

翁
千歲　小三郎
三番三　藤九郎
面箱　九郎兵衛
脇鞁　條九郎
亨作

難波　彌三郎
左一郎
庄九郎
新右衛門
信之助
彦次郎
傳藏
吉左衛門
壽源
六藏

間　十左衛門　六左衛門　　永藏

八嶋　次郎右衛門　善右衛門　茂三郎　　六之佐　專次郎　德太郎

間　奈須　　次郎吉

熊野　權兵衛　忠藏　萬右衛門　太右衛門　　仁兵衛　千之助　養五郎

御中入

春日龍神　權進　孫之丞　九右衛門　理三郎　　新之助　彦次郎　金七　彌兵衛

間　　恒之丞

祝言養老　久米五郎　他三郎　儀助　勇八　　長五郎　八郎兵衛　彦十郎　市十郎

せんじ物　藤九郎　　次郎吉　萬之丞　傳三郎　德　二　小太郎　次六郎　平五郎　米次郎　源之助　久五郎

釣狐　幸助　專三郎
螂盗人　乙九郎　萬藏　源之助　七三郎　作平　庄吉　半二郎　次六郎　九郎兵衛　萬之丞　久五郎

二月七日。繪師狩野祐益二ノ丸御殿造營の用を終りたるを以て白銀を賞せらる。

〔政隣記〕

二月七日左之通。

白銀百枚　御繪師　狩野祐益

去々年以來御造營方御用入情相勤、今般御暇被下候に付被下之。

右於御用所御用人申渡之。

二月十一日。第三日の儀式能を擧行す。

〔政隣記〕

二月十一日夜前より之積雪寸計、終日雪降夕霽。頃日春寒甚し。今日前記之通三日目御能就被仰付候、御表向一統六時揃に而、六半時過御大廣間二之間に、組・支配指引与して罷出候

寺社奉行・諸頭列居、少し間を隔、去六日御用に而相残候御大小將・御馬廻等列居之處、五時過御唐紙際へ左京殿・監物殿・助右衛門殿御出座、少々就御不例御目見者不被仰付旨御演述。夫より御作法書之通、御前置御歩小頭等出、年寄中御衝立際へ御出座、御能初り、八時頃御中入、七半時頃御能相濟。

但、御前御出無御座候得者、御前置出不申候得共、何時御出も難計与申趣に而、夫々御作法相替儀無之候事。

一、一汁三菜御料理頂戴人四百人餘、虎之間・柳之間に而三切宛に出之。御座敷奉行御奏者番御馬廻頭青木與右衛門・中川平膳、御小將頭山口清太夫・津田左近右衛門、新番頭・御歩頭替々。

一、一汁二菜之御料理頂戴人二百人餘、於御臺所被下之。

一、御目見以上之人々ゟ者、最初に一度御座敷奉行出、寛与頂戴有之樣可及挨拶等に付、御大工頭以上ゟ者六日之通御膳居付候上出及挨拶。御歩等以下ゟ者尤共沙汰無之候事。

一、前記御献立に、御酒肴氷見海老与有之候得共、右微少之由に而、蛸之手煮付等に相成候事。

附、無息之人々未初而御目見相濟不申者、一統御目見之節平伏仕罷在候樣、左京殿被仰聞候事。

私に附記、御近邊向嫡子等見物に出候故也。

一、御能相濟退出之儀、支配頭より指圖有之候迄、猥に退出有之間敷事。
私に附記、御能全濟不申内退出人有之故也。

右之趣御組・御支配御申談可被成候事。

〔政隣記〕

御能御番組　三日目

氷室
宮　門　權三郎 太郎兵衛　金三郎 庄之助 九右衛門　猪之助 千之丞　五左衛門 市十郎
間　彌作　昌太郎

兼平
小三郎　張十郎 彦次 勇八郎　新之助 山三郎　昌次郎
間　次六郎

東北
彌三郎　新右衛門 儀助 理三郎　仁兵衛 彦右衛門　彌兵衛

間　八三郎

御中入

道成寺　權兵衛　萬右衛門　勇次郎　平右衛門　傳藏　彦次郎　金七　龜之丞

間　藤九郎　乙九郎

祝言右近　源三郎　康之助　信之助　彦之助　六三郎　勇之助　吉之丞　與二郎

餅酒　惣三郎　庄吉　九郎兵衛

比丘貞　長左衛門　理右衛門　久次郎

合柿　次郎吉　萬藏　萬之丞　庄吉　作平　德次　次三郎　牛二郎　小三郎

二月十三日。第四日の儀式能を擧行す。

〔政隣記〕

二月十三日、前記之通四日目御規式御能に付一統六時揃に而、御馬廻組（御大廣間二之間十一日之通組等指引之人々出。）

等列居、五時頃御主付左京殿・監物殿・助右衛門殿御出、少々就御風邪御目見は不被仰付旨御演述。其外十一日之通に而、追付御能初り、九時頃御中入。八時過御能初り、七時前御能相濟、一統退出之事。

一、御能之中虎之間・柳之間に而、三切宛に一汁三菜之御料理出之、御座敷奉行挨拶に出候儀等、都而十一日曁御作法書之通。今日御料理頂戴人五百四十人計、內與力以上三百四十人也。

一、隱居佐藤寛山儀、當二日妻之忌中に而不罷出、就忌明依願今日罷出、御大廣間平士之上ゟ附見物、且躑躅之間頭分御賄席に而品能御賄、（一汁三菜平士に被下候御料理之分、尤御酒等共被下之。）尤同心給仕に而被下之。

一、前記九日に有之候通、十一日・今日見物被仰付候人々者、御大廣間板緣毛氈之上、年寄中等伺公之所より五・六間下之方に並居致見物候。右人々者寺社奉行・公事場奉行・御奏者番・御馬廻頭・御小將頭・學校主付頭・聞番也。御禮御中入之節、於松之間二之間御主付左京殿ゟ迄申上候事。

今日御振舞奉行御小將頭（堀平馬・水原孫太夫）替々。

〔政隣記〕

御能御番組　四日目

白樂天　權兵衛　七五郎　佐左衛門　儀八　勇助　傳藏　勇藏　太右衛門　多嘉藏

問　鶯蛙　權九郎　三次

經政　權進　全作　六三郎　彦次郎　多喜平

吉野靜　宮門　金三郎　次三郎　千之丞　源藏

間　萬之丞　平五郎

御中入

石橋　彌三郎　十左衛門　新右衛門　仁兵衛　吉右衛門　壽六　養五郎

祝言呉服　左一郎　文次　久平　太作　宗左衛門　專次郎　與五平　百太郎

賽の目　萬藏　庄吉　作平　源之助　米次郎　次六郎

素袍落　藤九郎　萬藏　九郎兵衛

若市　幸助　八之助　九兵衛　宗之助　八三郎　又四郎　久作　昌太郎　又作　彌作

二月十五日。第五日の儀式能を擧行す。

〔政隣記〕

二月十五日、月次出仕相止。前記之通五日目御規式就御能、一統六時揃、同刻過御大廣間二之間に十三日之通組等指引之人々、少間を隔御馬廻組・定番御馬廻組・組外・御射手・御異風、頬等本復依願見物被仰付候御大小將・御馬廻等、夫より諸小頭・與力幷御歩並、以下博勞頭取坂井英助迄、都合五百五十人餘、虎之御間ゟ懸列居之處、五時頃御主付左京殿・監物殿・助右衛門殿御出座、少々就御風氣に而御目見は不被仰付旨御演述。其外十一日等之通に而、追付御能初り、九時過御中入。八時過御能初り、七時過相濟、一統退出之事。

但、頬本復等依願見物被仰付候人々ゟも、本文之列立に而御料理被下候事。

一、今日御料理頂戴人與力以上三百四十人計、其餘者御歩並以下に候事。

但、挨拶に出候儀等、都而十一日等曁御作法書幷前記之通也。

御能御番組　五日目

竹生島　彌三郎　源三郎
孫之丞
彦次郎
九右衛門
嘉六郎　房次郎
壽六　養五郎

間　道者　萬藏
半次郎　源之助　小太郎
平五郎　作平　次六郎

忠則　權兵衛
新右衛門
信之助
儀助
仁兵衛　吉左衛門
源藏

間　久作

半蔀　權進
次郎右衛門
猪之助　山三郎
市十郎

間　仁左衛門

御中入

融　宮門
萬右衛門
傳藏　千之丞
金三郎　多嘉藏
酌之舞

間　八之助

祝言志賀　五郎兵衛　蘭作　庄之助　理三郎　新之助　勇藏　逸吉　多喜平

唐相撲　乙九郎　徳次　半次郎　庄吉　源之助　平五郎　萬藏　九五郎　九郎兵衛　作平　小太郎　七三郎　傳三郎　萬之丞　次六郎　次郎吉

禰宜山伏　藤九郎　徳次　作平　萬之丞

井杭　三次　伊左衛門　金助

二月十八日。最終日の儀式能を擧行す。

〔政隣記〕

二月十八日、前記御作法書に有之候通、今日御寺方就御招請、一統六時揃に而、寶圓寺等六時過より追々登城。五時前御大廣間列居之上、被遊御出、御敷居之外に御着座、月次出仕之節年寄中伺公之所、尤眞中御着座也。最初より御唐紙開有之。ゆるり与見物与御意、座上之甲斐守御取合申上、御入、御唐紙建之。追付御能初り、脇狂言之内より御菓子追々出之。八時頃御中入、御料理追々出之。御大廣間者二七切に出之。七時過相濟、同半時過より御能初り、夜五時頃相濟、無程列立之上、御出、今朝之所に御着座、

御寺方御禮之趣、奥村左京言上之處、窺相也与御意。畢而甲斐守御取合申上、御入、甲州等被居置、寶圓寺和尚等ゟ挨拶有之、被退、御家老役中被出、同斷挨拶被退。夫より支度、畢而同刻過寶圓寺等追々退出。其節年寄中等迄り之儀、其外萬端御作法書に有之通に候事。

一、右御寺方退出之上、詰合之人持・頭分・年寄中席ゟ一役宛出、御規式御首尾能相濟、恐悦に奉存候旨申演、五半時頃退出之事。

但、延享五年御規式御能之節、右恐悦申上候儀無之躰に候得共、各示談之上本文之通に候事。

〔政隣記〕

御能御番組　六日目

翁　千歳 彌兵衛　三番三 長左衛門　面箱 權九郎　脇鼓 宗十郎　三郎兵衛

弓八幡　權進　權左衛門　張十郎　信之助　庄之助　次三郎　專次郎　五左衛門　德三郎

間　德次

箙　萬藏　文次　長作　卯之助　長五郎　八郎兵衛　龜之丞

間　勘次郎

六浦　權兵衛　甚助　安左衛門　敬之助　嘉六郎　彦次郎　壽六　甚右衛門

間　事三郎

御中入

弦上　彌三郎　師長宗兵衛　龍神七郎左衛門　姥卯之助　萬右衛門　次助　善右衛門　仁兵衛　千之丞　金七　彌兵衛

間　伊左衛門

猩々　宮門　全作　六之佐　吉左衛門　太郎右衛門　源藏

松脂　次郎吉　九郎兵衛　小太郎　德次　庄吉　萬之丞　源之助　次六郎　七三郎　久五郎　傳三郎

花子　惣三郎　庄吉　萬藏

靱猿　恒之丞　彌作　八三郎　甚太郎

産婦方は小野木氏、後前田齊泰生る

二月廿二日。前田齊廣その側室の懷孕を祝して能を催す。

〔政隣記〕

二月廿二日、就御心祝（御産婦方懷孕着帶之御心祝与云々。）於御居間續舞臺御能有之。四半時揃、御次廻一統熨斗目上下着用、御番組左之通。

養老 御　羽衣 良之助　橋辨慶 御　猩々 小次郎

末廣 藤九郎　井杭 乙九郎　福之神 幸助

二月廿三日。德川家齊の前田齊廣に贈れる鶴金澤に着す。

〔政隣記〕

本文の事は二月廿三日に在り

二月廿二日、寒氣御尋之御奉書、且御鷹之鶴、今月十六日暮頃江戸御上邸發、今晩六半時頃御奉書到來。鶴は翌廿三日曉八半時頃到來。依之御禮之御使辻平之丞ゟ被仰付、廿六日發足之事。

二月廿三日。使者の任に當るものは努めて雜費を要すること勿らしむ。

〔政隣記〕

付札、定番頭ゟ

御使等相勤候人々、雜費多有之躰に被聞召候。畢竟僣上餘情に拘り申故之事に候間、何分御使相勤候儀專一に而、別段之雜費無之儀專要に候間、御使等罷越候節、彼是申立無之、簡約に相心得候樣、可申渡旨被仰出候事。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江も相達候樣可被申聞候事。

右之通一統可被申談候事。

二　月

二月廿四日。德川家基の三十三回忌法會を神護寺に營む。

〔御觸拔書〕

別紙兩通御橫目江相渡、夫々申談候樣申渡候に付、爲御承知進之候。御組江茂御觸可被成候、以上。

正月廿八日　　前田伊勢守

奥村左京樣

孝恭院樣三十三回御忌御法事、來月廿四日於神護寺御執行有之候事。

一、御法事中御作事・御普請方、其外三御丸御射手・御異風稽古、幷諸組弓・鐵炮稽古之儀茂、

相止候に不及候事。

但、神護寺に程近き所稽古場有之候はゞ指扣可申候事。

一、御家中諸殺生、御法事御當日遠慮可仕候。普請・鳴物者不及遠慮候。能囃子・押立候振廻等之儀は、御法事中自分に遠慮可仕候事。

但、能囃子之儀茂、役者抔稽古仕分は不苦候。乍然神護寺近所に罷在候者は、遠慮可仕候事。

右之通被得其意、組・支配ぇ可被申渡候。且又組等之内裁許有之面々は、其支配ぇ茂相達、尤同役中傳達有之候樣、夫々可被申談候、以上。

正月廿八日　　　前田伊勢守

御横目中

二月廿六日。二ノ丸御殿の造營成就せるを以て今明兩日城下に盆正月を行はしむ。

〔政隣記〕

二月廿七日、今般御城御造營御成就に付、昨日・今日町中如盆正月賑ひ候樣就申渡に、一町一町牽山築山之上に而踊狂言或大黑・武者・牛等之作り物、或一町中に畾交幕を張り、店先に

この種の祝賀を亦盆正月と稱す

金屛風而已建廻し、或數百間松之流枝を棚の如くして、其下に休臺等を置並べたる所も有。見物之貴賤群集、東武之淺草市に等し。悉難及楮筆賑ひ也。

〔續漸得雜記〕

一、文化八年當春町中作物・引山等いたし候節、右山之內指車を以引申分も有之躰粗相聞え候。指車之儀は下々勝手次第に拵申儀は不相成品に付、町奉行所被指留。右指車は高岡に限り格別之譯は、往古聚樂亭に有之車にて、高岡ゟ御引寄有之由。

閏二月二日。祝賀の爲百姓に一日の休業を命ず。

〔筒井舊記〕

今般御造營御成就、幷御家督御悅御含旁、爲恐悅一統一日休日申渡候條、此段夫々可申渡候、以上。

未閏二月二日　　　　中村逸角

能州四郡十村中

閏二月四日。慰能を演じ諸士をして觀覽せしめんとすることを告ぐ。

〔政隣記〕

當十日より御慰御能被遊候に付、各幷御組・支配之人々ゟ拜見被仰付候旨被仰出候。且又頭

分以上嫡子御目見相濟候面々も拜見被仰付候間、嫡子名書當七日迄に御指出可有之候。右之趣御同役等江御演述可被成候事。

閏二月四日

當月於表御舞臺御慰御能被遊候に付、御家中御歩並以上拜見被仰付候。御能日數等之儀は左之通。

閏二月十日曉七半時揃　人持・頭分不殘、幷人持以上之嫡子・御大小將・平士諸役懸り。

同　十三日曉七半時揃　御馬廻頭分嫡子御目見相濟候分、人持之二・三男。

同　十六日朝六時揃　定番御馬廻・組外・御射手・御異風、右組々代番相勤候せがれ。

同　十九日朝六時揃　諸組小頭等、新番小頭、幷新番組御歩・御儒者・御醫師・河合養春・與力等。

同　廿二日曉七半時揃　御歩等、御用相勤候町醫師。

右組々御大小將以上、十三日・十六日・十九日に被割合、御歩等は十六日・十九日・二十二日に割合、名書當七日迄に御次江可被指出候。

一、初日十日御用等に而難罷出人持・頭分等者、十三日に繰下り可罷出事。

一、拜見人服紗小袖・上下着用之事。

但、詰合に而拜見之分常服之事。

一、頭分以上拜見被罷出候者、以名札御次江被及案内、直々竹之御間拜見所江被罷越、先達而御規式御能之節之通、列居座付所之儀者、竹之間二之間より三之間・同横廊下江懸け列居之筈に候。且又平士幷平士以下罷出候者、頭・支配人及指圖、虎之御間江集め置、相揃候上以名書御次江被及案内、指圖之上拜見所江被相廻。但一・二番之順を以、組・支配之頭々より列立可有之候。

一、人持・頭分・平士・御歩並之者迄、御賄一度宛被下候事。

一、人持・頭分・平士以下、於御臺所に御賄被下候事。

但、人持・頭分・人持之嫡子者、躑躅之間代り竹之間於御勝手に御賄被下候。平士幷平士以下者躑躅之御間に而御賄被下候。御步等者御臺所常之席に而被下候事。

一、御賄被下候儀宜時分、拙者より及指圖候條、幾切にも御示合不致混雜樣被相廻、組・支配之人々者其頭々より被致指引、不致混雜樣可被申談候事。

但、詰合に而拜見之人々御賄不被下候事。

一、五日共御殿詰合人持・頭分・平士・御步並之者迄拜見被仰付候。

但、詰合に而拜見被罷出候人々、實檢之御間において拜見被仰付候。列居方之儀者、身當

列之通夫々着座可被致候。

一、幼少に付いまだ御番も不相勤人々、幷頭分以上之息方、先達而御規式御能之節之通に相心得、同道人等無用。乍去御城中不案内に而、同道無之而者難罷出人々者、同日拜見被仰付罷出候人々江、向寄を以被賴可被罷出候事。

一、御能拜見人大勢に付、退出之節可致混雜候間、見合幾切にも退出之事。

一、頭分以上橋爪御門より內、小將一人・草履取一人、平士者都而草履取一人可被召連候。但、右御門內挾箱被持候人々挾箱持一人、夜中者提灯持一人、雨天之節者手傘相用可申事。

一、人持・頭分幷人持・頭分之嫡子御能拜見被仰付候御禮、御能相濟次第當日人別に御次江被罷出可申上。且平士幷平士以下者、組・支配頭引請、御禮御次江被罷出可申上事。但、嫡子・二三男拜見被仰付候に付、親々よりも御禮可有之筈に候事。且又病氣等之人々、快氣次第御次江被罷出可申上事。

一、人持・頭分・平士等遠所在住之人々者、今般御能拜見不被仰付候事。

一、遠所在住之人持之嫡子・二三男、幷頭分嫡子留守に罷在候分拜見之儀者、親々同役より演述可有之事。

右之趣御組・御支配御申渡、且又御組等之内裁許有之人々者、其支配江も申渡候様可有御申渡候事。

閏　二　月

閏二月八日。家中諸士にその陪隷の宗門届出を嚴にすべきことを命ず。

〔御觸拔書〕

別紙寫之通定番頭江申渡候付、爲御承知進之候條、御組江茂御觸可被成候、以上。

閏二月八日　　長　甲斐守

御家中之人々、家來等宗門相改、每歲四月改斷、居成召仕候得者其趣及斷候儀者勿論に候得共、近年居成に召置候趣斷書付多有之候付、宗門奉行申聞候趣も有之候。宗門方之儀者、公儀御縮方に候へば、等閑之儀者無之筈に候得共、猶更嚴重相心得、每歲斷方間違無之樣相心得可申候。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江茂相達候樣可被申聞候事。

右之通一統可被申談候事。

閏　二　月

閏二月十日。第一日の慰能を擧行す。

〔政隣記〕

閏二月十日快天微風起。於表御舞臺今日初而御慰御能被遊、拜見就被仰付候。御番組左之通に而朝六半時頃初り夕七時頃相濟。

翁　老松　紅梅殿　御　知　章　宮　門　江　口　權兵衛

邯　鄲　御　海　人　御奧小將 坂田良之助　祝言嵐山　御表小將 森　權太夫

三本柱　藤九郎　蟹山伏　御細工人 高橋八左衞門　花　折　幸　助

千切木　惣三郎

〔政隣記〕

十日御能之節、翁相濟關屋中務御大廣間之御緣江出、將机御免与申渡之、棟取之大鞁・小鞁役目禮仕將机に懸る。追付三番叟初而、此時朝日菱御矢倉之方横より登り、御舞臺等江映ずる事赫々たり。老松濟候而五半鐘打。

一、御廣式より之御覽所者、先達而御規式御能御見物所之通、御裝束所等御縮に相成、御庭通り胎內潜りより御往來。依之此度之御裝束所者、假に御書物所役所役人裏口御門より往來出勤之事。前之方、御數理有之候事。

附、前記にも有之通、御規式御能御見物御往來者、假御廊下より松之間通被爲入候に付、年寄中席檜垣之間に相成、此度は本文之通に付如平常也。

一、拜見人列立等之儀、主付上坂・有澤・中村・津田・今井指引、御表御横目者都而携候儀無之、自分拜見而已也。御樂屋向之指引曁御前向之儀者、神田・神戸・池田勤之。

一、御中入者九時過、同半時過鄙鄲之御能初る。

一、十日晝翁之御面ㇾ御裝束之間前に而御備物有之候由。委く不知れ。

一、同日拜見人人持組之內、幷實檢之間拜見人之內、御前御出懸り被遊候而も手を突不申、膝之上に手を上居、甚緩怠不敬之貌之者有之。依之主附御近習頭等僉議之上、當番御横目蓑輪知太夫御次ㇾ呼立、右等之趣申達、不敬之爲躰無之樣可申談旨申談に付、則人持組筆頭今枝內記ㇾ申達候之處、內記答に者、自分儀是迄數度拜見仕候。御前橋架りに被爲在候中者手を突罷在、御舞臺へ被爲入候得者手を突不申拜見仕、又御入之節も橋架りㇾ御向より御幕入迄手を突申候。同席中等者いかゞ有之候哉見受不申候。私儀は今日も右之通与申聞に付、御横目答に、被仰聞之趣委曲致承知候。併中に者心得違之人々も相見え候間、御筆頭之事に候條、夫々御傳達可有之旨申談置候。然處其以後人持組之內富田權佐（年齡六十五歲學才博文之人也。）は如最初手を突不申、不敬之爲躰に付、御能相濟候後居殘申談、主付御近習頭より段々申達候處、大

に迷惑至極仕候段等、誤り入候旨申譯有之候由等云々。

〔政隣記〕

閏二月十一日。昨十日御能御白洲拜見所、先達而は板屋根有之候得共、此度は無之、雨天に候得者傘三人に一本宛之割を以御貸渡。但五ヶ日目に雨天に而候得者被下切之事。

一、同日拜見人七ヶ所町々より（四丁木町・金谷町・安江木町・石引町・御小人町・十三間町・五枚町・鍛冶町、〆八ヶ所之處七ヶ所与云々。）一組合二人宛、地子町一組より一人宛、鬮取を以罷出、御造營掛り諸職人、御造營向御用聞町人等、都合此度御白洲拜見人五千六百有餘人也。

右五ヶ日に割合拜見被仰付。

右之者共江赤飯（批に盛被下之候事。）被下之、此度御酒者不被下候之事。

〔政隣記〕

前記十一日に有之、此度御白洲に而拜見人高左之通。

六千二百五軒より　地子町拜見人、一組合より一人宛
一、千七百人

九百四十五軒より　七ヶ所町、同斷
一、四百七十三人

一、千五十五人　地子町組合頭共

一、八十五人　地子肝煎等幷番徒曁指引之横目肝煎

但五ヶ日都合之人數也

一、八十七人　二百四十九軒より　御門前町・寶圓寺門前・西御坊町

一、五百六十一人　町方大工

一、千二百五十五人　御作事方大工

一、三十三人　御臺所御用聞

一、三十人　奥御納戸御用聞

一、百人　寺社方門前地之者

一、百人餘　宮腰幷御郡方

一、百四十人　御造營方懸り足輕

一、七十人　御臺所附同心

都合十三口〆五千六百八十九人

右五ヶ日に割合、一日千百三十七八人宛に候得共、少宛之増減有之候事。

閏二月十二日。第二日の慰能を擧行す。

〔政隣記〕

閏二月十三日前記に有之通、今日於表御舞臺御慰御能二日目也。朝六半時前初る。御用部屋勤仕人見吉左衛門、長袴着用御能初之御使勤候。進退等都而前月御規式御能之節左京殿之通也。將机御免之進退も同一昨日。

今日者十日御用に而拜見無之人持・頭分・御大小將諸役懸り之人々、且御馬廻組之人々三組頭分嫡子、人持二・三男。拜見被仰付。頭分以上者竹之間御勝手上之御間に而一汁三菜之品能御賄・御酒・御肴被下之候儀等、都而十日同斷。但平士者躑躅之間に而被下候儀、前記にも有之候得共、同間狹く隙取候に付、竹之間御勝手・つゝじ之間兩席に而被下候。此後も同斷。

九時頃御中入、八時前道成寺初り、夕七半時頃相濟一統退出。御番組左之通。

翁　志賀　宮門　實盛　御　釆女　坂田良之助

道成寺　御　谷　行　五郎兵衛　祝言呉服　御居間御坊主青木小齋事小次郎

入間川　長左衛門　宗　八　小原惣左衛門悴平作　懷中聟　乙　九郎

鬮盗人　藤　九郎

閏二月十六日。第三日の慰能を擧行す。

〔政隣記〕

閏二月十六日天氣宜、折々微陰。但晝迄は快晴至極也。
今日於表御舞臺御慰御能三日目也。朝六半時過御能初り、九時過御中入、同半時頃阿漕初り、夕七半時少前相濟。拜見人前記四日に有之通、定番御馬廻等、曁十三日に相詰候御馬廻附十九日にも有之、三日に割合与云々。夫々組列并年頭御禮順列之通列居之事。右之外十日・十三日同斷。御能御番組左に記す。

玉の井　御	俊成忠則　御奥小將 丹羽余所太郎	小原御幸　御
阿漕　御居間方定番 御歩十左衛門	芦苅　坂田良之助	亂　彌三郎
二人大名　八之助	不聞座頭　萬藏	釣狐　藤九郎
附子　三次		

閏二月十九日。第四日の慰能を擧行す。

〔政隣記〕
閏二月十九日、於表御舞臺四日目御慰御能、朝六半時過初、九時過御中入、七半時相濟。拜見人前記四日に有之通、曁相殘候御馬廻組等、列居共外前記同斷。御能御番組左之通。

松尾　小三郎	田村　御	小鹽　彌三郎
三輪　權進	望月　御	國栖　御留守居物頭 永原七郎右衛門

祝言金札　庄九郎

人馬　乙九郎　八幡前　幸助　柱杖　藤九郎

八句連歌　與力 生山左兵衛　樋酒　長左衛門

閏二月廿二日。第五日の慰能を擧行す。

〔政隣記〕

閏二月二十二日於表御舞臺五日目御慰御能有之、御番組左之通朝六半時過、御用部屋勤之。御近習御用戸田與一郎熨斗目・長袴着用、御大廣間御縁之階を下り、御舞臺江上り橋架り之際に着座、扇子を開き相圖を以御能初之御使勤之候。進退等都而御規式御能之節奥村左京殿、幷今月十三日人見吉左衛門勤候如進退。右畢而追付御能初り、且翁相濟、與一郎儀御大廣間御縁江出、將机(附、口演に而は無之及會釋相圖也。)御免之段申渡、棟取之大皷・小皷役應諾之相圖目禮仕、將机に懸り、追付三番叟初而九時頃御中入、同半時過山姥初り、暮合過相濟候事。

今日に而相濟、翁立に付御能初之御使等有之儀如本文。

翁　白髭　坂田良之助　籠　彌三郎　野々宮　御

山姥　權兵衛　安宅延年舞　御　羅生門　五郎兵衛

祝言高砂　十左衛門

末廣惣三郎　察化幸助　空腕八之助
蝸牛次郎吉　夷大黒恒之丞

閏二月。諸士以下の知行・扶持高等を調査す。

〔金龍公記史料〕

年寄中九人知行高十八萬八千五百六十九石二斗七升、内一萬四千七百十石與力知。其他知行高六十九萬二千九百八石一斗九升。扶持方二千二百十一人分。切米二萬九千六百四十八俵。判金九十七枚。小判九十五兩。銀九枚。右人持以下至歩並、幷自他國町人、其外後藤・本阿彌・狩野・江戸京手役者給合力米者皆在中。

右文化八年閏二月調。

閏二月。郡奉行・改作奉行等出張の際百姓の特に手數を費すこと勿らしむ。

〔筒井舊記〕

拙者共御郡方出役之砌、賄方等之儀嚴重申渡置候に付、大抵拙者共存寄之處江至り申候御郡も有之候得共、家來末々之處においては、全行届兼候躰に相聞、右御用に携候末々役人等に

も、無用之失墜相加り候樣子に候。左候得者おのづから末々課役多に相成、御郡方惣樣之患に相成可申儀者、別而御政事之端にも携候役人之心得としては、一圓有之間敷事に候。根元末々のため被立置候役人に候處、其役人之ため末々之愁に相成可申儀、歎ヶ鋪事に候。何分此所令會得、下々煩に不相成樣に相心得可申候。尤拙者共にも不限、御郡方爲御用罷出候諸役人之儀者、同樣之儀に候得共、其役向多端に候得ば、全御郡方之情に入候人々茂有之間敷、御郡方役人之存る處は行屆兼可申候得共、御郡方之事に預り候人々、其本意不取失程に候はゞ、格別下々之愁には相成申間敷筈に候。尤右諸役人中ゟ者被仰渡之趣茂可有之候條、此段一統令會得、村役人等ゟ茂惘に可爲申聞候事。

未閏二月　　　　　三州御郡奉行

改作奉行

諸郡御扶持人中

三月朔日。西本願寺に於ける宗祖の年忌に百姓の上洛するを禁ず。

〔筒井舊記〕

西本願寺宗祖年回に付、能州寺庵致上京候樣子に候。右に付宗意安心之儀、何与歟於彼地御沙汰可有之哉与、御郡方之者共可致迷亂与、寺庵之跡より可罷登躰粗令承知候。右に付而は

詮議之趣有之候條、一圓上京爲致間敷候。委曲之儀者追而可申渡候得共、先此段御郡方門徒共江能々申渡、騷立不申樣夫々可申渡候、以上。

未三月朔日

高田彌左衞門

中村逸角 不在合

能州四郡十村中

今般西本山宗祖年回に付、越中古國府勝興寺を初、西方寺庵上京御指解之旨先達而被仰渡候處、今度寺庵上京之躰に付、安心方之儀与心得違、門徒共上京指止之儀申出候躰、其上にも頭寺等上京有之候得ば、人多に騷立候儀も難計樣子及承候。元來此度頭寺を初、寺庵上京者安心一件に拘り申儀に而者無之、宗祖法會に付夫々出席無之而は不相成譯に付、右之通に候。然處支配所之者共彼是申立候儀は一圓有之間敷儀、沙汰之限に候。如此申渡候上者、手次寺上京指留候儀堅致間敷候。尤出立之砌抔少も相妨候仕業不致樣嚴重可申渡候。如此申渡候而も不致會得抔与申鬪候共、一圓不承屆候。其方共身分にも拘り可申候條、此儀嚴重相心得、右等之趣夫々可申渡候、以上。

未三月六日

高田彌左衞門

中村逸角

三月二日。曩に徳川家齊より贈られたる鶴を諸士に頒つ。

〔文化雜記〕

一、文化八年閏二月十七日、御奏者番同じ罷出候樣御用番安房守殿被仰聞、罷出候處、左之通被仰渡候事。

今般御拜領之鶴、來月二日御披に付、人持・物頭等出仕以上江御料理被下、御能茂見物被仰付候。右爲御禮明十八日登城、幷御能相濟來月四日登城之筈に候條、可有其心得候事。

但、四時より九時迄御帳指出候間、御奏者番申談相極候事。

一、廿七日左之通玄蕃殿被仰聞候に付觸出し、幷諸番頭江披見申談候事。

御拜領之鶴來月二日御披に付、當番之人々御歩並迄布上下着用之筈に候條、向寄に夫々可被申談候事。

一、御勝手に而御料理被下候。御奥・表諸番頭等御禮之儀者、御料理頂戴以後拙者迄御禮申聞、年寄中等宅江相越候には不及候。且又當番之御使番、朝番は夕江居延、夕番者朝より罷出候儀勝手次第に候事。

越後屋敷は藩侯の在江戸中老臣の會合する所

〔齊廣様御傳略等之内書拔〕

三月二日御拜領之鶴御披御規式有之、御能被仰付、年寄中より物頭以上隱居共拜見、御料理二汁五菜頂戴なり。年寄中・御家老・若年寄中江は御能之内御菓子被下なり。

三月六日。金澤城内の越後屋敷再建成れることを告ぐ。

〔政隣記〕

付札、御横目江

今般越後屋敷出來に付、以前之通御留守中同所江拙者共致出席、尤諸役所等も以前之通候條、被得其意、夫々可被申談候事。

三　月

別紙之通夫々可申談旨、御城代伊勢守殿被仰聞候條、御承知被成、御同役御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之内裁許有之面々者、其支配江も不相洩相達候樣御申談可被成候、以上。

三　月　六　日　　御　横　目

御小將頭衆中

〔政隣記〕

前記六日に有之今般御造營之越後邸繪圖有之、繪圖袋ニ入置互見。且惣坪數二百五十六坪計、御長屋七十二坪計に候事。

但、右越後邸ニ者、御用番之諸頭例月式日罷出、諸願等書付等も持參、且跡目立・轉役等之類も被仰渡。

一、佳節・朔望等出仕御弘等、惣登城等之類は、二之御丸ニ罷出候筈之事。

右御横目所承合記之。

三月十一日。百姓の湯治と稱し藩外に出づるを禁ぜしむ。

〔筒井舊記〕

御郡方之内致湯治度抔与申候而致遠行候はゞ、村役人ニ迄斷出候共、此節は一向宗年忌茂有之、且出作中之時節に候得ば、一圓承屆申間敷候。自然其内心得違之者も有之、致上京候様之躰承り候はゞ、嚴重に遂穿鑿候而、村々取縮方不埒無之様可申渡候。此節洩々致上京候様之風評承及候條、此段可申渡候事。

未三月十一日　　大村友右衞門

多羅尾左一郎

能州四郡御扶持人・十村中

三月十四日。前田齊廣參覲の爲に金澤を發す。

〔政隣記〕

三月十四日陰、巳上刻より雨降次第に强終日不霽。

今日（一昨日記に有之通、五時之御供揃に付、御見立之人々一統六半時揃に而同刻より揃在之。）四半時過益御機嫌克御表式臺より御發駕、其節御式臺鑑板江、御城代前田伊勢守殿・村井又兵衞殿・年寄中・御家老中等左右江被罷出、御意有之。御白洲江定番頭・同御番頭、菱御櫓御長屋下之方江貞琳院様御附使者罷出、御意有之。橋爪御門外橋爪江前田主税殿被罷出、三之御丸江寺社奉行・公事場奉行・御算用場奉行・御奏者番・魚津在住今石動等支配兩組頭・新番頭・御歩頭・御用人・御射手御異風雨裁許（兩頭並御射手方御用。）・組外御番頭・御臺所奉行・御細工奉行・御横目、其外平士定役之內以前例罷出頭分以上江者御意（出ましたかな）有之。御供人追々舊冬十一月十八日以來に記置候通、横山監物殿・本多勘解由殿、御道中奉行（兼御行列奉行）山口清太夫・中村助太夫、御筒支配神戸藏人、御弓支配有賀清右衞門、御長柄支配富田鐵次郎、御大小將御番頭寺西平左衞門、同御横目蓑輪知太夫・笠間源太左衞門、御歩頭に而御近習騎馬津田權五郎、御近習人見吉左衞門・戸田與一郎等、夫々御供或は御先秡に而發足。

一、御發駕後御席江出、御用番助右衞門殿江恐悅之段申述、九時前退出之事。

三月十五日。金澤城外紺屋坂の足輕番人、本多安房守に不作法なるを以

て罰せらる。

〔政隣記〕

三月十五日本多安房守殿下城之節、紺屋坂之上腰掛脇御番人割場附足輕小泉友右衛門・上山嘉右衛門、御作法呼候時分、甚緩怠成躰等重々不屆之至に付、友右衛門は御扶持被召放、嘉右衛門儀追込被仰付候旨、同月十九日御用番奥村助右衛門殿割場奉行ゟ被仰渡、則申渡候事。

但、友右衛門儀是迄も數度緩怠成儀有之、右十五日には別而甚緩怠成爲躰に付、安房守殿駕籠脇家來を以名前御尋之上、御用番助右衛門殿ゟ御達等有之候旨云々。

三月廿一日。大聖寺侯前田利之參覲の途金澤に宿す。

〔政隣記〕

三月廿一日備後守樣當春就御參勤、昨日大聖寺御發駕、昨夜小松御止宿、今日御當所金屋九郎兵衛方御止宿、翌廿二日朝御發駕。

三月廿六日。前田齊廣江戸に着す。

〔三守御譜〕

三月廿六日江戸御着。此時御供横山監物隆盛後山城守。同廿八日上使松平伊豆守。

三月廿八日。德川家齊使者を遣はして前田齊廣の參覲を勞せしむ。

〔政隣記〕

一、三月廿八日、今般就御參府上使御老中松平伊豆守殿を以被蒙上意、萬端御先例之通御都合能被爲濟、追付之御供揃に而御老中方御廻勤被遊候事。

三月。改作奉行、十村等に改作法復古の事に關して告ぐ。

〔郡方御觸〕

改作方御法之儀、前々与は相違之品茂有之候哉に付、追々復古之御詮議拙者共棟取可相勤旨、土佐守殿被仰渡、且右に付沼保村彥四郎・內嶋村孫作・本江村惣助等三人右御用爲主附候樣、是又御同人より被仰渡候。依之右三人之者共より、御郡方之儀無大小可申談旨申渡置候條、得其意、諸事可及示談候、以上。

未三月　白江金十郎

前田源六郎

諸郡御扶持人中・十村中

付札、白江金十郎・前田源六郎江

御領國改作に被仰付候後、山川の變によつて田地永荒に相成、御收納方不宜。ケ樣に成行候

而は、次第に御勝手方御手繰茂甚六ヶ敷、農業指支候而は大切之趣に候。是迄取扱茂可有之哉に候得共、諸郡難澁深村々多、自然与御貸米願過分に相成、川崩・山抜等に而田地荒果候所々は、引免等之取扱可有之候へ共、中頃は検地歩苅等之詮議方も少く、且亦疫病等流行之刻、死人多作人不足押作りいたし、耕作仕入等不行届、地次第に相劣り、難澁之族茂可有之、或は山川相變地元不足候處、引免等之取扱故高懸り物之難儀も有之、成立兼申儀も可有之、村々之難澁根元を得与相糺、左様之村は検地之上引高に申付候与歟、作人不足之處は如昔入百姓に而茂爲致候与歟、品々詮議之次第可有之、何れに茂村方難儀之處、取扱農業手厚にいたし候様之詮議可有之候。將又變地少き所は、早速本免に爲立歸、疇畔等切廣げ、當時餘田在之様之所は、手上高・手上免・新開等之詮議可有之、是等之儀は扱により趣意取違候儀可有之哉に候間、兎角實意を以取計有之候而、下々茂致信服願出可申儀も可有之哉。其外村萬造等も遂詮議、費を省奢を防、農業相勵候様詮議第一之事に候。右等之趣を以、御領國一統追々糺方可有之候事。

未　三　月

四月朔日。前田齊廣登營して參覲の禮を行ふ。

〔政隣記〕

四月朔日、昨二十九日之御老中方依御奉書、御登城、御參勤之御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、横山監物・本多勘解由御例之通御目見被仰付、萬端御先例之通に而、御首尾能被爲濟候事。

〔續德川實紀〕

四月朔日、月次の賀例のごとし。松平加賀守・上杉式部大輔參覲す。加賀守家人横山監物・本多勘解由拜謁す。

四月四日。十村等に命じて乞食の取締を嚴にせしむ。

〔郡方御觸〕

近年於御郡方、身元相應成者方に、吉事又者佛忌志等有之刻、在々より乞食躰之者多く致集來候に付、人々共分限に應じ施しいたし候由。然處施方不行届抔与申募り、押而米錢等貪り候躰、或者雜言等申なし不埒之仕形有之躰、兼而致見察罷在、沙汰之限に候。於御郡方乞食者大抵數も可有之候所、莫大之人數之躰。右者乞食に限り申間敷候。先以右躰成押乞之致形有之候而者、御郡方取治に指障、第一其聞ゑ惡敷、急度可相制儀に候。勿論其以前者非人札等も相渡置、御縮方相立居候處、其後非人頭致中絶候故、乞食共勝手次第に中度儘に有之儀、重々沙汰之限に候。此末不依何方に、乞食共等猥に押乞不屆之仕形於有之者、召捕裁許々々

江可斷出、共上に役所江可申斷候。若手にあまり候はゝ、廻り之藤内江申付可爲召捕候。猶又右に付而者、拙者共詮議之筋有之候條、追而否可申渡候。右之趣新田裁許曁山廻中江茂可有演述候、以上。

未四月四日　　高田彌左衞門

中村逸角

能州四郡十村中

四月五日。前田齊廣の江戶に着したる報金澤に達す。

〔政隣記〕

四月五日、前月廿六日江戶發之中飛脚來着、同役中より中將樣長途益御機嫌克、今廿六日御着府等之儀申來候事。

〔政隣記〕

四月八日、前月廿九日出之御用狀等來着、左之通申來候事。

中將樣前月廿六日九時頃御着、追付之御供揃に而御老中方御廻勤七時過御歸之事。

四月五日。石川郡白山宮の神主、百姓の御手洗川等を汚さゞるべき命を發せられんことを請ふ。

条は筋なるべし

八百人本のまゝ

〔白山地不足願等一件〕

白山御社、御公儀御祈禱被仰付、其上年中四十餘度之御祭禮執行仕候に付、御神領被下置候。依之地不足御檢地、早速願之通被仰付、今般御檢地相濟申候。前々より御手洗川之儀は、諸事清仕候水之上、神主幷社參人こりをも取水に候。然所幣串山宮道三の宮村條に今更改候樣存候哉、右村百姓中右川ゟ牛馬を引込、踏わらんじ等ぬぎ捨、以之外不淨罷成候。神主共裝束仕御宮ゟ往來も、不淨之道具持參仕相障り、穢敷儀共御座候。且又幣串山、前々より御本社敷地同事之所ゟ、不淨之物捨申候而者、幣串に難代差つかへ申候間、右之族無之、右百姓中前々之通に相心得、猥成儀仕間敷旨被仰付置候樣に仕度奉存候。此段御郡奉行所ゟ被仰達被下候樣に奉願候、以上。

未四月五日　　白山神主中

寺社御奉行所

四月十五日。淺野川大橋の改築に着手す。

〔歲々略曆〕

四月十五日より淺野川大橋掛直る。七月上旬迄工手間八百人与云。

四月十六日。河北郡荒屋の海にて珍魚を捕獲す。

〔累年雜記〕

一、四月十六日荒屋八田屋之網に長七尋身廻り七尋大魚三本引揚。御斷申上候處、御上にも古今珍敷魚故、御僉議之上塩根松(ウバフカ)与名附申候。形者鯖之様なる風なり。尾は海尾也。齒四十八枚有。目は至りて小く、背に塩吹の穴あり。脊黒く腹白く、前代未聞之大魚。諸見物十六日より十九日迄、近隣は不申及金澤等より多くの人に、荒屋之濱茶屋をば三十軒餘りも相掛り申候。入札に相成、三百三十貫餘りに落申候。後世之善咄也。肉身は乍左[illegible]に毛頭相違不申候。

四月廿四日。博勞の高足又は板付草履を穿ちて諸士に對することを禁ず。

〔政隣記〕

博勞共對諸士高足者不致筈候處、心得違之者も有之躰、不作法之儀に候。以來右之族無之様、夫々急度可被申渡候。尤板打草履等之儀も同様之事に候條、可被得其意候事。

辛未四月

博勞竹内小次郎儀、齋藤順左衛門ゟ高足に而致辭儀候に付相咎候一件、町奉行ゟ再往被及懸合候得共、不相分候に付被相達候旨、委曲先達而御手前紙面等被指出候に付、博勞共以來心得違右躰不作法之族無之様、急度可申渡、尤板打草履等も同様に候旨、町奉行ゟ申渡候條、

被得共意、順左衛門江も可被申聞候、以上。

四月二十四日　　　長　甲斐守

岩田傳左衛門殿

本文之趣は、正月二十五日越山孫作馬術稽古之節、關助馬場江小次郎儀賃馬牽出候節、高足に而順左衛門江致辭儀候儀に付而之起り也。

五月四日。諸士にして家作又は緣組の際町會所の銀子借用を請ふことを禁ず。

〔御觸拔書〕

定番頭江

御家中難澁之人々、家作・緣組等之節相願、町會所より銀子借用之儀承屆候得共、以來指止候事。

右之趣被得共意、組等之內裁許有之面々江も可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

辛未五月

別紙之通、今日定番頭江申渡候に付、爲御承知寫一通差進申候、以上。

五月四日　　村井又兵衛

五月廿一日。昨今兩日前田治脩の子利命の七回忌法會を寶圓寺に營む。

〔御觸拔書〕

香隆院樣御七回忌御法事、當月廿日・廿一日於寶圓寺就御執行、御射手・御異風稽古、幷諸組弓・鐵炮稽古之儀、御法事初前日より御法事中相止可申事。

一、鷹野其外諸殺生、且又鳴物之儀、十九日より廿一日迄三日可有遠慮候事。

一、普請作事之儀、十九日より廿一日迄相止可申事。

但、指急候普請等之儀は不及遠慮候。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

五月六日　　本多安房守

五月廿四日。十村等の由緒帳を提出すべきことを命ず。

〔郡方御觸〕

無組御扶持人十村　御扶持人十村　平十村　新田裁許

山　廻　無役御扶持人　由緒有之百姓

右御領國一統十村等由緒帳取立御達可申旨、且代々無組御扶持人十村被仰付候家柄之者有之候はゞ、別段可申聞候。右之趣土佐守殿より被仰渡候條、一統申談早速可書出事。

未五月二十四日

右御郡所より御渡之旨番代忠助添書略。

五月。諸士の聖堂銀を借用する者にその返濟方を告ぐ。

〔御觸拔書〕

聖堂銀返上方之儀に付、玉川七兵衞等より別紙之通申談候間、當月・來月中に證文相改可申事。

一、當閏二月迄之利足銀は、當十月・十一月上納之節、一集に取立可申事。

一、銀高等難相辨儀候者、會所承合可申事。

一、在江戸等之人々は、直證文に候間、代判人より早速申達、到來次第相改可申事。

右之趣御承知被成、御組・御支配御申談可被成候。御組等之内裁許有之面々は、其支配江茂不相洩相達候樣御申談、尤御同役・御同席御傳達、落着より御返可被成候、以上。

五　月

聖堂銀、是迄利足立御貸附分、御知行・御切米共、今年より打込、三十箇年賦に被仰付候間、御格之通一紙證文に相改取立可申事。

但、利足銀者、當閏二月迄之分、御知行・御切米共取立可申事。

右之通被仰出候條、被得其意、借用之人々江夫々可申談候事。

未　三　月

玉川七兵衛
改田主馬
里見七左衛門
今井左太夫

會所御奉行衆中

六月二十日。行路病者の取扱に關して令す。

〔筒井舊記〕

旅人等於道中相煩相願候者等、村次を以在所江送届候者、其在所之者に無之候得ば、其所に留置不取逃樣致縮方、其筋へ可訴出筈之處、近年右躰之者不留置、送り返し候儀有之哉に候。此儀は先年從公儀被仰觸之趣有之儀に候條、尙更違失無之樣、不相洩樣急度可申渡候。勿論他支配迚も同樣に候條、若右躰之者送り返候而も請取間敷筈に候條、可得其意候、以上。

未六月廿日　　　　高田彌左衞門
　　　　　　　　　　中村逸角
能州四郡十村中

六月廿五日。金澤城内七十間御長屋を修理するを以て通行を禁止す。

〔御觸拔書〕

別紙寫之通、御横目江申渡候に付、爲御承知指進申候、以上。

六月廿二日　　　　村井又兵衞

付札、御横目江

七拾間御長屋建、修理有之候に付、往來有之候而者指支候旨、御作事奉行申聞候に付、當廿五日より右御門往來指留候。併火事之節者不指支候事。

一、金谷御廣式等江罷出候人々、且又七拾間御長屋御門御番人者、金谷御門通往來之筈に候事。

右之趣得其意、夫々可被申談候事。

六　月

是月は大盡なり

六月晦日。前田齊敬の十七回忌法會を金澤天德院及び江戸廣德寺に執行

す。

〔政隣記〕

六月廿九日、今・明日御法事於天德院御執行。今日者同役より詰、朝六時より林十左衞門、四時より中村才兵衞之處、四半時頃相濟候事。

〔政隣記〕

付札、御横目江

觀樹院樣御十七回忌に付、當晦日於廣德寺一朝御茶湯之節、揃刻限六時過之事。

一、晦日御茶湯相濟候以來より朔日江懸兩日之內、年寄中・御家老役・頭分之面々拜禮可罷出候。且又觀樹院樣御附相勤候平士等者、願次第拜禮被仰付候條、右兩日之內勝手次第可罷出候。

六月、漁船の解體に關する手續を勵行せしむ。

〔郡方御觸〕

諸郡獵船等、近年仕法相改、船に燒印爲入候に付、解船に相願候者有之節は、承屆燒印削取遣候處、右削取候後致通船候儀者無之筈に候得共、彼是紛敷儀も有之躰に候間、以來解船相願候者、燒印削取、卽座に舟解候樣可申渡候。其外新造合候分屆方及遲々候儀も無之哉、紛

敷船々有之躰に相聞え候條、是等之趣御縮方嚴重相心得候樣、夫々可被申渡候事。
右船々之儀近年仕法相改、夫々申渡置候處、彼是紛敷儀茂有之躰に付、改而右之趣遂詮議候條、此段散役裁許ゟ被申渡、猶更御縮方嚴重相心得候之樣可被申渡候事。

六　月

御付札に、本文無極印之船有之候はゞ、申渡候通、見請次第取揚可申事。

七月十日。前田齊廣の子齊泰金澤に生まる。

〔政隣記〕

七月十日、二之御丸於御廣式、今曉卯中刻（朝六時過与云々。江戸表ゟ者六時与言上候事。）若子樣御出生、御母直姫樣御同腹、御馬廻組（小原惣左衛門組）領百五拾石、御廣式御用達小野木助三女、やを廿五歳。
附、御匕丸山了悅、扣森快安。御産婦方匕中野又玄、扣白崎玄眞、針久保三柳。

七月十三日。諸士登城して前田齊廣の世嗣の生誕を告げらる。

〔政隣記〕

七月十三日、一昨日御用番甲斐守殿依御廻文、今朝五時過頭分以上登城、於御大式臺御帳に附、竹之間御勝手に扣居候處、四時頃朔望等之通竹之間に列居、年寄衆等御出御列座、御用番甲斐守殿左之通御演述。

直姫様御産婦方懐孕之處、今般御男子様御出生被遊候。此段何茂江可申聞旨被仰出置候事。
右畢而竹之間於横廊下、左之覺書可致披見旨等、御横目中申談有之、披見之上退出之事。
付札、御横目江
今日御弘之趣に付、爲御祝詞今・明日中年寄中等宅江可相勤候。且又幼少・病氣等に而登城無之面々者、御弘之趣向寄より傳達、爲御祝詞御用番宅迄以使者可申越候。此段夫々可被申談候事。

七月十三日

七月十六日。前田齊泰の七夜の祝儀を行ふ。

〔政隣記〕
七月十六日御七夜爲御祝儀、左之通御使關屋中務長袴着用を以被進之。
一、御太刀馬代　白銀五枚　木地臺
　御目錄
一、御産衣　二重
　包熨斗
一、干鯛　一箱

御目錄

御別段左之通、御使同人を以被進之。

一、同御脇指　一腰　美濃守久勝

御目錄

一、干　鯛　一箱

御目錄

同日御名書、鰑一折具白木五頭相添獻上之。

園　多太夫

但、多太夫儀御次江呼出、勝千代樣与御名上之候樣兼而被仰出置候旨、關屋中務演述。

右に付多太夫江白銀三枚・晒布二疋被下之。

蟇目御弓矢　御守　干鯛一箱

右今日御廣式江奥村左京持參上之。依之左之通拜領被仰付。

紗綾三卷包熨斗

五百八十之御餅行器一荷百入

鰑一折

〔政隣記〕
七月十七日、左之通御用番水原氏より例文之以廻狀寫到來。
付札、御横目江
今般御誕生之御男子樣、御名勝千代樣与被稱候條、一統可被申談候事。
別紙之趣夫々可申談旨、御用番甲斐守殿被仰聞候條、御承知被成、御同役御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之內裁許有之面々者、其支配江も不相洩相達候樣御申談可被成候、以上。
七月十七日　　　　御横目
御小將頭衆中　但五役

七月。煙草・菅・藺等を本田に栽培すべからざることを令す。

〔郡方御觸〕
近年能美・石川兩郡出來之多葉粉次第に作增、別而石川郡之儀者過分に相成候躰。右多葉粉之儀者山方畑所而已植付可申處、近年者本田に茂多植付候躰に承及候。甚如何成趣に候。且郡々之內、菅・藺等、是又過分に作候躰に候。何分米穀出來之儀專可心懸處、其穿鑿不行屆儀、畢竟御扶持人・十村等、兼而心得方等閑之躰にも相聞え候。將又多葉粉之儀者、近年賣

餘り候分、納所之手當与申立津出等毎度相願候。ヶ樣之儀も穿鑿方不行屆故に候條、是等之趣嚴重可被申渡候事。

七　月

右之通御算用場より申來候に付、寫相達候條可得其意候。元來多葉粉等之儀者、前々より御觸渡茂有之儀、其方中常々見聞可有之處、等閑に相當り候而者甚如何敷儀に候條、以來下々迄入念に可申渡候。且又毎々多葉粉等作付候地面之內、地味も直り候ヶ所者、可相成丈け米穀作付候樣可致勢子候。右之通一統申渡、組切請書取立可指出候、以上。

改　作　奉　行

諸郡御扶持人・十村中

八月四日。金澤に於ける諸役所に儉約を令す。

〔政隣記〕

付札、定番頭江

去年御借知御改に而、御財用方御手繰者甚六ヶ敷候得共、御政事に相掛り候事故、御手繰方之儀に者無御貪着御改被仰付候。御殿閣御造營も御成就に付、御規式御能之儀者社稷にもかゝり申事故、不被仰付而者難叶事故、御規式御能も被仰付候。御政事社稷に掛り候御儀者、追

御地面は金澤表の義なるべし

々可被仰付ために、不斷御儉約被仰付候事に候。然共右等之御入用方も多く、是迄ニ者御借知も相減候故、御入箇者相減、御手繰之上に而者甚以六ヶ敷相成候間、彌以御地面之御儉約者嚴重に無之而者、御借知御改之詮も無之候。此段者諸向江不申談候共、可爲其心得儀に候得共、何となく僉議方ゆるみ申形にも相成可申候。筋合も宜敷相成、御儉約も相立、無用之儀者相省、年を迯り候而も可相成儀者末江附候事共、僉議方行屆候得者、御儉約者其中に籠り、下々迄も納得仕候得者、御不益之儀も有之間敷事に候間、諸向此趣をとくと會得候而、綿密に相心得可有僉議候。此段申談候にも不及候得共、御財用御手繰も有之事故、ゆるみ申樣之心得も候而者如何に付申聞候條、御入用に拘り候儀は、少分之儀たり共無油斷心付可申候。右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江も不相洩樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

未　八　月

別紙御勝手方御主付今日御出席無之に付、御用番奥村左京殿御渡、御一統江私より可申談旨被仰聞、則御渡之覺書寫一通指進候條、御承知被成、御同役・御同席方等御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之內裁許有之面々者、其支配江も不相洩相達候樣御申談、早

速御廻達、落着より御返可被成候、以上。

八月四日　　　　　　　　岡田牛右衛門

八月十五日。老臣等前田齊泰の生誕を祝して物を上る。

〔金龍公記史料〕

八月十五日賀公子生。老臣献物。于公干鯛各一箱。于公子年寄錫二十把・樽代二百匹。家老・若年寄錫二十把。

八月十八日。前田齊泰の生誕を祝して金澤町に今明兩日盃正月を行はしむ。

〔政隣記〕

八月十八日、今度勝千代様就御誕生、今明日町中如盃正月賑ひ可奉賀旨、町奉行より夫々申渡候に付、町々祝賑之事。

〔金龍公記史料〕

八月十八日・十九日。以勝千代君誕生。金澤町中爲盃正月。

十八日賀公子誕生。奏能樂。使准徒士以上觀之。舞曲翁・養老公・田村・羽衣・唐船公・猩々。狂

言末廣・千鳥・福神。

八月廿二日。前田利常の女富姫の百五十回忌法會を天德院に執行す。

〔政隣記〕

眞照院樣百五十回御忌御茶湯、今月廿二日一朝於天德院御執行有之候に付、御家中諸殺生御當日一日相扣可申候。且亦普請・鳴物等不及遠慮候。乍然御寺近邊に罷在候者は、御茶湯御執行之內、自分に指扣可申候。此段組・支配ゟ被申渡、組等之內裁許有之面々者、其支配ゟも相達候樣可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

八月八日　　奥村左京

九月三日。前田齊廣江戶平尾の下邸に赴く。

〔政隣記〕

九月三日五半時御供揃に而御下屋敷ゟ御出、夜四時過御歸殿被遊候事。

九月七日。鹿島郡所口に火災あり。

〔金龍公記史料〕

九月七日所口火燬七百戶。

九月十五日。前田齊廣登營の際迂路を取る。

〔金龍公記史料〕

九月十五日神田祭禮。公登營。迂路過常盤橋門。大應公以來之例也。而歸路過神田橋。爲異例。幸無事。

九月。犀川に於いて鑑札を有せずして漁撈を行ふを禁ず。

〔御觸拔書〕

御横目江

公儀町中村屋善右衛門、去辰年より才川魚殺生請負申付、川役運上銀爲致上納候所、勝手難澁上納方行届不申に付、右請負方法船寺町鶴屋平吉与申者江讓替、善右衛門同樣に川運上銀爲致上納候付、投網・小目網・流網・鮎飛網・ねり網・片瀨網等に而致殺生候人々、右平吉方より見合札を請、可致殺生筈候處、無札之殺生人猥に入込、請負人縮方行屆不申、運上銀勤兼候間、嚴重川役銀指出、札を請可申候。若無札に而入込候者有之候はゞ、急度相糺候樣仕度旨、町奉行申聞候條、殺生いたし候人々者、去年茂申渡置候通、急度可相心得候。

右之趣一統可被申談候事。

旅人は他國より來れる米商人

十月二日。郡奉行に令し領內の產物を記載上申せしむ。

〔郡方御觸〕

御領國諸產物調理帳、安永七年指出候通に、當時之分不殘委細に書出候樣、御勝手方年寄中江申聞候條、早速被相調理、帳面に仕立、當月廿日迄に可被指出候、以上。

十月二日　　御算用場

高田彌左衞門殿

中村逸角殿

十月五日。金澤の米中買座暴民の爲に襲はる。

〔政隣記〕

十月五日夜、中買座（十間町中央に有之、町會所より建所也。）江數十人押懸、中買油屋半四郞等米縮置候に付、格外に八ヶ所米迄直上り候。惣樣直上り之事に候得者無是非候得共、右米迄直上り者不心得、旅人之咽を乾し候と申者沙汰之限り、半四郞を可渡打殺候半与、段々及雜言、其內二・三百人計に相成、同町之水溜桶共を舁來り、水ながら家之內江投込、幷溝際等に臥せ有之石共を起し投込等之及狼藉、後に者百人計家之內江も押入候に付、從裏口町奉行（御用番水越八郞左衞門令出馬与沙汰有之候得共、見合中靜

り候に付不罷出由。町同心・町下代も同斷与云々。等ゟも夫々及注進、町附足輕幷盜賊改方足輕も追々出候得共、大勢之狼藉に而如何共制止方も無之、其上張本人後に承候得者、越中之米買旅人三・四人計与云々。其外者臨時之加り人、幷往來人之手傳等与云々。者不相知、只聲を以て召捕べく抔与威言申居候由云々。右族に付、半四郎等共身に少しに而も覺有之候中買共、幷臆病なる者共は、いつの間にやらん過半裏道より逃歸り、甚集所人少に相成、就中同所に銀子六百貫目餘り十貫目入之箱六拾一与云々。有之、不用心に付、手渡に致し隣家橘屋菓子屋也。吉右衞門家へ裏口より逃候處、吉右衞門不心服に候得共、非常之趣中買肝煎等申入、理不盡に積重指置候由。其内段々集所に有之中買等過半逃行、人少に相成、狼藉人も勢薄く相成、中買肝煎等暨廻方足輕よりも退散候樣に与申宥候得者、左候者油屋半四郎等方へ罷越、家等者不殘打毀し候上、尤可令殺害与高聲に訇り、曉七時過不殘退散及靜謐候事。

但、半四郎等方ゟ者不罷越、何れへ退候哉不相知由也。

右に付、今月廿日於町會所左之通申渡有之。

風說甚敷に付指扣。　油屋　半四郎

同斷中買肝煎手傳指除。　能登屋　重右衞門

此四人今月五日米商指引方不埒明に付、中買商賣指除追込。　同中屋　傳右衞門

高橋屋　次兵衛
尾張町　清五郎
能登屋　吉兵衛

附記、富田屋長兵衛等二・三人、油屋半四郎同事米買縮等之不届者有之候得共、如何成事に候哉、長兵衛等之名前者右狼藉者共不致發言に付、何等之咎も無之無難与云々。

右五日夜、中買座表通りむし戸・板戸幷家之內にも損所數ヶ所有之、疊抔も泥水に浸り損多有之。

十月六日。代官口米を代銀にて支給したる從來の法を改む。

〔筒井舊記〕

諸代官被下口米、文化元年より代銀を以て被下候處、當年より以前之通御米に而被下候條、代官納高之內口米引取、當御收納本勘書出可申事。

未十月　　御算用場

諸郡代官中

別紙之通夫々可申談旨、御代官割所より被仰談御座候間、早速御廻落着より私方迄御返可被成候、以上。

十月六日　　　　　　　　　　高尾村六兵衞
諸郡御詰番中様

十月十四日。德川家宣の百回忌法會を金澤如來寺に執行す。

〔政隣記〕
來月十四日於如來寺、文昭院様百回御忌御法事御執行有之候條、御佛前御締幷御靈供奉行御大小將三人、且又火之番御小將も近例之趣を以可被書出候事。

九月

付札、御小將頭江

一、來月十四日御法事之内、替々一人宛長袴着用可被相詰候事。　　御小將頭

一、御佛前御締幷御靈供奉行、町細工之者召連同日相詰可申候。　　御小將二人

但、御料理人二人罷出候事。

一、寺中火之番二人宛、且又御布施披露兼帶。　　御小將四人

但、御歩二人宛・足輕四人宛罷出候事。

以上

九月

〔御觸抜書〕

文昭院様百回御忌御法事、來月十四日於如來寺御執行有之候事。

一、御法事中、御作事・御普請方、其外三御丸御射手・御異風稽古、幷諸組弓・鐵炮稽古之儀茂、相止候に不及候事。

但、御寺程近き所稽古場有之候はゞ指扣可申候。

一、御家中諸殺生、御法事御當日遠慮可仕候。普請・鳴物は不及遠慮候。能囃子・押立候振廻之儀者、御法事中自分に遠慮可仕候事。

但、能囃子之儀も、役者抔稽古に仕儀は不苦候。乍然近邊に罷在候者は遠慮可仕候。

右之通被得其意、組・支配江可被申渡候。且又組等之内裁許有之面々は、其支配江茂相達、尤同役中傳達有之候様、夫々可被申談候、以上。

九月十八日　　村井又兵衛

御横目中

十月廿五日。前田齊廣登營して德川家宣百回忌法會終了の爲に行はれたる能を觀る。

〔三守御譜〕

十月廿五日、今度文昭院樣百回忌御法事相濟候に付て、御能被仰付候に付公御登城、御能御見物且御饗應あり。

今度文昭院樣百回忌御法事相濟候付而、御能就被仰付候、兩殿樣水戶御父子也。御登城、且松平加賀守殿始國持大名衆、其外萬石以上嫡子共、且增上寺大僧正登城、檜林及出家中罷出、出御以前何茂見物之席へ着座。

十月。御算用場より新番頭及び御步頭の書面に拙者と認むべからざることを通牒し物議を釀す。

〔政隣記〕

十一月十四日、前月上旬御算用場より、新番頭・御步頭江、以來物頭以下者諸紙面等文言之內拙者与不相調、私与可調樣申來候得共、百ヶ年已來拙者与調來り、其上公事場江之書通にも拙者与調來候に付、容易に難改趣答有之候處、於御算用場僉議之上、以來新番頭以下者、

私与無之而者來書不受取、相返候事に相極候旨に而譯立不申に付、先月御用番長甲斐守殿ゟも、御別席に而段々御達申候得共譯立不申、尤御算用場よりも改候趣意御達申候由。元來是迄御歩頭以上者拙者与調來り、大組頭以下は私与調來り候振合に候處、當夏御先手杉江助四郎より、拙者与調出候儀兩度有之候處、於御算用場見洩受取之、共後助四郎より拙者与調出候處、私与不調而者難受取段申來に付、當夏兩度之儀申達候處、其節者見洩に而受取置候得共、物頭以下之分は私与可調筈与申來に付、重而助四郎より申達候者、是迄新番頭・御歩頭より者拙者与調出し候儀如何与申達候に付、右は是迄之非例に候、以來は新番頭等も私与調候事に相改候段答に付、助四郎は承引、私与調替指出相濟候得共、新番頭・御歩頭會得無之、段々年寄衆ゟ存寄御達申置候內、今月右兩組御切手請取月に付、猶御催促に及び申候處、御僉議中に候間拙者・私之文言相省、右新番・右御歩与請取切手に調可出旨、御用番御指圖有之、先共通に相調指出、御切米請取候由之事。

御切手は切米下附の證書

私に曰、新番・御歩頭身分之儀者、物頭同樣之御取扱に候得共、大組頭等与者品違候趣共有之、公事場ゟも右兩頭者拙者与調、御横目所ゟも拙者御横目衆中与調之、大組頭等は拙者等に而者書面不受取、私御横目中樣与調來、其外譯違候儀共座列抔にも有之。今般之懸合者御算用場向不相當歟。

十一月朔日。七十間長屋の修理成るを以て通行を許す。

〔御觸拔書〕

付札、御横目江

七拾間御長屋建、修理大半出來に付、來月朔日より、右御門往來指支不申旨、御作事奉行申聞候條、被得其意、夫々可被申談候事。

十　月

十一月九日。昨今兩日前田治脩の三回忌法會を寶圓寺に於いて豫修す。

〔政隣記〕

十一月九日、昨今於寶圓寺來正月御相當之處御取越也。太梁院樣御三回忌御法事、無御滯被爲濟。兩日共中村氏・林氏被詰度由に而、昨日林氏、今日中村氏詰切也。兩氏共右御近邊勤仕に付、右之通之事。

但、八日九時前相濟、今日九時頃相濟候事。

十一月九日。前田治脩の三回忌法會を江戸廣德寺に於いて豫修す。

〔政隣記〕

十一月廿七日、去十四日江戸發之御用狀等來着。今月九日於廣德寺、太梁院樣御三回忌御取越之御茶湯無御滯被爲濟候段申來。其外相替儀不申來候事。

十一月十五日。前田齊泰老臣等に物を與ふ。

〔金龍公記史料〕

十一月十五日。以老臣献物賀公子生。公子賜年寄及前田圭稅紗綾三卷。賜家老・若年寄及前田龍山縐紗二卷。

十一月廿八日。領内の航海業者に長崎に於いて煎海鼠・干鮑を密賣することを禁ず。

〔筒井舊記〕

煎海鼠・干鮑之儀者、於長崎唐物交易專要之品に付、長崎俵物方手筋江賣渡、浦々において密買致間敷旨、天明五巳年諸國御觸有之。其後も當地者每々拔賣買致間敷旨相觸候處、兎角密々に賣買いたし候者有之趣に付、去々冬以來追々多人數召捕、吟味之上一統御仕置申付候。然處右煎海鼠者、於當地出產之品に而無之に付、買元相尋候處、いづれも北國之廻船當地江致入津、滯船中船頭・水主共之内より竊に買取候趣に申立、船頭・水主自分仕入荷物之樣子に

而、品物は北國之產計に無之、奥州筋之品も相交り有之、就中加州橋立邊之船乘之者共賣出候儀多く相見え、全く買集等いたし持越候樣に相聞、不届之儀に者候得共、先此度は船頭・水主共名前幷住所も聢与難相分候に付、不及吟味候へ共、自然名前も相分り有之候はゞ、其筋に呼出及吟味候樣に相成候而は、遠國之引合に付隙取、其所之者迄可及難儀儀に候間、是等之處を存量り、大聖寺・橋立邊者勿論、其外右之類向々船乘共拔賣買不致候樣、篤与被示置候はゞ可然哉に被存候。

右之段御心得に御談申置候樣被申候。

大坂町御奉行平賀信濃守殿御役所え、同所詰人詰入之内御呼出、別紙之通被申聞之旨に而、御用番年寄中より被相渡候に付、寫相達候條、被得其意、夫々可被申渡候、以上。

十一月廿八日　　　　御算用場

高田彌左衞門殿

中村逸角殿

十二月二日。前田齊泰、齊廣夫人の養ふ所となる。

〔齊廣樣御傳略等之内書拔〕

十二月二日御前樣之御子成被仰進。

十二月十三日。前田齊廣、齊泰を嫡子とし、三歳に達したりとして幕府に屆出づ。

〔政隣記〕

今月十三日、御用御頼置之御先手三浦和泉守殿を以、左之御屆書御用番之御老中松平伊豆守殿江御指出。

先年於國許妾腹致出生候勝千代儀、當未三歳に罷成申候。出生以來虛弱に付御屆不申達候處、此節丈夫に相成候に付、妻致養に、嫡子に仕候。右に付而者無程出府可爲致處、未幼年之儀長途之旅行無覺束御座候間、暫國許に差置申候。此段御聞置可被下候、以上。

十二月十三日　　　御　名

〔政隣記〕

付札、長瀨五郎右衞門・山口清太夫江

勝千代樣御儀、今般御前樣御養ひ被成、御嫡子之御屆書、昨十三日御用番松平伊豆守殿江御指出被成候に付而、此段申聞候。右之趣頭分面々江各より可被申談候事。

右同十四日監物殿御演述、御渡被成候に付、組・支配へ可申聞哉与、監物殿等江御達申候處、組・支配江も可申聞旨被仰聞候。

律姫は文化十年來嫁に先ちて逝去

十二月十五日。前田齊泰、高松侯松平賴儀の女と婚を約す。

〔金龍公記史料〕

十二月十五日。約勝千代君與讃岐守賴儀女律姫婚。

十二月廿一日。德川家齊夫人、前田齊廣に歳暮の祝儀を贈る。

〔政隣記〕

十二月廿四日江戶發之御用狀等正月八日到來、左之通申來。

今月廿一日爲歳暮御祝儀、從御臺樣御使御廣式番之頭桂山三郎兵衞殿、四半時頃御越、干鯛一箱・白銀十枚御拜受。公方樣・御臺樣より法梁院樣江、上使御同人を以御卷物等御拜領。御前樣江も上使御廣式番之頭木曾七郎左衞門殿を以、御卷物等御拜領。萬端御作法前々之通、御都合能被爲濟。上使御退出後、追付之御供揃に而、御用番松平伊豆守殿江御勤、七時過御歸殿被遊候事。

十二月廿八日。深雪なるを以て往來の便を計らしむ。

〔金龍公記史料〕

十二月二十八日令。雪深宜除宅邊便往來。且來年新正賀禮許延至二月。

十二月廿九日。前田齊泰、高松侯松平賴儀の女と緣組を許可せらる。

〔政隣記〕

十二月廿九日御登城被遊候樣、昨日御老中方御連名之從御奉書、御登城可被遊候處、御痲邪氣被爲在候に付、御名代前田大和守殿御登城被成候處、勝千代樣御緣組御願之通被仰出候旨、從御城早乘御使を以申來に付、一統布上下致着用候。

右御弘有之、於御席左之通監物殿御演述有之。於竹之御間頭分以上一統御帳に附、恐悅申上候。

今日中將樣御名代前田大和守殿御登城被成候處、勝千代樣御儀讃岐守樣御息女律姬樣与御緣組、御願之通被仰出、難有被思召候。此段何茂𛀁可申聞旨御意候。

右に付、同日より二・三日者、御表向布上下着用平詰之段、御横目中より以廻狀申談有之候事。

但、晦日者就御日柄平詰無之段、御横目中演述之事。

大和守は七日市侯前田利和

文化九年

正月朔日。前田齊廣江戸に於いて年頭の儀を行ふ。

〔政隣記〕

元日御例之通六時之御供揃に而、兩御丸江御登城、都而如御前例御首尾克被爲濟、九半時頃御歸殿、表御式臺より御入、監物・勘解由御玄關江出、御意有之。御出入之町人等御通懸り御目見被仰付被爲入。御裝束被召替、重而御出、段々年頭御禮被爲請、其外御作法共御首尾能相濟。御城布衣御供組頭山口淸太夫勤之。

正月朔日。前田齊廣自ら勸農に關する計畫を書して與ふ。

〔復古方御用留〕

民を壽域にのぼせ、安穩におく事は職分たるゆゑに、ひるとなくよるとなく守處願處にてありといへども、おろかなる身には過たるゆゑに、たのむところは村長にあり。そのこゝろざすところ、面のごとくにかはりあるをつゝまず申出で、民のこゝろをすなほになさしむるの趣を、おもふまゝに書つけて出すこと、ひたすらにねぎ申すにあるのみ。また復古の事もこまかに示し合せて、ゆたかなるやうになすべき事なり。こゝろのむかふところは邪なければ、すみやかに成就する事にこそあれ。

壬申元日

右越前奉書二つ折にして御直筆を以御書取之寫

當年の內檢地はふるとし書出したるとほりになせしなるべけれど、なほまたこゝろのゆくと

ころあるべきならんには、かさねぐ〵示し合せてその仕方をおもふべき事にこそあれ。はや二月のはじめつたよりとりかゝるてくばりにて、林ゟもせりこみ申入べし。白江はいまだに會得なりがたきと見えて、こゝろにそみかね申哉に候歟。まづ林の方をせりこみ申すべし。さなければあひなしたのみに成さうに察しらるゝにて、なにとやらふらつき申歟に候半歟。此事はよく申聞べし。

壬申元旦

正月三日。前田齊廣上野の御宮等に參詣す。

〔政隣記〕

一、三日四時御供揃に而、同刻過御直垂被爲召御出、上野御宮惣御靈屋御參詣にも御本坊も御勤。夫より下谷廣德寺ゟ御參詣、同所に而御直垂被爲脫、九時過御歸殿被遊候。布衣御供組頭山口清太夫。

正月四日。江戸辰口に於いて前田齊廣の行列、川越侯松平大和守の行列と衝突す。

〔政隣記〕

正月四日九時御供揃に而御老中方御勤。夫より增上寺ゟ御參詣、方丈御勤。御前後共通元院

江被爲入、御裝束被召替。夫より所々御勤与昨日被仰出候處、御供揃之上增上寺等者御延引、御老中方迄可被遊御勤旨被仰出、九時過御出、七時過御歸殿之事。

但、布衣御供組頭增上寺迄山口清太夫罷越居候處、御延引之段申來罷歸。

〔政隣記〕

今月四日御老中方御勤之處、御途中神田橋外に而松平大和守殿武州川越江御出合之處、大和守殿挾箱持此方樣御行列之內江踏込、御供切可申躰に而、御供人心配之內御駕籠も過候得共、御陸尺手替也。居候所江、大和守殿先挾箱振込候に付、此方樣御陸尺共右挾箱之棒をはね返し候處、御草履取・御召馬之所江又々先箱振込候に付、御草履捕箱之棒をこじ返し候得者、大和守殿供頭立向候而、此方樣之御草履取手を持候に付、供頭之手を振除候處、右供頭倒れ候。然處御馬之先少し明き候得者、大和守殿駕籠乘込被申候。併駕籠之跡者通し不申大混雜。實者草履取大和守殿供頭を餘程痛く仕候由云々。翌五日朝從大和守殿御使者來、聞番江逢候由。委曲之儀者相知不申候。追而可申越旨江戶より申來。

〔政隣記〕

前記に者神田橋外与有之候得共、左樣に而者無之候。龍之口酒井殿邸前に而之事也。此方樣御草履捕少々負候形に者候得共、翌朝大和守殿より爲御使者御留守居來、聞番江逢、昨日於

途中御供人ゟ家來之者雅雑之躰有之、思召之躰如何有之候哉与恐入候。依之供頭三人幷挾箱持之者嚴重咎申付置候旨之口上申來。御應答に早速御指宥有之候様被仰遣、猶又間番以御使者同様に被仰遣候由、重而江戸より申來候事。

正月十二日。江戸に於ける能役者金春三郎右衞門の觸頭たることを停止す。

〔政隣記〕

正月十二日、中村助太夫於御貸小屋左之通申渡。

御用人兼故也　金春三郎右衞門

右三郎右衞門儀、永代觸頭御取上、御合力は是迄之通被下之、御内輪御出入被指留。附、惣役者等ゟ被下金銀、幷御貸渡之分、是迄毎度引負候儀露顯故与云々。

正月十三日。金澤に於いて諸士に前田齊泰の緣組の許可せられたることを告ぐ。

〔政隣記〕

正月十三日、昨日御用番助右衞門殿依御廻文、頭分以上登城御帳附候處、四時過於竹之御間

御勝手列居、同二之間ゟ年寄衆等御列座、御用番助右衛門殿左之通御演述。

勝千代樣御緣組之儀、讃岐守樣御息女樣与被仰合度旨御願被成候處、舊臘廿九日御登城可被成旨、前日御老中方御連名之依御奉書、御名代前田大和守殿御登城被成候處、於御白書院御緣頰御老中方御列居、御願之通被仰出難有御仕合被思召候。此段可申聞旨被仰出候事。

右畢而竹之御間於横廊下、右寫幷左之御覺書披見退出。

付札、御横目ゟ

勝千代樣御緣組被仰出候爲御祝詞、今日幷明後十五日年寄中等宅ゟ相勤可申候。且又幼少・病氣等に而登城無之面々者、御弘之趣向寄より傳達、爲御祝詞御用番宅ゟ以使者可申越候。此段夫々可被申談候事。

正月廿四日。前田齊廣治民の要を書して與ふ。

〔復古方御用留〕

改作の本元は豐年にもおごらず、歉年にも儉せずの御法と申に而、御印兔と申は四公六民とは申せども、農の方には得分多き事に候歟。然るに他郡の百姓よりは貧窮の樣に相見え、習慣もその氣どりに相成、次第に僭上に成など一同に心得申哉に聞候得共、風氣の上下するは時勢にて、客嗇の氣風あるも客嗇をもて僭上とするゆゑ同氣にて候。百姓の奢侈を禁止する

といふ事はあるまじきに候歟。百姓之驕の品といふもの、大かたは佛法に歸する事をはじめとして、老若男女共ともに此費をはぶく樣にと有之候も、誓詞にさへ彌陀を證とするごときなれば、中々此費ははぶかるべき樣は有之間敷候。殊に門徒宗などは、先頃も越前に而二萬人もあつまり申ごとくにて、道理理窟の外にして、其費をはぶくべき工夫もなきごとくにて、手の外なるものに候。改作もこのごとくにて、法の立方とおもひ付とは、如何かはりある事にて、法に怠りなくば、おもひ付は其内のかはりに候。風俗〳〵とは申せども、是は其所々家々によりての仕來なれば、是に驕吝はなき事に候。南もだ〳〵と唱て佛に成とおもふ習俗を、南もだといふは何の事じや、もとうそじやの方便じやのというてきかせても、この習慣をやめよといふともやむものにあるべきや。こゝろに問てもしらるべく候。たゞおこたらずかせげ〳〵と申より外に、職をすゝむる事はあるまじければ、かせいで安樂をせよと教ゆるより、諸事のかせぎにもとづくにてはあるべく候。農業はやめても南もだはやめがたきと申より、前の二萬人計もよるごときものに候。此所改作の法と同事なる所あるべき哉。考直し度ものに候。

壬申正月廿四日

百姓の奢侈僭上のはなしと申は、日でり傘・雨傘は昔は無之所、近來はやり出候よし。番鳥・

洒零は洒落

雅情俗云々本のまゝ

簑笠にて可濟處、如斯傘など用ひ、或はわらにて髪を結べきを本結を用ゆる抔申す。男女ともに襤褸を着るべきを、紺染又は嶋などをきるなど申を奢侈などゝ申す。畢竟習慣の洒零と申すより出る事にて、男女相配してわかきものは、互にうるはしなどおもはれんの情より出で、目の横にきれるもの故、姿見をすることゝなるより出る事にて、年よりの心の付處とかはり申事をおもひやるべき歟。互にわかき時の事をおもへば、同じ事なるものは、唐づくゐによりかゝり候て、書畫琴棊などにおもひとる風情のものもまゝありしなど古より申事にや。これに諸事准ずるやうにと心に懸るゆゑ、廻國の琴棊書畫などをするものをもとゞめて、其事を見聞する習慣俗、御郡々々之内にても指を折てかぞへなばおほかるべきとも申すべし。夫故珍器なども御郡々々はおほかるべきに歟と申せし。城端にも天文抔にくはしきものも出來して□と申事も候へば、是等之事幾回も候はん歟。藝に達るものゝ奢侈僭上は別而おほかるべく、俗意におつるものは此境をわかちがたきなど申て、寔に藝を鼻にかけて世を蔑視する氣象も出る。雅情俗二つならざる事を皆世をわたるのたづきたる、また皆御政道の上にあらざるといふ事なきにこそ候をわかたざるものゝ情にこそ候歟。衆民の氣どりおとるのわざは、全くこゝらあたりにも候歟。尋ぬべき事にこそ候ひき。

壬申正月廿四日

正月廿六日。小倉侯小笠原忠固使を遣はして前田齊廣の女直姬をその嫡子に配せんことを求む。

〔政隣記〕

直姬樣御緣組御內約之儀に付、今月二十六日小笠原大膳大夫殿御使者御家老小笠原出雲、副使同道御留守居猪飼叔藏、四時過罷越候に付、取次御小將誘引に而、兩人共御廣間溜江相通、本多勘解由殿御口上被承之、被達御聽。其後勘解由殿誘引、於御小書院御前江被召出、其節猶亦大膳大夫殿より之御口上。直姬樣御貰、御嫡偉次郎殿与御緣組被仰合度旨之趣申上、御直々被聞召候上、御承知之段御直答被仰合。畢而退座、其次猪飼叔藏茂御目見被仰付、相濟、兩人共二汁五菜之御料理等被下之、追付退出。同日小笠原殿江從此方樣之爲御使本多勘解由被遣之。

正月廿七日。德川家齊、前田齊廣に鶴を贈る。

〔政隣記〕

正月廿七日九半時過、上使御使番戶川大次郎殿を以、御鷹之鶴御拜領、御作法等都而前々之通。右御退出後、爲御禮兩御丸江御登城等御老中方御廻勤也被遊候事。

〔續徳川實紀〕

正月廿七日、松平加賀守に御使して、御鷹の鶴をつかはさる。

正月。改作方復古の爲難澁の部落を撰擇する方法を告ぐ。

〔杉木氏御用方雜錄〕

改作方復古之儀去年被仰渡、先づ昨年は爲御試、能美郡手初に而、無據難澁之村々相撰、成立方御詮議被仰付候。然處當年より諸郡共土不足・地味劣等、無據難澁村々成立方御詮議可被仰付旨、今般御勝手方御席より被仰渡候。右御詮議に付而は御物入も有之處、先以御時節柄格別之御趣意を以成立方可被仰付旨、何分難有可奉存候。於拙者共も忝儀に候。右之趣村役人初一統可申聞候。依而村撰等仕方、左之通可相心得候。

一、右之通結構に被仰渡候儀に候間、第一十村を初村役人共復古之御趣意致熟得、無據難澁之村々相撰可申。就夫土不足歟、地味劣歟、或は人不足等難澁之根元能々相糺可申候。裁許十村曁御扶持人中之儀も常々右等之所會得茂可有之候得共、今般之御趣意感服仕、實意を以村撰可仕候。尤追々内檢地歩刈被仰付、地當り地味劣之御糺方も有之事に候間、不詮議之族有之候而は申譯も無之儀に候間、猶更主付御扶持人江も致熟談、人々誠實を盡相撰、一郡切帳面仕立可指出候。

一、御當節右樣結構に被仰付候儀に候得ば、拙者共其方中においても御趣意通を會得不仕候而は、御上之御難題而已に相成候儀奉恐入事に候。御改作御法之御趣意茂有之事に候得ば、下々實意を以手上高・手上免・引免・立歸方等願出候樣、幾重にも可致教示儀役前之本意に候。試内檢地步刈申渡儀可有之候間、其節に至り取扱方誠實に當候樣、兼而詮議之心得可有之儀に候事。

申　正　月

二月四日。羽咋郡羽咋村の九兵衛藩米出船の取扱を鄭重にするを以て鳥目を賞賜せらる。

〔政隣記〕

付札、能州御郡奉行中江

覺

羽咋郡羽咋村

九　兵　衛

一、鳥目一貫文

右之者去年塵濱浦出船方人足に罷出候處、格別入情に相働、第一御米取扱方大切に相心得候段、右浦出船奉行等見分之趣等、先達而申聞、奇特之者に付、御算用場僉議之上右之通被下

之候條、此段可被申渡候事。

壬申二月四日

二月六日。金澤城鼠多門を修理するを以て通行を禁止す。

〔御觸拔書〕

付札、御橫目江

鼠多御門御長屋建、修理有之候に付、當六日より往來指留候間、就御用右御門通二御丸等江罷出候人々は、同所假橋出來之筈に候條、此段夫々可被申談候事。

二月

二月十一日。學校の生徒たらんことを出願する手續を簡易にす。

〔政隣記〕

付札、定番頭江

於學校生徒相望候人々、是迄者身當り頭・支配人より學校方席江相願候得共、以來者在勤之人々者、其身より學校頭江直々以紙面相願、子弟之分者、父兄より右頭江以紙面相願可申事。右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江も相達候樣可被申聞候事。

鼠多御門は鼠多門といふべきなり誤れるなり

右之通一統可被申談候事。
別紙奥村左京殿御渡、御一統江私より可申談旨被仰聞候條、則御渡之覺書寫一通指進申候。御承知被成、御同役・御同席方等御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之內裁許有之面々者、其支配江も不相洩相達候樣御申談可被成候、以上。
二月十一日　團　多太夫

二月十四日。前田齊廣の女直姬、小倉侯小笠原忠固の嫡子忠徵と婚約す。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕
二月十四日直姬樣小笠原大膳大夫樣御嫡儔次郎忠徵公と御緣組御內約御双方御取遣有之なり。

二月廿二日。阿波侯蜂須賀治昭父子本鄉邸に來りて前田齊廣の演能を觀る。

〔政隣記〕
松平阿波守殿御父子彈正大弼殿重而御能御見物御出被成度旨御賴、松平左京大夫殿も御賴に付、今月二十二日御能被遊。阿波守殿御父子朝六半時頃御出、御中入無之、御見物中に御料理出、

備後守は大聖寺侯前田利之

啓太郎は富山侯世嗣前田利保

地正は地性

九半時頃御能相濟、御供人相廻候間之內、暫御前御同道に而御庭御見物、八時前御退出。且左京大夫殿者御隙入出來に付、前夜御斷御出無之候事。

但、此度者被任御挨拶、肩衣御取御見物与云々。

將亦備後守様・啓太郎様にも爲御見物御出。

九世戸 彌三郎　實盛 權兵衛　隅田川 御　石橋 御

海人 權兵衛　附祝言

千切木 藤三郎

二月。改作法復古に關する趣旨を諭す。

〔復古方御用留〕

御改作方復古之儀、去年被仰渡候趣、何れも粗承請候通に而、先昨年之儀は、能美郡之內困窮村御取救御詮議方等御取懸、當年より諸郡へ渡り追々御僉議有之趣に候。既に御改作之御法被爲仰付置、農事之御掟全相備在之候處、百六十・七十年を經申事故、時勢に順往々御取扱振一様不成儀も在之哉に候へ共、御改作御法において御相違之儀は無之筈之處、就中世風につれ一統僣上に押移り、自然与費多、手前相衰候より御制禁をも致忘却、累年膓借多、作仕付も不行届、惰農之處へ至、次第地正も變、定め之御納所勤兼候族抔、今程に而は地盤に

拘候難澁におよび候茂可有之。其根元には品々違有之事に候得共、如此成行候而は、御改作御法之御趣意にも致相違候儀に付、今般復古之御詮議被仰付候趣に而、第一御改作之御法を相守、農業暨前々仕來之稼方爲相勵候樣に与之御意氣通重々被仰渡、其內地盤に拘實に難澁之分は、年を積り追々成立方御仕法可被仰付、且又諸事下々煩之品を被爲指省、費薄百姓成立方之御穿鑿可被成下趣、是等之御趣意を含、御郡方裁許仕候樣に与之御事に候。右に申演候通に而、地變に依而無據困窮之村方も可有之事に候得共、不了簡により手前相衰、仕付等不行屆、地味劣等にも至り、申分茂不少、ヶ樣之御嚴制も可被仰付所、只今迄之儀は先深穿鑿無之、向後誠實に相勵、費等を省、成立候樣に与之御趣意。剰困窮行詰候村々は、追々成立御仕法可被仰付儀難有趣、御上振御當節之御樣子は恐察も可有之筈。然處御郡方之儀は格別厚被爲思召、前段之通被仰渡候趣、誠冥加至極奉恐入、祖先以來高大之御國恩を存付、人々共業を晝夜無油斷相勤、御難題に不相成樣專心懸可申事に而、御趣意感服仕候而は、末々に至迄御上之御爲を心得、少も無私精誠實意を盡候樣不仕而難成趣。勿論此上御趣意通致相違、後闇心得之者、蟠候仕形、或は無筋儀抔勸、申分におよび候族等於有之は、急度可被仰付事に候間、自今以後心得を改、御改作御法通無違失相守可申候。今度廻口御扶持人立會、村々相廻一統呼出、被仰渡之復古御趣意申渡候。尙更右御意氣通を以、心得方之儀追々可申

渡候、以上。

壬申 二月

三月二日。珠洲郡飯田村に大火災あり。

〔政隣記〕

三月二日晝、能州飯田村三百軒餘燒失。隣村江も火移、五六拾軒類燒。折節烈風至極、わづか半時餘之問に右之通燒亡す。土藏も數十戸燒失、燒死も十一人有之候由之事。

三月五日。白江金十郎の女若黨と情死す。

〔政隣記〕

三月五日八半時頃、白江金十郎息女てつ今年十九歳之處、今日迄召仕候若黨中宮介藏儀、（當季暇遣候に付、今日より御馬廻組大久保覺兵衛方に相勤候處、勤兼候趣有之由に而暇相願候に付、承屆候段申渡候處、直に重而金十郎方江罷越、本文之通与云々。依之當時浪人者に候得共、父者橫山監物殿家來足輕組中宮仙右衞門与申者に付、監物殿より公事場江檢使乞有之。檢使之節足輕頭乾彦四郎与申者相詰在之、幷請人御同人家來中條所平も詰有之事。）与兼而密通之躰に而、金十郎邸內居合於稽古所（去年造營）雪隱、右てつ女を脇指に而、咽喉右之方より左之方へ刺貫、重而ゑぐり候躰に而甚深廣之疵、尤卽死之躰。指續於同所介藏儀も咽喉を刺令自害候處、氣道江速に懸り不申候哉、不致絕命候に付、稽古所前之溝際迄步み出水を呑、重而雪隱江罷越、てつ女之死骸江臥重り居候得共、未致絕息は、同夜初更之頃致絕命候与云々。偖又夫々金十郎（儀右異變之刻は、子息同道より學校江出留守中与云々。）改屆候

に付、支配頭寺社奉行成瀨內藏助・中川淸六郎・竹田掃部、曁一類中等追々罷越取唅之上、翌六日晝八半時頃、爲檢使御横目松原牛兵衞・高田久兵衞罷越、死骸共見屆、前々之通取唅之上、暮前退出。（附息女死骸は稽古所に氈を敷、其上に而被見屆候樣致度旨、御横目中ゟ尋候處、不指支段答に付、氈之上ゟ携へ出之見屆。畢而其氈に包み、致用意置候土箱に納、直々勝手ゟ引取之。介藏死骸者、稽古所土間に而見屆有之候事。）

一、公事場附檢使與力岸茂右衞門・鈴木葛次郎、御横目中退出以前に罷越居、右退出之上介藏死骸見屆之上、前々之通夫々取唅。畢而死骸川下仁藏手合ゟ先づ相渡、翌七日八時過罷歸候事。

〔政隣記〕

前記五日に有之趣に付、白江金十郎儀今日自分に指扣可罷在哉之旨、以紙面支配頭寺社奉行ゟ相達、夫より御用番左京殿ゟ御達申候處、御用は相勤、自分之儀は愼可罷在旨、翌十三日御指圖有之、其段寺社奉行より申渡之。

三月八日。前田齊廣その夫人等と共に平尾邸に赴く。

〔政隣記〕

一、三月八日五時御供揃に而御下屋敷ゟ御出、夜五時前御歸殿。且法梁院樣・御前樣御同道、建込御行列に而右同刻御供揃、御同屋敷ゟ被爲入、夜五半時頃被遊御歸候事。

今月は三月

三月十三日。前田齊廣就封の暇を受く。

〔政隣記〕

一、今月十三日上使牧野備前守殿を以、御國許江之御暇被爲蒙仰、御例之通御拜領。從大納言様松平能登守殿を以御例之通御拜領。從御臺様御使古川和泉守殿を以御例之通御拜受物被遊、萬端御作法御都合能被爲濟、上使御退出後、追付之御供揃に而御出、御老中方御廻勤、暮頃被遊御歸殿候事。

三月十五日。前田齊廣登營して就國の辭見す。

〔三守御譜〕

三月十五日御禮御登城。

〔續徳川實紀〕

三月十五日、松平加賀守就封の暇賜ひ、御鷹・馬を下さる。加賀守家人横山監物・本多勘解由拜謁す。

三月十六日。前田齊廣江戸を發して歸國の途に就く。

〔政隣記〕

三月廿六日雨天。今月十六日中將樣益御機嫌克江戸御上邸被遊御發駕候處、難所々々無御滯御越、御日圖之通同廿四日泊驛被遊御止宿候旨等、同夜認之山口氏御用狀、割場より被指出候早飛脚に傳附有之候由に而、翌廿五日曉同驛發足、今廿六日晝過到着之旨、割場奉行武田李左衞門より以添書到來之事。

三月なり

三月十九日。犀川川上新町等に火災あり。

〔政隣記〕

昨十九日四時頃、犀川覺源寺前に居住之永原權太夫人持組家來森口金左衞門与申者、先頃病死之舊宅より出火、家内之者火を焚捨、暫外出之間に出火与云々。類焼家數五十軒計、九時過鎭火、火消役等引取候處、八時前泉村領出村屋與三兵衞家より出火、家數都合二軒燒失に而鎭火、是は取除灰より燃出候事。

舊宅とは死後未だ家督相續の定らざる間をいふ

附、七半時頃堀川町筋遠方在家燃上り候由。出火与騷、夜六半時頃、上口町端少々燃上り候迄之由。出火与騷、同夜田井口町端是は人持組定火消横山圖書長屋燃上り候得共、外火与申立人數押出、二つ太鼓暫打候由沙汰也。出火与騷候得共、無程靜穩。

右今日晝夜都合五度之騷に候。自分儀今日早朝より同役中村才兵衞与同道、白山致社參候處、彼筋に而金澤火事之樣子一圓不相知、歸路七時過額谷村茶店に而、最早鎭火等之趣初而承之、黄昏前歸宅之事。

備後守は大聖寺侯前田利之

追加、右火事所才川川上新町に而、焼失家數四十三軒与云々。覺源寺前に而者無之候事。

三月十九日。前田齊廣の女直姫、小倉侯小笠原忠固の嫡子忠徵との緣組を許さる。

〔政隣記〕

三月廿四日江戸發之御用狀四月六日到來、左之趣申來。

一、三月十八日御老中方御連名之依御奉書翌十九日御名代備後守樣御登城之處、兼而御願置被成候直姬樣御緣組、御願之通被仰出候。依而從大膳大夫樣、御使者御家老伊藤六郎兵衞・副使福兵右衞門、從儔次郎樣之御使者、御用人柏木茂右衞門、同日九半時頃罷越、取次御小將誘引、三使共御廣間御勝手江相通、夫々御口上組頭中村左兵衞承之候上、御吸物等出之、相濟退出。

一、從此方樣之御使者、御家老前田織江殿・副使聞番堀三郎兵衞、勝千代樣より之御使者組頭中村左兵衞相勤、御直答申上、相扣罷在候內御吸物等被下之相濟罷歸候。

三月廿五日。鼠多門長屋の修理成るを以て通行を許す。

〔政隣記〕

付札、御横目江
鼠多御門御長屋建修理出來に付、當廿五日より往來不指支候條、夫々可被申談候事。
三　月
別紙之通夫々可申談旨御城代伊勢守殿被仰聞候條、御承知被成、御同役御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之內裁許有之面々は、其支配江も不相洩相達候樣御申談可被成候、以上。
三月廿三日　　　　御　横　目
御小將頭衆中　但五役
右御用番從湯原氏例文之以廻狀寫到來之事。

三月廿八日。前田齊廣金澤に着す。

〔政隣記〕
三月廿八日朝六時不遲之御供揃に而、同刻過未明御提灯立。津幡驛御發駕、森下御小休有之、四時過御着城。其節御迎方御意等都而前之御作法曁去春御發駕之節与同趣に付記略。且御歸城之上、爲御禮公邊江被指出候御使、人持組横山大作御目見、幷拜領物前々之通に而、九半時頃發足。

三月廿八日。前田齊廣初めて世子齊泰を見る。

〔溫敬公記史料〕

三月廿八日金龍公歸藩。始見世子。

三月廿八日。藩侯に對し禮を失ひたる中川儀兵衛亂心を以て逼塞を命ぜらる。

〔政隣記〕

今月廿八日御歸城に付、金くさり橋御通之節、本多安房守殿家來中川內之丞(三百石)せがれ中川儀兵衛与申者、笠着高足之儘罷在候に付、御先勢之內より相咎候處、主人より外は高足外し等不致旨申聞、其內御通行被爲濟候。依之安房守殿指扣被伺候處、不及其儀に段被仰出、且右儀兵衛亂心之躰に付逼塞被申付与云々。

附、儀兵衛儀御先三品之內、御鐵炮支配神戶藏人、御紋付之御羽織着用騎馬に而通行を御前与心得居候處、御前に者桐之御紋御羽織被爲召在候故、騎馬御供人之內与相心得、本文之通主人之外ゟ者高足外し不申旨等之及答候由。勿論元來氣虛之生質与云々。

三月。石川郡の十村等農業取捌方その他に關する諮問に答ふ。

是迄之農業取捌方と申は、いか樣心得候事に候哉与被仰出候。農業取捌方与申は、暮春雪之内改作農具用意爲致置、雪消次第田畑荒起爲致、村々村廻り仕、手おくれ不仕樣勢子仕、若病氣に而無據手おくれ仕者は詮議仕、一類共同名より手傳爲致、一村之改作草拂相濟候迄一樣に相成候樣爲仕申候。尤尿物不行屆之者は詮議仕、彌手間申筈に御座候へば、銀米調達之證文に私共請合奥書を以、才覺仕申儀も御座候。且又百姓身持之儀は不及申、家内暮方等も常々心懸承合、若心得違之者有之、改作方不入情之者、或は行狀不埒之者は呼出、詮議之上しかり教候者も有之、又は品により咎め申付候儀も御座候。秋に至り稻刈入より出來米取ちらし不申樣縮方仕、御定歩入之通藏宿等へ計付候樣穿鑿仕、此上私共不行屆儀は恐入可申上樣無御座候。

一、改作御法之事は委敷會得いたし居候哉に被仰出候。改作委敷會得仕居候とは申上がたく、恐入申儀に御座候。先年より之御法通り、御改作所より時々仰渡にしたがひ相勤申儀に御座候。

一、田帳・畠帳と申もの有之候はゞ、潰廻し等之事も本田よりおし不申とも相わかり可申事には候はず哉与被仰出候。山川崩等にて田畑相變相改候砌は、田畑地相分り不申候。村々よ

次郎吉は石川郡田井村の十村

り畦畔塚等切廣、一躰村高地廣に相成申時も有之、又少々宛山川崩有之、或は前々より地狹之村も有之。明白に相改候時は、本田より相改不申而は、畦畔等之多少も有之もの故、相分がたく儀に奉存候。

一、石川郡御仕立之儀は次郎吉存不申哉。此已前いか樣に御仕立被仰付候而、當時又如元貧村多相成候者いか樣之わけに候哉。此時之御仕立不埒之故歟と被仰出候。元來石川郡之儀は、就中御改作御手初に而物事嚴密に相成申由、其節相勤候御扶持人共申傳、端々覺書等承傳申候。其頃之樣子、則慶安五年願書付別紙寫奉入御覽候。其後之樣子委細之儀はしれがたく候得共、明曆年中相勤候者共より、免高く難澁之在々書上候分、下免村は一免・二免上免仕、高免村は其時之有成或は一歩・二歩增減有之、先年せい一ぱい指上候由に而、其頃免極仕候御扶持人小松樣御夜詰罷上り候節、免啚り之事重々被仰出、とかく念を入、來年さらい年までもかゝり見つくろひ、百姓之恨なき樣に仕、もしみそこなひ村御印下され候共、相違之處は時をうつさず申上候へば御印御成直し下さるべく旨被仰出も御座候と覺帳に御座候。小松樣俄に御逝去被爲遊、其儘に成來候与承傳候。御取扱も有之樣子に候得共、其時々委敷儀は相知がたく、天明三年組々手餘り高等有之、難澁至極仕候に付、新百姓引免等高澤平次右衛門樣等重々御僉議之上被仰付、其後引免も段々立歸、元之難澁に相成申に付、寬政二年笠間

相聞本の儘
趣段本の儘
實に本の儘

九兵衛様・杉野善三郎様、内嶋村孫作・澤村源次御指加、貧村詮議晝夜御せんさく有之、新百姓引免等被仰付候所、是以引免等立歸候得ば、將又元之難儀に落入、又は組々過分に手餘り高等出來仕、村々より、乞食抔いたしあさま成作付仕候故、草やら稲やらぼう／＼と相成、村々人別田地之差別も無御座、御收納過分年越に未進に相成、春に至り青田と申て、薬なたねの時分、出來之時節之直段に五匁下りとして賣、家財は三割銀とて百目之内三十目引、正味七十目を百目と立、其上一歩五の利足をいたし、御上江は樣々の名目にて銀米多拜借仕、一年立に仕候故、御改作御法とては多分は不得相聞、やくたいもなき爲躰之次第に而、其時々春秋御貸米等を色々取扱、其筋々により同作難に不相當取計仕來候處、同十一年林彌四郎様・江上清左衛門様、内嶋村孫作又候御指加、野々市組之内八ヶ村御手初に而、貧乏になれて癖付惡敷、惰農成者は家・高御取揚追出に被仰付、種々御趣段を被盡、同十二年三十五ヶ村、同十三年三十八ヶ村、享和二年に三十一ヶ村之組々極貧村之御仕法被仰付、過分之御仕入引免被仰付候處、私共晝夜打懸り勢子仕、夫よりそろ／＼持高人別之差別實に、自然与人々御高大切にいたし、御收納も年切にいたし申候處江至り、御法通りも自ら相守、當時餘程力付申村方御座候。

一、十村數十人之内には、心懸申も心懸不申茂尤有之候。御扶持人とても何も不存ものも有

情不情は精不精

之候而、番代・手代にまかせ置申者有之躰に候。むかしより其通り故、何も不存十村多候歟。仲間儀ながら人々了簡可有之候間、目立候者も候はゞ無泥可申上旨被仰出、奉得其意申候。十村役儀蒙仰者に、御用儀心懸不申者は無御座候。併其内には少々宛之情不情は御座候得ども、一圓に心懸不申ものは無御座候。若新役等之内心懸薄き者は、年功之者より教相勤申儀に御座候。格別御役儀疎に相心得候者當時は見當り不申、十村役累代相勤申もの之外、新たに御役儀被仰付候者抔は、當分手馴不申内は御用筋振合等相尋相勤申候次第、御用之筋々覺候上は番代等に任申儀無御座候。尙更心を付、已來不心得之者も御座候はゞ無泥可奉申上候。

一、御奉公と存候て相勤候事に候はゞ、身分を捨候而可相勵事に候。諸民の難儀いたし候は、惣而十村之いたし候事に候。世にかくれ無之候。此所に目を付候而取捌候はゞ、御奉公に可相成歟与被仰出候。此儀何共可奉申上樣無御座、於私共恐入感服仕申候故、御尋之趣奉申上候、以上。

壬申三月

田井村　次郎吉
田中村　小四郎

三月。諸郡、金澤城造營の爲上納したる冥加銀を藩が償却せんとするを

辞退す。

〔諸書物留〕

御城御造営全御成就被爲仰付、去春は久々無御座御入國御祝儀等之御含に而、御能被爲仰付候事茂、御造營御成就故之儀与御喜悦被爲思召、旁以爲冥加指上候金銀等、町・在之分は去年より御手繰次第少々宛往々可被爲返下段被爲仰出之趣、恐入難有儀に奉存候。就夫下々之者共冥加銀等指上候存念之儀は、兼而御承知被下候通五ヶ年以前之御儀、諸氏一同奉恐入、早速被爲在御造營度奉念、既に其節諸郡ゟ御造營方御普請奉引請度御內意も申上候程之儀に而、全以被爲返下候儀抔は聊以心得無御座候間、重き被爲仰出之儀恐多御座候得共、爲冥加上納仕置候金銀被爲返下候儀、何卒御免許被成置被下候樣奉願上候。願之通被仰付候樣宜御相談被下度、小紙を以申上候、以上。

申　三　月

本江村　惣　　助
武部村　四　郎　太　夫
堀松村　平　　藏
本江村　六郎右衛門
折戸村　源　　助

鵜川村　爲　次　郎
高波村　喜右衞門

高田彌左衞門様
中　村　逸　角様

四月朔日。金澤に於いて諸士に前田齊廣の女直姫縁組の許可を得たることを告ぐ。

〔政隣記〕

直姫様御儀、小笠原大膳大夫様御嫡儔次郎様江御縁組之儀御願置之處、前月十九日御名代備後守様被爲召、御願之通被仰渡、難有被思召候。此段可申聞旨御意に候。

四　月

右畢而御大廣間於横廊下、左之覺書御用番安房守殿御渡候間、可致披見旨御横目中申談に而、各披見退出。

付札、御横目江

今日御弘之御祝詞、御用番宅江今・明日中罷出可申候。病氣等に而今日登城無之面々者、右之趣向寄より相達、御用番宅江以使者御祝詞申越候様可被申談候事。

四月九日。石川・河北二郡に降雹あり。

〔累年雜記〕

一、四月九日苗役、同十一日・二日に大丸雪降、處により冬作り悉く損じ、麻まき抔中より吹をれ用に不立、こいで捨たる處あり。先石川に而者安江邊、河北に而は高柳邊、同下山田邊也。當所者麻等之障りも無之、前代未聞之大吹あれなり。

四月十四日。昨今兩日能を催して前田齊泰の嗣立等を祝す。

〔金龍公記史料〕

四月十三日・十四日。直姫君婚嫁見許。及勝千代君立嫡故。張散樂。使群臣觀之。

四月十八日。能登口郡に製産する四ケ布の判押賃收納の手續を改む。

〔御郡典〕

口郡に而出來之四ヶ布等判押申渡、天明六年當場詮議之上申渡、布一疋に付一分宛判賃取立致上納來候處、近年次第布高致出來候躰に候得共、判賃上納高左而已相增不申、且他國等へも指出候躰に候得共、右等之取極も無之、縮方猥に相成候躰に付、今般左之通相極候。

一、口郡に而出來之布、都而一疋々々不相洩樣判押、一疋に付一分宛之判賃取立、每歲十二月散役裁許へ相渡可申候。尤布員數高相調理、帳面に仕立、歲暮に至り御算用場江可指出候。

一、他國或は遠所江荷物に認指出候節は、尤壹疋々々判押、認荷物何拾疋に相定、認候上貫目相改、判押人指紙を添、上方行之分、兼而加州柏野驛問屋へ見合印鑑相渡置、右指紙取受、判押人へ可相返候。尤此段右問屋へも申渡置候。其外金澤行等之分は、右荷物受取候方より判押人へ差紙相返候樣可申遣候。

一、舟手江出候布も、右指紙を以舟方役人江可申遣候。

附り、能州浦々船手之役人江、各より此段急度可被申渡候。

一、右布判洩之分、見咎次第可及斷候。洩物格之通可申渡候條、判押幷口郡村々江も兼而可被申渡候。

一、是迄相用候布判之儀は、紛敷儀有之に付、相改可相渡候條、此段可被申渡候。

一、判押人之儀は、以來遠方村々分相廻り、隨分致出精、洩布無之樣嚴重可被申渡候。仍而以來は判押人江、布一疋に付壹分之判賃之內貳厘宛被下候條、此段も可被申渡候。

右口郡四ヶ布判押方等之儀、今般御勝手方年寄中へも相達申渡候條、此段判押人へ被申渡、

請書取立可被指出候。且右之趣に而仕法方相渡候趣等も有之候はゞ、遂詮議、心附之趣申聞候樣可被申渡候。尤受書取立被指出、締方嚴重可被相心得候。此段散役裁許江も申渡置候、以上。

四月十八日　　　　　　　　　　　　　御算用場

高田彌左衞門殿
中村逸角殿

右之趣申來候條、得其意、判押主附之儀、先づ是迄之通堀松村佐助江申渡候條、勤方等之儀は前書之趣に申渡、請書取立可指出候。且亦先達而相渡置候押切印、佐助へ受取置候分先相渡置候條、當分可相用候。其餘組々江之押切印取立候間、夫々役所へ可指出候。本文に有之通、浦々役人へも不相洩樣夫々申渡、請書取立可指出候、以上。

申四月廿日　　　　　　　　　　　　　中村逸角
　　　　　　　　　　　　　　　　　　高田彌左衞門

羽咋・鹿嶋兩御郡十村中

四月十九日。前田齊廣の歸國を祝して能を催す。

四月十九日。祝歸國張散樂。

四月廿五日。前田齊泰の幟を建つる期間は土橋門内の往來を禁止することを告ぐ。

〔政隣記〕

付札、御横目江

勝千代樣御幟、來月朔日より同五日迄土橋御門内相建候に付、右御門御番所前通、三之御丸江之往來、御幟相建候内相成不申筈に候事。

右之趣夫々可被申談候事。

別紙之通夫々可申談旨、御城代伊勢守殿被仰聞候條、御承知被成、御同役御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之内裁許有之面々者、其支配江も不相洩相達候樣御申談可被成候、以上。

四月廿五日　　　　御　横　目

御小將頭衆中　但五役

四月廿七日。去々年足輕小森彥三郎と爭鬪したる坂井斧吉に蟄居を命ず。

〔政隣記〕

付札、前田源六郎江

坂井斧吉

右斧吉儀、去々年六月二日夕行歩に罷越歸候節、大豆田村領川除に而螢取集、實妹江とらせ可申与致指越候處、刀を帯候者右之螢相渡候様申聞候故、人違に而申聞候哉与存、難相渡段申入候處、侍之申入候儀承届不申者難心得由申聞、組付斧吉を敷伏候に付、酔狂之者に茂候哉与存、相和き斷申入候得共、彌理不盡に申募、刀を抜左之鬢口江疵付候故、突放、刀を抜合切合候内手負候得共、彼者江も三四ヶ所も切込候様に覺候處、逃去候故追懸候處、闇夜、其上鬢口之疵所に而眼中江血入、相手見失致歸宅候由。然處割場附足輕小森彦三郎儀、於同所帯刀人与口論之上及双傷疵付候段及斷、斧吉相手之躰に候處、其節之首尾斧吉与者表裏之申口に而、何れ歟取繕有之儀与相聞え候に付、此上御糺可被成候得共、思召も被爲在候に付、其儀者御用捨被成候。斧吉申分一通りに而者、左様にも可有之様に候得共、相手之者に被敷伏、剰自分手疵を負、彼者を取逃し候族、其場之首尾不宜、手ぬるき仕形に付蟄居被仰付候段被仰出候條、此段可被申渡。

一、彦三郎儀相手に相違無之候者成敗仕度候由、斧吉願書付に、其砌村田故三郎兵衛等添書

に而指出置候得共、乍輕き者御家人に候得者、成敗相願候儀者遠慮も可有之儀に付、書附相返候事。

申四月二十七日

右に付前田源六郎於宅、相頭中島小兵衛立合、源六郎申渡之。

四月廿八日。酒造役・紺屋役・室役・鍛冶役を改めたるを以てその營業者の書上を命ず。

〔御郡典〕

酒造役、天明八年・文化三年書上之造米高壹石に付銀貳分五厘宛之役立被仰付。當時之造米高には拘り不申候。

但、酒造役是迄上納仕來候ヶ所も有之候得共、其分御免許、改而本文之通一躰同樣之役立に被仰付候間、天明度等改石に應、役立銀可指出事。

一、紺屋役拾五匁、室屋拾匁、鍛冶五匁六分、一統新役立被仰付候。併右三品商賣、是迄年々上納仕來候分は、以後も其通上納可仕儀に候事。

右之通役立相定候に付、商賣人名書帳御郡所へ可指上儀に御座候間、早速兩人方へ可被遣候、以上。

本江惣助
武部四郎太夫

申四月廿八日

口郡組々裁許中充

四月。鳳至郡總持寺の伽藍を再建するを以て外作事奉行をしてその工を監せしむ。

〔政隣記〕

能州惣持寺再建に付、普請中奉行人被仰付候様仕度旨等願之趣有之に付、各内普請所爲縮方折々見廻候様可申渡旨被仰出候條、可被得其意候。御大工之内も主附見廻候筈に候。且又年を經追々普請に取掛候筈に候之條、可有其心得候事。

四　月

右今月廿日御用番安房守殿御席ゟ、外作事奉行一人御呼立、覺書御渡之由承に付記之。

五月朔日。本日より城内に於いて前田齊泰の幟を建て衆庶をして觀覽せしむ。

〔政隣記〕

付札、御横目江

勝千代様御幟相建候内各被相廻、御歩横目幷御横目足輕之儀も前々之通に可申渡候事。

一、御幟相建候內、土橋御門御番人布上下着用之事。

一、男女見物被仰付候事。

但、男子十五歲以下丸額之者迄之事。

一、見物人道心・比丘尼躰之者、常躰之女に而も至而見苦敷風躰之者は、御門江入申間敷候事。

一、見物人甚右衞門坂御門より入、戻り候節者御宮坂御門通西町口御門江出可申事。

一、見物人供草履取一人相通、其外者甚右衞門坂下に而爲殘可申事。

一、御幟朝六時相建、七時仕廻可申事。

一、警固足輕之儀者、都而割場附足輕之事。

但、小頭御横目足輕者布上下着用、且御門下等警固者割場合紋羽織着用之事。

一、勝千代様・直姬様御出之節、見物人指留候に者不及、無構爲致見物、御往來之節行成蹲踞仕可申事。

一、御幟建揃而より土橋御門大扉開申筈之事。

一、甚右衛門坂・御宮坂御門大扉、御幟建揃而より開き申筈之事。
一、見物之女、尤かぶり物幷青紙張傘手に持候儀は不苦。指候儀無用之事。
右之趣被得其意、割場奉行・三十人頭江も可被申談候事。

四　月

御城中火之元見廻り御歩、御幟相建候内切手御門相廻り候儀、晝廻り者指止、朝・夕相廻り候様被仰渡候段、御城代被仰聞候事。
但、侍中隠居剃髪之女は御門入支不申候。商賣物擔候女等者御門江入間敷事。
〔政隣記〕
五月朔日より五日迄勝千代様御幟左之通御相建。
大海老　長さ七間餘、乳附旗白、御紋黒一つ。
御幟　沙金色　大さ右に准ず。吹貫絹紅白。
鷹、松に居右に同。
旗　五本、白地に黒御紋二つ、尤乳付旗。
兜　廿五頭、内十八梨子打、七つ筋。
〔政隣記〕

昨朔日御幟年寄中・御家老役・若年寄幷御近習頭・御用人・御臺所奉行・御次廻御歩並以上拜見被仰付。依而御赤飯・御吸物鯛・御酒頂戴被仰付候事。

但、右人々一統布上下着用之事。

五月五日。大聖寺侯前田利之江戸より歸邑の途金澤城に登る。

〔政隣記〕

五月五日、今日端午之出仕相止。且今日備後守樣就御登城、御用懸り詰人朝五時揃に候處、四時過御宿に御着、八時過御登城御對顏。今日御日柄に付御料理は不被進、御熨斗等御表小將出之、於御奥舞臺左之通御囃子。左番組略之。

一、御表向等御作法都而前々之通に付記略す。且七時過御退出、直に寶圓寺・天德院に御參詣、暮前御宿に被爲入。

附、翌六日曉七時御發駕に而御歸邑之事。

五月八日。城内腰掛に於ける諸士の從者等に不作法の擧動あることを戒む。

〔政隣記〕

付札、御横目江

御城中於腰掛等、主人迎等に罷越居候內、不作法之者共有之、腰掛縮足輕等より相制候處不致承引、却而嘲候者共も有之樣子、先以不心得之至に候條、家來末々迄嚴重可申渡候事。

右之趣一統可被申談候事。

五　月

別紙之通可申談旨、御城代伊勢守殿被仰聞候條、御承知被成、御同役御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之內裁許有之面々者、其支配江も不相洩相達候樣御申談可被成候、以上。

五　月　八　日　　　　　　　　御　横　目

五月八日。瓦燒商賣人を役立とすることを告ぐ。

〔御郡典〕

各支配所に而瓦燒商賣人之內、無役・役立入交有之、不列之儀に付、今般詮議之上、無役之者以來役立申渡候條、相應之銀高詮議有之可被申聞候、以上。

五　月　八　日　　　　　　　　御　算　用　場

高田彌左衛門殿

中村逸角殿

右之通申來候條、得其意、夫々相調理可書出候、以上。

高田彌左衛門

能州口郡十村中

五月十日。水島茂左衛門金澤尾張町に於いて町人を斬る。

〔政隣記〕

組外並水嶋宇左衛門（三十人扶持、脇田善左衛門・神保縫殿右衛門組）二男茂左衛門（廿一歳。嫡子去年病死。）儀、縁家寺中神主河崎攝津守方江用事有之、昨十日罷越候節、於尾張町町人を切殺候に付、父宇左衛門より檢使乞書付出之。十一日八時過公事場檢使與力小嶋石之助・鈴木施兵衛、檢使宿尾張町高尾屋八郎右衛門（甚四郎を及殺害置候淺也）方江罷越、暮過死骸見屆之、翌十二日夕七時過引取。但十一日六時過書付脇田江宇左衛門持參達之。

私儀昨十日用事有之、縁者寺中神主河崎攝津守方江罷越、程遠き所故歸夜に入、四半時比にも可有之哉、尾張町迄參り通り懸候處、町人躰之者七・八人計、連之樣子に而通り合候者之内一人、先江立候者私江行當り候而、却而其者より如何与咎懸り、其方より行當り此方を咎候者難心得申事抔与雜言を申募り、肌をぬぎ私江組付、胸を取鬢をつかみ、又は手を以

打擲き候儀も有之様に覺申候。右段々之族に付可切拂と仕候處、連之者と相見え、後より私を抱或は手持抔、扨大勢取集ひ、私帶し候刀と共に抱留罷在、刀を拔放し候儀難成故、漸脇刺を拔、彼者之右腕に切付候處、連之者共逃去、右之者は猶も飛懸り候に付、所々江切付或は突込、三ヶ所計深く突込候と手答仕候。右之者共邊江倒れ候に付、後より抱留候者も相手与心得追懸候處、散り々々逃去見失ひ候に付、切留候者之様子も無心許立戻り見屆候處、最早相果罷在候故、足之裏に留を刺、右邊り亭主番を呼立、私名前相名乘、輕き者法外申懸り手向、不得止事及殺害候間、番人附置、父宇左衞門方江及案内呉候様申入、且着替抔も右族に而裂け候間、追付着替爲持越候様申遣呉候様にと相賴、尤其場所に立留り罷在候處、黑梅屋平四郎与申候其邊り之町人罷出、宅江入相休候様申聞候得共、餘り手足抔もよごれ居申候に付、右平四郎隣家亭主番嘉兵衞（能登屋嘉兵衛与申者。）者、蕎麥商賣人に而洗足仕に便利宜見受候故、其者江相賴、湯を貰ひ致洗足、平四郎宅江入、最前之時宜に而本結抔も取離れ罷在候に付、自身致仕抹、暫休足仕候處江、宅より着替抔差越、夫々町役人江も相屆、名前も相名乘、番人も爲附候上之儀に候者、一旦宅江引退候様父宇左衞門より申越候に付、猶更入念名前等町役人江申達、御斷申候族に御座候。依而爲檢使各御出、右及殺害候者は折違町指物屋甚四郎与申者之由に而、則死骸被遂御見分候處、前に深疵六ヶ所、後に淺疵五ヶ所有之候。右五ヶ所之分

敷は式なるべし

は如何致し疵爲負候哉与被仰聞候。右之者飛懸り候儀度々之事に而、烈敷時宜故、脇刺後江もあたり候儀可有之、併手答仕候程之事は無御座候。手向申者之事故、前之分者手答仕覺有之候。且又右甚四郎連之者は、折違町石浦屋小右衛門、同町錢屋五兵衛せがれ孫三郎、同町内田屋六郎兵衛、十九間町竹屋九十郎与申者に而、此外連之者無之、其上彼者之手前御聞糺被成候處、甚四郎儀私江行當り候哉、其儀は見受不申候得共、若黨敷抔之者抔と申合り、剰私江組懸り候躰に付、四人共是は何事を仕出し候哉と存、中々私江詫申入候程之暇もなく、烈敷時宜故、小右衛門者甚四郎を爲退度、帶抔を持取縮懸り、孫三郎等者、若私儀甚四郎を可及殺害哉与、私江取すがり、後より抱留等仕候內、最早及刄傷候故、恐敷存、一同に逃去候段申述候。曾而甚四郎に致荷擔、私を取圍ひ抔仕候趣意者毛頭無之樣申述候段被仰聞、此儀如何与御尋被成候。甚四郎連之者七・八人計可有之哉与存、先達而申述候得共、夜中之事に候間、必七・八人共難申述、將又甚四郎連之者共、何も私刀をも難拔程抱留候事ゆゑ、私を取圍ひ候躰、相手与心得、逃去候を追懸候事も有之候得共、人々今日各江申述候處を以相考候得者、如何樣其節最初より法外を申募り、段々前條之通り手向候者は甚四郎一人に而、外之者共法外申聞候儀者聞請不申、勿論手向候者も無之候。左あれ者人々申分之處相違も無之与相考候。手向候者を仕留候上者、連之者共江對し存念も無之候。此外申述候儀無御座候、以上。

組外並水嶋宇左衛門せがれ
水嶋茂左衛門

申五月十一日
小嶋石之助殿
鈴木施兵衛殿

五月十四日。前田齊泰の側小將たるべき幼年者を求む。

〔政隣記〕

勝千代樣御側小將御用候條、平士三之一被下置候者六歳より十歳迄、且頭分之嫡子、右年齢之者早速可書出候。

一、與力より御步並迄之子共六歳より十歳迄之人々、御居間方相望候者有之候はゞ早速可書出候。

右之通被得其意、組・支配之人々江も可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

五月十四日
長　甲斐守
山口清太夫殿　但三役

五月十七日。月次四書講義の竟宴を行ふ。

〔金龍公記史料〕

五月十七日。因月次二丸及越後屋敷講義四書竟宴。賜儒者伊藤雅樂助・鶴見平八・林周輔・寺田九丞・木下槌五郎上下一具。

五月廿四日。曩に越後屋敷成るを以て作事奉行に賞賜す。

〔金龍公記史料〕

五月廿四日。賞越後屋敷成。賜物于作事奉行等有差。

六月十四日。江戸詰人、物價高直に苦しむを以てその救濟を稟議す。

〔江戸御留守諸事留帳〕

一、左之通當十四日出に御勝手方ゟ及示談候事。

當御留守詰人一統質素に相暮候得共、諸物高毛に而入用相増、何茂難澁之躰。殊更御小將御步之儀は御公界向相勤候故、何廉失脚も相懸候形。尤兼而無油斷儉約仕取續候樣談置候得共、御人少烈敷相勤候得者、別而入用も相增申候。當時米價は左而已高直与申に而者無御座候得共、諸物は高貴至極に而、當月渡御扶持方代請取之處、跡引に相成、盆前諸拂方等之手當

無御座、第一取續方無覺束躰に御座候。去々年段々之仰出之趣も御座候得共、前段之通に而當盆前は事之外指支、何茂難澁至極仕候躰に候得者、其儘にも難仕置候付相達申候。何分御救方無御座而者指支困窮仕候御時節与申、近頃も被仰出候趣御座候故、組・支配之人々より御救方之儀奉願候譯者無御座候得共、必至与指支申儀を押付置、自然不筋之儀も出來仕、御難題に相成候而者如何敷奉存候付、不得止事見聞之趣相達候間、去々年御留守之振を以御救方之儀御僉議御座候樣仕度旨、中村左兵衛・山路忠左衞門・一木逸角於別席、夫々申聞候。當時米價左而已にも無之、金相場も去年以來与格別相替候儀も無之、諸物高直与申迄に而、是も當年に至高毛に相成候と申譯も無之候得者、無據指支申所ゟ相當不申候付旁難遂詮議旨申渡候處、重而左兵衛申聞候者、米價は諸物高直に引比候而は左而已無御座候得共、前金・跡金に而格別之違有之、金相場も近年程に者無御座候へ共、諸拂方六拾目之方へ六拾貳匁餘之圖りを以拂方仕候得者、當時之御扶持方代に而者引合不申、其上人々勝手難澁に而持込金も手薄之所、近年道中事之外人氣悪敷、過分入用懸り申故持込金も遣込、參着之上甚手薄に而、御扶持方受取候而も跡引に相成申候。尤金澤表へ申遣候人々も有之候へ共、不調達に而指越得不申、當盆前拂方暨取續も無覺束旨段々申聞、委曲別紙も指出、忠左衞門等よりも指支之趣別紙之通申聞出候。割場奉行も於別席御救方之儀申聞、是又別紙覺書も指出申候。當時御勝

手御逼迫之儀何茂承知之通に候得者、幾重にも取續之儀申談候樣申入候得共、右之通に而何分御救方無之而者、當盆前之所指支候樣相聞候付、則別紙三通指進候條、早速被遂御僉議被仰越候樣致度存候、以上。

六月十四日　　　　前田織江

前田土佐守等兩人樣

右御紙面等之趣委曲致承知、御算用場奉行江遂詮議候處、存寄之趣申聞候付、拙者共僉議之趣別紙下書之通紙面相添、御紙面等以吉左衞門入御覽、相窺候處、兩樣之內此度被指押置、當暮被下候方可然思召候旨以同人被仰出候。則右御書指進候條、左樣御心得、盆前之所は何分御指押之趣御取計之樣にと存候。依之昨日出町飛脚指留置、今日發足申渡候。此段申進候、以上。

六月廿五日　　　　村井又兵衞

前田織江樣

前田織江は江戸留守詰の家老

別紙は見當らず

六月二十日。犀川・淺野川の川除普請を破壞すべからざることを命ず。

〔政隣記〕

犀川・淺野川川除江塵芥等捨置、御普請等之節取除方不時人足相懸り、其上籠等之上江殺生

川人致往來、籠石等に相障り、別而夏中水游人多、御普請所踏荒し、甚御不益相成候に付、川廻之者烈敷相廻候得共、末々心得違之者も有之躰に相聞え候間、猥成儀無之様、一統嚴重被仰渡御座候樣仕度奉存候、以上。

申六月十二日

石川惣十郎
三輪仙太夫
中村永之助
加藤三四郎

長甲斐守樣

犀川・淺野川川除江塵芥等捨置申間敷旨等之儀に付、別紙御普請奉行出候に付寫相越之候條、被得其意、組・支配之人々江嚴重可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

六月廿日

長甲斐守

六月廿四日。前田齊廣の夫人等江戸兩國附近に行步を行ふ。

〔政隣記〕

六月廿四日朝五時前御供揃、法梁院様・御前様御同道、御供建込、御忍御行列に而南御門より御出、兩國邊ゟ御行歩、柳橋爪萬屋八郎兵衛方ゟ御立寄。夫より御様子次第羅漢寺筋ゟ御出之旨被仰出、則御出被遊候。御大小將より四人御供に罷出候事。

七月四日。二條治孝の使者藤木右衞門金澤に着す。

〔政隣記〕

七月四日二條様御使者藤木右衞門儀、前月廿九日京都發足、昨夜小松止宿、今夕七半時比旅宿菅波屋ゟ參着。從者鎗持・草履取迄に而、駕籠脇侍も不召連、上下都合三人に而罷越。其外者宿繼人足に而候事。

一、享保三年十月從二條様御内用爲御使者、御用人鈴木縫殿罷越候節之留帳、御城御燒失之節燒失に而無之、其節之御例相知不申候得共、御馳走方御小將之留者、町會所に預有之燒失無之、右帳面に御內用御口上御用人吉田彥兵衞承請候趣有之に付、其趣御用番左京殿ゟ御達申候處、則御用人ゟ被仰渡、渡邊久兵衞右御使者旅宿ゟ罷越、其趣御馳走方御小將より通達之處、右衞門申候者、今般御使者者時候御見廻に而、御進物も有之候。右相勤候後、御內用之御口上申演候樣、於京都被仰付候間、今日者難申演由に付、久兵衞退出、直に左京殿御宅ゟ罷越、右等之趣及御達置候事。但御使者一件委細者主附方別帳に記之、此帳面に者大要を

書し枝葉を除く。

二條樣御使者御用人藤木右衞門登城之節御作法之次第。

一、御使者登城之節取持之御大小將兩人之內、一人從旅宿御城迄先乘、一人者跡騎馬可仕候。御使者下乘之所より御式臺迄同道、尤退出之節同道可爲前條之通候事。

一、石川・河北・橋爪御門方警固、例月出仕日之通御門開、物頭も罷出可申候。尤足輕合紋羽織着用之事。

一、所々御番所物頭等江、御使者不及挨拶候旨、同道之御大小將より可申談候事。

一、所々御番人并御下座可仕候事。

一、御進物有之候而、上裁領御座候者、御大小將及挨拶、旅宿江相返可申候。

但、御玄關より御進物揚候足輕二・三人、羽織袴着用割場より指出可申候。

付札、本文之趣に御座候得共、上裁領無之候者、御步一人旅宿江指遣、裁許仕罷越、於御式臺御目錄御使者江相渡可申候。

一、御式臺詰人、御大小將御番頭兩人、御大小將横目一人、御大小將。

一、御大廣間横廊下、御大小將御番頭・御使番。

付札、文化七年鷹司樣より御使者之節、此御間詰人相見え不申候得共、以前之通詰人可有御

座儀与僉議仕候。

一、御玄關階下ゟ御大小將兩人罷出、同所より御大小將誘引仕、虎之御間ゟ相通可申候。追付御奏者番罷出、御口上承、御進物有之候者御目錄受取之、御口上幷御進物御次ゟ可指上候。付札、御内用之御口上者御用人罷出承之、右に付而之御進物有之候者、是又御用人請取上之可申候。

一、勝千代樣ゟ之御口上幷御進物有之候者、御奏者番承之、御次ゟ可指上候。

一、法梁院樣・御前樣ゟ之御口上御座候者、同人承之、追付江戸表ゟ可相達旨可申述候。畢而年寄中・御家老役罷出、及挨拶可申候。

但、年寄中ゟ從二條樣御意幷被下物御座候者、一端退き、重而罷出拜戴可仕候。

一、重而御奏者番罷出挨拶之上、御大廣間二之間ゟ誘引仕、御茶・たばこ盆出之、追付御料理之挨拶仕、二汁五菜之御料理、新番頭・御步頭之内相伴に而指出、御料理之内御家老役罷出及挨拶、其後組頭罷出、御意之趣可申述候。御茶請・御濃茶後、御菓子迄新番給事に而段々指出可申候。

一、右相濟、追付御小書院ゟ御前御出被遊候上、御奏者番瀧之御間迄誘引、夫より御前ゟ年寄中誘引に而御使者罷出、御直答被仰述、相濟御使者ゟ御意有之、年寄中之内御取合申上、

退去之節御同間之内少御迨可有御座哉。

但、若御直答無御座候者、御家老役之内罷出申述に而可有御座候。且御内用之御口上御答者、御用人罷出申述に而可有御座候。

一、勝千代様より之御答、御幼少に付前田修理罷出申述に而可有御座候。

一、鷲之御杉戸之外詰人、定番頭以下御歩頭以上七・八人相詰可申候事。

但、御奏者番者右御杉戸之内に相詰可申候。

一、實檢之間御番人、五人計相詰可申候。

一、矢天井之間詰人、御使番・御小將横目幷御射手三・四人相詰可申事。

一、竹之御間御廊下先、手水手拭指出可申候事。

一、頭分以上其外携候人々、都而布上下着用之事。

御作事奉行　一人　　內作事奉行　一人　　割場奉行　一人

御醫者　一人　　坊主頭　一人

右人々爲御用相詰可申候。

一、御横目所々見廻指引可仕候事。

一、御使者退出之節年寄中・御家老役罷出及挨拶、退き、御奏者番掛り之組頭、最前誘引之

御大小將階下ゟ送り可申事。

一、御使者ゟ被下物御座候者、退出以後、旅宿迄御大小將を以被下に而可有御座候。

右二條樣より御用人御使者有之候節之振等を以奉伺候事。

七月四日　　山口清太夫

津田左近右衞門

右御用番左京殿ゟ相達、御同人より被入御覽候處、伺之通り被仰出候段、六日に左京殿被仰聞、御使者登城當十一日与可相心得旨も被仰聞、且右御作法書當番之御橫目ゟ御渡、於御橫目所夫々披見申談有之候事。

七月六日。石川郡土清水の焔硝調合所より出火す。

〔政隣記〕

七月六日朝五時過、天德院門前出火与、定火消邸御寺相圖之太鼓打、火勢も强見え候處、右火事者土淸水焔硝藏圍之內炮藥調合所より出火、五間に二十間計燒失、四時前鎮火之事。

但、定火消罷越防留之、尤御使番御橫目中も罷越候事。

附、中央より上之方迄燒、下之方者少焦色附候迄に付、加修理候者可御用立与云々。柱共も別條無之、上之方焦候迄之由也。

自分は津田政隣

七月十一日。二條治孝の使者藤木右衛門金澤城に登る。

〔政隣記〕

七月十一日二條様御使者藤木右衛門、四時過登城之筈に付、右御用懸り一統五半時揃に候處、四時過御間圍等宜候旨御横目中申聞に付、追付登城有之候様に与、御馳走方御小將中迄以紙面申達候處、無程右衛門登城に付、於虎之間御奏者番三田村紋左衛門御口上承之、御內用之御口上者御用人仙石兵馬承之、退候上山口清太夫・自分出挨拶、追付家老共等懸御目候旨等申述。畢而年寄中・御家老中一切に被出挨拶、重而年寄中被罷出、御意之趣幷被下物之儀御扇子十本充包之也。年寄中八家より右衛門旅宿江使者出之、右衛門家來より引渡候儀等前々之通。尤爲御禮各右旅宿に被相勤候。土佐守殿等所勞に而登城無之人々者、名代に甲斐守殿等改而被出、御意等拜聽有之、御禮者御使者充所之以紙面被申上候事。尤人別紙面也。右衛門演述拜聽有之、退去。夫より御奏者番石野雅樂助罷出、御大廣間二之間江誘引、御たばこ盆出之、雅樂助罷出、山口・自分替々見計時々出挨拶等之事。

追付料理進候趣申演、夫より御料理出之。其節相伴御歩頭前田清八。且山口・自分者二之間敷居之內江出在之、御かよひ指引曁御使者江時々挨拶等致し、御家老前田兵部殿者御食替り御汁替之間に被出挨拶、御酒一篇濟候而、御使山口相勤御意之趣演述、相伴清八湯畢而挨拶仕、御勝手寛々被給候様被申候与申述、江退。夫より後御菓子迄段々相濟、前田權佐殿被出、少々風氣に付直答に不被及段演述、御返答申述退。夫より前田修理殿被出、勝千代様御幼少に付御直答無

之趣演述之上、御返答申述退。夫より仙石兵馬罷出、御內用御口上趣相達候處、勝手方役人共江申渡、追而被及御答候段演述。夫より山口等出候處、御料理等之御禮（山口御次江罷越、近習頭を以申上。）御申聞退出。

右之外委曲者御作法書之通に候事。

但、御間拜見仕度段願之趣、御馳走方御小將申聞に付、其段御用番左京殿江相達、則伺之上御小書院迄爲致拜見候樣被仰聞候に付、御料理後御返答之間に、三田村紋左衞門・山口・自分・御橫目松平牛兵衞同道、拜見爲致候事。

右八時過相濟。

一、御使者退出後、旅宿江御大小將篠嶋舍人御使に而御意、幷白銀五枚・曝布二匹御目錄を以被下之、且又上宰領江金二百疋被下之、手目錄舍人持參、右衞門江迄渡之。京都より之持參人者宿繼人足、御城江は割場附小者に付、持參人江之被下方者無之。

一、御口上左之通、但手扣之寫也。

左府殿より中將樣江

秋著之節彌御安泰珍重思召候。此御方何之御障茂無御座候。且今度御內々御使被指向候に付、爲時候御見廻御目錄之通被爲贈之候。

七　月

左府殿より勝千代様・法梁院様・夙君様江

秋暑之節彌御安泰珍重思召候。此御方何之御障も無御座候。且今度御内々御使被差向候に付、時候御見舞被仰入候。

七　月　　　　　　　　　　　　御　使　藤　木　右　衛　門

大納言殿より中將様江

秋暑之節彌御安泰珍重思召候。此御方何之御障も無御座候。且今度御内々御使被指向候に付、爲時候御見舞御目錄之通被爲贈之候。

七　月　　　　　　　　　　　　御　使　藤　木　右　衛　門

大納言殿より勝千代様・法梁院様・夙君様江

秋暑之節御安泰珍重思召候。此御方何之御障も無御座候。且今度御内々御使被差向候に付、時候御見舞被仰入候。

七　月　　　　　　　　　　　　御　使　藤　木　右　衛　門

左府殿より

御　机　一　脚

塩　鶴　一　折
大納言殿より
御衝立　一　基
塩　鴨　一　折
右御口上御目錄者、前記之通御奏者番取次上之、左之覺書を從右衞門御馳走方御小將迄就指出候、主附役所江取立、御次江上之。
御　机　塩　鶴
右者從院御所二條樣江御拜領之御品。
塩　鴨
右者從院御所大納言樣江御拜領之御品。
御衝立
右者從中宮御所大納言樣江御拜領之御品。
一、御用人仙石兵馬取次候御内用御口上手扣之寫左之通。
此御方御勝手御不如意之儀者從來之御事、就右而者厚御由緒を以、毎々御賴等之儀被仰入、其節之御懇篤之御取扱被成進、不淺御大慶被成候。尤毎歳御助成米御贈進之儀者、從來御厚

意之御趣意を以、毎歳不相替御贈進之御事に而、於此御方者御家領御同様、諸事御辨備之御手當に相成、不淺御滿悅被成候。然處天明火災御類燒、引續間もなく寛政十一年御自火に而、御殿向者不申及、御調度類迄悉御燒失、猶更必至之御指支に相成、其餘吉凶御物入等折惡敷相續、誠に至極之御窮迫に付、去る文化五年鈴木縫殿爲御使共御表江被差向候節、段々御賴被仰入、每歲被進候御助成米、去る巳年より來る酉年迄五ヶ年之間御束に而御贈進之儀御領掌被成進、卽今御窮迫御凌方相付、誠に不一形御懇切之御次第ニ深御滿悅不斜思召候。乍然全躰御困窮彌增候上之儀、猶又追々御難澁相嵩旣に御日用御運等迄御差支、實に御心痛之至、其段難被盡筆紙候。右之趣に付是迄公儀江御難澁被仰立、御借進金等之儀被成進候御儀も有之、旣に先年御借進金御返納御年限中、猶亦御難澁に付、格別之御沙汰を以、右御返納殘金被進切に相成、御返納に不及候旨被仰出も有之候上之儀に候得共、其儀をも不被顧先達而又々三千金御借進之儀被仰立候處、御時節極難被及御沙汰次第に御座候得共、猶亦再應被仰立候御趣意有之、漸五百金御借用、年濟御返納可被成被仰出、當時右御返納御年限中に御座候。尤前書通三千金御借進にも相成候者、又々假成御請方之御仕法も可有之候得共、何分少分之儀御仕法も難相立、左候迚不輕御事柄に付、此上押而被仰上候儀も難相成、何れ御年限中之御逼迫中ながら、無御據御默止被成候はね者不相成御時宜に御座候。右躰公儀迄も御難澁之

儀內外被及御顯露候上之儀、於此上者御朝勤御斷被成候外者御勘考も無御座、誠々至々極々之御困窮難及言語次第に御座候。就右其方様より被進候御助成米、未御繰上御年限中之儀、殊に當時嚴敷御儉約中之御事、可相成丈は御賴筋も不被仰入、右御年限相濟候迄聊之儀も御賴無之筈勿論之御事に候得共、實々被成方も無之候故、重疊被背御本意候御事に候得共、今度別紙之通厚く御賴被仰入度候。右御領掌も被成進候者、此上御朝勤等も無御滯、從來御逼迫御凌方も相付、御內外不大形御安堵之至、深御大慶被成候間、何分此段格別に御配慮被成進候樣、偏に御賴被仰入候事。

七　月

右別紙之寫左之通

覺

一、御助成米去る巳年依御賴、來る酉年迄五ヶ年分御束被進、當時御年限中に御座候。然處今度御賴之御趣意者、來る戌年より可被進御助成米を、來年春ゟ御繰上にて、引續三ヶ年中爲御合力、每歲御繰越御贈進御賴被成度候事。

但、右之趣御領掌於進候者、來年御繰越之通分者、子年御贈進被止御立用有之、翌丑年より常式之通、年々御贈進候儀御賴被仰入候事。

右兩通之外に御難澁御趣意之御口上申述も有之候事。

七月十一日。江戸詰の諸士に金子を貸附す。

〔江戸御留守諸事留帳〕

七月十一日

一、左之通於席渡之。

中村左兵衛江

此表米價は左而已高直に無之候へ共、諸物高毛至極に而、詰人一統及難澁候付、先達而御手前初御救方之儀被申聞、金澤表へ申遣候處、格別米價等高直与申に而も無之、當時御勝手御指支に候へば何分遂勘辨取續候樣申來、則其段申渡候通に候。然處右之通諸物高直等に而、一統難澁至極仕、當盆前諸拂嘗取續方も指支候趣、御手前初紙面被出候付、前段申來候上は此表切に而難遂詮議譯段々申渡候通に候へ共、幾重にも指支之趣追々被申聞候。最早往反之日間も無之、格別之取計を以一人扶持に金壹歩二朱充御貸渡之儀承届候。當時御逼迫之内右之通取計申渡候條、何分遂勘辨當九月可致返上候。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。且又諸頭中へ演述、組等之人々江申聞候樣

本年六月十四日の條參照

可被申談候事。

申 七 月

七月十三日。二條治孝の請に應じて助成米を繰上げ贈進すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

一、昨十三日二條樣御使者藤木右衞門宿〈江前記之通菅波屋幸助宅也。〉御用人仙石兵馬被遣、御內々御願之通、御助成米繰上被進候儀御領掌之御返答相濟。依之明後十六日歸發之筈に候處、乍自由歸發前之御料理、明十五日晝頂戴仕度旨、御馳走方御小將中迄申聞に付、其通夫々申談候段、山崎勘左衞門等より届有之。

附、從來常式御助成米者、一ヶ年米五百俵充御贈進に候事。

七月十七日。金澤尾張町の町人越中屋喜助自家に放火す。

〔政隣記〕

七月十七日今朝六時過、尾張町〈蕓商賣人〉越中屋喜助方より出火、隣家高尾屋八郎右衞門家過半燒失に而、同半時比鎮火不殘燒失。

文化七年六月二日及び本年四月廿七日の條參照

右に付年寄衆等を始追々登城有之候事。

〔政隣記〕

今朝之火災火本越中屋喜助儀、高借銀等多、家財に離れ不申而者、銀主等江對し一圓申譯無之趣共就有之候、喜助儀自家に致附火候由風說等有之。今日町奉行御用番淺加三左衞門於宅、喜助手前遂吟味候得共不分明に付、先町會所縮所江入置候由云々。

附、再吟味之節高借銀等に而致附火候段及白狀令禁牢。

七月十八日。足輕小森彥三郎流刑に處せらる。

〔政隣記〕

今月十八日於公事場、割場附足輕小森彥三郎江落着被仰出之趣申渡有之、割場江も左之通來狀之由承に付記之。

割場附足輕　小森彥三郎

越中五ヶ山之內江流刑

右之者先達而於公事場禁牢申付置、遂吟味致言上候之處、彥三郞儀坂井斧吉申分与者違有之、決着不致候得共、元來彥三郎儀螢費度旨申掛候より事起、件之首尾に及候族不屆至極に付、右之通流刑被仰付候段、昨日被仰渡、其段申渡、配所出來迄牢屋に指置候條、可被得其意候、以上。

申七月十八日

永原久兵衛
奥野左膳
伊藤内膳
中川清六郎

割場奉行衆中

七月。金澤城松坂御門を公用にあらずして通行することを禁ず。

〔御觸拔書〕

付札、御横目ゟ

松坂御門往來之儀者、急切御用之節者格別、常に役所等ゟ罷出候節茂、宅手寄に而致往來候人々茂有之躰に相聞え候。右御門往來之儀、近年御改茂有之候處、猥に相通り候儀に而者無之筈に候。此度拙者迄御噂之趣も有之候に付、改而申渡候條、右御門致往來候人々、嚴重に相心得、御用之外一切往來有之間敷候。是以後猥に往來有之人々は、可相糺候條、此段夫々可被申談候事。

右之通安永八年申渡候處、近く猥に相成候躰に相聞え候條、右御門往來仕候人々、嚴重に相心得可申候。此段夫々可被申談候事。

七月。能登口郡に用水溜池を築造せん爲に費用の下附を藩に請願す。

〔諸書物留〕

羽咋・鹿嶋兩御郡之儀、御田地用水至而乏、無類之旱損地に而、先年より有來之堤溜井に而は中々行屆不申、累年凶作仕、別而寛政年中之頃度々過分之御償米被仰付候得共、打續作物不熟に付百姓困窮に逼、自然与農業不働に相成、段々御僉議之上、寛政十一年以來去々午年迄御米御渡、暨御郡中より致加入銀、新堤出來、村方も格別に相働、人足等勤過多仕、御郡中に而百ヶ所餘之新堤致出來、近年之所耕作勵方大に宜出情仕儀に御座候。既に用水乏儀者、旱損之防迄に而も無御座、蒸氣色之折抔、冷水を流懸地氣を涼候得ば、にち付虫指を遁申儀に御座候所、用水乏故右樣之駈引難成候而、暑氣强節は蒸沸、彌增にち付虫指に相成候得共、一旦落捨候而は跡ゟ引申水無御座、指當り苗枯痛候に付、不及是非數日用水當込置候儀、勿論乾涸之駈引に而、養方にも相成申儀に御座候處、右躰之趣に付培物之利目も薄、取劣仕候。尤右新堤被仰付候以前に競候而は、當時用水手當餘程出來、一通り之旱損は凌申所御座候得共、全躰川懸常水無御座貯水を以、御田地養申儀に御座候得ば、永旱に至候而は未行屆、當年抔多分前月中旬より用水及手切、立毛枯痛申候。旱魃之儀は天災には御座候得共、

堤を築冬中より水貯置候得ば一先相凌申趣に而、用水手當丈夫に相成、百姓出作方格別に存込相勤申儀に御座候間、當年より御米五百石宛七年程毎歲被仰付被下候はゞ、最前御仕法之通御郡中より加入銀いたし、追々新堤出來仕度。御聞届之上は、年毎御普請可被仰付ヶ所相撰、御入用圖巨細書上、受御指圖爲取懸、出來次第村々より米銀請取、帳面取揃、一ヶ年切之御渡米御郡加入銀、御改作所に而遂勘定、只今迄之通可仕候。御時節柄私共において奉恐入、申上兼候得共、耕作第一之手當用水不足之儀に御座候故、無據奉願候間、幾重にも御僉議之上、御米七ヶ年程毎歲御渡、新堤出來之儀願之通被仰付可被下候、以上。

文化九年七月

本江村　惣　助

武部村　四郎太夫

堀松村　平　藏

本江村　六郎右衞門

御改作御奉行所

八月十日。豆腐役を改定したるを以て營業者の人名書上を命ず。

〔御郡典〕

此間得御意申候豆腐役之儀、於金澤表御詮議御取極之趣、番代より左之通申越候。

米征は米性

一、壹軒に付拾匁宛　町　續
一、同斷六匁　宿方、但宿並村・宿續村同樣
一、同斷一匁五分　里　方
〆
右之通に御座候間、商賣人名書之上に何匁与御書記、組切帳面に相調、當廿日切扣共二冊宛御指出可被成候、以上。

八月十日　本江惣助

口郡組々裁許中充

八月廿八日。百姓の納入する米質及び俵裝等を粗惡ならざらしむべきを告ぐ。

〔司農典〕

御藏米を始町藏給人米、米征・升目・俵拵等無油斷遂吟味候儀は前々申渡、天明年中以來度々申渡置候處、納方心得違之所々多有之躰に付、升目・米征・俵拵不宜分も有之。給人米之儀は同所に而藏宿に寄直段高下有之儀者、必定納方不行届、剩藏宿之儀者何歟百姓申族も有之哉に候。右等は甚不埒之儀に相成候。仍而御藏米は勿論、給人米に至迄以後何時に不寄當場より

役人指出、納方等遂吟味、若心得違も於有之は、納方役人共嚴重申付可有之候。尤百姓江も、米征等之儀急度相心得候樣、改作奉行江申渡候條、被得其意、此段藏宿共江可被申渡候、以上。

申八月廿八日　　御算用場

高田彌左衞門殿

中村逸角殿

右之通申來候條、得其意、急度可申渡候、以上。

中村逸角

能州四郡十村中

九月四日。石川郡泉村頭振市左衞門等梟首の刑に處せらる。

〔政隣記〕

今月四日於上口町外、御刑法拷札之文如左。

上口は京都に面する金澤郊外

梟首　　石川郡泉村頭振　市左衞門

此者能州之商人江膳家具類口入致し可賣遣旨申、過分之家具を預り罷在、人江賴質に入、右商人江代銀不遣、殊に彼者より銀子を借受不及返濟、右に付支配奉行人より申渡之趣有之處、

及違背、奉行を輕しめ、依之遂糺明候處、我意を以人を惡敷申成し、重々不屆に付如此申付者也。

九月四日

梟首　　　　　　　水嶋武太夫

此者於主家に唐津物等過分に盜出賣拂、其外主家用事を申僞、焚炭を外より取受賣拂、右賊可顯躰に付、馴染合之女召連欠落いたし、追手之者に被捕候上、夜中逃去、他國江罷越、作り名を以宅江路銀を取に越候儀有之、重而召捕遂糺明候節、罪なき者江申懸等致し、重々不屆に付如斯申付者也。

九月四日

附、右武太夫本多房州家來足輕也。

九月十日。前田治脩夫人、齊廣夫人と共に平尾邸に赴く。

〔江戸御留守諸事留帳〕

九月十一日

一、法梁院樣・御前樣昨日御下屋敷江御出に付、今日大村武次郎・神戸加平相招、御樣子相尋候處、御途中何之御障も無御座、益御機嫌能被成御座候段、兩人申聞候事。

九月十四日。前田齊廣、齊泰に鞍置馬等を贈る。

〔政隣記〕

九月十四日御家老役津田玄蕃を以、御馬乘口高桑善五郎。鹿毛駿八歳尺五歩、雲州龜谷出生。御鞍置、勝千代樣江被進之。御鎗等御鎗三筋、御薙刀一振。御近習御用戸田與一郎俗御用部屋与言。屋中務等同勤也。闕を以被進之。

〔政隣記〕

前記十四日有之候通、同日勝千代樣江御馬等被進之候。御使玄蕃。御目見被仰付、御手自御熨斗鮑被下之、御時服二拜領。與一郎江者白銀二枚拜領被仰付。

一、御馬拵に而御馬奉行神尾昌左衞門服紗小袖・布上下着用。指副、幷御中間小頭石浦次兵衞布上下着用。御馬に指續罷越。御中間三人、內一人手替蠅拂腰に指す。沓籠持小者・小遣小者一人充。

御中間武右衞門　御中間小頭石浦次兵衞　若黨一人　草履取

御馬　御馬奉行　挾箱

御中間伊左衞門　手替六兵衞　小遣小者　神尾昌左衞門

右之通行列に而、橋爪御厩より三之御丸御堀端通、御廣式切手御門江罷越、同所下馬に而玄蕃殿待合候事。

但、享保十二年九月朔日勝丸樣江被進候節者、御城附與力御馬之先江相立罷越候得共、此

度者共儀無之。

一、御使玄蕃殿被勤候内に、右於下馬御馬下洗爲致候。切手御門外に而御中間より小頭御馬受取牽入、御廣式御門外に而小頭より御馬奉行御馬を受取、牽入候而勝千代樣御前江牽罷出、御手綱御頂戴（御名代甲斐守）。畢而如最前、御馬奉行より小頭江相渡、小頭より御中間江渡之。

但、御馬奉行詰所切手御門之内に兼而搆有之、刀者御門外に而若黨に爲持置候事。

一、勝千代樣御廣式御玄關江御出被成御座候得共、前記之通御名代甲斐守被勤之候に付、御廣式御門内に扣罷在、指續玄蕃幷中村宗兵衞扣罷在、御馬牽向候時分相進、御手綱御頂戴之御名代被勤之。其節奉行より御手綱宗兵衞江渡之、宗兵衞より甲斐守江渡之、御頂戴之式有之。

但、御馬具附玄蕃殿より御祐筆江被渡之、淸書調持參之事。

一、同日沼保鹿毛之御馬、爲御召替勝千代樣江被進之。越中新川郡沼保村出生、三歲、二寸五分、乘口明石數右衞門。

但、右御馬博勞坂井英助江御預に付、十六日引揚候而橋爪御厩江建。

一、神尾昌左衞門江綿三把御目錄、御中間小頭江金百疋、御中間三人幷沓籠持小遣都合五人江鳥目三貫文被下之。手目錄神尾受取來、橋爪御厩に而頂戴爲致候事。

〔政隣記〕

前記十四日・十七日記に有之候通、今般勝千代樣ゟ被進候御馬毛色、從御先代駿被進候御例に候處、當時越前迄求に被遣候得共無之に付、醫平木半次ゟ御內御用之趣を以、於播州明石に右鹿毛駿見當り、同所五郎与申者より、代金四兩に御買上に相成牽歸候事。

但、存之外不惡御馬与云々。且越前迄先達而罷越候節之雜用金三兩、重而播州迄罷越候節之雜用、半次宿料、道中人馬賃錢等に七兩、都合金十一兩に而相濟候由云々。

附、先達而越前ゟも半次罷越候事。

九月十五日。石川郡柴原村の田地より奇石を出す。

〔政隣記〕

今月十五日石川郡柴原村農人白丸之何某田畠之內、數年五穀不滿作之地有之、下男清助与いふ者、何れにも此所之土地に砂石多く交り有故なるべし、深掘耕しなば穀の實りも宜かるべしと深く掘しに、土中に一大石あり。掘揚て水を濺ぎ見れば石面に墨色の文字あり。

大神宮

水にて洗へ共几落る事なし。依而此圖を摸して御算用場ゟ出之。

九月二十日。茶問屋を定め口錢を徵すべきことを告ぐ。

金澤博勞町　圓道　藤右衛門
同　片　町　堂後屋　三郎右衛門
同　石浦町　鍔　屋　藤　五　郎
同　石引町　柳橋屋　傳　兵　衛

右之者共、御領國中出來煎茶、幷他國より入茶等、近年次第高直に相成候に付、遂詮議候處、他國出入共縮方無之段等、委曲承糺候に付、右四人之者共今般問屋申付、出來茶幷他國出入共相調理候樣申渡候間、以來問屋改を請致賣買候樣、夫々可被申渡候。

一、問屋之儀、於金澤石浦町鍔屋藤五郎方に而相建候。能美郡之分は小松に而相建候。能・越問屋相建候ヶ所之儀は、追而可申渡候。尤右四人之者幷下役之者、時々相廻、員數等相調理、共茶に印を附可申筈に候。右改相洩候條之儀は、夫々縮方追而可申渡候。

一、能美郡等、是迄茶師共へ仕入方致置候分は、是迄之通に而、猶更茶株相增候樣申渡候。

一、右之通申渡候に付而は、都而小賣方直段引賣弘候樣申渡候條、小賣人等嚴重相心得候樣可被申渡候。尤他國より入茶之分は、五十斤入一本に付一匁宛之口錢、茶師共より取立候樣申渡候條、此段も可被申渡置候。

右之趣今般遂詮議、御勝手方年寄中へ相達、承屆、茶問屋申渡候條、此段夫々可被申渡候、以上。

九月廿日　　　　御算用場

九月廿二日。前田齊泰金澤觀音院に宮參を行ふ。

〔政隣記〕

當九月廿二日卯辰觀音院江勝千代樣御宮參之節、御城表年寄中初御歩並迄、服紗小袖・布上下着用之事。

一、御廣式江罷出候面々、熨斗目・布上下着用、御歩並服紗小袖・布上下着用之事。

以　上

勝千代樣御宮參之節、御道筋警固足輕辻々指置、參懸候者は十五歲以下之者は勿論、十五歲以上之者に而も御道之障に不罷成樣、作法宜敷指置可申事。

一、御道筋町方外より參候者に而も、女之分、且又十五歲以下子共之分は、見せ之內に作法宜仕指置可申事。

右之通被得其意、組・支配家來末々迄可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、夫々申渡候樣是又可被申聞候事。

八　月

付札、御横目ゟ

勝千代様御宮參之節、観音院近邊居宅有之人々、坂中より見通候家者、御社參之時分は戸・障子等建置可申事。

右之通彼邊に居宅有之面々ゟ可申談候事。

八　月

〔政隣記〕

九月廿二日、今朝六半時御供揃に而五つ半時過御出。勝千代様御宮參、卯辰長谷観音ゟ御參詣、御戻奥村助右衛門宅ゟ御立寄、八半時前御廣式ゟ御歸。

〔政隣記〕

一、今廿二日御宮參之節、観音寶前ゟ御最花銀十五枚・昆布一箱・御樽一荷・御目錄被備之。

一、観音院ゟ被下物、紗綾二卷・包昆布・御目錄。

一、御作法書之内に有之候助右衛門先達而伺置候献上物与者、干鯛一箱・御樽代金三百疋・目錄、則六半時熨斗目布上下着持參、於松之間二之間御近習頭を以献上之事。

一、同斷助右衛門ゟ被下候御時服數は三つ之事。

但、外に綿十把被下之。

御宮參之節於觀音院御作法

一、觀音院ゟ被爲入候節、觀音院儀坂半愛染院裏門之前に扣罷在候處、御時宜役之內觀音院ゟ披露仕、御先ゟ被參候樣、右御時宜役申達候者、御先ゟ罷越、勝手之方相扣可罷在事。

一、甲斐守幷關屋中務等內、御附中村宗兵衞等、本堂階之上御左右ゟ御迎に罷出、御拜之節本堂に伺公之事。

一、御拜相濟、書院ゟ被爲入候以後、御廣式役人指圖次第、觀音院昆布三方持參、御抱守ゟ相渡差上之。畢而觀音院中村宗兵衞等內誘引、御目通ゟ罷出、甲斐守等伺公、被下物御目錄宗兵衞等內相渡之、御宮參に付被下候旨甲斐守申述、御禮之趣同人申上退去之事。

一、右相濟本堂より御戾被遊、其節宗兵衞等幷御側小將初夫々罷出、觀音院も最前罷出候所ゟ罷出可申事。

一、觀音院ゟ被下物相濟次第、甲斐守・中務等內、御先に助右衞門宅ゟ罷越候事。

一、觀音院ゟ被遣候御最花等、朝之內御鎖口番御徒持參、宗兵衞等ゟ相渡可申事。

一、御先詰之人々之外、寺社奉行・町奉行・御作事奉行觀音院勝手ゟ相詰可罷在候事。

但、熨斗目・布上下着用之事。

一、神酒・洗米等其儘飾置、御歸以後御札等一所に寺社奉行御用番迄以使僧指上、右奉行より宗兵衛等江可相達候事。

以上

九月廿二日卯辰觀音院江勝千代樣御宮參被遊、御戻奥村助右衛門宅江

御立寄之節次第書

一、御宮參御供揃之時刻承合、助右衛門儀致登城、御立寄之儀に付先達而相窺置により、献上物御近習頭之內を以差上之、御禮等申上。夫より御廣式江罷出、中村宗兵衛等內を以、奉伺御機嫌罷歸可申事。

一、甲斐守儀御廣式江罷出奉伺御機嫌、御先江觀音院江罷越可申候事。

一、勝千代樣觀音院より御歸、尾坂之下江被爲入候御左右承り、助右衛門熨斗目・長袴、左京熨斗目・半袴着用、兩人共助右衛門宅門前町家之前迄御迎に可罷出候事。

一、御横目一人御先に相詰、助右衛門宅江被爲入候節、門內蹲踞仕、松原牛兵衛申談、御供之人々罷在候所等夫々可申談候事。

一、助右衛門等罷出候邊に而、御輿暫御猶豫、助右衛門・左京少罷出、御機嫌能御宮參相濟、恐悅奉存旨申上候事。

一、甲斐守幷關屋中務等內、宗兵衞等內、御側小將等、玄關鏡板ゟ御迎に罷出、御抱守之內より御駕籠戶を開可申候事。

但、年寄女中等は式臺迄御迎に罷出候樣可申談事。

一、御輿者玄關板之際敷附之上ゟ横に付可申候事。

但、御先立甲斐守相勤可申候。御縮之內御先立者宗兵衞等內可相勤候。尤御戾之節も同斷。

一、御鎗等玄關前に建なり之事。

一、御大小者御先詰之御側小將受取可申事。

一、御輿より御出、先御休息之間ゟ被爲入候上、上段之間ゟ被爲入、御着座次第助右衞門御熨斗三方持參指上候處、御熨斗等助右衞門ゟ被下之、致頂戴候事。

一、右御熨斗三方御側小將引之、助右衞門献上之御太刀、中務等內披露御禮申上、御太刀御表小將引之。

但、助右衞門献上之干鯛箱者、上段次之間緣頰之方ゟ指置可申候事。

一、左京より献上之干鯛箱、宗兵衞等內ゟ渡上之。

一、左京儀、中務等內披露に而御禮申上退去。

一、奥村貞五郎儀相詰罷在候付、中務等内誘引に而御目見可被仰付候事。

一、右畢而助右衛門ゟ被下候御時服等、御表小將持出、甲斐守・修理伺公、於御目通甲斐守會釋仕り、御祝被成被下之候旨演述。助右衛門臺之際ゟ寄頂戴之、退御禮申上候節、甲斐守御取合仕、御表小將引之。

付札、御時服等飾付様は見分之上相極可申事。

右相濟、左京ゟ被下候御卷物、御表小將持出、於御目通甲斐守前段之通申演頂戴之、御取合等右同斷。

一、右相濟御祝之御雜煮・御吸物・御酒指上、御給事御側小將可相勤候事。

一、御吸物之上助右衛門ゟ御盃可被下旨、修理挨拶に而助右衛門罷出頂戴仕、御肴御手自被下之、中務等御指引可仕候。御肴頂戴、御三方之方ゟ復座仕候處ゟ、修理御刀持參、御立寄被成候に付被遣候段、演述、頂戴退候而勝手之方屏風之外に而帶し、重而罷出御禮申上、修理御取合申上、致退出御腰物御抱守之内ゟ相渡置、重而罷出、御盃加之、勝手之方ゟ退候處、修理罷越、御盃上可申旨會釋仕候上、御盃同人ゟ相渡指上之、追付罷出御禮申上候事。

一、右相濟、助右衛門より御内々献上之御慰之品、宗兵衛等ゟ相渡指上可申事。

一、於勝手助右衛門家老用人ゟ被下物御目錄、中務等内相渡、甲斐守・修理内も罷在會釋可

仕候事。

一、右被下物御禮、助右衛門より甲斐守等內を以可申上候事。

一、御歸被遊候刻、式臺續勝手之方に家老共指置、暫御立留り被遊、御通り懸之御目見被仰付、披露中務等內相勤可申事。

一、門內に見計用人指置、御目見被仰付、披露御時宜役相勤可申事。

一、御歸被遊候時分、最前御迎に罷出候所迄、助右衛門・左京幷貞五郎儀も罷出可申事。

但、甲斐守等最前之通玄關鏡板ゟ罷出可申候。尤御橫目も最前之通之事。

一、御廣式ゟ御歸被遊候以後、助右衛門儀先御廣式ゟ參上仕御禮申上、直に登城、御近習頭之內を以段々之御禮可申上候事。

九月廿二日。遠所に出役する諸士及び金澤に出役する遠所奉行の心得を諭す。

〔政隣記〕

付札、定番頭ゟ

御領國中ゟ爲御用出役之人々、御定之宿料等迄に而者致不足候に付、其町・在之役として餘荷錢相渡候由。且右に付而者其村々等雜費も有之、畢竟其所之諸萬雜に打込候躰。尤公役に

付而之入用之儀者、左様にも可有之候得共、右に事寄無謂費も有之躰。且出役之中に茂御用儀を申立、其所之費も不厭様之族も有之哉に相聞え候に付、以來諸雜用之分、其所之村役人等より帳面に仕立、出役人迄指出候様申渡候間、遠所江罷越候人々右帳面取立、其內難心得入用等書出候者可及穿鑿候。尤罷歸候上、右帳面御算用場江可指出候。

一、遠所江罷出候人々、勤向之様子別紙案帳之通相認、村役人より取立候諸雜用帳与一所に御算用場江可指出候。右勤方帳者御算用場江取立候上、御勝手方席江指出候筈に候。

但、右兩條帳面之儀者來正月より可指出候。

一、遠所奉行等金澤表江出役之節、彼是長逗留に相成候様之儀も有之躰。左候而者支配所之御縮方も如何に候間、御用相濟次第早速可致歸邑候。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江も相達候様可被申聞候事。

右之通一統可被申談候事。

申　九　月

別紙御用番安房守殿御渡、御一統江私より可申談旨被仰聞候條、則御渡之覺書寫一通、幷案帳寫一冊指進申候。御承知被成、御同役・御同席方等御傳達、御組・御支配御申談可被成候。

且又御組等之内裁許有之面々は、其支配ゟ茂不相洩相達候樣御申談可被成候。御廻達、落着より御返可被成候、以上。

九月二十二日　　　　青木與右衛門

九月廿三日。前田齊泰宮參を終りたるを以て老臣に物を賜ふ。

〔金龍公記史料〕

九月廿三日。以勝千代君宮參畢。賜年寄中以下物有差。

九月廿六日。前田齊泰宮參を終りたるを以て能を催す。

〔政隣記〕

九月廿六日快晴、今日御能被遊候間拜見可被仰付旨被仰出候條、朝六時過より可罷出旨、同役夫々申談候樣、與横目津田彌三郎・今井左太夫より、同役筆頭長瀨五郎右衛門迄一昨廿四日來狀之旨廻狀に付、六時頃出宅罷出、同役揃候段彌三郎ゟ申達。

但、上下着用之儀も申來候事。

右御能者今般御宮參被爲濟候御祝儀御能。依之人持・諸頭・御役御免之人々共夫々拜見被仰付、夫々筆頭迄申來候儀同斷。隱居之面々者拜見不被仰付。御次廻者一統に而、隱居之面々幷新番組以上子弟ゟも拜見被仰付。

一、年寄中・御家老中等者子弟共拜見被仰付。御中入之節御吸物鯛切身・御酒・御取肴はへん、於席頂戴、子弟者於矢天井之間、二園に而被下之、給事坊主。御次廻一統江も右御吸物・御酒・御取肴。頭分以上江は卷鯣、平士等江は短尺鯣被下之。

一、御表向年寄中初一統服紗小袖・上下、御次廻りは頭分以上・御能掛り者熨斗目、其外者一統服紗小袖・上下着用。

一、御番組左之通、御舞臺一統素袍着用、五時頃御能初、御使人見吉左衞門長袴着用勤之。床机御免之御使茂同人勤之。御中入八時頃之處、同半時過初り、七時過相濟。御次江罷出、津田彌三郎等を以各御禮申上退出。

翁　高砂　良之助　田村　忠藏　羽衣　小三郎　鷺　御

祝言岩船　鐵次郎

末廣　幸助　福之神　次郎吉

九月。租米皆濟以前に賣却する新米の取締を嚴にせしむ。

〔司農典〕

新米取締方之儀者、前々申渡候通嚴重相守可申候。都而上納銀等之儀者、十村指紙を以爲賣拂申儀に候得共、村々若不相應之指紙米高有之躰及承候。皆濟以前に而も、作德米に相當り

澤埼等は改作奉行

候分者指紙を以爲賣拂候儀も前々有之候得共、右樣之所に甚紛敷儀有之。僞米等有之村々者、限月に至り不致返濟候得者、重而借用等指支候に付、御收納も引欠致返濟、又は僞米を以御收納に振向候樣之族も有之哉に相聞得候。甚不埒之至り、ヶ樣之儀裁許手前に而不致穿鑿而者難成事に候條、當年より格別遂詮議、指紙出し候節委細承請、得与穿鑿之上、夫銀・打銀等明白に相譯り候品々之外者、指紙出申間敷、山方稼多米拂底之村々者、稼之品代銀も有之儀に候得者、是等者別而裁許心得も可有之事に候。孰れも不穿鑿之儀無之樣、嚴重相心得可申候。

申九月　澤崎源太郎　吉田兵馬

右之趣改而申渡候條、得其意、請書付可指出候、以上。

諸郡御扶持人・十村中

九月。能登口郡の製鹽産額及び代價を上申す。

〔諸書物留〕

覺

一、一萬八千七百二十四俵　堀松村平藏組

一、九百七十三俵　本江村六郎右衛門組
一、四千四百九十七俵　三階村覺右衛門組
一、一萬千九百十八俵　鮾目村太郎次組
〆三萬六千百十二俵
內
二萬四千五百俵　御米一石に付九俵替
四千五百俵　同斷　十一俵替
七千百十二俵　同斷　十二俵替
〆
右當年組々出來塩之內、御米一石に付九俵替幷十一俵替等仕譯如斯御座候、以上。
文化九年九月
堀松村　平藏
本江村　六郎右衛門
三階村　覺右衛門
鮾目村　太郎次
山岸左門殿

十月廿七日。幕府前田齊廣に參覲の期を延べ、明年九月を以て出府すべきことを命ず。

〔江戸御留守諸事留帳〕

御奉書寫

御札令披見候。公方様・大納言様益御機嫌能被成御座恐悦旨尤候。將又參勤時節之儀、以使者被相伺候。及上聞候處、參勤時節被遊御用捨候。來年九月中可然參府由被仰出候條、可被存其趣候、恐々謹言。

十月廿七日

青山下野守忠裕
土井大炊守利厚
牧野備前守忠精
松平伊豆守信明

松平加賀守殿

〔三守御譜〕

十月、來年御參勤御時節御伺被成候處、來春御參勤御時節御用捨、來年九月中御參勤可被遊旨、廿八日老中奉書を以被仰渡、十一月八日此表へ到來。本文御參勤御用捨之儀、御國許御

仕置方の儀に付、御願筋に依て本文之通り也。

十月。諸役所入費の決算を遅滞せざらしむべきを命ず。

〔政隣記〕

付札、定番頭江

諸向御入用勘定方之儀、無謂及遅滞之分茂有之、御縮方相立不申候に付、向後諸手合共一ヶ年限り、當年分は翌年中に遂勘定、京・大坂詰人勘定は罷歸候其年中限遂勘定、出船等一作御用之分其年中可遂勘定候。若何と歟指支之筋有之、延引に相成候分は、其譯委曲紙面を以御勝手方席江可及届候。且又是迄相淀有之分は、諸書物等急速夫々取しらべ、御算用場江指出可遂勘定候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配江も不相洩様可被申聞候事。

右之通一統可被申談候事。

申十月

十一月四日。本郷邸地震により小破す。

〔江戸御留守諸事留帳〕

十一月四日

一、未の下刻地震に而大がね所指物落、明日役所相立候儀指支候間、假役所相渡候樣仕度旨馬場兼左衞門等より以紙面申聞候付、御作事奉行ゟ申渡候事。

同　五日

一、昨日之地震に而奥御納戸御土藏・御本宅御長屋腰瓦・御作事御門續土塀・追分同心小屋之土塀・猿樂御門續土塀損申候に付、先夜前夫々假に圍等仕置、御縮方不指支樣致し置申候。其外御土藏等少充損所御座候。猶又得与遂見分追而可相達旨、御作事奉行申聞候事。

一、大かね所さし物落候儀、遂見分候處、殊之外及大破危候付、跡より入候指物に候間、是迄之通爲入候而かすがいに而留置候はゞ、當分は可宜旨御作事奉行申聞候付、其通相心得候樣申渡。

十一月八日

一、此間之地震に而奥御納戸渡御土藏損所有之、内見え申所も御座候付、先假圍之儀御作事所へ申談仕候。尤御土藏内御道具等に相障申儀は無御座候。右御道具取除、内外よりとくと繕仕候付、御横目申談、今日夫々相濟候段、表御納戸奉行及達候事。

十一月六日。十村等の用ふる消防器具を華美にすることを禁ず。

〔筒井舊記〕
御郡方火事之節、十村共之内水旗之上に出し、幷柄茂塗り候而用ひ候躰相聞え候。目印鑓にも似寄候條、已來右出し等之儀可指止候。畢竟身分を取失候族、急度可相糺候得共、先是迄之儀者不及其沙汰候。以後之儀、是等之品にも不限、都而分限超過之族無之樣、嚴重被申渡、請書取立可被指出候、以上。

十一月六日　　　　御算用場

高田彌左衞門殿
中村逸角殿

右寫之通申來候條、得其意、以來本文之趣無違失樣可相心得候。尤右出しにも不限、都而火事道具目立候品不可用、少茂活成儀無之樣可相心得儀、役筋肝要に候。猶又御當節柄振合之儀、一統承知之通に候條、兎角超過之族有之候而者、畢竟不可然儀に候條、能々可有會得候。猶請書夫々可指出候、以上。

高田彌左衞門

能州四郡御扶持人・十村中

活は寛濶の義たるべし

十一月十一日。諸士に前田齊廣明年の參覲を九月に延期せられたること

を告ぐ。

〔政隣記〕

十一月七日、前月廿七日江戸發之早飛脚來着、來春御參勤御時節御伺之御使者佃源右衛門、同月十三日江戸着之趣を以、御使相勤候處、春御參勤御用捨、秋中御參府可被成旨之奉書渡り、今日到來之御様子に候得共、源右衛門儀同月廿九日江戸發出持參之趣に付、暫御隱密与云々。

〔政隣記〕

十一月十一日微陰、御用番甲斐守殿より一役連名之依御廻狀、頭分以上一統今朝五時過登城、於御大式臺御帳附、各席々等に扣罷在候處、四時過御大廣間御勝手に列居申談有之。御大廣間二之間ゟ年寄衆等御列座、甲斐守殿左之通御演述、覺書人持筆頭ゟ御渡、御退座。夫より御同間横於廊下、左之御横目役名付札物披見退出、御用番御宅ゟ相勤候事。

來年御參勤御時節御伺被成候處、御參勤御時節被遊御用捨、來年九月中可被成御參府由被仰出、難有御仕合被思召候。此段何茂ゟ可申聞旨御意候。

〔政隣記〕

竊に承、今般以來秋御參勤春御歸國之儀被仰込就有之候、向々之御役人中ゟ御進物金二十五

兩・卷物二つ充ヶ云々。尤御老中等ゟ者右員以上ヶ云々。

十一月十五日。前田齊廣その飼ふ所の鷹を觀る。

〔金龍公記史料〕

十一月十五日。觀鷹。乃出鷹十三据司鷹二十人。

十一月十五日。前田齊廣參覲の期を延べられたるを以て幕府に謝使を發せしむ。

〔金龍公記史料〕

十一月晦。謝延參覲期爲九月之使。組頭水越八郎右衞門。十五日發。是日至江戸。

十一月。御小將頭より米價下直なるを以て配下諸士の困難する事情を上申す。

〔言上幷内廻狀留〕

御家中之人々累年勝手向難澁に付、近年御借知茂被返下候へ共、元來過分之借銀高に罷在候人々多御座候而、御借知被返下候而茂、町方等返辨銀不指引に茂相成、町方之者近年取替銀等茂容易に不仕候故、御家中次第に困窮に相成、おのづから町方買懸銀も無是非相對を以延

引仕候族。商家に而者右損料に引合、諸色高料に茂商ひ申形に相成、御家中之人々は何分難難に相暮候而も、右に随ひ借銀多に相成、不得止事町會所仕送り相願申處江至候。其上仕送相願候際は、無據調達相賴候昨今之借銀たりとも、無味に年賦之返濟に申談、町方に而者夫に相泥み、當時猶以才覺出來不申、相應に相暮候人々も畢に難澁に相至、無是非町會所仕送奉願候處江至申儀与奉存候。當年は米價稀成下料に御座候故、多之不足銀に相成、當暮之處難澁之人々者致方も無御座躰に御座候。近年段々被仰出之趣共茂御座候故、兼而組・支配江申渡置候儀も有之候に付、願方之儀者指扣罷在申候。小身之人々は第一子弟之馬術等稽古も難澁により疎に相成可申儀、私共組・支配之儀察入心痛仕罷在申候。此節調達方一圓出來不仕躰、當暮買懸銀等不指引之儀茂彌以可有御座哉。さすれば彌增商家之難儀に茂相成、通辨も次第に指支可申哉与奉存候。前條之通當年別而不通用に茂御座候間、當暮不指引等之人々茂多可有御座哉与、同役共心痛仕罷在申候。

右之趣難默止、御達申上置候事。

十一月　　　　　　　　御小將頭

十二月十四日。町奉行に依り判決したる罪人の磔刑を、公事場奉行の執行する件に關し意見を上申す。

町奉行手合に而遂吟味候者、及言上落着礫に被仰付候得者、右御刑法於公事場申付候儀、貞享年中以來之事に候得共、元來於公事場吟味茂無之、他之手合に而言上之者を、御刑法迄於公事場申付候儀者、會得難仕旨等、先達而より段々紙面等御用番年寄中㕝指出候に付、委曲相達御聽候處、町奉行に而は吟味難決分者公事場㕝引渡、吟味相決候分は年寄中㕝相達、僉議之上相伺、御刑法被仰出候儀に候得者、於私共可泥筋に而茂無之、數十年格合に成來候儀に候間、是迄之通相心得候樣被仰出候旨、御用番年寄中申渡奉畏候。右之通被仰出候上、私共愚意奉申上候儀者恐多奉存候得共、公事場御刑法方に付而者、被仰出候品に而茂、心付候儀者何ヶ度も可奉申上旨、曁心付候儀申上候得者、思召可被爲替儀茂可有御座候間、以來茂奉心付候儀者可申上旨、御先代樣被仰出置候儀御座候故、乍恐奉申上候。元來於公事場吟味不仕者を、重き御刑法申付候儀相泥候趣意者、寛政十一年町奉行より言上し、火付を於公事場御刑法申渡候節、實者付火者不仕、町奉行に而吟味嚴敷故火を付候趣に申候与申出候を聞上不申、御下知通り御刑法申付候事より泥出來仕候。右相泥申道理者、前々より外手合に而火を付候与申顯置候者を、於公事場吟味之節、實者火を付候儀無之、前吟味嚴敷故無是非吟味に隨候与申者を、段々公事場に而糺候上、火付に治定不仕、助命被仰付候儀は、前々より御

座候故、自然町奉行に而付火仕者与僉議治定仕候者に茂、前段之通申替仕候者茂御座候得者、公事場において吟味仕候者、火付之御刑法に不至者も御座候而者大切至極之儀、此所を相泥申儀に御座候。殊に從御先代樣、父磔刑之時者せがれ共殺害可被仰付御法に相成來居申處、近年思召を以磔刑之者に而も、品に依而せがれ共助命被仰付候儀、誠に御仁政至極之御代与奉恐察。然上者猶更重き御刑法申付候者、共場に臨實者付火不仕与申者を無取上、磔に申付候儀、於御仁政茂如何可有御座哉。別而付火之儀者品重き科人故、召捕候者に者先き〳〵に而褒美を茂遣候に付、召捕候者之心得方茂六ヶ敷儀可有御座哉。先年も褒美銀を可取ため、火付に而も無御座者を火付与申捕出、於公事場吟味之上相分り、右褒美銀可取巧之者を磔に被仰付候儀茂御座候。兎角於公事場者、彼是引合候而者吟味不仕者を、御刑法迄申付候儀、不泥儀者無御座候。町奉行に而者、數十年之格に成來候儀に者御座候得共、右數十年之間に町奉行より言上之者、公事場に而磔に申付候儀者漸六人御座候內、右六人目に前段之通實者付火不仕与申出候者出來仕。公事場吟味者磔に申付候儀者數多之所、御刑法之場に至り申替候者は無御座。勿論吟味落着不仕內者、一旦白狀仕候者茂又申替候者共度々御座候故、吟味方甚相惑申儀者多御座候得共、段々入念夫々相糺最早吟味落着之上に而、年寄中出座之節科人を年寄中前江引出、口書共爲讀聞、口書之通相違無之哉与申入、相違無御座与申所を以惑を晴

し、御刑法奉伺儀に御座候。泰雲院様御在世之内、一頃者右吟味落着年寄中聞届出座之時に、御用部屋之内より一人宛公事場ゟ御指出被遊被爲聞、其後太梁院様に茂右之通被仰付候事茂御座候。公事場に而吟味仕候科人者、如此迄茂大切に被仰付候處に御座候故、町奉行迄之吟味人、於公事場重き御刑法申付候場に至り、實者付火不仕与申者を茂、無構磔に申付候儀、泥問敷与者思慮治定不仕候故、乍恐右等之趣奉得御内聽候間、何分右之譯合被爲聞召分、町奉行手前に而磔刑に奉伺候程之者は、公事場ゟ引渡候歟、又は於公事場吟味之上、町奉行・公事場奉行連名を以言上仕候様に茂被仰付被下候者、御刑法申付候者は無泥申付、若萬一に茂公事場之吟味方に而磔与者不至儀茂御座候者、彌以御仁政之可行届道理に茂相叶可申哉与奉存候。猶此上御下知御座候様奉願候。右之趣奉得御内聽候、以上。

十二月十四日

伊藤内膳
奥野左膳
永原久兵衛
中川清六郎

御朱書、紙面令一覧候、先達而表向申渡候通可相心得候。

この申渡は明らかならず

十二月二十日。本年封内の損耗米額を幕府に届出づ。

〔金龍公記史料〕

十二月二十日。申告本年封內損耗米穀者五十五萬六千五百六十石。

〔江戶御留守諸事留帳〕

十月廿七日

一、御領國御郡之內當年旱損等有之、御損毛高中勘御算用場より指出候書付、御用番より到來に付、聞番へ渡之、前々之通及御屆候樣申渡。

覺

草高

一、四十五萬五千三百十石　御損毛高

內

三萬六千五十石　能美郡

六萬百二十石　石川郡

三萬六千二百石　河北郡

七萬九千四十石　羽咋鹿島兩郡

四萬五千四百石　鳳至珠洲兩郡

前出金龍公記史料と提出の日附及び數量を異にす

七萬七百五十石　礪波郡
六萬七千五百石　射水郡
六萬二百五十石　新川郡
〆
外七百五十石　今津村・弘川村・海津之内中村町

右御領國御郡之内旱損・虫痛等有之不熟に付、年季引免等御潰米物成御損毛高に直し、改作奉行大概相考之趣、前々中勘を以公儀江御書上被成候付、其趣を以相仕立上申候、以上。

申十月　勝尾半左衛門等三人

前田土佐守等十三人殿

〔江戸御留守諸事留帳〕

十一月七日

一、左之御届書岡田太郎右衛門相招渡之、御用番へ致持參候様申談候事。
但、當十一日指出可申旨申聞。

覺

一、四十五萬六千六十石　加賀・能登・越中・近江之内

右拙者領分之内、當夏以來作毛旱損・虫痛等有之、當年損毛高如斯御座候。此段御屆申達候、以上。

十一月七日　　御　名

十二月廿一日。德川家齊夫人、前田齊廣に歳暮の祝儀を贈る。

〔江戸御留守諸事留帳〕

十二月廿一日

一、今日歳暮御祝儀之御使有之、御殿一統五時揃、織江儀熨斗目布上下着用五時過致出席候事。

一、八時過從御臺様、中將様江之御使御廣式番之頭高木傳四郎殿昌平橋へ御越之付人來候付、織江儀如例大御門外雨落へ罷出、頭分御白洲江罷出、御取持衆敷付へ罷出。御名代淡路守様御式臺鏡板へ御出向、御大書院へ御誘引、御口上之趣御拜聽、御目錄御請取、御拜受物御頂戴、追付國許江相達可申旨被仰述、相濟、御料理御斷に付御菓子・御吸物等出之、御相伴齋藤長八郎殿。夫々相濟御退出。御作法最前之通候事。

御拜受物は御使前に到來、左之通。

白銀十枚　　干鯛一箱

十五巻は十七巻なるべし

色のし　御目録

法梁院様御拜領物

公方様より　縮緬二十巻紅白

御臺様より　白銀十枚・干鯛一箱

御前様御拜領物右同斷。

十二月廿三日。富田景周越登加三州志を上りたるを以て賞賜せらる。

〔又新齋日錄〕

一、富田權佐作三州志献上候處、公儀より御聞及、被指上候樣被仰渡、越登加三州志十五卷、來因概覽六冊御献上有之、權佐江拜領物有之。依而作詩一篇上之。但右は數十年來考索して著述す。永延年中富樫氏任ぜられしより、御當代迄に至歷史なり。概覽は加越能分國の初、日本紀等を初として、古書に載する處國郡鄉の事、併國主亭歷の事委く記す。

臣景周。恭承特旨。而撰進三州志。於是壬申季冬二十有三日。以贊御長賜恩言。且併賜禮服二領白鐐於便殿。臣頓首不堪感戴之至。敬賦上。

青史進來賜禮衣。正知盛意若朝暉。世家典故徵文献。社稷重光傳武威。日近陽春氷柱泮。雪呈豐瑞玉花飛。聖恩挾纊宮門路。衰老時忘寒吹歸。

臣富田景周頓首敬書

十二月廿五日。紫野芳春院使僧の請により能を觀覽せしむ。

〔政隣記〕

十二月廿五日、於御奧舞臺御能被遊候。御番組左之通。

但、京都紫野芳春院再建之儀に付、使僧兩人下向罷在、御能拜見之儀御内々相願候處、被聞召屆、今日拜見被仰付。尤御内々之事故、御作法沙汰無之、夕一度於虎之間、御賄足輕かよひに而被下之、諸事寺社方與力指引。

輪　藏　御　高野物狂　御

二人袴　長左衛門　布施無經　幸助　小　傘　藤九郎

〔政隣記〕

前記廿五日に有之、京都紫野芳春院燒失後、太梁院樣御代御再建被仰付候得共、全之成就無之候に付、今般以使僧全御再營之儀相願候處、御逼迫に付其儀難被仰出段被仰渡候處、右使僧より毎度御能被遊候御樣子承、何卒拜見仕度旨相賴候に付、御内々拜見被仰付候儀前記之通に候事。

十二月廿八日。降雪多きを以て交通の便利を圖るべきことを命ず。

〔政隣記〕

付札、御横目江
此之間之雪に而往來之人々指支申躰に候間、屋敷廻り雪早速除之、致道廣、往來指支不申樣可被相心得候。且又來年頭禮之儀も、二月江懸相勤可然事。
右之趣一統可被申談候事。
十二月
別紙之通夫々可申談旨、御用番左京殿被仰聞候條、御承知被成、御同役御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之内裁許有之面々は、其支配江も相達候樣御申談可被成候、以上。
十二月廿八日　　御横目
御馬廻頭衆中

十二月。高田屋嘉兵衞の船舶に乘組める鳳至郡劔地村の水主仁兵衞より口書を徵す。

〔政隣記〕
今年攝州兵庫高田屋嘉兵衞船觀世丸十六人乘、蝦夷地江八月十四日出帆之處、けらむい崎沖に而をろしや船に出合、嘉兵衞等五人異國船江爲乘連行、右水主に能州劒地村仁兵衞罷越、

無異儀歸村一件、裁許江及斷候口書寫。

鳳至郡劒地村　仁　兵　衛

私儀當申年攝州兵庫高田屋嘉兵衛船觀世丸水主仕、主人嘉兵衛等乘組、八月蝦夷地より馳登候處、嘉兵衛儀異國船被捕、彼國江連行候次第、就御尋に左に申上候。

一、觀世丸石數千三百石積、船頭・水主共十六人乘、兵庫高田屋嘉兵衛沖船頭生國淡路吉藏。

右攝州兵庫高田屋嘉兵衛船觀世丸船頭吉藏、幷水主共十六人乘組、申正月廿二日兵庫湊出帆、四月箱舘江着船。夫より五月蝦夷地ゑとろふ江着船、此所に而荷物積入馳登り、同月箱舘御番所に而荷物御改相濟、同所に而荷物商仕候。是一番乘に御座候。主人嘉兵衛儀者、先達而ゑとろふ江罷下り申候。

一、右觀世丸二番乘、六月廿二日箱舘出帆、七月ゑとろふ江着船、同斷しやな与申所に荷物干鱘積入、主人嘉兵衛幷南部筋稼人三十人稼場所相仕廻便船仕、嘉兵衛初何茂一集に乘組。八月二日しやな出帆、同六日同所之內ふるべつ江入津、同十二日ぬいせつ与申所に掛り、同十三日南風吹替り、尤船路主人嘉兵衛指圖に而、水主共申儀用ひ不申、嘉兵衛任申旨くなしり江馳戾り、同十四日同所けらむい崎五・六里計沖懸り居候處、同所とまり沖に懸り船相見

干鱘は干鱈歟

五人とあるは後文の四人なるべし

え、くなしり御番所より大筒二度被打放、同番所に者幕も有之様に相見え、彼是無心許、其段嘉兵衛ゟ申入候得共曾而取用ひ不申。然處同日右とまりに居申懸り船之所より、ずあい（此ずあい者船之名に而、加州・能州之獵船之類に而、松前筋ずあい与申候。）大勢乘組漕來り、又其次一艘不見馴小船に大勢乘、矢を射る如く漕來り、是異國人与見請候得共、其時に至り急に觀世丸沖ゟ出し候事も相成不申。右ずあい等二艘之船間近く漕寄せ候處、人々唐人笠を覆り、衣裳者牡丹〆に拵へ、手に〳〵鐵炮携打放し、乘組之者共大に驚船底等ゟ隠れ候處、鐵炮打止、右之者共觀世丸ゟ乘移り、船中に有合之繩を以嘉兵衛初乘組之者共を縛り、後手に致し縮め、尤□とより申乘組之内五人海中に而相果申候。元來乘組二十人計海ゟ飛入、水主之内四人海中に相果申候。其餘之者所々ゟ助り上り申候。私儀手を後へ廻し、縛り候様身を振向候得共、いかゞ之了簡に候哉、私一人縛り不申候。船中に有之飯櫃を異國人共取出し候に付、食餌致度哉与存、手を洗ひつくね飯一つ致し見せ候得者、悦申躰に付、椀に飯を盛指出候處、指に而撮み喰ひ、箸に而給べ申事は致得不申与相見得、大喰不仕。扨乘組之者共之手箱等搜し、紙入・多葉粉入等、或者懷中ゟ手を入、何にても有之物者盗取、笠之内ゟ入、其笠を覆り行候得共、乘組之者共恐怖而、唯茫然と相眺め罷在申候。于時主人嘉兵衛・乘組も、觀世丸にて右之者共引行候處、くなしり之内とまり与申所より一里半計沖に、異國船大小二艘懸り居、此二艘之内ゟ觀世丸を引込、

船与船与摺合候程に仕置、爰に而嘉兵衛始繩を解き、嘉兵衛一人異國船に乘せ、其餘之者共者無構觀世丸に指置申候。其翌日より、嘉兵衛儀者夜中迄異國船に指留、晝者本船に相返、食事も本船に而仕候。主人嘉兵衛一人目指ケ樣に仕候譯者、嘉兵衛儀衣裳仁躰等宜敷、乘組之者共致崇敬候故、頭分与存右之仕合に候哉、乘組之者共評判仕候。

一、主人嘉兵衛船頭・水主共に向ひ、今度船路之儀各異見之程、此方用ひ不申我意に募り如斯之仕合、今程無是非次第致覺悟候。然共我一人罷越候儀心細く候間、難題至極に候得共、水主之內鬮取に而も致し、二・三人致同船吳候樣申候故、船頭吉藏進み出、私御供可仕与申、水主共も皆々一同に可罷越与申候處、嘉兵衛申候者、先以何茂早速承知有之悅入候。併水主之內誰に而も三人致同船吳可申、其外船頭吉藏等は相止、觀世丸之世話有之樣申候處、重而吉藏申候者、是まで段々蒙厚恩候私儀に候間、是非今度被召連可被下与達而申候に付、船頭吉藏、水主之內に而者金藏・平藏・文次与申者都合四人主人嘉兵衛に相添、異國に罷越候趣に決心仕候而、何れ茂落淚仕候處、異國船之者共も其躰を見受、俱に哀を催し候樣子に相見え候事。

一、右異國船者、造り方はかせに似寄候形に而、丈夫至極に相見え、大船は石數大圖り二千石計も積可申哉、帆柱者眞中に三本、舳に一本、艫之方に一本、都合五本、小船者石數六七百石程も積可申哉、帆柱三本、何れも柱短く、帆は白木綿与相見え、とまりに掛り居候內、

帆之柱之頭ゟ巻揚置候。船之明り障子はびいどろ之様に見受候。且又大船に者一方に大筒十挺、小船に者一方に大筒三挺仕懸置候。両方共斯之通に可有之与奉存候。
一、嘉兵衛船觀世丸に有之、白米四斗二升入四十二俵、酒四斗入三樽、味噌三樽異國船ゟ相渡申候。右等相渡候節、觀世丸之水主共船中之様子見受候に、頭分与相見え候者共装束宜敷、床机に腰を掛居申候。下輩之者共装束者多分白木綿着仕、前足を投出し座し居申候。女も見え申候。子供も居申候。装束は何茂牡丹〆に御座候。鶏之聲も仕候。食餌仕候時は、大き成器に入打寄、共一器者内を匙に而給申候。且又大男は力も有之躰に而、右相渡候米等片手に而取扱申候。右頭分主人嘉兵衛に向ひ、會釋方丁寧に仕候様相見え申候。
一、最前ずあい等二艘に四十人計乗組、携候鐵炮中ゥ躰位に相見え、鐵炮之先に抜身之鑓を仕込、外に小き鐵炮一挺充腰刺、脇指様之物も帯し居申候。鐵炮者威し而已に御座候哉、乗組之内手負人も無之、船にもいたみ所無御座候。其内橋船之帆柱に痛一ヶ所有之、後口に改候處鉛玉一つ打込有之、常之玉より少大きく相見え申候。
一、右異國船に通辭罷在、主人嘉兵衛与應對有之候哉否、此儀見聞は不仕候得共、別れ候節嘉兵衛申候者、今般異國ゟ罷越候上は、於彼地御公儀抔御爲に茂相成候儀有之候者、得与見聞致し、追付致歸國度与申候事。

後口に云々
本のまゝ

一、主人嘉兵衞、船頭吉藏、水主金藏・平藏・文二都合五人、觀世丸乘組之者与引別れ、外に先達而召捕候蝦夷人一人、八月十七日異國船之大船江乘せ候。嘉兵衞儀帶刀爲致不申、丸腰に而罷越候。同日夕方船中に笛を吹候与、其儘碇を取帆を上、とまり沖を馳出候處、翌朝最早相見得不申候。

一、今度異國船二艘くなしり之とまり沖江致來着候趣意、くなしり上陸之上取沙汰承候處、南部河內五郎次与申者何れにか小屋番人相勤居候處、六ヶ年以前召捕おろしや江連行、其後稼人共難風に吹落され、六人おろしや江致漂着、前後七人おろしやに指留置候。然處去る未之夏頃おろしや之者七人くなしり御番所江被召捕置候に付、是与引替、双方共本國江相歸候樣に与先達而おろしや与くなしり御番所与懸合、御約諾之上、今度五郎次幷先達而致漂着候六人之者共召連來り、先五郎次一人爲致上陸、御番所江申上候處、六人之者共も爲致上陸候樣御申渡に付、五郎次異國船へ罷越、右六人之者共連れ來上陸仕、尤五郎次等に異國船之者指添來り、去年被召捕候七人之者共御返可有之旨申達候得者、頭立候者可致上陸旨御申渡に付、本船江歸り其段申達候處、左候者双方出合、海上に而可遂應對旨、くなしり御番所江相達候得共、此儀者相窺不申而者難成事之由御申、七人之者共も御返無之、使之者腹立本船江罷歸候處、蝦夷一人ずあいに乘馳通候を、ずあい共得共本のまゝ。此間解し難く候本船江連行、先達而双方約諾

之通、日本人七人無異儀相廻候處、おろしや七人御戻し無之故憤り、今度嘉兵衞を連行候与之取沙汰に御座候。且又異國船に女子乘居候者、右七人之妻子に而、今度迎に罷越候与申沙汰に御座候。此一條者觀世丸右之所江不罷越以前之儀に而、水主共くなしり江上陸之上取沙汰承り、直に見聞不仕候事故、虛實者相知れ不申候。

一、今度おろしやより罷歸候南部河內五郎次江、くなしりに而對面仕、此度來着候二艘者おろしや船に而、此乘組人數百七八十人計与申儀、五郎次咄に而承り候。且又異國人共鐵炮携乘來候ずあい之儀者、先達而蝦夷一人ずあい共異國船江連行候、此ずあい与申事に御座候。

右一件主人嘉兵衞國元江案內仕候處、同人せがれ箱舘迄罷下り、觀世丸罷登を待居申候。

一、主人嘉兵衞船觀世丸乘組十六人之內、四人けらむい崎沖にて相果、船頭吉藏等四人嘉兵衞に隨ひ、おろしや江罷越、殘り八人、外南部筋稼人便船之者共二十五人、くなしり江上陸仕、同所御番所江御召出し有之、仕抹御口問之上口書御取立、箱舘御番所へ相達、右之者共一同本船に乘、同廿一日くなしり出帆、同廿七日箱舘江着船仕、積荷物觀世丸於御番所御改相濟、荷物積入、此所に而水主相雇、觀世丸九月六日箱舘出帆馳登申候。水主八人之者共、幷稼人便船之者共、同所御番所江被召出、御詮議之上江戶表江御達、御下知御座候御樣子に而、最早御用無之候間致歸國候樣被仰渡、十一月五日津輕樣御領あをもり江渡り、夫より何も陸

道通り罷歸。私儀者十二月朔日劒地村江着仕候。右觀世丸乘組人、御領國之者私一人、其餘者皆々上方筋之者に御座候。

右攝州兵庫高田屋嘉兵衛、當八月異國船之者に被召捕、彼國江連行候次第、前段申上候通相違無御座候、以上。

文化九年十二月

劒地村　仁　兵　衛　判

是歲。大雪降る。

〔歲々略曆〕

文化九年十一月十八日より大雪降り、正月廿三日迄に溜る。凡三丈五尺与申事に御座候。依て狂歌に

お雪さん踏付られていかゞせんどうじやおまへはふるかふらんか

四海波をさまる國の大雪にすべる民とてゆたかなりけり

〔金龍公記史料〕

十一月大雪倒屋數十。

積雪至正月十五日三丈四尺八寸。三十七日間不止。蓋二十年來之大雪云。

正月朔日。前田齊廣金澤城に於いて年頭の儀を行ふ。

〔政隣記〕

元日晴陰交、長閑也。巳中刻前御直垂被爲召、御奥書院江御出、諸大夫之面々年頭御禮被爲請、夫より於桐之御間鶴之庖丁御覧。畢而於御小書院年寄中御禮被爲請、指續御家老等同所、右相濟。御大廣間に而人持組・諸頭御禮被爲請、夫より御大小將等一統御禮被爲請、夫より御居間書院に御着座、於桐之間に御奥小將幷勝千代樣附御側小將、且御近習頭支配之人々一統御禮。畢而桐之御間に御着座、於船之間に御表小將一統御禮被爲請、未刻相濟被爲入候。

正月十四日。前田齊廣夫人の祖父鷹司輔平薨去の報金澤に達す。

〔政隣記〕

御前樣御祖父鷹司禪閤樣、去八日薨去之旨申來候。依之普請者今日一日、諸殺生・鳴物等者明後十六日迄三日遠慮之筈に候條、被得其意、組・支配江可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江も相達候樣可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

正月十四日　前田主税

〔政隣記〕

正月十四日、從京都早飛脚を以、鷹司禪閤樣去八日薨去之段告來。依之左之通被仰付。

新番頭　平田三郎右衛門

御香奠白銀百兩御備御代香之御使。附同月廿日發足、廿七日京着。附都合金小判百五十兩受取罷越。

御馬廻組四百石　津田善四郎

附此後十六日發足、行粧見苦敷無之樣相心得、道中指詰罷越候樣被仰渡、正月廿七日京都發、二日歩之逗留、二月六日歸。附都合金小判八十兩受取罷越。

是月は大盡なり

正月晦日。深雪なるを以て諸士に乘物を用ふることを許す。

〔文化雜記〕

一、文化十年正月晦日左之通御用番主税殿御渡、夫々觸出候事。

深雪に而馬上難成躰に候。依之來月十五日迄乘物乘用御免許に候條、組・支配之面々江可被申聞候。且又組等之内裁許有之面々は、其支配江茂夫々申渡候樣可被申達候事。

正　月

二月十日。前田齊泰髮置の儀を行ふ。

〔政隣記〕

二月十日勝千代樣御髮置御祝御規式有之。定番頭九里幸左衛門御白髮等・干鯛一箱上之。於御前勝千代樣御手自御熨斗鮑頂戴、且御脇指泰平並於御次白銀七枚拜領等如御前例。將又左之通。

御召仕立御熨斗目小袖一重・御紋付御小袖一重・紗綾二卷

長　甲斐守

御紋附御小袖一重・紗綾二卷

前田修理

右之外夫々拜領物被仰付、且右に付御殿詰御歩並以上服紗小袖・上下着用、御次廻詰合御赤飯等御饌頂戴被仰付。

二月十日。舊本吉湊裁許中村宅左衞門治績あるを以て祿を加增せらる。

〔金龍公記史料〕

正月。本吉湊裁許中村安積轉任改作奉行。本吉及湊民遮路不行。事聞。遣吏慰諭其民。褒賞安積。增賜秩五十石。

〔金龍公記史料〕

二月十日。中村宅左衛門增賜祿五十石。因舊管民心服。

二月十二日。前田齊廣心祝の爲に能を演ず。

〔政隣記〕

二月十二日快晴、就御心祝勝千代様御髮置・御参勤秋迄御用捨之儀。於御奥舞臺左之通御番組御能被遊、御馬廻組等いまだ道成寺御能拜見不仕者共江拜見被仰付。服紗小袖・上下着、辰刻初り申刻濟、爲指引頭々出。

翁　高砂　權兵衛　八　島　永原佐七郎　六　浦　良之助

道成寺　御　祝言岩船　丹羽余所太郎

末　廣　乙九郎　福之神　長左衛門

二月廿七日。前田齊廣本年の參覲時期を變じたるを以て道中繼立人馬に關して幕府に稟請す。

〔江戶御留守諸事留帳〕

二月廿七日

一、左之通道中御奉行御兼帶井上美濃守殿江御屆仕候旨、岡田七郎左衛門出之。

加賀守家中之者交代之儀、年々春秋爲交代候內、秋者人數少に而、宿々繼立候人馬御定高に

而指支も無御座候得共、春者人數多に而增人馬繼立之儀相伺來候處、加賀守當年秋中參府仕候樣被仰出候。然處是迄春參府仕候間、交代先之者供に召連出府爲致交代候者も御座候付、當春交代之內秋迄詰越候樣申付候者多御座候間、人馬御定高に而差支無御座候。依之當秋者人數多相成候間、繼立人馬御定高に而者差支難儀仕候間、當年者九月・十月之內凡日數三十日計之間、四十人・四十疋充人馬繼立候樣仕度奉存候。尤其以前猶又可奉伺候得共、先此段申上置候、以上。

二月廿七日　　　　御名內　岡田七郎左衞門

二月。十村等、諸郡に出役する役人の待遇費用に就いてはその監督を一任せられんことを求む。

〔諸書物留〕

御奉行所幷諸役人諸郡江御出役之節、御宿諸入用幷諸萬造等、其御郡々より時々巨細に書出可申旨、去暮被仰渡奉得其意候。尤御用之儀に付出役之御人々之儀は、前々より被仰渡茂有之、元より費を御厭被成候儀に御座候得共、御郡方在々に而は萬事不調之物に御座候得ば、役方等平生心得不申事故、雜費多相懸り、裁許手前において無油斷內輪及穿鑿申儀に御座候。其中村方之者共心得違に而不埒之入用茂相懸り候樣之儀は、急度見咎申趣に御座候。さすれ

ば是以後都而書出候樣に相成候而は、書寫之者相雇、世話料筆墨之費而已に相成、還而於村々難儀之筋に御座候間、是迄之通裁許手前において穿鑿におよび、別に書出不申樣被仰付可被下候。村々費を御厭被仰渡之儀に御座候得ば、ヶ樣に御達申上候儀は、不穿鑿にも御聞請可有御座候得共、私共手前に而一圓取しらべ方油斷不仕、猶更相尋可申儀に御座候。是以後重き御用方に而御出役之儀は格別、大抵之儀は御兼役に被仰渡、出役之御人々相減候はゞ、畢竟費茂相懸り不申儀与奉存候間、是等之所御勘辨被下、諸入用書出之儀は前段申上候通御指止被下候樣仕度奉存候。依而小紙を以御達申上候、以上。

酉　二　月　　　　諸郡御扶持人連名

三州御郡御奉行所

二月。能登に於ける大坂登せ米の船宿に關する件を答申す。

〔諸書物留〕

大坂爲御登米出船之砌船宿之儀、前々より口郡外浦者自・他國とも羽咋村彌五兵衛、內浦者他國船所口正屋瀨兵衛、御國船は湊屋藤左衛門宿仕來申候所、內浦他國船宿去年以來所口杉野屋七兵衛仕由御座候、御藏元手代宿も、外浦羽咋村彌五兵衛、內浦所口杉野屋七兵衛仕候。今濱・川尻・富木・田鶴濱・笠師・中嶋にも宿御座候所、是は小宿与唱、前段之者共下付躰に御

座候由。御船出船之節は彌五兵衞等自分或は代人罷出、御藏元手代に指添諸事縮方仕申儀に御座候。小宿之者共は罷出不申候。福浦湊に而は自・他國共常宿御座候而、是は爲御登米積請に向候而も常宿付に而、羽咋村彌五兵衞方貪着不仕旨に御座候。全躰右出船之船宿、御藏元等之方に而取極申儀に御座候哉、十村方江は願出聞請或誓詞等見届申儀無御座候。

右就御尋承合書上申候、以上。

酉　二　月

右之趣本江村惣助江御郡所より御尋に付、仲間中承合相談之上書上候。是は奥郡正院村伊右衞門・小路村勘右衞門、爲御登米積申度願文化九年御聞届に付、御尋与相考申候。

三月十五日。御馬廻組中村彌十郎城内に於ける作法を誤り次いで自分指扣を行ふ。

〔政隣記〕

御馬廻組中川平膳組火事之節盗賊改役

中　村　彌　十　郎

今十六日自分指扣

右之通に候處、同月廿九日御城代前田伊勢守殿左之通覺書を以被仰渡。

付札、中川平膳江

中村彌十郎

右彌十郎儀、當十五日御能拜見就被仰付候、宅より若黨兩人召連、石川御門外に而一人は相殘、一人供仕候樣申付、右御門より罷出候處、三之御丸之內若黨兩人召連候段、右御番人より御手前へ相屆候由被申聞候に付、罷歸家來共承糺候處、相殘候若黨心得違仕、右御門內より召連候供之者共与程近引續罷越候旨申聞候。御門入候而猶更心付可申處、其儀無之に付右躰に而、三之御丸之內若黨兩人召連候樣に相成、不念之至に奉存候。依而先指扣罷在可申旨等、御手前與繼を以被出之、委曲相達御聽候處、不念之至に被思召候。併如在も無之儀に付、指扣罷在候には不及候。以後之儀相心得候樣可申渡旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

三　月

石川御門壹番組御番組

森　乙　作

服部又三郎

五十嵐彌學

〔政隣記〕

付札、成瀨內藏助等江

富永熊之助

右之人々、當十五日當番之節中村彌十郎兩人若黨召連罷出候處、見咎不申段如何之儀に候哉之旨、三之御丸御番人より申越候に付、見洩相咎不申段申遣候之處、重而下番足輕を以、一人は供外与見受候故相通候に而は無之哉之旨申越候得共、前段之通見洩申段相答申候。右見洩申儀、以之外往來烈敷、從者等相混じ、彌十郎は見受候得共、若黨員數之所相分り不申に付、見洩相咎不申儀甚不念之仕合迷惑仕候。仍而自分に指扣可申哉之旨紙面出之候に付、先紙面之通相心得愼罷在候樣に申渡置候旨等、各添紙面を以被出之、委曲相達御聽候處、往來烈敷從者等相混候はゞ、別而入念に相心得可申處、見洩候儀不念之至、勤方油斷之儀に被思召候。併如在も無之儀に付、自分に指扣罷在候には不及候。以後之儀急度相心得可申候。右之通可申渡旨被仰渡候條、夫々可被申渡候事。

三　月

右も昨廿九日御城代伊勢守殿被仰渡、寺社奉行御用番中川淸六郎於宅申渡。

三月十八日。大聖寺侯前田利之參覲の途次金澤に泊す。

〔政隣記〕

三月十九日。備後守樣就御參勤、昨十八日御當地御着、今日御登城之筈に候處、就御風氣御

御能云々は十九日奥舞臺にて前田齊廣慰能を催したることに關す

登城無之候事。

但、御登城有之候得者、備後守樣にも融御能被遊候筈之處、本文之通に候事。

〔政隣記〕

備後守樣明十九日御登城に付、御用懸り朝五時揃、服上下之旨前日申談有之。且十八日夜松任御泊之筈に候處、被仰進候趣有之、同夜金澤に御泊、翌十九日御逗留之筈。然處十八日粟生川水高差支、湊江御廻り、夜五時過金澤御着、金屋九郎兵衛方に御泊、御使御近習頭玉川七兵衛相勤候處、就御痾邪等に御直答無之。十九日御近習頭大幸長太夫爲御使者登城、春來御痾邪に而御難儀、少々御快方に付押而御發駕之處、昨日粟生川邊殊之外寒風强、御供人さへ難凌程に而御外邪、其上長く御駕籠に被召候儀難被爲召處、終日夜陰迄御乘用故に候哉、御動氣强候得共、御登城者押而可被成候。御能者御斷之段被仰上候處、御使御近習頭駒井宇右衛門を以、長途之御旅行、其上御參勤之事にも候間、爲御保養御登城も御指留被仰進候。且御醫師江間篁齋幷簗田養元被遣、診被仰付候事。

一、備後守樣御登城無御座に付、左之通以御使者被上之。

中將樣江、賀多粉一箱・塩鴨一箱。

勝千代樣・直姫樣江、丸山燒煎餅一箱宛。

一、御近習頭里見七左衛門使に而左之通被進之。

味噌漬鯛一箱。　御内々、染御手拭十五筋・干菓子一箱。

右爲御禮、御使者大幸長太夫登城。

三月十九日。前田齊廣御馬廻組神保鉦五左衛門をして能を演ぜしむ。

〔政隣記〕

三月十九日於御奥舞臺御慰御能御番組左之通。

竹生島　神保鉦五右衛門　鞍馬天狗　鉦五左衛門　夜討曾我　御

放下僧　鉦五左衛門　紅葉狩　鉦五左衛門

因に附記、今月十日神保鉦五左衛門儀、（至而下手に而自作等有之、或舞違、或文句失念間違等色々笑敷事共有之、相手幷地謡杯笑を催大に込り候儀毎度有之、却而御慰に相成に付、毎度被仰付候躰。自身に者上手に付御慰に相成候故度々被仰付候事与心得罷在、於宅も諸事を止め舞稽古而已に罷在与云々。附御馬廻組領二百五十石也。）御能御用之儀に而御次に罷出候之處、幸之儀与被仰出、左之通數番指懸り被仰付候處、不及御辭退、夫々相勤、言語に難述笑敷事共に而、地謡何も笑出し、漸一人堪へ罷在全く謳ひ候与云々。

熊坂　飛雲（後シテ計肩衣之上に赤頭鬼面）　舍利　土蜘（後シテ者肩衣之上に赤頭鬼面）

亂曲　實方　玉嶋

右無裝束繼肩衣着用に而被仰付。

三月廿七日。先に外作事奉行を廢せられたるを以て御作事所御横目足輕の事務を改む。

〔文化雜記〕

三月廿七日

一、左之通御作事奉行申渡候旨、同所御横目足輕木村茂太夫罷出申聞候事。

付札、御作事所御横目足輕中江

今般外作事奉行被指止、右御用修理裁許與力兼帶、外作事寺社一手合に被仰付候。先々御仕法には、御歩横目被指止候得共、當時御歩横目罷在候間、地・遠共修理裁許江被指添候旨被仰渡候條、以來共許中者寺社方御用たり共、地・遠共修理裁許へ指添に不及候。尤地廻り・下馬小屋見廻等之儀、是迄之通無油斷可相心得候。遠所御用者、右之外品により申談候儀可有之候事。

癸酉三月

三月晦日。定番御馬廻組井上九内酒狂により亂行す。

〔政隣記〕

是月は大盡なり

今晦日薄暮之頃、才川橋爪料理商賣人中屋市郎右衛門方へ、定番御馬廻井上九内荒木善太夫組也。酒狂に而入、亂行之爲躰、戶障子等外へ投出し、諸道具打毀し、内南京類皿鉢。代銀三貫目餘与云々。刀を拔走廻り、夫より二階座敷ゟ上り同斷之仕形、同所之來客追々逃行。然處九内妾幷下女罷越相宥め、拔刀を取宅ゟ連歸。右騷動近邊に御横目足輕等居住、追々各走付及見聞与云々。右等之族に付、九内頭幷一類示談之上、九内儀亂心之趣を以、居宅に問縮拵入置之候由云々。

三月。江沼郡内の地理に關し答申す。

〔加越能御繪圖覺書〕

文化十年三月書上候答付札

一、吉崎村より上ゝ北潟之方に有之松者、塩越之松に候哉。

是者御花松与申候。塩越之松者、堀切之上に三十本計松有之候。是を塩越之松与申候。

一、堀切之先に岩二つ・三つ茂有之候哉。

岩三つ有之候。初めを黑子岩、堀切之緣に有を兎岩、其次を八丁岩与申候。此外にも有之由に候得共、海底に而相分り不申候。

一、吉崎潟長廿町十間・幅二町三十間与有之、今者如何候哉。

當時者長十五町程・幅十町程御座候。北潟者吉崎より越前小まき河道迄、長二里程・幅三町廿間程御座候。

私云延寶六年之御繪圖之節より者、長み者五町つまり、幅者八町計廣く相成候与奉存候。

一、不地釋ヶ嶽南平者越前之地に候哉。

不地釋之後ろ之山峰通御境に而、不地釋者全く大聖寺御領に御座候。右後ろ之山与不地釋之間より、谷川流れ出申候。

一、山田町之所に村方之印記可申候。山田領与申者御關所邊之谷之内に御田地有之、其所を申候由。則大聖寺町之町人共、御田地を所持仕居申由に御座候。大聖寺領与申も有之候。是者熊坂之内出村之邊に有之由に御座候。

一、今立村より能美郡大杉村之内山崎村ゟ道法何程有之、内何程江沼郡之地に候哉。

道法二里程に而内一里九町程江沼郡之地に御座候。

一、荒谷村より能美郡大杉村之内中村ゟ道法何程有之、内何程江沼郡之地に候哉。

道法二里七町計、内一里五町程江沼郡之地に御座候。

一、柴山潟者長廿六町・幅十三町与有之、當時者いかゞ有之候哉。

當時者串村之川口より潮津村之あみだ堂与申所迄、長二里計・幅廣き所に而者一里程御座候。

一、濱佐見村与申所有之候哉。有之候者共所に村之印付可申候。且佐見村を外佐見村に對而内佐見共申候哉。

内佐見与申者無御座候得共、濱佐見村を外佐見与申に付、佐見村を内佐見与申候。元來外佐見与申も、内佐見与申も無御座候。濱佐見村實者佐見村之出村に而、能美郡より先年被遣候由。されども濱佐見村者無高所に而、渡海獵業迄に御座候處、中頃より松林出來仕、其間々に畑新開被仰付候而、近年者濱佐見村与一村立に被仰付候由御座候。依而江沼郡に而者北濱村々之内江入申候。

三月。御郡方火災の際使用する水旗に就いて十村等より答申す。

〔諸書物留〕

御郡方火事之砌、裁許之十村幷私共より指出候水旗之上出しを付塗柄を相用候様御聞およ び、目印鎗にも似寄候に付、以來右出し等之儀可指止、元來分際を取失ひ候族御糺可被成筈に御座候得共、其御沙汰無御座、已後之儀被仰渡候旨、御算用場御紙面に御添紙面を以被仰渡之趣、奉得其意候。尤水旗之上出し幷塗柄目印鎗にも似寄候与御聞請御座候而は、分際を取失ひ超過之趣に相聞候得共、右等之趣に而は曾而無御座、御承知被下候通一通り之乳旗村々よりも指出、其外新田裁許・山廻中暨小役人之者迄も火事場江水旗爲持申儀に御座候故、同

役幷組裁許十村中之砌人歩多召連爲防候故、見當無之規律相立不申而者人歩致混雜、指圖仕候而茂騷敷場に而制し方行屆兼、區々に相働候而心外大火におよび申事も可有御座、右之趣に而先々より同役之內に茂水旗之上に目當を付置申分も有之、又乳旗指出申人々も御座候而不同之趣に付、平常於村々爲相心得不申而者、不時觸渡申儀相成不申事故、近年ヶ樣之儀相改、見當之儀も端々爲致承知置申譯に御座候而、曾而分際を取失ひ僣上之族無御座候得共、前にも申上候通平常等之儀与違、火事場之儀は人歩多召連駈引仕申儀に御座候得ば、通例村々同樣之乳旗に而者人歩之扱一圓出來不申儀に御座候間、格別目立不申儀は粗御見逃も無御座而は、畢竟御縮方難立儀に御座候に付、已來迚も竹柄乳旗之上に輕く目當を相用候樣仕度奉存候。依而御郡々相改、幷人々より指出候水旗目當等寫取、夫々御達可申上儀与奉存候。且御役所においても御承知不被下候而は、火事場江御出之節御用支之儀も可有御座儀与奉存候。尤被仰渡之儀、ヶ樣に申上候而は如何にも御聞請可有御座候得共、畢竟右等之儀深く御穿鑿被下候而は、相泥火防之指障にも相成可申儀与奉存候に付、無據前條之趣重而御達申上候。已來被仰渡之通、身廻り裝束等之儀は、分際を越奢侈之類無之樣急度相心得可申儀に御座候間、此段宜御僉議被下候樣奉願候、以上。

酉　三　月　　　　　　　　　　　　　　　　諸郡御扶持人連名

前田齊廣の演能せしこと此の前後甚だ多し今その一二を擧ぐ

四月二日。前田齊廣奧舞臺に於いて慰能を催す。

〔政隣記〕

四月二日、於御奥舞臺御慰御能被遊、御次廻幷御廣式懸り等拜見被仰付候。御番組左之通。

但、朔日於長谷觀音院之能番組同斷。

翁　千歳　良之助　三番三　乙九郎　面箱　藤九郎　ワキ　群吾　鞁　熊次郎

高砂　御　庸藏　佐一郎　兵之助　勘三郎　元次郎　豹九郎　養五郎

田村　小次郎　善七郎　吉太夫　次郎右衛門　久左衛門　金三郎　作助

雲雀山　良之助　庸藏　佐一郎　兵之助　元吉　昌九郎　源兵衛

枕慈童　善七郎　吉太夫　次郎右衛門　新之助　尉五郎　金七　德左衛門

十左衛門
烏帽子折　庸藏　吉之助　勘三郎　兵馬　覺左衛門　七兵衛　間榮五郎
御亂　次郎右衛門　新之助　昌九郎　豹九郎　養助

以上

但、御稽古御能に付間多分無之、狂言も無之候事。

四月四日。前田齊廣奥舞臺に於いて慰能を催す。

〔政隣記〕

四月四日於御奥舞臺御慰御能被遊、御馬廻組嫡子（親年頭御禮之次第を以一番より八番迄今日拜見相濟。）・御大小將組嫡子不殘拜見被仰付、幷爲指引罷越候御馬廻組頭（兩組より壹人宛罷出。）・御小將頭・御次廻一統、御廣式懸り頭分・平士、且診御用之御醫師等拜見被仰付。

今四日御能御番組

弦上　良之助　次郎右衛門　元吉　昌九郎　豹九郎　源兵衛
御天鼓　彦次郎　猪之助　養助

蚊角力　藤九郎

初雪　權兵衛　嘉六郎　彦次郎　金七　養五郎

唐人角力　幸助

自然居士　權兵衛　次郎右衛門　新之助　尉五郎　德左衛門

是界　御　全作　嘉六郎　昌九郎　豹九郎　多喜平

杭か人か　乙九郎

熊坂　久兵衛　善七郎　六之助　勇之助　覺右衛門　作助

紅葉狩　十左衛門　庸藏　勘三郎　群吾　彦十郎　德右衛門

附　祝言

四月十日。越能加三州志の編纂が林大學頭の推賞を得たることを著者富田景周に告ぐ。

〔政隣記〕

昨十日組頭前田伊勢守殿於宅左之通。

富田權佐

權佐儀、先達而越能加三州志致編集指上置候。然處於公儀諸國之事跡御書集之儀有之躰に付、右三州志林大學頭殿迄被指出、御引合に茂可相成哉之旨等被仰達候處、大學頭殿より御老中方江被指出候由に而、當二月十二日松平伊豆守殿江聞番被召呼、右三州志御指出に付、學問所江御渡御用に相立候段被仰渡、大學頭殿よりも諸家より風土記之類被指出候處、三州志者編集之趣方も宜、御用立候旨聞番迄御申聞有之候。是等之趣權佐江可申聞旨被仰出候條、可有御申渡候事。

癸酉四月

右御用番助右衞門覺書を以演達に付、則申渡。

四月十一日。前田齊廣の女芳姬金澤に生まる。

〔政隣記〕

四月十一日巳之上刻、於二之御丸御廣式姬君御出生。御生母御馬廻組御廣式御用達小野木助三娘、勝千代樣御同腹也。

右に付御次幷御廣式詰人一統服紗袷・上下着用。且以御用部屋左之通被進之。
御守脇指越中國國宗
一、鍾馗御懸物御直に被進之。
一、御懷姙御大小將組坂井虎之助姉、金谷御廣式江被遣置候之處、今日御出生後二之御丸御廣式へ引移被仰出。是俗に兩姉之懷胎同居勝負有与言故与云々。
〔齊廣様御傳略等之内書拔〕
四月十一日巳の刻於二之御丸御廣式、御姬様御誕生。御纂御用奥村助右衛門、御産御用主付音地淸左衛門・三宅權左衛門なり。

御懷姙は勇姬御袋なり

四月十二日。領内に烈風あり。

〔政隣記〕
四月十三日陰、夕方より雨降大に暖和。夜南烈風。至曉靜謐。
〔政隣記〕
四月十三日夜金澤も烈風に而、加州町・在損じ家等許多有之、越中城端大風砂石を飛し、家毎に戸障子を吹放し、内より疊を以押へ防有之爲躰。家根者多分吹捲り、毀し家三十軒餘、井波も右に准候風損有之。五ヶ村も同斷之内、川岸之家十軒餘り吹倒し候處、家組之儘川江

落入流行。何れも土間に而、居住人は無別異殘り罷在、家財も其儘殘り、柱壁以上右之通覆り流失。同夜加・越・能之毀れ家凡四百軒餘、大小之風損者三州共一統、近年之大風与云々。

〔文化雜記〕

四月十四日

一、會所園之內に有之候松木、昨夜之風に而吹倒れ往來指支候段、西町口御門番人及斷候旨、爲承知割場御奉行より申越候に付、御横目足輕見分に指遣候處、右松會所園之塀高よりをれ落、往來指支候に付、割場より警固足輕相建往來指留候に付、外閣等損不申、相替儀無御座旨。右御横目足輕申聞候に付、不破治部左衞門を以及言上候事。

一、裏御式臺下段之御天井一ト間、夜前之風に而吹上候旨、同所番人申聞候に付、御修理之儀御作事奉行へ申談、其段御城代江も御達申候事。

四月十八日。芳姬出生七夜の祝儀を行ふ。

〔政隣記〕

四月十八日今般御出生樣御初髗御祝。御名被稱芳姬樣与、御留守居物頭筆頭也。御廣式御用吾地清左衞門上之。

四月廿一日。盲人の支配に關する幕府の令を領內に傳ふ。

〔政隣記〕

付札、大目付ゟ

盲人共之儀渡世之藝無之、親許に罷在、又者武家ゟ被抱候而他之稼不致ものは格別、藝業を以市中住居之分、幷武家に罷在候共他之稼いたし候類者、檢校之支配たるべき旨、安永五年午年相觸候處、近來座中ゟ不入盲人多く、醫業・賣卜等渡世にいたし候分者、座中之支配不請など心得違候も有之趣に相聞候。惣而百姓・町人之悴者不及申、たとひ武家・陪臣之子弟に而も市中住居之分、幷主人屋敷內に罷在候共琴・三味線・針治・導引等之藝業に携候ものは、檢校之支配可請筈之事候間、其旨相心得、尤向後年々人別改之節、町方者其所之町役人、在方者名主・組頭等心を附、檢校支配師匠之名前等相改、其段人別帳ゟも書記し置可申候。

右之通可被相觸候。

酉　三　月

青山下野守殿御渡候御書付寫一通相達候間、被得其意、答之儀者伊藤河內守方へ可被申聞候、以上。

三月廿二日　　大　目　付

御名殿 留守居中

盲人共之儀に付從公儀相渡候御書付寫一結二通相越之候條、被得其意、組・支配幷與力、且又家來末々迄可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江も相達候樣可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

癸酉四月廿一日

長 甲斐守

前田伊勢守

四月。朝鮮信使來聘に要する費用を十ケ年賦に上納すべく諸士に命ず。

〔御觸拔書〕

別紙寫之通、定番頭に申渡候に付、爲御承知進之候條、組江茂觸可被成候、以上。

四月

奥村助右衞門

定番頭江

去辰年牧野備前守殿江聞番御呼出、朝鮮信使來聘に付、高役金・國役金之儀被仰渡、今年より五箇年に御上納有之候。右國役金之儀は、御郡方より取立之樣申渡候。高役金者壹萬石に付七十五兩宛に而、知行高江懸り候儀に付、御家中御知行被下候人々江上納被仰付候。右之分先御取替を以公儀江御上納有之候條、御家中より者一統難澁之時節候間、十箇年賦を以可

有上納候。割合等之儀は御算用場奉行より可申談候事。

右之通被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配ゟ茂相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

酉四月

四月。家中三千石以上の士の下屋敷外郭に擅に門を設くることを禁ず。

〔御觸拔書〕

御普請奉行ゟ

御家中三千石以上之人々、下屋敷之內に居住之家來外廻居住之者、隨便利外廻往來之方ゟ門口を付候儀、近來所々に有之。其中には各ゟ屆におよび候茂有之、又屆無之茂有之躰。元來下屋敷一圍往來之惣木戶口有之、其內に居住之者任便利、外廻往來之方ゟ門口を付申儀は有之間敷儀。以來者堅難相成候條、得其意、是迄在來候分は寄々を以爲相改可被申候。

右之趣三千石以上之面々ゟ茂可相觸候事。

癸酉四月

五月朔日。此の日以降前田齊泰の爲に幟を建て之を觀覽することを許す。

〔文化雜記〕

四月廿五日

一、勝千代樣御幟相建候內拙者共見廻候樣、其外去年御幟相建候振之通可相心得旨、御城代又兵衞殿被仰聞候事。

一、左之通爲承知御城代又兵衞殿被仰聞候に付、割場御步橫目・御橫目足輕江申談候事。

御幟拜見人道心・比丘尼之者は相成不申候得共、侍中隱居剃髮之女者指支不申候事。

一、女青紙張傘指候儀者無用に候得共、手に持相通候儀者不苦候事。

一、侍中隱居剃髮之女之內、衣着用之者も可有之候。且又町方にも剃髮之女可有之候。是等も如何可有之哉之旨、土橋御門御番人申聞候に付、衣着用之者は相通申間敷旨、町方剃髮之女は侍中剃髮之女に准じ見逃候樣申渡候事。

〔政隣記〕

左之通夫々可申談旨、御城代又兵衞殿被仰聞候條、御承知被成、御同席御傳達、御組・御支配御申談可被成候事。

付札、御橫目江

勝千代樣御幟來月朔日より同五日迄土橋御門內に相建候に付、右御門御番所前通三之御丸江

之往來、御幟相建候內相成不申筈に候事。
右之趣寄々可被申談候事。

四　月

右於御横目所披見物寫、今日御用番從富永氏以廻狀到來、且左之廻狀寫も同斷。
付札、御横目江
勝千代樣御幟土橋御門內に相建候來月朔日より五日迄、御家中幷町方共男女拜見之儀可被申渡候。但男子は十五歲以下に候。都而拜見人甚右衛門坂御門より土橋御門江入、手摺垣之內より御堀端へ押廻、如元土橋御門江出、夫より御宮口御門通西町口御門江出申筈に候。
一、拜見人供之者、甚右衛門坂御門內江草履取一人召連可申候。
右之通夫々可被申渡候事。

四　月

〔政隣記〕
五月朔日より五日迄、前月記之通勝千代樣御幟等土橋御門內に左之通相定。

鯉瀧登　　旗　五　本
沙金色　　兜廿七頭

松ニ鷹

一、勝千代様ゟ御進贈等左之通。

中將様より　菖蒲御兜十頭　鮮御肴一折

御前様より　同　五頭、干鯛一箱

法梁院様より　同　三頭　同　斷

直姫様より　同　一頭　鮮御肴一折

貞琳院様より　同　斷　同　斷

御産婦之方より　同斷献上

菖蒲御兜二頭宛献上

長　甲斐守

奥村左京

前田修理

〔筒井舊記〕

五月六日。珠洲郡小木の薩摩屋德兵衞に海豚の筋買入主附を命ず。

能州奥郡小木村　薩摩屋德兵衞

右能州四郡に而捕揚候入鹿等筋、宇出津浦筋師與四右衞門等四人之之者買入方手張候に付、

右德兵衞儀生筋買入方圭附申渡候樣致度段、綿打絃問屋赤倉屋八郎兵衞より相願候段、町奉行より申聞承届候條、此段申渡、猶更洩筋無之樣可相心得旨可被申渡候、以上。

酉五月六日　　御算用場

高田彌左衞門殿

中村逸角殿

五月七日。前田齊廣の女勇姬金澤に生まる。

〔政隣記〕

五月七日午中刻、於二之御丸御廣式姬君御出生、御生母御大小將坂井虎之助成常領六百石姊。右に付御次廻、曁御廣式一統上下着用、且御出生樣江兼貞御守脇指一腰、御用部屋を以被進之。

附、鍾馗御懸物者御直に被進之。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

五月七日晝九時過於二の御丸御廣式御姬樣御誕生なり。御生母は御藩士坂井伊兵衞女御中﨟るんなり。御墓御用奥村助右衞門、御產御用圭付音地淸左衞門・三宅權左衞門、御箆刀永原七郎右衞門指上なり。

五月十三日。勇姫出生七夜の祝儀を行ふ。

〔政隣記〕

五月十三日

今般御出生之御姫様御名奉稱勇姫様与、大脇六郎左衛門（御出生御用主附）上之。且今日御初膳爲御祝儀、御産衣二重・干鯛一箱・御樽代千疋被進之。

右爲御祝儀、於御奥舞臺御能、御杉戸内御廣式懸り一統、曁年寄中等、并定番頭拜見被仰付。九時過初り、七半時過相濟。御番組左之通。役者四時揃、服上下。

竹生島　御　箙　小三郎　羽衣　良之助

融　權兵衛　祝言金札　佐七郎

末廣　幸助　禰宜山伏　藤九郎

五月十三日。金澤の人越前屋安兵衛篤行を以て大坂町奉行より表彰せらる。

〔政隣記〕

加州金澤觀音町越前屋仁右衛門忰　安兵衛

右之者、文化二年大坂江罷越、北久寳寺町五丁目小西屋源右衛門方江致奉公、相勤相勵候處、文化七年主人源右衛門致病死候に付、死後猶々當後家さへ与申者を致大切に、店方家事萬端

奇特成儀御上御聞に達し、文化十年五月十三日西御番所江町役人指添被召出、東御奉行平賀信濃守様、西御奉行齋藤伯耆守様御兩所御立合、右忠勤を竭し候段、結構に御褒被成、爲御褒美鳥目十五貫文被下置候。尤大坂町中江不忠不孝之敎誡にも可相成之儀御觸有之、則左之通。

御觸紙面寫略す。

別紙之通誠に冥加に相叶、難有仕合、右褒美に被下候鳥目之内五貫文親仁右衛門江相送度旨、安兵衛申聞、神妙之儀に付、久寶寺町年寄戎屋九兵衛より仁右衛門方町役人迄紙面相添、文化十年六月五日に申越候事。

右覺書任一覽寫之、尤當所町會所江も及届候由之事。

〔政隣記〕

北久寶寺町五丁目小西屋する代判

彌兵衛別家手代　小西屋安兵衛

右安兵衛儀、加州金澤出生に而、九ヶ年以前卅年、當主人する夫源右衛門存生之内奉公に罷越、誠實に相勤候に付、四ヶ年以前午年町内之内へ爲致別家、通ひ勤致し、夜分は主家に泊り、家内・店方共萬事心を竭し候内、源右衛門病氣に取合、至而差重り候に付、安兵衛儀三

七日間食事を斷、水垢離致し、讃州金比羅江主人命乞之祈願を懸、誠實を盡候得共、源右衛門養生不叶相果候故、死後相續之儀、主家・親類內より安兵衛を可致養子樣內々致相談候得共、致辭退及斷、源右衛門死後者猶更大切に相勤、店方引受、家事向取締致し、忠勤を竭し候段奇特に付、爲褒美鳥目十貫文被下之候。

本年八月六日の條參照

五月十七日。前田權佐の家士橫川幸左衞門四人を殺傷す。

〔政隣記〕

五月十七日夕七時頃、前田權佐御家老役、領知三千七百石、內二百石與力知、上邸東御坊町後堀端也。有謂而當時木ノ新保町下邸內に居住、上邸者表長屋迄也。恒困上邸長屋內に、家來橫川幸左衞門与申者、年齡三十二歲、中小將組祿俸七人扶持、常々正實之質に而佛神を信仰し、朝暮讀經等不懈、いまだ妻子無之、母を孝養、母子睦敷暮候處、前月十八日主家小將組之內博奕一件に而、公事場へ呼出之節、右幸左衞門儀指添罷在候處、右小將組某之組柄等尋有之候處、知行四拾石、尤給人組に而近習在勤之段申答候に付、如公事場格橫杉戶口より與力誘引に而、板之間態与緣取鋪之候處へ令着座吟味之節、猶又奉行中組柄等直尋有之候處、小將組に而扶持方取之由本人申候に付、重而幸左衞門へ尋之處、不分明之申分に付、主家江預に相成、其後指宥後主人より指扣申渡置有之、愼罷在、母子咄居候內不斗刀を拔、母何心なく新た成蚊帳を仕立居候由。を大袈裟に切殺し、夫より長屋續隣朋輩給人組田中久太夫与申者、當時

病中之處踏込、折節妻者隣平井和忠太方江用事有之參居、久太夫之側に者十一歲之忰一人居候處、健氣成者に而、彼血刀を見るより有合蒲團を引立、父をかくまはんとする處を、早くも久太夫之頭鉢江切込、其流れ忰之首筋江一かせ、幷七の灸所邊、手首、都合三ヶ所淺疵を負せ、父久太夫者深手に而翌十八日朝死す。又幸左衞門儀、右和忠太方へ罷越候處、同人者久太夫妻へ致挨拶居けるが、右躰を見て先久太夫之妻を引退ん与する處を、右之肱江討込、深手に付少しためらふ內、幸左衞門立出門江向候處、門番人不在合、同人妻二階に居候得者、是へ下り候へ与詞を懸候處、右妻血刀を見て早速階子を二階へ引揚候に付、無致方候哉其儘邸外江出、血刀を鞘に納め、何氣なき躰に而厩町に罷在候伯母方江罷越、四方山之咄など仕懸候處、伯母者幸左衞門之氣色不啻不思議、殊に愼中長髮にて白晝も不憚、且敢而用事も無之に參候儀難心得存候內、主家より右伯母之所へ幸左衞門を召捕に向候處、幸左衞門者家之入口に帶大小刀を指置、無刀に而伯母与咄居候故、何ら苦もなく召捕、木之新保之邸へ召連、嚴重之縮所江入置、番人を附置、夫々被及屆、翌十八日公事場檢使與力罷越、同日及吟見屆等相濟候事。

附、於公事場小將組之者吟味之節者、小口より場附足輕指添出、土間上り口之板之間に令着座候。知行給人吟味之節者、本文之通之格に候事。

〔政隣記〕

前記十七日に有之、前田權佐家來橫川幸左衞門亂心躰一件之內、田中久太夫忰名久吉与いふ。久太夫妻江も疵付、則平井和忠太於宅也。且厩町伯母与有之者、伊勢屋與九郎妻也。將又幸左衞門隣に居住之權佐家來足輕大西友右衞門与申者當番之處、同人母屋敷江走行、幸左衞門母を切害等之趣共及案內候に付、追々駈付候處、幸左衞門儀邸內に居不申候に付、所々相尋候處、前記之厩町與九郎宅に居候に付、召捕連來、前記之通縮所へ入之候由之事。

但、翌朝幸左衞門に附居候番人、昨夕ヶ樣々々之趣如何之了簡に而致候哉与尋候處、一圓覺無之躰に而、左樣之事も有之候哉抔与、餘所事之樣に及答、全亂心之躰与相見え候由云々。

五月二十日。昨今兩日高岡瑞龍寺に於いて前田利長の二百回忌法會を執行す。

〔政隣記〕

瑞龍院樣二百回御忌御法事、於高岡瑞龍寺當五月十九日・廿日御執行有之候。依之三之御丸御射手・御異風稽古、幷諸組弓・鐵炮稽古、且又普請・鳴物之儀、御法事初前日より御法事相濟候迄指止可申事。

但、指急候普請等之儀は不及遠慮候。

一、鷹野其外諸殺生は、五月十四日より廿日迄一七日之間指止可申事。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。且又組等之内裁許有之面々者、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

三月七日　　奥村左京

〔政隣記〕

一、差定左之通

山門

文化十癸酉五月二十日。伏値瑞龍院殿贈亞相正三位聖山英賢大居士二百回之嚴諱。大檀越加越能三州之太守菅大君。就于當山屈二千三百指之僧伽。從前一日設大齋會梵修佛事品目列在。

十九日

寅　刻　　轉大般若

卯　刻　　獻粥諷經・三刹諷經・修禮懺法

午　刻　　佛殿上供・拈香佛事・獻供遶行

二十日

寅　刻　　轉大般若

卯　刻　　獻粥諷經・薦拔上堂

午　刻　　佛殿上供・水陸勝會・獻供遶行・御廟諷經

闔衆昭亮

于時文化第十星躔癸酉仲夏穀旦謹識

〔政隣記〕

一、五月十八日御寺惣見分有之候に付、諸役人等揃刻限四時之旨、御法事御奉行左京殿被仰聞候旨、支配人より夫々江前日申談有之。尤上下着用之筈之旨も申談。

一、十九日・廿日兩日江分、夫々拜禮之儀右同斷。

一、御施行米十九日・廿日百俵宛、高岡於大法寺御施行有之。奉行山村善左衛門・前田牽治郎、幷高岡町奉行一人宛出座。

一、淡路守樣御使者近藤甲斐、備後守樣御使者生駒源五兵衛十九日參詣。諷經惣持寺・寶圓寺・天德院・如來寺・高瀨寶圓寺。廿日同斷西田國泰寺・妙成寺・玉泉寺・繁久寺・勝興寺。

一、西本願寺御門跡より三部經入柳箱、御香奠判金一枚居臺。東本願寺御門跡より同斷。
一、高辻殿より御直筆御書寫般若心經入柳箱。於京都紫野芳春院御附御法事有之、銀二枚被納之。
一、四辻前大納言殿より御文章柳箱桐箱入。同宰相中將殿よりも同斷。
一、御茶一壺宇治星野宗以、御餅菓子菓子屋吉藏より献上。

〔政隣記〕

五月廿日瑞龍院樣二百回御忌御相當に付、昨今高岡於瑞龍寺御法會有之。

同日右に付四時御供揃に而寶圓寺へ御參詣。

五月二十日。御醫者池田養中に上洛して小兒科を學ぶべきことを命ず。

〔政隣記〕

付札、成瀬內藏助等江

御醫者　池田養中

右養中儀、御用有之京都へ被遣候旨被仰出候。御用之筋者於御次可承候。此段可被申渡候事。

於御次左之通。

池　田　養　中

右醫業爲勤學京都江被遣候條、用意出來次第致發足、於彼地に小兒科專門之方へ罷越、醫業可致修行候。尤於彼地者自分爲勤學上京之趣に相心得、萬端質素に罷在相勵可申候。此段可申渡旨被仰出候。

右於御次、今月廿日御用部屋申渡、六月五日發足之筈。

江戶詰並御扶持方會所銀等御渡、幷不時入用有之節相願可申候、依其趣可有御聞屆由。

五月廿四日。前田利長の二百回忌法會終るを以て瑞龍寺等を招請して能を觀覽せしむ。

〔政隣記〕

五月廿四日陰、時々微雨。今般瑞龍院樣二百回御忌御法事、無御滯相濟候に付、今日瑞龍寺等御招請に付、於表御舞臺御能可被仰付候處、依御省略不押立御招請、於奧御舞臺左之通御番組に而御能被遊、瑞龍寺幷勝興寺・寶圓寺・天德院・寶圓寺隱居・如來寺、且同伴之長老等百餘人拜見被仰付。

翁 加茂 御 忠則 佐七郎 松風 良之助

邯鄲 權兵衛 祝言金札 小三郎

麻生 幸助 寢音曲 藤九郎

五月廿四日。家族の宗門を異にする場合に許可を得べき前令を布告す。

〔政隣記〕

宗門之儀、妻・子者父・夫同宗罷成候儀者勿論に候得共、子細有之女・子之分、兩派に相成候儀者相願可申趣、前々より相觸置候處、近年者兩寺納得も承不申、願出申儀も無之、心得違之人々も有之躰、寺社奉行より別紙之通申聞候に付、正德元年以來相觸置候紙面之寫相添相越之候條、被得其意、猶又無違失相心得候樣、組・支配之人々江被申渡、組等之內裁許有之人々江も、不相洩樣被申渡、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

癸酉五月廿四日

前田伊勢守

長甲斐守

水越八郎左衞門殿

妻・子之儀父・夫同宗同寺罷成候儀者勿論に候得共、子細有之分兩派可相願旨、正德年中其後も每度被仰渡置候。然處近年者兩寺納得も承不申、尤願出申儀無御座、心得違之人々も有之躰に而、每度寺旦申分出來仕、宗門御縮方不行屆儀も御座候間、右躰心得違無之、右御掟通相心得候樣、御家中之人々を初、町・在之者共迄も一統夫々被仰渡御座候樣仕度奉存候。右

被仰渡候上者、尤寺庵方江も私共より嚴重可申渡置与奉存候、以上。

十一月廿七日

中川清六郎

竹田掃部

成瀬內藏助

長甲斐守様

前田伊勢守様

五月廿六日。犀川・淺野川の川除に塵芥を捨つる等のことを禁ず。

〔御觸抜書〕

犀川・淺野川川除江塵芥等捨置申間敷旨等之儀に付、別紙御普請奉行出候付、寫相越之候條、被得其意、組・支配之人々江嚴重可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江茂相達候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

五月廿六日

長甲斐守

犀川・淺野川々除江塵芥等捨、且竹籠等之上を殺生人致往來、別而夏中者水游人多、御普請所踏荒、猥成儀に付、右躰之儀無之様、是迄年々御達申上、一統被仰渡御座候得共、今以末

末心得違之者有之、其中に者川除土居を掘取、石垣を拔取申躰も有之、甚不埒成儀に御座候。將又殺生之品により瀨違仕候儀、川形に相障、御普請所之爲惡敷御座候。右等之儀に而御普請所致破損、出水之節之防に不相成候而者、第一川除を被設候詮無之、殊に不時成被加御修覆、無謂御不益之筋にも相成申候。依之川廻り之者等、格別烈敷相廻爲制、末々心得違之者不埒之躰及見聞候者、召捕候樣に申渡候間、右躰之儀無之樣、一統ゟ嚴重に被仰渡御座候樣仕度奉存候、以上。

酉五月十八日

神尾孫九郎

堀三郎左衞門

在遠所 中村求之助

同 三輪仙太夫

同 石川惣十郎

長甲斐守樣

五月廿九日。河北御門の當番與力等御近習頭の通行切手を拒みしを以て逼塞を命ぜらる。

〔政隣記〕

五月廿九日、左之人々昨廿八日河北御門當番之處、御近習頭御使番有澤才右衞門より御門通切手出之候處、與力衆中与宛所調越不申而者難通旨に而、右切手相返候に付、前々衆之字者不調之、與力中与調候例与申達候處、物頭以上者衆中与不調之候、右以下に而者衆中与調候前例之由申越候に付、右與力之内御次ニ呼出候處、長野甚右衞門罷出候に付、才右衞門逢候而、前々より衆中与は不調之、與力中与調候趣申達候處、甚右衞門者會得仕罷歸、於御番所檜葉太郎右衞門等ニ申入候儀、太郎右衞門等之四人一圓不致會得、切手不受取候に付、才右衞門等より關屋中務を以達御聽、中務より當番組頭横山引馬ニ、今日御近習頭与懸合候與力名前取立越候樣申談候に付、則引馬より申渡候處、彼是与及遲々、漸今朝四時過與力名前調越、則中務ニ相達置候處、今廿九日左之通御城代伊勢守殿、寺社奉行御用番竹田掃部ニ被仰渡。

奥村左京與力　檜葉太郎右衞門

今枝内記與力　長野甚右衞門

青山將監與力　福岡次郎太夫

但、才右衞門より與力ニ名前尋に遣候得共勤違申由に而不調越に付本文之通。

付札、成瀨内藏助等ニ。

同　　　　徳田千助

同　　　　二宮源二郎

右太郎右衛門等、昨廿八日河北御門一番組當番中、御用之品御近習頭切手を以指出候處、宛所與力中与有之候に付、衆中与無之而者難相通旨、再往及懸合候得共、幾重にも無左而者難相通旨申聞候。左候得者御用閊に相成候趣申入候得共、假令御用支に相成候共難相通旨申聞候に付、當番之内御次江罷出候樣紙面を以申遣候處、兩度迄相返候に付、御横目足輕を以申遣候處、漸罷出候に付及懸合候處、一向不致承引候に付、右之趣相達御聽候處、先以不心得千萬、無十方致形に被思召候。依之逼塞被仰付候。此段可申渡旨被仰出候條、可被申渡候事。

五　月

右に付寺社奉行御用番竹田掃部於宅申渡之。

本年閏十一月二日の條參照

六月十日。與力中山宅左衛門その妻及び妹を殺害す。

〔政隣記〕

六月十日、今日夕方津田玄蕃在江戸與力中山宅左衛門頭百石廿二歳儀、於自宅玄蕃下邸之内當時者小立野與力町細野四郎左衛門方妻幷妹を切害。翌十一日爲檢使御大小將横目高田久兵衛・大嶋三郎左衛門罷越見屆有之上、宅左

衛門儀不縮無之樣に与、代判横山大作ゟ申談退出。

六月十二日。繭を領外に賣出すことを禁ず。

〔郡方御觸〕

御領國出來之糸、惣而他國ゟ指出不申樣、前々より申渡置候通に候。然處蠶まいに而他國・他領ゟ指遣樣子に相聞え候。まいの儀者糸に仕立候品に付、輕き者産業にも相成、及絹出來高に拘り申儀に候條、已來糸同樣他國等ゟ出候儀指留候間、此段一統不相洩樣可被申渡候。心得違無之樣嚴重可被申渡候、以上。

六月十二日　　　　御算用場

進士求馬殿

中村逸角殿

六月十四日。朝鮮信使來聘に付き諸士より上納すべき高役銀の割合を示す。

〔政隣記〕

朝鮮信使來聘に付、高役金自・他國共都而御知行被下候人々、當酉年より末十ヶ年賦を以取

立候様被仰渡候に付、知行當り割合、身當り幷組・支配之人々より、其頭幷支配頭江十月中取立、上げ下げ草案之通相調、諸方御土藏江年限中毎歲十一月上納有之、右上納受取切手當場江日印請に可被指出候。

一、毎歲十月朔日之在知行高を以取立可申候條、身當り組・支配之人々知行高、幷交名等別紙草案帳之通相調、年限中毎歲十月四日切當場江可被指出候。

一、高役金一萬石に付金七十五兩之割合を以取立候に付、金一步以下者銀に而可取立儀に候。左候而者金銀入交り取立方にも混雜に相成候間、銀上納に相極候。就夫旣に公邊江銀上納之分者、御金藏相場を以御上納に候間、御家中等之分も、當町平均相場金一兩に付六十四匁宛之圖りに而、銀に直し年限中取立候。

但、百石に付四十八匁、同一ヶ年當り四匁八分宛可被取立候。

一、逼塞・蟄居・遠慮・指扣之人々も、一統之通可被取立候。

一、半知幷三ノ一之人々、其割合を以可取立候。

一、新知・御加增幷殘知・御引足知被下候人々、其年より年限中一統之通り可被取立候。

一、死去人半收納被下候者、半收納に當る分可被取立候。

但、追而跡目相續被仰付候上、殘半收納分御藏返米被下候之上、早速上納之事。

一、一統上納以後御知行被下候人々、其年より年限中割分之通可被取立候。上納銀之儀者、是又頭幷支配頭江取立、追上之分別紙草案帳之通相調、諸方御土藏江上納有之、右上納請取切手當番江日印請に可被指出候。

一、隱居料・役料・茶湯料幷與力明知取立不申事。

右之趣被得其意、組・支配之人々より可被取立候。此段同役中可有御傳達候、以上。

六月十四日　　御算用場

中川平膳殿

六月十六日。朝鮮信使來聘の爲百姓より上納すべき國役銀の割合を示す。

〔郡方御觸〕

朝鮮信使來聘に付、國役金村高百石に付金一兩宛、御領國中村々當酉年より末十ヶ年賦を以取立候樣被仰渡之候間、諸郡都而十村帳入草高、當酉七月朔日之調理高を以、十村一組切別紙草案帳之通相調、當七月中に當場江可指出候。尤增減有之候者、年限中其時々書付を以相屆可申候。

一、諸郡村高之內謂有之、役銀是迄不相懸分は指除可申候。

一、國役金村高百石に付金一兩宛之割合を以取立候に付、金一歩に不滿分は、銀に而可取立

儀に候。左候而者金銀入交り、取立方にも混雜に相成候間、銀上納に相極候。就夫旣に公邊ゟ銀御上納之分は、御金藏相場を以御上納に候間、國役金之分も當町平均相場一兩に付六十四匁充之圖りを以、銀に直し年限中取立候。

一、右上納期月、每歲十月中裁許之十村より、一組切別紙案文之通相調、諸方御土藏ゟ致上納、右奉行請取切手日印請、當場ゟ可指出候。

右之趣被得其意、諸郡ゟ夫々可被申渡候、以上。

六月十六日　　御算用場

改作御奉行中

六月二十日。江戶に於ける大聖寺藩の下屋敷火災に罹る。

〔政隣記〕

六月廿日江戶千駄木備後守樣御下邸より出火、四十間續之御長屋十三間御燒失。此方樣御近隣火消當番一杉山又吉（附、二は聖堂防之御手當也。）三金森大作御人數召連罷越、全消留之。右に付備後守樣御指扣御伺書、御用番御老中ゟ御指出之處、不及其儀旨御指圖有之。

六月二十日。金澤天神町の斷崖崩壞して家屋住民を害ふ。

〔文化雜記〕

六月二十日

一、天神町中程に罷在候越中屋甚兵衛与申者方、今曉七半頃右後高より崩れ候而、右家土に而潰れ、妻・せがれ二人・娘一人土の下に卽死致し、右甚兵衛儀未生氣有之候得共、土下に相成候事故餘程痛候由。右近邊に罷在候假御横目足輕罷出申聞候に付、駒井宗左衛門を以及言上候事。

六月廿四日。石炭試掘の爲め能登に人を派すべきを告ぐ。

〔郡方御觸〕

口郡深谷村　奥郡光浦村　同郡栃木村

右村々において石炭爲掘出候儀申渡候。

右之通申渡、當廿七日發足指遣候條、被得其意、夫々不指支様可被申渡、且又右深谷村等三ヶ村之外にも、石炭出申場所及申聞候得者、爲掘出候儀も可有之候間、此段も不指支様夫々可被申渡候、以上。

六月廿四日　　御算用場

進士求馬殿

中村逸角殿

六月廿四日。攝津多田院の勸化銀を知行割として上納すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

攝州多田院勸化銀、御家中より可差出分、先達而御取替を以阿部備中守殿𪜈被遣候に付、右銀高知行當りを以令割符候條、各幷組・支配之分、當五月廿九日之惣知行高別紙之通相調、來月十九日迄に當場𪜈可有御指出候。尤此段同役中傳達可有之候、以上。

六月廿四日　　　　御算用場

中川平膳殿

六月廿九日。寶圓寺等の祠堂銀を借受けたる諸士に契約の如く返辨すべきを命ず。

〔異本三守御譜〕

寶圓寺を初御寄附等祠堂銀借用人之內、年賦當り返上納方及延引候人々も在之、身當頭中等へ申達、其上にも不指出人々は、人別名書を以及御達申儀御座候。先達て御達申候通、近年御仕法被仰渡、利足格別相減候に付、其節諸寺庵甚難澁之趣被申立、容易に御請難致申聞候得共、以後渡方不指支趣爲申聞、漸納得仕候。然處每歲日切之通返納之分は、纔ならで無御

座候に付、數百人遲滯之分、共頭々之催促方彼是甚繁雜仕候。右催促仕候上にも遲滯在之人々は、及御達候趣に御座候へ共、右之族にては、先以御先靈樣方爲御菩提御寄附被成置候利足銀、且諸寺庵へ利足渡方遲々に相成、盆中御供養方等に差障、寺社所において取嗜方必至と指支、共上近年祠堂銀御仕法被仰付候御趣意も難相立儀に御座候間、祠堂銀借用之人々以來返納方、證文議定之通遲滯無之樣、兼て夫々被仰渡候樣仕度奉存候、以上。

六月十九日　　　　　　　　　　竹田掃部

奥村左京樣

六月廿九日御同人被仰渡、定番頭へ觸也。

七月朔日。金澤城奥舞臺に於いて素舞・一調等を演ずること八十餘番に及ぶ。

〔政隣記〕

七月朔日、於御奥舞臺御素舞幷一調・御地謠被遊、竹田權兵衛等江も素舞其外一調一管、三宅藤九郎等小舞都合八十番餘被仰付、御次廻御廣式懸り御歩並以上一統、御表詰合御歩並以上拜見被仰付。

〔政隣記〕

七月朔日

仕舞

芭蕉　権兵衛　土車御　佐七郎
鳥追　良之助　花月　佐七郎
西行櫻　十左衛門　巻絹　小三郎
歌占　忠蔵　是界　小齋
高野物狂道行御　八嶋　鉄次郎
富士太鼓　良之助　山姥　十左衛門
玉之段　権兵衛　女郎花　小齋
小歌　小三郎　鵺　忠蔵
照君御　殺生石　佐七郎
鵜之段　良之助　とほる　鉄次郎

脇仕舞

蟻通　甚助　雲雀山　次郎右衛門
和布苅　仝作　大蛇　甚助

檀　風　次郎右衛門　松　榮　仝　作
鷺　次郎右衛門

一調一管

音取　源兵衛　三井寺御　群　吾
田村　良之助　元　吉　勸進帳　權兵衛　猪之助
唐船　十左衛門　金　七　神　樂　養　助
蟬丸　小三郎　昌九郎　道明寺御　新之助
野守　佐七郎　覺右衛門　津　嶋　養五郎
江口　忠　藏　彥次郎　善知鳥　次郎衞門　嘉六郎
誓願寺御　豹九郎　揉之段　多喜平
百萬　佐七郎　尉五郎　俊成忠則　仝　作　六之佐
小塩　小三郎　牛之助　かつこ　作　助
東北　忠　藏　仝　順　笠之段御　勘三郎
葛城　權兵衛　彥十郎　早　苗　德　順
松虫　小三郎　昌九郎　花　筐　次郎衞門　猪之助

杜若　忠藏　覺右衛門
東岸居士　十左衛門　群吾
盤渉序　源兵衛
櫻川　甚助　嘉六郎
鈴之段　養五郎
二人静　忠藏　元吉
豐後下りは　多喜平
雲林院　十左衛門　六之佐
亂　德順
斑女　小三郎　猪之助

狂言小舞

海道下り　藤九郎
柴垣　幸助
盃　八左衛門
春雨　萬藏

獅子　養助
三輪　權兵衛　新之助
籠太鼓　良之助　彥次郎
國栖　良之助　牛之助
熊坂　佐七郎　尉五郎
氷室　甚助　彥十郎
錦木　良之助　仝順
春日龍神　仝作　豹九郎
柏崎　權兵衛　彥次郎
松山鏡　十左衛門　金七
鎌倉　乙九郎
雪山　恒之丞
小靫　次郎吉
宇治晒　榮可

菊之舞　藤九郎　仕吉　乙九郎
泰山府君　幸助　曉の明星　恒之丞
桑の弓　八左衛門　藥師　次郎吉
鶴龜舞　萬藏
以上

右朔日夕八半時に初り候處、夜九時前相濟。

七月十日。御普請奉行等に對し儉約勵行を命ず。

〔政隣記〕

左之通今月十日於松之間二之間、御勝手方御主附長甲斐守殿被仰渡。

御普請奉行
御作事奉行
會所奉行
割場奉行

御勝手御難澁に付御省略之儀、拙者共迄格別被仰出候趣有之、是迄之仕來等に不拘、可成品者可相改旨被仰出候に付、諸向減方之儀遂僉議候樣、御省略奉行江申渡候。各々者大場之儀に候得者、諸向江不拘格別減方之儀被遂僉議、被心付候品も候者、無泥追々可被申聞候事。

右同斷小異与云々。

七月十二日。御次廻に對し經費の省略を命ず。

〔政隣記〕

七月十二日關屋中務等依申談に、於御近習頭席披見物左之通、御次廻向々に申談有之。

御次廻奥・口共近年何となく相ゆるみ、自分御入用多相成候。今般格別御省略之儀被仰出候間、各手前に而取捌申儀者勿論、御近習向曁御次廻諸溜共、諸事綿密遂穿鑿、御入用に響申儀は、其手合より各に相達被相伺候上、夫々申談候様可致候。此段御次廻一統に被申談。其手合に而御入用減高等都而心付申儀者、細々遂詮議申聞候様、一統に可有御申談候。此段可申談旨被仰出候事。

酉　七　月

別紙之通拙者共に被仰出候條、可有御披見候。格別被仰出候に付、其手合々々に而御入用減方等、手先之者にも申渡、心付之趣有之候者、拙者共に可被申聞候。其上可及指圖候事。

七　月

右兩通御用部屋において、關屋中務等より御近習頭中に相渡之、如前記於御近習頭席、夫々に披見申談有之。

七月十七日。儉約の方法に關して御勝手方に調査を命ず。

〔御在國諸事留帳〕

七月十七日、左之覺書御勝手方席において兵部・掃部へ甲斐守演述。

一御借知御改之儀者、御政事に相懸候事故、御手繰方に無御貪着御改被仰付候處、其已來打續御物入多、當時過分之御借財に相成、此儘に而は被成方も無之場に至候に付、今般御省略之儀、拙者共迄格別被仰出候趣有之候。是迄は度々御節儉之儀被仰渡候得共、其詮無之候間、嚴重可遂僉議旨被仰出候。依之格別申渡候譯合有之、其役々において夫々僉議之上、格別相改候品も可有之候間、其趣を以御僉議可有之候事。

癸酉七月

七月廿一日。盛岡侯南部利敬使を遣はして自今諱に利字を用ふるも前田氏の許諾を請はざるを告ぐ。

〔政隣記〕

七月廿一日、東武本郷御邸江、南部大膳大夫様より御使者番頭役附此方に而者組頭也。白石環を以、御口上左之通。

殘暑之節御座候得共、彌御健泰被成御座珍重奉存候。將又實名利之字代々御無心相用來候處、只今に而者家之通り字同様に相成候事故、以來其度々御無心不仕相用申度旨、先頃御內々以使者申上候處、早速御許容被下忝次第奉存候。右御禮以使者申上候。依之手前相祝目錄之通進上仕候。此段從在所申付越候。

御進物　熊毛泥　五　指

鯛　一　折

七月廿八日。味噌・醬油の外數種の營業者に新に運上を課し株立とす。

〔政隣記〕

三州諸商賣人より運上役銀、從往古指上來候分雖有之、左之分者是迄無役商賣之處、御勝手方御席等に於て御僉議之趣有之、自今左之通運上被仰付候段、御算用場より申來、於町會所夫々申渡取立、御算用場江上納之事に相成候事。

金澤町之分左之通。但一商賣一統より左之通也。

銀　卅　枚　味噌・醬油・酢造人

銀　十　枚　金物商賣并鑄物師
銀三百目　組糸商賣
銀廿五枚　干菓子并砂糖商賣、但煎餅迄商賣之分除之
銀三百目　生菓子商賣、但蒸籠菓子出し候分迄
銀六百目　紙商賣人
銀五十五枚　鬢附商賣、內四十枚者木倉屋長右衛門、十五枚者惣鬢附屋
銀三貫目　藥種商賣并合藥他國藥取次人
但銀四十八枚者藥種屋、九百三十六匁者合藥商賣等
一人銀一枚宛　漆商賣
一人銀一枚宛　人形雛商賣
銀卅七貫五百目　質屋百五十軒
但是迄指出候株銀除之、外に三軒寺社門前地當町に可集事。
銀五十枚　錢商賣并兩替共
銀三十枚　小間物商賣
但おろし方并おろしに準候仕入方之者共。

先是迄之通可取立事　　呉服商賣

附、以上者尤一ヶ年當り之上納也。

一、小間物・紙屋商賣人外、味噌・醬油等商賣人之儀者、以來人數可相極事。

一、是迄商賣肝煎等有之、打銀指出候商賣之儀者、此度役儀申渡候外、有來り候通打銀可指出候事。

右之通今般商賣役立之儀、僉議之上御勝手方江相達、今年より古役銀・散小物成銀江結込致上納候樣、御算用場より申來候。尤人別銀割方之儀者、追而遂僉議可申渡候。此段先右商賣人幷商賣肝煎共江可申渡候、以上。

酉七月

淺加三左衛門

前田清八

木村左助殿

味噌・醬油・酢造商賣　　金物商賣　　組糸商賣

干菓子・砂糖商賣　　髮附商賣　　蓑・笠商賣

人形雛商賣但京都より取寄三月前賣候者　　生菓子商賣但蒸籠出し候者　　漆商賣

右商賣役立に相成候に付、此度人數相極可申儀に付、右商賣仕度存寄候者は、商賣之株に指

加り申儀不指支候條、遂僉議、望之者は來月六日迄に名書指出候事。

酉七月二十八日

右之通肝煎等江夫々申渡有之、夫より組合頭江申渡候由之事。

本文七月にあり

七月。前田齊廣夫人禁裏・仙洞へ物を上る。

〔政隣記〕

御前様より御内々御献上。

禁　裏　江　　御硯箱・御硯屏。御壁方堀越左源次細工。

仙洞御所江　　染繪御懸物二幅對。

中宮御所江　　染繪大色紙二十枚。

右先達而御献上之儀御願候處、早速御聞屆に而御献上与云々。

本文政隣記七月にあり

七月。金澤の町人齋田屋吉兵衛等常芝居興行の許可を請ふ。

〔政隣記〕

才川　齋田屋　吉兵衛

觀音町　布屋　治助

右兩人より、蕎麥切給仕女召抱置候一件之願書付指出之、年中役金千五百兩運上可仕旨相願

候由云々。併常芝居も興行、右に付願書指出候由云々。

七月。百姓にして先祖の扶持を受けたる印物を所有するものは之を藩に提出せしむ。

〔筒井舊記〕

諸郡十村等之内、御扶持高拜領被仰付候節、其時に御印物被成下、其者病死之節、身當り御印物幷に先祖之者ゟ被下置候御印物茂一集に指上、追而子孫之者ゟ御扶持高被下候得者、右先祖ゟ被下置候分茂御渡、當御印物頂戴被仰付候古格に候處、近來右振合致相違、先祖之者ゟ被下候御印物御渡方茂無之、將又御扶持人跡之者役儀相勤候者は、被下置候先祖之御印物茂不指上候得共、今般古格之通相改可申段御達申上候處、其通に被仰渡候間、當時御扶持人之外、先祖ゟ被仰付置候御印物致所持候分者指上可申候。尤御扶持人致病死候節者、先規之通早速指上可申候。當時御扶持高拜領之者、先祖ゟ被下置候御印物は夫々相渡可申候、以上。

七月　　寺嶋藏人

萩原源太左衛門

諸郡御扶持人・十村・新田裁許・山廻中

猶以當時致所持候御印物しらべ書、先達而指出候得共、相洩候分有之候之間、細に相しらべ不殘指出可申候。尤組裁許之內、百姓致所持分茂遂詮議指上可申候、以上。

七月。金澤中島町に於いて相撲を興行す。今月は七月

〔政隣記〕

一、今月中旬於淺野町々端相撲興行。富山產之趣を以、他國相撲取も呼寄見物夥敷有之云々。爲冥加棟取人より銀五貫目令上納候事。

〔歲々略曆〕

淺野川河下中嶋町にて、八月上旬より日數十日間くわんじん大角力興行有之。兩大關東ひをどし、西鬼面山。行司式守鬼一郎殿下御前にて行司相勤る。依而土俵場上草履御免。

八月三日。金澤城內に落雷す。

〔政隣記〕

八月三日天氣宜蒸炎之處、未刻大雷數聲大雨之處、申刻より霽晴、酉之刻大雷數十聲、東風大に烈く大雨、戌の上刻より靜謐、雨霽風止、朗夜となる。

右未の刻雷二・三ヶ所ゟ流落、其所者不慥。酉之刻雷御城中鶴之丸栂之木ゟ落、梢に火燃半時計不消。二之御丸御膳所より慥に見え、泊番御近習頭中より御横目ゟ申談、則押足輕自分

に遣候處、木之下者無別條候得共、木之屑夥敷落散有之、右申談有之刻者最早火消有之。翌四日朝重而御供押見分に遣候處、右梅根元より梢迄大概十三間計も可有之候處、半分より梢迄は横一尺計之溝付候樣に成有之候由。泊番組頭菊池九右衛門より承に付記之。且又御城外小將町・堂形・味噌藏町邊等、五・六ヶ所江も流落、其所不憶。皆々喬木少裂候等迄之事に而無別條、其內安房坂下岡田長十郎（頭千二百石、御馬廻、井上井之助組）宅表厠之屋根江落、下江拔落損候由云々。

右雷雨風、晝夜兩度共從御城東向之方大に强し。長町等西向之方者不强由云々。

〔文化雜記〕

八月三日

一、今晩六時過鶴之丸內御武具土藏邊、雷流候樣子に而松之梢に火燃付有之に付、御横目足輕指遣爲致見分候處、三御丸幷鶴御丸等段々致見分候處、何も相替無御座內、御武具土藏番人江相尋候處、先刻雷鳴候節右御番所邊に雷落候樣相覺申段申聞候に付、則致見分候處、右大木之下に枝葉等碎餘程落有之に付、右御番所邊此間枝下し等無之哉番人江相尋候處、左樣之儀も無之旨申聞。猶更得与右大木之邊致見分候處、雷落候躰に相見え申候得共、夜中之儀枝損等之儀爾与相分り不申。右罷越候刻は火燃候躰無之旨御供押等申聞、右碎落居候枝少々致持參候。右之趣里見七左衛門を以及言上候所、右碎候枝指上候樣被仰出、同人を以指上候

事。

同四日

一、夜前御武具土藏邊雷流候躰に付、前記之通見分、夜中之儀得与不相分旨申聞。依而今朝御供押見分に指遣候處、御武具土藏附足輕番所後、十三間計有之候栂木、根元より七・八間計上り、幅一尺計に而梢迄皮付等碎有之旨。右後の方四尺計枯有之に付、右番人へ相尋候處、以前より枯有之旨申聞候。右之外相替儀無之旨申聞候に付、重而及言上候事。

八月六日。前田權佐の臣横川幸左衞門、先に人を殺せるを以て磔刑に處せらる。

〔政隣記〕

八月六日下口於桃ヶ坂、左之通御刑法被仰付。

磔　　中小將　横川幸左衞門

附、今年五月十七日之依一件也。其節者記之通全亂心に而之所爲に候處、其後本心に復り、公事場於牢中も甚後悔有之候由云々。

右檢使御先手物頭前田牽次郎・本保常右衞門。公事場附横目煩等に而指支、假御横目河地松之助。

八月十三日。倹約實行の爲武具の製造を減ずべきことを定む。

〔御在國諸事留帳〕

八月十三日

一、左之通關屋中務を以被仰出。

當時御財用必至与御指支之趣、追々御勝手方より申上被聞召候付、御省略等之儀格別に遂詮議候様、甲斐守等江被仰出候。依之御當地幷小松御武具方曁御細工所・御弓矢方・御鐵炮方・火矢方出來之品々、一ヶ年二・三品程充出來相延、當時御入用高相減候儀遂詮議、尙更被相伺候様被仰出候事。

八月

八月十四日。鞍細工人中西重藏の鞍木を求むるが爲能登を巡回すべきことを告ぐ。

〔筒井舊記〕

長甲斐守家來鞍細工人　中西重藏

右鞍木爲見分支配所江罷越、御用立候木柄も有之候得者、極印之儀茂可申談候條、夫々不指

支様可申渡旨、御用部屋戸田與一郎より申談に候。且右御用に付道案内幷杣極印打候役人等、右重藏より斷次第可指出旨。尤重藏儀近日之内に出足、新川郡ゟ罷越、夫より直に支配所ゟ相廻候由御廐より茂申來候條、得其意、諸事不指支様可申渡候、以上。

酉八月十四日　　　　中　村　逸　角

能州四郡十村中

八月十六日。御郡奉行、儉約の實行に關する意見を御扶持人十村に求む。

〔諸書物留〕

御勝手御難澁に付御省略之儀、年寄中迄格別被仰出之趣在之、是迄之仕來等に不拘、可成品者可相改旨等被仰出候に付、諸向減方之儀遂僉議候様御省略奉行も被仰渡候條、御算用場は御財用根元之場所に而、諸方之目當にも相成儀に候得ば、諸向に不拘格別減少無之而は難成候間、各遂僉議、心付候品も候はゞ無泥可及御達旨。尤右之趣御郡奉行を初御算用場に屬候役人ゟも夫々可申談旨、御算用場奉行中ゟ就被仰渡候、猶更拙者共ゟ右之趣申談に候條、是以後其旨可相心得候。尤寄々同役中等ゟ面々より可申談候、以上。

酉八月十六日　　　　中　村　逸　角

進　士　求　馬

本江村　惣　助
折戸村　源　助

今廿日は八月

八月二十日。役銀奉行鈴木半藏所管の銀子を費消したるを自首す。

〔政隣記〕

小原惣左衛門組御馬廻四十九歳
二百石　役銀奉行　堅町　鈴　木　半　藏

右半藏等江御預銀之内、御算用場江當分御振替有之候處、渡方指支候譯は、文化五年河北郡十村手代塩屋庄七与申者、自分手形を以銀七十六貫目致借用度旨無據申聞候に付、半藏一存を以貸渡置候處、其内庄七致病死、本切手与抜替候儀難成に付、先達而有躰に御達可申上候處、御縮方も相立不申趣に付、其儀も不得仕候故、當時御かね不足に相成候段迷惑至極奉存候段、今廿日朝頭小原惣左衛門宅江半藏參出申聞、紙面も指出候に付、先急度自分に指扣罷在候樣惣左衛門申渡、右紙面に加奥書御用番監物殿江御達申候處、追而御紀有之候迄一類江御預被成候段、御覺書を以被仰渡候に付、則類中新番頭田邊判五兵衛・御大小將組不破新藏・御馬廻組武藤主計・中村平次兵衛・上月賴母呼立相斷、富永右近右衛門立會、半藏幷判五兵衛等江夫々申渡、御請夫々取立有之候事。

役銀奉行　　組外　堀　重　藏

右重藏儀追而御尋之趣有之に付、先急度指扣被仰付候段、御用番監物殿被仰渡、支配頭久田義兵衞於宅、相頭吉田佐次兵衞立會申渡之。

附、鈴木半藏一件不心付に付自分指扣伺候處如本文云々。

〔政隣記〕

十二月二日、今日於公事場鈴木半藏御糺之趣有之に付、實兄武藤主計等指添罷出、尤頭小原惣左衞門も出座、公事場奉行中糺有之候處、不屆至極之趣有之に付、牢揚屋江被入置候段申渡有之、夜八時相濟候事。

但、役所銀之内十九貫九百目餘不足之糺有之候處、此内十三貫計者寛政七・八年之頃より、折々四五百目計宅江取歸り候。七十貫目餘者十村手代江貸遣候旨。

〔政隣記〕

文化十一年六月十五日

鈴　木　半　藏

一昨十三日於牢中病死。

但落着は追而被仰付次第可申談、先右之趣一類に相達候樣、公事場奉行御用番永原久兵衞より頭々江申來候に付、河内山久太夫・小原惣左衞門より夫々一類江申談候事。

八月廿二日。中村八兵衛役銀奉行在勤中職務を怠りしを以て指扣を命ぜらる。

〔政隣記〕

中村八兵衛

右頭河内山久太夫に、今月廿一日御用番横山監物殿より被仰談儀有之候條、追付可致登城旨依御紙面、則登城之處、八兵衛儀役銀奉行在勤之内、同役鈴木半藏儀、文化五年河北郡十村手代塩屋庄七自分手形を以、御郡打銀之内七十六貫目當分借用仕度旨無據申聞候に付、半藏一存を以貸渡、追而本切手与拔替候筈之處、庄七致病死、本切手に難拔替、右御かね高不足に相成候旨半藏申顯候。半藏一存を以貸渡候旨に候得共、過分之銀子御かね入拂相しらべ候節可心付儀、且右樣之切手を以御かね貸渡候儀も、必不審に可申筈之處、如何之譯に而在勤中不心付候哉、八兵衛手前委曲相尋候而御達可申旨、監物殿覺書を以被仰渡候に付、則八兵衛河内山宅に相招、相頭辻平之丞立會に而尋有之候處、一圓存不申旨、且御かね入拂しらべ仝不仕儀、不念之趣等申聞に付、口上書取立。右之趣に付、八兵衛先自分に指扣可罷在与奉存候旨紙面指出候に付、先其通相心得候樣申談置、右紙面加奥書、翌二十二日口上書共夫々御用番監物殿に相達候處、猶追而御尋之品有之迄、先急度指扣罷在候樣可申渡候旨、御同人・

今月は八月

覺書を以被仰渡候に付、河内山宅ゟ呼立、辻平之丞當病に付、御用番菊池九右衛門立會に而申渡候旨、河内山氏廻狀に付記之。

金谷御門四番組御番人中村八兵衛代番　中村八之助

右父八兵衛先自分に指扣に付、八之助儀翌廿二日より御番指除候旨等、河内山氏より廻狀之事。

〔御預人之記〕

中村八兵衛、三百石御馬廻七十四歲。文化十年春迄役銀奉行相勤罷在候處、歲罷寄、依願御役御免。然處右勤中、同役鈴木半藏張本に而、役所御銀七十貫目餘引負之由に而、同年八月廿日半藏一類御預、悴某此時分出奔也。半藏は同十二月二日禁牢。翌年六月十五日牢死。八兵衛此月まで一類御預、十七日被仰渡、十八日品川主殿景武三千石、内七百石與力知。ゟ御預。十一年正月廿八日入牢、同年六月十六日牢死。養子八之助、最前一類御預、父死去之上御免、家財被下之旨、同七月四日被仰渡。

九月十三日。年寄村井又兵衛産物方主附御用を命ぜらる。

〔政隣記〕

九月十三日

産物方主附御用被仰付　村井又兵衛

右に付今十六日、又兵衛殿手先御用左之人々江被仰渡。

組外年寄衆席奥之間与兼　原篠喜兵衛

與力年寄衆席留書与兼　山本助三

與力御城方与兼　堀馬右衛門

御算用者小頭並御勝手方執筆与兼　齋藤丈助

御算用者最前御家老方執筆　永井儀八郎

〔政隣記〕

九月十六日

定番御歩先年産物方勤

産物方御用　伊藤孫右衛門

九月十四日。前田齊廣金澤を發して參覲の途に上る。

〔政隣記〕

九月十四日御發駕、御見立人六半時揃、御供人五時揃に而、九時過益御機嫌克御發駕。共節御作法如前々。今夜御泊今石動、明十五日高岡、十六日魚津、十七日泊、十八日糸魚川、十

九日高田、廿日牟禮、廿一日榊、廿二日小諸、廿三日松井田、廿四日本庄、廿五日鴻巢、廿六日蕨御泊に而、廿七日江戸御着之御日圖に候事。

〔御在國諸事留帳〕

九月十四日

一、今日御發駕に付、年寄中等六半時過より段々登城之事。

一、九時前御居間書院江御着座、御近習頭坂井要人を以年寄中一切、右近一切、御家老・若年寄一切被爲召御意有之、座上より御請申上退去。但、御供助右衛門儀は右之節不罷出由之事。

一、九時過御機嫌能御發駕被遊、御先立掃部相勤候事。

〔政隣記〕

御旅中越後國山之下雅樂驛御宿渡邊七郎右衛門方に、如御例被遊御小休候に付、御供小拂御算用者吉田彌五郎御先江右七郎右衛門方江罷越候處、七郎右衛門父彌七郎（髮多く、白髮少々交、齒達者、目相應に達者、耳は至而近、六十歲計に見得候由云々。）与申者當年八十八歲に相成、護國院樣御代以來御宿仕、當御代に而御七代之殿方を奉拜、及八十八齡に候に付、何卒献上物仕度候段、右彌五郎江申聞候に付、不時献上物は御受納不被遊趣一往は申入候得共、外に御大名衆曁國主榊原式部大輔殿江も献上致し候旨等、段々無據趣共申聞相願、其上御七代樣之御宿仕格別之者之儀、如何可致哉与思量之內、

御先詰御近習頭山崎小右衛門罷越候に付及内談候處、追付御着之間、於此所伺候事ニ成間敷与之事に付、其日御泊糸魚川御泊迄持參申談、則其繞大鮑五一折彌七郎持參、其委曲達御聽候處、從護國院様御代々至 御通行之節御宿仕候者、當年迄無異罷在、今年八十八歳に罷成候儀珍敷被思召候由之被仰出に而、右獻上物被遊御受納候。依之方金二百疋御目錄を以頂戴被仰付、右彌五郎等より相渡之候處、殊之外難有り候由云々。

九月廿五日。臼井虎右衛門その小者を手討とす。

〔政隣記〕

一、定番御馬廻御番頭上木金左衛門組臼井儀兵衛長町六番丁せがれ虎右衛門儀、家來小者田内を令手討、左之通書付出之。

私家來小者田内与申者、不奉公之趣有之、せがれ虎右衛門叱候處、手向申に付不得止事、虎右衛門儀今廿五日八時過手討に仕候。依而死骸其儘指置、番人附置候間、檢使之儀公事場御奉行家に被仰達可被下候、以上。

酉九月廿五日　　　臼井儀兵衛

上木金左衛門殿

右趣意者、田内儀を、昨廿四日・今廿五日爲高構頭谷高之山に儀兵衛罷越候供に召連候處、

連朔之山供不快之躰に而跡ゟ下り、法外之趣申聞候に付、先ゟ歸候樣申付候得者、其儘走出歸、色々雜言申候に付、儀兵衞幷せがれ虎右衞門相同じ、臺所ゟ出田內を叱候處、返答も不申聞に付、虎右衞門嚴敷叱候處、何等之儀も不申聞飛懸り候に付、突放切伏、都合四刀に而切殺、外咽を一刀刺置之。檢使雍左衞門等死骸見分之上、外相替儀無之に付、請人共ゟ相渡、勝手次第取置候樣に申渡相濟。且虎右衞門儀居間刺し短刀を帶罷在、右短刀に而及殺害候段等、頭金左衞門ゟ兩人より以紙面及届候事。

九月廿六日。京都河原町に於ける加賀藩邸の隣屋を買得す。

〔內外國事記〕

家屋鋪之事

一ヶ所　二步五厘役　河原町通下丸屋町之內高瀨川端西側

表口四間四寸・裏行六間

北隣　納所屋仁左衞門

南隣　柏　屋　ま　つ

右者惣表口十七間、裏行十五間有之、一ヶ所一軒役に而、柏屋宗七所持之節、天明元年丑九月右家屋鋪間數二ヶ所に仕切、東之方に而表口六間裏行九間四尺一寸に半軒役相付所持仕

度、新沽券狀に御割印頂戴仕、其後買得讓傳に相成、文化四年卯六月柏屋龜三郎より私買得仕所持罷在候處、此度勝手に付、右間數二ヶ所に仕、裏之方に而書面間數之通仕切、尤東者高瀬川端道筋に付表口に仕、二步五厘役相付所持仕度奉存候。相殘表之方間尺之儀は、二步五厘役相付所持仕度別紙に御割印奉願候。依之是迄頂戴仕罷在候沽券御割印奉返上、此度相改候沽券狀に御割印奉願候。尤家屋敷に付、親類・緣者共外他所より出入指構毛頭無御座候、以上。

文化十年酉九月

持主　納所屋仁左衛門　印

五人組　近江屋仁兵衛　印

近江屋六右衛門　印

梅津屋九八郎　印

右之通御座候、以上。

町代　山內勝介　印

松原政五郎　印

永代賣渡申家屋敷之事

一ヶ所二步五厘役　河原町通下丸屋町之內高瀬川端西側

銀子の次受取脫歟

表口四間四寸

北隣　納所屋仁左衛門

裏行六間

南隣　柏屋まつ

右之家屋敷我等致所持候得共此度要用有之に付、代銀四貫目に其方江賣渡、銀子候儀に付、親類緣者其外他境幷他之障毛頭無之候。若以來如何樣之儀申出候共、急度埒明可申候。爲後日永代賣券狀依而如件。

文化十年酉九月廿六日

賣主　納所屋仁左衛門　印

五人組　近江屋六右衛門　印

同　海津屋九八郎　印

右五人組

吹擧人　近江屋仁兵衛　印

高倉四條下町

賣請人　納所屋喜兵衛　印

堀昌安殿

右之通買得相違無之候、以上。

町代

山內勝介　印

松原政五郎　印

左券にして表書に。沽券狀但質物に入候得者內貫目貸候事。

九月廿七日。前田齊廣江戶に着す。

〔政隣記〕

十月三日、今般御參勤御道中無御支、御日圖之通御旅行益御機嫌克、前月廿七日被遊御着府候段、從江戶今日申來。

十月朔日。前田齊廣登營して參覲の禮を行ふ。

〔政隣記〕

十月八日、江戶より今日左之通申來。

九月廿七日就御着府に、同廿九日上使御老中青山下野守殿を以、御懇之被爲蒙上意。今月朔日前日御老中方依御奉書御登城、御參府之御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意。且又奧村助右衞門・津田玄蕃御目見被仰付、御前例之通萬端御都合克被爲濟候事。

〔政隣記〕

十月廿一日前記八日に有之通、助右衞門殿・玄蕃殿御目見之節玄蕃殿献上之御氈之內に、一寸計損じ有之。聞番より御城坊主衆等江申込、內分取計、御上に御貯用も折節無之に付、從

金澤到來次第取替に相成候筈之事。

但、內分取計方に付、御所落雁百枚・肴一籠に而相濟候筈之旨云々。献上以前に右損じ有之段相知候得ば、內分取計方甚六ヶ敷、容易之事に而は不相濟前例之由云々。

十月十五日。前田齊廣の女芳姬盛岡侯世子南部利用との緣組を內約す。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

十月十五日。芳姬樣南部大膳大夫利敬公御嫡吉次郎利用公江御緣組御內約御取遣。

十月十六日。越中高岡に於いて一時講と稱する富突の初會を催す。

〔政隣記〕

一、越中於高岡一時講与申名目を以、富突興行相願候處、就御聞届、十月十六日初會、都合十五會之由。札一枚之料金百疋、卷軸突當り銀十貫目、其次七貫目、其次五貫目。惣札料銀七十貫目之內五十貫目は突當り之札主江褒美、十貫目者爲冥加上納、十貫目者雜用等所德之圖り之由之事。

附、惣札數五千枚与云々。松・竹・梅之三段也。

〔政隣記〕

前記高岡一時講富突者、同所關野社於境內盲人突之、松・竹・梅之三連突札數九十枚、幷左右・

彌左右共花鬮札百九十八枚之褒美銀、前記之通五十貫目之縮札渡。銀渡棚田屋小左衛門・棚田屋小右衛門也。札料金百疋代錢一貫六百文、幷褒美銀者百目代錢十貫文之圖りに而、双方共鳥目之取遣圖り也。尤褒美奕揚翌日渡之、札与引替に而取次人印形を以可相渡定。且又札紛失幷落失或は損じ候斷不承届定也。

附、賞銀本文之通百目十貫文指に而、取次人小賣人江之祝儀、御宮御初尾、座頭江之祝儀等引候而、取主へ八歩五厘之割を以、譬者十貫目之取主江者、八百五十貫文手取之圖りを以相渡之候定之旨等、板行之書面流行、任一覽要文記之。

十月。百姓及び頭振の金澤に出でゝ止宿せんとするものは十村の指紙を受くべき前令を勵行せしむ。

〔筒井舊記〕

御郡方百姓幷頭振共、金澤町江用事有之罷出致止宿候者は、其時々裁許之十村江相達、指紙を請罷出候之樣、每度嚴重に申渡置候之處、近年甚猥に相成、勝手次第に罷出、種々取組之趣諸方江致申込、不埒至極候躰に相聞え候。先以御縮方に茂指障り、沙汰之限りに候條、以後指紙を不請者は、一圓罷出不申樣嚴重可申渡候。如此申渡候上我儘に罷出候者於有之者、急度咎可申付候條、一統嚴重可申渡置候、以上。

酉十月

諸郡御扶持人・十村中

諸御郡奉行
改作奉行

十月。非人小屋に收容せらるゝ者の私に蓄錢するを禁ず。

〔國事雜抄〕

於非人小屋、十文錢或は五文錢と歟申名目にて、除錢いたし候もの共有之躰、粗承およひ候。左候ては、撫育方貸付返上並除錢に指障候儀と存候條、以來右樣之儀無之樣可被申渡、且又先年布晒場に撫育方へ引請置候地面に、來早春桑苗爲植候。尙其節肝煎より可相達候間、左樣可被相心得候事。

酉十月

十一月三日。能登口郡の藩有竹林に關し意見を上申す。

〔諸書物留〕

態致啓上候。寒冷之砌、各樣御安全御勤達可被成与珍重奉存候。然者先日は、御林藪所村々役人共御呼出、御申渡之趣役人共より申聞、委細致承知候。就夫村々役人呼出、猶更遂僉議候所、村により步數莫大に在之御藪等は、步數相減、惣廻り嚴敷垣も仕、其上手入仕候はゞ、

寸廻り太き竹も生立可申哉与申聞候得共、元來御林藪之儀は、往昔第一爲御軍用御立置、勿論竹束には小唐竹御用ひ之由に而、竹之大小に不拘、地廣に御林藪御立置之由承傳罷在申候。當年抔之様に、川除方御用には隨分太き竹は宜候得共、私共承傳罷在候御軍用方には結句小唐竹之方宜与申儀。左候得ば容易に歩數相減申儀如何敷奉存候。併私組下之内にも、過分之歩數小村に而何分手入方等不得行届、各様御承知之通、近年格別之被仰渡に付、無據組下村々より人足多指出、御藪下苅幷垣も爲仕候得共、前文申上候通小村故、以來垣等仕儀手におよび兼候間、歩數御減少、一ヶ所に被仰付候様、其節私より小紙を以御達申上置候處、其後何等之被仰渡も無御座、御承知之通に御座候。右古城村御藪之儀は、迚も是迄之御藪所之通に而は、折々下苅曁垣等仕儀は致兼申趣に御座候。

一、矢田村御藪所も莫大之歩數、其上右歩數之内一向竹生立不申所も御座候躰。此場所も竹生立不申所は指省、以後御藪可相成分相しらべ書出候様申渡候間、古城村・矢田村御藪所之儀は、猶更各様御見分、御相談之上追而願上度奉存候間、左様御心得可被下候。

一、右二村之外御藪所は、村方に而は減歩も致度様に申聞候得共、前文申上候通承傳之趣も御座候得ば、私より減歩願上候儀如何敷奉存候間、右等之譯御奉行所江御内意御申上、其上被仰渡次第に相心得申度奉存候。同くは二村之外は、是迄之通歩數に被成置可然、尤江曾村・

二宮村等之地廣成御藪所、垣抔仕儀は村方迷惑致候間、有成に仕置、時々下苅之儀は各樣御見分之上御相談も被下候樣仕度、左候得ば竹相育候樣猶更勢子方嚴重可申渡候。
一、二宮村等五ヶ村之分下苅願書付指出申に付、別紙指進申候間、先づ此分御聞屆御座候樣仕度奉存候、以上。

文化十年十一月三日　　　　武部村　四郎太夫

所口山廻中樣方

右は御藪所村々役人中、所口山廻中方に呼出、御林藪御縮方等之儀度々奉行所より被仰渡在之所、一向手入も不仕、夫故宜竹も出不申、當年川除方御用竹も無數、元來村方百姓持藪は竹も相應に出候所、御藪に限り宜竹出生不仕儀は、村方役人縮方不行屆候間、村々御藪之廻り垣も仕、竹子出生之時分は番人格別嚴重に相廻、下苅之儀も折々申斷手入仕可申。併地廣成御藪所等は、假令步數を減候而成共以後宜竹出生候樣可相心得。尤右之趣裁許にも可相達旨申聞候に付、猶更村々役人手前相尋候上、右之通書狀遣候事。

十一月七日。前田齊泰と緣組を約したる高松侯松平賴儀の女歿す。

〔政隣記〕

十一月四日律姬樣御四歲嗣君御緣女讃岐守樣御女也。御滯之處、不一通御病症之旨申來、同夜江間笹齋被遣、御近

習頭里見七左衞門指副罷越。然處御療養不被爲叶、七日曉御卒去。依之普請者一日、諸殺生・鳴物等者三日遠慮之旨、御横目所より小屋觸有之。

十一月八日。是日以後能登口郡の百姓等貸米の不足を訴へて騷擾す。

〔眞館諸書物留〕

一、文化十年凶作に付、口郡百五十五ヶ村、幷後山分一ヶ所、定免新開四ヶ所御見立相願候處、御見立爲代御貸米一萬二百石被仰付。尤御達申上願村は不及申、指除村・御請村手作・請作高位付を以、一統江貸渡候所、願村之者共御見立代御貸米を、右之通御請村迄も貸渡候事難心得抔与申歩行候由。是等者本江村惣助仕業与にくみ申樣子相聞候。

一、十一月八日鵜川村喜三兵衞元組、子浦に而本江村惣助御用取捌役所へ願村々役人中罷出、御貸米被仰付候得共、村毎間米多難澁仕候間、延御拂米奉願上吳候樣申聞候得共、一圓不相成理介申渡相返候。尤御請幷指除村も同事願に罷出申心得に候得共、願村々江申渡之樣子承り罷出不申候。

一、十日夜四つ半時頃、右子浦役所へ押水邊之者与相聞、人數凡二百人計罷越、御貸米被仰付候得共、少分に而一同及困窮候抔、其外惣助惡口色々申聞候に付而退散いたし候。

一、同十一日夜人數百人計、本江村惣助門前迄罷出候に付、本江村惣助父子罷出相尋候處、

間米本の儘

理介は理解

惡口の次脱文あるべし

當作難御貸米被仰付候得共、過分入不足、皆濟相勤不申旨申聞候に付、夫々申渡相退候之趣、惣助より御内達申上候。

一、同日四つ半時頃、春木村小山之方に大勢高聲、竹の筒・貝抔吹申音相聞候。御内達申上候。

一、同十二日夜四つ時頃、人數百五十人計本江村惣助門前迄罷越候に付、惣助父子、幸府川村兵衞も罷越居候に付、一集に罷出相尋申候處、酒井組・能登部組百姓之由申聞、御貸米少分至極、御收納皆濟不得仕旨、其外十四・五年已來高方御仕法被仰付、難儀仕候間相止候樣、十ヶ年以前手上免・手上高被仰付候村々、別而難儀仕候旨、且又給方仕法相立直段安く成、下々難儀之筋在之相止候樣、將又御上御城御燒失之御御冥加銀上置候處、御返し被下候所、惣助引込相渡不申抔、其外惣助身分之事、聞にも氣の毒成事共雜言を申候に付、夫々品能申諭爲相退候趣御內達、惣助より申上候。

一、右之內百人計、直々酒井村一樂方江罷越候に付、一樂罷出相尋候處、御貸米少分に候間、相願呉候樣歎に罷出候与申聞に付、一樂より品能申入候內、長樂寺初寺々之かね鳴り候に付相退候。無左ば能登部下村與三右衞門方江も罷越候樣申居候由。右之趣一樂より御內達申上候。

一、同十三日夜五つ時分、春木村小山之方竹之筒・貝吹申音一時計相聞候。其外小竹より久江・大町邊にも同貝・竹の筒吹申音聞え、なべ山には火を焼申由、諸方騒敷候得共、我等組下嚴重縮方申渡、一人も罷出不申候。右小山邊に竹の筒吹申趣御內達申上候。

一、同十五日夜藤橋村岩屋山江暫時高聲いたし候旨、古府村等より及案內候に付、御內達申上候。

一、御郡所より足輕兩人縮方として御指下、組々內筋より廻り役人中を寄、御縮方申渡罷歸候。

一、同二十九日夜四つ時頃、笠師組鈍打谷之者之由に而、筆染村三やうが谷与申所江寄居、六・七十人計笠師村九郎次江罷越、九郎次に逢申度与申聞。相尋候處、鈍打谷之者御貸米被仰付候得共、少分に而御年貢勤り不申候間、九郎次より願呉候樣申聞候に付、理合申含爲相退候。歸り申時分、中島村藏宿今本屋村與四右衞門方江立寄、食事を乞給させ、酒屋仁左衞門方江立寄、酒を乞候に付爲呑候。同村助左衞門与申物、直安き米を買受高直に賣申儀沙汰之限り、且御代官中口米を買受候に付、百姓共買受相成不申抔与申、戸障子・土藏之戸迄痛め申候。是等之趣九郎次より御內達申上候。

一、重而御郡所足輕二人、御改作番足輕二人御指下、先づ鹿島郡小金森村者共被召候。呼出

僉議之上村預。夫より田鶴濱江罷越居候而、笠師組鈍打之者共陰聞を以呼出僉議有之所、藤瀬村肝煎より村番頭を以先々申傳候由及白狀、頭取に相成候樣承及候。上町村番頭は中島村之方へ不申迯候。右僉議之上大勢村預に仕、金澤へ罷歸候上、兩組之者共追々御郡所へ御呼出、禁牢・村預等被仰付候。笠師村之者共文化十一年四月公事場江御引渡有之所、申觸候番頭共追々御召出御吟味、禁牢・村預等色々有之、藤瀬村與三郎初、兎田村嘉右衞門等二十五人禁牢仕居申處、藤瀬村・横田村番頭牢死。

一、文化十年暮右之趣に而何分取治出來不申、第一鵜川元組・本江組・酒井組・能登部組也。併御郡一樣無之而者以後之障に成候故、十組江三千石、御扶持人取計米之名目を以、引受皆濟請爲仕相納候。

一、翌年三月物毎騷々敷落付不申、右三千石之分延御拂願仕候得共御聞屆無之、夫食御貸米之内に千石藏被仰付、外に千石代として御改作所より銀子五十八貫目借受、其外色々―を以、夫食等正米渡り之外、銀子百三十貫四百目組々江馳合貸渡候。

一、越中新川郡舟見村和七郎手代七右衞門、并入膳村肝煎宅江文化十年暮大勢押寄、家財を荒し申者共二十人、全公事場禁牢被仰付、其後御免。桐山村九兵衞与申者棟取人に而、同十一年七月十三日金澤立、三泊りにて居在所に而はり付被仰付候。

一、羽咋郡藤瀨村肝煎與三郎儀も、村方にて磔付御刑法可被仰付事に極り居候處、大赦に付、文化十一年十二月二十六日公事場に而はね首。同日小頭等四人、藤內共相添、高松泊・高畠泊に而、二十八日藤瀨村に而梟首被仰付候。

一、免田村嘉右衞門等十人、同十二月十九日出牢被仰付候。

一、前段酒井村一樂組之者、御郡所御吟味之上、小金森村又兵衞・小田中村茂左衞門悴九左衞門兩人、川下籠に被入置候所、九左衞門文化十二年正月病死、尤右兩人は十一年十二月公事場に御引渡置候得共、公事場へ御引取無之、川下籠に被入置候處、九左衞門病死に付、其段公事場へ被仰遣候處、右之例無之隙取、併御郡所より足輕指出見屆有之趣申來候に付、則加藤彌太夫・石井淸右衞門正月［　　］罷越見屆候。其節爲代手傳長兵衞罷越候。又兵衞儀正月公事場牢へ御引取、小金森村又兵衞儀、二月十八日初而於公事場御吟味被仰付候。

一、藤瀨村與三郎梟首に恐入、上口筋村々より中島へ炭薪持出候者廻り道仕、其外御田地荒起等にも恐、其近所出作等にも支候趣、村役人書付裁許奥書を以文化十二年願上候處、公事場より向寄藤內取除させ候樣、二月十五日御紙面を以被仰渡候。

十一月晦日。能登幕府領の百姓、加賀藩の算用場に來りてその支配方法に關し請願す。

是月は大盡なり

〔政隣記〕

十一月晦日、御算用場ゟ能州御預地百姓共大勢二百人計罷出、公領之節者人持組御算用場奉行支配之處、御預に成候以來十村支配に被仰付、大に下劣迷惑仕旨、先達而願候得共、御聞届無之に付再願与云々。

十一月。諸役所勘定方の書類を整理すべきことを命ず。

〔政隣記〕

付札、定番頭ゟ

諸向勘定方之儀、去年十月御勝手方土佐守等より申渡候通に候。然處寶暦年中以來、諸書物不取揃、或假切手拔替指支、將又出船等一作御用之分にも諸書物不取揃、勘定方指支候躰に候。如斯に而は、連々御縮方不相立儀に付、右諸書物難取揃分等、都而御算用場ゟ指出可受指圖候。尤不指支分は、去年一統申渡候通相心得、夫々無遲滯可遂勘定候。右之通被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配へも相達候樣可被申聞候事。

酉十一月

右之趣一統可被申談候事。

閏十一月二日。與力中山宅左衞門刎首の刑に處せらる。

今月は閏十一月

〔政隣記〕

今月二日於公事場刎首被仰付候中山宅左衛門等刑書左之通任一覽寫之。

覺

津田玄蕃與力　中山宅左衛門

右宅左衛門儀、篠嶋鎌三郎與力細野四郎左衛門娘与去年緣組相願、同三月より四郎左衛門方江同居いたし居、致緣娶候上申分出來、心外之儀等有之候得共、其儀者事濟、四郎左衛門江戸表江罷越候後、妻とみ不心得之趣共有之候處、四郎左衛門妻のぶ取扱難心得儀共に而、毎度申分出來、其內四郎左衛門方より娘を可引取趣申越候儀も有之、色々憤居申內、當六月四日とみ儀宅左衛門妹はそと申分いたし候儀に付彌憤、同十日夜妻幷のぶを及殺害、其身可相果覺悟に而、外より罷歸、兩人を居間江呼出、とみを及打擲に候樣に、多賀猪一右衛門家來吉野淺右衛門江申入候哉与、のぶ江相尋候處、其通と申聞候故、とみを脇刺を以刺通候處、のぶ儀勝手之方江逃退候樣相見え候故、追行のぶと存脇刺に而突候處、妹はそ哉と存候故、のぶを尋に外江出、見付候に付連來候處、門內に而見はづし候故內へ入候處、はそ疵付候得共相果不申、何とぞ存命爲仕度水をも爲給候得共、殺くれと申聞、爲致難儀候よりはと存重而刺殺候旨等申顯候。宅左衛門儀妻不屆之申形等有之、舅細野四郎左衛門妻も不了簡と存候

者、如何様共取計方可有之處、亡父之遺言を守り離縁不仕所存と申には不似合、妻幷姑を可及殺害与之覺悟に而、妻を刺殺候上妹を姑と取違及殺害、殊に最初より不得止事趣に取繕罷在、再往糺之上に而右之通申顯候族、重々無十方仕方、不屆至極之者に付刎首被仰付。

右宅左衞門儀落着如斯就被仰出、今日牢より出、私共幷與力裁許竹田掃部罷出、且場附御横目鷹栖武兵衞儀役引仕罷在、不破東作同席に而申渡、御刑法申付、何茂見屆申候。

篠嶋鎌三郎與力

細野四郎左衞門妻　のぶ

右のぶ儀娘とみ津田玄蕃與力中山宅左衞門妻に罷成、いまだ年若者故萬事心得方不宜、宅左衞門可憤趣共有之候處、母としては扱方不行屆事共有之、其上最前與力裁許より相尋候節之申候分と相違之儀も有之、不埒に付夫四郎左衞門江被預置候得共、最早御宥免。

右者公事場奉行中より御用番年寄中江達書之寫に候事。

〔御預人之記〕

中山宅左衞門、津田玄蕃政本與力百石廿二歲。文化十年六月十日夜妻幷に妹を切害す。依て爲檢使、御大小將横目高田久兵衞・大島三郎左衞門入來之上、一類中江御預之處、一類共先達而致義絶罷在、可預者無之故、十一日玄蕃留守居の者江被指預旨、（脱アルカ）玄蕃名代人出座横山大作

ゟ被申渡、十三日夜玄蕃上屋敷ゟ引揚、二十六日入牢。閏十一月二日刎首。

閏十一月四日。前田齊廣、大聖寺侯前田利之の邸に臨み能を演ず。

〔政隣記〕

一、閏十一月四日君上備後守樣御邸ゟ被爲入御能被遊候。御近習頭分・御奥小將等被召連。

閏十一月十九日。後櫻町上皇崩御せしを以て金澤に於いて普請・鳴物等の禁止を命ず。

〔御觸拔書〕

仙洞御所、去三日崩御之由、江戸表より申來候。依之普請・鳴物等、今十九日より廿三日迄、日數五日遠慮之筈に候條、被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。且又組等之內裁許有之面々者、共支配ゟ茂相達候樣可被申聞候事。

閏十一月十九日　　前田主稅

十二月二日。後櫻町上皇崩御せしを以て弔使を金澤より發せしむ。

〔政隣記〕

十二月二日微陰霜降。今度仙洞御所就崩御、京都ゟ之御使御先手物頭山村善左衛門ゟ順先之

通被仰付、今朝發足、正月五日金澤ゟ歸着。

〔金龍公記史料〕

閏十一月三日上皇崩。十九日報達。十二月二日遣先手物頭山村善左衛門愼之于京都。獻賻。

十二月五日。徳川家齊、前田齊廣に鶴を贈る。

〔續徳川實紀〕

十二月五日、松平加賀守に御使して、御鷹の鶴をつかはさる。

〔金龍公記史料〕

十二月五日。將軍遣使番新庄鹿之助。賜田所獲鶴。

十二月十四日。前田齊廣の子齊泰・芳姫及び勇姫の婚約を許さる。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

十一月八日勝千代様御緣女律姫様御卒去に付、同年十二月七日富山淡路守利幹様御女銈姫様御再緣御願書御指出、十四日御願之通被仰出有之なり。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

十一月十六日芳姫様御緣組御願書御指出、同十二月十四日御願之通被仰出有之なり。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

十一月勇姫様大聖寺備後守利之公御嫡鍛太郎利極様と御縁組御内約被仰合、同十二月六日御願書御指出、同月十四日御願之通被仰出なり。

十二月十九日。河北郡百坂村に於いて磔刑を行ふ。

〔政隣記〕

十二月十九日於下口桃ヶ坂、磔被仰付。

能州太助

右之者於居在所馴染合候女懐胎、子出生之處、彼是不及貪着候に付、幼子を女太助方江連來り渡歸候處、乳も無之致方無之に付、松之木之根元を掘穿、右子を埋め殺し候科に依而、磔に被仰付、爲檢使御先手物頭寺西平左衞門・津田藤兵衞罷越、并公事場御横目不破東作等罷越。

十二月廿二日。博奕類似の行爲を禁ずる前令を嚴守すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

かけの諸勝負者御制禁に候處、近年町・在之者共右様之勝負事に携り、不埒成爲躰に候。此等之儀に付、今度町奉行等江申渡候趣有之候。御家中召仕候輕き者共之内にも、不愼之者は右様之出會に相交、小身之人々抔者畢竟子弟成立にも相障候躰。將又正月は勝手向等に而、

小兒抔之遊び事与名付、博奕に似寄候慰事有之、不苦儀之様に存候族も有之候躰相聞候。たとひ遊び事に候共かけもの仕、勝負を以慰与致し候儀者御停止之事に候條、其主人々々より堅制禁可仕事。

かけの諸勝負等之儀に付、寛政元年以來別紙寫之通一統被仰渡置候通、猶又違失無之様急度可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江も相違候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。

十二月二十二日　　　　　　　　　　横山監物

十二月廿四日。是日以降三日前田齊廣の子齊泰・芳姫及び勇姫の婚約を許されたるを以て金澤の町民に盆正月を行はしむ。

〔金龍公記史料〕

十二月廿四・五・六日金澤町爲盆正月。

十二月廿五日。前田齊廣の子齊泰・芳姫及び勇姫の婚約を許可せられたることを金澤の諸士に告ぐ。

〔政隣記〕

十二月廿五日、依御廻文頭分以上登城之處、竹之間御勝手列立、御年寄衆等前々之通御出座、御用番監物殿左之通御演述畢而御同間續於横廊下、左之御附札物披見、各四時過退出。

勝千代様御儀、淡路守様御息女様与御再縁被仰合度。

芳姫様御儀南部大膳大夫様御嫡吉次郎様与御縁組。

勇姫様御儀備後守様御嫡鍛太郎様与御縁組被仰合度旨御願被成候處、當十四日御登城可被成旨、前日御老中方御連名之依御奉書、御名代織田百太郎殿御登城被成候處、於御白書院御縁頬御老中方御列座、御願之通被仰出、難有御仕合被思召候。此段可申聞旨被仰出候事。

付札、御横目江

勝千代様・芳姫様・勇姫様御縁組被仰出候爲御祝詞、今・明日中年寄中等宅江相勤可申候。且又幼少・病氣等に而登城無之面々江者、御弘之趣向寄より傳達、爲御祝詞御用番宅江以使者可申越候。此段夫々可被申談候事。

十二月二十五日

是歳。石川郡宮腰の外所々に歌舞伎を興行す。

〔政隣記〕

一、宮腰冬瓜町端濱において、夏以來砂除普請方に付、躍狂言与申名を以願御聞届、歌舞妓

躰之儀興行、見物夥く有之由云々。

一、野町於神明社も右同斷興行、淺野川々除町乾貞寺に而も同斷興行。

〔歳々略曆〕

文化十年春之頃宮ノ腰濱にて芝居、夏迄。秋ぼんすぎよりはじまる。大波に而芝居小屋つぶれる。

神明に而大芝居有。三升小源太京都より下り大あたり。冬之頃より才川河下大豆田に而大芝居有。げだい薄雪。霜月十四日朝六つ時地震、七つ時より大風に而芝居小屋つぶれる。

相撲のことは本年七月に見ゆ

是歳。犀川河原に昌安町起る。

〔大ゆめ生むかし〕

文化十年、鬼面山といふ日本鬪の相撲來る。此頃かと思ひはべりぬ。千日町の河原に昌安町といふ一町出來之、諸商賣をする。堀昌安の木像をかざりし事など、洪水に跡形もなし。

〔金澤俳優傳記〕

一、堀昌安と申眼科の醫師これあり。隨分の福ゆう者にて、特に工夫才發ある人にてありし處に、或時犀川筋のしも町洪水して川筋の家々流れ損じ、暫らくの間原のごとくに河原となり候につき、その場所を右昌安餘程の金を出し一かこひをこしらへ、兩口をつけて昌安町と

名づけ、右かこひの中に諸宗の寺を建立し、商ひの店を數多しつらひ、すべてのことに外へ出で申さずとも用事のたり候やうにして、尙しもその中にあから庄之助と中劍術者ありしが、稽古所を構へ、此の所へ町々より大勢稽古に參り候。政右衞門も參り候に、日に增し繁昌して門弟中も勵みよろしく、又店々も次第に繁昌して、近鄕はいふに及ばず、遠所よりも病人來ること數多なり。然るにこまつたことは、凡てけだものゝ煮賣店これあり。この所へあから庄之助の門弟中を昌安さそひつれまゐり、色々のけもの殘らず一しなあてくはせ候に付、弟子中互に顏見合せ、昌安を恐しさに喰ひ候態、昌安の威勢紙上に書き盡しがたく候。又右の所へ諸方より療治參り候人々に、昌安もとで銀を貸し、あきないたさせ候て、療治の禮銀は稼ぎて拂ひ、しごくの助けに成り候。又出家等は右寺々へ遣はし置き候へば、これ又たすけに相成り候。且つ昌安自分の木像を拵らへ置候處、當時は寺町五百羅漢にこれあり候。

文化十一年

正月朔日。前田齊廣登營して新正を賀す。

〔政隣記〕

一、正月朔日六時過御供揃に而、同半時過御直垂に而御登城、都而御例之通御禮等被爲濟、

九半時御歸殿之事。

正月十七日。本年より大坂廻米運漕に關する仕法を改めたることを告ぐ。

〔郡方御觸〕

當戌年より爲御登米詮議之趣有之、具足屋七右衛門等船裁許御指除、攝州神戸二つ茶屋村舟直御雇に付、右廻船方御用達、大坂等町人山田屋市右衛門・泉屋次郎左衛門・木屋又三郎江申渡、出船方仕法相改候に付、向後一番下正月下旬より三番立迄追々出帆、六月中皆着之趣に相定、年之氣候にも寄可申儀に付、成限五月中に致着候樣申渡候。出船所江是迄船裁許之手代相詰候得共、以來者手代不相詰、右山田屋市右衛門等手前より、舟毎に上乘之者罷越筈に候。

一、御米積渡之節、御米善惡指竹を以船頭幷上乘之者、出船奉行幷御横目立會爲見候儀申渡候條、損米等有之候はゞ出船相省、是迄之通代り米代官より請取相渡候樣申渡候。

一、於積所に御米渡方之儀者、出船奉行幷御横目・船頭等立會、千俵に付十俵宛撰俵筒を船頭に爲振、右俵數取出、懸臺斤量を以俵別貫目等相改、十俵平均之貫目相極、舛廻は檣舛を以右俵數斗立、平均之舛目相極、一俵之舛目・貫目共出船奉行送り狀に書記、上乘江相渡、右斤量樣石は箱に入、大坂詰人封印を以船毎に致持參、御米積渡之上夫々箱に入、出船奉行

等封印いたし、船頭ゟ相渡筈に候。

但、御米積渡之節、代官株分けを以撰立、千俵に付十俵之割合を以、本文之通に候。

一、當年江戸御廻米之方は、地舟積迄に候條、都而是迄之通に候。

右之通被得其意、此外前々之通に候。此段代官共ゟ夫々可被申渡候、以上。

正　月　　　　　　御　算　用　場

・　改作奉行中

當年より大坂御廻米仕法之儀に付、別紙之通御算用場より申談に付、右別紙相渡候條、得其意、御縮方等嚴重に可相心得候、以上。

正月十七日　　　　山本又九郎

大村友右衞門

諸郡御代官中

大坂爲御登米船下上之節、於浦々諸懸り物多く相成、自ら奸曲之族茂有之處、年來押移り候風儀に成來候故、是迄相勤候船裁許被指除、當年より攝州神戸二つ茶屋村船　直御雇に相成、出船方仕法も相改候に付、大坂濱方において船手諸懸り物精誠減方申渡候。尙更定之外懸り物有之候はゞ、彼地御屋敷ゟ及斷候樣船手ゟ申渡候。依之御領國之儀者尙更に候間、出船所

は勿論、津々浦々において諸懸り物遂吟味可被相減候。運賃米減方詮議にも拘り、畢竟奸曲之端に相成、大坂において御拂米直段に茂響き候間、無用之役人多箇所等、早速遂詮議可被相改候。當年より船手様子も違、仕法も相改候間、懸物多き箇所者、出船奉行等江及斷候様申渡候。格別に詮議之筋茂可有之候條、各於手前茂無手拔様可被相心得候、以上。

正　月

大坂爲御登米船海上往來日記帳面に、彼地詰人致印形、船頭等江相渡、津々浦々入津・滯船・出帆・日和模様相記、其所之役人御米積請出帆之節者、右奉行之印形に而日記帳に出帆・休日等相記相渡、是又津々浦々入津・滯船・出帆・日和之模様相記、其所々役人印形を請、大坂詰人江差出候様申渡候條、御領國津々浦々において、無遲滯致印形相渡候様、役人共江可被申渡候、以上。

正　月

右之趣被得其意、夫々可被申渡候、以上。

正　月　　　　　　　御　算　用　場

進　士　求　馬殿

正月廿二日。前田齊泰に對する作法等を令す。

別紙寫之通一統申談候樣、御横目江申渡候に付爲御承知進之候、以上。

正月廿二日　　　　長　甲斐守

付札、御横目江

勝千代樣御宮坂等江御出被遊候節、火事・喧嘩等至極急切之注進仕面々、一騎駈罷出候砌、馬上に而平伏仕、急切之注進に罷出候段申斷、不及下馬可罷通候。結句下馬仕候而者、口附之者も無之候者彌遲々可致候間、右之通可相心得候。御城より見分等急切之御使に罷出候節も、右同斷之事。

但、馬上之者に不限、指急申御用之者は其段申斷可罷通候事。

一、從者召連、急々も無之者は、下馬・下乘常之通に候事。

一、甚右衞門坂之上に被成御座候時分者、神護寺前往來之者平伏に及不申、是者從御見物所御覽被遊候趣之事。

但、其時々御樣子次第、或は坂之中、又者坂之下迄御出之事も可有之候。其節者足輕出置、其段申聞候者可致平伏候。

一、何れ之口江御出被遊候而も、御通筋足輕出置、馬上・乘物等之者江御出之樣子可申聞候。

〔御觸拔書〕

其上に而御樣子次第、御附頭等見繕罷通候樣、平伏之面々江可申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

正　月

載して提出せしむ。
正月廿二日。諸浦に於いて從來大坂廻米の船頭より徵收したる費用を記

〔郡方御觸〕

今般大坂爲御登米、御雇船仕法相改候に付、於諸浦船頭等諸懸物減方等之儀、此度申渡候通に候。右に付是迄流例に而、船宿等手前江船頭等より取請候諸懸物一切爲書出、當月中當場江可被指出候、以上。

正月廿二日　　御算用場

進士求馬殿

中村逸角殿

右寫之通申來候條、得其意、右日限迄無遲滯可書出候、以上。

中村逸角

能州鳳至・珠洲兩御郡

右裁許有之十村中

正月。往還筋に於ける松並木を補植すべきことを命ず。

〔郡方御觸〕

上口・下口往還之松木は、御憐愍を以被仰付候處、枯木・風損等に而皆不數与成候。併近年立添抔致、少々並木有之所も候得ども、多分相捨勝に而、畢竟大木与成候而者、兩挾之田地日光を請不申故、旁所々嫌申儀も可有之哉に候得共、道に者枉曲有之、日南を得不申所歟、能日南致候歟之所は、念頃に磁石等を以暑候得者能譯り申儀に候。左候得者其可然所々者、追々松木爲植立手付にもいたし候者可然候。畢竟是迄之處、御郡方よりも貪着無之与申儀、不得其意儀に候條、急度前件之通可有之候事。

正　月

往還松木植付方之儀に付、產物方御主附村井又兵衛殿被申聞候に付、寫相達候條、被得其意、夫々可被申渡候、以上。

正　月　　　　　　　　　　御　算　用　場

進　士　求　馬殿
中　村　逸　角殿

二月七日。金澤城石川門の樓櫓を修造するを以て通行を禁ず。

〔文化雜記〕

一、文化十一年二月四日左之通御城代伊勢守殿御渡に付觸出候事。

先達而石川御門外御石垣御普請有之に付、同所御櫓疊有之候處、今般如最前出來之筈に付、當七日より御門往來指留候條、御城中御番人、且又就御用罷出候人々、河北御門より往來の筈に候。若火事之節は、石川御門往來不指支候。尤御普請所之儀に候間、往來人不込合樣可相心得候。此段夫々不相洩樣可被申談事。

二月

二月十二日。前田齊廣當春歸國の際東海道を經ることの許可を受く。

〔政隣記〕

二月十一日、當春御歸國御道中越後山之下所々損所有之候に付、御領主榊原殿江御通行否御聞合之處、所々より道造り替無之而者御通行指支候。左候得者公邊江御達無之而者難造替、依而いつ頃出來与申儀も難計段被仰越候に付、當月六日從東海道御歸國可被遊旨被仰出候段、江戶表より申來。且江戶詰人御先手杉江助四郎、物頭並聞番岡田十郎左衞門交代發足暫御指留、御供被仰付候御樣子之旨、江戶より申來候事。

〔政隣記〕

私儀當春定例之通、國許江之御暇被下候者、前々之通中山道より北國海邊江懸歸國可仕候處、越後山之下海邊舊冬大風雨高波に而、道路損所多、人多之通行指支有之、勿論急に補理之程も難計躰に御座候。依之東海道尾張より美濃・近江・越前江懸旅行仕度御座候。此段相伺申候、以上。

二　月　　　　　　御　　名

〔政隣記〕

付札、御道中奉行江

當春御例之通御國許江之御暇被仰出候に付、東海道御通行被成度段御伺書、御用番松平伊豆守殿江被指出候處、御勝手次第之旨被仰渡候條、被得其意、御供人江一統可被申談候事。

二月十三日

別紙之通可申談旨、助右衛門殿被仰聞候條、御承知被成、御組・御支配御供人江御申談可被成候、以上。

二月十三日　　　　中村才兵衛

大橋作左衛門

〔政隣記〕

一、太梁院様従東海道享和二年御歸國之節は、御持筒頭小原惣左衛門儀組足輕に御鐵炮爲持、爲御迎荒井御關所外迄罷越、尤柳ヶ瀨於御關所共趣申斷無異儀罷通候に付、此度も其例を以御持筒頭戸田五左衛門儀御鐵炮爲持、爲御迎可罷越筈之處、御用番甲斐守殿より、御持方頭筆頭中泉七太夫御呼出、今般は就御省略御鐵炮荷物に相認、爲裁許與力指添指遣し、荒井於御關外御供に而罷越候御持方頭神戸藏人ゟ、御鐵炮相渡候樣可申渡候。左候得ば藏人押へ致御供候筈之旨就被仰渡候、戸田五左衛門等段々詮議之上、柳ヶ瀨御關に而通行可指支申哉之儀等段々御達申候得共、甲斐守殿よりも被仰聞之趣有之、畢竟與力兩人指添、荷物認に而三月十日發被遣候事に治定。併猶又江戸表ゟは伺之趣も有之候間、不斗仕候はゞ五左衛門儀爲持可致發足事に可相成も難計、左候得ば過急之發足に可相成哉。多分は前段之通與力兩人指添之事に治定之由任承記之。

附、彌本文之通與力迄に而相濟候事。

一、東海道來月中旬通行之十萬石以上御諸侯方三・四家有之、先達而驛觸到來、驛々及御請候に付、此方樣御通行之儀指支候趣に候得共、同月十三日御暇之御禮被仰上候得ば、翌十四

日押而御發駕之筈。依之先年東海道罷通候御先手杉江助四郎儀、此度交代罷歸候に付、御供人江被加之、驛割御用与申名目に而、來月四日頃足輕數人召連江戸發足、於驛々御晝・御泊之儀遂詮議不指支段御請仕候段承届、其所より右足輕飛脚を以御案内可申上旨被仰渡。依之今般之御道中は、御泊々々江之里數寬急多少甚可有之哉難計儀与云々。

但、本文之趣に付、助四郎江は金五十兩不時に御貸渡之事。

二月十五日。前田齊廣歸國の際供奉の士の行粧を華美ならしめざるべきを告ぐ。

〔政隣記〕

當春御歸國東海道御通行に付、御供之人々は、着服等粧或は召連候人數等相增候族堅有之間敷儀に候。武器之外見苦敷儀御貪着無之段、前々被仰出候通に候條、下海道御通行之通相心得可申候事。

右之通可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々江も嚴重可申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配へも可被申渡旨可被申談候事。

二　月

右之通諸頭江、助右衛門殿二月十五日被仰渡候に付、夫々添書を以組・支配江申渡有之候事。

二月廿二日。廣島侯淺野齊賢の使者金澤に着し、去年父重晟卒去の際に於ける懇志を謝す。

〔政隣記〕

二月廿二日安藝守樣御國元より之御使者番頭知行高千六百石大久保藤馬今日參着、御使者宿順番下堤町角屋太郎次宅ゟ參着之事。

但、正月廿九日藝州廣嶋發足、且今日一汁五菜之御料理被下之。給事旅宿之亭主等。附、歸日同斷、平日朝は一汁二菜、晝者一汁三菜、夜酒・小盞・殺・外肴一種等被下候儀等、前々御一門樣御使者例之事。

一、御馳走方主附組頭、御馬廻頭より菊池九右衛門、御小將頭武田判太夫、御馳走方御大小將杉山又吉・金森大作、見廻り聞番岡田太郎右衛門、幷御醫師內藤宗純。

廿三日右御使者宿ゟ御奏者番青山將監罷越、御口上承之、追而可相達旨申述。但御使者覺書左之通。

松平加賀守樣ゟ口上之覺

彌御堅固被成御座候哉承度奉存候。舊冬同氏備後守致死去候に付、御悔且爲御代香遠路度々御使者被指立、御香奠御備、病中已來御飛脚を以度々御音物、於江戶表も御悔㦲中爲御見廻

兩度御使者も被下、彼是被入御念、御深志之御事共忝次第奉存候。右爲御禮以使者申達候。今日晝之御料理は二汁五菜、給事者御歩勤之。挨拶等之御作法都而前々之通に候事。

正月廿九日　　　右使者　大久保藤馬

凧君様・法梁院様江口上之覺

彌御息災御座候哉承度奉存候。舊冬同氏備後守致死去候に付、於江戸表爲御悔御使者、且朦中爲御見廻御使者を以て御音物被下、被入御念候御事共忝次第奉存候。右爲御禮以使者申達候。

正月廿九日　　　右使者　大久保藤馬

廿四日右御使者大久保藤馬發足歸候事。

附、右御使者逗留中敢而珍話等も無之、且亭主江頼嚢十五、幷御所落雁等之干菓子、幷黄蓮三株求歸候。嚢者彼筋無之品之由。外に龜田染繪手拭も懇望之由に而、取寄爲見候得共、高價に付不求候由。但、一筋十匁宛与云々。地布に而三尺、紅・藍等之染模様。於御國者用候者無之候得共、於他邸は賞美致し候躰之事。

一、右藤馬發足之節、亭主太郎次江金小判二兩、同人せがれ彌兵衞、御使者宿仲間八田屋平右衞門・金屋九郎兵衞・菅波屋三郎助、幷太郎次一類平野屋半助、彼是爲取持罷越候に付金百

疋宛送候事。

二月廿八日。藩醫江間篁齋等江戶に於いて蘭人の旅館を訪ふ。

〔金龍公記史料〕

二月廿八日登營。此日和蘭人亦登營。許大高元哲吉田長淑江間篁齋往蘭人旅館對話。貽婦女錦繪。蘭人大悅云。

二月廿八日。長崎大通詞辻助次右衞門等に藩邸に出入することを許す。

〔政隣記〕

一、二月廿八日、長崎大通詞辻助次右衞門、小通詞□□今般御出入被仰付、蘭製之品御內々献上。

但、海邊之御大名方ゟ者不殘出入致し候處、此方樣ゟ者如何に而哉、是迄御出入不仕候處、此度御出入被仰付。

二月。能登口郡の御扶持人十村等座頭・瞽女の難澁を救助せられんことを求む。

〔眞館諸書物留〕

百八十六人本の儘

羽咋・鹿嶋両御郡之内に罷在候座頭・瞽女之儀、在々相廻、雑穀等纔に助成を貰、或者祝儀・佛事等有之砌、少々充合力を請、渡世仕儀に御座候處、近年作難等申立施入無御座、一統及難澁、文化五年歎之趣申出候得共、願上候儀も御時節御難題之御儀に付、私共相談詮議之上、役用銀一貫目貸渡為取續置候。然處其後打續作難等に而村々難澁仕、彌助成薄誠に行詰、中に者及飢申為躰、見捨置候儀も難仕、村役人等色々取計介抱仕候得共、今程致方無御座、去暮以來村役人幷座役之者より、私共等江重々相歎、實に困窮至極之躰。剰座頭・瞽女之儀者、乞丐与違、年分両三度程ならで相廻不申、別而町方居住之盲人とは格別、藝能・按摩等之潤色も無御座、最早行當困窮迷惑仕候旨申聞、無據趣に相聞候に付、裁許々々打込重々相談詮議仕候得共、盲人之儀故外稼方之仕法無御座、私共手前においても前文申上候通、近年取計置候上之事に而、取扱之手段盡果申儀に御座候。當時座頭八十二人瞽女九十四人、都合百八十六人之者共助命仕兼申程之儀に御座候。就夫御當節奉恐察申上兼候得共、何卒御憐愍を以、御取救之儀宜御詮議被下候様奉願度、小紙を以申上候、以上。

戌　二　月

本江村　惣　　助

武部村　四郎太夫

堀松村　平　　藏

本江村　六郎右衛門

進士求馬様

中村逸角様

右願之儀、御當節外々江も指障、何分御聞届難被下、何れ工夫之上可取計置旨、同十一年十月六日番代へ被仰渡、小紙御返。

三月十四日。徳川家齊、前田齊廣に就封の暇を與ふ。

〔政隣記〕

一、三月十四日八時過上使御老中青山下野守殿を以御國許江之御暇被仰出、御例之通白銀・巻物御拜領、從大納言様之上使も青山殿御兼に而御例之通、從御臺様も八半時過御使御廣式番之頭古川和泉守殿を以御例之通御拜領、夫々御都合能相濟。右相濟追付御供揃に而爲御禮御登城可被遊候處、七時後に相成候に付御登城無之、御老中方御廻勤被遊候事。

三月十六日。前田齊廣登營して就封の辭見す。

〔政隣記〕

三月十六日、昨日青山下野守殿依御演述之趣、六半時御供揃に而同刻過御登城、御暇之御禮御首尾好被仰上、御例之通御懇之以上意、御鷹・御馬御拜領。西丸江も御登城、御老中方幷若

年寄衆御廻勤。

〔續德川實紀〕

三月十六日、御表へ出たまひて、松平加賀守就封の暇下され、御鷹・馬を賜ひ云々。

三月十六日。前田齊廣歸國の途に就き品川に宿す。

〔政隣記〕

三月十六日、九半時頃御歸殿之上、於御居間書院山城守・助右衛門・玄蕃被爲召、今日之御首尾御意有之、此段爲申聞候樣御意。侯之頭分以上ゟ如前々御弘有之。畢而御留守詰之御家老權佐被爲召、御意相濟、御入被遊候事。

一、於御居間書院淡路守樣・備後守樣・啓太郎樣ゟ御對顏相濟、無程七時御發駕、御式臺前より御馬上、大御門外に而御駕籠に被召替。淡路守樣初幷御出入御旗本衆等、御玄關鋪附迄御送被成候事。

一、高輪に而御小休、萬屋忠右衛門方同所より御提灯立、暮六半時頃品川驛御宿、鶴岡市郎右衛門方ゟ御着。御道程日本橋より三里、本鄉御邸より者三里餘也。

一、於御旅館御供之助右衛門・玄蕃被爲召御意有之。且又御城坊主平井善朴・利倉善佐・平井永朴・高橋榮德、御旅館ゟ爲伺御機嫌罷出候處、被爲召御意、幷彼是御咄申上、御酒等御料理も被下之。從善朴御道中爲御慰遠目鏡献之。

一、明朝四時御供揃に而御發駕、六郷川有之候間、御用無之者勝手次第御先ヘ罷越候樣被仰出之趣、御横目より夫々旅宿觸有之。

但、此次より略記。

〔政隣記〕

東海道十八御泊附等

江戸		〆三里計	十六日	品川	御泊
川崎	御中休	〆五里十八丁	十七日	神奈川	御泊
藤澤	御中休	〆九里廿丁	十八日	大磯	御泊
箱根	御中休	〆十二里八丁	十九日	三嶋	御泊
原	御中休	〆六里六丁	廿日	吉原	御泊
由井	御中休	〆十里十八丁	廿一日	府中	御泊
岡部	御中休	〆八里廿丁	廿二日	金谷	御泊
袋井	御中休	〆十二里廿丁	廿三日	濱松	御泊
新庄	御中休	〆八里卅二丁	廿四日	吉田	御泊
赤坂	御中休	〆六里廿五丁	廿五日	岡崎	御泊

池鯉鮒	御中休	〆六里廿四丁	廿六日	鳴	海	御泊
清　洲	御中休	〆八里十八丁	廿七日	尾	越	御泊
大　垣	御中休	〆十里廿二丁	廿八日	柏	原	御泊
鳥井本	御中休	〆十一里十八丁	廿九日	木ノ	本	御泊
中河内	御中休	〆十一里十八丁	晦　日	今	庄	御泊
脇　本	御中休	〆五里	四月朔日	府	中	御泊
福　井	御中休	〆十一里	二　日	金	津	御泊
大聖寺	御中休	〆八里	三　日	小	松	御泊
松　任	御中休	〆七里餘	四　日	金	澤	御着

以上

三月十七日。前田齊廣品川を發して神奈川に宿す。

〔政隣記〕

三月十七日快天、四時前品川驛御發駕。大森長谷川忠三郎方御小休、川崎田中兵庫方御中休、生麥村藤屋傳七方御小休、八時前神奈川驛御泊宿石井源右衛門方へ御着。御道程五里十八町、御代官前に同。

一、曉八時御供揃に而江之嶋鎌倉江御廻道、御近習廻り者不殘被召連候段被談、若年寄中馬も被召連候事。
但、不時御供人裝束、道中羽織細袴着用之事。
附、御先の三品等幷御供人從者も略召連、其外は本道より御泊押通候筈之事。
右夫々旅宿觸有之。

三月十八日。前田齊廣神奈川を發し鎌倉・江之島を經て大磯に着す。

〔政隣記〕
私儀相州鎌倉八幡宮江是迄年々代拜等差遣候。最寄も御座候者參詣仕度心懸罷在候處、今度東海道通行仕候に付、可相成儀に御座候者、惣人數者本道指遣、手人數計召連、程ヶ谷驛より右八幡幷江之嶋辨天江參詣仕、大磯驛止宿仕度奉存候。此段相伺申候、以上。

三　月　　　　御　名

〔政隣記〕
三月十八日曉より微雨之處、次第に降强く、晝夜雨風終日。同曉八時前神奈川驛御發駕、保土ヶ谷苅部淸兵衛方、戶塚驛澤部九郎右衛門方御小休、不時御供此所江揃。御供所御行列御醫師之次。且御道中奉行兩人騎馬御供。三浦八郎左衛門・御横目松原牛兵衛當番に付御供。将又御供人從者若黨二人或は一人、鑓一筋、草履取、合羽懸一荷或二荷、馬駕籠之內、年寄衆等も右に准じ省略被召連。附御近邊之人々、御歩行之節御側に歩御供。御駕之節も被仰出之節は同斷。同所

驛中左之方に鎌倉道有之、其所より被爲入、鎌倉圓覺寺・建長寺御見物、雪之下町茶屋に御小休被遊、夫より鶴ヶ岡八幡宮江御參詣、於神樂堂神樂を奏す。御最花銀十枚御奉納。於本殿寶物等社僧持出入御覽。相濟、所々名所舊迹（戸塚驛より道案内之老人、今年七十歳与云々。御駕籠脇江被召連、事迹之様子等段々謂な御駕籠廻り之人々江委く語り、或は依尋に委く敎へ等致し、殊之外御慰に相成、江之嶋迄被召連、金小判二兩被下之候處、致落涙難有り候由也。敢而御雇与申に而も無之、爲御道案内不斗罷在候由之事。）等御見物、二之鳥居右之方より七里濱江御出、夫より江之嶋上之坊御中休。御立之節、上之坊式臺に而御通懸り御目見御意有之。夫より辨天山觀音御巡覽、濱邊通り腰越江御通行、暮合前藤澤驛蒔田源右衛門方に而御小休。無程御立之處、日暮御提灯建、南鄕松屋淸左衛門方御小休。夫より馬入川船渡し（中川平膳等罷出。）御渡り、平塚加藤七郎兵衛方御小休。四半時過大磯驛御泊宿小嶋才三郎方江御着。御道程本道は九里廿町に候得共、御廻り道有之候に付十［　　］、御代官江川太郎左衛門殿。

一、明日六半時御供揃、酒匂川有之に付、御用無之者御先江罷越候様旅宿觸有之。

一、御參詣之節神主本殿之階上に平伏。社僧も同斷ながら御先江立、緣起等御供人江演述。御下向之節同斷。

一、神酒御頂戴被遊候様、社僧申聞候得ども御供頭之内［　　］御名代相勤候事。

一、前記之通辨天御巡覽之節、堂中に岩本院蹲踞、尤同院主付所迄也。

一、辨天巖へ被爲入候節者、御供頭分・御小將・御茶辨當等迄也。其外は上之坊邊に扣罷在候

事也。

三月十九日。前田齊廣大磯を發して三島に着す。

〔政隣記〕

三月十九日快晴、未刻過より東風方言にならひ風と言、翌日又翌日には必雨と云々。吹。今朝六半時過大磯驛御發駕、梅澤松屋作左衛門方に御小休。小田原大久保加賀守殿御城下。久保田才助方同斷。湯本伊豆屋忠右衛門方同斷。坂道隙取八時過箱根御着、石田太郎右衛門方に御中休、七時過同所御立之處、坂中に而日暮、御提灯立之處、大勢之事故闇く致混雜候に付、御先勢并御跡勢之內江松明數十本燈之。御中休より就御步行に、御側邊江も松明燈之、御陸尺手替等より替々持之、暮六半時頃山中御小休所笹屋助左衛門方江御着。是より下り坂、夜四半時三嶋江御着、驛入口より御馬上、松明者消之、世古六太夫方に御泊。今日難所御越に付、一統恐悅有之。

小田原邊に而毛利甲斐守殿に御出合、坂之中に而松平出羽守殿に御出合有之。

右御用松明數百本餘、其外助右衛門殿初御家中自分に相求、從者中に燈候分も夥敷事也。

一、明日四時御供揃に而御發駕与旅宿觸有之。

一、今日御道程十二里八町、酒匂川步渡り、人夫三百人。

三月二十日。前田齊廣三島を發して吉原に着す。

〔政隣記〕

三月廿日天氣宜。四時過三嶋驛御代官江川太郎左衛門殿興津迄御同人。御發駕、沼津三嶋石之城下に候得共、家立等小田原より宜し。清水助左衛門方に御小休、原驛渡邊平右衛門御中休、柏原驛浮嶋屋理右衛門方御小休、七時前吉原驛御泊宿神尾六左衛門方御着。御道程六里六町。明日六時過御供揃、富士川等有之に付、御用無之者勝手次第御先へ罷越候樣、旅宿觸有之。水野出羽守殿御領。

三月廿一日。前田齊廣吉原を發し府中に着す。

〔政隣記〕

三月廿一日曉より微雨、次第に降强、夕方霽。朝六時過吉原驛御立、富士川御越、岩淵村常盤彌兵衛、蒲原平岡久兵衛方に御小休、由比岩部鄉右衛門方に御中休。興津川御越、興津市川新左衛門方御小休。驛中右之方淸見寺門前坂中程に東照宮之御制札有之に付、諸侯方其所にて下馬下乘有之候得共、御三家樣者玄關迄御駕籠橫付に相成候。於寺格者橫付不苦由寺僧申聞候に付、致橫付に御下乘等被遊候。に御小休。御駕籠玄關橫付、住持は不罷出。夫より江尻寺尾與右衛門方、小吉田稻葉源右衛門方御小休。暮六半時前府中御泊宿望月治右衛門方へ御着。御道程十里十八町。

一、明日六半時御供揃、且安部川・大井川有之候間、御用無之者御先へ罷越候樣旅宿觸有之。

一、明日三軒屋御小休相止、藤枝御小休に相成候事。

三月廿二日。前田齊廣府中を發し金谷に着す。

〔政隣記〕

三月廿二日陰、次第に霽晴、午刻頃より西風强吹、夜も同强風、翌曉漸靜謐。朝六半時過府中御立、安部川歩渡也。御越、丸子横田三左衛門方、宇都屋石川忠右衛門方に御小休。岡部仁藤清左衛門方に御中休。藤枝村松伊右衛門、嶋田置塩藤四郎方御小休。夫より大井川御越、御供人御駕籠を蓮臺に載せ、川越人足二十人に而指揚之、御陸尺十人裸身に小手襦袢着用相添。御歩六人、是又裸身に襦袢着用、一刀此度者脇刺も帯之、兩刀也。帯之、御駕籠先に並御供。其外新番以上者蓮臺に乘り御供。駕籠有之者は駕籠之儘蓮臺に乘、駕籠無之人々者兩人宛乘之、御馬等者人足四人に而牽渡、仲間者人足之首に跨り、俗にまたのだまこ与云々肩に乘越之。御前之蓮臺に者高欄有之、其外者高らん無之。末々迄無難に越、夕七時過金谷驛御泊宿河村八郎右衛門方へ御着。今日御道程八里廿町。明日曉七半時御供揃之事。

一、年寄中初頭分以上等、難所御越之恐悦申上、伺御機嫌候事。

一、森對馬守殿に今日御出合。

一、奥村助右衛門殿於大井川被乘候蓮臺、川越人足麁抹有之躰に而、駕籠戸前折れ外に取落、少々面躰等に怪我。然れ共出勤支候程之事に而者無之。

一、宇津屋に而出合候旅人江、大井川之様子尋候處、此間天氣宜候故至而水少く、上之瀨を渡り候得者膝切に候。然共加州樣御通行之時は、多分蓮臺に致し可申与云々。果而態与深き所を渡り候哉、人足之乳際迄水付、其節者西風强く河上より吹候故、瀨甚早し。笠抔被吸取候者も多し。

三月廿三日。前田齊廣金谷を發し濱松に着す。

〔政隣記〕

三月廿三日天氣宜。曉七半時過金谷驛御立、日坂片岡金左衛門、掛川澤野彌三右衛門方御小休。袋井田中八郎右衛門方御中休。見附神谷三郎左衛門、池田町市川伊平次方御小休。天龍川御越、暮頃濱松伊藤平右衛門方御泊宿江御着。明日六半時御供揃。且今日御道程十二里廿町也。明日新居御中休之筈に候處、舞坂御中休、新居御小休に成候事。

三月廿四日。前田齊廣濱松を發し吉田に着す。

〔政隣記〕

三月廿四日陰、暖氣至極。朝六半時過濱松御立、篠原萬松院虚空藏寺とも云、昔者一月寺与云也。御小休。舞坂宮崎傳左衛門方御中休。今切渡御越、御關所御通行、新居疋田八郎兵衛方御中休。白須賀大村庄左衛門、二川馬場彥十郎方御小休。暮六時前吉田御泊宿中西與右衛門方江御着。今切渡御

越に付恐悦申上有之、助右衛門・玄蕃被為召御意有之。明日四時御供揃如例觸有。
一、今日御道程八里三十二町。
一、御城主松平伊豆守殿江、御歩頭三浦八郎左衛門御使者に被遣之。
一、今切御船御上り口江御近習御使番有澤才右衛門（軍學者也）罷出、御行列疊み順能繰出し候。尤任被仰出与之儀也。
一、舞坂宿端今切舟渡場也。岸石垣高く、簗舟乘場二ヶ所有之。今般御通行に付大小之渡舟二百艘、御通行之節最上之天氣、浪無之靜に而如潟舟、中三方は山を見渡面白き氣色、一里半之海上也。（附、昨日は風に而浪立、一時半計懸り漸渡せりと、船頭話之よし。）此渡場常々舟一艘之渡賃四百五十文也。併舟頭之所得に而無之。依之無難之祝為酒代、人々了簡次第送る例也。依之御供人も思々に、鳥目二人に百五十文或二百文宛為取候由之事。

三月廿五日。前田齊廣吉田を發し岡崎に着す。

〔政隣記〕

三月廿五日快天。四時前吉田御立、稻村（道中記には茶屋町与有。）加藤彦助方御小休。赤坂松平彦十郎方御中休。藤川森川久左衛門方御小休。七半時頃岡崎御泊宿中根甚太郎方江御着。明日四時御供揃与如例觸有之。今日御道程六里廿九町。

三月廿六日。前田齊廣岡崎を發し鳴海に着す。

〔政隣記〕

三月廿六日陰、暖氣、未刻より微雨、夜降強し。朝五半時岡崎御立、大濱中根源六方御小休、名物蕎麥切被召上候。先年太梁院様御通行之節、可被召上旨被仰出候處、俄之事に而御膳奉行等居合不申、御試等支不被召上候趣有之。於此所者、尾張様等にも御通行之節必被召上与云々。

夫より池鯉鮒（土井淡路守殿御領也）。永田清兵衛方御中休。前後成田忠次郎方御小休。鳴海驛御泊宿西尾伊右衛門方江八半時頃御着。此所江從尾張様町奉行爲御使者來る。

一、今日御道程六里廿四町、且明日五時御供揃。

三月廿七日。前田齊廣鳴海を發し起に着す。

〔政隣記〕

三月廿七日陰。朝五時過鳴海御立、宮驛南部新五左衛門方御小休、名護屋御通行。前記にも有之通、宮驛より惣御供人之分、御前後御用無之分者、不殘御行列引續御供仕、乗馬有之人々者何も騎馬。同所町端久留米屋利助方に御小休。清洲林惣兵衛方御中休。稲葉原所次右衛門方、萩原森權右衛門方御小休。七半時過尾越驛御泊宿加藤右門七方江御着。明日御供揃朝

六半時。
一、此驛狹く、前後之村半里計有之所ゟ御供人宿札打。家少宛之續所也。

三月廿八日。前田齊廣起を發し柏原に着す。

〔政隣記〕
三月廿八日晴陰交、氣候寒し。朝六半時過起御立、起川・洲俣川・佐渡川御越、皆々舟渡。夫より洲俣澤井彦四郎方御小休。大垣岡田藤兵衞方御中休。垂井栗田文吾方御小休。長松村俄に御小休。關ヶ原古山兵四郎方御小休。柏原驛御泊宿南部長右衞門方ゟ七半時過御着。御道程十里廿二町。
一、起川等ゟ太梁院樣御通行之節者、御馳走船尾張樣より出候得共、此度は出不申。依而不殘御借上げ。佐渡川ゟ者戶田釆女正殿より御馳走船奇麗に拵出候得ども、是には不被爲召。
一、明朝六時御供揃。

三月廿九日。前田齊廣柏原を發し木本に着す。

〔政隣記〕
三月廿九日快晴、甚暖氣、却而湖水に霞之樣成氣立、竹生島抔幽に見ゆ。
一、鳥井本御小休与昨夜被仰出置候處、俄に御止に成。子細は京街道に而、北國路より脇ゟ

八町計入口道に付、俄に御止。驛中大に迷惑致し候由云々。
一、朝六時過柏原驛御立、醒井松井新助方御小休。摺針峠田中五郎右衞門方御小休。夫より米原北村源十郎方御中休。長濱吉川三右衞門方御小休。木の本驛竹內五郎右衞門方御泊宿ゑ七半時御着。明日六半時之御供揃、今日御道程十一里十八町。
一、醒井松平甲斐守殿御領分、江州番場・米原・美濃・木之本・柳ヶ瀨・椿坂・中河內等迄者、都而井伊掃部頭殿御領分也。掃部頭殿より爲御馳走、御通行筋ゑ御先拂掃除之者幷足輕御指出。村中雪隱等無造作成所ゑ者不殘簾子被掛、商店に有之草履・藁鞋等之類不殘爲取除。尤往來人等帽子類被禁之。其外橋等路次も餘程之里數に候得共奇麗に被仰付、餘程之御馳走有之候事。

美濃は衍なるべし

三月廿九日。金澤城石川門の樓櫓略竣成したるを以て通行を許す。

〔政隣記〕
付札、御横目ゑ
石川御門續御櫓大半出來に付、當廿九日より右御門往來指支不申旨、御作事奉行申聞候條、被得其意、夫々可被申談候事。
三　月

別紙之通夫々可申談旨、御城代伊勢守殿被仰聞候條、御承知被成、御同席御順達可被成候、
以上。

三月廿六日　　御横目

御役御免頭衆中

是月は大盡なり

三月晦日。前田齊廣木本を發し今庄に着す。

〔政隣記〕

晦日晴陰交、暖氣。朝六半時木の本御立、柳ヶ瀬関所有。女改所に而不及下乗に、駕籠之戸明け通る。松井猪兵衛方、椿坂鈴木喜三次方御小休。中ノ河内柳嶋又市方御中休也。此驛無造作成小驛也。左の方山王社驛端より次第に下り、夫より大方上り下り平に成方也。木之本邊より段々山入に成、柳ヶ瀬に而者谷合与可申程に而、驛中兩方高山也。驛端より五六町行て次第に坂道に相成る。栃木峠茶屋彌右衛門方、板取寺田三郎左衛門御小休。七時過今庄驛御泊宿北村新兵衛方江御着。今日之御道程十里十八町。

一、明日四時御供揃。

一、板取より上鯖江迄八ヶ所松平越前守殿御領に付、今庄驛之端江郡奉行等出。

一、今庄に而左之通。

明日より服替之事に候得共、御旅中之儀、時服に而無之而も御貪着不被遊旨被仰出候段、

如例御横目廻狀出。夫々頭等より支配中ゑ觸出す。

三月。藩が鹿島郡所々に於いて釀造せしめたる酒を江戸に輸出す。

〔眞館諸書物留〕

所口町酒屋中是迄出來之酒、江戸廻御用に被仰付、彼方ゑ積廻候得共、江戸等は上方筋伊丹之辛口酒相廻り候に付、所口出來之酒は、海上を經候得ば猶更甘く成、彼地へ向不申候。然所御勝手方御奉行大田數馬殿等心付に而、所口において辛口酒出來、江戸ゑ御廻し御拂在之候はゞ、御米御拂よりは御利潤色可在之与申御僉議に而、文化十年に伊丹より酒とうじ御召寄、所口町酒屋中ゑ御米御渡、酒造仕法相立候。則主附は所口御引越居住被成候御塩方御奉行山岸十左衛門殿被仰渡、五百石之增御代官に而、右酒江戸廻り送り狀出船方等都而十左衛門殿也。

一、四千二百五十石　文化十年分酒造御仕入米所口町酒屋中ゑ相渡る

但、出來酒百石に付御仕入米百七石之圖。

外に千五百石　酒造道具等方爲入用延御拂米被仰付候

右之通御仕法相立、酒茂宜、から口に出來に付、文化十一年三月より出帆江戸ゑ御廻し。

一、樽に仕杉は越中立山續段之原与申山より伐出、所口江相廻。下杉より見事也。是は十一年夏より伐出に付、十一年御廻酒樽に成申由。三斗八升入にして江戸江被遣候處、如何之御僉議に候哉、酒造方も十一年一作に而相止、酒引方無之、同十二年より十三年春江懸、金澤へ御引上酒屋等へ御拂に相成。

三月。小松城の屋根方修理を嚴にすべきを命ず。

〔永井不陳覺書〕

三月

御作事奉行江

小松御城之壁等損申由、第一屋根方御修覆不行屆故与相聞え候。每歳御定銀も相渡候處、右躰之儀は如何之事に候哉、畢竟各僉議不行屆故与存候。今般御歸國東海道御通行に付、御巡見も可被爲在哉。小松御城之儀は外与者違、古代之品に而又共不被爲出來儀に候。金澤之御城は每度御火災等、是迄全古き御座所は無之樣に相成、責而小松之儀は微妙院樣以來御無難之儀、又珍敷古風之御儀に候間、以來屋根方無懈怠可被相心得候。御在殿は其儘与申、是ならでは無之大切之儀に付、此段分而申談候條、無油斷可被遂僉議候事。

戌　三　月

三月。藩の年寄中が東海道等關所を乘輿のまゝ通過するを許されたるを幕府に謝す。

〔江戶狀留書拔〕

三月

一、年寄中下街道旅行之節、碓氷御關所等乘物に而乘通之儀、文化三年御聞屆之趣を以、以來相州箱根・遠州今切・信州福島御關所乘通之儀、御關所掛・御目付衆ゟ御達候處、差支無之樣御關所預りゟ申達候段御付札物被渡下候旨申來、御禮御用番引受申上る。

三月。觀音院神事能の際無用の者の樂屋に入るを禁ぜしむ。

〔國事雜抄〕

近年觀音御神事能之節、樂屋へ無用之者數多入込致混雜、別而鏡之間幕際へ多集り、不作法之躰相聞え候條、以來右躰之者入込候ば、急度相改爲立退、彼是申聞候者有之候はゞ、名前承り、追て可申聞候。尤大夫初同道人等不致樣此度申渡置候間、此上爲入込候者、樂屋縮罷在候者可爲越度候條、縮方罷出候足輕共へ申渡置候、以上。

戌三月　　　　前田清八

山崎小右衛門

四月朔日。前田齊廣今庄を發し府中に着す。

〔政隣記〕

四月朔日快晴暖氣甚。朝五半時過今庄御立、湯尾問屋武兵衛方御小休。脇本（御宿主甚左衛門梅老人、大應院様奏雲院様の間違に而もあるか、御部屋住に而御通行之節御宿、此度に而御三代様之御宿仕、難有り居候。）永見甚左衛門方御中休。晝九半時過、府中御泊宿淺井政左衛門方江御着之上、右政左衛門幷せがれ榮三郎御目見被仰付。其節上段に御着座、御刀御後に御奥小將持之。政左衛門等三之間に而座付之御目見、助右衛門・玄蕃伺公。奏者中川平膳、唐紙裾戸關屋中務・人見吉左衛門開閉勤之。此政左衛門者、利家公府中御在城之時分より于今相續。邸地も從利家公致拜領有之に付、地子銀等當時も不出之。利家公・利長公より拜領之品々所持与云々。今日御道程五里。

一、明日六半時御供揃。

一、當所者越前守殿家老本多内藏助（領二萬五千石）領分に付、町中等別而丁寧。

附記、太梁院様御代右内藏助金澤通行之節、町附足輕先拂町中半簾半のうれん等之御取扱を内藏助大に悦、陪臣同様之者をケ様に被成下候事、家之規模生前之面目、此御恩は不忘由云々。依之此度別而御馳走之儀町中へも申渡有之候由、所之者話与云々。且内藏助尤城

持、町家四千計、越前一之富地と云。

四月二日。前田齊廣府中を發し金津に着す。

〔政隣記〕

四月二日快晴南風吹、夕北風に替る。朝六時府中御立、龍門寺屋敷跡左之方古城町に有、利家公御居住地今者龍門寺と云寺有。水落清水藤右衛門（左之方水落明神有小き所なり。）方御小休。麻生津（麻生津川右之方八幡宮有、）鈴木次郎左衛門方御小休。福井（出口に城有馬出の樣成所も有尤水多く有之。）東末寺に御中休。森田多田金左衛門方に御小休。七時頃御泊宿金津驛坂井市藏方江御着。今日御道程十一里。

一、明日曉七時御供揃、小松御着之上追付之御供揃に而御城御巡見可被遊旨。將明後日六時御供揃に而金澤御着城可被遊旨被仰出。

一、御近習御用等御近習向、御城御巡見之節可被召連旨被仰出。裝束旅裝束之儘、尤家來も同樣。

四月二日。前田齊廣が着城する際に於ける途上の附人を定む。

〔文化雜記〕

一、文化十一年四月二日、明後四日御着城に付、御附人ヶ所付割場御役人指出候に付記置候事。

御附人ヶ所　二人松任　二人野々市　二人野町々端　二人才川橋爪

但、御近習頭並御横目所江時々及案内候樣申談置候事。

一、今般石川御門より御入被遊候に付、前々河北御門御歸城之振を以、御城中警固建方割場御役人致持參候に付、猶更御城代江建方之儀御達申置候樣、其通相心得候樣伊勢守殿被仰聞候に付、則右役人被申談候事。

四月三日。前田齊廣金津を發し小松に着す。

〔政隣記〕

四月三日快天暖氣甚。曉七時過金津御立、千束村、新王家村、かきはら嫁をどし、(左の方がけに而深き谷色々里話有。)坂口村、蓮ヶ浦(吉崎より入海船に、而同所江一里。)細呂木森藤藏方御小休、此所出口に女改所有。左に吉崎道有。是より坂になり、上り下り之山道。長嶺と云所より左之方吉崎驛見え、蓮如山・鹿島・塩越の松・塩屋村等見え渡り、絶氣至極也。立花加州領、俄に御小休。逢坂嶮し、大聖寺御關之手前左之方石塔有、長家之家來戰死之墓と云。大聖寺入口御關所有之、下馬下乘笠取罷通る。大聖寺(町家二千軒、左之方に御館有。往來より不見得。御館之上の山は山口玄蕃頭城跡也。すごう川町中に有。敷地川町端に有。左の方に敷地天神社有。)御中休。從備後守樣爲御迎立花邊迄人持組罷出、御口上有之。其外御郡奉行・御郡目付等も罷出蹲踞。驛々等江者御馬廻組・組外之内爲御縮方罷出蹲踞。尤御領内足輕等出蹲踞呼ぶ。御關

外之御家老兩人罷出、町中小路々々之御馬廻組一人宛、又所により御馬廻頭・御小將頭・御先手等も罷出。

一、御供人之者夫々宿被仰付置候由に而、宿主出迎、宿々之先立誘引之上、結構之菓子・料理・酒肴等出之。代料者一向に請取不申。再三强而懸合候者之者、左候者一人に付鳥目廿四銅宛請取候樣被仰渡有之段申聞に付、無是非人數分廿四銅宛之圖りを以遣之候由之事。

〔政隣記〕

四月三日、今井に而今井村源助方御小休。八半時過小松御旅館京町久津屋彌四郎方之御着。御道程八里 御供人等旅宿之罷越致食餌、追付御供に相揃候處、七時過御城爲御巡見御馬上に而御出、奥取次御奥小將・御近習詰御馬脇に御供被仰付、其外も昨夜被仰出候通被召連、三之御丸御門外之御城番生駒内膳罷出御意有之。夫より同人御先立、同所御馬廻御番所之御番頭和田知左衞門罷出居候處、御通行之所より程遠く候に付、御小將御時宜役淺加右近を以御意、御玄關之者御城番前田才記罷出居候處御意有之。夫より御間之内同人御先立、御居間之被爲入暫御休息之上、御間之内夫々御覽。御居間之外より才記御先立、天守等御巡見、車橋之御出、河戸より御乘船、御座船・引船・御供船四艘、助右衞門・玄蕃初、御道中奉行才兵衞・作左衞門、御近習頭幷御近習向御供に而、琵琶嶋を漕廻し、車橋下通り最前之河戸之御上り。此頃及暮

御提灯建之。重而御城御居間江被爲入、六時頃御旅舘江被爲入、五半時過助右衞門・玄蕃被爲召御意有之、御城番内膳者當番に付不罷出。才記被爲召御意。夫より御番頭和田知左衞門・町奉行土肥權六郎被爲召、御意有之候事。

一、明四日御先等に御用無之者、御行列に引續候而一統罷越候樣被仰出。

四月四日。前田齊廣金澤に着す。

〔政隣記〕

四月四日快天。御待請刻限今朝五時各登城、且今朝六時御供揃に而、小松御旅舘同刻過御發駕。寺井村・福富村御小休、野々市村御小休に而、夕七時御表式臺江御着之節時鐘打。御着城。依之今日者伺御機嫌之御帳出不申、明後六日各登城、伺御機嫌之御帳に附候筈之事。

但、自分就氣滯、御用番御宅江使者指出、猶更先樣子爲承合候處、今日取次不指支旨に付、則使者尤布上下着用。神田甚藏相勤、恐悦之口上申述候處、安房守儀御城に罷在候間罷歸次第可相達旨、取次杉澤式之丞申聞候由之事。

〔政隣記〕

一、東海道就御通行御入用銀千百貫目餘之由。北陸道に而者銀三百貫目餘に而相濟候由云々。

北陸道とあるは信越を通過する下街道をいふ

四月七日。能登諸郡に宮林等の竹木伐採を出願するも容易に許さゞるべきを告ぐ。

〔郡方御觸〕

山方御仕法以來、宮林等に有之候松木等幷唐竹、虫指或者立枯等に相成候に付伐除度旨、毎度願書付指出、是迄承届來候得共、中に者木筋宜敷木を、色々名目を付願出伐取候躰相聞え、甚有之間敷儀、元來其方中詮議方不行届故に候。如斯成行候而者、畢竟御縮方にも指障申儀、仍而以來大抵願之趣は容易に難承届候條、是等之趣村役人共江も得与可申渡置候、以上。

四月七日　　進士求馬

　　　　　　中村逸角

能州四郡十村中

四月七日。百姓の居村を離脱せんとするものを嚴に取締るべきを命ず。

〔郡方御觸〕

御郡人別しらべ之儀に付、文化年中相改申渡候處、近年猥に相成、無斷家を出、金澤町等に致奉公年久敷罷在、內證に而緣付に相成候上、追而役所江願出候躰相聞え、其上不岩丈者抔与申立候儀者、甚不實意之願に候。是等之儀者、第一村役人共を初、制し方不行届故に候。

中にも人別を切不遣而者、却而洩々に罷越、御縮方に指障り候抔与相心得候面々茂有之候得共、一圓不相當申聞方に候。出家願抔者、猥に相願候様にも相聞え候。仍而以來一通り願之趣者不承届候條、以後願出候ものは無據趣入念に遂詮議、其段奥書に委細相調候而可指出候、以上。

戊四月七日　　　　進士求馬

　　　　　　　　　中村逸角

能州四郡十村中

四月七日。百姓又は頭振の濫に別家せんとする者の取締を命ず。

〔郡方御觸〕

御郡方百姓・頭振、別家願近年數多に相成、其上口郡は役所江不願出、裁許之手前に而承届候躰、舊例与者乍申甚不詮議に候。元來惣而新たに家造候儀は、村役人相談之上、役所江願出可受指圖候儀者、御法令にも有之、面々承知之通に候處、甚等閑之至に候。百姓等身元宜敷者、二・三男一圍之内に爲致別家候儀者格別に候故、是迄承届遣候處、右に事寄、往還道脇、或者右屋敷跡請地抔いたし、致別家候儀者、甚紛敷趣に候條、ケ様之處得与遂詮議願出可申候。自然此末紛敷趣於有之者、嚴重遂詮鑿候條可有其心得候、以上。

四月七日　　進士求馬
　　　　　　中村逸角
能州四郡十村中

四月八日。本年に限り能登一般に他國よりの入津米を買ふことを許す。

〔郡方御觸〕

御郡方近年相續不作、別而當年米穀拂底に付、福浦湊等江他國船積米等相廻り候はゞ爲買受度旨、能州御郡御扶持人等より願出候旨、御郡奉行より紙面指出候に付、打返詮議有之候處、願之趣無據儀故、御用番江も御達、當年一作奥郡同樣に御申渡、入津米石高之儀者御案内無之旨、前月晦日御紙面之趣に付、公事場格相しらべ候處、他國米入津之儀者、時々何國米何百石、但何斗俵何浦江何月着船、誰買請申趣、御郡奉行より其御場へ及屆、其段委曲御場印を以公事場江被入置候事に相成居申候。尤入津有之候得者米見指遣、爲見屆候上米取扱いたし申事に候條、右前格之通、時々其御場江御聞屆候而可有御申越候。且又奥郡之儀者、他國米入津不指支御定茂有之候故、御郡奉行より其御場江不及屆に付、公事場江も時々入者無之旨寛政元年八月御申越、其節右之通御定者有之候得共、入津有之時に其員數御申越無之而者、しらべ方行屆兼候間、以來入津有之候はゞ、其段公事場江入有之樣申達置候條、此儀も間違

無之様に与存候、以上。

戌四月六日　　伊藤内膳

御算用場

別紙之通申來候條、被得其意、入津米等有之時に當場江可被及屆候、以上。

四月八日　　御算用場

能州御郡奉行中

改作御奉行中

四月十日。金澤城石川門の樓櫓竣成したるを以て大工等に賞賜す。

〔政隣記〕

四月十日、石川御門續御櫓出來に付、夫々拜領物被仰付。

但、御大工金三兩より段々差有之、御壁方金二兩より同。

四月十日。賭博を行ひたる者を其の村方より申告せざる時は過怠免又は過怠錢を課すべきことを告ぐ。

〔筒井舊記〕

賭之諸勝負に携候者、其村方より及斷候得者、詮議之上勝負錢取揚咎申付候而、不及過怠免之沙汰候。若脇より相聞及穿鑿候上者、勝負錢取揚候儀者勿論、夫々相違候上改作奉行ゟ申遣、一作一歩之過怠免被仰付候儀、前々御格に候。取捌之品により其人懲之爲過怠免代り、見込過怠錢申付候儀も可有之候條、此等之趣爲心得申渡置候條、十村中ゟも寄々を以可申談置候、以上。

戌四月十日　　進士求馬

奥・口御扶持人中

〔筒井舊記〕

賭之勝負之儀者、公邊一統之御停止、別而於三州者嚴重に被仰渡有之、其時に申渡候通に候。然處能州奥・口にも、近年博奕參會企候者共多有之躰粗及承、不屆之至り沙汰之限りに候。以後先以賭之諸勝負致增長候儀者、面々を初村役人共制方ゆるかせ故にも相聞え難心得候。以後村々輕き末々に至迄茂、心得違不致樣時々相制し、其上に茂不相嗜ものは、村役人より速に可及斷候。如此申渡候後、脇より相聞及糺候之節は、御格之通急度懲之沙汰に申付候條、心得違不致樣夫々嚴重に可申渡候、以上。

戌四月十日　　進士求馬

御郡廻御用　中村逸角

能州四郡十村中

四月十四日。本願寺の負債を償ふが爲諸國に募緣するの風說あるも之に應ずべからざることを豫告す。

〔筒井舊記〕

本願寺諸借銀之分、今般諸國之者ゟ割符を以爲指出候樣之風說粗相聞え候。若右樣之儀有之候共、御定之趣茂有之、一圓不相成儀は各承知之通に付、爲心得申談置候間、此旨急度兼而夫々被申聞候樣に与存候事。

戌四月

右之通御算用場より申談候條、若右樣心得違之者有之、重而相聞え候においては、申渡品有之候條、此段急度可申渡置候、以上。

四月十四日　進士求馬

能州四郡十村中

四月廿八日。御詰米御用として代官廻村の際宿主に入用銀を支拂ふを禁ず。

〔筒井舊記〕

御詰米升廻爲御用、役人相廻り候節、是迄宿主ゟ諸代官より、過分之入用銀取請候ヶ所も有之段粗相聞え候。右宿之儀は其所の役に而、相應之者ゟ所役人より申付、所方より餘荷銀取請候得ば、外に入用銀受取候儀は有之間敷事に候。尤諸代官之心得違に候條、當年より堅指止、其外是迄之流例たりとも、不筋之儀は嚴重相改候樣夫々可被申渡候、以上。

四月廿八日　御算用場

進士求馬殿

中村逸角殿

右寫之通り申來候條、得其意、夫々不相洩樣嚴重可申渡置候、以上。

中村逸角

能州四郡十村中

五月四日。足輕吉田常之丞鐵炮の技に達するを以て賞賜せらる。

〔御在國諸事覺書〕

一、左之紙面人見吉左衞門を以被渡下、御褒美可被下与被思召候、遂詮議可申上旨被仰出。

吉田常之丞

右私組足輕常之丞儀、前月十一日於組稽古場鐵炮千打稽古仕候處、中玉八百四十星三百六十四中り、平均八歩四厘打申候。右千打稽古之儀は、稀成稽古方之儀御座候間、奉達御聽候、以上。

四月十七日　　改田主馬

五月四日

一、左之覺書改田主馬江修理渡之。

金三兩　　組足輕　吉田常之丞

右之者當三月十一日於稽古場鐵炮致千打候處、中りも宜段被聞召、平生心懸宜故に候。依之爲御褒美如此被下之候條、可被申渡候事。

五月十日。石川郡大豆田村に火災あり。

〔政隣記〕

五月十日夕七半時頃、大豆田村火災家數二十軒餘之處、十九軒燒失暮過鎮火。

五月十一日。大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤城に登る。

〔政隣記〕

五月十一日備後守樣就御歸邑、去月二十八日江戸御發駕、昨夜津幡驛御泊、今朝五時過御宿

堤町角屋太郎次方江御着、無程御登城之筈に而御能有之筈之處、御持病氣に付御保養、夕七半時前御登城に候得共、御料理等御盃事も御斷に付、於御居間御對顔、御熨斗鮑三方・御莨碁盆　御茶迄被進、御能も相止、藤九郎狂言御所望躰に付佐渡狐一番被仰付。無程御退出、町方曁御登城之節御作法都而前々之通に付略す。

十二日備後守樣今曉七半時御供揃に而六時過御發駕。且又御持病氣に付御寺御參詣無之、昨日爲御禮御立歸之御登城も被仰進趣有之に付無之。

五月十七日。今江潟・木場潟等に於いて諸士の漁撈を行ふことなかるべきを告ぐ。

〔若年寄江申渡寫〕

付札、御横目江

能美郡今江潟・木場潟幷梯川筋、上者佐々木伊藤之渡を限、下者安宅水戸口、曁水戸先海之内八十間三方共、今江村・向本折村・下牧村獵場に被仰付置、先年より運上銀指上來候に付、右獵場において獵師之外魚殺生不相成儀、往古より之格合に候處、右獵場猥之儀有之、獵師共致難儀候に付、獵師之外者殺生不相成趣、享保年中幷安永年中・寛政年中にも、御家中一統申渡候處、近年又々右獵場へ殺生人多入込猥に相成候に付、獵師共甚致難儀候段御郡奉行

申聞候條、右於獵場御家中之人々等殺生堅無用之事。

右之通一統可被申談候事。

五　月

別紙之通夫々可申談旨、御用番山城守殿被仰聞候條、御承知被成、御同役御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之内裁許有之面々者、其支配ゟも不相洩相達候樣御申談可被成候、以上。

五月十七日　　御横目

御馬廻頭衆中

五月廿六日。金澤城御廣式の井戸修理の人夫井中に墜落す。

〔文化雜記〕

五月廿六日

一、御廣式御臺所井戸御修覆御用日用小平・友右衛門・喜兵衛与申者共、石胴萬人車に而釣おろし候節、右胴之上ゟ乘居候處、釣繩切候而胴共に三人共井戸へ落、早速引揚候得共致絶氣候に付、同所頭中より蘇香圓等相用候處正氣付候旨。御縮所之儀に候間迄出候樣右頭中聞候旨、御作事所假御横目足輕山科源左衛門申聞候に付、一通り小森源左衛門を以及言上候事。

五月廿七日。鹿島郡所口に災あり。

〔眞館諸書物留〕

火事家等御貸米之覺

一、一　石　　　　宿所燒失家

一、一　石　　　　同水難流失家

一、五　斗　　　　同潰し家

但、半潰も同斷。

一、七　斗　　　　在々燒失家

一、七　斗　　　　同水難流失家

一、三斗五升　　　同潰し家

但、半潰も同斷。

一、一斗七升五合　　水　附

但、一通り當座之水附にては御貸米無之、數日水附歟又は當座之水附に而も、格別無據子細有之候はゞ其趣可相願候事。

右文化十一年六月諸方御役所より御申談之旨、御郡所より被仰渡候事。

但、口郡所口町九百二十三軒府中村十六軒、五月廿七日燒失等に付、口郡番代江、御郡御奉行進士求馬殿・中村逸角殿より被仰渡候覺書也。

五月。頃日浮浪の徒にして領内を徘徊する者多し。

〔政隣記〕

五月廿九日、去年以來、別而當春來前記之通火災繁く、皆々放火之躰、其外度々放火有之候得共、早速見出し不事立分も有之。且先頃以來夜陰火事抔与而騷き立候事度々有之、於村方太鼓打立候儀も相聞え候。此等承糺候處、村々江夜盜入、拔刀を携へ大勢押入候族有之候に付、其後者怪敷躰之者徘徊致し候を見請次第、其儘寄せ太鼓を打人集め致し候得共、右怪敷者共甚駈廻早く、中々難召捕族与云々。右者今般去冬西丸に而之御誕生之事也。於公邊御誕生之爲御祝、非常之大赦被行、諸國江も依被仰渡、出牢人夥敷有之、流刑人召返しも多く、惡徒莫大に相成歟、就中今度東海道より御歸國之節、御同勢江紛れ込御國江も右惡徒共入込居故与云。

一、御郡方より狼出、子供抔に障り候間、殼鐵炮に而威し度旨願出候處、殼鐵炮に而者他村江追遣候族に候間、玉込に而可打取旨被仰渡候事。

但、追而御詮議之上素人打に而者反し玉等危候間、玉込間敷旨重而被仰渡。

附、實者狼出候儀者無之候得共、前文にも有之候怪敷者を、威し退け度与之願出与云々。

一、先頃以來武家・町家等に不限、諸方江怪敷躰之者罷越、受合療治之儀、或者祈禱或者物眞似咄し、或は軍物語等之講釋等手づま類可致由に而徘徊致し候者有之。

一、右等之者共江居所相尋候得者、小立野邊に罷在候段相答、分明に者不申聞候由。尤皆々他國者躰之由。

一、右惡徒之內盜賊改方等においても召捕候得共、いまだ數人に不及候。兎角立廻り等早く捕へ兼候由云々。

一、異躰成僧品能袈裟衣を着し、供數人召連、竪町邊通行之處、盜賊改方足輕見咎相尋候得者、身延山塔司何寺与名乘候に付、旅宿尋候處住吉屋与申聞候に付、何れ日蓮宗之寺方に旅宿可有之處、如何与咎候得者、答方甚胡亂に付、腕改候得者入墨之跡有之に付召捕、笠間源太左衞門方江召連、吟味之上令禁牢与云々。但供之者は皆逃去候由之事。

一、此間本多勘解由與力高橋幸次郎宅江、日蓮宗之由に而僧一人罷越、祈禱等を以病等本復させ候趣申聞候に付、名前等尋候內、此家內に病人可有之段申出候處、幸次郎儀氣配不勝段申候得者、暫相考、畢竟大病にも可及候、何れにも手の筋可見旨申に付、則爲見候處、不宜筋有之候、是を斷切候法有之旨に而、文を書候紙を取出、手に爲握置讀經之處、右紙に血にじみ候得者、夫に而本復無疑と申聞候に付、幸次郎悅び、先づ當座に銀一兩計を紙に包み、

銀一兩は一匁歟

爲謝禮相送候處、受納之上右御禮に者身延山へも不上而不叶儀に候間、跡より銀五十目計可相越旨申聞候に付、何方迄指遣可申哉与尋候處、□寺迄与約束し立出候處、重而立歸、右寺へ者御宅より不手廻に可有之候間、安房守殿家中□方迄可遣旨申聞罷歸候。跡に致思慮、若賣僧に而も可有之哉与心付、右家中□江尋に遣候處、實正成者之由等申越候。正不正之儀尋不申候處、右之通申越候に付怪敷存、右申聞候□寺江尋に遣候得者、左樣之客僧無之候、只今に不限、左樣之事此間中も被尋越候方も有之に付、右旅僧罷越候者可遂詮議与相待居候旨に付、右銀子も遣不申候內、右僧外々に而も怪敷事有之候由に而、盜賊改方手合に於て被召捕、則笠間源太左衛門前へ呼出、一應相尋候趣共有之候處、辯舌如流、源太左衛門も暫者閉口。于時段々糺明之上、先牢揚屋へ入置。

右賣僧者田中平之丞子与云沙汰也。平之丞者役銀奉行在役中私曲有之、明和七年就御大赦一等御宥免、越中五ヶ山江流刑被仰付。平之丞初養子は人持組葛卷賴母弟采女之處、明和四年出奔後之養子は杉浦仁右衛門末子、後横山城州家老横山帶刀養子と成り、横山八兵衛与言。

六月十三日。前田齊廣能を演じ老臣等の觀覽を許す。

〔政隣記〕

六月十三日、年寄中等江於御奥舞臺御能拜見被仰付。君上七騎落被遊、肴類等被下之。御近

習頭分ゟも麪類被下之。

但、暑中麪類被下候儀御例也。

御能御番組

竹生島　七騎落御　卷絹　是界

・腹不立　大盤若

放下僧　融　舍利　附祝言

六月十六日。村井又兵衞城代以下の諸職を免ぜらる。

〔政隣記〕

六月十六日左之通。

村井又兵衞

思召有之に付御城代・御勝手方・產物方主附共御免。

右病中に付奥村左京御使に而被仰渡。

六月二十日。前田綱紀の側室預玄院の五十回忌法會を江戶長元寺に營む。

〔金龍公記史料〕

六月二十日。修預玄院五十回忌法會于江戶長元寺。

文政元年八月十二日參照

六月。十村等に家政を豐にして專ら職務に盡瘁すべきことを諭す。

〔司農典〕

諸郡共十村役等被仰付、暨御扶持被下候砌、祝其外萬端に付諸雜用多相懸り候之旨承及候。右之外節々雜用多相懸り、難澁に至り候族も有之躰。勝手向不如意に而者役前も等閑に相成仕形。畢竟困窮に相迫り候得ば意外之趣も可有之、役儀も相勤兼候所ゟ至り候而者、甚不埒至極之儀に候間、以來急度相改、役儀等被仰付候節諸雜用は勿論、常々可成限省略いたし、御用方而已出精可相勤候。尤新田裁許等も右に准じ可申儀。如此申渡候上にも、自然心得違之人々有之段於承及には、急度遂穿鑿可申候之條、一統無違失相守可申候、以上。

甲戌六月　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村・新田裁許・山廻中

七月朔日。前田齊泰と婚約せる富山侯前田利幹の女銓姫逝去の報金澤に達す。

〔政隣記〕

六月廿一日、御在府從淡路守樣御近習頭赤尾傳右衞門与申者、早打爲御使參着。銓姫樣御病

氣御指重り、衆醫御手段被爲盡候得共、只今之時宜に至り無被仰分、御殘念千萬に思召候旨等之御口上被仰上。

〔政隣記〕

六月廿六日、今月廿日江戶發之早飛脚來着。嗣君御緣女銈姬樣御驚風に而御塞り之旨昔過告來。

〔政隣記〕

七月朔日、夕七半時從江戶表淡路守樣之早打御大小將組御使役高澤潤太夫、三百石六月廿六日江戶表發足御使として參着。銈姬樣御儀不被爲叶御療養、前月廿六日御死去之旨被仰上。右に付御用番左京殿不時登城。

但、御七歲未滿に付鳴物等遠慮觸御指出無之事。

銈姬の逝去は實は十三日なり

七月四日。御馬廻組原治太夫越中五ヶ山に流刑を命ぜらる。

〔政隣記〕

覺

御馬廻組　原　治太夫

右治太夫儀、先般吉久・伏木御詰米奉行相勤罷在候內、七・八ヶ年以前御藏懸り吉久新村松田

屋藏八儀、治太夫所持之印を取出白紙に押置、放生津町藏追御詰米二百石渡り之書替を、同村組合頭若杉屋佐五右衞門に調貰、御米請取致手廻、其儀相顯候處、兩人之諾言に依て斷にも不及、右埋合方等に、渡り方相濟候切手を追々依賴貸渡、每歲十月御算用場ゟ指出候。越米目錄しらべ方等藏八等ゟ任せ置候故、右質入切手共、御米渡り方不相濟同事に取繕仕置候を共儘指出、且又御藏米暫宛手廻に貸渡、時々入立相濟候樣に藏八等申聞候に任せ置、當時文化八年分吉久川下米之內に而千九石、同九年分同御藏米三百七十石引負罷在候儀、轉役後承候に付、轉役之砌御藏支配引送り方も不埒成儀共に而、切手之儀等山田新九郞より及不審、藏八を新九郞方に而縮方申付候迄も、私曲之防方に出府爲致吳候樣同人ゟ賴遣、此儀に付後日難題者懸申間敷与一札をも調遣、於金澤藏八・佐五右衞門を、當御詰米奉行山森小源太より裁許之十村ゟ申渡致縮方候上も、夜中密に右之者共旅宿ゟ罷越申談候儀も有之、下代松本儀右衞門儀治太夫方に而私曲有之儀申出候得共、早速縮方も不致故、出奔之躰に而行衞不相知。右等之趣一旦は取繕を申候儀も有之、再往糺之上有躰に申顯候族、奉行被仰付置候詮一圓無之、不屆至極に付切腹可被仰付者に候得共、爲赦死刑一等御宥免、越中五ヶ山之內ゟ流刑被仰付。

原治太夫嫡子　矢　司　郎

二男　駒之助
三男　又菊

右三人、父治太夫越中五ヶ山之內江流刑就被仰付候、依父罪能州島之內江流刑被仰付候。駒之助・又菊儀者幼少に付、及十五歲候迄只今迄之通一類江御預被成候條、右及年齡候者及斷候樣、一類共江可被申渡候。

右治太夫手前先達而遂御吟味候趣、委曲致言上候得者、落着如此就被仰出、今日大音帶刀宅江各罷越申渡、矢司郎儀於公事場申渡候上、配所出來迄御格之通牢揚屋江入置候。駒之助・又菊儀者幼少に付不召出候間、右等之趣一類江御申渡、駒之助等及十五歲候段及斷候節、公事場江可有御屆候、以上。

戌七月四日

伊藤內膳　印
奧野左膳　印
永原久兵衞　印
就外御用不在合　中川清六郎

山口清太夫殿

右本書松田屋藏八或藤八共調有之、區々に付先藏八与書之、追而可糺事。附非藏八に、藤八也。

〔御預人之記〕

原治太夫、百五十石組外能美郡御代官五十六歳。吉久御代官文化十年春迄相勤候處、右下役之者御米三百石致手廻候得共、不及穿鑿候故、八月廿二日大音帶刀厚崇四千石、内三百石與力知。但定火消役。江御預。同十一年七月四日帶刀宅江、公事場奉行・同場附御横目、且又組頭山口清太夫出座之上、五ヶ山之內江流刑被仰渡。

吉久奉行數ヶ年被仰付置候處、下役之者御米三百石致手廻候得共、不及穿鑿、ニ奉行之詮茂無之不埒之至。依而切腹被仰付候。然處今般爲赦、越中五ヶ山之內流刑被仰付候旨。

且又同日嫡子矢代、二男駒之助、三男又菊、於公事場能州島之內遠流被仰渡。矢代・駒之助直に禁牢。又菊就幼少及十五歳迄類中御預、五郎左衛門宅江罷歸。

七月四日。御馬廻組中村八兵衛牢死の後越中五ヶ山流刑を宣告せらる。

〔政隣記〕

覺

御馬廻組　中村八兵衛

右八兵衛儀役銀奉行相勤罷在候內、同役鈴木半藏申談御かね之內年々に取來、三貫七百目致私曲、右之通私曲有之に付、每歳在銀高於會所しらべ之儀不相達族、不屆至極に付、死刑可

文化十年八月二十二日の條參照

被仰付者に候得共、爲赦死刑一等御宥免、越中五ヶ山之内〻流刑被仰付。

中村八兵衞養子　中村八之助

右八之助せがれ　中村丑太郎

右八之助幷丑太郎儀、八兵衞流刑就被仰付候、同刑可被仰付處、八兵衞病死いたし候に付流刑御免被成候條、八之助一類へ預置候儀可相宥候。

右八兵衞等手前於公事場等に御糺之趣、委曲致言上候得者、落着如此被仰出候處、八兵衞儀先達而致牢死候。八之助今日公事場へ召出、右被仰出之趣申渡候。尤丑太郎手前之儀八之助〻申渡、八之助儀一類〻御預置之儀御宥免之趣、一類へ可有御申渡候。且又八兵衞所持之品不及闕所、家幷屋敷之儀者御普請會所御格之通可有御心得候、以上。

戌七月四日

伊藤內膳

奧野左膳

永原久兵衞

外就御用不在合　中村淸六郎

河內山久太夫殿

七月四日。御馬廻組鈴木半藏牢死の後縛首の刑を宣告せらる。

〔政隣記〕

覺

御馬廻　鈴　木　半　藏

右半藏儀、役銀奉行相勤罷在、去年七月御かね之內御算用場ゟ相渡候樣申渡候處、文化五年河北郡十村酒巳村八三郎手代塩屋庄七ゟ、郡打銀之內七十六貫目當分貸渡候處、庄七致病死、御かね致不足候段頭ゟ相達候に付、段々及僉議候處、御銀高八十九貫九百目餘致不足居、其內半藏幷先同役中村八兵衛申談私曲之分も申顯。元來私曲有之に付、每歲在銀高於會所しらべ之儀不相達、八兵衛役儀御免、代り堀重藏同役被仰付候節も、入𢌞等別條無之段申不致樣に取計、右庄七儀者致出奔候者に付、引寄相糺候處不致借用旨申、對決申付候處、半藏申分致轉展不相分候に付、及拷問候處庄七ゟ申懸候由申顯。右私曲銀高都合八十六貫二百目餘、年々に取來り遣失候族、重々不屆至極に付、不及赦之御沙汰、追而縛首に被仰付。

一、半藏嫡子豐之助行衞、猶更爲相尋可申候。

右半藏手前於公事場に御糺之趣、委曲致言上候得者、落着如此被仰出候處、先達而致牢死候。右御刑法之趣一類ゟ可有御申渡候。尤半藏所持之品々缺所御申付、帳面二冊同樣に記指出候樣一類ゟ可有御申渡候。家幷居屋敷之儀者、御普請會所御格之通可有御心得候。豐之助在り

文化十年八月二十日の條參照

酒巳村は酒見なるべきか

申不致本の儘

處相知候者、早速及斷候様是又一類江可有御申渡置候。

一、半藏儀道具等賣拂御代銀等五百目、妻・娘江相渡置候分、公事場江取揚候條、御取立、明後六日朝五時分公事場江可有御指出候。缺所之儀、妻・娘所持之品者除之、其外少も不相洩帳面に記出候様可有御申渡候、以上。

戌七月四日

伊藤内膳

奥野左膳

永原久兵衛

就外御用不在合　中川清六郎

小原惣左衛門殿

七月九日。犀川に於いて鑑札を有せざる者の漁撈を行ふことを禁ず。

〔御觸抜書〕

別紙寫之通爲御承知進之候、以上。

七月九日

前田主稅

御横目江

三社町竹松屋幸助与申者、去る酉年より來る丑年迄五箇年之間、犀川魚殺生致請負、川役銀

爲致上納候に付、投網・小目網・流網・鮎飛網・ねり網・片瀨簗等に而致殺生候人々、川役銀川師江相渡、見合札を請、可致殺生筈之處、無札之殺生人猥に入込、見咎候而茂中に者不聞入者も有之、川師共制方不行屆、運上銀指出兼候族に候間、無札之者不入込樣、嚴重一統被仰渡、其上に茂無札に而入込候者有之候者、急度相糺候樣仕度旨、町奉行申聞候條、殺生いたし候人々者、前に申渡置候通、急度可相心得候。

右之趣一統可被申談候事。

七　月

是月は大盡なり

七月晦日。伊勢松木神主叙位せられたるを以て相對寄進を許す。

〔國事雜抄〕

松木神主、今般從三位宣下に付、先例を以當町勸化有之度旨申來候に付、承屆候條、相對を以寄進之儀可爲勝手次第旨、町中へ可被申渡候、以上。

七月晦日　　前田清八

山崎小右衛門

佐久間五郞八殿

八月二日。金澤城に於いて禁裏の樂人に樂を奏せしむ。

〔政隣記〕

八月二日、越中城端善徳寺爲法用、禁裏樂人左之通招請に付下向之處、右用相濟歸京御城下通行に付、其段言上之處、樂可被仰付旨被仰出、今朝五時登城、於虎之御間御歩給事に而御多葉粉盆・御茶出之。諸事町奉行幷町同心、肩衣に而相勤承之。

一、於奥御舞臺被仰付候段申達候處、於猿樂舞臺に者難相勤候、外に何とか御間之名目被仰聞候樣に与申聞、其段達御聽候處、於大廣間可被仰付旨被仰出、俄に右御大廣間に御間圍等出來、九時過樂人江先御料理於虎之御間被下之、同半時過音樂初り、大廣間御勝手に者、年寄中等を初、御近習頭・同平士之人々、同下之方御表詰合御歩並以上列居見物。御板緣類に者毛氈敷之、御近習之人々子弟等、同御緣通りに者御手役者松井十左衞門等並居見物。御奥御見物所者御大廣間御上段に而、御簾側御板緣に關屋中務・人見吉左衞門・戸田與一郎幷奥取次之人々伺公。

〔續漸得雜記〕

一、文化十一年甲戌七月廿二日より廿八日迄、越中礪波郡城端善徳寺に而親鸞上人五百五十回忌法會執行有之。此寺は本願寺連枝の故を以、前例に隨ひ本願寺より禁裏の樂人の內を賴み、五人を下し、七日之間音樂執行なり。右法會畢而同月晦日に城端を出立し、其日今石動

泊、翌日金澤城下通行に而松任泊りの由聞えあり。於是國君此事を聞せ給ひ、城中に樂を奏ずる事を命じ給ふ。則內々を以廿八日夜、町役人心得之趣に而、聞合之爲に町役所より番徒兩人を以、城端に遣し聞合せしに如前條告來る。依之夫々內達之上、津幡驛まで肝煎彌三次を指遣し、しかじかの由を內達候。八月朔日の夕方御城下に入着、石浦町北川屋豐右衞門方に止宿せり。翌二日朝辰の中刻登城、五人共上下着用歩行也。家來五人、外町夫五人指添、道案內足輕二人、樂器入長持二つ、町夫四人に爲持、足輕兩人添。道筋西町より大手御門を入、橋爪御門より横御式臺より入、虎の御間に着座。家來も共に其次屛風圍の內へ入着す。誘引者町同心中兩人也。挨拶等は兩町奉行司之。奧御舞臺に而音樂行はるべき由御內命之處、惣而猿樂舞臺に而雅正の樂は勤がたく、別に御間之內共用意あるべき旨に付、竹の御間に而行るべきに改り、夫々見物人溜り等圍ひ出來あり。上の御間に而上覽、二・三の御間に而樂行也。御簾側板緣には御用部屋關屋中務・奧取次衆伺公。午半刻に音樂始る。見物人は御勝手之方、御年寄中初御近習之面々・同與力・詰合御歩組以上列居。板緣に毛氈を敷、御近習の面々子弟等列居。同緣頰に猿樂役者十三人、大廣間下段に御奧向也。平調・音取・五常樂・急拔頭・越天樂、窪美作守羯鼓、芝肥後守太鼓、辻左近將監笛、東右近將曹笙、窪左近將曹篳篥、各裝束風折烏帽子着用也。舞樂陵王、舞人窪左近將曹近繁、退出、陵王亂序之間太鼓窪美作守近章、長慶子、陵王破太鼓芝肥後守葛起。右畢而後末の半

刻頃、何ぞ珍敷品一・二曲と上より給ふにより、左之通平調音取合歡宴琴あり・慶徳琴あり・賀殿舞

窪美作守、申の時より初り、申の牛刻に畢。被下物白銀五枚宛、兼房染絹二端宛、木具包紙熨斗鮑賜之。外に白布一疋宛賜之。重而御所望あるに依て也。各町奉行中を以被下之。家隷五人之內、樂器棟取北村伊助へ金二百疋、外四人江金百疋宛、町同心を以被下之。樂人へ御料理被下、給仕御步、家來侍分は坊主給事也。樂器は樂人持參也。去共太鼓は大なる品ゆゑ持參なし。依之城中に藏せる品の太鼓を取出し給ふべき命あり。乍去年久敷事なれば、若蠹食も難計、兼而御城下之専光寺より取寄らる。併藏せる所の太鼓を出すに、嚴然として麗しく、金色目を射るがごとし。樂人も流石御大家也と感服しぬ。黃昏に歸宿、翌三日六つ時前に發途せり。尤宿賄料は都而上より被下之。

〔御在國諸事覺書〕

八月二日

一、従京都樂人來候付、今日合奏被仰付候間、各見物被仰付候旨。依而各五時より出席之旨、昨夕月番より廻狀有之、各五時より追々出席。

一、樂人窪美濃守等五人、上下着用、四時前參上、虎之間に相溜、音樂初候前一汁五菜之御料理御步給事に而出之、町奉行・町同心罷出挨拶、音樂相濟候上に而素麵被下候由之事。

一、竹之御間において音樂有之候に付、御奥書院横御縁頰より御同間前通り、御小書院横御廊下、夫より瀧之間・矢天井之御間・竹之御間上之間迄御縮に相成、御同間御見物所に相成候。依而表方より申聞之趣有之に付、御家老中・若年寄中松之間二之間に屛風圍いたし罷在可申旨月番へ相達、御縮付申以前右屛風圍之所へ罷越、九半時過見物所へ相廻り候様御近習頭申聞候に付、年寄中等一集に御小書院前より御縁𛀁出、御見物所前通り致中座、竹之間御勝手上之方𛀁罷越、追付樂初り、七半時前相濟、年寄中・御家老中・若年寄一列、松之間二之間において關屋中務を以御禮申上、追付退出之事。

八月二日。能登に於ける唐竹を藩外に賣出すことを禁ず。

〔郡方御觸〕

能州出來之唐竹、前々より他國出不相成儀に候處、百姓持藪竹買集、他國𛀁積出、曁御預所之者𛀁賣拂、同所より舟積を以他國𛀁相廻し候躰に候。右者近年稼山に相成候故、不苦儀与相心得候哉に候得共、其儀者心得違に候。去年已來定検地奉行手合、川除御普請方仕法相改、右役所において竹買請人相立、御買上に申渡候處、右等之趣に而竹拂底に相成、おのづから直段にも相障、御不益之儀に候條、以來他國出之儀者不及申、御預所之者𛀁賣渡候儀指止候様、各支配所不相洩様夫々可被申渡候、以上。

戌八月二日

　　進士求馬殿

　　中村逸角殿

右寫之通申來候條、可得其意、夫々不相洩樣可申渡候、以上。

　　　　　　　　　　中村逸角

　　能州四郡十村中

八月五日。酒屋の店頭にて飮酒し又は不法の行爲ある者の取締を稟議す。

〔異本三守御譜〕

當町酒造商賣人店へ、諸士等之家來小者、或は帶刀之者も入交、呑酒に罷越、或は全價も出不申、樽酒等可相求段申入、右申分不任ては勝手入込及亂行候者も毎度有之、彼是申入候ても商之障にも相成候事故、隨分任申分候へ共、別て近年其類多罷越及難澁候に付、去年以來酒造共より願之趣申聞候へ共、是迄私共手前に指押置申候。都て酒造商賣人於店呑酒等不致格合にて、見世定書張置申候處、次第に右樣之儀增長仕、僅之價にて過分之樽酒等貸呉候樣申聞、別て盆·暮·酒造仕込時節抔は、取込を見込罷越、商賣方之妨に相成候樣に仕懸、不依多少に不任申分てはいつ迄も退不申、手代共等闇敷時分、風与申過にても仕候得者及口論、彼

是不法相働、主人々々へは表裏に申成し、主人方へ右商賣人呼付指留置、組合一統之迷惑に懸り申樣之儀御座候。商之道に御座候得者、正道に求申居候者、無禮可仕譯は無御座儀、前段之通押買等仕族故、申分にも相成候儀与奉存候。右之通次第增長仕、酒造共一統迷惑仕、渡世にも相成不申段申聞候間、主人々々より嚴重申渡置候樣仕度、其上にて以來不法之趣有之候得者、手先足輕共に爲召捕、其樣子に寄公事場へ引渡可申与奉存候間、此段一統御觸渡置被下候樣仕度奉存候、以上。

戌八月五日

前田清八　判

山崎小右衛門　判

前田主稅樣

當町酒造商賣人店江、諸士の家來・小者、又は帶刀之者も入交り呑酒に罷越、或は全價も出不申、檜酒等可相求段申入、右不任申入候得者、勝手入込及亂行之者も毎度有之、就別而近年右類多及難澁候躰、委細別紙之通町奉行申聞候條、右躰不埒之族無之樣、家來末々之者江主人々々より嚴重可申渡候事。

右之趣一統可被申談候事。

八　月

九月二日。鐵炮の取締に關して調査すべきことを告ぐ。

〔御郡典〕

御領國鐵炮改之儀、享保二年以來公儀へ御屆には不及候得共、獵師等鐵炮持主致病死候へば、其裁許十村へ鐵炮預置、右悴親同樣に相成候得ば、右鐵炮相渡可申哉之旨、十村より御郡奉行へ書付を以相達、御郡奉行以添書、御領國鐵炮改奉行へ指出候先格に候處、近年諸郡奉行より右樣之屆無之、幷商鐵炮賣買之儀も屆無之旨に候。自然心得違、下に而讓替等いたし候而は、御締方相洩候條、夫々樣子相糺可被申聞候事。

御領國鐵炮改之儀に付、別紙之通御用番年寄中被申聞候に付、各手前に而猶更遂詮議可被申聞候、以上。

九月二日　　御算用場

進士求馬殿

中村逸角殿

九月五日。嫁娶の際その家に石を投ずることを禁ず。

〔文化雜記〕

付札、御横目江

御家中侍中幷町方嫁娶之節、石打候儀堅く不仕樣前々相觸候處、近く次第猥に相成、門戶も爲損、怪我人も有之躰相聞候條、以來右族堅く有之間敷候。若右族之者於有之者、御横目足輕・盜賊改方・町足輕、見合次第相咎召捕候樣、今般改而申渡候條、此段家來末々迄嚴重に申渡候樣、組・支配𛀁被申渡、組等之內裁許有之面々は、其支配𛀁も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

九月五日

九月廿七日。前田齊泰、秋田侯佐竹義和の女と緣組せんことを議す。

〔御在國諸事覺書〕

九月廿七日

一、佐竹右京大夫樣御次女樣、勝千代樣𛀁御緣組御內約被成度、阿方より被仰上候儀は御鬮酌被成候間、此方樣より被仰進候樣被成度御內意之趣、坊主を以聞番迄被仰込有之。依之御內談被仰合度旨月番迄被仰出。

九月。藩の財政逼迫するを以て百姓に手上高・手上免等を勸奬す。

〔郡方御觸〕

新開方御仕法一卷

御上御難澁与申內、近年別而御逼迫至極、次第御借銀相嵩、如何に茂御運方無之に付、諸向格別之御省略被爲成候得共、元來御取箇之儀、往古御物成に比候而莫大至極相減、御入用之分は前々与は格別御減方茂無之に付、累年過分之御不足に相成、當時に而は御調達を以被相辨候事さへ調兼候所ゟ相至候。然ば御公務は不及申、御平常御入用等誠に御省略之御手段も無之品々、曁川除御普請幷作難御取扱等すら御手におよび兼候族之御儀に候得ば、人々難澁之時節に候得ば餘慶与申儀は有之間敷候得共、如此御時節、人々志を勵冥加を存付、格別之困窮に茂無之者は、御取箇御増方之儀盡精誠可致入情儀与存候。ヶ様之節身之ため而已相考候村方儀自然有之候共、御上御運方一圓被成方無之候而は、假令身分々々相立候共其詮無之事に而候。十村中は勿論、末々迄茂盡粉骨出情可有之儀与存候。一統此儀を實に存付、可也に御運茂被爲成候所ゟ至り候はゞ、誠に以恐悦至極之儀、諸人茂安堵之至に候。此儀何茂奉恐察、一途に入情可致事に候之間、古田之分は成限手上高・手上免可願出候。新開之分は別紙兩通之趣一統相觸、村々指構、大躰之儀は爲致堪忍、領付村々は不及申、外村々より早速夫々願出可申候。右之趣末々迄能々致會得候樣可申諭候、以上。

戌九月　　　　　　　　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

九月。鹿島郡府中村の惣右衞門質營業を許さる。

〔眞舘諸書物留〕

私組下府中村惣右衞門、質商賣仕度旨願出候に付、村役人手前僉議仕候處、相違無御座候間、質方御定札御渡被下候樣仕度奉願候、以上。

文化十一年九月　武部村　四郎太夫

進士求馬殿

中村逸角殿

質定

一、質物十五ヶ月切、其餘待札仕間鋪、幷口請合仕間鋪事。

一、利足者百目に付一ヶ月一步五之事。

一、俵物三十ヶ月切、尤利足右同斷之事。

一、質置尻請人無之分質取申間敷、尤質請人見合札可相渡置事。

一、質物取扱夕七つ時限之事。

右質方定ヶ條之儀、嚴重可相守候也。

裏に

鹿島郡府中村　惣右衞門

右之者今般質屋承屆者也。

文化十一年九月

進士求馬

御郡廻 中村逸角

十月十七日。前田重教夫人壽光院の十三回忌法會を江戸廣德寺に修す。

〔金龍公記史料〕

十月十七日。修壽光院十三回忌法會於江戸廣德寺。

十月十八日。領內に於いて狩獵する鹿皮・猪皮の取締を命ず。

〔郡方御觸〕

淺野村領皮多共於手前、白揉皮出來、御献上御鐙袋皮指上度旨相願、三州に而狩捕候鹿皮・猪獅子等、是迄縮方無之、密に他國江洩候躰に相聞候。皮之儀者、非常手當も有之品に付、年切手當も申渡、取縮方申渡候。依之加州三郡・越中礪波郡之分、右皮多共相廻り買請可申、能州之儀者穴水鄉に罷在候孫兵衞・子浦村百姓太右衞門買請可申旨に候間、百姓狩人等不手廻無之旨申聞、其段承屆不指支樣申渡候。且亦右革大獵之節者下直に買請、不獵之節者高直にも相成候躰に付、獵不獵相平均、右鹿皮一枚に付一貫文、計立等之割合直段書出候得共、其年々狩捕高にも寄可申間、買請方之儀は相對を以相場相立候樣申渡候條、以來不縮無之樣夫

々可被申渡候、已上。

戌十月十八日　　御算用場

進士求馬殿

中村逸角殿

右寫之通申來候條、得其意、以來不縮無之樣夫々可申渡置候、以上。

進士求馬

能州四郡

十月廿五日。郡方に寺社の勸財に應ずべからざることを告ぐ。

〔筒井舊記〕

御領國中寺社等相對托鉢之儀に付、是迄申渡置候趣茂有之處、寺社等之內先例抔与申立、押而施物申請候族も有之、無是非寔に內々之趣を以致施物候者茂有之由粗相聞え候。村役人等を初如何相心得候儀に候哉。自然此以後右躰之族有之候はゞ、夫々遂穿鑿可申候條、此段一統に申渡、心得違不致樣嚴重可申渡候、以上。

戌十月　　多羅尾左一郎

千羽彥太夫

諸郡御扶持人・十村中

御紙面御渡、早速末々迄御申渡可被成旨被仰渡候。尤能州筋別而早く御申談御座候様に与被仰渡候間、左樣御心得可被成候、以上。

十月廿五日　　　　田中村　小四郎

諸郡御扶持人中樣

十月廿七日。能登口郡より輸出する苧綿に役銀を徴するを以てその員數を調査せしむ。

〔御郡典〕

口郡出來之苧綿、江州小幡幷八幡商人江勝手次第賣渡、一駄に付十五匁宛右商人より取立、散小物成銀与一集致上納候樣、御算用場御詮議之上被仰渡之趣、御承知之通に御座候。依而御組々より、當春以來爲登綿駄數綿密御調理、別冊草案之通帳面二冊御取立、早速私方江可被遣候。銀子之儀は、追而船役等一集に御指紙可被成候。此書狀先々早速御順達落着より御返可被成候、以上。

十月廿七日　　　　武部村　四郎太夫

口郡仲間組裁許中宛

是月は大盡なり

十月晦日。遊行上人金澤玉泉寺に來錫す。

〔金龍公記史料〕

十月晦。遊行上人至金澤。宿玉泉寺。

〔大ゆめ生むかし〕

文化十一年遊行上人御廻歷、玉泉寺において百日の間勤行のうへ名號の御札を授く。

十一月四日。郡方の男女過書の下附を求めずして上方筋に赴く者あるを戒む。

〔筒井舊記〕

近年御郡之男女、上方筋ゟ罷越候節、過書等も不申請、御領分村道を通り、大聖寺御關所外を可罷通樣子に付、段々御穿鑿茂有之候得共、次第人數も多相成候に付、以來者嚴重御紀方茂在之旨等、今度彼地御役人より申越候條、得其意、以來上筋ゟ罷越候節者、過書可願出、少茂心得違無之樣嚴重可申渡候。尤能州四郡女之儀者、他國ゟ罷出候儀不相成趣者、兼而申渡置候處、中には密々に罷越候躰にも相聞え、不埒之至り沙汰之限りに候。以來心得違不致樣、一統嚴重申渡、組切請書取立可指出候、以上。

戌十一月四日　　　　中村逸角
　　　　　　　　　　進士求馬

能州四郡十村中

十一月十五日。前田齊廣明年の參覲を秋期に延ぶることを許されたる報を受く。

〔御在國諸事覺書〕

十一月十五日

來年御參勤御時節御伺被成候處、兼而思召之趣被仰達置候通、來年九月中御參府可被遊旨御老中方御奉書到來、難有御仕合被思召候。則御奉書拜見被仰付候。

御札令披見候。公方樣・大納言樣益御機嫌能被成御座恐悅旨尤候。將又參勤時節之儀以使者被相伺之候。及上聞候處參勤時節被遊御用捨候。來年九月中可致參府由被仰出候條、可被存其趣候。恐々謹言。

十一月四日　　　青山下野守忠裕
　　　　　　　　土井大炊頭利厚
　　　　　　　　牧野備前守忠精

松平伊豆守信明

松平加賀守殿

十一月廿八日。河合良温石川郡湯涌温泉の記を作る。

〔續漸得雜記〕

湯涌村溫泉記

加賀州石川郡湯涌村有溫泉出焉。諸沈痾敗疾者浴而獲治者何啻萬億數也。至若其瘡疥與折傷撲損諸症。則其功驗駛峻。甚於湯之灌雪也云。俗傳。養老年間僧泰澄。披蓁莽於硫黃之山也。遂到此。曰後世知我者觀于此。乃穿地。則靈泉迸出焉。爾來救治民疾苦者。至今千有餘年。猶一日矣。蓋聖僧現瑞之所由然也云。湯室之側民舍爲伍。舍皆頗宏壯。南邊居者曰理兵衞。北者曰新右衞門。東者曰半左衞門。曰五兵衞。半左衞門則理兵衞之族。別立門戶者也。北隅者曰九兵衞。五戶同與湯之利。以待病客。客至則授一室居之。炊爨供給隨其欲。以爲生業也。湯內有如石臼者。一呼曰臼湯。居室之四分之一。而在于南側。三尺許則理兵衞之固有也。往昔新右衞門與九兵衞五兵衞。請理兵衞與之。因爲徵後來。三戶爲盟書云。甲戌之春予顚而傷足。數月不瘳。五月往浴。主理兵衞家。一宿而疼寢安。不竣旬日而痛如遺矣。比乎將歸理兵衞請云。㢢邑蓋二百年前爲祝融所災。及頃年自丙申如庚午再罹火。是以家譜文籍亡一有存者

矣。如是則恐在後子裔孫。將不有所徵千古焉。願夫子一記吾所聞。曰僕之先曰宇野次郎右衛門。相傳勝國之時郡之豪族原左門之胤也。左門之所居。則今野村有城址之處。名曰經塚。蓋戰鬪死亡之地。至今夜則燐爲妖。人多或見之云。次郎右衛門之弟八之丞者居于通村。亞相公時受秩二百石。今五箇村農長出其後。其賜書押字今猶傳云。先是三四世祖時。納溫泉于公所。乃密布濾過而貢之。當時所用之篩子。今猶藏于家也。其冏卿相故丹後守奥村君。嘗浴此獲痊。喜甚。爲改造屋宇。久之殆且傾壞。因更作。俾其故材敗木與鄰村之人。今下谷村農戶是也。此其所傳之梗概。蓋如此云。予許其請。歸自邑今且二十餘旬。曩所患之足愈痊益健。則所喜亦不可不記。因幷錄以贈之。

文化十一年甲戌十一月廿八日記

右は村井家之儒臣河合良溫作也。

十一月廿九日。前田齊泰、秋田侯佐竹義和の女利瑳姫と約婚することを許さる。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

十一月二日勝千代樣佐竹右京大夫義敦公之御二女利瑳樣与御再緣御內約、御願之通同廿九日被仰出有之なり。

義敦は義和と同じかるべし

〔温敬公記史料〕

三約与佐竹右京大夫義和女利瑛姫婚。十一年十一月廿九日被允。

十二月六日。金澤五枚町に火災あり。

〔文化雜記〕

十二月六日

一、今曉七時前火事沙汰有之に付、御供押爲承合候處、才川五枚町堂屋与申木屋より出火之樣子、罷歸申聞候に付及言上候事。

一、火之元嚴重之儀可申渡旨、今朝六時前被仰出候に付、御殿格夫々呼立申渡候事。

一、前條火事御城風下に而、火之粉參候樣子に付、御城中爲見分御供押指遣候處、御本丸江は火之粉等參り不申、金谷御屋敷之方は最初火之粉參候得共、只今は其儀も無之旨罷歸申聞候に付及言上候事。

一、右火事に付松原氏等出馬有之候處、火勢强く防方人少に候間、奉書火消之儀可申達旨被申越候に付、御用番左京殿へ御達申候處、前田左衞門・西尾隼人被仰渡候旨御同人被仰聞候に付、其段及言上候事。

一、火事沙汰に付松田氏等出馬有之候處、六半時頃及鎮火、川南町肝煎呼出候處、病氣に付

相肝煎孫助罷出、樣子相尋候處、堂屋久右衞門与申者より出火、川南町家數廿二軒計燒失之旨、自火・放火之儀相知不申旨右孫助申聞。且五枚町組合頭勘七呼出樣子相尋候處、同人支配之内二十軒計燒失之旨申聞、都合四十軒燒失之旨坂井要人を以及言上候。且火消役何茂出馬有之、御步横目・御横目足輕追々罷出候に付、是又同人を以及言上候事。

〔御在國諸事覺書〕

十二月六日

一、今曉八半時比犀川五枚町より出火に付各登城、六時過火鎭り候付六半時過各退出之事。

　但、五枚町堂屋より出火、川南町迄燒失、家數四十五軒毀家二軒。

〔御在國諸事覺書〕

十二月十三日。六組御步の缺員を補充せんことを議す。

御步缺人代、文化六年被召抱候後、缺人代被召抱候樣時々相願候得共、缺人高少く故相扣置候內、追々舊宅之者有之、難澁におよび候に付、近年病死跡迄一兩人被召抱候者有之候得共、前々より病死跡迄被召抱候儀先は無御座候。本文之通重而當夏紙面指出候處、只今に而は三十四人之不足に相成候間、代人被召抱候樣御步頭每度相願、尙更此節罷出、前之缺人代り幾重にも僉議付兼申儀に候へば、紙面中に調置候阿部直左衞門等病死跡之分、妻子流浪仕、久

舊宅は給祿を得たる者の死亡したる後子孫の未だ家督を相續せざる間をいふ

々一類共より養育仕置候得共、何茂難澁者故、只今に而は如何共育方無御座、小頭共も最早取扱兼候段申聞、其儘に難仕置御座候間、何分にも缺人代被召抱候樣仕度段、口達を以申聞候。六組御步名跡被仰付候儀は御格に無之候得者、缺人代被仰付候節前々より指加被召抱候。當時三十餘人之缺人にも相成候間、今般先八人可被召抱哉与遂詮議申候。

但、定番御步之內相應之者相撰被指加候儀も有之候得共、今度は人少之事故撰方不申渡候事。

六組御步三十四人之不足に相成候間、代り人被召抱候樣仕度旨御步頭相願候付、先八人可被召抱哉与、別紙付札之通遂詮議、御勝手方へも及示談候處、存寄無御座に付奉伺候。被仰出次第、器量之者相撰候樣可申渡与奉存候。則別紙奉入御覽候、以上。

十二月十二日　前田兵部等四人

今井左太夫を以被渡下。

御朱書、伺之通たるべく候。

一、十二月十三日指出之。

五　尺　五　寸　廿　歲　小　塚　昌　太　夫

五尺五寸六分　廿六歲　塚本次郎三郎

五　尺　五　寸　十八歲　飯　尾　外　之　助

五尺五寸四歩　十八歳　長野清作

五尺五寸　廿二歳　小松三十郎

右今般――

五尺四寸五分　廿一歳　辻範太夫

右範太夫儀、寸少不足仕候得共恰好宜、尤御格之者与立並候而も見劣不申候。軍螺小島喜兵衛弟子に而相應達者に吹申候。故重藏寛政十二年被召抱、文化六年病死仕候。十ヶ年全入情相勤候者に御座候。老母永々流浪仕罷在、時節柄故一類共も育兼候躰に而、路頭にも立可申族に御座候間、被召抱候様仕度奉存候。

五尺四寸　十八歳　篠井他三郎

右他三郎儀寸不足――

五尺二寸一分　廿九歳　木村四郎左衛門

右四郎左衛門儀寸不足――

被仰渡次第夫々續岩乗可申付候、以上。

戌十二月十三日　一木逸角

三浦八郎左衛門

富田九郎右衞門
大橋作左衞門
津田權五郎　在江戸

津田玄蕃等六人様

十二月二十日。能登にて產する海鼠の加工品に就いて上申す。

〔國事雜抄〕

海鼠製品名目

今般煎海鼠・ぶらこ・串海鼠等之品類御尋に御座候に付、則左に奉申上候。

一、煎海鼠

右者元來大生海鼠を鍋に而煎上出來仕候付、煎海鼠与名付候由に御座候。

一、ぶらこ

右者煎海鼠之儀に而、煎上候上繩に而一つ宛つなぎ申に付、ぶらこと唱へ申由に御座候。

一、繩海鼠

右者串海鼠に相成不申分を繩に通し、干立申候に付なわこと唱へ申由に御座候。

一、つなぎ海鼠

右者くしこ・縄海鼠に茂相成不申分を、片つなぎに而干立申に付、つなぎこと申候。併ぶらこに能似寄候に付、當時爲取扱不申候。

一、金海鼠　此分奥州金花山に而出來之由承傳へ居申候。

右者前々より問屋に而取扱不仕候。併煎海鼠を金海鼠とも申候へ共、品は違候而近年出來不仕候。

一、ふじこ　越後浦に而出來。

右者ぶらこに能似寄候へ共、少し色赤み御座候。併紛敷品物に付問屋に而茂取扱不申由。勿論商賣人江も取扱不申樣先達而申渡置候。

右之通に御座候。則煎海鼠・串海鼠・縄海鼠、爲御見くらべ奉御覽入候。右金海鼠・ふじこ之外は能州所口に而出來仕候。

一、別紙越中屋長右衞門より取立申に付奉指上候、以上。

戌十二月二十日

魚問屋

魚肝煎

十二月廿三日。足輕の弓術に長ずるものに賞賜す。

〔金龍公記史料〕

十二月廿三日。賞與足輕小頭以下七十七人。金一兩至百疋。攻弓術不怠也。

是歲。雪大に降る。

〔金龍公記史料〕

是歲雪深。

文化十二年

正月朔日。前田齊廣金澤城に於いて新正の賀儀を行ふ。

〔御在國諸事覺書〕

正月元日　晴

一、卯之刻より年寄中等段々登城。

一、四時過御表宜候段申上追付御出、御先立掃部。御奥書院御上段に御着座、御裝束御直垂、御太刀御奥小將渡邊與吉素袍着用。御家老役玄蕃・八郎右衞門布衣着用御緣頰御右之方に伺公、御奏者番小幡式部・石野雅樂助素袍着用、替之御太刀御敷居之內三疊目に披露之。諸大夫之面々大紋直垂着用、檜垣之間御廊下より列之通段々罷出、御下段御敷居之內一疊目に而御禮申上、御奏者番御敷居之外御左之方御唐紙際に扣披露之。御表小將杉江李左衞門・鈴木淸

左衛門・中村五兵衛素袍着用、替之御太刀引之。

但、御入には御奥書院後御通、御上段御左御廊下より被爲入、御先立若年寄。其後扣罷在、相濟被爲入候節御先立同前。且又御近習之面々、御奥書院横御廊下幷松之間二之間之方御杉戸際二ヶ所に伺公仕候事。

一、諸大夫之面々御禮相濟、檜垣之間御緣頰に扣罷在、八郎右衛門より會釋に應じ甲斐守等段々罷出、次第之通御敷居之內御右之方御唐紙際へ列座仕、益御機嫌能御越歲被遊恐悅奉存候旨、玄蕃出懸御取合申上。御意有之、甲斐守御請申上。御のしと御意有之。御表小將中村五兵衛素袍着用、御熨斗三方持出之、甲斐守等頂戴之。畢而右之御表小將御三方引之候後、御熨斗頂戴難有奉存候旨玄蕃進出申上。御意有之。段々末座より退出候處に而、御禮人相濟候段玄蕃申上、被爲入。御先立同前。

但、新番頭等溜之內一同にて圍、甲斐守等家來三人充召連罷出、大紋直垂に改、玄蕃・八郎右衛門儀も家來一人充召連罷出、布衣に改候。且家來召連候儀、年內御城代方幷御横目へ家來返書を以相達候事。

一、右畢而於桐之御間鶴之庖丁御覽被遊候事。

但、此間に諸大夫之面々幷伺公之御家老裝束着替、御小書院列立之所に相廻る。

一、九時前御出、御先立式部。御納戸横より御小書院御上段に御着座、主税等御家老役・若年寄迄御禮被爲請。夫より御大廣間御上段御着座。御先立掃部。人持頭分御禮、年寄中伺公、御家老役御廣縁御衝立際に罷在、披露御奏者番。御禮人今少に相成候付、掃部御衝立之邊に罷在候處、御横目より相圖有之、掃部御案內申上御下段に御着座、御襖兵部・式部披之。御大小將より坊主頭迄一統御目見、伺公等右同斷。八時前相濟、被爲入、御先立掃部。夫より御居間書院三之間において御奥小將幷勝千代樣御側小將、且又御近習頭支配之人々御禮。伺公無之、披露御奏者番。相濟、御襖御近習頭たて、右人々退候以後、船之間にて御表小將一統御禮。年寄中之內一人伺公、披露御奏者番。相濟、被爲入。

一、年寄中・御家老中・若年寄中松之間二之間に一列。御臺所奉行中川四郎左衞門罷出、御雜煮等被下候旨申述。追付年寄中等同席に而頂戴。若年寄は蔦之間に而頂戴。相濟、重而松之間において、年寄中・御家老中・若年寄一集に御禮、御臺所奉行佐久間武太夫へ申述候事。

但、給事席坊主。

一、八半時過松之間二之間に年寄中・御家老中・若年寄中一列、御近習頭上坂平九郎罷出、鶴之御吸物可被下旨被仰出、同人誘引、御居間書院二之間において年寄中・御家老中・若年寄同列。其所へ戸田與一郎を以御意有之、御吸物・御酒・御取肴頂戴。御酒之內上坂平九郎挨拶に

罷出、頂戴相濟、於同席御禮同人へ申述。
　但、御給事御表小將。
一、御規式等相濟、七時過各退出。

正月二日。松囃子の儀を行ふ。

〔御在國諸事覺書〕
正月二日　雪、晝より晴
一、六半時過より年寄中等段々登城。
一、四半時過御表宜段申上、追付御出、御先立掃部。御大廣間に御着座、御襖兵部・式部披之。昨日當番之物頭、且又昨日相殘候御大小將・御馬廻一統御禮。年寄中伺公、披露御奏者番。右相濟、被爲入候時分御通懸於柳之間御役者共御目見。披露御奏者番、年寄中之內一人伺公。右相濟、被爲入候時分御居間書院三之間に而、昨日相殘候御奥小將幷勝千代樣御側小將且又御近習頭支配之人々御禮。伺公無之、披露御奏者番。相濟御襖たて、右人々退候以後船之間に而昨日相殘候御表小將一統御禮。年寄中之內一人伺公、披露御奏者番。相濟、被爲入。
　但、御表ゟ御出之節、御家老中は朔望之通奥書院御縁頰へ罷出居、御跡より罷越、大廣間御着座候迄矢天井之間に罷出居、御跡より罷越。

一、今晩御松囃子に付年寄中等七半時過より段々登城。

一、後刻竹田權兵衛江被下候御目錄掃部相渡候に付、爲承知御用人渡邊久兵衛へ御執筆申聞候事。

一、惣御役者揃候段町奉行山崎小右衛門申聞、式部坂井要人を以申上候事。

一、御表宜候段申上六半時過御出、御先立式部、御大廣間御下段に御着座。何茂近く寄候様御意有之。追付御囃子初り、御規式前々之通。年寄中伺公、此面々御盃被下。返上御取次兵部・掃部相勤。御家老中・若年寄中御盃被下、返上無之。相濟、成瀨内藏助を初段々御流頂戴之人々六十五人、御肴御左伊勢守御右安房守相勤。猩々相濟、大夫江被下物目錄掃部相渡。頂戴之上、竹田權兵衛御目錄頂戴仕難有仕合奉存旨掃部申上。畢而御意有之。年寄中座上之者御取合申上。五半時過相濟被爲入、御先立同前。

御番附左之通

四海波　權兵衛

高砂　權兵衛　猪之助　太左衛門
　　　　　　　丈助　養助

松高き　權進

東北　權進　次三郎　源藏
　　　　　　金藏

九峰事件は本年十月六日の條にあり

猩々　權兵衛　嘉六郎　八郎兵衛　壽六　市十郎

一、役者被下物左之通御用所取捌也。

御小袖二（代銀四枚）　竹田權兵衛　　白銀二枚　諸橋權進

白銀一枚充　藤本太左衛門・御手役者十人

白銀一枚充　波吉五郎兵衛等町役者四十六人

惣〆　五十八人

一、惣役者拜領物被仰付難有仕合奉存候旨、且又御役者共御用も無御座候はゞ相返可申哉之旨町奉行山崎小右衛門申聞。式部承、其段不破治部右衛門を以申上候處、追付以同人御用無之旨被仰出候付、其段小右衛門へ申聞候事。

一、八郎右衛門儀當役初而御盃頂戴に付、不破治部右衛門を以御禮申上候事。

一、四時前各退出之事。

正月十八日。御馬廻組多羅尾左一郎等處罰せらる。

〔内外國事記〕

一、御馬廻改作奉行相勤罷在候多羅尾左一郎、九峯一件に拘り有之御尋之趣有之、自分指扣罷在。其後度々於公事場御詮議、急度先指扣可罷在旨被仰渡。同拘り有之、組頭被相勤候當

時御役御免岩田傳左衛門、於越後屋敷御尋之趣有之、自分指扣罷在。傳左衛門茂左一郎同樣之拘り故に、公事場ゟ御呼出可有之哉風聞。組頭職相勤候者公事場に而御詮議之例無之、種々之風聞有之。同十二年正月十八日役儀被指除逼塞、傳左衛門者遠慮。

逼塞は左一郎なるべし

正月廿一日。金澤に地震あり。

〔御用日記〕

正月廿一日

一、夜四時餘程之地震也。震直四半時過也。登城之儀玄蕃殿等承合候へ共、出無之樣子に付不罷出。

〔金龍公記史料〕

正月廿一日夜地震五時又五時半、爲寬政十一年以來之大震。

廿一日なるべし

正月廿二日地震。小松城壞敗尤甚。

二月三日。前田齊廣寶圓寺及び天德院に參詣す。

〔御用日記〕

二月三日　雪散

一、寶圓寺御先詣式部・青山將監・菊池九右衛門・林十左衛門・里見七左衛門・佐藤丈五郎。

一、寶圓寺和尚今度隱居九峰一件に付差扣伺。依而御目通被差扣候樣被仰渡由、寺社奉行被申聞。就夫御近習頭里見七左衞門江、右之通に付和尚被召候儀不相伺段申達置。

一、御戾之節御表式臺左之方板端へ罷出蹲踞、御居間書院迄御先立相勤、御式臺曲り角に而中座、御左江附、御近習頭池田保左衞門御案內、御戶引、御刀丹羽甚左衞門奉請取。

一、天德院兵部・成瀨內藏助・村杢右衞門・中村左兵衞・駒井宇右衞門・森權太夫。

二月十六日。金澤城內東照宮の外遷宮を行ふ。

〔御觸拔書〕

別紙之通御横目江相渡、夫々申談候樣申渡候に付、爲御承知進之候條、御組江も御觸可被成候、以上。

二月十一日　　　　前田右近

御宮御修覆に付、東照宮外遷宮當月十六日之事。

一、右外遷宮御當日、諸殺生可有遠慮候。御作事・御普請、其外三御丸御射手・御異風稽古、普請・鳴物者不及遠慮候事。

右之通被得其意、組・支配江茂可被申渡候。且又組等之內裁許有之人々は、其支配江茂相達、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

二月十一日　　　　前田右近

〔文化雜記〕

二　月

一、左之通御覺書御渡、夫々可申談旨御用番右近殿被仰聞候に付、披見申談候事。

當月十六日東照宮外遷宮之節詰人。

前田右近　寺社奉行　御用人一人　御横目一人

火之番御小將四人但兩人宛替々　御作事奉行一人　會所奉行一人

割場奉行一人　火之番御步四人但兩人宛替々　坊主頭一人

坊主小頭一人　坊主三人

以　上

二月十八日。廻來の遊行上人金澤より發足す。

〔歲々略曆〕

文化十二年亥年二月十八日遊行上人發足。

〔諸書物留〕

十一月とあるは十月晦日なり

遊行上人二十三年振に而文化十一年十一月金澤江御越、翌年二月迄玉泉寺に逗留。出立之道中篠原實盛之墓に而、

古き代をしのびて遊ぶ篠原の草踏わけて武士の塚

二月十八日。鳳至郡淺生田村の山岳崩壞す。

〔金龍公記史料〕

正月廿日。鳳至郡淺生田村西山地動不止。至二月十八日峰崩者十七。

二月十九日。將に前田齊泰の着袴式を行はんとすることを告ぐ。

〔文化雜記〕

二月十九日

一、當廿二日勝千代樣御着袴に付、同日檜垣之御間において御附頭江御吸物等被下候に付、廿一日夕方より右御間御近習頭江可相渡旨、御城代伊勢守殿被仰聞候事。

一、左之通御付札物御用番山城守殿御渡、夫々可申談旨被仰聞付、諸頭中江觸出候事。

付札、御横目江

勝千代樣御着袴御祝儀被爲在候條、御城向御步並以上布上下着用可仕候。且又三御丸橋爪御番人幷河北・石川兩御門御番人與力も布上下可致着用候。右之趣夫々可被申談候事。

一、左之人々御用有之、御呼出置被成候間、拙者之內致指引、萩之御間江可指出旨、甲斐守殿被仰聞候に付、則指引指出候處、甲斐守殿・前田修理殿御列座に而、今般勝千代樣御着袴爲御祝儀拜領物被仰付候段、甲斐守殿被仰渡、御目錄夫々御渡被成候。且又御禮勤之儀、今・明日中甲斐守殿・修理殿御宅江可相勤旨。今・明日中難相勤人々は、人別に相達候樣、甲斐守殿被仰聞候に付申談候事。

一、生絹三疋宛　定番頭

一、同　二疋宛　御留守居物頭　御廣式頭

一、染物三端宛　九里如夢　鬮子誠

一、染物二反　堀磐叟

一、同　二反宛　御廣式御用達

一、白銀五枚　加須屋兵左衞門　粟田與左衞門　小野木助三

一、白銀一枚宛　金谷御廣式御用達

一、小判五兩　丸山了悦

一、小判三兩宛　御廣式御用　御醫師七人

一、白銀一枚宛　藤田道乙　黑川元恒　三木順伯

二月廿二日。前田齊泰着袴の儀を行ふ。

〔御用日記〕

二月廿二日　晴

六半時揃各出席。

一、今日御着袴に付、中將樣𛀁鰑箱入百枚、勝千代樣𛀁干鯛箱入十三枚上之。獻上箱松之間次に並、年寄中始一列座、御近習頭不破治部右衛門𛀁各御目錄相渡、次に干鯛箱並置、御附頭箕輪知太夫𛀁各目錄相達、披露無滯相濟。

一、御祝之赤飯・御吸物・御酒於席頂戴。畢て勝千代樣御着袴之御禮、御居間書院𛀁午之刻御杉戸より御出、御先立式部、御太刀甲州披露、修理伺公。

一、御能拜見五時より拜見所𛀁罷出、井筒御能相濟、勝千代樣御禮御出。右相濟、御中入御料理御居間書院代奥書院年寄中松之間之方着座、御家老・若年寄蔦之間の方着座、二汁五菜御料理頂戴。右席𛀁御前御出、勝千代樣御同伴。

〔御在國諸事覺書〕

二月廿二日　雨天

一、今日勝千代樣御着袴御祝儀に付、年寄中等六半時過より熨斗目・上下着用登城。

一、五時前御能初候に付各拜見所へ相廻候樣坂井要人申聞候付、追付相廻。

但、拜見所は御表之方也。

一、今日之御祝儀として中將樣・勝千代樣𛀁年寄中等より献上物御肴一種充、使者平士、服

紗小袖・上下着用、六半時過より二御丸へ持參。執筆被爲請取、松之間二之間に飾付置、三番三相濟、於同所年寄中等一列、中將樣へ献上之鴟一箱充、御近習頭不破治部右衞門を以御祝詞申上御目錄相渡献上之。相濟、勝千代樣ゟ獻上之干鯛一箱充同間に飾付置、右同樣御附頭箕輪知太夫を以御祝詞申上御目錄相渡之處、中將樣より有澤才右衞門を以御嘉悅被思召候段御意有之、勝千代樣よりは御意無之、可遂披露旨知太夫申聞候事。

一、右相濟、松之間二之間に年寄中等一列之所へ箕輪知太夫罷出、從勝千代樣爲御祝儀拜領被仰付候段申述、御目錄人々へ被相渡候付、頂戴之、卽席御禮申述。

縮紗二卷充　　年寄中

紗綾二卷充　　御家老中・若年寄中

一、勝千代樣ゟ被進候御大小者、御使兵部儀五半時過御廣式ゟ參上御使相勤、御手自御熨斗頂戴、且御時服二拜領被仰付。九時前御殿へ罷出、御意之趣戶田與一郞を以御熨斗・御時服拜領之御禮も申上候事。

一、勝千代樣より被下候御赤飯等、後刻御目見相濟候上被下筈に候得共、夫前に而も御用意出來次第頂戴之筈之旨、御附方より演述。四時前松之間二之間において年寄中・御家老中、御赤飯・御酒・御吸物・御引肴迄頂戴。若年寄は蔦之間において頂戴。御酒之內箕輪知太夫を

以御意有之。相濟、各一列にて同人を以御禮申上候事。
一、九半時過御中入之事。
一、八時前勝千代様御のし目・御上下於御廣式被爲召、被進候兼卷御脇指御帶被遊、鎮次之御刀御側小將持之、御出被遊、御奥書院御下段御屛風に而しつらへ、其所へ御歸り被遊。追付御前御居間書院御着座。勝千代様右御書院ゟ御出、御先立式部、御禮被仰上、御太刀甲斐守披露、相濟、御溜ゟ被爲入、御先立同前。
但、修理伺公候事。
一、追付右於御溜、年寄中・御家老中・若年寄中一集、勝千代様御前へ被爲召、目出度与御意有之。座上伊勢守御請之上、甲斐守御取合申上、退去。
一、右相濟、於御居間書院年寄中一切、御家老中・若年寄一切御前へ被召出、勝千代様御成長今日御着袴御祝御大慶被思召候、御能も被仰付候間緩り与見物可仕旨御意有之。座上之もの御請申上、退去。
一、御中入之内御奥書院御下段、年寄中は松之間之方後ニに列居、御家老中・若年寄は蔦之間之方後にいたし列居、二汁五菜之御料理出。夫々置附の上、御前・勝千代様御奥書院後御廊下より御同道に而御出被遊、緩り与頂戴仕候様御意有之、座上之者御請申上、被爲入。御吸

物出候而御土器三方・御取肴出候處ニ爲御使關屋中務罷出、緩ゟ頂戴有之樣御意之旨申述。御濃茶・御後菓子・御薄茶出、夫々頂戴相濟候事。

一、重而御能八半時過初、七半時過相濟、年寄中・御家老中・若年寄御居間ニ被召候旨坂井要人申聞候に付、何茂一集に罷出候處ニ、御前・勝千代樣御出被遊、今日御首尾能相濟御嘉悅之旨等段々御意有之候に付、座上之者御請申上、御入被遊候上退去。

一、勝千代樣御目見被仰付、中將樣ニ之御禮月番引受可申上候間、月番迄可申演旨演述候に付、各御禮申述候事。

一、御規式相濟各六時前退出、橋爪より立歸、松之間二之間に一列坂井要人を以、今日勝千代樣御着袴御首尾能被爲濟恐悅之至奉存候、何茂御料理頂戴、御能拜見被仰付、度々御目見も被仰付重疊難有仕合奉存候旨申上、將又從勝千代樣拜領物被仰付候御禮も申上候處、追付以同人御意有之。六時過退出、甲斐守・修理儀は直に御廣式ニ罷出候事。

〔金龍公記史料〕

二月廿二日。修勝千代君着袴式。奏散樂。公躬演井筒。

二月廿三日。老臣の言上紙面に漉返の使用を廢することを上申す。

〔文化雜記〕

二月廿三日

一、言上紙面麁紙相用候樣先年被仰出も御座候に付、前々拙者共より言上紙面は、一枚漉半切に調指上來候處、右紙はすき返にて、落髮曁反古などすき交り有之、第一不敬之儀、且麁紙相用候樣先年被仰出之趣は、全御步横目・御横目足輕に可申渡旨之御趣意に而被仰出、乍去右被仰出も御座候に付、拙者共より指上候言上紙面も麁紙相用ひ候趣に而、前段之通に候處、右紙はすき切等有之不敬に付、宜所を切拔是迄相調來候得共、右之趣に而者結句御益之詮茂無之、其上墨付甚惡敷、長編抔格別及遲々候に付、旁已來拙者共より指上候言上紙面は、ひもすき半切を以調指上候間、御序に右之趣被仰上置候樣、人見吉左衞門に相達候處、則申上置候段同人申聞候事。

是月は大盡なり

二月晦日。德川家繼の百回忌を如來寺に執行す。

〔御用日記〕

二月十三日　快晴

有章院樣御法事御鷹扣之儀、五十回御忌之節兩日扣に相成居申候。前々公儀御代々御法事は、日數五日之御扣御振也。前規之樣子は相知不申候。依而今般は前々之通五日、當廿六日より三十日迄日數五日扣可申渡哉之旨伺申述候樣、四日出早飛脚に申來、右紙面入御覽伺之、與

一郎伺候通被仰出候段申聞。

〔御用日記〕

二月三十日　快晴

一、有章院樣御法事百回御忌如來寺にて御執行、朝詰より直に御先詰いたし、八時過御參詣也。如來寺再建後始而之事、夫々伺之上、中假廊下御手洗所際に扣罷有。夫迄組頭布衣御先立也。拙者は御手水所より御先立、敷附に相扣、御下向之節立替御左へ付、又御手洗所邊に而組頭菊池九右衛門と立替扣。御法事相濟後、御法事奉行席ゟ各罷出恐悦申述。

二月。能登口郡に於いて他國米買入の許可手續を簡單にせんことを出願す。

〔諸書物留〕

羽咋・鹿嶋兩御郡之儀、他國米買請方御制禁に御座候。然共凶作に而米穀拂底之年柄は、組々用米之儀、所々御藏御給人米買請候得共、御拂方御廻米等に相成候而、夏中批小賣米指支候節、福浦湊等ゟ他國入津米一作買入方之儀奉願、御聞届被下候節、時々浦廻米見之者罷越可相改筈之旨、去年七月御紙面を以被仰渡、奉得其意候。元來口郡之儀は、常々他國米買入申儀前段之通不相成故、福浦湊を初船着之所々を目指、他國米積來申儀無御座、風波之樣子

により福浦湊等ゟ入船仕候刻、米穀買請申儀に而、泙日和にも相成候得者早速出帆仕候に付、賣買方甚指急ぎ申首尾に而、隙取候而は、船手之者米穀可賣拂心得に而も、滯船を厭賣捌之相談聞入不申儀に御座候。就夫一作等願御聞屆之上、福浦湊等ゟ入津之米穀盡く買入、其時々員數帳面に記、御斷申上、勿論米見之者春秋相廻候節相違候樣仕度、何分格別之御僉議を以御聞屆被下候樣奉願候。去年之儀は存外至極之年柄に而取劣り、去暮以來米買入方六ヶ敷、所により御藏米御拂切同事之儀必此末指支可申儀。然所浦廻米見之者出役之上買取候樣に相成候而は、迚も他國米買入之相談必定相整不申趣に而迷惑仕候間、此段御賢考被下、願之通兼而御僉議被成下置候樣仕度、小紙を以申上候、以上。

亥　二　月

田井村　次　郎　吉
武部村　四郎太夫
堀松村　平　　藏
本江村　六郎右衞門

進　士　求　馬樣
中　村　逸　角樣

二月。能登幕府領の製塩を加賀藩民の他國に輸出することを禁ず。

〔文化年中御用留抜書〕

能州奥郡・口郡御預所村々之内塩焼致稼候村方在之、右出來塩御買上申渡則指上候分も在之、御買上不相望塩稼無之御預所村々江喰塩に指遣、曁御預所川嶋村等之者西國塩買入他國江賣拂遣候儀等有之。去冬右川嶋村之者糸魚川安兵衛与申者方江西國塩賣拂遣、右塩越中三日曾根村之者致運賃積候處、海中高波に出合、放生津湊口江颿登候に付、御郡奉行於手前夫々相糺候所、川嶋村庄屋迄手形茂有之、外疑敷儀も無之旨に而、其分に指置候段右奉行より及斷候。右は洩塩御縮方に指障り候儀、以來御領國之者都而御預所之者与申合、同所より指出候塩運送并持運候儀堅不相成候條、支配々々末々迄不相洩樣可被申渡置候。萬一隱積等奸曲之族在之候得者、重き咎可申付候條、各にも其心得可有之候、以上。

二月　　　　　　　　　　御算用場

進士求馬殿

中村逸角殿

追而各支配之内御塩吟味人、并塩懸相見人、曁御廻塩運送人江、本文之趣分而可被申渡候、以上。

右之通申來候條、得其意、御塩相見人等江不相洩樣可申渡候、以上。

能州四郡十村中
御塩吟味人中

三月四日。觀音・寺中の兩神事能にツレ師等の濫にシテ役を勤むることを禁ず。

〔國事雜抄〕

觀音・寺中御神事能役割之儀、元祿以來之番組には都て兩家迄にて相勤、一日一人にて三番も相勤、連役には修羅より祝言之外勤候儀無之處、明和之比より連役之者脇能・四番目抔も相勤候事に押移、寛政以後は別て如斯に候。元來加樣には有間敷儀に候。併夫も格別致出情、達者に相勤候者へは、外之進みの爲め、折々二日目脇能・四番目之內爲相勤候儀も尤に候へども、當時は未熟之者にても順番抔立置、シテ役爲相勤候儀不相當、畢竟勵み之爲にも不相成候條、以來は相改、別紙定之通申渡候條、夫々可被申渡候。尤狂言方も同樣に候。若右にて不心服之者有之候はゞ、勝手次第役者斷候樣可被申渡候。且又御手前方次男も、波吉故三藏以來、都て各同樣に勤候へども、此儀も次男にては差別有之事に候條、以來別紙之通相改候間、被得其意可被申談候、以上。

兩家は諸橋波吉
別紙明かならず

乙亥三月四日　　　　　　　　　前田清八
　　　　　　　　　　　　　　　山崎小右衛門
諸橋權進殿
波吉宮門殿

三月十六日。石川郡の往還筋に苗松を植うることを命ず。

〔加州郡方舊記〕

覺

高五百五十本之内
一、百五十本　　松苗　泉村領
高二百八十本之内
一、百　本　　同　有松村領
高百八十本之内
一、八十本　　同　久安村領
高四百本之内
一、百二十五本　　同　横川村領

高二百十本之内
一、七　十　本　　同　　西泉村領
高三百六十六本之内
一、百二十六本　　同　　米泉村領
高五百七十六本之内
一、百九十三本　　同　　押野村領
高五百七十八本之内
一、四百五十本　　同　　野々市村領
高二百二十六本之内
一、七　十　六本　　同　　太平寺村領
高三百七十本之内
一、百二十四本　　同　　堀内村領
高百七十六本之内
一、六　十　本　　同　　田尻村領
高八百七十八本之内

一、二百九十三本　　同　徳用村領
高五百二十六本之內
一、百七十六本　　同　田中村領
高六百十四本之內
一、二百五本　　同　三日市村領
高四百五十一本之內
一、百五十本　　同　徳丸村領
高四百四十六本之內
一、百四十九本　　同　番匠垣內村領
高三百八十二本之內
一、百二十本　　同　五歩市村領
〆二千六百五十五本　　苗松高
右泉村領より五歩市村領迄往還筋、並松苗爲植付候條、得其意、本文木數當十九日こぎ植可申付。尤こぎ植麁抹之族無之樣、村役人共へ急度申渡、持運人足出方不指支樣可申渡候。且面々罷出植付方等入念可申付候。途中之儀取縮方、念之ためマ代相添可申候。植添斷次第其

段可相達候。且又石川郡山廻中不殘罷出、こぎ植等猶更可相心得候、以上。

亥三月十六日

坂井庄太郎

永原進之丞

田井村　次郎吉

押野村　安兵衛

村井村　六右衛門

石川郡山廻中

追而本文苗松こぎ渡山々、窪山・高尾山・大額山、右山々に而こがせ候間、當十九日朝五つ時右山々へ人足割合爲相向可申候、以上。

一、私共組下泉村領より五歩市村領迄、當十九日往還並松苗植添之儀、御紙面を以被仰渡、奉得共意候。是迄年々植添被仰付、例年とても出作最中之時節は村々相歎候得共、木數少事故譯而申諭爲植候處、今般格別之御詮議を以過分之木數一時に爲御植候儀、迚も領付村迄に而者手におよび不申、其上當年は春來雪消遲く、別而出作方手おくれ仕、いまだ荒起も相濟不申程之儀に而、手弱成村方は加勢人足等指支、勢子仕居申族に御座候得者、迚も此節被仰渡通に者難申渡御座候。尤野仕事時節におくれ、畢竟氣候に不當凶作仕候而者、誠に以不容

易大切至極之儀に奉存候間、植添之儀は領付村方人夫多少も御座候に付、木數等村方にまかせ、農業透々に成限り爲植可申与奉存候間、私共詮議之趣追而御達申上候間、此段御聞届被下候様奉願上候、以上。

亥　三　月　　　　　　　　　　田井村　次　郎　吉
　　　　　　　　　　　　　　　押野村　安　兵　衛
　　　　　　　　　　　　　　　村井村　六　右　衛　門

坂井庄太郎殿
永原進之丞殿

三月廿四日。昨今兩日前田綱紀夫人松嶺院の百五十回忌法會を江戸廣德寺に行ふ。

〔御觸抜書〕

松嶺院様百五十回御忌御法事御取越、當月廿三日・廿四日於江戸表御執行に付、御作事・御普請、其外三御丸御射手・御異風稽古、諸組弓・鐵炮稽古之儀相止候に不及候事。

一、御家中普請者不及遠慮候。諸殺生・鳴物等之儀は、當廿三日・廿四日自分に遠慮可然事。

右之通組・支配之人々に可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配に茂相達候様申聞、

尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

三月廿日　　　　　　　　前田主税

三月廿五日。線香小賣人に鑑札を與へ他國產のものを取扱ふこと勿らしむ。

〔文化年中御用留拔書〕

御當地出來線香、御領國一統取扱、他國線香取扱申間敷段、去酉年一統申渡置候處、今以取扱申者も有之躰に付、今般改而御當地線香問屋福久屋善右衛門等より線香小賣人江、印章之小札相渡致取締度旨相願承屆候條、此段線香小賣人江可被申渡候、以上。

亥三月廿五日　　　　　　御算用場

中村逸角殿

進士求馬殿

三月廿六日。能登の塩士が淺釜鑄造出願の手續に付いて令す。

〔文化年中御用留拔書〕

能州四郡塩士共、淺釜新出來爲鑄立度段願出候はゞ、被承屆候上、其段當場江可被及斷旨、先達而被申聞候得共、御塩奉行於手前も役塩取上候儀等有之、右奉行江も不相願而は指障之趣も有之躰に候。左候得者双方江願出候樣成行而は、畢竟區々に相成紛敷事候間、右願は御塩奉行一方江願出候樣、十村共江可被申聞置候、以上。

一、塩士等之內、是迄淺釜に似寄候釜、或は淺釜を溫釜に致置候塩士有之候條、十鍔幷淺釜之外、形替釜鑄立候儀堅く不相成、勿論淺釜鑄立遣候儀、曁致貸釜候儀も、都而當場江相斷、聞屆之上を以鑄渡可申、右等之趣心得違無之樣、各支配所鑄物師共江嚴重可被申渡置候。尤右夫々之儀、鑄物師より及斷候はゞ被申聞、當場指圖之上可被申渡候。且又當年より右四郡淺釜を初、都而之釜數去年之通帳面に仕立、每歲十一月中限當場江可被指出候、以上。

三月廿六日　　　　御算用場

進士求馬殿

中村逸角殿

三月廿八日。金澤大衆免より火を失す。

〔內外國事記〕

一、文化十二年三月二十八日晝九時、大衆免石屋小路与言慣候、七年前大衆免五百軒餘燒失

五百軒餘は誤なるべし

之節之火本に而、此度茂家主者達候得共、其家より出火、御中間組屋敷近之方、同日日方風之烈風に而、大組・中組一軒茂不残焼失、大組其頃焔硝を請無間比に而、焔硝火移飛火、五・六日に而焼、大衆免至而少々相殘、金屋町邊松門より二十間計此方に而焼留る。山上村・談議所村百五十軒計、大衆免村町支配門前地都合二千少餘焼失。尤至而急火風烈敷故に候。夕七半時鎮り、怪我人茂即死之者茂有之。大組之小頭五人者指扣被仰渡、焔硝仕抹無沙汰故飛火等有之趣、前後打續日方風烈敷、同日同刻能州所口六百軒計、滑川茂餘程之焼失。同日夜今石動茂焼失。卯之年五十七年先之大變後之大火災に候事。

日方風本の儘

〔御在國諸事覺書〕

三月廿八日

一、今晝九時前大衆免町より出火、數百軒焼失に付、各詰延、夕七時頃鎮火に付各退出。

右に付增火消三人充二切に申渡有之。

一、戸田五左衛門組・神田十郎左衛門組不殘類焼候段、兩人より及達。

御持筒足輕　戸田五左衛門組　人數〆四十三人内小頭六人

御持筒大組足輕　神田十郎左衛門組　人數〆七十一人内小頭十一人

〔御用日記〕

三月廿八日

一、御厩町類燒人爪髮足輕一人、御中間ども十二人、一貫二百目御救之儀願出候。一往御勝手方へ及示談、齋藤丈助。

四月朔日

一、御馬奉行より一貫二百目、此間燒失人御中間共ゟ御救方に被下候樣、御仕切銀之內より取捌度由に付、一往御勝手方ゟ及示談貸渡候趣に相極。被下切に相成候而は外之救方之者有之相障可申と、先御貸渡に小紙を以申渡。平岡內匠追而返上方申談候筈也。

三月。能登に於ける十ケ村所產の串海鼠及び生海鼠を藩內の用に供することを許さる。

〔國事雜抄〕

海鼠指留之浦々

文化十二年三月、能州浦出來之串海鼠幷生海鼠賣捌方等之儀に付御達書之內。

鹿嶋郡之內

小嶋浦　津向浦　三室浦

日出ヶ嶋浦　野崎浦　鰀目浦

祖母ヶ浦　向田浦　曲リ浦
　鳳至郡之内
甲　浦
〆十ヶ浦
右先年自公儀御縮有之浦方六十三ヶ浦之内、長崎御用俵物請負人塩屋清五郎より公儀御役人江相達、右十ヶ浦御國用に引渡に相成――。

三月。鹿島郡八幡村等砂防の爲諸郡打銀の支給を請願す。

〔諸書物留〕
三階村覺右衛門組八幡村・八幡座主村・里本江村・給分村・中泉村御田地砂下に而、連々砂吹込、地味相劣、別而中泉村之儀田畑過半砂下に相成、引免も被仰付置候得共、不得成立候に付、享和三年右各村領砂下に而砂除垣仕松苗植付之儀願上、文化九年迄年々諸郡打銀御渡被下、松苗植付、砂除垣修理仕、當時松苗餘程榮立申儀に御座候得ども、元來砂濱に而垣等吹埋、年々大破に相成、村方自普請に而難防、打捨置候而は松苗等砂下に相成、是迄御僉議被下候詮も無御座候様相成候に付、去々年以來右之趣紙面を以申上、今五・六年之間諸郡打銀御渡被下候様願上候所、御聞届銀子七百目御渡被下候。前段申上候通、迚も自普請には難

及場所に御座候間、先達而願上候通、當年より五年之間每歲三百目宛諸郡打銀御渡被下候はゞ、砂除垣蟹松苗桊立方勢子仕、御田地砂入等全爲相防可申候間、願之通被仰付可被下候、以上。

文化十二年三月

三階村　覺右衛門

武部村　四郎太夫

堀松村　平藏

本江村　六郎右衛門

御改作御奉行所

四月五日。金澤城內東照宮の正遷宮を行ふ。

〔舊記拔書〕

御橫目ゟ

東照宮外遷宮・正遷宮幷御供養之節詰人等、且柵之內ゟ召連候從者、服忌者勿論、其外穢改候儀別紙相渡候條、夫々可被申談候事。

二月

一、ふみあひ　行水次第

一、ちいみ　一日
一、ちあらし　父七日　母十日
一、うみながし　父三日　母七日
一、さん　父七日　母三十日
一、灸　六時、但ゆるしなれば苦しからず。但十二時。
一、いもはしか　行水次第
一、やくびやう　同斷。但足立次第
一、くわいにん　子生る迄は穢なし、生れて以後は先書之通。但御掟次第。
一、たや共女一座有之而も行水次第くるしからず。
一、いんほん惣而魚鳥精進は十二時、十六日之酉之刻より十七日酉之刻迄。
一、いせいの事行水次第。
一、たやふしの合火之事くるしからず。
一、湯治幷汲湯二日。但三日本之湯治少くおもく可有之也。

〔御觸拔書〕

來月五日東照宮正遷宮、同七日御供養有之筈に候事。

一、右兩日諸殺生可有遠慮候。御作事・御普請方、其外三御丸御射手・御異風稽古、幷諸組弓・鐵炮稽古、普請・鳴物は不及遠慮候事。

右之通被得其意、組・支配江茂可被申渡候。且又組等之內裁許有之面々は、其支配江茂相達、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

三月廿九日　　前田右近

〔文化雜記〕

四月二日

一、左之付札物前田式部殿御渡に付御鷹方御步橫目・寄付御步橫目等へ申談候事。

付札御橫目江

當月五日東照宮正遷宮、同七日御供養に付、右兩日御鷹幷御殺生方相扣候樣夫々申談候事。

四月五日。紫野芳春院の影堂再建に關し京都・大坂詰の步橫目に命令す。

〔文化雜記〕

一、文化十二年四月五日、左之通御付札物、御用番助右衛門殿御渡被成候に付、京都・大坂詰御步橫目江申遣候事。

紫野芳春院影堂御再建就被仰付候、右爲御用御作事奉行小堀千右衛門、同所御横目村田源八郎等、追付京都𛀁罷越候。於彼地右源八郎當病等に而出役無之節、京都詰御歩横目見廻等之儀可被申渡候。且又大坂御賣上等可有之候。其節同所御歩横目立會等之儀、寛政九年同院御位牌殿御再建之節之振に相心得候樣、可被申渡候。其段京・大坂詰人𛀁も爲承知申遣候事。

四月十日。能登所口の火災に纏類似の器具を携へたる者あるを以て之が調査を命ず。

〔御郡典〕

前月廿八日所口町出火之節、能登郡下村與三右衛門悴、右火事場目印之樣子に而纏躰成物爲持罷出、其外村々より數本水旗之上組々目印附指出候躰に相聞候。火事場之儀は夫々御定有之候處、纏に似寄紛敷物爲持候儀は、先以過當之儀、去暮御算用場より申觸も有之候處、一統如何相心得罷在候哉。今度又候御算用場より察當之趣有之。先達而申觸候儀も執用不申了簡与相聞、一圓難相辨、此上拙者共より返答之筋も不輕儀、如何相心得申事に候哉。何れも右與三右衛門悴手前、幷組々目印指出候樣子委細相認、答書當十八日を限役所へ可指出候、以上。

亥四月十日

中村逸角

四月十四日。能登より塩を搬出する船舶に關して令す。

〔文化年中御用留抜書〕

他國出御拂塩買請候者共、至而小船を以積請に相向候由。右者御縮方に紛敷趣有之候條、以來百二十俵積より以下之小船には積渡不申樣、且亦自然薪木等外品と御塩積合候儀も有之候者、其儀も不相成之趣夫々申渡候之間、其心得有之、各支配之內御拂塩主付申渡候者共江被申渡、尤以來御拂塩願出承屆候者、其時々買請人江可申渡候。且亦右申渡候に相違之族有之候はゞ、船送り等得与相改可及斷旨、潤改人等江も可被申渡置候、以上。

四月十四日　　御算用場

進士求馬殿

中村逸角殿

四月十五日。前田齊泰の爲に幟を建て觀覽を許すことを告ぐ。

〔御用日記〕

四月十五日

横目江

勝千代様御幟土橋御門內に相建候。來月朔日より五日迄、御家中幷町方共男女拜見之儀可被申渡候。但男子は十五歳以下に候。都而拜見人、甚右衛門坂御門より土橋御門ゟ入、手摺垣之內より御堀端ゟ押廻、如元土橋御門に出、夫より御宮口御門通り西町口御門ゟ出申筈に候。

一、拜見人供之者、甚右衛門坂御門內ゟ草履取一人召連可申候。

右之通夫々可被申渡候事。

四　月

四月十七日。昨今兩日德川家康の二百回忌法會を金澤神護寺に執行す。

〔御用日記〕

三月廿一日

來四月十七日東照宮二百回御忌に付、御鷹前日より兩日相扣可申候。

〔舊記拔書〕

付札、御横目ゟ

當月十六日東照宮二百回御忌御法會に付、神護寺門前幷不明門・甚右衛門坂往來、當月十五日より指留可申候。

但、御法事御用に而罷通候者は、御番人承屆相通可申事。

一、甚右衛門坂御門御用懸り之面々は、當月十五日迄可被相通候。御法事御執行之内、諸役懸り之面々に候共指留可申候。

一、七十間御長屋御門御番人、其外金谷御屋敷幷廣式御用等に而不明門罷通候者は、御番人承届相通候樣可被申渡、此段割場奉行ゟも可被申談候事。

四　月

〔御用日記〕

四月十五日

一、明十六日東照宮二百回御忌御法事に付、九時御供揃に而御直垂被召、神護寺ゟ御法事奉行より御案内次第御參詣可被遊旨被仰出候。

一、明後十七日五半時御供揃に而、御直垂被召、御宮御參詣被仰出。

但、服御改之事。

右兩條山路忠左衛門申聞、式部兩日共相詰候段答置。

四月十六日　快晴

一、御法事に依御參詣九時御供揃故、拙者は例刻に御丸ゟ出席いたし候事。

但、四半過裝束於席いたし替候。直に御先詰相勤、相濟後御法事方席ゟ恐悅述。

一、御參詣九半前、水越八郎左衛門・山路忠左衛門御太刀持。御佛殿鏡板左之方御法事奉行、右院代、御左敷附式部、右之方寺社奉行。竹田掃部罷出、院代ゟ御法事天氣宜無滯との御意御取合、重而右近ゟ御意あり。

四月十七日　雨天

淺加三左衛門より來狀。今日雨天に付御宮御參詣御延行申來、應返書遣。

〔金龍公記史料〕

四月十六日。修東照宮二百回忌法會於神護寺。奉行前田右近。此時遣小將頭中村才兵衛。使于日光。物頭並聞番長瀨善左衛門副之。

四月十八日。前田利家の女幸姫の二百回忌法會を玉龍寺に執行す。

〔御用日記〕

三月廿一日

一、同月十八日春桂院樣二百回御忌に付、御鷹御當日一日相扣可申事。

〔御用日記〕

四月十八日晴、夜中少雨あり。

春桂院樣御法事、伊勢守殿於玉龍寺執行有之。依而御代香中川八郎右衛門に被仰付、御香典

同月は四月の事

前田伊勢守は春桂院の嫁したる前田長種の後裔

御備也。八郎右衛門九時出席也。玉泉寺中宿之事。

四月廿四日。禁を犯して女出合宿を營むことを戒む。

〔加州郡方舊記〕

町奉行江

一、女出合宿之儀は御停止に候處、近年甚猥に相成、次第に增長之躰。其中にも家居等榮耀之族も有之躰相聞え候。以來右躰之儀、彌堅く無之樣嚴重可被申渡候。然上は若心得違之者於有之者、急度相糺曲事に可被仰付候條、此段町方之者共へ嚴重可被申渡候事。

亥　四　月

付札、御算用場奉行江

一、女出合宿之儀に付、別紙之通町奉行へ申渡候に付、寫相越之候條、遠所町奉行・御郡奉行へ、夫々嚴重申渡候樣可被申談候事。

四　月

女出合宿之儀に付、別紙之通可申談旨御用番年寄中被申聞候に付、寫相達候條、被得其意、各支配所不相洩樣嚴重可申渡候、以上。

四月二十四日　　御　算　用　場

坂井庄太郎殿
永原進之丞殿

四月廿四日。山廻にして十村の名義を借り書状を送達せしむるものあるを戒む。

〔筒井舊記〕

近年山廻之內十村名前を借り、書狀等村送りいたし、村々迷惑之筋有之躰粗及聞、沙汰之限りに候。急度可及穿鑿筈に候得共、今度之儀者先其儀令猶豫候。以來右躰之儀於承及者、嚴重可遂穿鑿候條、兼而此段申渡置候。且又十村たりとも、私用に付村方迷惑之筋無之樣可相心得儀、役筋第一之儀に候條、兎角心得違無之樣可相心得候、以上。

亥四月二十四日　中村逸角

能州奥郡十村・山廻り中

五月七日。河北郡谷內村附近に狼徘徊するを以て打拂を命ず。

〔御用日記〕

五月七日晴

一、谷内村邊狼出、農人に相障。依而おどし鐵炮之儀御郡奉行より紙面出、右之趣伺候處、人見吉左衞門を以、御持筒方之者遣候而成共早速打拂候樣被仰出。

五月十二日。火災の原因を調査する際告ぐるに實を以てすべきことを命ず。

〔筒井舊記〕

近年御郡方村々出火有之、呼出燃出之樣子等遂吟味候處、都而取灰より致出火候段申答候。中には放火も有之躰に候得共、放火之趣申答候而は品不輕儀与一概に相心得、自火に申成候躰却而紛敷儀に候。以來者實を得候趣速に申答候樣、末々之者共に至迄一統可申渡候。且又是迄出火之節、火元人迄呼出候得共、自今以後火元之人幷火之番人に、村役人指添可指出、獨身にて親族之者等無之候はゞ、隣家之者に村役人可指添、尤類燒人有之節は、類燒爲惣代一人可罷出候。

右之趣今度詮議之上、改而申渡候條、不相洩樣嚴重に可申渡候、以上。

亥五月十二日　　　進士求馬

　　　　　　　　　中村逸角

能州四郡御扶持人・十村中

五月十三日。前田齊廣、日光廟の法會終りたるを祝し能を興行せしむ。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

四月十七日、於日光神君之二百回御忌御法會首尾克被爲濟候に付、御祝御能被仰付、同五月十三日御興行有之なり。

翁　三番叟　傳右衞門　春日風流　仁右衞門　開口　久右衞門

夫松の葉の千代かけて、普く照す日の光り、名におふ山に跡たれし、恵の露の玉くしげ、ふた百とせの神くけは、目出たかりける時とかや。

神くけは本のまゝ

五月廿八日。老臣村井又兵衞の邸雷火に罹りて燒失す。

〔内外國事記〕

一、五月廿八日言之外成蒸暑、晝比より雷聲殷々、夕七時頃迅雷甚しく、暴雨に疾雷村井又兵衞宅大書院に落、五十間計一時燃上り不殘燒失、半時計に燒濟。風大衆免之火災程之事也与人々申也。翌廿九日御使被成下、從貞琳院様奥方に越後縮・手廻り道具等拜領、從勝千代様御奉札。六月十五日百石に付五石宛之御借知十ヶ年御用捨。胴廻り四尺長四間村廻し末木枝木共松木五百本拜領。從勝千代様以奉札御鐙一具・交肴拜領。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

五月廿八日晝後より强雨降、雷鳴以之外嚴敷。然處村井又兵衞殿屋敷ゟ落、雷火之ため屋敷不殘一時燒失なり。迚も大火、長屋は相殘り門片扉燒申なり。

〔文化雜記〕

一、五月廿八日

右火事に付神田氏等出馬被致候處、又兵衞殿居屋敷不殘燒失、長屋廻り內通過半燒失、外廻りは相殘申候。猶更火事之樣子御同人ゟ御尋被申候處、雷書院之高ゟ落候所、右雷火に而書院等不殘燒失之由被仰聞候に付、直荒增及言上候事。

六月七日。新開の地境に柳を植うる前令を實行せしむ。

〔文化年中御用留拔書〕

新開境柳植置候樣前々被仰渡置候處、立枯等に相成、重而植付不申分も有之躰に而、御見分之節不相譯候間、立枯等に相成居候分植附、都而新開一株宛境筋見分安き樣に可致旨、御改作御奉行所より被仰渡候間、此段夫々御申渡可被成候、以上。

亥六月七日

武部四郞太夫

堀松平藏

本江六郞右衞門

六月十二日。前田齊廣の女寛姬金澤に生まる。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

六月十二日未の刻、於二の御丸御廣式御姬樣御誕生なり。御生母は直姬樣御產婦之方なり。

六月十八日。前田齊廣の女寛姬七夜の祝儀を行ふ。

〔御用日記〕

六月十七日　快晴

一、明日御出生之御姬樣御七夜之御祝御能等有之。依而例刻登城可仕旨月番より演說、御家老主附修理より若年寄へ演述有之。御禮は主附掃部月番席江罷越申述候事。

六月十八日　快晴

一、御出生樣寛姬樣与被稱候由月番演說。俄に松之間次一列座、中村木工を以恐悅申上。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

六月十八日御七夜御祝有之、御名寛姬樣と永原七郎右衛門より奉指上。

六月十八日。盜賊改方奉行の十村召喚に關して令す。

〔筒井舊記〕

御付札、御算用場奉行ゟ

十村共手前相糺候儀等有之節、盗賊改方役所ゟ呼出候振に候得共、思召被爲在候に付、當分呼出不申趣に可相心得旨等、寛政十一年被仰出之趣申渡候後、年數茂相立、當時に至り候而者御縮方茂不宜儀共有之躰に付、以前之通呼出候樣可申渡旨被仰出候段、文化八年九月申渡候所、御郡奉行・改作奉行より、是迄之通り呼出無之樣仕度旨願之趣紙面指出候由に而、各添紙面を以被出之候得共、被仰出候上右樣願之趣者難承届段、委曲其砌申渡候。然所猶又各より被申聞之趣有之に付、段々遂詮議候所、御郡奉行等被申談何廉申上候儀恐入申儀に付、被仰出之通指出可申心得に可被申聞候。乍併十村共之儀、每度被相達候通、皆濟時抔者嚴敷入念聞しらべ有之候樣被致度旨等、委曲紙面を以被申聞候。依之彌被仰出之通、以來十村共御縮方茂仕來候故、其内には恨を含候者も多く、讒訴之族も可有之哉に付、右等之處深く察、等盗賊改方より呼出之節、指出候樣被相心得、御郡奉行・改作奉行ゟ茂可被申談候。右心得方之儀者、委曲岡田太郎右衞門ゟ申渡置候事。

乙亥六月十八日

寛政十一年十村役之儀者思召被爲在、當分火・盗・女色・博奕四品之外、盗賊改方ゟ指出不申

様被仰出置候處、其後御縮方不宜旨に而、先年之通可指出旨被仰出候得共、何卒中興之通四品分明之儀者格別、其外者指出不申事に有之度、先達而より段々拙者共詮議之趣、御算用場江相達候之處、御算用場奉行中にも無據被聞請、御用番年寄中江被相達候所、則別紙之通被仰渡候旨に候間、猶達方茂可有之哉与、打返遂詮議候得共、此上拙者共において幾重に存候共、詮議之手段無之候條、以來者一統呼立次第罷出候事に可相心得候、以上。

亥八月六日　　進士求馬

中村逸角

能州奥・口四郡十村中

文化十年十一月晦日の條參照

六月二十日。能登幕府領の百姓等藩の算用場に密集す。

〔文化雜記〕

六月廿日

一、御預地百姓共願之筋有之、此間中罷出居申候處、今日於御算用場申渡之筋も有之候處不致承引、段々人多に相成、五・六百人も御算用場江相集、庄屋等より申なだめ候得共不致承引、次第に人多に相成候旨。御縮方も有之儀に付、御用番左京殿より今夕景執筆高桑祥右衛門を以被仰聞候に付、早速御供押申渡、様子見屆罷越候様申渡指遣候處、右躰之者相見え不

申に付、御算用場に而相尋候處、今朝より追々相集、四・五百計も御算用場門前に罷越候得共、段々引取、御算用場役所も相濟申候由承合罷歸候に付、其段關屋中務を以可及言上處、退出後に付上坂平九郎を以及言上候事。

六月廿三日。富永數馬の家來伊藤彌左衛門、九里波江の家に侵入して斬らる。

〔文化雜記〕

六月廿三日

一、富永數馬家來伊藤彌左衛門与申者、夜前五時頃火事裝束に鑓拔身を持、長町邊駈廻、同夜四半時頃九里波江方ゟ入候而亂行之躰に付、右波江切留候旨假御横目足輕申聞候に付、今井左太夫を以及言上候事。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

七月寄合富永數馬家來給人伊藤淸左衛門と云者亂心致し、九里幸左衛門方へ拔身を携罷越、隱居所ゟ參り幸左衛門を切らんと計しに、嫡子波江在宿、手早奥之間に妻女里より歸り、長刀右居間有之を追取、右長刀にて首尾能淸左衛門を切伏申候。右淸左衛門は先達而數馬より暇申渡、數馬は幸左衛門之二男にて富永ゟ養子に參り居候なり。淸左衛門暇出候儀に付何歟

本文は文化十一年七月とすれども誤なるべし

幸左衞門に遺恨に思ひし事も有之ゆゑと其頃世上之噂承る。右清左衞門其時之出立細袴を着し、白鉢卷たすきを掛て、手鑓を携へ罷出候由なれど、何思ひけん鑓は長町一番町富永之門によせかけ捨行候由。其日幸左衞門は隱居之事なれば蚊張を釣り伏居申由。刻限は暮合人顏も分り兼之時分、危き事なれども、流石幸左衞門は重役も相勤、中々評判も有之程之仁物ゆゑ、其機を早く察し蚊帳を拔け、右心得よかりしとの其節之咄承り、餘程之珍事ゆゑ承り候儘を爰に記置なり。

六月。諸商人の破產したるものはその資財を擧げて債務に當つべきことを命ず。

〔郡方御觸〕

諸商人共勝手不如意に相成候得者、分散与申立家財打出、其代銀を以諸借銀之方ゟ配當、其餘は見消等にいたし候儀、實に極難澁に付不得止右族は無是非儀に候得ども、中に者密に渡世方手當もいたし置、一旦分散いたし仕法相立候而後、是迄よりも手廣商いたし樣之族も有之躰相聞え、不埒之至に候條、向後急度相心得、右樣不實之族無之樣、支配方之者共ゟ急度申渡、尤實に無據分は重々詮議之上相屆候樣、遠所町奉行幷所々御郡奉行等ゟ可被申渡事。

亥六月

諸商人共勝手不如意之儀に付可申談旨、御用番年寄中被申聞候に付、寫一通相達候條、被得共意、各支配所不相洩樣嚴重可被申渡候、以上。

六月　　　　　　　　　　御算用場

進士求馬殿

中村逸角殿

七月五日。能登幕府領の百姓鎭靜に歸したるを以て加賀藩の者の之を輕侮すべからざるを告ぐ。

〔諸書物留〕

奥・口御預所之者共先頃以來金澤表江罷登居候所、今度右御役所蒙被仰渡を追々歸村候由。就夫御組下之者共、右被仰渡之趣風評を承り、又は御預所に緣者在之實說承り、以前之姿も無之抔と嘲申樣之儀有之候而は、右村々氣請にも相障申儀可有御座候間、御組下肝煎中之內、御用序向寄を以不押立早速御申諭、末々之者迄右之趣會得仕、孰にも彼是評議等堅不仕樣御示置被成候樣仕度奉存候。御奉行衆より御內々被仰渡之趣も有之候付如斯御座候。尤村々肝煎中等江各樣切見付之振に被仰談度、村々江御廻人等御無用可被成候。何分御考、右之趣示

方得与行届候様御取計置奉存候。爲其内狀を以如斯御座候間、御封印を以先々御順達、落着より私共之内江御返可被成候、以上。

亥七月五日

武部村 四郎太夫
堀松村 平藏

仲間宛所

七月八日。金澤石坂より火を失す。

〔日用雜記〕

文化十二年七月八日

一、宵より大南風に候處、曉天八時頃にも候哉、石坂足輕町より燒出、前田修理殿江燃付、夫より瑞泉寺・前田織江殿家中十一軒燒失。前田左門殿家中不殘。夫より千日町筋松平典膳殿家中不殘燒失。敬榮寺と云御坊燒失。夫より何之方より燒拔候哉、野町江上り、大蓮寺燒失。神明は門鳥居まで燒失。橋場靑物屋兩側二・三軒宛殘申候得共、潰家に相成、上之方は因德寺臺所にて兩側共燒留り申候。修理殿家中は上屋敷之直に傍に候得共、一軒も燒不申候。火子は雨之降樣に飛申候。堀川邊・筋違橋邊・三社繭田町火子にて甚危く、長町此邊は不及申、專光寺に早鐘を撞き申族。追而承候へば、安江・八田・才田邊迄火の子に而危き様子に御座

候。夜明候而火鎭まり申候。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

七月八日曉八時前、野町大組多田兵四郎宅より出火致候處、鐵炮組ゆゑ焰硝に火移り、迚も大火に相成、千日町・石坂瑞泉寺・前田修理・野田臺過半燒失、數百軒燒亡なり。其節小雨降り、强き風にて南風なり。火之樣子御使番等より言上之處、公之御意には神明之社燒失しては不相成と御意にて消防方命令有之。夫ゆゑ神明社四方燒失すれども御社は無別條、偏に公之御命令ゆゑと人々申あへり。

〔寢覺の螢〕

文化十二年七月石坂町より出火、野町迄燒ぬけ、神明宮際にて火とまる。家數千二百軒。

〔御用日記〕

七月十九日

一、五百三十目　文丁銀

御中間小頭並一人、爪髮足輕並一人、御中間一人、御厩付小者二人。

右當八日之夜野町類燒、御馬奉行依願、御圖銀之內を以貸渡承屆、割符貸渡有之。返上之儀追而申渡候趣也。

八月朔日。御廣敷用達小野木助三、前田齊泰の生母の父なるを以て祿を増さる。

〔金龍公記史料〕

八月朔。增廣式用達小野木助三祿百石。以勝千代君生母父也。

八月十六日。割場奉行がその支配下の足輕に與ふる文面を被付とすることに關し議す。

〔中川氏日記〕

八月十六日　天氣宜

一、割場奉行齋藤次平より、支配之足輕ゟ御用方等申談候節、文面に被付に是迄調候得共、支配ゟ對し被之字は不相當様に被存候間、以來被之字は相省き申度、其段承屆、御横目ゟも申渡候様仕度段紙面此間出候に付、今日執筆源之丞を以御横目存寄承り候處、御横目方に御定も無之事に候へば、御聞屆に而、右割場奉行紙面入に渡候へば、其通と申物に而指支候儀は無之候へ共、存寄御聞被成度由に付相達候。數十年被の字調來候儀、今更相改候儀もいかゞ歟、御横目方抔に而は御定之無之事は、流例を以押候へば萬事相治り候様之物。右流例其

被付はラレヅケなり

時之奉行等存寄次第に動き候而は、自然与御縮方にも不宜抔と申聞、割場奉行申分之支配ゟ被の字不當と申儀も、はきと尤にも相聞え不申。足輕ゟ三品之面々より被付は不當と申儀に候へば格別に候得共、都而平侍は足輕ゟ被付之紙面遣候様子故、先づ割場奉行紙面之趣詮議猶豫いたし置候事。

八月廿一日。大聖寺侯前田利之金澤に宿し、登城を辭す。

〔御用日記〕

八月廿一日　雨天

備後守様御登城に付、各五半時過出席、上下着用之事。御登城御斷、七時過退出。淸水八郞左衞門・山本太郞左衞門御近習頭なり。

八月。米穀の乾燥・俵裝等を嚴重にすべきことを告ぐ。

〔文化年中御用留拔書〕

所々御藏・町藏納米之儀、每度嚴重申渡候處、中には等閑之族茂有之躰、沙汰之限りに候。米性不宜候得ば、翌夏に至り損米多く出來、大坂御廻米之上直段指障、彼是過分之御損失有之候條、米性幷干方之様子入念に相撰、納方綿密に相心得可申候。將又納方に付、下代幷手代ども之内こぼし米等いたし、不正之族有之、百姓及迷惑候躰相聞候。是迄茂數度申渡候處、

今以相愼不申躰。彌以已來右躰之族等有之においては、人別內々承しらべ、無用捨急度可申付候。

一、俵拵之儀も近年度々申渡候所、越中筋・能州口郡內浦抔は、大躰行直り候躰相聞候。其餘堂形を始、今以不宜所々有之段、御米改人申聞候。俵拵不宜候而者、御米直段指障候條、御定之通麁抹無之様可相心得事。

一、步入之儀每度遂詮議候處、不正之族も有之躰相聞候。嚴重相心得可申事。

一、大坂着米之上、中入札無之分多有之候。緜密に入置可申候。紛敷儀有之候はゞ、俵每に顯候而指札爲致可申候。着米之上損米多候はゞ、舟頭手前吟味之上、代官手前可相糺事。

右ヶ條之趣、是迄も每度申渡候得共、今以相守不申族も有之躰に付、今般改而申渡候條、此上不屆之族於有之は、不得止可被及御嚴制之沙汰に候之條、得其意、右等之趣手代共江も嚴重可申渡置者也。

八　月　　　　　　　　　　　　御　算　用　場

御扶持人・十村・新田裁許・山廻中

諸郡御收納米干方等之儀、是迄數度申渡置候處、今以等閑之族も有之躰に而、大坂御廻米等も過分損米出來、代官方不行屆儀も可有之候得共、根元干方不宜候得ば、代官如何程相改候

而も行屆不申、勿論依之豐凶にも寄申儀に候得共、隨分入念干入仕立方綿密に爲致可申候。且又稻架掛に致し候得者干方宜に付、近年架掛之儀申渡置候得共、往古より仕馴不申村々は、煩敷事に相心得、等閑に相成候村々茂有之躰。土地に寄干宜敷所も可有之哉に候得共、考候所多分架掛に致し候得者宜敷樣に相聞候間、厚く申諭行屆候樣可相心得候。此度御算用場より納方之儀嚴重申渡有之、代官手前に而干立等之樣子入念可相改候條、一組切村役人等呼出得与申渡、末々迄綿密に爲相心得可申候。如斯申渡候上にも、麁抹之族及承候得ば、夫々相糺候條急度可申渡候。

一、搗臼之儀は、土臼相用候方御米之爲に宜候處、近來多分土臼相用候躰に候得共、今以木臼相用候村々も有之躰に候間、以來土臼に爲相改可申候。

一、繩・俵之儀、前年冬之內拵置申儀に候得共、納方時節向遂穿鑿候而も行屆不申儀に候。都而是等之儀は、裁許之心得に寄申事に候條、拵已前節々無油斷村々江申渡、聊麁抹之儀無之樣急度爲相心得可申候。

一、步入之儀、御定之通彌無違失相守可申候。且又新米縮方之儀は、前々嚴重申渡置候處、今以甚不埒之族も有之、沙汰之限りに候條、急度相改可申候。已來不埒之仕方於有之而は、無用捨嚴重咎可申付候。

右之趣得其意、早速順達有之、一郡切請書可指出候、以上。

乙亥八月　　　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

九月十四日。前田齊廣金澤を發して參覲の途に就く。

〔齊廣樣御傳略等之書拔〕

文化十二年、是の年春御參府之處、御都合方十年之御振にて、九月十四日金澤御發駕、同二十六日江戸表江御着府なり。上使等御先格之通なり。

九月廿六日。前田齊廣江戸に着す。

〔金龍公記史料〕

九月廿六日。抵江戸。扈從老臣本多安房守・家老代關屋中務。

九月廿八日。德川家齊使を遣はして前田齊廣の參覲を勞せしむ。

〔金龍公記史料〕

九月廿八日。將軍使老中酒井讃岐守。來勞。

九月。金澤に於ける町人の孝義を旌表す。

神明は神妙

襃美の品目を脱す

竪町安江屋　理右衛門

理右衛門儀、御上御掟之趣大切に相守り、家內取締り方萬端質素に暮候に付、兩人之せがれ共行狀宜敷、常々孝心深く、商賣方手代に成替り致出情、繁昌之樣子委曲相聞。畢竟理右衛門教育方宜敷故、せがれ共神明之志有之儀与被存候。且又常々下人等ゑ惠み深く、病氣等之節茂相勞り憐愍を加へ候故、下人共茂大切に致奉公、惣而家內睦敷相暮候樣子、誠に奇特之至感入事に候。此度悴共ゑ襃美遣し候付、此段申聞候事。

亥　九　月

竪町安江屋理右衛門せがれ　長右衛門

次郎右衛門

長右衛門等兩人、常々孝心深く、何事茂親之申付背き候事なく、父指圖之外夜行茂不致、理右衛門酒造致商賣に付、手代數人可召仕處、兩人之者手代に成替り相働き、商賣方情に入、溫和に商いたし候故、店に於而口論抔茂無之樣子。且又理右衛門申談、手代不召仕程之益分者下人等ゑ惠み施し、病氣等之砌厚く相勞り憐愍を加へ候に付、下人共奉公大切に相勤候躰。長右衛門等心得方宜故に相聞え、彼是感入申事に候。依之爲襃美右之通遣之候事。

亥　九　月

米五俵　　　　　　　　　十間町齋田屋　九　兵　衞

九兵衞儀、常々父母江孝心深く、母は先達而令病死、父三郎兵衞十五ヶ年來兩眼盲、及老年別而不自由を案じ、朝暮此儀を相歎き、聊父之命に不背、商方之儀茂自分之了簡を以不致、都而父之指圖を請、或者珍敷給べ物は時々買調給させ、又振舞等に參り、先き々々に而珍敷品等者、其身不食持歸り父江爲給べ、日之內者商賣方情に入、夜は父之側に罷在り、氣調子を取り、世上珍敷咄杯承り候得者、早速爲申聞心を慰め、且又三郎兵衞女子數人有之を、難澁に候得共いろ〳〵致世話、夫々爲緣付、父江爲致安堵、父茂常々九兵衞孝心之程甚悅び罷在候由相聞え、誠に感入事に候。依而爲褒美遣之候事。

亥　九　月

米十俵　　　　　鱗町淺地屋吉右衞門養子　吉　太　郎

吉太郎養父儀、甚難澁者に而日稼いたし相暮候處、吉太郎儀幼年より孝心深く、日每に近邊之たばこ店江被雇罷越、取請候賃錢者自分事には聊不遣、父母江遣し渡世を助け、養母儀十ヶ年來病氣に而腰不立、兩便茂覺なく洩し、悉皆介抱なくては不叶、養父茂及老年に、殊に病身に而旁以渡世も不相成、一入及困窮候所、吉太郎無慢怠たばこ賃刻など相働、夜中も日

褒美の品目を略す

々之疲れを厭はず、兩親を深切に致介抱、着類等けがれ候物は洗濯いたし、貧敷內に茂好候食物者何分取調爲給べ、看病に心を盡し、且又養弟一人有之所、是をも念頃に勞り、都而吉太郞一身之働に而、家內四人飢渴にも不及、睦敷相暮し候躰、誠に感入事に候。依而爲褒美右之通遣之候事。

亥　九　月

石引町富田屋九郞右衞門娘　ふ　さ

ふさ儀、父母三人相暮候所、九郞右衞門甚難澁者に而、ふさ儀幼年より父母江孝心深く、日夜機・かな・せんたく等之賃仕事致出情渡世を助け、就中母病氣之砌、看病方並ならず孝養を盡し、且又去冬深雪之刻、小家之事若致破損候者、兩親之怪我あるべき事を恐れ、自身屋根へ登り雪をもおろし、萬事奇特之趣、見聞之人々令稱歎候由相聞え、孝心之程感入事に候。依之爲褒美右之通遣之候事。

亥　九　月

米七俵　新坂町塩屋太郞次手代　彌　兵　衞

彌兵衞儀、十四歲之時塩屋故太郞兵衞方へ奉公に罷越、當時迄十八ヶ年律義に致奉公、主家大切に心得、故太郞兵衞久々大病相滯、身不自由に而悉皆人手に預介抱候所、彌兵衞儀晝夜

側を不離看病に心を盡し、大暑之時分者毎夜蚊帳之内團扇を以あふぎ遣し、起上りかね便器も用ひ難き節抔者、手に受遣し候儀も度々有之、看病尋常に超ゑ行屆候に付、太郎兵衛一度本復いたし悦候旨。其後父覺右衛門病中にも、主人方透を考へ、毎夜暇を乞宿へ罷越、終夜看病撫さすり等深切にいたし、翌朝者未明に主家ゑ立歸り、奉公無慢怠相勤め、父長々相煩候に付而は、元來難澁者彌増及困窮、夜具全く無之に付、自分之品を持行父に爲着、其身之辛苦を不厭、父之不自由無之樣に心得、常々主家に而食事之內、少し味能き品は其身不食除置、毎夜父母方へ持行爲給候趣、主人茂其樣子を感じ合力もいたし候樣子。將又其後主人太郎兵衛病氣再發致死去候砌も、看病等前段之通心力を盡し、太郎兵衛遺書を以、せがれ太郎次幼年之間、家事彌兵衛ゑ任せ置候所、數年之間聊麁略之儀無之。且當太郎次養母病死之砌茂、如右並ならず看病心切にいたし候趣、委曲相聞え、誠に忠孝共に希成儀感入事に候。依之爲褒美右之通遣之候事。

亥　九　月

五枚町酒屋伊助手代　喜　兵　衛

鳥目五貫文

喜兵衛儀、去る十一月五日夜主人伊助近邊より出火之節、伊助儀はいまだ若年故、商物初諸道具取除方可致躰茂無之、打驚き居候に付、喜兵衛所持之衣類等入置候葛籠を明け、主人之

品々を入取除、立戻り候得者伊助養母十方に暮れ罷在候故、其儘背負犀川を渡り、知音之方へ預け置、再立歸り自分之品を取除候得共、最早家內𛀁火移り、致燒失候品茂有之樣子。誠に昨今召仕候者には忠節之志感入事に候。依而爲褒美右之通遣候事。

亥　九　月

鳥目五貫文　　　　　　河原町番徒高岡屋　平　次

平次儀、勝手不如意之所、近年相續き父並兄弟共相煩、彌及難澁に候得共、幼少より父母𛀁孝心深く、念頃に仕へ、去夏老母致怪我候後、久々打臥罷在候砌茂甚相勞り、給べ物初二便取またじに至迄、深切に心を用ひ、看病方行屆候樣子。且又平日勤向心懸、萬端篤實に相勤候躰聞及び、若き者には別而奇特之至感入候。尙又孝養心懸專要之事に候。依而爲褒美右之通遣之候事。

亥　九　月

十月朔日。前田齊廣登營して參覲の禮を行ふ。

〔金龍公記史料〕

十月朔。登營謁將軍于黑書院。本多安房守亦謁。

〔續德川實紀〕

十月朔日、月次の賀例の如し。松平加賀守・松平大膳大夫參覲す。加賀守家人本多安房守・中川八郎右衞門拜謁す。

十月五日。前田齊廣の江戸に着したる報金澤に達す。

〔御留守諸事覺書〕

十月五日

一、中將樣御途中益御機嫌能、去廿六日未の上刻御着府被遊、御供人無異儀參府之旨、同日出不時立中飛脚歩、安房守より之狀月番より廻狀有之事。

十月六日。金澤に於ける禪宗の僧數人女犯を以て刑せらる。

〔寢覺の螢〕

一、野村傳兵衞（三百五十石）の妻は田邊佐五右衞門妹なり。傳兵衞世を早うして嗣子なし。他家より家督を定む。今の傳兵衞歳若にして、後室も又艶色なり。去れば後門の護覺束なければ、親類より兄の田邊へ預んと云ふ。佐五右衞門思ふ子細あれば是を許諾し、隱居所を修理ひこれに住しむ。月の夜花の旦琴の音の絕る間もなく、雨に雪に訪來る人多し。故に世の人田邊の後家と言傳ふ。此後室多婬にして、翠簾都（ミスノイチ）といふ座頭を愛し、出入の男誰となく因、情を需妓婦に異ならず。佐五右衞門しらぬ顏にて捨置には、深き故有事と沙汰せり。寶圓寺（御菩提所）先住

久寶は九峰の誤、字は慾鼎

久寶和尙も此人の爲に戒行を破り、我身の沈む而已ならず、多の僧侶塗炭の辱を蒙り、一國ひゞく騷動とはなれり。此久寶和尙初は德實の名有て、若きより高位に昇り、上の尊敬一方ならず。香隆院樣（裕次郎樣と云ふ、太梁院樣の御子。）太梁院樣（宰相樣、御隱居也。）の御導師也。故に位高く身富て、世俗の爲にうらやまる。去れば富不驕の誡も色にかへて、いつしか田邊の後室に馴染、初の程は人目を憚しが、後は妻の樣に思ひなしけり。久寶和尙の隱寮は寺町（下の舟場の）高風景の地にて、山節藻梲はさらなり、床の下に一室をかまへ、いかなる不善やなしぬらん。又後室の隱居所も、目を驚かす善美也。其富貴たとふるに物なし。僧俗巧言令色して、餘澤を蒙るも多し。

一、香林寺（泉寺町）天苗と云ふ和尙あり。是は三間道の照林寺の弟子にて、歲若きより香林寺に入院せり。二・三年を經る中、左坂町の妓家に遊び、放蕩の惡名廣く、聊の事より公の察度受なんとす。此頃久寶和尙（いまだ隱居せざる時。）寶圓寺に在て、（御分國洞宗一派の頭寺。）天苗を呼深く辱め、樣々の目論有て天苗に出奔をすゝむ。天苗も公の重き刑をおそれ、寺を棄て身を避ぬ。斯て香林寺は容寺となり、後住は久寶が弟子をすゑたり。天苗が法眷是を憤りおもふといへ共、頭寺の威勢せん方なく止ぬ。抑天苗は金澤石坂町輕き者の子なり。幼兒の時父是を相せしむるに、足の心に天字の紋あり。觀相これを見て、此兒奇紋あり。俗家にあらば祟有べし、僧とならば高位に昇るべしといへり。遂に照林寺に勉、行ひ堅固に出家を遂たり。然るに前世の因歟、現

在の業歟、淺間しき死を遂たり。

一、大乘寺は聞ゆる嚴式の大寺にて、三州其餘風を學び、他國にも加州を勉たる僧は尊びたりしと聞に、文化の頃より金城禪宗々々の和尙達、飮酒色欲肆にして憚る色もなし。其頃大乘寺白翁和尙といふに、或人出家の美人に戲れたる繪に讃を乞。

當世の神通力をのみこんで花の色添ふ墨ぞめの袖

と書れたり。斯る世の中ゆゑ、心ある輩は和尙達の行ひを疎み果居たり。其中にて天苗ひとり放蕩を言立られ、金澤の住居も叶はざるは、口をしく思ふも宜ならんか。嚮に金澤を奔る時久寶和尙いふ。此地にうか／＼として、辱をうけ罪に行はれんよりは、はやく他國へ行、大寺の和尙共成べし。其節金子望に任せ送るべしと、情ありげに申ける（天苗美僧にて久寶より以前に田邊後室と不淺。依之久寶、天苗あるを惡んでの嫉妬にて出奔を勸む。）を實ぞと思ひ、よき寺を持て聊心を慰めんと、ひそかに久寶和尙へもの事を約せし故、其後京師より毎度賴越けれ共借ざるのみか、是迄の惡事他國へ迄言送りければ、今は天苗身を置べき地もなく、始終久寶の奸惡を怨けれ共、白地（アカラサマ）に立歸るべき身にあらざれば、いたづらに月日を過しぬ。斯て久寶は隱居して、其行ひ正しからざる事共委しく聞届（國に兄弟有て委く通ず。）潜に歸り、日蓮宗所化に申紛れて、久寶和尙の動作を窺ひ居ける。于時文化十一甲戌八月十五日の夜、久寶隱僧は月樓に月をながめ、物の足儘に捨しうき世も傾く影ををしみ、

わが身も稍老にけるかなと、越方行末の妄想は凡俗にひとしかるべし。天苗は今宵田邊の後室彼隱寮へ忍び來る事を慥に知り、道筋に身をひそめて待居たり。後室はかゝる事とは夢にも知らず、初夜過る頃下部一人を案內に連て、しをり戶より入下部を歸しけり。下部は何心なく歸る後より、法眼一人つと出て呼とゞめ、汝は田邊の僕にあらずや。吾しか〳〵の仔細に依て久寶深く怨る事あり。今吾賴に應ぜば幾許の黃金を與ふべし。いなむとならば忽しめ殺さんと、はげしき氣色面に見えたり。下郞の事なれば、且おそれ、且黃金と聞て心や動きけん、終に許諾したり。扨夜も更わたり、久寶は翡翠の枕に鴛鴦の契りを結んと思ふ頃、いつもの枝折戶よりおとなうて、急に後室に逢んと云。まがふ方なき吾下部の聲なれば、何の氣もなく何事ぞと出たるを、天苗飛出後室の肱をしかととらへ、直に久寶が閨室へ押入、二つ双べし枕の元にどつかと居り、暫双方物云はず。稍有て天苗云、われ他國に居て黃金に盡、かく落魄に及びしも老賊の奸計より出たり。今は三尺の草庵も結ぶによしなし。むかし約せし言葉のくさ〴〵覺ありなん。黃金二三百塊からまほし。否とならば共々修羅の街に沈み、憂目を思ひ知らさんと、思ひ切たる豪僧の勢、彼是思ひ合されて答ふべき一言なし。依之はやく桂巖寺へ人を走らす。天麟和尚野田桃雲寺山門に羅漢を建立す。依て羅漢和尚と云。は天苗の法兄といひ、殊に活達の法師なれば、いそぎ來て事の仔細を聞、天苗をなだめ、久寶には黃金を與へられよとすゝめ是

を説けれ共、一人は怒に其身を忘れ、ひとりは慾に黄金ををしみ、事治るべきにあらず。夜もはや明なんとす。婦女の禪室に在ては見苦しと、後室を風呂敷につゝみ、天麟和尚みづから負て犀川をわたり、田邊の宅へ投込んで歸れりといへり。

一、此事治らず世上に露見して、天苗は公より被召捕座敷牢に入。時の奉行天苗を發狂にして事なからん樣に欲すれ共、障る事共起り出て、無是非顯に糺しければ、破戒の始末天苗が口より洩て、爰の和尚かしこの方丈連累となりて、十餘ヶ寺法眷預とはなれり。

一、寶圓寺は國主の御位牌の御寺、久寶和尚は御兩殿の御戒師也。依之寶圓寺當和尚并天徳院和尚へ御預にて、座敷牢の内死去、秘説あり。

一、龍徳寺・隆圓寺・長久寺・希翁院・寶勝寺・桂巖寺、此六ヶ寺入牢、其外閉門・遠慮の寺々數不知。

一、此騷動を聞て、傳馬町照蓮寺・泉寺町金剛寺は、先達て出奔す。在住ならば同罪なるべし。

一、田邊後室は最初一家御預、再三詮議有て座敷牢、事畢て後一家へ御預、生涯座敷牢。

一、田邊佐五右衛門は後室を預ながら不締、其外申譯もなき事共多し。遠島なり。久寶より樣々御寄附の重寶引請賣拂しと聞。

七日は六日なるべし

一、野村傳兵衛御とがめはなし。

一、後室公事場へ呼出さるゝ事數遍、樣々の話あり。此女より騷動を引起し、大勢の人を苦しむ。大罪にくし／＼と言ひし人々も、後室の顏ばせうつくしくして、思ひ有げに指うつむきたるは、彼西施が胸を押へしおもかげも斯やあらんと、うつ／＼と見とれて心碎くるがごとしといへり。

一、大勢の僧徒等に一座せし妓婦の數々、其宿をせし老夫老婦、且寶圓寺へ累代の國主より寄附有し希代の重器、久寶より賣出せしを買入し屋敷々々、幷取扱ひし商人懸り合の人々、遠島・閉門・蟄居・入牢、或は組預・遠慮、都て其頃御咎を蒙りしは三百七十餘人ありと聞。京・大坂へ賣渡せし重器共穿て尋求られ、不殘御買返しなり。莫大至極の黃金なりとかや。又行衞知れざるも有しとかや。

一、然して詮議滿ち刑定て、文化十二年十月七日長久寺・隆圓寺・龍德寺・希翁院・寶勝寺・桂巖寺・天苗、以上七人、野町の端御刑法場に磔に行はる。

一、泰雲院樣御隱居有て再御政務。御政務にて、天明中日蓮宗覺源寺と云を女犯の罪にて磔にかゝる。此時寺は破却せり。此度寺恙なきは、初桂巖寺と呼て召出さるゝ時、天麟和尙云、桂巖寺は寺なり、寺にかゝはる罪にはあらず、罪を犯せしは此天麟なりと言しにより、都て名を以て呼

七日に終る。此間中妓婦共の奇談、寺々の風評、武家方の取沙汰、町々の流言、筆に盡さば車にこぼるゝ成べし。說區々にして一定ならざれ共、聞しまゝを記す。

一、桂巖寺天麟和尙は聞ゆる豪傑にて、並々の僧にあらず、存命中話多き和尙なりし。年頃五百羅漢建立の願を與し、施主を求て、京師へ獨步して每年十躰・二十躰を、みづからも負來る事歲久し。既に三百躰出來せしが、此禍に逢うて願不滿。或とし道中にて山賊出で持參金を奪んとす。天麟云、此金を汝等にあたふる事は安し。然れ共吾金にあらず、五百羅漢建立の大願にて施主より請取來りし金也。汝等に奪るゝ時は、手を空しく歸りては言譯なし。さればとて又汝はたゞにては退くまじ、速に吾をさし殺し金をとれ、左すれば申分なしと言。賊大に驚き、扨々左樣なる御方とは努々不存、失言無禮御ゆるし被下よと詫て、其後いふは、願はくはわれらも一躰寄進仕たし、許容被下まじく哉と、天麟聞て金一片を寄進せば此度一像を刻て歸るべしと。賊悅て金一片を渡す。夫より像を刻、歸路に其山賊の栖をたづね、是を見せ、施主山賊何某と彫付て、今桃雲寺山門にあり。元來此僧ひとへに再來を願ひしとなり。刑に行はるゝ時の辭に

けがれたる身をば枯野に脫捨てまたもやどらんすが原のやど

一、寺町松月寺禪宗大樹の櫻あり。枝餘りにはびこりたりとて切込けり。是より此寺に色々の禍あるとかや。文化七年の春、此寺の弟子僧佐坂町の妓婦と心中し、天苗が一件にて和尚も追院となれり。

〔內外國事記〕

一、文化十一年九月十五日より事之起りに而、寶圓寺隱居九峯和尙、犀川下之船場之高に地面拜領居住に候。然所御細工奉行相勤候野村故忠兵衞後室、御次番竪町居住田邊新五右衞門妹に而候。右隱居与馴合、右後室者當時野村方年若に而、田邊方に同居候。陰事及露顯、格別成及騷動、出奔之寺三ヶ寺、香林寺等入牢之坊主六・七人、自害之者茂有之、文化十二年二月に至而者、貴賤之迷惑人八十人餘、右隱居出奔、後家も於公事場御吟味、委曲白狀、破戒之躰他邦等江茂相聞、永平寺より尋出候而者、公邊御詮議与可相成儀に候。於京都隱居、改方足輕石川源五郎召捕候。此騷動中に最前新町に罷在候能登屋彥三郎与申者妻、後家に相成、觀音町に住居罷在候而、日蓮宗淺野川淨明寺与馴合、事出來、後家改方に而入牢、淨明寺与相手者眞言宗馬坂集福寺与言。九峯召捕來、公事場奉行御用番奥野左膳江御預与申儀有之。左膳方縮所出來候處、於改方破戒之儀御吟味被成候付、公事場江引渡候段岡田太郎右衞門申渡、牢揚屋江入改而禁牢、其後牢死。

前に八月に作る

新五右衞門は佐五右衞門

淨明寺は靜明寺

一、同年四月九峯牢死。

一、寶圓寺、天德院下寺江下り遍塞被仰付置候處、六月五日御免、如故方丈相勤。

一、寶圓寺隱居九峯一件拘り之寺々之內、入牢法性寺抔、出牢押隱居公事場に而被仰渡候得共、寺社方役所に而追院。香林寺者金澤中引廻し之上、十月六日上口に而磔被仰付、御赦に而寺號者御免に付、廢寺に者不相成与沙汰。然所六日坊主七人上口に而磔に懸る。業札左之通。同日佐々加町田中屋何某後家刎首。

泉野禪宗　長國寺　龍淵寺　希翁院　龍德寺　寶勝寺　桂岩寺

此者共女出合宿へ罷越、女犯破戒いたし、希翁院之外肉食もいたし畢。紀あきらめ、不屆顯然に付如此申付者也。

十月六日

禪宗泉野香林寺先住　天苗

此者住職中に、女出合宿江罷越、女犯破戒肉食いたし、其儀可顯躰に付寺立退き、親類方にかくれ居候內、九峯和尙之隱寮江女罷越候所を考へ、押込不法を申、銀子を可取巧之處、其儀整不申及露顯、吟味之節其身之不屆を輕く可仕成ため、法類等之者共女犯破戒有之儀申顯、逆惡之族有之畢。紀あきらめ重科至極に付、如斯申付者也。

同年は文化十二年

十月六日

右寺々寺號破却御赦免者、當年四月日光御法會に付御赦に候由。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

是の年曹洞宗寶圓寺之隱居久峰和尚御馬廻組田邊佐五右衞門後家と姪通致し、同宗之內香林寺・桂岩寺等申合、笹ヵ町谷屋と云出合宿に而、同町之柳橋屋內於菊・於半・於末抔と云女郎と馴染、右連中每度參會、酒宴・亂行・女犯・肉食之次第一々露顯に付、久峯和尚初各公事場に於て御僉議、何茂禁牢被仰付。田邊後家は一類江御預け、且谷屋・柳橋屋幷於菊等何茂禁牢被仰付。寶圓寺は御菩提所之儀ゆゑ久峰等之罪落着御僉議方六ヶ敷長く掛り申由なり。十月六日左之人々泉野に於て磔に被仰付なり。

香林寺　桂岩寺　龍淵寺　希翁院　長國寺

〆六ヶ寺　久峰和尚は牢之由。

六ヶ寺は前に出でたり

右御刑法前代未聞之事なり。香林寺・桂岩寺は豪傑に而、至極覺悟宜しく見事なるよし。辭世も讀し由。各僧之事故髮無之、依而白鉢卷を致し其体立派に有之由承るなり。

〔御留守諸事覺書〕

十月九日。前田齊廣の登營したる報金澤に達す。

十月十一日

一、前月廿八日上使酒井讃岐守殿を以被蒙上意、當朔日御登城御參勤之御禮被仰上候段、同日發足之中飛脚歩一昨日到着。右之御様子年寄中等江被成下御書に付、今日何茂表方席においてて御書拜戴相濟、若年寄月番被相招拜戴候事。

十月。金澤桂岩寺の小者長助篤行を以て賞せらる。

〔内外國事記〕

付札、寶圓寺・天徳院江

一、鳥目五貫文　　泉野桂岩寺小者　長　助

右之者越中五ヶ山出生之由に候所、二十ヶ年以前御當地江罷出、寺庵等致奉公候處、實躰に相勤候躰。就中六・七ヶ年已前より泉野桂岩寺に致奉公居候處、同寺儀不届之趣有之禁牢被仰付置候内茂、住持在寺同様實躰に相勤、寺中縮方茂相立、或者佛前等之備物共外萬端實儀を盡、輕き者に者稀成奇特之儀共相聞え候に付、如此遣之候條、可有御申渡候事。

亥　十　月

十月。羽咋・鹿島兩郡に青米を生じたるを以て、十村等その租米を別積

にせんことを出願す。

〔不熟米納方御觸留拔書〕

羽咋・鹿嶋兩御郡山方村日請不宜所、幷潟廻り村之內、當年青米出來之所間々御座候に付、拵方等重々入念申渡。猶更御代官中相撰申儀に御座候得共、其村出來立に而外に取替可申米無之、無據相納可申儀に御座候。就夫右之分は別積に仕置、御米納相濟候上御代官中より書上可申候間、御拂方に被仰付候樣仕度奉存候。一集に積置、大坂爲御登に相成候時分、船手之者指劣申儀に御座候得者、行當混雜仕候間、是等之趣宜御詮議奉願候。且亦町藏入之內にも青米出來之村方も御座候間、藏宿共心得方之儀被仰渡御座候樣仕度、小紙を以申上候、以上。

亥十月

武部村 四郎太夫

堀松村 平藏

本江村 六郎右衞門

御改作御奉行所

〔不熟米納方御觸留拔書〕

當年之氣候に候得共、山方日請不宜所幷潟廻り村之內青米出來之所も有之に付、右之分別積

に仕置、御挑方に被仰付候様相願候所、御聞届難被成旨小紙御付札幷御意書相渡申に付、爲御心得相廻し候間、御承知之上先々大飛迯を以御順達、落着より四郎太夫ゟ御返し可被成候、以上。

文化十二年亥十一月五日

武部四郎太夫

堀松平藏

本江六郎右衛門

仲間宛所

代官納方之儀に付、先達而段々申渡置候。然處山方・潟廻り等日請不宜場所青米有之に付、別積之儀願候得共、願紙面附札を以申渡候通一圓難承届儀に候。當年抔秋入も相應之年柄、納方彼是及遅々候儀者有之間敷筈之所、當時歩入後れ候ヶ所も有之躰に相聞候。御代官之儀者、納方之始抹により御取简に拘り、甚不輕役前に候得者、米性も相撰、且百姓も迷惑不致様盡實意、無味に無之様可相勤筈に候。此所重々相心得、何れ御爲第一に奉存、御收納方全取治め可申儀に候。此段田井村次郎吉ゟ口達を以申達候に付、覺書相渡候。尤一統油斷も有之間敷候得共、爲念申入置候。且亦御米改役筋ゟも、右之趣内々遂示談置候事。

亥十一月

右之通御口達を以、御改作所より被仰渡候間、得与夫々御申談、何れにも入米墓取候様専一与奉存候。猶委細は御出府之節可得御意候、以上。

亥十一月二日　田井村　次郎吉

口郡御扶持人中様

御改作所御付札

本文遂披見候。去年其御郡作難に付、見立免切申渡候而、すぐ詮議之上村々出來之米精誠爲相納、別積に者不申渡候。然處當年之作立において如斯之願方者如何之儀、難承届事。

改作奉行

十一月九日。昨今兩日前田治脩の七回忌法會を寶圓寺に修す。

〔金龍公記史料〕

十一月八日九日。修太梁公七回忌法會於寶圓寺。奉行前田主稅。

〔御用番方并御城方御用之覺〕

十一月廿日

一、今般太梁院樣御法事に付、二條樣より御香奠金三百疋御備、今日寺社奉行へ相渡候筈之處、御法事奉行主稅出席無之故、助右衛門より竹田掃部へ渡し、御牌前へ備候樣に申渡之。

十一月廿二日。鹿島郡小田中の皮多に獸皮の仕法に就いて告ぐ。

〔諸書物留〕

能州小田中村皮多共、去年鹿皮等致洩皮候に付、僉議之趣被申聞候樣先達而申達候に付、別紙書付被指出遂披見候所、越中大門之者共より取替皮爲返濟、皮縮方不申渡以前買留置候分指遣候旨等、紙面之趣不相分儀も在之候得共、僉議之趣在之不及察當候。右に付御用皮取縮之儀者、先達而申渡置候仕法通りに而、今般改而小田中村皮多共之内にも主附相立、淺野村皮多茂右衞門等三人之者共江申渡、御献上御用皮十七枚、幷三百枚之手當も致し、御用相濟候上は地拂勝手次第、他國出之儀は其時々申聞候樣可被申渡候。尤淺野村皮多茂右衞門等江も其段申渡候條、夫々示合縮方相立候樣可被申渡候。且又前々より公事場より申渡候儀、無違失相心得候樣是又可被申渡候、以上。

文化十二年十一月廿二日　　御算用場

進士求馬殿

中村逸角殿

十一月廿四日。處刑せられたる寺僧の所有する綸旨の處置に關して議す。

〔袖裏見聞錄〕

開禪寺の件
別紙は略す

文化乙亥年禪宗之僧數人御刑法被仰付に付、綸旨之儀如何取捌候心得に候哉与寺社奉行へ尋候處、左之通書出之。

今般御刑法被仰付候寺庵所持之綸旨仕抹方之儀御尋、則兩刹承調理候之處、別紙之通役者申聞候。天明中泉野開禪寺等禁牢被仰付、其節之樣子相尋候處、是又別紙小紙之通申聞、先例相知不申。尤寺社所舊記等に茂綸旨仕抹方之儀は見當不申。享保年中受領之神職死刑等に被仰付候節綸旨仕抹方之儀、京都水嶋右近江承合候處、別紙書拔之通返書指越申候。右答方之趣に而は堂上方之外は、其身死刑被仰付候共、官位辭退之沙汰には及申間鋪哉与奉存候。依而此度も桂岩寺等後住申渡候上は、兩刹へ取揚有之候綸旨後住へ夫々相渡候歟、或は錄寺へ引揚置候歟、此儀は兩刹僉議次第に可申談哉与奉存候。乍去被入御念候儀に御座候はゞ、手筋を以右躰之振合承合候京都詰人江、私共より可申談哉。猶更御指圖御座候樣仕度奉存候、以上。

十一月廿四日　　　　　竹田掃部

奥村助右衞門樣

今般桂岩寺等七ヶ寺磔刑被仰付候に付、長國寺・龍德寺之外者御綸旨先兩寺江預置堅奉守護居候。右御綸旨仕抹如何可仕哉之段御伺可申上与存居候內、取計方御尋御座候得共、是迄一

宗之僧徒御領國者勿論、於他國茂御綸旨頂戴之身分死刑に罷成候儀一切不承候間、兩寺においても仕抹方當惑仕罷在候。龍德寺御綸旨之儀は如何成行候哉、身寄之者共方迄精々相尋候へ共、一向相知不申候。少林寺・金剛寺等御綸旨之儀者、逃去候節奉持仕候樣子に御座候。長國寺儀者御綸旨頂戴不仕候。且又押隱居・追院等之僧御綸旨仕抹之儀御尋に御座候得共、此儀は何國江罷越候而も生涯奉持仕候事に御座候。流刑被仰付候輩は如何相成可申哉、類例承知不仕候。併勅請に相應じ御綸旨降下之儀に御座候得ば、其銘々江頂戴仕儀に御座候。左候時は奉持仕候茂相當之樣に奉存候。何分是等之儀茂宜敷御指揮被成下候之樣御願申上候、以上。

亥十一月　　寶圓寺　役　者　印
　　　　　　天德寺　役　者　印

寺社御奉行所

十一月廿七日。能登幕府領の百姓にして先に騷擾したる者の處分に關して議す。

〔御用番方幷御城方御用之覺〕

十一月六日

本年六月二十日の條參照

一、御預地村々御仕法替に付、先達而百姓共御城下へ罷出候儀等不屆に候得共、御請も仕儀候間、此上御咎無之樣仕度旨、勝尾半左衞門紙面。

十一月廿七日

一、御預地村々一統信服を以御請仕候へ共、御城下へ大勢罷出候儀は、不屆至極沙汰之限に付、急度可申付儀に候へども、當時一統後悔仕罷在候趣源六郎等より申聞候。御咎無御座樣仕度旨、當月六日勝尾半左衞門紙面差出候付、今日前田源六郎呼出、先達而御預地方僉議緩かに候故、百姓共圖に乘候樣成爲躰に候處、其後手强に遂詮議候へば、御請仕候處へも到り候處、又候左樣に緩寛之沙汰に而は、庄屋初再び力を得候樣に成まじき哉。此僉議は如何之旨尋候所、當九月十日村方之者棟取と相見候者共五人手鎖縮に而預に申渡、其外十人徘徊留に申渡置候處、先達而騷立候は右之者共迄に而無之、十五人之者共右之通申付候處に、餘之者共十五人之者共に對し、我々も同斷に被仰付樣に仕度と申樣成氣味相見え申候間、十五人之者共嚴敷申付候はゞ一統願之趣抔も可有之、其段に至り却而此方より緩かに向候而は、結句御縮方宜かるまじき儀と遂詮議申事候。右之通候條、とかく先達而相達候通何分に茂寛緩之沙汰有之樣に仕度旨に而、十五人之者共名書も所持に付借請置候事。

十一月。能登口郡の十村等藩用の串海鼠を缺乏せざらしむる諮問に應ふ。

〔諸書物留〕

御献上幷御進物等之串海鼠、近年生海鼠不獵に而御用高相揃不申、其上桁幅狹く甚見苦敷、員數相揃不申節は金澤町御菜屋江被仰渡、貯置候分御買上御座候所、御定御直段与は高直之由。御献上等御國役御用相勤候十ヶ村に而取揚候生海鼠は、所口町串海鼠問屋江賣渡候得共、串海鼠御定御直段下直故、串海鼠問屋方に而も生海鼠下直に買請、當時引合不申。長崎行煎海鼠問屋よりは浦方江前銀貸付置候故、大振成生海鼠多賣渡候哉に被思召候間、洩生海鼠不仕、大生海鼠澤山串海鼠問屋江賣渡、御献上御用高相揃候樣被成度。尤仕法に依而、十ヶ村江御仕入被仰付候筋も可在之候間、私共存寄之趣、曁村方相尋候而成共、御内々申上候樣被仰渡之趣奉得其意、左に申上候。

一、口郡に而生海鼠取揚候村々、鰀目村太郎次組十七ヶ村、武部村四郎太夫組一ヶ村、笠師村九郎次組二ヶ村、高田村由五郎組二ヶ村、都合二十二ヶ村に而、前々より生海鼠役・串海鼠役・海鼠腸役上納仕相稼申儀に御座候所、石岩之海に出生之生海鼠者もろく、桁江懸張候得ば多分切損候故、宜串海鼠には出來不申、泥海に而出生之生海鼠を張申儀に候。右役銀名目に不拘、太郎次組野崎村・日出島村・鰀目村・祖母浦村・向田村・曲り村、武部村四郎太夫組三室村、高田村由五郎組津向村・小嶋村、鳳至郡鵜川村爲次郎組甲村、右十ヶ村に而取揚候生海鼠を張、

御献上御用に指上申儀に御座候。天明五年四月江戸表より、御普請役平井彌惣次殿、長崎會所附北嶋榮次・平春梅次郎、所口町ゟ被罷越、奥・口浦方生海鼠等取揚候村々役人被呼出御吟味之節も、右野崎村等十ヶ村に而取揚候生海鼠は、御献上御用串海鼠請負人方ゟ生海鼠に而賣渡、右請負人方に而御用串海鼠相仕立、撰殘幷御用高相濟候後取揚候生海鼠は煎海鼠に仕、煎海鼠請負人塩屋清五郎ゟ相渡候段、村々役人連印之紙面御役人ゟ御取立に御座候。

一、前段之通復古より御役銀上納仕村々に而串海鼠を張、御献上御用に指上、御用高相濟候上金澤幷所口町商人ゟ賣渡候所、元來串海鼠は手間取申儀、其上手振不申者張候而は多分切海鼠に成候故、所口町人を相頼村方ゟ連越、御用串海鼠爲張候所、いつしか所口町に串海鼠問屋相立、御献上串海鼠右問屋より指上申事に相成候由、村役人等申聞候。

一、當時所口町に而串海鼠問屋は、木町中挾屋助三郎・中町殿村屋市右衞門・同町信濃屋與三右衞門・熊木屋仁兵衞に而、勿論何村者誰串海鼠場に取極置、右問屋より仕入銀も貸渡、生海鼠獵業時には、問屋自身又は串海鼠張覺候町人村方ゟ罷越、毎日取揚候生海鼠相撰張立申候。切損候分は連子と唱、右之者共持參仕候。其餘小生海鼠類は煎海鼠に仕、塩屋清五郎ゟ賣渡申儀に御座候。

一、串海鼠場口郡に而九ヶ村ゟは、塩屋清五郎より仕入銀等借請不申候。小生海鼠は煎海鼠

に仕、右清五郎ゟ卽銀に賣渡申候。

一、右十ヶ村之內津向村・小嶋村生海鼠稼仕候。海は所口町向寄に付、取揚候生海鼠は所口西地子町裾ゟ船を着、右串海鼠問屋ゟ及案內候得ば、問屋四軒之者共之內罷出候に付、卽錢に賣渡、年により獵師共指支候節は、前方仕入銀請受候事も御座候所、近年所口魚町之者共新に手繰網を拵、生海鼠出生之時節も無構海底を荒申に付、先前与は生海鼠出生甚薄、尤御用串海鼠に相成候程之海鼠は稀に御座候由、村役人申聞候。

一、前段申上候通、當時村々に而串海鼠張覺申者無御座、生海鼠取揚候時分は、所口町串海鼠問屋共手分け、村々ゟ罷越居縮方仕張申儀。尤裁許十村より嚴重御縮方申渡候に付、溲生海鼠無御座与奉存候。

一、串海鼠問屋よりも仕入銀貸渡候故、桁に懸候生海鼠は右問屋ゟ賣渡候得共、御獻上串海鼠は御定御直段御座候故、串海鼠問屋方に而は引合不申儀も御座候哉、樣子相知不申候。

一、所口町串海鼠問屋之儀、前段申上候通いつしか問屋に相成申樣子に而、誰々問屋に被仰付候与申儀、御觸渡之舊記等見當不申候。先年問屋相勤候者、當時村方ゟ罷越不申者も有之、或は當時問屋四軒之內仕入銀も仕兼候者は、村方より買請候生海鼠を串海鼠に仕立、仕入銀仕置候者ゟ賣渡候樣子にも相聞候間、問屋方之儀御取極、勿論誰々問屋に被仰付候段、裁許

十村江被仰渡御座候はゞ、御縮方行屆可申哉与奉存候。
一、右之趣に而、村方江御仕入米等被仰付候而、御用串海鼠全相揃候与申心付無御座候。
右私共相談僉議之趣、曁村役人手前極内々を以承糺候首尾、小紙を以申上候、以上。

亥十一月

武部村　四郎太夫

本江村　六郎右衞門

進士求馬樣

中村逸角樣

十二月廿九日。幕府、上野本坊の造營成就せるを以て加賀藩に進物を命ず。

〔内外國事記〕

一、上野御本坊御燒失之後、御造營御成就御移徙に付、文化十二年十二月廿九日御月番江聞番御呼立、左之通御書付相渡候由。

御名

上野本坊御普請出來移徙相濟候に付、銜立一脚・押金三十本進物有之可然候。上野執當承合可被取計候。

十　二　月

十二月。領内に出役したる者の雜費及び勤向に付き村役人より報告を要すとの前令を廢す。

〔御觸拔書〕

定番頭江

御領國中江爲御用出役之人々有之節、其村々雜費茂有之儀等之趣に付、以來諸雜用之分、其所之村役人等より帳面取立、且遠所江罷出候人々勤向之樣子相認、右諸雜用帳与一所に御算用場江可指出旨等之儀に付、文化九年一統申渡置候得共、以後右帳面取立申儀、曁勤向之樣子も不及書出候。

但、遠所奉行等金澤江出役之節長逗留不致、御用相濟次第早速致歸邑候儀者、其節申渡置候通に可相心得候。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江も相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

十　二　月

十二月。藤内が改方の用務に出張する際の服装・宿舍等に關する諮問に應ふ。

〔諸書物留〕

金澤改方御手合より、御郡ゟ藤内共何等爲御縮方相廻候節、脇指帶、十手・指繩に而前々より相廻候振合に候哉、是迄之振合見聞之趣急々相しらべ可申上旨。且又相廻候節、末々行暮候而止宿いたし候節は、向寄藤内仲間之方ゟ罷越候哉、又は平人方に止宿申談候哉、振合之趣も可申上旨、御内々御紙面之趣奉得其意候。與力中春秋被相廻候節、向寄之藤内共罷出候時分、布羽織着用仕候得共、前々より脇指帶候儀無御座、其外足輕廻村先吟味者抔有之節も藤内共罷出候得共、脇指帶不申候。廻り藤内前々は、はなひねりと唱、長一尺五六寸計之棒を持歩行候得共、何頃よりか右棒持候儀見請不申候。其代り十手を羽織之下に指、幷指繩を懷中仕候者も有之由に候得共、顯に見受申儀無御座候。與力中等廻り先に而盗人等召捕、金澤表ゟ急々被遣候時分、且又廻り藤内共召捕候盗人等金澤迄藤内送り被申、往還筋向寄居住之藤內方迄遣し、次々相送り申候。其時分は手鎖を打、指繩を懸申者も在之、又は繩しばりに而爲引立申儀も御座候。

一、改方御用幷藤内村々相廻候時分、行暮候而も平人方には一向泊り不申、向寄藤内仲間之

方に止宿仕候。

一、近年所口町之者共所に而御刑法被仰付候節、藤內頭仁藏儀手代召連罷下候に、仁藏儀は勿論、手代も脇指帶十手持參仕候。且又笠師村九郎次跡組藤瀨村之者、其所に而梟首被仰付候節、仁藏手代罷下候時分脇指帶居申候。

一、右兩度共仁藏初藤內共、平人方には泊り不申、向寄藤內方に止宿仕候。

右御尋之趣小紙を以申上候、以上。

亥十二月

武部村 四郎太夫

堀松村 平藏

本江村 六郎右衛門

中村逸角樣

是歲。領內の產米損耗高を屆出で、幕府よりその減額を命ぜらる。

〔河合錄〕

一、文化十二年御損毛四十六萬石餘書上候。其刻虫付・にち付等と書上候處、江戶表にて御僉議之上、前々にち付と申儀御書上に成候儀相省候事に成居候に付、虫付迄之被仰立にて、御半高に近き御損毛之御屆如何可有之哉。且其年北國筋作躰相應之儀、公儀御役人衆御聞及

三歩以下は以上なるべし

之躰に候。旁伺之上御屆高相減、三十七萬石餘之御屆に相成濟候段被仰渡等有之事。且右之節にち付之儀、御勘定所向御しらべ之儀御聞合等有之、外々には無之名目之旨にて、改作奉行ゟも御尋、御扶持人等僉議色々御達申候事も有之候。何れ改作奉行よりは前々にちと申儀も御達申候得ども、御書上之節は御省に相成候儀と奉存候旨。且又其節近年御損毛高なにとなく多き樣に相見え候間、以來之儀御詮議可有御座旨に付、此儀は前段文化二年之儀御達申候。然處文化五年重而萬石以上之面々鬮籾之儀最早不及鬮置旨被仰渡、此儀改作奉行不致承知哉之旨御尋に付、御答御達申候趣は、文化元年・二年鬮籾被仰渡候得共、御領國三歩以下之御損毛にて御鬮籾無御座、其段御勘定所ゟ御屆有之。文化五年前段兩年分鬮置に不及段被仰渡。其後文化七年鬮籾之儀被仰渡候得共、其節は御城御燒失に付御鬮籾不被仰付、則御勘定所へ御屆に相成候。隨而三歩以下には相成候而は自然鬮籾被仰渡も可有之哉に付、文化二年從來心得方被仰渡置候趣を以取圖り候旨御達申候事。

一、右にちと申儀、其後御勘定所御問合申候趣聞番より御達申上。何れ蒸とにちと同樣なれば、蒸と御書上可有御座、蒸と相違に候はゞにちと御書上、御尋有之候はゞ其譯口達にて可申解、且御屆高之儀も、通例之年は先去年御屆とは相增不申樣可然、尤年々之豐凶に寄御圖り可有御座旨御達申、其紙面等御渡有之一件に留有之事。

文化十三年

二月五日。藩有の塩硝を拂下ぐる件を議す。

〔御留守諸事覺書〕

二月五日

一、生塩硝御拂之儀に付、買請人書付御異風裁許以添書指出、當八日迄に否申渡候樣致度旨申聞候に付、猶更遂詮議候處、近年大坂表相場下直に付、書付通りよりは宜買請人得不申、少下直に相聞候得共、代銀上納方も丈夫に御座候間、御拂被仰付候はゞ可然旨、右裁許申聞候。塩硝一萬貫目計寄候御拂之儀先達而伺相濟、文化十一年先試に四千斤御拂申渡候儀にも候間、紙面之通承届御拂可申渡与遂詮議、今日左之通覺書を以申渡、追而ヶ條物に及言上候。

御異風裁許江

八千斤　　生塩硝

但、一斤目形三百目之圖

一箱四十斤入に而二百箱

右塩硝御拂之儀、各紙面之通承届候條、右之通御拂可被申渡候。尤御縮方之品候條、前々之

振を以、買請人賣捌方等入念候樣可被申渡候事。

子　二　月

二月十日。先に製塩に温釜の使用を勸奬したるを停止す。

〔文化年中御用留拔書〕

先達而淺釜・溫釜を添塩燒揚候仕法一統申渡候儀は、塩士共利方宜、格別益に相成候道理に候所、風土之違に茂候哉、塩士共不進に而、右仕法相用候儀好不申躰。不信服之儀押而申渡候儀は如何に付、當年より右溫釜相用候仕法指止、先規之通相心得候樣可申渡候。右之通申渡候上は、冥加塩も先規之通冥加米に而取立候條、其段一統可被申渡候。且又御仕入淺釜貸賃、溫釜仕法中は二貫五百文貸渡候得共、先規之通に候上者、中居釜借賃之通四貫五百文計にも貸渡可申筈に候得共、其儀は令用捨、今年より三貫五百文宛貸渡候條、此段夫々可被申渡候、以上。

二　月　十　日　　　御　算　用　場

進　士　求　馬殿

中　村　逸　角殿

二月十四日。地舟裁許宮腰屋久右衞門を各浦に派して渡海船に極印を施

さしむべきを告ぐ。

〔筒井舊記〕

先達而地舟裁許申渡候宮腰屋久右衛門儀、御領國櫂役等增減吟味申付候に付、今度致浦廻、渡海船之分極印爲打申候之間、其段各支配浦々等船持共江不相洩樣可被申渡候。且又是以後船持共等新艘出來、又者他國より買入船有之節、右久右衛門迄其時々申聞候樣可被申渡候、以上。

子二月十四日　　　御算用場

進士求馬殿

中村逸角殿

二月十五日。德川家齊、前田齊廣に鶴を贈る。

〔續德川實紀〕

二月十五日

御使して松平加賀守に御鷹の鶴をつかはさる。

二月廿八日。製塩用淺釜その他の鑄造を自由にすべきことを命ず。

〔郡方御觸〕

塩釜之儀十錺幷淺釜之外、形替り釜鑄立候儀、暨十錺之外淺釜者役塩申付置候に付、しらべ方指支候條、當場ゟ斷無之淺釜鑄立貸渡候儀、且塩士共相對を以鑄立候儀堅不相成趣有之、去亥年申渡置候得共、今般詮議之趣有之、以來十錺・淺釜・形替釜等塩士共任勝手相用候儀不指支候段、塩士共ゟ申渡候間、此段承知有之、各支配鑄物師共ゟも可被申渡候。依而被指出置候淺釜鑄立願書付令返達候、以上。

二月廿八日　　　　　　　　　　　御算用場

進士求馬殿

中村逸角殿

二月。本年以降登せ米の仕法を改むべきことを告ぐ。

〔御廻米出船等留帳〕

當年より爲御登米仕法相改候趣左之通。

一、向後壹番下り正月下旬より三番立迄追々出船、六月中大坂皆着之定に候條、着船次第無遲滯御米可被積渡候。尤是迄之通着船之順番を以先後相極、且御荷物江戸廻り船幷於大坂川口見分船之儀は、順番に不拘可被積渡候事。

但、六月中皆着之定に候得共、年之氣候にもより可申儀に付、成限り五月中致皆着候樣船手へ申渡候條、積渡方不致遲々樣可被相心得候事。

一、三州浦々積所において、御米善惡差竹を以船頭へ各弁御横目立會爲見候儀申渡候之條、損米等有之候者出船被相省、是迄之通代り米代官より受取可被相渡候事。

但、指竹を以差取候御米は、元之俵江指戻候樣可被申渡候。尤御米取扱手荒成儀等無之樣、嚴重可被制候事。

一、於積所御米渡方之儀は、各弁御横目船頭立會、千俵に付五俵宛鬮筒を船頭江爲振、右俵數取出し、斤量肩掛を以俵別貫目相改、五俵平均之貫目相極、升廻は櫓升を以右俵數斗立、平均之升目相極、一俵之升目・貫目共送り狀に記、運賃米共可被相渡候事。鬮筒之儀は、振出札に一より二十一迄番附記置候間、東西を呼、番附當り俵取出可申候事。

但、一斗三升入り之桶に米を入、斗棒をかけ、櫓升之内江米を移可申事。

一、御米積渡之節、代官株分を以撰立、千俵に付五俵之割合を以、前文之通斤量・升廻可有之候。將又櫓升一組宛御藏々に有之筈に候間、受取被相用、御用相濟候者共前之御詰米奉行江被相渡、御詰米奉行手前に而御藏之内江入置可申事。

一、御米積渡之節、元船江積入以前より各乘入、積入方始終見屆、全積入候上繩張いたし、

卷封付、各等被致封印、封數狀に可被書記候。於大坂兵庫浦印鑑に引合等に候事。
一、海上往來爲縮方、日記帳面に大坂出帆之時日等相記、船頭江相渡、津々浦々出入之節時日等相記、浦々役人印形を取致持參筈に候條、下着之砌右帳面被相改、出船所江下着之時日等書記可被相渡候事。
一、出船所出帆之節、別紙草案之通り日記帳江相認、船頭江可被相渡候事。
一、船極印相渡候條、是迄之通每船に爲打可被申候。將又大坂において極印は、駒之頭・帆桁・檣・揖四ヶ所江打、其外諸道具之儀は、下着之上積所において各等道具附を以相改、若船不宜歟、道具不足いたし候はゞ、御米積渡被申間敷事。
一、御米積渡之節、元船まで積入雜用之儀は、是迄之通り可被相心得候。出船所之者共船手江對、私曲不埒之族有之においては、各等へ可申斷旨申渡置候事。
附、船手諸懸り物大坂濱方において精誠減方申渡、猶更定之外懸物有之候者、彼地御屋敷江及斷候樣申渡候。依之御領國之儀は猶更に候間、出船所は勿論、津々浦々において諸懸物相減候得ば、以來運賃米も減方有之に付、諸懸りもの相減候樣御郡奉行等へ申渡置候條、猶更不時なる懸物等も有之候はゞ可被遂吟味候事。
右之外都而前々之通り可被相心得候。御縮方等行屆候得者、以來之處行直、御米直段幷船手

も相進候間、少も船手難儀之筋無之樣綿密に被遂詮議、米性等之儀も代官手前嚴重に可被致吟味候。

右之通可被得其意候、以上。

丙子二月　　　　　　　　御算用場

出船御奉行中

〔能州郡方舊記〕

大坂爲御登米出船之節、船頭請縮證文寫。

證文之事

一、御米千俵に付五俵充、鬮筒を以私共に爲御振、右俵數取出、斤量を以俵別貫目御改、五俵平均之目形御極、升廻𣜿升を以右石數爲御計、平均之升廻御極、升目・貫目共御送狀に記、運賃米共不殘御渡被下候事。

但、一斗三升入之桶に御米を入、斗棒を懸、𣜿升之中へ御米を爲御移被成候事。

一、於大坂御藏入之節に者、枡弁之內四俵、鬮筒を爲御振御取出、右四俵へ御米を打交、𣜿升を以御斗立、其內一俵者御送狀之升目に御仕立、其貫目を斤量に而御極、俵別懸入に被仰付、右目形より輕俵之分者、込米を以相納可申事。

枡本のまゝ

但、御國に而者俵別御懸渡無御座、大坂にては惣俵掛入に就被仰付候に、惣而一俵二百目充之減目御用捨被成下候事。
一、船中にて自然俵仕替候歟、又者手段ヶ間敷儀者不及申、痛米腐俵濡濕等有之候はゞ、取替相納可申御事。
但、運賃米之内にて取替可申、若致不足候はゞ其日之御米相場之直段を以、中勘銀相納置、追而御切手に上納仕、中勘銀与引替可申候。尤御切手之儀者無遅滯指出可申。且又大坂御藏納相濟候迄者、諸事私共支配に御座候事。
一、御米積登申刻、萬一破船打米道具痛有之節者、其所之御役人へ相改請、浦手形取登り可申候。縱破船に相成候とも、生米有之候はゞ、借船を以大坂へ爲積登可申候。船痛迄之儀者加修理、又者道具痛候歟捨申分は、代り道具相調、御米積登可申候。諸事自分支配に不仕、其所之御役人相見之上致支配、其上にて浦手形可申請候。縱浦手形取登候共、所之庄屋・年寄之裁許計歟、又者不分明之浦手形取登り候はゞ、分算御立被成間敷、屆御米相辨じ可申候。幷船當り合道具痛、或は破船乘□等有之候得者、相手船に乘移り爲逃不申、手寄之湊江入津仕、其所之御役人御改を受、浦手形可申請。縱浦手形取登り候共、相手船於無之に者、分算御立被成間敷、是又屆御米相辨、急度上納可仕候事。

一、沖合に而打米等いたし、手寄之湊へ乘納改を受候刻、船中に而殘米相改候。船者勿論、船痛も有之荷物陸へ取揚相改候。其歩一者少しも出し申間敷候。船之內より荷物取揚候はゞ、畢竟荷役等申物に御座候得者、其趣相心得、浦御證文取登り可申候。若歩一米相拂參り候はゞ、分算御指除可被成候御事。

一、御米積登り兵庫着船次第、兼而御極置之問屋四軒之內へ卽刻相斷、渡海取可申候。若直乘仕、萬一破船打米道具痛出來仕候共、私共不屆に候條、御米相辨可申候間、分算御指出被成間敷候。且亦船道具附、於大坂に帳面指上候通少も相違無御座候。自然道具痛等有之、檣・楫・桁之木銘相違候はゞ、縱御極印御座候とも、分算御指除可被成候。幷綱切殘有之、切口封印御座候とも、寸尺浦手形に記無之候はゞ、是又分算御指除可被成候御事。

一、佐渡・隱岐國に而破船打米等仕、渡海之日和難計候共、必注進可仕候。若水主之內難遣候はゞ、所之者を相雇、一々委細樣子書付可申上候。且又加州・能州・越中之內者勿論、隣國に候共、手寄近き御積所へ御詰御手代中へも、早速案內可仕候御事。

一、道具痛之儀者格別、破船等出來、何國にても御裁許受候節者、國主之御名、幷に支配に御出被成候御家來之御名も、知行扶持格式之儀者勿論、大庄屋扶持人帶刀之譯、扨又其所之道法何程隔り、何与申所之居住、城下・町方・在方之樣子委敷承糺、書付取爲登可申御事。

一、道具痛輕き者格別、破船打米等節者、御裁許船主方へも早速案内可仕候。此返事無之とも、濡米等之儀者、延引に相成候得ば御米積可申候間、其前之御支配を受、掛揚次第賣拂可申候。右浦手形申受候共、其所之者と馴合、御米又者船滓等下直に賣拂候上に而、增銀出船滓受取申樣成不埒之仕方仕間敷候。萬一左樣之儀有之候段後日相知候はゞ、屆御米相辨上納可仕候。勿論道具いたみ分算に御立被成間敷候。

一、船當り合難船御座候節者、双方打込配當分算に御座候事。

但、難船之模樣、浦所御改方御取噯により可申候。

一、御積入之刻御米指取申儀自然有之候はゞ、空船に而御指戻し被成候段奉畏候。右樣成儀に仕候はゞ、皆積入仕候共、御米不殘船より取揚可申候。尤日雇手船其外に、何に不寄賃錢等私共より指出可申候事。

右御ヶ條之外、於大坂に問屋中より御請負申上候帳面之通、一々承知違背仕間敷、自然不心得之者有之候而、不寄何に不屆之仕方御座候はゞ、分算之儀者不及申に、如何樣とも可被仰付候。其節一言之御斷申上間敷候。重々被入御念に候に付、於積所に連印上之申所如件。

何州何浦船頭

年號 月 日　　何屋 何右衛門

何州何浦船頭
何　屋　何右衞門

能州何方浦詰
大坂何屋御手代誰殿

右之通船縮證文、前々大坂表船借所に取立、御藏本三家へ帳面にいたし指出候所、文化十三年以來改而右船借所与、御國元出船御米積所与、兩方に取立候事。

二月。能登所口に於ける煙草買入主附の商人を廢せんことを求む。

〔諸書物留〕

越中・能州葉たばこ口錢之儀、先年者御取立無御座候所、延享元年より礪波郡福岡町庄右衞門・金澤町割出屋次兵衞主付に而、一斤に三厘五毛宛口錢取立方被仰付、右之內二厘上納、一厘五毛取立人ゟ被下候由承及申候。たばこ之儀は三階村覺右衞門組・武部村四郎太夫組畑勝村々に作付、凡一ヶ年出來高五六萬斤程之分賣拂、代銀を以米買請御收納引足に仕候。然所所口町等に、右福岡町庄右衞門等下附之者御座候而、年每たばこ干立時分村々相廻、斤數人別相しらべ置、追々賣に出候得ば、買人方より前段之通口錢取立申儀に御座候。尤是迄百姓より口錢相立申趣に而は無御座候得共、賣捌方百姓心任に難成、自然与手狹に相成、口錢之

儀買人より取立申儀には候得共、右口錢を相含買請候故直段に相障申儀。勿論村方はたばこ買人向不申に付、所口町等ゟ百姓持運賣立候得者、品々造用多相懸り候。元來能州たばこ之儀は、出來立不宜、一斤に付一分四・五厘位より三分五・六厘程ならで賣不申候に付、造用負に相成、難儀迷惑仕候。前々は越中・能州曁金澤町商人村方ゟ罷越、たばこ買候に付、造用等無御座、直段も當時よりは餘程宜御座候所、口錢取立方被仰渡候而より、敢而外賣を禁候与申に而は無御座候得共、商方泥申躰に而、村方ゟ買請に罷越候商人無御座候に付、不及是非、先づ向寄所口町等ゟ持運賣付候故、造用多相懸直段も次第に引下げ申に付、懸合中米買入相後れ、御收納僉議方に指支候間、福岡町庄右衛門・割出屋次兵衛主附之儀御指止被下、以前之通何れゟ成共百姓勝手次第賣捌方被仰付可被下候。左候はゞ一斤に付二厘宛、百姓手前より指上度段相願候に付、私共段々僉議仕候所無據願之趣、右之通御聞屆被下候得ば、百姓役銀指上候而も賣捌方造用懸り不申、往々直段も引立可申儀に御座候間、願之通被仰付可被下候。然上は村々出來たばこ員數、村役人手前に而嚴密に爲致役銀、毎歳散役裁許ゟ取立上納可仕候。右散小物成御しらべ被仰渡之趣に付、口郡之儀品々僉議仕、文化十年春書上候內、前段たばこ口錢之儀百姓難儀迷惑仕申儀に付、其後拔出度々奉願候得共、未御僉議無御座、重而書付を以奉願候間、何分願之通被仰付可被下候、以上。

文化十三年二月

田井村　次　郎　吉
武部村　四　郎　太　夫
堀松村　平　　藏
本江村　六郎右衛門

能州御郡御奉行所
御改作御奉行所

二月。煙草の耕作を本田に於いてし、又は增歩せざるべきことを告ぐ。

〔文化年中御用留拔書〕

近年諸郡共たばこ作增候內、能美・石川兩郡之分別而たばこ次第に作增、中には本田にたばこ作付候分有之躰承及候に付、文化八年にも前書之通嚴重申渡置候處、今以相守不申百姓ども有之躰、沙汰之限りに候。於組々綿密に相しらべ、本田之儀は不及申、たばこ作增不致樣爲相心得可申候。如此每度申渡候上、以來不相改族有之においては、夫々承糺急度咎可申付候。此段嚴重申渡、請書取立可指出候、以上。

子　二　月　　　　改　作　奉　行

諸郡御扶持人・十村中

三月十三日。前田齊廣就封の暇を受く。

〔江戸御留守諸事覺書〕

三月十三日

一、九時過御本丸上使土井大炊頭殿、西丸上使松平能登守殿、御臺様御使御廣式番之頭戸川筑前守殿御越之旨、御小人目付來申聞候事。

一、九半時前土井大炊頭殿御越候之旨付人來候に付、安房守・織江・內記御式臺迄罷出、追付御前御出に付、大御門外內より右之方雨落外迄罷出。但、御門之方へ安房守罷出、御退出之節も同斷。追付御出。上使御下乘より御前御先立之所迄聞番御先立仕、御前大御門外迄御出向御誘引、御大書院迄御通、上意之趣御拜聽、御例之通御拜領物御頂戴相濟、上使御座被改候上、御挨拶被仰述、御勝手迄被爲入、御熨斗等出之。重而御前御出、御挨拶被遊、御小書院迄御誘引、御料理之御挨拶有之、御勝手之方迄御着座。御たばこ盆引之、追付御料理二汁六菜、塗木具出之。御前御相伴。御指身臺出候而御退、向詰御持參。御酒之上御肴備後守様御持參。御前へは御給仕上之。御吸物出、御土器出、御盃事有之。御返盃段々御饗應、御濃茶御持參、相濟。上使御座付被改候上、御前御出、御請被仰述、追付御退出。御送最前之通に候事。

一、右相濟、八半時前西丸上使松平能登守殿御出、御作法御本丸上使之通。右相濟、御臺様

よりの御使戸川筑前守殿御出、安房守等三人御門外ゟ罷出、敷付迄聞番御先立、御前御玄關鏡板中程迄御出向、御誘引に而御大書院上之間ゟ御通。御口上御申述、御拜受物御頂戴之上御挨拶被遊、御勝手へ被爲入。御熨斗出之、御菓子等出、御相伴鈴木九太夫殿。御酒之上御肴御持參、御相伴へは御給事引之。御濃茶等相濟、御請被仰述、追付御退出に付、御送り等最前之通候事。

一、御取持衆長田六左衞門殿・小野小十郎殿・鈴木九太夫殿・奥山主税殿・牧村仁十郎殿・齋藤長八郎殿御越、坊主衆も參上候事。

御拜領物

公方様より　縮緬三十卷　白銀百枚

大納言様より　紗綾二十卷

御臺様より　縮緬五卷

一、上使相濟、追付之御供揃に而御老中方松平能登守御勤可被遊旨被仰出候段、御番頭古屋甚兵衞申聞候事。

一、上使相濟候上、織江儀御前ゟ被爲召候御様子之旨今井左太夫申聞、七時前上使相濟候に付御居間書院ゟ相伺候處、追付安房守誘引、御前ゟ被召出、遠路無異到着一段之儀被思召候

段御意有之、安房守御取合。御國表御靜謐年寄中等無事罷在候哉之旨御意有之候に付御請申上、退去。

但、今日之服熨斗目・上下着用也。

一、右相濟、於席安房守等三人、今日以上使御國江之御暇被仰出、御例之通御拜領物被遊、御首尾能相濟恐悅之至奉存候旨、有澤才右衛門を以申上候處、以同人御意有之事。

一、七時過御出、御老中方等御勤、六時前御歸殿之事。

三月十五日。前田齊廣登營して就封の辭見す。

〔江戸御留守諸事覺書〕

三月十五日

一、今日御暇之御禮被仰上候に付、六半時頃御出御登城。於御黑書院御禮御首尾能被仰上、被爲蒙御懇之上意、御馬・御鷹御拜領。西丸へも御登城。御下り御老中・若年寄中御勤、九半時過御歸殿。

一、安房守・織江・內記一所に御前に被爲召候段左太夫申聞。則罷出候處、今般以上使御國許江之御暇被蒙仰、今日御登城御禮御首尾能被仰上、殊御懇之上意、御馬・御鷹御拜領、安房守・內記御目見被仰付、重疊難有被思召候。右之趣頭分以上可申聞旨御意に付、奉畏旨等安

房守御請被申上、退去。

一、御拜領之御馬、酒井若狹守殿より爲牽御指越。御使者江爲挨拶織江罷出。重而御式臺敷付內より右之方へ織江罷出、左之方江內記罷出、御白洲江御馬牽出。內記より會釋之上割場奉行請取牽入、御作法書之通夫々相濟、御答織江罷出申述。御使者退出之節鏡板迄送候事。

但、御作法書には安房守罷出候筈之處、指懸御用有之難罷出旨に付、其段內記より申上、右之通候事。

御　馬

羽州久保田立　能代鹿毛　五歲五寸

越　後　立　黑木白鹿毛　四歲四寸七步

指添之御馬具例之通、留略す。

一、御拜領之御鷹、小笠原近江守殿より暮六時頃据越付人來候付、內記儀御式臺御緣頰御杉戶迄出迎、夫より先立、御料理之間江着座。御鷹相渡候段聞番申述、御鷹受取、其段上坂平九郞を以內記申上、追付御居間書院江廻候樣被仰出。內記誘引、御鷹二据共御鷹匠据罷出。無程御前御出、御頂戴、內記御取合申上被爲入。御鷹二据共御鷹部屋へ遣候樣申渡。

但、先例御作法書之通夫々相濟、委細御鷹方帳に有之。

大沼御大鷹　　据人　薄井覺左衛門
松原畤御大鷹　　同　小塚久平

三月十六日。前田齊廣江戸を發し歸國の途に就く。

〔江戸御留守諸事覺書〕

三月十六日

一、五半時過御旅裝束にて御出。御居間書院において備後守樣・啓太郎樣御對顏相濟、源左衛門誘引に而法梁院樣御使者大村武次郎被召、御直答相濟、安房守・内記被召、今日御發駕之所天氣相も靜にと御意有之、御請申上。兩人共無事に御供いたし候樣御意有之、應而御請申上、退去。其次織江被召、右同樣御意有之、御請申上、御留守中萬端無油斷可相心得候、無事罷在候樣等御意有之、應而御請申上、退去。

一、右相濟御表江御出に付、御居間書院四之間より直に新御廊下中程江織江罷出居、御先立仕、於御小書院溜前田大和守殿等江御逢。夫より新御廊下横に而前田鶴心齋老江御逢。夫より御料理之間御勝手之方御緣頰屛風圍之内に右筆了意御通懸御目見、奏者組頭等之内。同續屛風圍之内に本多三郎右衛門、同續屛風圍之内塩川鯉一郎等並居、御同間上之方に坊主衆並居御目見、御意有之、聞番御取合申上。夫より御廊下屛風圍之内公儀御役者並居、同所下

之方に屛風圍に寶生大夫等御通懸御目見、何茂奏者組頭等之内相勤。夫より御勝手座敷へ御出、御客衆へ御逢被遊。夫より御居間御緣頬御通筋西之方に親安・意安等御目見、奏者組頭等之内、御會釋有之。御一門樣方御附使者、是又同御緣頬西之方に何茂列居披露。御杉戸之外に浦井一庵御通懸御目見、奏者組頭等之内。御式臺板之間御勝手之方に御扶持被下候後藤・本阿彌嚴本・狩野家・住吉内記・吉岡因幡等罷出居、備後守樣・啓太郎樣・大和守殿御出入衆敷付内より右之方へ御出、夫々御挨拶有之。織江御左之方敷付三枚目ゟ罷出候事。安房守・内記儀は敷付左之方に罷出居、刀は二枚開之口より坊主に爲持、家來一人・草履取一人廻し置、家來へ刀爲相渡。

一、御機嫌能巳之上刻御發駕之事。

三月廿二日。博奕及び賭の諸勝負を禁ずる幕令を傳達す。

〔文化年中御用留抜書〕

博奕・賭之諸勝負之儀に付、從公儀相渡候御書立之寫別紙一結三通、甲斐守殿等より就御渡、相越之候條得其意、面々組下夫々不相洩樣可觸出候。尤前々より嚴重申渡置候處、近年增長致候者有之、依而以來右樣之參會等致者有之候はゞ、召捕置可及斷候、以上。

子三月廿二日　　　進士求馬

本文は幕令なり

中村逸角

能州四郡十村中

博奕・賭之諸勝負、前以御法度之趣度々被仰出儀有之、武家屋敷其外にも常々嚴可申付者勿論に候所、近來一統相弛候由相聞候。既に先達而小普請三枝淸之助屋敷內に而、他所之者共入込博奕致候間、淸之助罷出相咎候得者、手向ひ致候に付討留候者も有之、逃去候者共追々召捕、吟味之上御仕置申付候。依之寬政四子年相達候通、彌厚相心得、召仕共無油斷嚴重に申付、不相用においては、他所之者入交り候共無用捨召捕置、奉行所又は火付盜賊改に可相渡候。時宜によつては討捨に致候とも不苦候。

右之通可被相觸候。

二　月

三月廿七日。前田齊廣金澤城に着す。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

三月十六日江戶表御發駕、同廿七日金澤表ゑ御歸城なり。御發駕・上使等御先格之通なり。

三月。諸郡の川除堤防に漆を植うることを命ず。

〔郡方御觸〕

諸郡川除土居之内、漆植付可育場所、當年より領付村々に而、成限り漆爲植可申候。是迄植物有之場所に而、植込候儀迷惑之筋に可存申儀茂有之候得共、漆育候得者、畢竟村々ためにも相成事に候條、一統爲植付、無麁略樣兼而可申渡置候。則郡々主附人別別紙之通申渡候條、入念申談爲植可申候、以上。

子三月　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

四月朔日。金澤城東ノ丸の太鼓塀を取拂ひたるを以て善後の處置を議す。

〔御用番方幷御城方御用之覺〕

四月朔日

一、東之丸蓮池之方太鼓塀取拂間數相改候儀、右取拂之跡二重塀にも可被仰付哉之僉議、いまだ不致治定候に付、治定之上爲取拂可申旨去年御發駕前申上置、御留守中右僉議大方治定に付、御歸國之上相伺可申与奉存居候處、御作事奉行より雪も消候間取拂はせ可申哉之旨申聞、共節成程只今に而は雪も消候間爲取候而も成可申旨申合居候處、與力共承り、爲取拂候樣にと御作事奉行へ申談候由に而、前月々末二月之事也取拂申候。右は與力共不念には候へども、全く私共申付方不行届故之事に御座候故、强而咎は不仕候。右不達御聽取拂候儀故申上置候

趣、昨廿九日中務へ申含、且右に付而は東之丸より蓮池之御庭内見入れ申候間、右御屋敷へ御出之節は御近習頭より及案内、蓮池高之方ゟは御番人廻り不申樣に申付置可然候哉。又は其時々園にても爲仕置候はでは成間敷候哉。各僉議有之樣にと申達置候處、今日退出之上左之通中務より申越候。

昨日被仰上候、東之御丸蓮池之方太皷塀取拂之趣申上置候。右に付私へ迄被仰聞候。右御番人蓮池御庭内見越候付、垣に而も致候樣可被仰渡哉之旨、則申上候處、垣爲致候には及不申候。御出之時々御近習頭より直に御番人へ申遣候へば宜旨、御意に御座候間、御出之時々直に御近習頭より申遣候趣、兼而御番人へ被仰渡置候樣仕度旨、關屋中務殿被申聞候。右之趣御直々可申上筈に御座候處、御退出に付私を以申上候旨被申聞候付、此段奉申上候、以上。

四月朔日　小原金太夫

助右衛門樣

御近習衆中

助右衛門は老臣奧村氏

四月六日。前田齊廣の金澤に着したる報江戸に達す。

〔江戸御留守諸事覺書〕

四月六日

一、中將樣益御機嫌能前月廿七日未之下刻御着城被遊候段、同日發足中飛脚を以御用番甲斐守より申來。如例法梁院樣・御前樣江頭々を以申上。右に付中將樣初勝千代樣等御祝詞、今日之日附に而重便金澤表江申上。

四月十六日。德川家齊右大臣に陞りしを以て使を本鄉邸に遣はして物を賜ふ。

〔江戸御留守諸事覺書〕

四月十六日

一、今朝上使有之に付、御殿一統七時揃、織江儀のし目・布上下着用、六時前出席之事。

一、御名代備後守樣六時前御出。前田大和守殿も御出、其外御取持・御先手衆等組頭より申遣、堀三郎左衞門殿・須田豐前守殿・長田六左衞門殿・泥野六十郎殿御越、御城坊主衆も聞番より申遣參上之事。

一、上使御奏者番水野和泉守殿御出宅之付人六半時前罷歸候旨取次御大小將申聞。無程昌平橋之付人罷歸候旨申聞候に付、如例織江儀大御門外雨落江罷出、頭分御白洲江罷出。御名代備後守樣御玄關敷付へ御出向、御先立被成、御大書院へ御通り、上意之趣御拜聽、御拜領物

備後守は大聖寺侯前田利之

徳川家齊の右大臣陞任は本月二日なり

右大將は徳川家慶

も御頂戴。相濟、御小書院ゟ備後守樣御誘引被成、御料理は御斷に付御菓子出之、前田大和守殿御相伴被成。相濟之上、御轉任被爲濟候に付拜領物仕難有仕合奉存候、上意之趣國許加賀守ゟ可申聞旨備後守樣被仰述。相濟、五時前御退出。備後守樣御先立、最前之通御送被成、織江儀最前之通御門外へ罷出、頭分御白洲ゟ罷出候事。

一、水野和泉守殿被仰述候趣幷御請被仰上候趣、備後守樣御大書院溜に而織江へ被仰聞候事。

御拜領物　御時服二十　十宛二折居

上意之趣　御轉任被爲濟候付拜領物被仰付。

御轉任被爲濟候付拜領物仕難有仕合奉存候、上意之趣國許加賀守へ可申聞之旨、備後守當座之御請相濟。

一、右相濟、從右大將樣上使御奏者番松平壹岐守殿御出宅之付人五時罷歸候旨取次御大小將申聞、無程水戸橋之付人罷歸候旨申聞候付、織江儀大御門外雨落へ罷出、頭分御白洲ゟ罷出、御名代備後守樣御玄關敷付へ御出向、御先立被成、御作法最前上使之節之通。夫々相濟、御退出之節御送最前之通之事。

一、松平壹岐守殿被仰述候趣幷御請被仰上候趣、備後守樣御大書院溜に而織江ゟ被仰述。

御拜領物　縮緬十卷　一折居

上意之趣　御兼任被爲濟候付拜領物被仰付。

御兼任相濟候付拜領物仕難有仕合奉存候、上意之趣國許加賀守へ可申聞旨當座之御請相濟。

一、御拜領物席ゟ可爲指出候處、御時服十宛二折有之、席へ難指出候付、右大將樣より御拜領之縮緬も一所に爲之間に飾置、織江見分之上御用人相招渡之、前々之通心得候樣申渡候事。

一、右上使之御樣子、今日足輕早飛脚を以御國許ゟ申遣。中將樣ゟ上使を以御拜領物之御祝詞は不申上。

四月十八日。諸士の疾病によりその子が勤番を代理する場合に於ける出銀上納に就いて令す。

〔御觸拔書〕

別紙寫之通、定番頭ゟ申渡候付、爲御承知進之候條、御組ゟも御觸可被成候、以上。

四月十八日　　　　　　　　横山山城

定番頭ゟ

御家中出銀之儀、御定之通に候處、御馬廻組等之內、長病に相成御番不得相勤者、依願せが

れ御番相勤候得者、増出銀不差出、並打と相心得候人々茂有之、區々相聞え候。七十歳に滿不申內は、せがれ御番相勤候共、増出銀可指出儀に候條、以來共通可相心得候。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配江も相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

子四月

四月十八日。金澤城鼠多門を自今玉泉院樣丸御門と唱ふることゝす。

〔御城方御親翰御加筆物寫〕

一、鼠多門唱方之儀、舊記共しらべさせ候處、玉泉院樣丸御門又は鼠多門の御門抔与相調有之候所も有之候間、以來玉泉院樣丸御門与相唱可然与遂僉議、其段文化十三丙子四月十八日中務を以申上る。

但、玉泉院樣丸御門外橋懸、直伺紙面上る節申上る。

四月晦日。難破船の乘組に溺死者等ありたる時は十村等先づ郡奉行に屆出で指揮を受くべきを命ず。

是月は大盡なり

〔筒井舊記〕

是迄自・他國商船於沖合等致破船、乗組之者浦々ゟ致漂着候節、於裁許々々手前取捌、浦手形相渡、追而役所ゟ及屆候。中に者、破船之砌乗組不殘致溺死、死骸行衛不相知、或者共當座二・三日茂過、右死骸流寄候而茂役所ゟ不及屆、前文乗組異變無之節同樣に相心得取捌來候由相聞え、甚紛敷趣に而、御縮方にも指障り候條、以來者右躰破船等之節、乗組人之內溺死、又者何与歟異變有之節者、飛脚を以其段斷出、萬端取捌方可受指圖候。如此申渡候後不及屆、浦仕廻等いたし遣、追而役所ゟ及屆候樣之儀在之節者、急度可遂穿鑿、品により咎之沙汰にも可及候條、此後聊茂猥に取捌致間敷候。右之趣詮議之上、今般改而申渡候條嚴重可相心得候、以上。

子四月晦日　　進士求馬

中村逸角

能州四郡十村中

五月二日。金澤城石川・河北兩門の番所の與力が下番の足輕を使用することに關して議す。

〔御用番方幷御城方御用之覺〕

別紙は傳はらず

五月二日

一、河北・石川兩御門御番之與力より、同御門下番足輕に御用之使爲仕候儀に付、僉議之趣以別紙奉達御聽候通に御座候。元來與力番所には、晝夜に不依申談、下人一人充差置候振之樣に相聞申候處、當時は夜中迄差置、日之內は其儀無之躰に御座候。既に元祿十二年金谷御門與力勤番申渡候節、夜中發病其外急成儀有之、二之御丸當番之頭へ斷申時分、自分之下人は罷在候へども、松坂通り內より及案內候儀如何敷御座候故、下番之足輕を以及案內候樣申渡候趣、別紙書拔之通に御座候。右之節夜中之儀而已僉議仕候所を以相考候へば、日之內は自分下人を以松坂通り及案內候に而可有御座と奉存候。左候へば今般も先右下人差置候有無穿鑿仕、先規之通下人に使申付候樣に可申渡儀に御座候處、舊臘右等之趣詮議中、與力共靑山將監宅へ人多に相詰候儀等別紙に申上候通之族に御座候へば、今般足輕に使不爲仕儀に申渡候はゞ、與力共又々彼是申聞、承知仕間敷哉と奉存候。其上近年足輕共にも風儀不宜、僣上に相成候躰に御座候へば、是等之爲にも惡敷可有御座、且別紙にも相調候通、安永年中以來足輕共使仕候樣にと申渡置候儀も御座候故、旁今般は先別紙之趣に可申渡と僉議仕候。併右之通申渡候はゞ、割場奉行よりは彼是申聞候儀も可有御座候へども、其段は申諭樣も可有御座と奉存候。左候へば猶又先例等之樣子も相しらべ、彌下人差置、使等も申付候樣にと、

追而申渡候儀も可有御座哉と奉存候。

右等之子細、御城方與力共へ申聞候而は、同組之者共に御座候へば不斗相洩候儀も可有御座哉と奉存候付、內々申合候趣以別紙奉達御聽候、以上。

五月二日

奥村助右衛門

前田伊勢守

五月十日。大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤城に登る。

〔橫山氏日記〕

五月十日　天氣吉

一、備後守樣前月二十八日江戶表御發駕、一昨八日今石動御泊に而、昨日夕七時過此表御着、今日御登城之筈に付、各上下着用五時過より追々出席。

一、備後守樣四半時過尾坂口ゟ御出之附人來り候に付、各御式臺ゟ罷出、年寄中御右、御家老中・若年寄は御左、裏御式臺之方後ろにいたし罷出有之候處、追付御出、左右御會釋有之、階上ゟ被爲入候上、御大小將罷出有之、御刀持之御奏者番小幡式部御先立、芙蓉之間ゟ御通、御刀御同間御床置之。

一、芙蓉之間に御着座、御たばこ盆・御茶出。御奏者番小幡式部罷出、御家老中之內ゟ御逢

可被成旨被仰候旨申聞候に付、權佐罷出候處、御口上左之通り被仰述。右相濟、年寄中一切、御家老・若年寄一切罷出候處、段々御意有之。應じ御請におよび、退去。

向著之砌益御勇健被成御座、目出度御儀思召候。誠に今度長途益御勇健御着城被成、恐悅思召候。私儀在所江之御暇被仰出、前月廿八日江戸表發足、昨日當方到着仕候付、爲御伺御容躰御登城被成候。此段取繕可申上旨。

一、御奥書院御緣頰江有澤才右衞門出向罷在候付、右御口上申上、同所に扣罷在候處、追付御居間書院江御通被成候樣可申上旨、以同人被仰出候付、其段權佐申上退き候處江、御奏者番小幡式部罷出、致御先立、御刀持御表小將大野織人、御居間書院江御通被成、御たばこ盆・御茶出、夫より御居間江被爲入、御對顏被遊候事。

一、御居間江御通之上、九時頃御物見所江被爲入、追付御能初候事。

一、夫々御饗應相濟御歸に付、年寄中等最前之通御式臺江罷出有之、七半時過御退出被成候事。

是日前田齊廣高砂を舞へり

五月十二日。前田齊廣、石川・河北兩門の下番に關し再議せしむ。

〔御用番方并御城番方御用之覺〕

五月十二日

一、御居間書院へ御出之旨申聞候付、例之通二切罷出。畢而助右衛門被召候に付、罷出候處、先達而上置候、御城方に而伺候石川御門與力共より足輕に使申付候儀に付紙面兩通添物共被返下、委細御披見被遂候。僉議之趣十分うきやかには無之事に候間、猶又今一往僉議可仕旨御意に付而、奉畏候。うきやかに不被思召所は如何樣成思召に御座候哉と伺候へば、既に與力共家來差置候躰にも相見え候由。割場奉行申候所も全く非理之樣には不被聞召、三之御丸御番所へ紙面之使は不爲仕候へども、口上之使は爲仕候事之樣に相見え候。御城外之使は難爲仕と申候も尤之樣に被聞召候間、最前之通家來差置候儀等僉議仕可然候。當り之通に罷成候へば彼是は有之間敷儀。相伺候通申渡候はゞ割場奉行よりは彼是可申聞に付而、右之通有之可然樣に被思召候。今一往是等之處僉議可仕旨御意に付而、奉畏候。猶又示談可仕にて可有御座旨申上。且先達而より僉議之趣意、并割場奉行に而は三之御丸口上之使は爲仕候段分明に申聞候儀は無之樣に奉存旨等申上、退去。

五月十五日。城内鶴之丸の釣鐘墜落す。

〔御用番方并御城方御用之覺〕

五月十六日

一、夜前四半時過、二之御丸當番組頭河內山久太夫より以紙面、鶴之丸釣鐘指物折、釣鐘落

候間、如何可相心得哉之旨、三之御丸御番人石川與右衛門・多田主計・蜂谷孫進より及屆候付、御横目申談、御横目足輕を以爲見分候之處、釣木折れ鐘落候へ共、鐘は損じ不申躰に見え候段申聞候。指圖次第に可申談旨被申越に付、令承知候。是より可及左右旨使之者に口上に而申遣、御城方與力在宿番堀馬左衛門及山本平五郎二之御丸へ差遣、右鐘落候付、若火事之節時鐘迄早鐘につかせ可被申候。尤其趣御番人へも申渡置候段申達、三之御丸御番人へも其趣申渡、且鐘をも爲致見分候處、釣木鐘をつけ有之候所より折れ落居候而、外替る品も無之旨申聞。

一、左之紙面以吉左衛門上之。

三之御丸釣鐘釣木朽折、右鐘落候間如何相心得可申哉之旨、三之御丸御番人より當番組頭江相屆候付、御横目申談、御横目足輕を以爲致見分候處、釣木朽折鐘落候へども、鐘は損不申躰に相見候段申聞候間、指圖次第可申談旨、河內山久太夫夜前御達申候。若御近火之節相達御聽、被仰出次第三之御丸早がねつかせ、右早がねにつかせ候はゞ、時鐘をも早がねにつかせ候樣に申渡置候得共、件之族に候條、尤時鐘許つかせ可申旨申渡候。且右鐘早速釣候樣御作事奉行へ申渡候に付、此段奉申上候、以上。

五月十六日　　　　　　　　奥村助右衛門

五月廿五日。前田齊廣高齢者を殿中に召して賞賜す。

〔内外國事記〕

一、文化十三年五月廿五日、左之者共御居間先ゟ罷出、金二百疋充・御菓子被下、罷歸時分杖を被下候旨。

最前相應之身元之者、當時野町借家暮　百二歳　中村屋　幸　助

堀川邊に罷在稼人　九十九歳　宮腰屋　忠右衛門

六月朔日。前田齊廣卒都婆小町の能を演ず。

〔横山氏日記〕

六月朔日　天氣吉

一、今日御能之内卒都婆小町御前被遊候付、拜見仕度旨左京被相願候。主附内記、若年寄式部・掃部儀茂同樣に拜見仕度趣、左京より人見吉左衛門を以被申上候處、拜見可被仰付旨被仰出候段、内記ゟ演述に付、式部・掃部ゟ及演述、御禮之趣内記引請左京ゟ申述候事。

一、九半時前卒都婆小町御始りに付、左京一集に罷出拜見仕、八半時前相濟候付、表方於席に、左京一列何茂與一郎を以御禮申上、追付致退出候事。

六月八日。防火用具として龍吐水を下附すべきことを告ぐ。

〔國事雜抄〕

火事之節、大家に而は火勢高く盛に燃付候而は、町夫・水持共防方不行屆儀に付、此度町々水旗一本・龍吐水一挺充相渡候條、町内において車桶一つ充早速拵置、火事所へ相添可出之候。右龍吐水平日手習不置而は、火事之砌取扱行屆間敷候間、町々に手懸候者爲主付、折々取扱方試置可申候。勿論漫に慰ものに致間敷候。若損等出來候はゞ、以來町内より修理等可申付候。右之趣組合頭共より得与申談置、尙更出情相勤候樣可申談事。

右之通可被申渡候、以上。

六月八日

山崎小右衞門

前田清八

河地右冲殿

六月十五日。前田齊廣、德川家齊等より贈られたる物を老臣等に頒つ。

〔御用日記〕

六月十五日

一、四半時桐之御間江御家老始罷出候樣鉄三郎申來、人見与申談何茂罷越候處、御廣ぶた置

時服は德川家慶よりの拜領品

縮緬一卷宛、一統着座之上戸田與一郎申述。今般公方樣御轉任に付、御拜領之品御取分被下候旨也。雖有段各御請申上、退去之後坊主席ゟ持來り拜納。

甲斐・伊勢・安房御のしめしぢら、山城黑あや、主稅りんず御小袖、助右衞門りんずあさぎ御小袖、又兵衞・左京羽二重黑小袖、土佐・左近羽二重小袖白、不殘あわせ也。

六月十六日。是日以降石動山に於いて泰澄大師遠忌法會を營む。

〔萬聞書〕

一、泰澄大師千五十年忌法事、石動山上於講堂、文化十三年六月十六日より十八日迄執行有之。

六月廿八日。郡方の走人居方の文例を定む。

〔御郡典〕

惣而奧・口四郡之走人斷書付文段、今に行衞相知れ不申、若欠落仕候哉与存及斷候与、是迄調來候得ども、御郡之內百姓共子弟等致奉公居候內、主人之品取逃いたし身退候者、又は致賊逃去候者は、今以行衞相知不申、欠落仕候哉与存候に付及斷に候与調可申事に候。一通身退行衞不相知者は、走人に相成候に付及斷候与爲調可申事に候。夫々不相洩樣心得方可申渡候、以上。

子六月廿八日　　　　　　　　　　　　進士求馬

能州四郡十村中

六月廿八日。七夕を祭る爲過大の裝飾を附したる枝竹を用ふるを禁ず。

〔國事雜抄〕

町並に居住いたし、手跡指南仕る者抔、七夕に枝竹短册等を付祭候儀、前々有之事に候へ共、近年甚増長、種々飾を付、提灯を數多燈し、町々持廻り候躰に候。右者費而已にあらず、第一火之要心惡敷儀に候條、以後少々之儀は其分に候得共、大造成飾等いたし、町々持廻候儀は堅仕間敷候。自然並に越し飾等いたし候もの有之候はゞ見咎候樣、廻り方足輕共江も申渡置候間、此段肝煎・組合頭より、町並居住之者共江急度可申談置候事。

右之通可被申渡候、已上。

六月廿八日　　　　　　　　　　　　山崎小右衞門

前田清八

竹村三郎兵衞殿

七月七日。朝鮮信使來朝に對する本年分の高役金支出を命ず。

〔江戶御留守諸事覺書〕

本年十月二十九日の條參照

高役銀は諸士の知行に割當せらるゝもの

七月七日

會所奉行江

覺

一、千五百三十七兩三步永三十文四分二厘

此銀一匁九分九厘七毛

右朝鮮人來聘に付、今年分御上納之高役銀に候條、聞番斷次第可被相渡候事。

子七月

七月十一日。百姓等土藏を物置と稱する件に就いて議す。

〔諸書物留〕

百姓・頭振之內土藏所持居候者、土藏与申名目なる不成与申御定無之哉。前々何方共被盜物斷抔に、多分物置与斷出、右名目御定も在之哉否御聞被遊度旨、御改方より御尋に御座候。乍御六ヶ敷御覺之程、重役へ爲御知被下候樣願上申候。

右申上度如斯に御座候、以上。

子七月十一日

番代　長右衛門

武部四郎太夫樣

右は御定書等にも不見當、元來御城中抔にくらを御土藏ニ唱候故、御上を恐れ百姓分抔は物置ニ唱書上來候抔之旨及返書申候。

七月十六日。前田利家夫人芳春院の二百回忌法會を金澤寶圓寺及び京都芳春院に執行す。

〔御觸拔書〕

芳春院様二百回御忌御法事、當七月十四日・十六日於京都御執行、此表に而も於寶圓寺、十六日一朝御茶湯有之候。仍之十四日より十六日迄、諸殺生可有遠慮候。普請・鳴物は不及遠慮候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配江茂相達候様被申聞、同役中可有傳達候事。

右之通可被得其意候、以上。

六月十一日　　　　　　　　前田主税

〔横山氏日記〕

七月十六日　朝之内曇、晝前より折々雨、夕方大雨。

一、今日寶圓寺において拜禮之節、服之儀昨日表方承合候處、半上下着用之旨演述有之候

處、今日示談之上長上下に而拜禮に相成候旨、重而演述有之候事。
一、今日於寶圓寺、芳春院樣二百回御忌御茶湯に付、御寺詰權佐儀、今朝六半時前服上下に而罷越、御茶湯無御滯相濟、八時過登城、無御滯相濟候段、以中村木工申上、追付退出之事。
一、今日御參詣御延引に付、御名代山城守被相勤候事。

〔諸事留牒〕

七月十五日

一、明日拜禮罷出候節半袴着用之事。
但、以執筆表方聞合候處右之通に候事。

七月十六日

一、今日拜禮之節長袴に相成候事。
但、寶曆之御法事之節之留、助右衛門儀に而被調候處長袴、依而右之通相極候事。

〔横山氏日記〕

七月廿二日　天氣吉

一、芳春院樣二百回御忌御法事、當十四日・十六日於京都芳春院御執行、御首尾能相濟候段、昨日表方江京都より申來候。依而今日各服上下に而右御祝詞申上筈之旨、昨夕月番より廻狀

有之候事。

〔諸事留牒〕

一、當七月芳春院様二百回御忌御法事於紫野芳春院御執行に付、獻上御香奠金百疋之事。

但、御香奠は傳附之事。

七月。犀川川除町の區分に就いて告ぐ。

〔國事雜抄〕

犀川上川除町 法念寺邊より下舟場邊迄　犀川中川除町 下舟場邊より大橋邊迄

犀川下川除町 大橋邊より寶久寺邊迄　犀川新川除町 寶久寺邊より大豆田口町端迄

右町名唱分之儀、寛政七年二月御用番へも御屆置相改候處、其御肝煎へ申渡方相洩居候付、猶更御普請奉行江承合候處、右役所に而者、其節承屆置、當時右之通相成居候段申聞候間、此段肝煎へ被申渡、人々裁許境より唱分候様可被申渡候事。

七　　月

七月。能登より輸出する苧綿の取締方を改む。

〔他國出苧綿縮方之趣書上申帳〕

口郡に而出來苧綿之儀、問屋幷小買株打込、十五匁宛役立仕法之趣取極、御達申上置候得共、

文化十一年十月廿七日の條參照

下々小前之者共不心服に付、仕法替之儀願上候處、越中之分は問屋株抔与申儀無之、他國出

紵荷一駄に付十五匁宛、旅人より御役銀取立致上納候間、右之振に遂詮議候樣御算用場より

被仰渡之趣御座候に付、私共重々詮議之上、口郡之儀茂問屋幷小買株指止、江州商人任勝手

宿を取、紵買集一駄に付十五匁宛御役銀、右旅人より取立上納仕候樣被仰付度段、去る戌年

奉願、則願之通御聞届に付、他國出苧紵縮方之趣左之通申渡置候。

一、江州商人村方江罷越止宿仕候節、裁許十村江斷書承届候事。

一、向寄より買集候紵荷相認候時分、其村肝煎罷出、若他國出御制禁之品認込不申哉与相

改、駄數帳面に記置候事。

一、右駄數を以、一駄に付十五匁宛御役銀、旅人より取立、毎歳十一月中散役裁許江取立上

納仕候事。

附、十二月に至り迄り荷物在之候得者、其節御役銀取立上納可仕候。

一、是迄は船積に而爲登候儀は無御座候得共、若船積に致候儀有之候はゞ、其段及斷候樣申

渡候事。

右羽咋・鹿嶋紵荷他國出御縮方之趣、今般被仰渡之趣を以、猶更加詮議書上申候、以上。

文化十三年七月　　　　　　　　　　　　　　武部村　四郎太夫

堀松村　平　藏
本江村　六郎右衛門

進士求馬殿
中村逸角殿

八月。米穀の乾燥を充分にする爲架掛にすべきことを命ず。

〔文化年中御用留抜書〕

諸郡共米拵之儀、度々申渡置候通、彌無麁略可申渡候。別而米立方之儀、一入行屆候樣可致勢子候。出來立宜敷候而も干無甲斐候得者、大坂御廻米等に相成候上、ふけ痛等多出來、御拂米買請候者ゟ御藏において相渡候節、過分至極之除米に相成、右除米之分追々建替相渡候付而は、御損失不少儀に候。尤干立宜米は右躰之痛も薄く、年々過分之御廻穀に付、除米之多少に寄莫大之御損益有之事に候。是等之趣末々迄爲致會得、重々干立念に爲入可申候。從來地干に仕來候村々は、架掛煩敷相心得候躰にも相聞候得共、既に近年諸郡之內役所より申渡候に付、架掛に爲致候處干揚能、暨地干与違、朝夕者始抹之分も薄く、辨利に付宜有之儀を會得いたし候躰に相聞候。將又所に寄、風請之樣子に而架掛に而者却而不宜場所も在之躰に候得共、右樣之品は必多可有之事とも不被存候。惣別架干には益多候條、實意を以遂詮義

可申候。數度申渡置候得共、尙又厚申諭、干方行届候様可申渡候事。

子八月　　　　　　　　　　　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

閏八月四日。犀川・淺野川の水暴溢す。

〔内外國事記〕

一、文化十三年閏八月四日朝より風立、あい・やませ次第に大風、大雨与相成、所々樹木根反りも有之、夕七時前より西風甚敷大雨。同日夜五時迄は格別之水に而茂無之に、同夜四時頃急に大水と相成、折節角力場材木・竹等流れ橋に懸り、夫江又上より小松等根付抔流れ來、橋杭片方不殘流れ、橋板垂而堰と相成、十三間町四辻之邊より橋迄、水川縁を越押來、十三間町・後河原町・大工町・竪町江迄流れ出、鉄炮町・大工町より之方者大に床上へ水上り、鉄炮町上之方は床之上へ者上り不申、中町河原之方者床上水一・二尺計、十三間町通り夜中故何方茂無存懸所へ水來、疊浮上り驚き申族。第一行燈倒れ彌不手廻、二階或はあま抔江足弱者は上置、小道具下通りに指置候分者、何方となく流失。大工町木戸倒れ、番人小屋流れ申位。川之あなたは橋爪青草屋水二尺計上り、其末千日町之方三尺計、非人共瑞泉寺町より野町之方江逃出候。前田織江殿家中組屋敷・五十人町邊者、床之上江は上り不申、たまぼこ村少し

上四・五十間計切込、通路無之、高畠村等水之中、大豆田口水浸。見分之處扨々存之外成難儀、尤橋は落切流、犀川筋死人五人計。犀川より淺野川下一倍之難儀、田上之橋より追々橋落堰と相成候而、馬場裏町四辻之邊切れ込、馬場之頭淵に相成、博勞御預馬共米問屋江牽除候。小橋尤落、下之方前方洪水之節崩候跡、追々地面と相成場有之、新作七軒出來之所、不殘暮出來不申、内三軒流失。其外川下之方損家多く、堀川筋にも所々床之内三尺計泥水流込、甚難儀混雜之旨。寺中村・若宮抔水之中相成、田地も大分之損、今少前方に候はゞ不殘用立間敷。五日より天氣宜故、乾上り候はゞ三ヶ一は可用立と沙汰。越中様子未相知、小矢部川橋落。能美郡筋も出水に候得共、格別損所無之。手取川筋相替儀無之。宮腰道御臺所橋より宮腰之方往還道首丈之水、五日朝之内船に而往來。同日江戸表者大風雨之處、雨者夕七時止、御屋敷内風損夥敷。扨別而下谷邊より本庄邊格別成損、家々風損無之家茂無之与申程之儀。扨塩氣を持樹葉を枯し、草抔も枯、尤作物茂損、品川宿者往來江波打上候旨。其外同日前後諸國風、六日には餘程之地震有之与申來る。

〔歲々略曆〕

閏八月三日より雨風にて、四日夜四つ時淺野川・才川橋流、磯部村切込、御貸米八萬石出る。

〔江戸御留守諸事覺書〕

閏八月十八日

一、當月四日金澤洪水之樣子、三度より會所江指出之紙面御用所より相達候寫。

金澤當月四日朝より大風雨に御座候處、同日夜五時頃犀川橋・淺野川橋幷淺野川々筋橋々不殘流失仕、犀川下船場より下川淵通水付、十三間町四ッ辻より後河原町養智院前通迄水付申候由。夫より寶久寺川原江水切込、下油車・大豆田組邊迄水付、川向大橋より下千日町邊中村在迄水付申候由。淺野川筋は鈴見橋邊より淨明寺邊川淵通、材木町・小鳥屋町邊、母衣町・岩根馬場・中堀川・西堀川・三口村在邊迄水付申候。尤地形高低に而深淺御座候而、深き所五尺計より二・三尺御座候由。同五日より天氣宜相成減水仕候。

右金澤當四日出に有增申越候付、御達奉申上候、以上。

閏八月十八日　　　御國三度　竹松屋三右衛門　印

御　會　所

淨明寺は靜明寺

閏八月廿七日。江戸詰人等先に貸與せられたる救方金返上の延期を請願す。

〔江戸御留守諸事覺書〕

閏八月廿七日

一、此表諸物高毛に付、當詰人一統難澁仕候付、御救方之儀去七月組頭等より相願、格別之趣を以一人扶持金二歩充御貸渡、當九月御扶持方代之内を以返上候樣被仰渡候處、今以米價も高毛に而難澁仕候間、何卒十二月迄返上延引之儀奉願旨、武田判太夫紙面出之。御步頭よりも右同樣紙面出之。

但、割場奉行よりは、支配之者小祿之者共に付被下切願候趣紙面指出之。

閏八月。領内に於ける煎海鼠及び串海鼠の取扱に就いて令す。

〔郡方御觸〕

煎海鼠之儀は、元來長崎俵物御用幷御上御用向之外は、一切脇賣等不相成事に候處、近年心得違之者茂有之、密に他國江賣出候族茂有之躰に而、長崎御用請負高大抵一ヶ年三萬二千斤程之處、近年出高相減候に付、大坂町奉行所に而洩物之御穿鑿有之躰相聞候條、自今他國洩等無之樣、嚴重縮方可相心得事。

一、御菜御用之煎海鼠、是迄金澤問屋より能州所口問屋江申遣候上、長崎俵物下請負人所口町鹽屋淸五郎より指越候得共、以來は金澤問屋より町奉行江爲書出、右奉行より所口町奉行江申遣候筈に候事。

一、串海鼠之儀は、御獻上等御用に仕立候内、出來方不宜撰殘り之分は、所口奉行聞屆を以、

串海鼠師共より金澤魚問屋江迯り越、賣捌來候由に候。此分は是迄之通り相心得、尤御領國切に取扱候筈に候條、他國江は一切不指出樣嚴重可相心得事。

一、生海鼠之儀、是まで年分四百樽計り、串海鼠師より金澤問屋江迯り越、御菜御用等茂共內に而相辨來候由に而、右は至而小海鼠に而、煎海鼠等に難仕立分、御國御用に取扱候趣に候條、是迄之通相心得、尤右之外隱賣・他國出は一切不相成儀に候間、以來嚴重可相心得候事。

但、是迄指紙無之、生海鼠問屋江指こし候儀も有之由に候得共、以來指紙無之分は、先々遂詮議候趣、改而於町會所申渡候事。

右之趣被得其意、能州所口町奉行・同所御郡奉行江茂可被申渡候事。

丙子閏八月

御算用場

右之通御用番年寄中より被相渡候に付、寫相達之候條、被得其意、締方嚴重相心得候樣、夫々可被申渡候、以上。

進士求馬殿

中村逸角殿

〔異本三守御譜〕

御領國浦々にて取揚候生海鼠之儀、成限煎海鼠に仕立、公儀長崎御用に指出候樣兼て被仰渡候趣在之に付、串海鼠之儀も御献上等御用之外餘分仕込不申筈に候得共、御献上等御手當に仕立申內、出來方不宜撰殘候分、年々御當地魚問屋へ送越、御領內切に取扱申趣に候處、其段御家中之人々承知不致事故、串海鼠他國へ遣候儀も有之哉に候。以來は右之心得にて、他國音物等に致間敷候。生海鼠之儀も煎海鼠等に難仕立分は、魚問屋へ送越、御領內切賣捌申儀に候。煎海鼠は尤取扱之儀不相成筈に候。

右本多安房守殿閏八月廿六日被仰渡。

閏八月。河北郡八田村・大根布村に疫疾流行す。

〔金龍公記史料〕

閏八月。河北郡八田村・大根布村罹疫者千十五人。貸之米五十石七斗五升。令十五年賦還之。又死亡而遺族幼穉者六十五人。賑之米三十石。

閏八月。諸郡の婦女にして善光寺及び身延山に參詣する者の順路を調査す。

〔國事雜抄〕

御領國御郡之女共之內、信州善光寺、或は甲州身延山へ參詣いたし候者は、上筋より東山道通罷越候哉。右樣之儀に付境御關所過書相渡候儀は無之哉。夫々相尋可被申聞候事。

但、能州之儀は、女之分他國へ不指出格に付、被相尋に不及事。

右之通御用番年寄中被申渡候條、各支配之者共是迄之振合委曲可被書出候、以上。

閏八月　　　　　御算用場

遠所町奉行等連名殿

九月十二日。一橋齊敦卒去の報至るを以て金澤に於いて普請・鳴物を停止す。

〔江戸御留守諸事覺書〕

九月四日

一、德川民部卿樣御逝去に付御大目付より相渡候御書付、今夜四時過里見七左衞門より織江居小屋迄到來に付、御書付之通御屋鋪中普請者今日より三日、鳴物は七日御停止之旨、前々之振を以御橫目等𛀁夫々以紙面申渡候事。

法梁院樣・御前樣𛀁も頭々迄以紙面申上。

一、右に付御殺生指之儀も、寛政五年之振を以遠慮日數之通御露地裁許御步へ申渡、御橫目

逝去は三日なり

へも承知申遣候事。

〔御用番方并御城方御用之覺〕

九月十二日

一、德川民部卿樣御逝去に付、普請は去四日より三日、鳴物は七日御停止之旨等、御書付渡り候旨織江より申來。先例を以此趣に而は普請は一日、鳴物は三日遠慮之儀以中務申上、來狀上之候處、以同人伺之通被仰出。五日不時立町早飛脚に傳附也。

九月十五日。領内の人口を調査して幕府に屆出づ。

〔金龍公記史料〕

九月十五日。出三州民十五歲以上人員計表于幕府。男三十三萬二千二百五人。女三十萬九千九百四十七人。

十五歲以下の者の外武家を除きし數なり

九月十九日。金澤町奉行、兩替屋酒屋宗左衞門等の發行する銀子手形の處置に關し稟請す。

〔御觸留〕

兩替屋酒屋宗左衞門・舛屋次右衞門・森下屋九郎次郎・木屋孫太郎、右四人之者爲替御用相勤

罷在候に付、去々年秋御算用場より申渡、爲融通銀子手形之印紙爲取扱通用仕樣子承、僉議仕候處、右手形にて餘程之銀高取扱仕、元來縮方も無御座者に付、若故障出來仕候とも私共取捌難仕、（中略）其上右手形を下に而銀札抔と申由風聞も承り申に付、自然か樣之儀江戸表へ相聞候而は、銀札遣候外中絶仕分は難相成旨、安永三年公邊より御觸之趣も御座候故、何と歟御尋候儀も有之候はゞ、各樣にも御存じ無御座品、私共了簡を以銀札に似寄候品爲取扱置候而は不容易儀と存付、心濟も不仕儀に御座候。尤御運上方にも相成品を、今更彼是指支候趣申立候譯に而は無御座候間、以後右印紙手形爲取扱候樣、御紙面を以私共へ被仰渡候樣仕度奉存候。一昨日猶更此譯調候而御進可申旨被仰聞候に付、委細相調御進申上候事。

九月十九日　　　　山崎小右衛門

九月廿二日。前田齊廣の女芳姫・勇姫・寛姫觀音院に宮參を行ふ。

〔御用番方幷御城方御用之覺〕

九月廿二日

一、今日芳姫樣・勇姫樣・寛姫樣觀音院へ御宮參之事。

但、表向無構常服着用、各々も常服にて例刻出席。

但、御通道は土橋御門より御宮坂通り西町口御門へ御出、博勞町・尾張町より假船橋通り御

出、御戻りは右之通御道筋より十間町、堤町より不明御門へ御入、金谷御屋敷へ御立寄、夫より御戻之御様子に候事。甚右衛門坂通り。

十月六日。本年難作なるも租米を精選して上納すべきを告ぐ。

〔不熟米納方御觸留拔書〕

諸郡村々當年立毛、元來虫たち痛み御座候上、閏八月四日風雨に而惣躰吹倒、實入不宜、別而川筋幷潟廻等水付之分、所により生立不申分も過分有之、勿論甲乙御座候得共米性不宜、重々相撰候得共、御藏入・御給人知共納兼、百姓中迷惑至極仕候。前段申上候通當年之年柄、精誠仕候上は相納候樣、諸代官幷藏宿等一統ゟ被仰渡被下候樣仕度、小紙を以奉願候、以上。

子十月　　諸郡御扶持人連名

御改作御奉行所

當年諸郡共難作に而米性不宜、御藏入・御給人知納方指支申に付、御示談之上別紙之通御達申上候處、御詮議之上、諸方請米御奉行幷藏宿中等ゟ米撰方心得之儀夫々被仰渡候得共、諸郡とも其村に而出來米精誠相撰、聊心得違無之樣一統私より入念可申談旨、譯而被仰渡候。諸向被仰渡有之に付、百姓中心得違仕、少々惡敷米に而も納候樣相心得候而は難相成趣。尤甲乙は有之候得共、村々にて精誠致候樣御申渡可被成。右之趣御承知之上、此紙面御達可被

成候、以上。

子十月六日　　　　田井　次　郎　吉

諸郡御扶持人・十村・新田裁許・山廻衆中

右之外御郡之御代官有之御面々御傳達可被成候、以上。

田井は村名

十月十一日。幕府老中の奉書を町飛脚に傳附する件に關して議す。

〔江戸御留守諸事覺書〕

十月十一日

一、來年御參勤御時節御伺之御使者、御廣式御用人中嶋七郎被仰付、御使相濟直に詰候樣被仰渡、御奉書は町飛脚を以指出候樣御用番より申來候。御奉書は重き品之儀に御座候。先年町飛脚於榊驛御荷物之内紛失有之候。萬一右樣之儀御座候而は、元來御使者御指出之事に候へば、町飛脚に御傳附に而は、公邊へは被仰達方如何可有御座哉与奉存候。七郎与交代罷歸候御用人木村左次馬、御奉書相渡候迄發足御指留、左次馬御傳附に相成候はゞ可宜哉之旨、御用人申聞候に付、是迄町飛脚に而指上候儀も有之。其上御用番より、御奉書は町飛脚を以指上候樣申來候事に候はゞ、其通に而可然候。尚更詮議之趣も有之候はゞ申聞候樣申渡候處、則聞番にも示合候處、町飛脚へ御傳附に而若故障有之時は、被仰達方何とも心付之儀無之、

六ヶ敷事に存候ても、是迄右御使者は交代之者被仰付、御奉書は町飛脚を以指上候例共有之。其上御用番よりも申來候儀に御座候はゞ、共通に相心得、夫に付是迄町飛脚に才領は一人に御座候得共、此度兩人に申渡候はゞ可然与詮議仕候旨、御用人申聞候付、其通ニ申談候事。

十月十三日。加賀藩に寄託せられたる幕府領の施政を私領と同一とし、又その收納を金納とすべきことを告ぐ。

〔郡方舊記〕

御預所御政事向、御私領同様御取扱之儀、先達而公儀より被仰渡、今般御仕法替相整候に付、向後御縮方等之儀、都而御私領同様取捌候筈に候之條、被得其意、遠所町奉行・所々御郡奉行等へも可被申渡候。

一、右に付當暮より御收納皆金納に申渡候條、被得其意、尙更諸事御預地方役人可被示合候事。

右之通御用番年寄中被申渡候條、被得其意、早速夫々可被申渡候、以上。

十月十三日　　　御算用場

進士求馬殿

中村逸角殿

文化七年三月二日の條參照

右致寫候通申來候條、得其意、夫々不相渡樣可申渡置候、以上。

文化十三年子十月十三日　　進士求馬

中村逸角　見合

能州四郡十村中

右之通御書立を以文化十三年子十月被仰渡候。依て村々肝煎中へ申渡候也。

〔眞館覺書〕

御預所御收納算用仕立方

夫米高百石に付米二石六升

口米本途小物成米一石に八升二合

但、歩米御傳馬宿入用除

小口米本途小物成米一石三升充

但、御傳馬宿除

高役高百石に付五十二匁六分五厘

但、六に割不申而者永に成不申候

小口銀小物成銀百目に三匁充

但御藏所入用除
歩入永一貫文に永百文充
但御藏前塩役酒役小口永共除
御傳馬宿入用は高百石に六升充
棟役銀五匁充　但、六に割申事
櫂役四匁一分　但、右同斷
但櫂一枚役と申は二人乘を一枚と云。
銀六匁　永百文小判六十目かい

十月。祠堂銀借用の諸士にその返濟方に關して告ぐ。

〔御觸抜書〕
定番頭ゟ
別紙寫之趣得其意、組・支配之人々ゟ被申渡、組等之內裁許有之面々は、其支配ゟ茂相達候様可被申聞候事。
右之通一統可被申談候事。
十　月

寶圓寺を始御寄附祠堂銀等借用之人々、返納方遲滯有之分、其頭々ゟ時々及催促、其上に茂延引相成候分者、夫々及御達申趣に御座候。就夫借用之人々、銀高に應じ、收納米之內を以引當て、米取立置候得共、代替等に而明縮に相成申人々、證文相改、替り藏縮茂可指出處、其儀無御座人々も御座候に付、每度申談候得共、兎角延々に相成、藏解入用之儀茂無之故、自ら年々返納方茂相淀み、御寺方等渡し方幷寺社所勘定方等茂指支申候。重き御寄附銀等之儀に御座候間、借用之人々代替之節、相續被仰付、御知行所附相渡り候之上者、早速證文相改、藏縮等振合之通指出候樣、御家中之人々ゟ兼而被仰渡置、且又相續被仰付候人々者、其御頭・支配人手前において、先代借用之有無承調理、借用人は早速證文等相改候樣申談儀に、以來相心得候樣、是又夫々被仰渡置候樣仕度奉存候、以上。

十月九日

横山右京
竹田掃部
青山將監

奥村左京樣

十月。領外の者を入牢又は入墨の刑に處する時はその生國に通知すべきことを定む。

御料は幕府領、他領は他藩領

〔公事場御定書之寫〕

付札、公事場奉行ゟ

他國者御領内ゟ入込致賊、召捕候上入墨申付候儀、自今は御料・他領共生所等慥に申候者に而も、何とか不及懸合而難成子細有之者は格別、一通に而者其先々ゟ御屆無之、入墨可被仰付旨被仰出候段、文化七年申渡置候通に候得共、以來は御料・他領之者御領國ゟ入込、知邊を以便り罷在候者は、住所等慥に相知居申者に候間、惡事仕出候節入牢又は揚屋入申付候はゞ、時宜に寄其段御代官所等曁其御領主ゟ及御屆可申候。

一、御料・他領之者共惡事仕出、禁牢申付置、出牢之節入墨申付候儀も、其先々ゟ及御屆、無構者之段申來候上、入墨可申付候。尤非人・物貰躰之者は、御料・他領之者与申聞候共、入牢申付候儀等御屆にもおよび不申候。

右之通可申渡旨被仰出候條、可被得其意候事。

文化十三年子十月

十月。能登口郡の淵役徴收に關する慣行を上申す。

〔浦方御用留〕

渡海船川入難致、沖懸りに而積荷物運候分は、淵役如何相成候哉。川入無之候得者淵役指出

不申哉。尤澗役之儀は、他國より茂其浦々澗に而役取立候故致上納候分可有之候得者、右沖懸り与川入与澗役之儀差別如何相成居候哉。且又御追加に、御領國之船於他國浦不致澗入、沖懸りに而澗役指出候哉。相調理可申上旨、御紙面を以被仰渡、奉得其意左に申上候。

一、口郡福浦湊等は大河懸り之湊に而無御座候故、諸廻船川入難致、沖懸りに而積荷物運候儀是迄無御座候。併風波高く澗入難仕躰見請候得者、手船指出積荷物相運申儀有之候得者、手舟人足賃取請可申儀御座候。澗入不仕船より澗役銀取立不申候。

一、往古は他國之船々澗入之時分は、不殘澗役銀取立申所、澗役取立不申國々之船、御領分澗所ゟ入船仕候而も、澗役取立申間敷旨、寛文十年御觸渡御座候。就夫羽州秋田湊ゟ、口郡之船澗入仕候得者、船之者一人に付錢百九十八文取立申候。奥州津輕湊ゟ澗入仕候得者、船之者一人に付錢二百十三文取立申に付、右兩國之船口郡澗所ゟ入船仕候得ば、御定之澗役銀取立上納仕候。

一、佐渡國に而は五里役与唱、澗入幷沖懸りに而も船之者一人より錢七十四文宛取立申候。尤右錢請取手形相渡申に付、浦傳等五里之間は澗役取立不申候。

一、隱岐之國上之嶋とうせん与申所に而、船一艘より米一升・錢百文取立申候。

一、越前三國湊に而水戸打錢与唱、船之者一人に付三十五文宛取立申候。尤是は湊より手船

を指出、川之淺深を教申に付、右之通錢取立申由に御座候。

一、越後新潟湊等川湊は、多分三國之振、錢取立候由に御座候。

右御尋之趣、羽咋・鹿嶋兩御郡潤所、幷浦々渡海船所持之者共等手前相尋書上申候、以上。

文化十三年十月

武部村　四郎太夫

堀松村　平　藏

本江村　六郎右衛門

進士求馬殿

中村逸角殿

十月廿九日。幕府に藩の國役金を納入す。

本年七月七日の條參照

國役金は草高に割當するものにして本件の朝鮮信使費用に對する本年分の上納なるべし

〔江戸御留守諸事覺書〕

十一月朔日

一、御國役金

二千六百十一兩永百三十五文一分七厘

此銀八匁八分七厘四毛

右御國役金御納方御用懸御代官大貫次右衛門殿御役宅江、一昨廿九日持參相納、昨晦日御勘

定所へ右御上納相濟候段及御屆候。次右衞門殿御請取書に御場之印相渡候旨、長瀨善左衞門御使書等出之候事。

十一月二日。前田齊廣明年九月を以て參覲すべき幕府の命を受く。

〔横山氏日記〕

十一月十二日　折々雪降

一、左之通表方へ被仰出候に付、表方於席、年寄中・御家老中一列御奉書拜見。相濟、若年寄中表方へ被呼立拜見、卽席恐悅月番へ申演。畢而年寄中・御家老中一列、於同所以戶田與一郞、右恐悅幷御奉書拜見之御禮申上候事。

御札令披見候。公方樣・右大將樣益御機嫌能被成御座、恐悅旨尤候。將又參勤時分之儀、以使者被爲伺之候。及上聞候處、參勤時節被遊御用捨候。來年九月中可致參府由被仰出候條、可被得其意候。恐々謹言。

十一月二日

酒井若狹守忠進
青山下野守忠裕
土井大炊頭利厚
松平伊豆守信明

松平加賀守殿

〔三守御譜〕

十月、來年御參勤御時節御伺之處、來春御參勤御用捨被成、九月中御參府被成候樣被仰出。

此時公御病氣に付、秋迄御參勤御用捨被仰出。

十一月二日。能登の幕府領預地の仕法改革實施を急激ならしめざるべきを告ぐ。

本年十月十三日の條參照

〔富田氏日課〕

十一月三日

一、御預地御私領同樣御仕法替之儀相整候趣に付、諸事御縮方之儀新に御私領之通に申渡有之、是迄仕來与違候事故、不案內に而不行屆事共も可有之、然處共儀に無構嚴密に取扱候而者、品に寄一統人氣に茂指障可申、就中奥郡盜賊改方之儀、別而其心得有之候樣致度旨、御預地方役人より及達候趣有之候條、猶更示合、齋藤中務初右之趣會得有之候樣可申談候。

右之通御用番年寄中被申聞候旨、御算用場奉行より申來候事。

十一月三日。諸郡船舶をして嚴に極印を受けしむべきことを告ぐ。

〔富田氏日課〕

十一月三日

諸郡船極印之儀、文化二年申渡有之候後數年相立候儀、追々損船・造替等有之、極印請替可申處、共儀甚少く、端々極印損失、無極印之船茂有之躰相聞候。右樣之船者早速極印受替可申處、甚不埒之趣に候。以來無極印之船は無用捨取揚候條、夫々綿密相しらべ、船持共心得違無之樣可申渡旨、御算用場來狀之事。

十一月七日。江戶の詰人等物價高直なるを以て救濟を請ふ。

〔江戶御留守諸事覺書〕

十一月七日

一、當詰人一統難澁に付、去七月相願御救方被仰付、取續罷在候得共、諸物高毛之內、金相場米價より引揚、御扶持方代に而は跡引に相成、何茂難儀仕候。御當節之儀奉恐察罷在候得共、當暮之所は一統返上方も必至与指支可申候間、何卒品能御救方御座候樣仕度旨、武田判太夫列席に而段々申聞、紙面も出之候。一木逸角儀も右同樣申聞、紙面も出之。割場奉行大地縫殿左衞門儀も同樣に申聞、紙面出之候付、應而及答、先紙面請取。

一、本文之通に候處、御勝手向御難澁之上、今度之大風に而過分之不時御入用も有之、其上

本年十二月廿六日の條參照

御國表も出水に而格別之御出方も有之儀。旁以御當節は容易に難遂詮議候間、何分一統會得有之、取續候樣可相計旨段々申聞、指出候紙面夫々相返候處、同十七日重而段々相願紙面も指出候付、夫々請取、委細御勝手方へ示談におよび候事。

十一月十六日。能登幕府領預地の者の養子•緣組等の取扱に就いて告ぐ。

〔國事雜抄〕

能州御預所、是以後都て御私領同樣に被扱候樣、今般御用番より御申渡候。依之養子・緣組等萬端他支配之者之振に可相心得候。

一、御預所之者御當地へ罷越致止宿候へば、出入共時々小紙を以旅宿より及斷候へ共、以後不及其儀、遠所者止宿候通相心得可申事。

右之通町中へ可被申觸候、以上。

子十一月十六日

山崎小右衛門

前田清八

竹村三郎兵衛殿

十一月十八日。前田齊廣安宅延年舞の能を演ず。

〔横山氏日記〕

十一月十八日　天氣吉、夜雨

一、今日御能有之、安宅延年之舞被遊候御樣子に候處、內記・權佐儀未右延年之舞拜見不仕候、不苦儀に御座候はゞ、安宅之能迄拜見被仰付候樣仕度、此段取繕宜申上候樣、人見吉左衞門江申含候處、坂井要人を以拜見被仰付候段被仰出、八時過相廻候而宜旨淺加九之丞申聞。則拜見所罷出候所、追付安宅御初、七半時前相濟候付、御奥書院御緣頰において、吉左衞門を以御禮申上退出之事。

十一月廿八日。明年以降諸役所の經費二割を節減すべきことを命す。

〔諸事留帳〕

十一月廿八日

今般御省略被仰出、別紙寫之通御省略奉行江申渡候條、被得其意、減方等詮議之趣、急速右奉行へ可被申談候事。

御省略奉行江

御勝手向連々御難澁之處、御借財高過分至極に相成、最早御運方手段無之、其上當年御領國不作に而過分御損毛、曁出水等に而不時御入用銀多、彌增御指支に相成、被成方も無之候。依而諸向御入用方諸品共、來年より先當分二割減じ被仰付、猶其上減方無之哉、御省略所に

而諸向可遂詮議旨被仰出候條、來春より可相減候。右僉議方不致治定ヶ所は治定迄、諸渡り方不指定ヶ所は右之振を以、其時々可被僉議候事。

子十一月

十二月五日。武具方の經費は二割減の限にあらざることを定む。

〔諸事留牒〕

十二月三日

今般諸向御入用方諸品共、來年より先當分二割減被仰付、猶其上減方無之哉、御省略所に而諸向可遂僉議旨被仰出候條、來春より可相減旨等、御勝手方安房守より演述仕候。依之御武具出來等御入用、曁右に携候儀に付御入用之分は、文化七年にも被仰出之趣有之、以來當形米三百石に二十貫目御渡、御仕切被仰付候付、僉議之上右被渡高に引合せ、新出來并御修覆物其外役所向御入用等を初、半減或は三の二減じ、其內相止め候而も御指支無之分、出來方指止候事に夫々申渡候。然處文化十年にも、御省略等之儀格別に遂僉議候樣、御勝手方甲斐守等江被仰出候付、右御武具之類一ヶ年に二・三品程充出來相延、御入用高相減候儀遂僉議候樣被仰出候に付、則遂僉議、元來御武器御手薄之內、近年御入用過分に相減、彌以出來高少く、此上被減候而は、第一細工人職業疎く相成、刀鍛冶抔は最早退轉にも到可申、且は御

細工人一統迷惑仕候儀も御座候躰に候へば、廸過分之減方は有御座間敷、申さば少分之事に而、先々に而は甚迷惑仕候筋も可有之、御武器之儀は要用之御品々も候へば、旁々此儘に被仰付置候樣仕度儀与、何も示談之趣達御聽、減少不被仰付候。右之上に而段々指詰り居申候御入用高に候間、此上減方と申すは有御座間敷哉に奉存候。近年も過分に相減申上之儀、殊に御武器之儀は御格別之品に候間、只今迄之通に被成置候樣仕度儀に奉存候。併御當節之儀、幾重に茂此上御省略可被仰付哉一往奉伺候。被仰出次第御勝手方江も可申達与奉存候事。

十　二　月

右今日修理以人見吉左衞門入御覽、尙口達に而今般諸向御省略被仰付候も、御武具方抔御用意之儀之樣奉存候間、尙更奉伺候通被仰出候樣仕度奉存候段申述候。

十二月五日

一、御武具方之儀は、今般御省略被仰出候得ども、是迄之通被成置候由、今日被仰出候事。

〔江戸御留守諸事覺書〕

十二月六日。在江戸の諸士に、前田齊廣が明年參覲の期を緩にせられたることを告ぐ。

十二月三日

一、來春御參勤御時節御用捨、九月中御參府可被遊旨被仰出候。爲御禮御馬廻頭中村左兵衛儀、前月十九日發足、道中逗留有之、今日參着、御用番より之傳言申聞、狀一封傳附指出候事。

十二月五日

〔江戶御留守諸事覺書〕

一、來年御參勤御時節御伺之處、御參勤時節御用捨被成、九月中御參府与被仰出候段、御奉書到來に付、法梁院樣・御前樣江申上、頭分へ御弘之趣可申聞旨、御用番甲斐守より前月十九日出町飛脚に申來候付、兩御廣式番頭江以紙面申上。

同六日

一、頭分相揃候段御横目申聞候付、三・四人充指出候樣申渡、左之通及演述。

來年御參勤御時節御伺被成候處、御參勤御時節被遊御用捨候。來年九月中可被成御參府由被仰出、難有御仕合思召候。此段何茂江可申聞旨御意に候。

但、今日御弘に付恐悅御帳に付候儀、前々之通申談候樣、組頭・御横目相招申渡、御使等に而不在合人へは、類役より可及演述旨御横目江申聞。

十二月八日。金澤を中心とする三里四方の地に於いて天の網を用ふる捕鳥を嚴禁す。

別紙若年寄中紙面寫相越之候條、得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配江茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十二月八日　　　　前田主稅

〔御觸拔書〕

三里四方天の網張小鳥捉候儀、御停止之處、猥に相成候付、文化元年に茂御家中一統申渡有之通に候。然處近年御家中之人々、百姓地相對を以所々請地之趣に仕、圍垣等拵、網構いたし、右圍之内に而網張候儀は不苦樣に相心得候人々も有之由。甚以心得違。都而三里四方之内に而網張候儀は御停止に候。且又春秋張切与唱候網を以、嶺々越し張いたし、鶫等捉候者も多有之候由。是又御停止之處、猥成躰に付、以來右躰之族於有之者、急度見咎、及斷候樣夫々申渡候。

右之趣嚴重可申渡旨被仰出候條、御家中之面々家來末々迄、急度心得違無之樣、一統御申觸可被成候事。

子十一月

十二月十六日。能登の幕府領百姓と加賀藩領百姓との縁組を郡奉行にて許可せんことを議す。

〔河合録〕

御預所村方与御私領村与縁組等申合候儀、指支候儀無御座所、文化十二年人別方混雑之品相改、同三年被仰渡之趣も有之に付、双方縁組等願出候節、其時々御場へ御達、御聞届之上私共より承届遣申候。此度御預所村かた之儀、御私領同様被仰渡候上は、私共切に而承届指遣可申与存候。猶更御指圖御座候様仕度候、以上。

子十二月十六日　　中村逸角

御算用場

十二月廿二日。淺野川・犀川兩馬場の費用を家中諸士より徴收することを告ぐ。

〔富田氏日課〕

十二月廿二日

一、淺野川・犀川兩馬場入用方、御家中之人々百石に銀二匁宛之圖りを以、頭・支配人手前へ取立候由。銀一匁以下之分は鳥目に而取立、來正月晦日迄に御馬奉行へ指出樣、定番頭より之觸狀御用番圭稅殿被相渡候旨也。

十二月廿二日。領內釀造の酒を江戶に廻漕することを廢し、これを幕府に屆出づ。

〔江戶御留守諸事覺書〕

十二月廿四日

一、左之通一昨日松平伊豆守殿幷町御奉行岩瀨加賀守殿ゟ御屆仕、浦賀御奉行內藤外記殿ゟ御屆候御案內罷出、相述置候旨長瀨善左衞門申聞、御使書相添出之。

加賀守領國中近年米價下直に而、旁不融通に相成候に付、酒造仕御當地ゟ相廻、遣ひ用相辨、且一時に着船仕候節は、藏所等指支候に付拂酒も仕度趣、委細先達而奉伺候處、酒造高相增候儀、幷遣用江戶廻し致候儀は勝手次第に候。餘計之分江戶問屋ゟ拂酒之儀は、可致無用旨被仰渡候。依之廻酒仕、屋敷中用立等之儀、追々申上候通爲相捌申候處、北國は冬海指支、夏向に至遠海相廻候故歟、存外に變酒も出來、彼是雜費多相成候に付、廻酒指止申候。此段御屆申上候、以上。

文化十一年三月の條參照

十二月　　　　　　　御名内
　　　　　　　　　　長瀨善左衞門

十二月廿五日。領內の作毛損害高を幕府に屆出づ。

〔諸事覺書〕

十二月廿六日

一、當年御損毛高御屆下書、先達而御用番より到來に付、聞番江相渡、例之通相計候樣申渡置候處、左之通昨日御用番靑山下野守殿江御屆仕候段申聞。

覺

加賀・能登
越中・近江之內

一、六十五萬四千六十石

右拙者領分之內、當夏以來作毛風損・水損・虫刺等有之、當年損毛高如此御座候。此段御屆申達候、以上。

子十二月　　　　　　　御名

十二月廿六日。能登口郡に製產する苧紵の改方吟味役を命じたることを告ぐ。

〔御郡典〕

宿村　與左衛門
在江村　藤右衛門

右之者共、今度御算用場へ相達、羽咋・鹿嶋兩御郡紵改方吟味役申付候條、得其意、面々組下一統江可申渡候。依而以來紵買集候者共荷相改、他國出或は越中筋江指遣候節、其於向寄々々村肝煎幷右與左衛門等立會之上改を請可申、猶又其節與左衛門等より指紙相添可渡筈に候。尤右兩人時々相廻、洩荷いたし候者有之候節は、見聞次第吟味役共より指押候筈に候條、聊も心得違無之樣嚴重可申渡置候。紵一駄に付御役銀十五匁上納之儀は、先達而申渡置、承知之通に候條、其村々役人共より、口郡散裁許江可爲指出候。右之趣不相洩樣、急度可申渡置候、以上。

子十二月廿六日　　中村逸角
　　　　　　　　　進士求馬

羽咋・鹿嶋兩御郡御扶持人・十村中

本年七月の條參照

十二月廿六日。江戶詰人難澁するを以て金子を貸與す。

〔江戶御留守諸事覺書〕

本年十一月七日の條參照

十二月廿六日

一、當詰人一統難澁に付當暮御救方之儀、先達而武田判太夫等願之趣御勝手方へ及示談候處、返書到來に付、申來候趣を以今日左之通申渡。

武田判太夫江

御當地米價曁金相場諸色高直に付、詰人一統難澁いたし候に付、御手前初委曲願之趣再往紙面被出之、金澤表江申遣候處、御勝手向連々御難澁之所、御借財高過分至極に相成、最早御運方手段無之、其上當年不時御入用等も過分至極に付、願之趣御取揚難被成御時節に候得共、再往願之趣無據相聞候間、詮議之趣相達御聽、當暮一人扶持に金一歩充御貸渡被成候條、何分遂勘辨取續、來年三月御扶持方代之内を以可致返上候。且又當七月御貸渡金は被下切に被仰付候。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。且又諸頭中江演述、組等之人々江申聞候樣可被申談候事。

子十二月

一、右寫割場奉行へも渡之、得其意候樣申渡。

一、會所奉行へも寫一通添書を以渡之。

十二月廿七日。江戸詰人の組頭等更に貸附の金子を増額せんことを請ふ。

〔江戸御留守諸事覺書〕

十二月廿七日

一、昨日組頭江申渡候當暮御救方之趣に付、武田判太夫・一木逸角・大地縫殿左衛門人々列席に而申聞候者、御救方被仰渡一統難有儀。被仰渡候上重而申上候儀も甚恐入罷在候得共、當時諸物高毛と申內、第一金相場米價引上て、取續方必至与困窮仕、此度被仰渡之通に而は迚相治り不申候間、何分金一歩充相增御借渡御座候樣仕度奉存候。一步增被下て、格別人々手前諸拂方指支不申と申趣に而は無御座候得共、第一氣請之處違申儀に候へば、何と歟御難題之儀に奉察候得共、宜く御取計被下候樣奉願旨等、段々申聞、人々紙面重而出之候。依之、再往願之趣には候得共、先達而達御聽にも被上候儀、御當節恐察仕、何分人々會得有之取續候樣可申談候。其上最早月迫に相成、示談之筋も無之儀候間、取計方無之旨等段々申答候處、何分其所は會得仕罷在候得共、迚治り申間敷候間、幾重共奉願旨段々申聞候事。

十二月廿九日。江戸詰人等に救濟の爲金子を增貸す。

〔江戸御留守諸事覺書〕

十二月廿九日

一、此間組頭等申聞候趣猶更相考、今日左之通申渡、割場奉行へも寫渡之、會所奉行へも例之通申渡之。

武田判太夫え

御當地米價等高毛に付、詰人一統難澁之趣、先達而再往与申聞、委曲金澤表え申遣候處、御勝手向連々御難澁之處、御借財高過分至極に相成、最早御運方手段無之、其上當年不時御入用等も過分至極に付、願之趣御取揚難被成御時節に候得共、再往願之趣に付一人扶持に金一歩充御貸渡、來三月御扶持方代之內を以返上可致、當七月御貸渡金は被下切に被仰渡候旨申渡候。然處米價諸品甚高料に而、當暮諸拂方等必至与指支、右御貸渡に而は中々行屆不申、難澁仕、其上米相場高價之上追々引立、此節又々引上候。今般之御貸渡高に而は迚取治兼、御外聞に拘申儀も出來仕候而は如何敷候間、今一歩充御貸渡奉願旨等、口上に而段々与申聞、紙面も被出之、最早御國往反之日間も無之、御勝手御逼迫至極に而御運方手段無之旨等、先達而申渡候通に候。願之趣御取揚難被成御時節に候得共、格別詮議之上、前段之通申來候儀に候へば、何れにも當暮之處は御運方手段無之旨等得与被申渡、品能被取計候樣申渡候處、御當節之儀は奉承知罷在候。重而相願候儀は誠以奉恐入候得共、右御貸渡奉願候。返上之儀は幾重共相心得可申旨等、段々被申聞候趣に付、格別に遂詮議、一人扶持に金一歩宛貸渡之

儀承届候。尤三月渡御扶持方代之内を以、急度返上可仕候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。且又諸頭中江演述、組等之人々江申聞候様

可被申談候事。

子十二月

是歳。紀伊の淨土僧德本上人金澤如來寺にて化導す。

〔大ゆめ生むかし〕

文化十三年德本上人といふ行者如來寺にて御化導あり。又玉垣・柏戸などの大相撲興行あり。

文化十四年

正月朔日。前田齊廣金澤城に於いて年頭の禮を行ふ。

〔橫山氏日記〕

正月元日　折々雪降

一、御表宜候段申上、四半時過御出。御先立掃部、御奥書院御上段御着座、御裝束御直垂。

御太刀持役御奥小將岡田長十郎、素袍着用。御家老役職人修理布衣着用、御緣頰御右之方に伺公。

御奏者番小幡式部津田兵庫素袍着用に而御太刀持出、御鋪居之內三疊目置之。諸大夫之面々、檜垣之間

御廊下より列之通段々罷出、御下段御敷居之内一疊目に而御禮申上。御奏者番御鋪居之外御左之御唐紙際に扣、披露之。御表小將澤田忠左衛門多賀梅之助素袍着用に而、御太刀替々引之候事。

一、諸大夫之面々御禮相濟、檜垣之御間御緣頰に扣罷在、修理より相圖に應、甲斐守・伊勢守・土佐守罷出、次第之通御敷居之內御右之御唐紙際に列居仕、藏人少し進候而、御機嫌能被遊御超歲恐悅奉存候旨御取合申上、御意有之。諸大夫座上之者御請申上。御熨斗と御意有之。御表小將由比勘兵衛素袍着用、御熨斗三方持出之。諸大夫座上之者より頂戴之。畢而右御表小將引之。其所ゟ藏人少し進候而、御熨斗頂戴仕難有仕合奉存候旨御禮申上。御意有之、平伏仕、段々末座より退出之處に而、御禮人相濟候段藏人進み出申上、被爲入。

一、右畢而於桐之御間、鶴之庖丁御覽被遊候事。

一、右相濟九時前御出、御先立掃部御納戶横より御小書院へ御着座、助右衛門・又兵衛・左京・三郎・又六、御家老役・若年寄迄御禮被爲請。夫より御大廣間御上段御着座、御先立掃部。人持・頭分御禮、年寄中三郎・又六伺公。披露御奏者番、御禮人今少に相成候付、掃部御襖立之邊に罷在候所、御横目より相圖有之、掃部御案內申上、御下段御着座、御襖權佐式部開之、御大小將より坊主頭迄一統御目見、伺公等右同斷。相濟八時過被爲入候刻、御居間書院於三の間、御奥小將幷勝千代樣御側小將、且又御近習頭支配之人々御禮、伺公無之、披露御奏者番。相

濟、御襖たて、右人々退候以後、舟之間に而御表小將一統御禮、年寄中之内一人伺公、披露御奏者番。相濟被爲入候事。

正月二日。例によつて金澤城に松囃子を行ふ。

〔諸事留牒〕

正月二日

一、今晚御松囃子に付、六時前より、半前迄に各登城。六半時過御前御出被遊、勝千代様之御手を御引被遊御出候也。勝千代様は四海波相濟、御囃子に相成際に御入被遊。

一、年寄中等御盃頂戴。

一、御杯頂戴之節は、御表小將御銚子を御上段之前に置、御前ゟ參り御嶋臺を持立時分に靜に出候へば都合宜、牡丹之御らんまの下より二間目に而頂戴し、御閾より三疊目之下也。御嶋臺は三疊目之眞中に置付る也。御小將立て御銚子を取に行、御敷居之際ゟ行時分に、御盃を兩之手に而取、少し御左之方ゟ横にずり出、御目通に而御杯を戴、本之座に直り、御酒をつぐ節少し御酌之方へ向ひ、御酒を請、又直りて頂戴し、御杯を下に置、御肴頂戴に出る。御閾の內三尺計入てすぐ出、御側近く進み、御肴兩手を出し頂戴、後しさり三尺計しさり戴き、又しさりて本の處に至り御加、夫より御杯を持退座。尤小さ刀は御銜立之際に而取、無

刀に而罷出る。

一、御杯頂戴之面々終而、今枝民部等御流頂戴、五半時過相濟、四時頃何も退出。

御番組

四海波　權兵衛

高砂　權兵衛　嘉六郎　太左衛門

八郎兵衛　養助

松高き　宮門

東北　宮門　六之助　十助

丈助

猩々　權兵衛　六三郎　太郎左衛門

保九郎　多喜平

正月十一日。前田齊廣の子他龜次郎金澤に生まる。

〔諸事留牒〕

正月十一日

勝千代樣御出生之產婦懷孕之處、思召有之被仰出無之處、今曉御男子樣出生被成候。此段申聞候樣以人見吉左衞門被仰出候事。依而以御近習淺加九之丞恐悅申上候處、以同人御喜悅被思召候段共御意有之。尤服相改候事。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

正月十七日曉六時前於二の御丸御廣式御男子樣御誕生。御墓目御用奥村伊豫守なり。御生母は直姬樣御產婦之方なり。

十七日は誤なり

正月十八日。前田齊廣の子他龜次郎の七夜の祝儀を行ふ。

〔諸事留牒〕

正月十八日

一、今般御出生之男子御名、他龜次郎と被稱候間、殿付に唱可申段、今日被仰出候事。

一、今日御七夜御祝、御名も他龜次郎殿と被稱候に付、御祝詞以坂井要人申上候處、以同人御喜悅被思召候段御意。尤服相改申上候事。右に付御能有之。

〔齊廣樣御傳略等之內書抜〕

同十八日御七夜御祝有之。御名他龜次郎殿と―――――より奉指上。二月十六日御血忌明御祝有之なり。

正月二十日。郡奉行より用銀の上納を十村等に命ず。

〔御用銀一件留書〕

付札、御郡奉行江

御勝手御難澁之儀は兼而各承知之通に候所、去年御領國不作に付、御貸米等過分の御引方、

曁兩度之洪水に而川除方等御普請御入用等も莫大之儀、近年打續不時御入用多、必至与御指支に付、格別之御省略も被仰付候得共、指當當時御運方如何共被成方無之、依之三州町・在身元相應之者共へ御かり銀被仰付候。近年御調達銀等被仰付、一統可爲難澁候得共、右之通莫大之不時御入用共打續候に付、乍御心外御かり銀被仰付候。御難澁之趣等各品能被申諭、格別入情銀高限日之通御用立候樣可被申渡候。銀高幷御返濟方等之儀者、御算用場奉行へ申渡候條、右奉行可被申談候事。

丑正月

右之通御勝手方本多安房守殿より被仰渡候條、御趣意之趣得与奉得其意、夫々品能申渡、限日御請爲指上可申候。尤御返濟之儀は、無利足十ヶ年賦を以被返下候條、其旨も可申渡候。累年御難澁之上、去年秋以來作難等之不時御入用打重り、如何樣にも被成方無之、必至与御指詰之旨、於拙者共茂奉恐察致心痛候。何分にも面々抽丹誠、今般之儀格別に申諭、御借り銀全指上候樣に申渡、早速請書取立可指出候、以上。

丑正月廿日

進士求馬

中村逸角

能州四郡御扶持人・十村中

正月。延拂及び現銀拂米指留の前令を勵行すべきことを告ぐ。

〔筒井舊記〕

文化九年御勝手方年寄中より、延拂現銀拂米指止候樣被申渡、各ゟ茂申渡置候處、又候次第に相增候。當時御勝手御逼迫之儀者、各に茂承知之通、就夫當年より御入用方二割減被仰渡、且御手繰方に而彼是御米支候間、是迄無據被相願候ヶ所に而茂、尙更當年より精誠及詮議、容易に不承屆候條、此段兼而支配所之者共ゟ茂可被申渡候、以上。

正　月　　　　　　　　　　　御　算　用　場

進　士　求　馬殿

中　村　逸　角殿

追而右延拂米返上方茂、ヶ所により是迄之流例に而、十一月・十二月返上之願等有之。元來五月より者九月迄之限月之儀は格合に候間、是等之儀以來被遂詮議、成限り五月返上之趣に被申渡、其上無據相聞候分は、五月・九月兩度与歟、何れ十月ゟ越候儀者難承屆候間、此段茂可被申渡候、以上。

二月十日。德川家齊の前田齊廣に贈れる鶴金澤に着す。

〔諸事留牒〕

二月十日

一、今朝御奉書到來、御鷹之鶴御拜領被遊候事。

一筆令啓達候。公方樣・右大將樣益御機嫌能被成御座候。可御心易候。將又無異在之候哉被聞召度思召候。然ば御鷹之鶴拜領候條、宿繼を以相達候、恐々謹言。

二月四日　　酒井若狹守

青山下總守

土井大炊頭

松平伊豆守

殿

〔横山氏日記〕

二月十日

一、寒氣御尋宿繼御奉書、且又鶴御拜領、今曉到來に付年寄中・御家老中松之間上之間において拜戴、右恐悅且御禮人見吉左衛門を以申上。相濟、若年寄捧部同間において拜戴仕、恐悅に奉存旨月番ゟ申述事。

二月十五日。金澤犀川川上新町に火災あり。

〔御用番方幷御城方御用之覺〕

二月十五日

一、今日四半時過、犀川川上新町出火、二十軒餘燒失。勢州出席之由之事。

同十六日

一、昨日火事之斷町奉行紙面。

二十二軒　燒失家數

外納屋一　火元不知旨

怪我人一人

二月廿四日。先に德川家齊の鶴を贈りたるを謝する爲使者を金澤より發せしむ。

〔金龍公記史料〕

二月廿四日。謝賜鶴使河内山久太夫。十三日發金澤。本日抵江戶。

廿八日。久太夫登城謁大將軍・大納言。

二月廿四日。江戶邸内に於いて足輕・小者等の無作法なる者あるを戒む。

〔江戸御留守諸事覺書〕

二月廿四日

一、御屋敷內において足輕・小者・鳶幷御家中若黨・小者無作法之族有之、專心得違之者も有之。然者依之以來右樣之者於有之は、御步橫目・御橫目足輕より急度相糺可申段、一統相觸可申与奉存候旨に而、覺書御橫目中川又三郞指出之候付遂披見、存寄無之段申入相返候事。

但、申渡之覺書左之通。

足輕・小者・鳶幷御家中召仕候家來・若黨・小者無用に御屋敷中致徘徊、於御貸小屋人集杯いたし、或は酒狂に而不作法之族有之躰。其上御貸小屋前、或は南の原空地之場所ゟ多相集、歌などうたひ、中には石打抔いたし、暨凧抔揚候而狂候躰。其上夜中御屋敷中相通候節も、高聲に而謠抔うたひ罷通候者も有之躰に候。元來御屋敷內之儀は、御作法も有之候處、心得違之儀甚猥成躰不屆至極候。依而以來右之爲躰見聞次第、御步橫目・御橫目足輕より相咎、急度相糺候筈に候間、右等之躰無之樣以後嚴重相心得可申候事。

丑　二　月

二月廿七日。江戶に於ける火消方は他役所の入用銀節減の例に倣はざるべきことを告ぐ。

〔諸事留牒〕
二月廿七日
江戸割場奉行ゟ
江戸表火消方御入用銀、今般二割減被仰出候付、相減可申儀に候へども、文化八年御仕法に寄過分に相減候事故、此上減方申渡候而は、御仕法之指障りに相成、却而御不益之筋も出來可致哉、左候而は不容易儀に付、僉議之上右御入用は是迄之通可相渡候條、可被得其意候。
乍併格別御省略被仰出候儀に候間、猶更御費之筋無之様、無油斷被遂僉議、御定銀之内出目金も、成限り御餘計出來いたし候様可被相心得候。且又右出目銀年々之分、町會所に預候仕法方之儀、先達而各僉議之通承屆申渡置候得共、今般僉議之趣有之候條、町會所ゟ預候儀は被指止、大抵一ヶ年之御定銀高程に相成候はゞ、今年は會所より御入用請取不申、右出目銀を以相辨可被申候事。

三月四日。藩の借銀を調達せる者に賞詞を與へしむ。

〔筒井舊記〕
御付札、御算用場奉行ゟ
御勝手向御指支に付、今般急成御かり銀申渡候處、日限之通全致上納候者共之儀、奇特之事

に候。此段右之者共ゟ申聞候樣、遠所町奉行等ゟ可被申談候。魚津弁所之口之儀者、日限之通支配所全致上納候由。於奉行人々茂別而心配与存候。追而御聽にも可相達候條、此段可被申聞候事。

右寫之通御勝手方年寄中被申聞候條、被得其意、各支配所において上納濟候者共ゟ可被申聞候、以上。

丑三月四日　　御算用場

進士求馬殿

中村逸角殿

右之通御算用場より申來候條、前月廿日致皆上納候者共ゟ可爲申聞候、以上。

進士求馬

能州四郡十村中

三月六日。前田重教の側室慧照院歿す。

〔齊廣樣御傳略等之内書拔〕

三月六日穎姫樣御產婦之方惠照院金谷御廣式に於て死去、春秋七十九歲なり。法號は惠照院貞室妙宥日淳大姉と申なり。野田寺町實成寺に葬るなり。宿元は林源左衞門政成之女なり。

惠照院は慧照院なるべし

三月十九日。大聖寺侯前田利之參覲の途金澤城に登る。

〔諸事留牒〕

三月十九日

一、今日備後守樣御登城に付、五半時過より上下に而追々登城。

一、八半時前備後守樣御登城、芙蓉之御間江御通、御口上藏人罷出承る。御小書院之方之口より承る。御口上左之通。

中將樣益御機嫌よく被成御座、恐悅思召候。江戶表法梁院樣・御前樣益御安泰被成御座、恐悅思召候。今日御當地御到着被成候付、御容躰爲御伺御登城被成候。此段取繕申上候樣。

但、瀧之御間之方より出申候方宜、今日は御小書院口より罷出都合見申候。出樣早くなる。

右御口上有澤才右衛門を以申上候所、以同人御居間書院江御通被成候樣可申上旨被仰出候事。

御通被成候段申上候節は、御小書院之方之口より出申候筈に候事。

一、年寄中一切、三郞・又六、次に安房守被召、御家老・若年寄一切、御用部屋一切。御居間書院江御出、津田兵庫御先立御料理出る。伊勢守御相伴御居間書院御廊下之間江、年寄中・御家老等代合二人あて罷出。

一、夫より御居間江御通被遊候事。
御居間書院御通中は伺公不仕事。
一、七半時過御退出。御立歸、芙蓉御間江御通、御家老中江御逢被下度由に付、藏人罷出候處左之通御口上。
今日御登城被成候處、御盃御頂戴、御料理・御菓子等種々御馳走相成、忝御仕合に被思召候。爲御禮御登城被成候由。
一通之儀故追而可申上旨仰に付、追而申上候段申上候處、追付御退出。御式臺鏡板御左之方、年寄中列居之所中程より少箱段之方江寄罷出候事。

三月廿二日。婦人の衣服調度を華美にすべからざることを命ず。

〔坂井舊記〕

女共衣類之儀麁品を相用可申旨、前々より毎度被仰出置候處、近年次第猥に相成、常々天鵞絨・紗綾・縮緬共外宜品を相用、染模様等迄榮耀有之、萬端右に准じ花麗之風俗に流、曁銀簪高料之櫛等相用、幷縮緬等花美成品に而髮を飾り、はき物迄も塗木履・天鵞絨之緒抔用候躰。共風次第に押移、下賤之者に至迄も分限を取失、右樣之品々相用、奢侈至極之族多有之躰に候。是迄毎度嚴重被仰渡候處、次第に相淀み、當時右等之風俗致增長等閑之段、先以沙汰之

限に候。以來御家中之人々家內之女、且召仕候下女末々に至迄、右樣之族無之樣嚴重可相守候。帶抔之儀は是迄格別御貪着も無之候故、別而分限不相應之品をも相用候躰、不埒之儀に候條、向後花美成品々堅可爲無用候。將又歷々之面々家內妻子等、押立たる時分相應之衣類も可有着用儀に候得共、是以後麁品相用候儀可爲專要候。自今花美成衣類・簪等、目立候不相應之品用候者有之候はゞ、夫々相咎、名前等承屆候樣役人共江申渡候。且又右躰之品猥に爲致商賣申間敷旨、町奉行等へ猶又嚴重申渡候條、可有其心得候。

丑　三　月

御勝手向連々御難澁に候處、當時甚御指支に付、今般格別御儉約被仰付候。御家中之人々儉約之儀、前々より被仰渡置候處、心得違之人々も有之、內輪に而費之筋等多、慕方惰弱之躰も相聞え、曁無用之參會、音信贈答次第に增長之躰、畢竟人々心得方等閑に候間、前々被仰出候通、猶又無違失嚴重可相心得候。此段可申渡旨被仰出候。

丑　三　月

御家中之人々儉約之儀、幷女共衣類等之儀に付、別紙兩通相達候條、被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配へも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候、以上。

三月二十二日　　　　　　　　奥村左京

竹田掃部殿
遠田誠摩殿
永原久兵衛殿
前田清八殿

付札、町奉行江

女共衣類之儀に付別紙之通一統相觸候付、寫相渡之候。町方之者共當時別而分限を取失、上品榮耀之品々を相用、奢侈致增長候躰沙汰之限に候條、夫々嚴重相制候樣、町役人江も可被申渡候。衣類等宜品は猥に不致商賣樣、是又急度可被申渡候事。

丑　三　月

三月廿八日。金澤城石川・河北兩門外にて下馬下乘すべき位置を嚴守せしむ。

〔御用番方幷御城方御用之覺〕

一、先月廿八日勢州より御横目へ被相渡候覺書左之通。

付紙、御横目江

勢州は前田孝友
先月は三月

石川・河北御門外下馬下乘之儀、兩御門共一之御門より二十間計下り、段々下乘等有之候樣前々申渡、天明六年にも一統申渡候趣有之候所、近年違失之人々も有之、一之御門へ近く下乘有之、込合樣子相聞候條、左樣之族無之樣夫々可被申談候事。

三　月

三月廿八日。城內の會所盜賊の爲に襲はる。

〔江戶御留守諸事覺書〕

三月廿九日

一、昨廿八日朝五時前、會所より御服所役所異變御座候由及案內候付、早速武貞助等足輕召連罷越、役所樣子見分仕候處、賊入候躰に而、入口杉戶押木尻ほう穴、鑿躰之品に而削起し、鎖封前其儘に而土間に落し有之、入口杉戶障子明放有之。其段會所へ及案內候處、役所內見分之上相違候樣申聞候。依之役所之內長持二鎖前封前無相違、其內一つ鎖放し明懸、一つは少手懸候躰に候。簞笥三つ鎖おろし封付置候內、一つは少手懸候躰。御料紙等入は板戶鎖おろし封付置候處、其儘に而板戶二枚も取放。內風呂棚三つ共鎖おろし置候內、一つは鎖之儘はづし懸、一つは鎖之儘前戶取放、一つは鎖こじ明懸御座候。御品物相改候處相違無御座旨、武貞助・秋山嘉十郎以書付及達候事。

一、會所奉行よりも右之趣及達、泊番御算用者杉村杢平幷小遣共手前相伺候處、夜中不時御用等に而御門出入無御座候。入口御縮方相違無御座候。今朝御縮所入口鎖前押木土縁に落居申候付、其段小遣共より御服裁許へ及案內、猶更會所中見廻り申候處、會所園之杉垣押分賊出入仕候躰御座候。外相替品無御座旨、水野源兵衛及達候事。

右之趣に付、猶更番人共手前もとくと遂穿鑿候樣申渡候事。

四月十三日。寺社にして故なく田畑等を有するものを屆出でしむ。

〔筒井舊記〕

寺社方拜領地等之外、俗稱に而持高有之候得者、作配田畑曁山御役銀相立來、持山茂可有之儀。右之外無謂無年貢之田畑・山等作配仕儀無之筈に候處、若村々之內右躰之品有之候はゞ、承合可申上旨御改作所より被仰渡候間、無謂も寺社方作配田畑等有之候はゞ、御しらべ御達可被成候。此狀先々御順達、落着より御返可被成候、以上。

四月十三日　　　折戶源助

仲間宛所

四月十四日。前田齊泰、城外小立野に行步を試む。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

俗稱とは寺社が假に百姓名を冒すことをいふ

四月十四日勝千代樣御行歩御出、國老橫山三郎小立野上野下屋敷に被爲入候。

四月十六日。大聖寺侯前田利之幕府より淺草御藏火消を命ぜらる。

〔諸事留牒〕

四月十七日

一、昨日備後守樣に御老中御連名御奉書、淺草御藏火消被仰付候段、前田主膳より申來る。

一、前田主膳より紙面到來、備後守樣御內用申聞度候間、御屋敷に可被越刻限等申來候に付、明日四時過可被越段申遣候事。

一、備後守樣御使者村井長八郎罷越、今般淺草御藏火之御番被蒙仰候處、御馬不足に付、火事之節此方樣御馬之內二疋充御借用被成度段御願被成候。且又明日にも御指支被成候間、御家老中之以取計、是迄之御振に而、明日よりも御借用被成度之趣、長八郎申聞候段御用人渡邊久兵衞申聞る。

一、各御借馬之儀、割場奉行御馬配之儀不指支候哉之儀相尋候處、當時前田信濃守殿御借馬も薄候間、一疋之儀は先當時之所不指支樣申聞候事。

四月十八日

一、山本久左衞門申聞候。昨日備後守樣御貸馬一疋は不差支段御達申上候得ども、相考候處、

御屋敷は加賀藩の本鄉邸

前田信濃守は高家の幕臣

信濃守殿御借馬猶薄候へども、淺草筋出火之節信濃守殿借用被相願候儀有之而は、必至と御差支に御座候段、左之通以覺書相達候事。

備後守樣より御馬兩疋御借用被成度に付、猶更御馬配之儀相しらべ御達申上候樣被仰渡、則夫々詮議仕候處、別紙御馬配之通りに而手詰之御馬高之內、前田信濃守殿御借馬も有之、當時之所差支申候間、右御借馬兩疋之御手當は猶以指支申候。依而兩疋宛御借馬之儀に御座候はゞ、御國表より御使馬之內兩疋、早速爲御牽御座候樣被仰遣候樣仕度奉存候、以上。

四　月　　　　　　　　　　　　　　山本久左衛門

横　山　藏　人様

右之趣相達し申候。當分之所被仰渡候へば、一疋は被遣候ても大躰御手合可申候。是とても必と申儀は相成間敷段申聞候に付、先例も往返之間拙者共計ひを以、壹疋御用立候樣申遣御振も留帳之內相見え候に付、今度右振に計遣候間、右之段相答候樣御用人渡邊久兵衛江申入候事。

一、前田主膳罷越申聞候は、今般備後守樣淺草火之番被蒙仰候處、御勝手方御逼迫至極に御座候間、何卒以計金子三百兩御振替被成度段申聞候に付、御屋敷表にも當春より格別御省略も被仰出、迚も三百兩御振替申儀抔相成間敷候。私取計候樣被仰下候へども、一存を以申上

がたく、猶更詮議可致段、申入候所、猶更覺書を以申聞候に付左に相しるす。

備後守様今般淺草御藏火之番被蒙仰候付而、指懸り火消道具、幷御藏懸り御役人中に御送物等御座候處、御勝手振前々被仰上候通、御指支のみに御座候得ば、不時御入用之儀は少金迚も御手當無御座候故、公用首尾能御勤難被成、御役人中當惑至極仕候。尤金府表ゟも、御家老等罷出相願可申候得ども、於此表差懸り御入用金一圓御才覺出來不仕候間、先三百兩御手前様御取計を以、御振替被成遣候様御願被成候事。

畢而

御防被蒙仰候者、前々之通御加勢御小人二十人御借用被成度、先達而御願被仰上候處、御許容被成進候。然處今般淺草御藏火之番被蒙仰、過分之御人數被指出候事故、御人支に而御當惑被成候。依之何卒今二十人御借用、都合四十人御加勢被成遣候様、是又御願被成候事。

一、渡邊久兵衞申聞候は、木村長八郎只今罷越候に付、一疋御借馬之儀は、此方様御指支之儀に御座候へども何分御用立可申候。此迚も必と申儀申がたく段申入候處、左様候はゞ此方様御概迄、御合紋着束指越置、文化十年之通致度段申聞候由申聞候事。

五月十三日　晴

一、備後守様御振替金之儀、今日申來。三百兩之内二百兩御振替被遣候間、前田主膳ゟ可申

今日申來は金澤よりの指令なり

村遣、且御人數今十人都合三十人御加勢被成候。是迄之通銀子に而被遣候間、此儀主膳江可申遣旨、安房守殿より申來候事。

四月十九日。金澤城の惣構御堀筋等に塵芥を捨つることを禁ず。

〔御觸拔書〕

惣構御堀筋幷藪之內江塵芥捨置申間敷旨等之儀に付、委曲別紙之通町奉行申聞候。前々より毎度相觸候處、猥成儀に候條、右族無之樣、家來末々迄急度可申渡候。則別紙寫相越之候條、被得其意、組・支配之人々江嚴重可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

四月十九日　　長　甲斐守

惣構御堀筋幷藪之內江塵芥捨不申樣、前々より被仰渡置候處、近年甚猥相成、塵芥多く取捨、御堀も埋り申族に付、今般江被仰付候。依之町中江者改而嚴重に申渡候得共、御堀邊武士屋敷よりこゝへ捨候者も多、橋番人より見咎候得ば、下人共却而雜言抔申入、制し方行屆兼候躰に而、御締方相立不申候間、以來下々心得違無之樣、主人々々より嚴重に申渡置候樣仕度。尤右躰之者於有之は、橋番人幷町付足輕共、於廻先急度見咎、主人之名前をも承糺、及

屆候樣申渡候條、此段一統被仰渡候樣仕度奉存候、以上。

丑四月七日　　山崎小右衞門

前田清八

長甲斐守樣

四月廿二日。諸郡御扶持人等を召して引免復舊の方法を講ずべきことを命ず。

〔郡方御觸〕

郡々引免立歸之儀、御算用場奉行幷改作奉行ゟ夫々被仰出候。第一御取箇先年与は相減候儀、畢竟立歸等之詮議も不行屆故与思召候間、格別に可相勵候。御勝手向茂累年御難澁之處、次第御手操六ヶ敷、不作等之御取救茂難被成程之御時節に候間、猶更村柄等精誠遂詮議、手上高等之儀茂何茂無泥相心得可致出情候。此段被仰出。

丑四月

右御書取、御郡之御召御扶持人田中村小四郎等十五人、御次ゟ御用之旨丑四月廿一日改作所より申談、翌廿二日五つ時御算用場詰所ゟ相揃、五つ半時登城、着束裏付裃、木綿袷。二之御丸御式臺之南中之口より入、柳之御間後ロ御廊下に而溜り、四つ半時御次ゟ罷出候樣にと有之、廣瀬欣

左衛門誘引（帶刀御杉戸側に取。）御次波之御間ゟ出、二重に列座。座定而御用部屋人見吉左衛門出席、被仰出之御書取被讀上、欣左衛門ゟ被渡、欣左衛門より田井村次郎吉ゟ相渡、御扶持人一統拜見。下城、直に御算用場復古所に會盟致し候。

〔郡方御觸〕

今般引免立歸方等申渡覺書

一、御扶持人・十村寄合、復古米幷勢子米・御冥加米等村々割符相極置、寄合所ゟ村々肝煎・組合頭・長百姓之内一人宛呼出、先引免立歸村々迄呼出、次に手上高・手上免村々呼立、近年御上表御手操六ヶ敷、御米不數に而、非常之御手當無之。既去作不熟に而無據御貸米被仰付候得共、御米不足仕候に付、御聞屆之内當春渡に被仰付、御拂米之内御買返御召米を以御渡に候處、右御召米代銀等御指支、當春町・在より御借り銀被仰付候内より御渡に而、御辨じ被下候族に付、當春夫食御貸米茂御渡方指支、當新穀を以御渡之段被仰渡。右様御勝手向御指支に而は、此末非常御救可被仰付様無之。然時は百姓中開作茂難出來場に至り候而は不輕儀、大切至極之趣に付、種々御詮議之上、格別に御省略方被仰出候間、御かり銀等も被仰渡候事に候得ば、村々引免等爲立歸、手上高・手上免等爲致、種々馴合を以、少分に而茂右等之御手當不被成置候而は不相成趣に付、當四月御領國御扶持人御次ゟ被召出、前段之御趣意

被仰出候上、御算用場御奉行・御改作御奉行所より、御扶持人・十村一樣御呼出、譯而被仰渡候而、重々御詮議之上、右之通勢子米等御渡立歸方、并手上高・手上免等被仰渡候間、百姓中一統心服を以、御請書指出可申旨申渡、村々立歸免帳等讀聞、御請印形見屆可申候。且又立歸方并手上高等行屆不申に付、御貸加米を以爲指上可申旨に候得共、立歸方三ヶ年季御引上に付、當年は御貸加米被仰渡は無之、猶此儀は來年被仰渡候筈之段可申渡事。

一、新開高之儀、前條之趣に付、今年格別之御詮議被仰渡候段可申渡事。

一、前條之通引免立歸方・手上高・手上免御詮議被仰付候に付、外村々之儀茂、御貸加米爲指上可申旨被仰渡候間、御請可指出可申渡事。

一、村數多御郡は、一日に引免立歸村三組程呼立申渡、手上高・手上免村并御貸加米迄之村は、一度に呼出可申渡事。

一、御貸加米割符之儀、引免立歸・手上高・手上免茂不仕村々江割可申、尤高一石に付五合當りと、高一石に付三合當り位に仕、村々二段に撰び分け割渡可申候。左樣に仕候得ば、割符當り不足可仕候間、此分勢子米渡り之内を以引足、割符當之通爲指上可申儀に御座候。則右之趣小紙を以御窺申上候處、御聞屆に而御座候。然時は來年勢子米相渡り不申時、指支申道理に御座候得共、種々指支之筋有之、右之通り相極り申候。尤勢子米借狀帳等は先上げ申に

不及、追而委敷及御相談に可申儀に御座候。引免立歸り村、手上高・手上免仕候村々は、御冥加米割懸申儀に被成間敷候。呉々御趣意通り相違不仕樣、御心得可被成候、以上。

四月廿二日。引免を復舊するが爲十村をして各支配地の實情を上申すべきことを命ず。

〔郡方御觸〕

改作方之儀、其品々多端之內、第一免合指引等之儀、是迄右奉行種々加詮議來候得共、山川之變地或地味劣等に而引免相增、往古与者御取箇過分に相減候。御運方茂御逼迫至極に相成、急難之御取救難被成、御公務相欠け可申程之處ニ至り候に付、格別御省略被仰出、御手廻りを初御樣子違候躰。隨而右立歸り方等格別遂詮議候樣被仰出に付、改作奉行より追々申渡可有之候。先以十村之儀、重々相撰數村之司役に被仰付、數代御用相勤候者多く罷在候儀に候得者、專ら御國恩を存付、格別心得方茂可有之、其儀違失之者も有之程に付、拙者共存寄直に申渡候。一統改作に被仰付年久敷相立申事に候得者、村柄等に因て取扱方差ひ申儀茂可有之候得共、いつとても變地等難事之品者時々申出、餘田・手上等之儀者甚稀に候。元來畦畔切廣げ踏出等於有之者、手上等之取扱も可有之儀。ヶ樣之儀者、其所々樣子常に會得に候者に而無之而者難申出、變地場所之內に茂、地元者追々起返り、免相進み兼、不正之族茂候躰

相聞え候。惣而右等之儀者、十村共司職に預り候事に候。新開願場所等も、古田之差障り等、彼是事々敷申出候得共、左様之處者双方打返し遂詮議、何分御為に可相成儀は早速可相達處、詮議方延々に相成、不行届事に成來り候。別而無組十村之儀は、組持十村共手前自他郡之差別なく、一躰心を用ひ、無泥平等為可相糺被仰付置候處、何れ茂躰能馴合候儀を専要に相心得、取扱方心付候儀も指扣罷在候躰、其詮も無之事に候。已に此間改作奉行江申談、其方共之内人別に存寄承り候處、是迄之姿を以躰能書出候通に而、取扱方等譯立候品茂不申聞に付、此度者御上御様子等、右之通り其方共江申聞候事に候。尤改作奉行より書取も可相渡筈に候條、其方共何分盡心力、一郡々々可相當仕法、并一郡之内も組々に可相當取扱方等、夫々遂詮議可申聞候。平十村之儀者、外組之儀少茂無貪着、持組切り人々出情御用立、其様子可申聞候。如斯御運方御急迫至極に而者、若不作等に而も御取扱難為成、及御公務欠け申處江被為至候而者、誠に奉恐入儀に候條、此度何れ茂急度相心得可申候。將又高持共之內、田地卸方等、地位に不相當取究茂候躰、粗承り請候儀有之候。前々より其土地に應じ、卸方大抵取圖り可有之事に候條、非義之族無之様、綿密に遂詮議取扱可申候。

右今般引免立歸り方等に付、拙者共江も譯而被仰出有之に付、組々取扱方等之様子承り度、右等之趣直に申渡候。人別に申渡度儀に候得共、大勢之儀、先其方共迄申渡候之間、夫々急

速可申談事。

丁丑四月

右書取、四月廿二日諸郡御扶持人、御算用場奉行御用番井上井之助宅江召寄、前田才記・遠田誠摩、引免立歸方御用主附改作奉行廣瀬欣左衛門・大平欣太夫立會、遠田誠摩より右之趣演說相渡候事。

四月廿八日。圖り免新開の田にして地味の古田と等しきものは免合を増さしむべきことを命ず。

〔郡方御觸〕

年古圖り免新開之內、古田同様之地味に候處、免相圖り方不行屆躰に相聞え候に付、御當節之儀に候間、格別加詮議可申、且是迄村免一免下り等、定免に相成居申內にも、本村免同様之場所茂有之躰相聞え候。手上免等之詮議方可有之事に候間、都而組々裁許手前において綿密致吟味、格別免相爲進可申候。尤右之趣、新田裁許江も嚴重に申渡候間、是迄之仕癖に不拘、面々御奉公之筋大切至極相心得、出情可致候事。

丑四月廿八日　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

四月。前田齊泰の側小姓三人を選定す。

〔金龍公記史料〕

四月。選人持二男頭分嫡子六歳至十歳者。□月□日以三人。爲勝千代君側小將。給衣服料五十兩。後給百八十石。

四月。金澤片町の町人堂後屋家道振はざるを以て役銀の免除を請ふ。

〔國事雜抄〕

片町堂後屋三郎右衛門儀、先祖町役御免之儀、瑞龍院樣・微妙院樣御印物等致頂戴罷在候處、其後勝手相應に相暮候に付、町役勤不申候も恐入候に付、寶永元年相願町役勤來候處、近年及難澁、家相續仕兼候族に候へ共、一旦相願町役勤候儀に付、本人より願候儀指扣罷在候由に而、組合之者一統紙面を以、以後町役免許之儀相願御印物等寫も添指出候付、遂僉議候處、二百年來片町に罷在、古き家柄之儀、代々篤實之者格別に付、今日左之通覺書を以申渡候事。

片町　堂後屋三郎右衛門

三郎右衛門先祖江、御先代より町役御免之御印物被下置、今以所持罷在候處、中頃より町役相勤候へ共、近年難澁之躰に相聞え、古き家柄格別之者に付、向後町役之儀御印物之通可相心得者也。

四月。百姓等に分限不相應の奢侈をなすことを戒む。

〔司農典〕

前々より四民風俗之儀、度々被仰出も有之處、近年悉奢侈之風儀致增長候に付、今度諸士一統曁町方江も嚴重被仰出有之候。諸郡共專難澁乍申立、右之風俗押移り、百姓分不相應至極之奢甚敷、第一十村共其外身元宜敷者共之內にも、儕上之族多、都而家內女共衣類抔も分限不相應之榮耀を盡し候躰相聞得候。十村之儀は別而役向も有之、急度心得方も可有之處、本意を違失いたし、隨而小前之者迄も衣類等萬端士民之風儀取失候族、皆以沙汰之限に候。畢竟一統難澁之基与相成候儀、於各にも常々制方可有之候得共、如此猥に致增長候儀は申譯も無之事に候條、末々迄急度相改候樣嚴重可被申渡候。尤以來無油斷役人等相廻、急度可被相制候。若不相應之儀於承及には嚴重可申付候、以上。

四　月　　　　　　　　　　　　　　御算用場

諸郡御奉行中

改作御奉行中

四月。能登邑知潟の周圍に千九百餘石の新田を開墾せんことを出願す。

〔眞館藏書〕

一、近年羽咋郡深江村小兵衛与申者、邑知潟之内新開三千石高程奉願候所、去る十月御僉議之上、千石餘程は右潟縁村々江被爲仰付、右村方に而は十ケ年之内開詰可仕樣御請仕候得共、發願之小兵衛儀は未下御證文も無御座候に付、共節再願仕度奉存候得共、兼而小兵衛發願之砌より、御上江御難題申上間敷、自力を以開發可仕与兼而工夫仕候樣子に御座候得共、兎角大望之儀候故難及自力候に依而、小兵衛儀私方江銀主相談に罷越、猶又新開願之儀も仲間開に致吳候樣申聞候に付、尤之儀与被存、私方にも銀主等聞合候所、少々仕入方も可仕与申聞候銀主も御座候故、堀切瀨造等仕候はゞ、一兩年之間には二千石高程は急度開發可仕候。左候得者御益之筋合与奉存候故、兼而私共役儀被爲仰付候節より、不依何事御益に相成候儀は無泥可申上旨被爲仰渡候故、今般加入仕、子四月迄繪圖等迄も相調、御郡御奉行所江御願奉申上候所、右樣願之儀は、口郡御扶持人樣方江示談之上、御改作所江御願申上候樣被爲仰渡候に付、奉得其意、則口郡御扶持人中樣江相廻候所、其餘潟縁村々江相廻、納得無御座候而者難致出來趣に付、彼是時節も相後候に付、是迄指扣罷在候內、右約束之銀子も間違申候故、當早春より奉願上度奉存候得共、未だ銀主等も無御座候に付、彼是延引仕罷在候內、今般御尋被爲下候所難有仕合に奉存。尤先達而新開仕立方仕法之儀に付書付を以申上候所は、柳田

村領柴垣村迄掘通可申旨奉申上候得共、此儀は得と見聞仕候所、元來大石多相見え候山筋に候得者、容易に難掘通奉存。殊に水吐之儀者、五ヶ年与歟十ヶ年与歟新開普請中之水吐に候得者、過分入用相懸候而も不益之儀与奉存候間、今般御見分奉願候堀切之筒所、柳田村領より一宮村鳥居之南方迄間數凡十五町計掘切候得者、早速水吐出來仕、過分入用も相懸不申様奉存候間、此所今般御見分被下候様御願申上候。勿論水吐出來仕候上者、潟内川筋相定、金丸出村長曾川より羽咋川口迄、川幅五十間与歟左右旄朶圍に仕、所々小川不殘取込、洪水之節は川上より大砂を切流、潟内淺候様に仕候得者、早速御田地に相成可申与奉存候。猶又子浦川之儀者、近在之大川に候所、羽咋村領之内より直に川尻迄流出候に付、羽咋村に而者田畠之通路甚だ不勝手之川に候故、幸此川筋瀬違被仰付、立開村下之方より深江村領之内幸惡田之所へ指向候故、此所十町計潟之内迄切通候者、金丸出村長曾川馳出より倍増に馳込候故、彌淺成可申与奉存候。左候得者羽咋領之内川跡に而、深江村御田地切通之替地は此所出來可仕候間、何卒此瀬違場所も今般御見分被下候様奉願上候。猶又柳田村後山・千路村後山・鹿嶋路村後山等より、雨天之時節には谷川江切込候様被仰付候者、立川に候故早速馳埋可申候。其外何れ之川筋に而も、雨天之節川上より切流候得者潟内馳埋、五・七年之間には凡一萬石高にも相成可申与奉存候得共、唯今之所人氣惡敷時節に候得者、下々之銀主に而者容易に出

來仕間敷候間、乍恐此所御僉議之上、宜被仰付候樣御願申上候。

右今般御尋に付、堀切幷瀨違御見分被下候箇所申上候。柳田村・一宮村濱手迄十五町堀切一ヶ所、子浦川之裾立開村之下方より深江村領之內潟迄十五町計瀨違一ヶ所、右二ヶ所之分今般御見分被下候所、箇所付書上申所如斯御座候、以上。

文化十四年三月　　鳳至郡道下村　丹　次

武部村　四郎太夫殿

福留村　六郞右衞門殿

加納村　兵　衞殿

羽咋郡深江村小兵衞与申者、近年邑知潟內新開三千石高程願上候所、去々月御僉議之上、千三十四石高程は右潟緣十四ヶ村へ被爲仰付、右村方に而は十ヶ年之內開詰可仕樣に御請仕候得共、發願之小兵衞儀は未だ下御證文も無御座候に付、此度再願仕度奉存候得共、兼而小兵衞發願之砌より、御上表ゟ御難題は申上間敷、自力を以開發可仕与兼而工夫仕樣子に御座候得共、兎角大望之事故難及自力候付、此度小兵衞儀私方ゟ銀主相談に罷越、猶又新開之儀も仲間開に致呉候樣申聞候に付、尤之儀与奉存、私方にも銀主等聞合候所、少々仕入方も可仕与申聞候銀主も御座候故、先に奉申上候通、一兩年之內には二千石高程は急度開發可仕候。

左候得者御益之筋にも相成可申与奉存候間、乘而私儀役儀被爲仰付候節より、不依何事御益に相成候儀は可申上旨被爲仰渡候に付、今般加入仕候間、何卒新開成就之所御願奉申上候。

一、千九百六十六石高程　　邑知潟縁十四ヶ村地元に而新開奉願上候。

右新開之場所先達而三千石高程与奉願上候所、去十月御僉議之上、千三十四石程は潟縁十四ヶ村ゟ十ヶ年之内開詰仕候様被爲仰付、御請仕候得共、相殘候千九百六十六石程は何卒私共ゟ被爲仰付候樣御願奉申上候。

一、新開高用水之儀は、潟水を以汲揚候而養申に付、古田之用水は一滴も費申儀無御座候。

一、大町・金丸御藏所より御米潟下之儀は、羽咋川筋往古之通に御座候得共、萬一川口等淺せ通路指支候節は、開發支配人より掘通、御米潟下之通船者不及申、都而川筋相立候而指支不申樣可仕候。是迄御米潟下之時分、川筋淺候得ば、御上表より人足賃銀被爲仰付掘通候儀に御座候。

一、潟之内所々常水之淺深甲乙も御座候得共、大躰兩年之内には二千石高程は急度出來可仕候。就夫潟縁十四ヶ村ゟ被爲仰付候千三十四石之新開者、自然与出來可仕候間、何卒御僉議之上、私共願之通下御證文被爲仰付候はゞ、前段千九百六十六石程之新開は、一兩年之内には急度開詰可仕候得者、往々は一萬石高にも相成可申与奉存候間、早速願之通被爲仰付候は

ゞ、近在小前者共請作等仕候而も、諸人永々之渡世にも相成可申与奉存候間、何卒御慈悲之上御僉議を以、早速下御證文被爲仰付候はゞ、何時に而も普請方に取懸申度奉存候。願之通被爲仰付候はゞ、難有仕合に奉存候。爲其書付を以御願奉申上候、以上。

文化十三年四月　　道下村　丹　次

進士求馬殿

中村逸角殿

四月。鹿島郡和倉溫泉懸札等の件に關し上申す。

〔諸書物留〕

私組下和倉村溫泉嶋湯ざや之内桁に、盜賊御改方御役所より、湯番徒所口町和倉屋庄五郎名當に御渡之御縮方御調板札、幷こき棒懸候に付、和倉村役人より庄五郎に及懸合候趣等、書付を以及斷、尤右札寫指出申に付、左に繼立御達申上候間、宜御僉議被下候樣奉願候、以上。

丑四月　　高田村　由五郎

進士求馬殿

中村逸角殿

書付を以御斷申上候。

和倉村溫泉湯番徒所口町和倉屋庄五郞儀、當月十九日肝煎吉左衞門方江罷越、湯之嶋之內に御縮方之札相建度、依而村方一統江申入度趣有之候間、百姓中寄合之折可申入旨申聞候に付、一往に返答も難相成段庄五郞江申入相返置候。然所同廿七日私共農業に罷出在合不申內、長三尺五寸計幅一尺二寸計新しき板に、盜賊御改方御役所より庄五郞名當にて御縮方之趣御調之札、湯ざや之內桁に懸、其下に長五尺計之こき棒一本懸在之候に付、同廿八日庄五郞幷悴孫十郞呼寄、如何之趣に而村方江無案內札懸置候哉。若麁抹等有之候而は、御上表江も御難題、彼是不容易儀に候間、夫々御裁許江御窺申上、受御指圖不申而は爲懸申儀難相成、引取候樣申入候所、安永六年金澤御改方より御渡之御札、其上當年改而被仰渡之趣有之、當春孫十郞儀出府仕御用方承り、勿論先達は御改方より目附御用迄も蒙候而懸置候得ば、引取申儀難相成。和倉村地之儀は御郡所御支配に候得共、湯之嶋之分は所口町御奉行所御支配に而、庄五郞勝手次第に可仕抔与申聞候に付、段々及懸合候所、庄五郞方に慥成由緖在之段强而申聞候。右湯之嶋所口町御奉行所御支配与申儀、庄五郞申聞方何分難心得奉存候。庄五郞儀、湯治人々より湯賃取立候而已之所作に而御座候所、右之通申成し候儀、甚以心外至極奉存候。近年庄五郞等我儘之致方時々有之候得共、御支配之者故夫成に仕置候儀も御座候所、次第增

長仕候而ヽ此末如何躰之儀申工み候哉難計奉存候故ヽ幾重にも此段御賢察被成下ヽ庄五郎幷
悴孫十郎手前急度御糺之上ヽ心得方等夫々被仰渡被下候樣奉願上候。右御禁札年號安永六年
に御座候得共ヽ年を經候札与は相見不申候。依而右札寫相添御斷申上候ヽ以上。

文化十四年三月晦日

和倉村肝煎　吉左衛門

同村組合頭　市左衛門

高田村　由五郎殿

定

一、入湯人御法度之賭之勝負堅致間鋪事。

一、無病成者入湯致ヽ紛敷躰有之候者ヽ遂詮議糺爲相立可申事。

一、入湯人猥成族曁申分等不致樣可申付候。其外湯主庄五郎申付候通相守可申事。

右申渡置三ヶ條相守可申者也。

安永六年十月

盜賊改方役所

涌浦湯主所口町庄五郎江

此札表に、

文化十四丑年改而被爲仰渡候に付出來。

湯主所口町　孫　十　郎

右之通御郡所ゟ斷在之所、改方御奉行所へ御通達在之候所、所口町庄五郎手前御僉議在之候樣子之所、御指圖を受懸申にても無之由に而、取除方被仰渡候段御郡所へ申來、則高田ゟ取除申筈之旨御郡所より被仰渡在之。尤庄五郎より取除申候。其砌改方奉行矢木和右衛門足輕召連廻村、和倉村ゟ止宿、高田手代茂三郎ゟ足輕より咄之振に而、右湯之嶋は所口町之嶋か又は和倉村之嶋かと尋申に付、前々より和倉村之嶋与申候与答候得ば、何ぞ證據在之哉与尋候に付、其儀は如何候哉私は不奉存与申答候。

一、矢木より孫十郎呼出、右札懸候儀沙汰之限、其上がさつ之族も在之躰。別而一刀を帶候儀、何れより申渡有之帶候哉と察當有之所、申開き無之に付大に被叱、以來心得違無之樣嚴重申渡有之候旨、高田手代茂三郎申聞候事。

五月朔日。前田齊泰及び弟他龜次郎の爲に幟を城內に建つ。

〔金龍公記史料〕

五月朔至五日建幟于土橋門內如前年。又爲他龜次郎君建之。

五月十日。犀川に於いて鑑札を有せざる者の漁撈に從ふを禁ず。

〔御觸拔書〕

別紙寫之通一統申談候樣、御横目ゟ申渡候に付、爲御承知進之候、以上。

五月十日　　本多安房守

御横目ゟ

才川魚殺生請負人三社町竹松屋幸助相勤居候處、病身に相成爲代、去秋より崗田町大豆田屋清助請負いたし候。投網・小目網・流網・鮎飛網・練網・片瀬簗等之致殺生候者は、川師より札を請可致殺生處、又々近頃甚猥に相成、簗下迄茂無貪着罷越、川師より彼是申入候者、打擲にもおよび可申躰に而、制し方茂致兼、迷惑至極之段毎度申出候得共、先見合置候處、此節次第に増長之躰に候條、以後川札不取請、右投網等之不致殺生樣、嚴重申渡候樣仕度旨、町奉行申聞候條、前々申渡置候通、急度可被相心得候。

五月

右之趣一統可被申談候事。

五月十七日。西本願寺の使僧宗意安心を敎諭する爲來らんとするを以て寺庵の心得方を告ぐ。

〔異本三守御譜〕

五月左之通觸、寺社奉行寺庵等へ申渡候覺書。

西方一向宗宗意安心之趣、諸國及惑亂に候付、公儀御裁判に相成落着被仰渡候後、本山より宗意裁斷之使僧下向有之、教化可有之筈に候得共、右一件に付一派之寺庵等重々願之趣に付、是迄數年及延引、御難題事共に相成候。乍然諸國共教諭之使僧相廻候間、御領國而已此儘にては、畢竟不相濟譯合に付、御憐愍之上今度教諭方之次第等、諸國並に相替、格別本山へ及示合に候處、深御慈愛之趣を以、不遠內には使僧被指向教諭有之、一通り之請印取立申筈に候。右之通段々御詮議之上之儀に候間、穩に相愼、教示之趣承り、請印仕可申候。若其節騷々敷不心得之趣も候はゞ、急度可申付候。寺庵幷門徒共心得違も無之樣、相心得可申候事。

丑四月

西方一向宗宗意安心之儀に付、本山より使僧被指向、宗意教諭有之度旨、每度申來候得共、本山存分に教諭有之ては、御領國之僧俗不會得に至、御難題之筋出來も難計に付、本山家司へ懸合、是迄使僧下向之儀延引相成候。併本山より公邊へ屆方も有之に付、此儘に成行候ては、事濟候期も無之、御領國迄教諭無之儀、於本山不相濟事故、使僧下向之儀尙又申來候。依之教示方之次第等段々詮議之上、諸國並に相替、格別本山へ及示談、不遠內には使僧被指向教諭在之筈に候。則別紙寫之通寺社奉行より寺庵等へ申渡候に付、此趣意を以御領國三州

町・在同派之者共へ得与申諭、使僧下向之節騒々敷不心得之族無之様、夫々嚴重に可申渡旨、御算用場奉行等へ申渡候。依之諸組等足輕・小者共外御家中之家來末々同派之者共も、心得違無之様に急度可申渡候。且又右使僧下向之節出迎之儀、幷頭寺等において教諭方披露之節、參詣之儀堅不相成候條、此段も可申渡候。

右之通被得共意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、共支配へも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得共意候、以上。

五月十七日　　本多安房守

五月廿一日。昨今兩日前田利命の十三回忌法會を寶圓寺に修す。

〔金龍公記史料〕

五月廿日・廿一日修香隆世子十三回忌法會於寶圓寺。奉行奥村助右衛門。

五月廿二日。能登の幕府領へ菜種を賣渡し得ることを定む。

〔御郡典〕

御預地黒嶋村江、御私領菜種買入申度旨、前田源六郎等より申聞候。菜種之儀は御縮方も有之事に而、指遣申儀は不相成振合に候得共、御私領出來菜種不指遣而は、御預地之者燈油指

支之所江も至り申儀に付、以來は能州菜種村々入用無之分は賣渡可申候。尤於御預地方に、出津之儀は不相成段堅申渡置候。且御預地方江賣渡候菜種高、毎年書出候樣可被申渡候。

五月廿二日　　　　　　　　　　　　　　御算用場

進士求馬殿

中村逸角殿

右之通申來候條、得其意、以來御預地方江菜種賣渡候はゞ、員數高可書出候、以上。

中村逸角

能州口郡十村中

五月廿三日。江戸詰の者に物價高直を理由として救濟を出願することを禁ず。

〔異本三守御譜〕

五月廿三日左之通觸。

別紙を以申達候。近年御逼迫至極之内、不時願方多、其時々無據御調達を以御貸渡も在之に付、彌以御借財過分至極に相成候事に候。元來江戸御扶持方一日一升之御定は、諸雜用之爲一人に二人分被下候趣に候。直段之儀は、以前は中之頭米時々之直段にて被下候得共、明和

九年御詮議之上、其節之中之頭米價高下押平均、一石百七十目之定直段に御極之事に候。然處御省略に付、其後御詮議にて少充は替り候得共、當時は右御定直段に十匁充被減、百六十目に相極り候。足輕以下は餘計無之もの故、格別に以前之通被仰付置候。然ば米甚拂底にて、右直段には難引合程之節は格別、容易に增相願ひ可申儀にては無之候。近年米價高貴至極与在之候而も、一石百六十目に難引合程之儀は不相聞候。殊に御屋敷へ取入候米は、隨分上品之躰に候。今般格別被仰出之上に候間、若右より高貴に候共、只今よりは下品相用ひ候樣に仕候はゞ引合可申。諸色之儀も、前段之通元來諸雜用之爲一人に二人分被下候儀に候間、其心得にて遂勘辨可申儀。金相場も高貴に候得ば、其圖りを以費無之樣相心得、如何にも取續可相成候。尤右被仰出候之上、何茂急度心得可在之候得共、年若之面々抔、右等之委曲不心付儀も可有之哉与申達候條、此段茂一統可被申談候事。

江戸詰人近年米價幷金相場等高貴に付及難澁、御定之御扶持方代迄にて難取續旨にて、二季には願之趣在之、時々御貸渡等被仰付、右之外にも詰中彼是不時願等も申出、夫々相應に御聞屆も有之候へども、御勝手向當時別而御指支、格別御省略も被仰出候儀に候間、向後は容易に御聞屆有之間敷候條、何茂急度相心得、御小屋暮方等嚴重令節儉、不時願等申出間敷候。此段兼而一統申渡置候樣被仰出候。

右之趣被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。且又組等之内裁許有之面々は、其支配へも
申渡候様可被申聞候事。
右之趣可被得其意候、以上。
五月廿三日　　本多安房守

五月廿四日。西本願寺使僧下向の際之を出迎へ、及び教諭披露の節門徒惣代以外の參詣を禁ず。

〔筒井舊記〕
御付札、御算用場奉行江
西方一向宗宗意爲教示方、近々之内本願寺使僧下向之筈に候。右使僧通行之節、門徒之俗輩出迎候儀、幷教示方披露之節參詣之儀堅不相成候。併寺庵迄に而は、教諭之次第共疑心を挾候儀茂可有之候條、一ヶ寺に其門徒之内惣代一人罷越候儀者不苦候。此段心得違無之樣可申渡旨、遠所町奉行・御郡奉行江可被申談候事。
一、右使僧通行之節、幷逗留中御縮方之儀、三州共盗賊改方江申渡置候。猶更遠所町奉行等江茂、御縮方示合、騷ヶ敷儀無之樣可相心得旨、是又可被申談候事。
丑五月

別紙寫之通、御用番年寄中被相渡候條、被得其意、各支配之者共ゟ可被申渡候、以上。

五月廿四日　　御算用場

進士求馬殿

中村逸角殿

五月。能美郡小松町等に赤痢流行す。

〔螢𤐲光〕

一、文化十四年五月はじめ頃より赤腹はやり、小松にても人多く死せり。いづれも小兒小童、十八歳九歳の人もあり。六月・七月・八月までも死せり。毎日葬式を見る事四つ・五つ、盛なる時は十五・六・二十に餘りて葬式出たる日も有り。都而千人に餘れりといへり。

六月七日。富山藩の吏江戸に於いて加賀藩に金子貸與を求む。

〔諸事留牒〕

四月二十八日　曇。

一、淡路守樣御出、拙者ゟ御逢被成度被仰聞候由御用人申聞候に付、則罷出候處、中將樣御初益御機嫌よく被成御座、恐悅被思召候。其許無事被爲出府珍重と仰有之候に付、中將樣御初益御機嫌能被成御座候。私儀蒙仰忝次第奉存候と御請申上候處、此表朔日發足之含に候。

淡路守は富山侯前田利幹
拙者は横山藏人

留守中殘置候用人より、其許江示談之筋も可有之、且當分御振替金等之儀も時宜により可有之哉。先成丈は御難題不申上候趣に候へども、外邊向等之儀にかゝり、遠路之儀に候へば自然相願筋も可有之候。ヶ樣之儀も候はゞ、宜取計可申旨被仰聞候事。

〔諸事留牒〕

六月七日

一、赤尾權藏儀罷越、拙者江逢申度段御橫目申聞候に付、罷出逢候處、別儀に而も無之、淡路守樣御勝手御不如意に而、御指支がち之中ゆゑ、御國江申遣候處、行違に相成候哉只今之處御指支に御座候。何卒七百金御振替取計候樣致度段、尤一兩月之儀に而、御國表より來金有之次第御返納可有之候間、何とぞ宜取計候樣申聞、淡路守樣より拙者江被仰入候儀も御座候間、ヶ樣之節罷出可申達段被仰付候に付、罷出相願候由申聞候事。

六月九日

一、赤尾權藏罷越候に付、則逢候而、先達而被仰聞之趣致承知候。夫々遂詮議候處、御當節必至と御指支に而御逼迫至極、しかしながら先日淡路守樣御賴之趣も御座候間、三百金來月二十日頃迄之儀に候はゞ取計可申候。但先達之御書取之趣致承知候。御仕迯御指支候はゞ定而御國江被申遣候儀と存候。左候へば御調達方急に出來兼候に付、御賴被成候旨淡路守樣よ

り被仰付越候とか、又は御調達之儀此表ゟ被仰付越候へども出來兼候、若出來兼候はゞ相願候樣被仰付越とか申儀に候や相尋候處、此表御仕送御調達被申越候へども、一圓出來不申候間、何分此趣を以宜取計候樣。今般之儀無御據御返濟之趣有之、必至と御指支に御座候。只今三百兩御振替金御取計可被成段、此上相願候茂迷惑仕候へども、何卒願高之通には出來無之とも、今二百金計御振替被遣候樣仕度奉願旨申聞、暫扣罷在候間、何卒今一往御詮議被仰付候樣申聞候。且又從是申入候は、元來淡路守樣御振替金之儀は、文化元年御仕送御指延之節、御振替之儀御賴被成候處、一旦御斷之上、適少金之儀は御振替取計可申旨被仰出候。淡路守樣ゟも申上、御承知之通に御座候。然處餘り近年每度に相成候。去共是迄被仰立候御日限には御返濟相違無之事故、今般も右之通取計申儀に御座候。此儀は各方以後之御心得も有之候樣存候間、無急度御手前迄申入置候段申述候處、共儀私共も承知仕罷在候、猶更御心得可申段申聞候事。追而又坊主溜ゟ罷越逢候而、元來三百兩と申儀は夫々遂詮議候上之儀に而候間、此上共出來申間敷存候。只今御待候ても、今一往夫々御役人共遂詮議時は、間もかゝり候間、先御引取候樣存候。猶更可遂詮議候へども、是上之儀は難計御座候。去共追而詮議爲致候上、從是可申進段申聞置候事。

六月十五日

一、出席前赤尾權藏御貸小屋江參、此間之御禮申聞。且請取方之儀申聞候に付、前々之通相心得、今日晝後より何時にても請取候樣申談遣候事。

八月朔日

一、淡路守樣江先達而御振替金三百兩、昨日岩崎庄太夫持參に付、赤尾權藏證文同人江相返候段、水野源兵衞相達候事。

六月廿五日。家中の者拂米の際不都合の行爲なかるべきこと等を告ぐ。

〔異本三守御譜〕

六月廿五日左之通觸。

近年御家中之人々之內、收納拂米切手算用違拆之由にて、過拂米多、又は藏縮解指支候族等も在之躰粗相聞、不埒之至に候。夫々御糺も可被成候得共、其段は先御用捨被成候。以來右之族於在之は、給人名前爲書出嚴重可被仰付候。

一、面躰を隱し頭巾をかぶり申問敷段は、前々相觸候通に候處、今以其族之者多在之、御縮方に指障候に付、以來盜賊改方廻之者に爲見咎可申候。

右之通被仰出候條、被得其意、組・支配之人々へ嚴重可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配へも相達候樣被申聞、尤同役中可在傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

六月廿五日　　　　　　前田土佐守

七月八日。前田齊廣の參覲發途翌日、御臺所奉行を供奉せしめんことを議す。

〔御用番方幷御城方御用之覺〕

七月八日

一、御臺所奉行久德猪兵衞御發駕翌日發足之儀等、伺之紙面一通以中務上之。

御參勤等御供人家來末々之者、幷日雇之者共、於道中泊々等宿賃拂方等不正之族も有之に付、享和三年御參勤之節、御臺所奉行山岸七郎兵衞御供被仰付、御發駕一日御跡より發足仕、於宿々御供人末々之者不埒之族も無之哉、委承糺罷越候樣被仰渡可然与僉議之趣相窺、七郎兵衞へ申渡、御步橫目一人、御橫目足輕も兩人申渡。文化二年御參勤之節も右同樣申渡。同四年には御臺所奉行詰不被仰付候付、御步橫目等御跡より發足、右之通於宿々承糺罷越候樣申渡候。其後は御參勤之時々御臺所奉行詰被仰付候付、前段之通申渡候。今般も久德猪兵衞詰被仰付儀に御座候間、御供被仰付、七郎兵衞等節之通申渡可然と奉存候付奉伺候、以上。

七月八日　　　　　　奥村助右衞門

右翌日以同人被返下、伺之通被仰出。

七月八日。納租の皆濟以前百姓の新米を賣出すべからざることを告ぐ。

〔富田氏日課〕

七月八日御算用場より來狀左之通。

每歲之通御藏入・給人知共、當收納皆濟不仕內新米賣申間敷旨、改作奉行より在々江申觸候條、十村指紙無之新米買不申樣可被申付候。若內證に而指紙無之新米買請候儀、追而相顯候はゞ、右代銀相渡不申米取上候條、此段不相洩樣末々迄急度可有御申渡候。其上以來懲之ため、買請人急度可有御申渡候。

一、例年新米改役、御郡方役人之外、樣子により足輕相廻候儀茂可有之候條、被得其意、縮方之儀可有御申渡置候。

一、十村指紙跡より指遣可申旨賣人与約諾、米買請候上追而指遣申族茂有之躰に候。左候而は縮方行屆不申候付、米与一集に指紙不取請分相顯候得者、無指米同樣に取捌可申儀候條、心得違無之樣急度可有御申渡候、以上。

丑七月八日　　　　　　御算用場

富田外記殿

追而支配付新米之分、本文之振を以地方肝煎に指紙を以爲賣拂可申筈之所、十村指紙与申處に相限、其儀無之ヶ所茂有之、御縮方指支候に付、猶更改而申談候條、夫々地方役人㆑嚴重可有御申渡候。且又能州口郡土方殿領村々より新米賣出候節、右領附役人等より指紙を以御領之者共米買請候儀、無指米改方に紛敷趣有之候條、向後右領米買請候節、米高等當場㆑可被相達候。僉議之上可承届候。無斷買請候はゞ、無指米買請候与同樣に候條、是又可有御申渡候、以上。

七月十二日。江戸邸に於ける割場附小者等銀子貸附を得んとして騷擾す。

〔諸事留牒〕

七月十三日　快晴、著つよし、夜前五頃より風止。

一、御横目中川又三郎別席に而可申聞趣有之段申聞候に付、御居間書院御廊下㆑罷越逢候處、申聞候は、夜前六時過廻り之足輕山之地藏堂邊を相廻り申節、右近邊割場付小者御小屋有之處に候、右小者地藏堂邊㆑打集り、何やらん詮議仕罷在候に付、相咎申候處、申聞候は、別儀に而も無之、當盆甚指支申候而御借渡も可有之哉と相待居申候處、御借渡無之、致方も無之に付及示談申事に御座候段申聞候に付、其儀ならば御小屋之中に及詮議可申處、ヶ樣に外に而致詮議候段、不心得至極之段嚴敷叱り候へば、何も引取申樣子及届候故、猶又夜中も

しげ〳〵爲廻候へども、其後左様之躰も無之、御小屋中に而も致詮議候様子も見聞等不仕段申聞。右山江は百人計も寄合申事にて、騒立申躰之事故及御届候。猶更右様之儀以後も有之候はゞ、相達可申段申聞候事。

一、前條に相記置候御横目申聞候趣有之候に付、山本久左衞門呼立承候處、夜前山地藏堂邊江割場付小者打集騒様子如何之趣に候哉、盆後に至り候はゞ御國表遂示談、幾重とも相計可申段申渡候にヶ様之躰たらく、盆後迄暫之間何れにも相治り候様にと存候、子細如何候と相尋候處、仰之通騒敷様子承り、依而小頭共相集相糺候處、被仰渡之處不心服に而騒立申に而は無之、拂方之儀諸色屋等手前江暫延引致度、盆後に相成候へば急度可相渡段申入候へども、町人共、割場付足輕等千人計も有之、何も拂無之而は、一人に而は纔の儀に御座候へども、町人共手前江相取候ては過分之事に而候間、何れにも承引難致段申聞候に付、如何とも致方無御座候に付、其趣箱番江何も斷に罷越候而騒敷相成候。差而被仰渡不心服に而騒立申に而は無之。右之様子に御座候間何とか取計候段申聞候付、左様之儀に候はゞ、成丈幾重に茂盆後迄指置申候様にと存候。町人ども直様割場江右之趣相達候様に至り、誠取治方無之場處江至り候はゞ、覺書を以相達候様にと存候。只今之處に而は何とも難取計申入置候事。

七月十四日　曇、蒸暑也

一、割場奉行申聞候は、昨日の趣を以申渡、諸色屋〻惣組小頭より盆後迄相待可申、段々申入候處、數年御屋敷中御用も承候間、盆後迄相待可申、併日數いつ頃迄之儀に御座候哉申聞候に付、いつ頃と日切は難申、三十日か四十日計相待候樣申入候處、左樣日數私儀は待申候へども、先之問屋ども聞入不申候間、當月晦日迄位に御座候へば、屹度相待可申段申聞、只今詰罷在候。如何可仕哉之段申聞。且又外御用も相勤候者ども、懷中金無之而は御用支之筋も出來可申候。只今何も必至と指支貯無之に付、如何とも仕方無御座候間、何卒御借渡之半分に而も、只今之處に而御取計は出來申間敷哉等之趣、段々申聞候に付、卽答には及がたく、追而相考可申入段申渡。追而申入候は、被申聞之趣致承知、何れにも只今取計は出來兼候。右諸色屋盆後三十日とは相見合申儀不相成段、依而會所奉行〻相届申候間、申聞候儀に候へば會所〻相届候樣申渡候樣にと存候。其上に會所奉行申聞候はゞ、又何とか可及詮議段申入候處、退候上重而以執筆申聞は、會所〻相届候ては、私共支配方不行届儀に付申出候趣に相成、甚迷惑仕候段等申聞、九月御扶持方代繰上御渡御座候樣抔之儀も申聞候に付、何れにも今日之處何とも及指圖がたく、盆後は早速致詮議候間、成限諸色屋手前申解、其上にも承引無之候ば、會所〻相達候樣にと存候。會所〻申出候とて、割場奉行支配方行屆不申と申儀も有之間敷段申渡候處、尙更小頭共〻其段申渡、其にも承引不仕儀に御座候へば、重而達可申段申

聞候事。

一、七半時頃山本久左衞門又々罷越、幾重に御座候而も於私手前は難治、會所へ相達候樣申候ては、私において表發之取捌に相成、迷惑至極仕候。何分此處御鑑察被下候而、宜取計候樣申聞候に付、左程之儀に候はゞ、先達より心服と被相達、相治候段被申聞候儀不得其意之段申聞候處、其儀可申上樣も無私迷惑至極、不行屆御達申上方に御座候。只今之處に而は寔に指つまり申致方無之由、段々申聞候に付、左樣之儀に候はゞ其段書面に認、明日にも可被指出候。夫を以少分之儀は取計可申候間、何分にも今日之處取治候樣にと存候段申入、相返候事。

但、相考候處、諸色屋相待申間敷と申儀はさほどに無之、只諸組小頭等不心服故之儀と被察候。其子細は町人共會所江相達候儀は、先達而會所江申渡も有之、諸色屋等何も存申事に而、割場相達候よりは、會所江罷出相達候が當りに候處、割場江出候而彼是申儀は、先以當り不申儀に候へども、不心服之者共江理を以申聞候而も、理を以心服可致候へども、畢竟引人等も出來、騷敷相成候而は、却而御不益之筋も有之、且は外邊も如何に付、先本文之通申渡候事。

七月十三日。道中御供人の乘用は老齡者の駕籠を用ふる外、乘懸馬によ

るべきことを告ぐ。

〔御用番方并御城方御用之覺〕

七月十三日

御道中奉行ゟ

御供人駕籠乘用之儀、及極老乘掛馬に而旅行難成人々は格別、其外は皆無用、頭分たり共年若成人々は乘懸馬可然旨前々被仰渡候へども、猥に相成候躰被聞召候付、享和三年被仰出候通猶更嚴重可相心得候。

但、無據依願駕籠乘用之分は都而通日用に而罷越候樣申渡候へども、小身之人々山駕籠に而罷越候分は詮議之上宿人足相渡、其外山駕籠之分も不相願而は相用申儀難成趣等、都而文化十二年御參勤之節之通に候事。

七月十五日。江戸に於いて欠落立歸者を禁牢に處す。

〔諸事留牒〕

中元　曇、四半頃より快晴、殘暑强

一、六半時過山本久左衞門御貸小屋ゟ罷越、左之趣相達候に付、明後十八日禁牢申付候樣申渡候事。

横山山城殿家來　山田縫右衛門

同人せがれ　歳五　金　三　郎

右之者文化二年六月御國出奔仕、京都〻罷越、公家衆〻奉公仕罷在候内男子出生仕、文化十一年十一月御當地〻罷越、武士方に奉公仕罷在候所、去秋より浪人仕、其上當五月妻病死仕、難澁至極に罷成、最早行所無御座候に付、無是非今日右せがれ召連、御作事方御門まで罷越候段、縫右衛門申聞候に付、右御門番人及斷候に付、足輕小頭等指遣、御屋敷内〻引入樣子相糺候所、別紙口書之通申聞候付御達申上候。欠落立歸之儀に御座候間、禁牢可申渡与奉存候。せがれ金三郎儀は牢屋續吟味所に指置可申与奉存候。猶更御指圖次第相心得可申候、以上。

七月十五日　　　　山本久左衛門

横　山　藏　人樣

別紙口書な略す

七月十七日。參覲往來等の際沿道町民及び宿舍に當る者の心得を告ぐ。

〔御用番方幷御城方御用之覺〕

七月十七日

町奉行〻

當秋御發駕之節、町中掃除幷道造・店片付候に不及旨被仰出候條、夫々可被申渡候事。

御算用場奉行ゟ

御參勤等都而御往來之節、町幷御郡方へ御供人致旅宿候へば、疊替等加修覆候躰に候。左候へばおのづから農業暨商方等にも相障、彼是費用相懸可致迷惑儀候條、見苦敷儀少も不苦候間、態々疊替等致修覆候儀は、近年之通堅令無用候樣可申渡旨被仰出候。且又菜數等馳走ヶ間敷儀も尤可爲無用旨、度々申渡置候通に候間、此儀も猶更右之趣に相心得候樣、越中筋所々奉行へ夫々可被申談候。勿論御供人末々迄右之心得に罷在候樣、一統可申聞旨御道中奉行へ申渡候事。

七月廿六日。諸郡に引免立歸又は手上高を勸奬せしむ。

〔富田氏日課〕

七月廿六日之封物

諸郡共引免多、御取箇年々相減、過分之御引高に相成、近年別而御上御難澁に被爲至、寔御逼迫至極之御勝手振に候。依而當春格別被仰出茂有之、諸郡共改作奉行僉議之上、村々可成丈け爲取歸、或は手上高・手上免等茂爲致候。依而御自分支配所附田地之內、引免有之分は爲立歸、引免無之ヶ所は手上高等致候儀、夫々僉議有之樣存候。當時寔過分至極御借財に付、

種々御僉議中之儀に候間、下々に茂此所を奉恐察、格別之趣を以、可相成丈け引免取歸等之儀致出情候樣被申渡、早速否可有御申聞候、以上。

七　月　　　　　　　　御算用場

七月廿六日。公事場奉行御郡方に於いて九十歳以上の者に支給したる扶持米の取扱方法に關して照會し、尋いで御郡奉行はその取締を嚴密にすべき事を命ず。

〔御郡典〕

河北郡坂戸村肝煎四兵衞与申者、村方之內四年以前致病死候者を、去々年在命之趣に仕成、去年より御扶持被下候由を、四兵衞手前江右御扶持米請取、且又去年九十歳に而御扶持被下置候者、九月致病死候を不及斷、去暮相渡候御扶持米を四兵衞手前江取請、村方御收納不足之方江入置候与申儀に付、裁許之十村倉見村市十郎公事場江召出、組下之內九十歳におよび、其段及屆候節、本人を見屆候歟。其儀無之候はゞ、御扶持被下候儀被仰渡之趣を申渡候儀は、本人呼出申渡、若老衰に而難罷出候はゞ代人を呼立可申渡處、最初見屆候儀も無之、御扶持被下候儀も肝煎江迄申渡候而は、在命無之者江御扶持を願、役人共手前江取請候儀可致出來筈。是等は如何之格合に候哉与相糺候處、市十郎儀流例を以九十歳者最初見屆候儀も無之、

御扶持被下候儀も肝煎江迄申渡、本人又は代人呼出申渡候儀は無之旨申聞。於公事場は右取捌等閑に相當り、御縮方相整不申。依而市十郎儀先づ御郡奉行江指預置候。十村共一統市十郎之通取捌候哉、各より御聞糺之上、御算用場御格も有之候はゞ可有御申越候。

一、難澁之村方取救之ため、仕法銀与申名目之銀子有之。十村より村役人江貸渡候時は、右役人之持高を切高いたさせ置、右銀子不及返濟候得ば高取揚、又は年々一歩宛之利足を入候得ば、高は其儘作配いたさせ置候由。ヶ様之儀改作方御法に相懸申儀は無之哉。夫々御聞糺可有御申越候、以上。

丑七月廿六日　　山崎庄兵衛

井上井之助殿

山崎庄兵衛は公事場奉行

井上井之助は算用場奉行

追而正徳四年能州御郡方九十歳者之儀十村取捌方、於公事場に相糺候儀有之候處、村方に八十歳に及候者有之節、年來八十歳に相違無之与申儀、請人兩人爲立、帳面に記差出置、夫を以九十歳に相成候儀相調理可及屆御格之旨、其砌御扶持人共申聞候。加州向之儀、御郡奉行江尋遣候處、子年・午年八十歳以上之者御郡奉行より相尋、帳面に年附いたし取立置、九十歳之者調理有之由に候。先年能州御郡方之御格与申者、能州切之格合に候哉、又は於御算用場之御格に候哉、其様子も御調理御申越候様に与存候、以上。

〔眞館諸書物留〕

村方之内九十歳者有之、御扶持相願候節、其年齢九十歳におよび候与申儀、何之據に而相願候哉、是迄取捌之格合可申聞候。尤相願候節は、其者之様子も致見分、且御扶持被下候節は、其段本人等へ直々申渡候哉。此等之儀可申聞候、以上。

七　月　　　　改　作　奉　行

御別紙今日御改作所より御渡に付相廻申候。村方之内八十歳者御郡々御人々御しらべ方、九十歳者御扶持方被下候節御申渡等縮方格合之儀、委細御調早速私方迄可被遣候、以上。

七月廿八日　　　　田井村　次　郎　吉

諸郡御扶持人・十村中様

村方之内九十歳者有之、御扶持相願候節、其年齢九十歳におよび候与申儀、何之據に而相願候哉。是迄取捌之格合尤相願候節は、其者之様子も致見分、且御扶持被下候節は、其段本人等へ直に申渡候哉、夫々可申上旨被仰渡、奉得其意候。一村切人附又は人高帳与唱、一家内人別年齢帳面裁許方へ取置、時々出生人・病死人毎歳正月中爲書出、暨緣取遣之者は時々右帳面に書記置候。尤右帳面一家内之末白紙入置、追々出生人等記申組も有之、又は毎春改而帳面取立候組も有之候得共、人別縮方は同様に而、相洩申儀無御座候。右帳記人八十歳以上

之男女、五ヶ年目帳面に記指出候様御郡御奉行所より被仰渡候に付、其段村々へ申渡候得ば、八十歳以上之者、出生何方之者に而、年齢等相違無之趣、證據人一門共之內兩人連印目錄村役人添書を以指出申に付、裁許方に而右人付帳に引合、組下之分合帳に仕立、右御奉行所へ指上置候。勿論九十歳に相成候得ば、其者出生何方之者与申儀、村方帳面に右證據人連印仕、裁許方へ書出候に付、年齢等入念相しらべ、裁許奥書仕指上來候處、就中御改之上、右村方帳面は裁許手前に指置、裁許引請帳面に調指上申儀に御座候。

一、右九十歳者御扶持被下候上、岩丈成者は、本人幷子孫之者相伺、裁許方へ呼出、往昔九十歳者初而御扶持被下候節被仰出之御書立寫、御郡御奉行所へ指上申候。九十歳に成病身に而裁許方へ罷出兼候者は、子孫之者ゟ右御書立爲讀聞、御請書取立上申儀に御座候。且岩丈成者は、御郡御奉行春秋兩度御郡廻之節、向寄へ呼出御見請被成候に付、裁許村廻之節も相尋申儀に御座候。

一、右御扶持米被下候上は、子孫之者村肝煎召連、御藏所へ罷出候に付、御米相渡候旨、裁許方へ子孫之者禮に罷出申候。此儀初年迄にても無御座、御扶持米被下相渡候度每禮に罷出申候。

右九十歳之者御扶持相願候格合等、御尋に付羽咋・鹿島兩御郡之振合書上申候。尤御扶持不

被下以前見分は不仕候、以上。

文化十四丑八月

武部村　四郎太夫

堀松村　平　藏

本江村　六郎右衞門

能登部下村　與三右衞門

御改作御奉行所

〔御郡典〕

河北郡倉見村市十郎組坂戸村四兵衞与申者、村方之内九十歲者御扶持米之儀に付、不屆之趣有之。於公事場右市十郎手前尋候趣有之候處、九十歲之者本人見屆候儀も無之、御扶持米被下候節肝煎江迄申渡候旨等申答候由。右取捌等閑に相當り、御縮方相調不申旨。依而正德四年於支配所に取捌方之儀、於公事場糺之節、八十歲之者請人兩人相立、帳面に記、夫を以九十歲に相成候儀相調理候之旨、先年十村相答候之由。能州切之御格に候哉与、公事場より御算用場江尋來候。是迄支配所九十歲者調理方之儀者、先年御書立幷御直に被仰出之趣を以、前々より八十歲以上證據人兩人相立、來年九十歲に相成候趣、其前年暮帳面に記書出候儀。尤始而御扶持被下候節、子孫之者共江御書立爲讀聞、請書取立指出候儀、前々格合に候。然處

其內に者證據人も不相立組も有之候條、以來八十歲調理之節、請人並本人見屆、帳面に記可指出候。尤御扶持米相渡候節、村肝煎曁子孫之者共江相渡、其時々請書取立、役所江可指出候。右之趣夫々御算用場江も相達候條、得其意、以來調理方之儀、綿密可相心得候。則公事場より之帳面等寫爲披見相渡候、以上。

丑十月十四日

中村逸角

御郡廻　澤田九內

能州四郡十村中

七月。百姓に銀子を貸與して利子を收むるを禁じ、利足貸の分は元利差引することを許す。

〔上田舊記〕

諸郡共難澁之百姓共等、甚高利之銀子を借請、其中には裁許之加與書を致借用候分も有之躰。別而加州筋石川郡之內には、十分一或は三割抔も貸付に致し、利足之外元銀をも引落相渡、猥に高利を貪候由。元來百姓分に利足貸之儀は御制禁に候所、難澁に迫運方無之處を見込、過分に利を得候儀不屆至極に候。第一御扶持人等も右樣之銀子借用證文に與書を附候儀、甚等閑心得之趣沙汰之限に候。難澁に而無據引免等を以取扱來候所、其潤澤は右樣之利

足等に相成、引免等格合も無之事に候。依之惣而利足貸之分、元利指引方及貪着申間敷候。尤已後取縮方之儀、得与詮議可有之事。

七　月　　　　　　　　　　改　作　奉　行

諸郡御扶持人・十村中

追而本文之趣、御郡に寄不相當ヶ所も可有之、是等之儀は、其方中手前において得与致詮議、夫々取極可有之事に候。此儀も爲念申渡置候事。

八月朔日。前田齊泰初めて能を演ず。

〔横山氏日記〕

八月朔日　天氣吉、夕曇

一、勝千代樣今日初而御能被遊候付、甲斐守・修理拜見之儀、昨日被仰出候通りに候事。

一、九時過御能初候付、拜見所へ相廻候樣、御近習頭淺加九之丞申聞。追付甲斐守・修理罷越候事。

一、御能七半時前相濟候付、甲斐守・修理一集に、於松之間二之間に、以戸田與一郎御禮申上候事。

一、七半時頃甲斐守・修理退出、直に御廣式ゟ罷出、御附頭を以、勝千代樣御能被遊候恐悅

申上候事。

〔温敬公記史料〕

八月朔。於奥舞臺舞猩々曲。

〔御表御能方諸事留抜書〕

八月朔日

一、左之御使相勤、坂井要人を以申上候處、神田十郎左衛門を以御應答被仰出、即申上候事。

今日初而於御舞臺御能被遊難有御仕合思召候。依之御目錄之通被上之候、以上。

勝千代様より中將様江生御肴一折・御目錄

八月朔日　　御使　箕輪知太夫

一、左之御口上三郎兵衛御取次申上候處、御應答被仰出、申演候事。

今日初而御能被成候に付、御祝被成御目錄之通被遣之候。

勝千代様江　一、交御肴一折・御目錄

八月朔日　　御使　不破治部右衛門

右御禮御使者相勤、神田十郎左衛門を以申上候處、同人を以御應答被仰出、罷歸申上候事。

勝千代様より中將様ゟ
今日初而御能被成候に付御祝被遊、御肴御目錄之通被遣之、難有御仕合思召候。右御禮以御使者被仰上候。

八月朔日　　御使　堀　三郎兵衛

八月五日。幕府の米穀を輸送する船舶能登沿海に難破せしを以て郡奉行に出張を命ず。

〔横山氏日記〕

八月五日　曇

一、能州羽咋郡において公儀御城米難船仕候付、右取捌爲御用、能州御郡奉行中村逸角罷越可申所、當時役引仕罷在候付、加州御郡奉行之內より早速罷越可申旨、今日御算用場奉行ゟ被仰渡候。依而明日永原進之丞發足、右難船場所ゟ罷越可申旨、進之丞及屆候事。

八月六日。江戸に祇役する者に餞別し又は歸國の際土產物を齎すを禁ずる前令を嚴守せしむ。

〔諸事留牒〕

八月六日　曇、夜前少々雨涼

御横目ゟ

前々より江戸御供等に而罷越候人々ゟ致餞別、又は罷歸候節土産物無用可仕旨被仰出、別而近年每度嚴敷被仰出申渡候事故、一統違失有之間敷儀に候處、兎角次第に相ゆるみ候躰、不心得之至に被思召候。去年以來格別御省略之儀被仰出候事にも候間、自今彌以右樣之儀無之樣嚴重相守可申候。右之通被仰出候條一統可被申談候事。

八　月

八月六日。非人小屋の收容者中健康なるものを郡方に歸らしむべきことを告ぐ。

〔筒井舊記〕

御郡方之者、非人小屋に罷在候者共之內、稼等相成候者は夫々致手當、十村ゟ申渡、人撰之上追々相返筈に候。年久敷預御救罷在候者等、居在所ゟ罷歸り候上は、於其所も相應取立爲相稼候樣有之事に候條、程能村役人ゟ申渡、幾重にも成立候樣可被申渡候事。

八　月　六　日　　　　御　算　用　場

中　村　逸　角殿

右之通申談に付、寫相越之候條、得其意、追而人撰可有之。撰之上岩丈之者等居在所𛀁立歸り候上は、於其在所介抱方等之儀、村役人𛀁得与申含、何分共者成立、重而御難題に不相成樣可申渡候、以上。

八月六日　中村逸角忌引に付　坂井庄太郎

能州四郡十村中

八月十八日。町方の組合頭に人別の調査を命ず。

〔國事雜抄〕

此度町方人別一統相改候條、組合頭共へ申談、得と相糺、出所・歲付を初、都て是迄之振を以、無間違樣來月中に爲書出可申候。

但、本文書出候以後は、轉宅・借家・同居人出入・生死・緣付・養子・離緣・出奔人・剃髮・主人替之儀はしらべ置、月々不相洩書出候樣、組合頭へ可申談置候。

一、迯方主付肝煎手前へ懸り候儀は、右主付より不相洩樣、人別方へ小紙を以相屆可申候。

右之通可被申渡候事。

丑八月十八日

八月二十日。非人小屋より歸村せしめ得るものに小屋懸等の費用を給す

ることを令す。

〔本多政禮覺書〕

八月五日

一、非人小屋入多勢に相成、一旦小屋へ入候者は、爾々在付兼候に付、今般御郡方之者共、村方において相應之稼等も可相成者共、在々へ相返候はゞ可然と十村共へ申渡、非人小屋當時在人之內爲相撰候處、村方へ呼返し相應に稼等も可相成者七百五十人有之候間、居在所へ出人に爲致可申旨十村共申聞候間、其通と及指圖候。就夫在所へ立戾り候而も、小屋懸等も無之而は難相暮、其上當分之處は飯米も無之而は難叶儀に候間、老若に不拘、今般出人致候者共へは一人米一石充相渡候樣、十村共相願申候。此儘に而往々御救被成置候得ば、扶持米も不少儀に候間、非人小屋渡り米之內御渡之圖りを以、代銀に引直被下候樣にと奉存候。此節出人之支度に爲取懸申候間、早速御聞屆御座候樣前田才記紙面。

右に付七日に才記へ申入候趣有之候處、猶明日可申合旨被申候事。

右に付重而申聞、大方相分る。

紙面之趣無據相聞候間、御算用場僉議之通、代銀圖りに而被下候段可申渡旨押札、十九日丈助を以吉左衞門へ達上之、廿日被返下伺之通。

右被下候段付札に而申渡。

八月廿三日。幕府、仁孝天皇即位式の期日治定せることを告ぐ。

〔諸事留牒〕

八月廿三日　雨

一、御卽位御日限御書附、大久保加賀守殿御役人中より聞番呼立相渡候事。左に記。

八　月

御卽位日限來月廿一日御治定被仰出候事。

八月廿六日。金谷門を修理するを以て御廣式より石川門を通過することあるべきを議す。

〔御用番方幷御城方御用之覺〕

八月廿六日

一、金谷御門建修理に付、御子樣方・貞琳院樣蓮池御庭等へ御出之節、御往來差閊候間、三之御丸通石川御門御往來被成候條、此段御達申上候。依御前後罷越候乘物女中・步女中幷御道具等、私共斷次第往來不差支樣、右御門番人中へ被仰渡可被下旨之趣、高山伊左衞門紙

面。

八月。村方の者の請酒を販賣し及び空米相場を行ふことを禁止す。

〔御郡典〕

諸郡町・宿之外、村々之内請酒いたし候者多候躰。元來百姓分商方稼之品は、御定も有之儀に候處、右請賣酒近年次第致增長、所に寄村每にも有之躰、甚不埒之至に候。第一手近に有之候故、不時に費多く、小前之者等別而之儀、風俗にも沙汰之限に候。以來町・宿之外、於村方請賣酒爲指止可申候。若何与歟名目を附、內分に而致商賣候儀等於相顯は、嚴重咎被申付候。

一、博奕之儀前々急度申渡置候通、堅御制禁之處、近年相緩み候躰。曁米方に付、はた商与相唱、空米を商いたし、甚不埒之取引方有之躰相聞え、沙汰之限に候。畢竟裁許曁村役人より制方等閑故与相聞候。以來嚴密に遂穿鑿、急度爲相愼可申候。如此申渡候上にも、右樣之儀に携り候者於有之は、曲事に申付、品に寄裁許村役人等越度に可申付候條、此段末々迄嚴重可被申渡候、以上。

八　月　　　　　　　　　　　　　　御算用場

諸郡御奉行中

八月。道路に於ける馬の取扱に就いて諭す。

〔異本三守御譜〕

付紙、御算用場奉行ゟ

都て往來に驛馬等繫置、相障申儀有之節、牽除候樣聲を懸候ても馬士不在合、御用先等之指障に相成、且往來之節口附綱指詰牽可申處、心得違之者も在之、等閑之至に付、以來右族無之樣寛政三年申渡置候處、近年甚猥に相成、第一綱指詰牽候者は一圓無之、等閑至極之族沙汰之限に候。自今急度相改可申候。若心得違之者共於在之は、盗賊改方廻之者に爲見咎候條、此段夫々可申渡旨、御郡奉行等へ可被申談候事。

丁丑八月

〔富田氏日課〕

九月六日

驛馬等往來之節、馬士共口附綱指詰牽可申之處、近年甚猥に相成候に付、心得違之者有之候に付、改方役人に爲見咎候樣御用番被申渡有之に付、右見咎之節根綱くさり二尺・端綱三尺、都合五尺に綱爲切捨候條、爲承知申進置候旨、岡田太郎左衞門來狀。

九月朔日。遠所御旅屋疊替の費用を減ずべきことを議す。

〔御用番方并御城方御用之覺〕

九月朔日

一、左之趣御作事より相達候付、及示談候由に而、御勝手方より被申越候に付、御用番相達之、此通可仕旨相達御聽可申由申達之。存寄無之旨に付、與一郎へ渡之、此通と可申談と奉存候條、御序に可被伺旨申達、三日以同人被返下、此通可申付由被仰出候付、御勝手方へ返之。

一、諸遠所御旅屋御座之間たりとも、御疊御修覆飛替并糸掛等に仕、疊表是迄上表之所は中品之分相用ひ、御入用相重み不申樣仕度御座候間、猶御詮議次第に相心得可申候事。

但、御障子之分も、多分切張等に御修覆等申付哉之事。

右所々左之通之由に而小紙に調被越之。

加州御郡奉行　一、津幡御旅屋

新川御郡奉行　一、越中東岩瀬御旅屋

右同斷　一、同　浦山御旅屋

境奉行　一、同　境御旅屋

九月二日。近年西本願寺一派の僧俗の上京を禁止したるを解除せらる。

〔富田氏日課〕

九月二日

一、西本願寺一派之僧俗、近年上京御指留に相成候得共、今般使僧御領國中ゟ巡廻有之、諸寺庵宗意安心方敎諭之趣、夫々請書茂被取立、最早落着之上は、以來右一派之者共上京不指支段、御用番被申渡候段寺社奉行より申來。

九月六日。前田齊廣夫人の姪逝去の報金澤に達したるも七歲未滿なるを以て鳴物を遠慮せず。

〔諸事留牒〕

九月六日　快晴

一、御前樣御姪博君樣御逝去之段、京都より申越候段、御用人申聞候事。

　但、御七歲未滿之由也。

一、博姬樣御逝去に付、鳴物遠慮之儀有之哉与相しらべ候處、天明三年二月松平越前守殿御息女於儔樣御死去之節、加賀守樣には御いとこ、御前樣には御めい之御續に御座候處、遠慮等無之。且其節御前樣ゟ御機嫌可相伺哉帶刀相尋候處、御廣式に而も一日之御遠慮に付、御附よりも御機嫌不相伺段、河村儀右衞門申聞候由留に有之候。於儔樣も御七歲未滿に付、此

度的例也。

一、闘屋長太夫呼立候處、御奥ゟ罷越候に付、吉田兵馬ゟ、博姫様御逝去に付御前様御機嫌可相伺哉と相尋候處、不及其儀申聞候に付不相伺候事。

九月十四日。前田齊廣病むを以て本日參覲の爲出發すべき豫定を延期す。

〔横山氏日記〕

九月十四日　雨降

一、今日御發駕可被遊筈之處、御不例に付御延引被仰出候段、左之通月番より廻狀有之、今朝到來之事。

明十四日御發駕可被遊筈之所、御不例に付明日御發駕御延引可被遊旨被仰出候段、只今闘屋中務より申來候付、爲御承知申進候。依之明朝五半時各出席、相伺御機嫌可然与存候、以上。

九月十三日　前田土佐守

津田玄蕃等五人様

九月十四日。寶圓寺後住決定に關し、聞番をして幕府の意を伺はしむべき命令江戸邸に達す。

〔諸事留牒〕

九月十四日　快晴、風高なり

一、寶圓寺繼席之儀、潜龍和尙遷化後、達禪和尙より被書出候三僧共僧柄十分無之、九峰和尙之餘習も有之候而、今般は右餘習御改被遊度思召に付、富山光嚴寺天岩長老ゟ後住可被仰付候旨、潜龍ゟ被仰渡候處、彼是相歎申立、且不都合之儀ども有之候へども、關刹三ヶ寺より天德院・瑞龍寺・大乘寺ゟ申越之趣有之。依而右光嚴寺ゟ不被仰付而は、本より御國法も不相立儀。其上法系之儀しらべ候處、絕申与申に而も無之に付、被仰付候而も公邊に於て指支之筋も無之哉之旨、聞番より可聞合旨等申來候。委細之儀は不相留候事。

九月廿一日。前田齊廣參覲出發を延べたりとの報江戶に達す。

〔諸事留牒〕

九月廿一日　曇

一、會所ゟ傳附に而左之通奧村助右衛門より申來る。

今十四日御發駕被遊筈に候處、御不例に付、今日御發駕御延引可被遊旨被仰出候。此段爲御承知申進候條、法梁院樣始御申上、御用人ゟも可有御申聞候、以上。

九月十四日　　　　奧村助右衛門

横山藏人様

九月廿五日。鹿島郡高田村頭振彦右衛門の屋敷より小判を掘出したることを屆出づ。

〔國事雜抄〕

私組下高田村頭振彦右衛門家軒下之屋敷藪、頃日畑に打開候處、土中より小判形之金四枚出候旨及斷、右之金指出申候に付、猶更彦右衛門呼出樣子相尋候處、斷書付之通に御座候。依而村役人爲致持參御達申上候、已上。

丑九月　　高田村　由五郎

澤田九内殿

中村逸角殿

覺

一、一枚　金

但小判形目形二十目九分程、一方に上之字有之、外文字有之候得共、相分不申候。

一、一枚　同

但同斷目形十六匁六分程、一方に上之字有之候。

一、一枚　　同

但同斷目形九匁一分程、一方に上之字有之候。

一、一枚　　同

但同斷形四十目九分程、無字。

〆四枚

右私家軒下之屋敷藪、頃日畑に相開候處、土中より右之品出申に付相添、御斷申上候。就夫右之外相替所も無之哉と御尋被成候。前段四枚之金、土中一尺計底に小石に交り有之、此外右樣之品無御座候。爲其以書付申上候、以上。

文化十四年九月廿五日　　　高田村頭振　彥右衞門

高田村　由五郎殿

九月廿六日。前田齊廣參覲の爲に金澤を發す。

〔三守御譜〕

九月十四日金澤御發駕御延引、十三日夜被仰出。其段御屆、同廿六日御痳邪御快に付御發駕可被遊段重て御屆、同日金澤御發駕。十月九日江戶御着。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

三月御參府有るべき處、十二年之御都合にて九月二十六日金澤表御發駕、同十月九日江戶表ゟ御着府有之なり。上使等都而御先格之通なり。

〔横山氏日記〕

九月十九日　天氣吉

一、中將樣御不例に付御發駕御延引可被遊旨被仰出置候處、少々御快被爲在候付、押而當廿六日御發駕可被遊旨被仰出候段、月番土佐守より主付權佐ゟ演述。且若年寄幷龍山ゟも可申談旨演述に付、夫々以紙面申遣候事。

九月廿六日　雨降、四時過より晴、夕折々小雨降

一、今日御發駕に付、一統六半時揃、年寄中等五時頃より段々登城之事。

一、九時益御機嫌能御發駕被遊、御先立掃部相勤候事。

但、掃部儀例之通御先立いたし、御式臺ゟ相向、いつも御先立落し掃部着座可致處ゟ、御子樣方御出等に而狹く相成居候付、直に敷付ゟ着座いたし候處、其所に而每之通御會釋有之候事。

九月。江沼郡山中の醫王寺にて長谷部信連の遠忌法會を營む。

〔寢覺の螢〕

一、抑此山中は、むかし長家の在所にして、先祖の開かれし事世の人知る處なり。文化十四年丁丑長家の鼻祖長谷部長兵衛尉信連六百年に當れり。能州穴水は當昔の居城、今も猶其所を知行し給ひ、墳墓信連の像もおはす事なれば、其祀はとき〴〵して有しとなり。是より嚮山中の藥師守り法印長家へ伺候して云、信連の御像寺に傳奉りしが、近き頃の回祿になくなりし事歎くに猶餘りあり。ことし其年忌に當り給へば、新に刻奉り法會を執行し奉らんと、いと忠やかに申けるも、彼寺に木像ありとは記錄もなければと取次人もなかりき。法師は頓て彫刻し、おごそかに餝立長家へ參向し、兼て御耳に觸し御像功を修し申故、態と持參し奉ると申上ければ、鼻祖の御像捨もおかせられず、禮を設て拜し給ひ、家中の諸士へもおがまさせ給へば、各捧物して拜し奉りぬ。偖藥師堂に於て、九月相當の忌日しか〴〵の法樂を執行仕と申上ければ、御名代迄遣され、樣々の御寄附共ありける。大聖寺侯にも宗家の大老にしあれば、警固など出し給ひ、晴がましき法會にはなりぬ。山中の一村、長家の御遺德には深く歸せし事なれば難有がり、御名代町屋彥左衛門方にて一村奔走す。今時の法師事を謀りて利を貪るは憎けれども、これは長家の規模ともなり、一村の賑ひ、寺には舊記ともなり、殊勝といふとも可なり。

十月二日。前田齊廣使者を金澤より派して仁孝天皇の即位を賀し奉らし

大禮は九月廿一日に行はる

む。

〔金龍公記史料〕

十月二日。遣今枝直寛于京師。奉賀献物。

〔江戸狀留書拔〕

十　月

一、今般御卽位に付、京都へ之御使者今枝民部被指出、御使相勤候趣言上。

十月五日。前田齊廣の金澤を發したる報江戸に達す。

〔諸事留牒〕

十月五日　朝之內曇、晝後より晴、七時過雨

一、莽合廿六日金澤表御發駕之飛脚到着、其段法梁院樣等ゟ申上る。

十月九日。前田齊廣江戸に着す。

〔諸事留牒〕

十月八日　晴

一、中將樣益御機嫌能御旅行、去六日夜板鼻驛、昨晚熊谷驛御止宿被遊候。御容躰何之御指

障も不被爲在候。明九日朝六時之御供揃に而浦和驛御發駕、御下屋鋪ゟ御立寄可被遊旨被仰出候。且又浦和驛疸病人多有之由に付、御泊宿御差替之儀僉議被仰付、其儀未相極、若御泊替り候はゞ重而可申越段、中飛脚を以助右衞門殿より申來候に付、法梁院様初申上、備後守様ゟも申上候事。

〔諸事留牒〕

十月九日　終日少々雨

一、今朝浦和驛より六時御供揃に而同所御發駕、御下屋鋪ゟ御立寄、晝御着府之筈に付、御殿揃刻限御横目僉議之上五時過与申渡置候事。

一、四半時過戸田川御越被遊候御付人來、夫より御下屋敷ゟ御立寄、同所御發駕之御附人來、追付御中屋敷之御付人來候付、先達入御覽候繪圖之通、諸頭罷出蹲踞仕候事。

一、拙者儀疱瘡に付難致出席、依而御途中助右衞門殿迄以紙面申遣候事。

一、八時過御着、從追分口梅之御殿に御立寄、中之口御通被爲入。法梁院様御使者は御式臺罷出、其外御附使者御白洲ゟ罷出候處、御意有之、奥之口より被爲入候事。

〔金龍公記史料〕

十月九日。抵江戸。扈從奥村助右衞門。

十月十日。大小將辰巳要人江戸に於いて自殺す。

〔金龍公記史料〕

十月十日。大小將辰巳要人于江戸自殺。事係殺所自越中雇雇夫。

十月十四日。石川郡宮腰附近の商人にして魚類の拔荷を金澤に運ぶ者あるを戒む。

〔料理方定書〕

一、宮腰等近浦商人之躰に而、魚拔荷多金澤町へ入込候に付、御縮方相立不申候間、隨分爲見咎候得共行屆兼候。中々容易之儀に而は相止申間敷、第一口錢洩之儀不屆至極に付、是以後は見付次第召捕、魚荷取揚、支配人へ相送候樣町奉行へ申渡置候條、以後洩魚無之樣嚴重に可被申渡候、以上。

十月十四日　　御算用場

土肥權三郎殿

永原進之丞殿

右文化十四年丑之年御算用場御觸渡寫。

無數は少數の意

十月十四日。能登の製鹽を脱漏せしむべからざることを告ぐ。

〔御郡典〕

洩鹽御縮方之儀、前々嚴重申渡置候處、次第御鹽引方甚無數に而、能登一國之喰鹽幷四十物鹽等年分御藏鹽御拂方、奥郡一萬二千俵計、口郡に而七千五・六百俵計、奥口合纔二萬俵計之引高に候。能登一國之人別を以引競候得ば、過分御拂不足に相成候。各於手前穿鑿方如何之譯合に候哉。鹽は要用之品に而、家數は次第に相增儀。十村共にも村方江請高を以御縮方可相糺處、如何心得罷在候哉、疑敷事に候。洩鹽取扱候得ば、重き御掟も有之處、次第に相緩み、當時に而は十村幷村役人等迄も、御縮方は誠に表向而已に流、實意に大切成事には不存込躰。鹽問屋共江も先年申渡置候儀も令忘却候哉、夫々之商賣方に遣鹽迄も心を附相糺可申處、其儀も無之、一躰猥に成行、船荷物下積等に而洩鹽取扱、剩鹽士共之內、出來鹽他國等へも賣遣候樣子。別而當夏は、洩鹽多候段風聞有之、相違無之哉。當年は稼之時節天氣も宜候得ば、出來多可有之處、左樣にも無之、畢竟十村共にも鹽士村方之御縮方も不行屆、村役人曁海邊潤改人等、其外船宿迄見遁候躰、沙汰之限に候。依而相糺、夫々咎可申付候得共、全當時之者共之心得違迄に而も無之樣子に付、先令用捨候。此度改而申渡候上は、件之族於有之は、裁許之十村・村役人等迄も急度越度に申付候條、此旨十村を始村役人等江嚴重被申

渡、御締方可有吟味候。尤佐川九八郎等幷山岸十左衛門ゟも申渡候條、各にも猶心付之趣も候はゞ、無泥可被申聞候、以上。

十月十四日　　　　　　　　御算用場

中村逸角殿

澤田九内殿

十月廿七日。江戸邸に於いて陸尺の部屋頭を雇傭せんことを議す。

〔諸事留牒〕

十月廿七日

一、人見吉左衛門申聞候は、近年御登城等之節、於下馬先外々樣六尺共、此方樣御駕籠先ゟ罷越、御往來之障にも相成候樣に御六尺共ゟ何かと邪魔を仕懸、時宜により見苦事共も有之由に候。夫に付、此表渡り陸尺之內部屋頭と申功者なるもの罷在、其者當時之御六尺之內に加り居候はゞ、右樣之族も無之樣子に候間、被召抱候樣仕度旨、組頭·聞番より申上候處、御共通と被仰出候。依而右之者御充行等之儀僉議仕候處、別紙御六尺肝煎書附之通申聞候。御國ゟは罷越不申に付、御留守年には御充行被下に不及候。併捨扶持と申而、少々御扶持米不被下而は不相成樣子に御座候。別紙惣樣渡高引詰候はゞ、譬ば當時之御六尺三人前之御充行

に而、一人被召抱候程に相當り可申哉。且前文之通、御留守年には御充行不被下候間、彼是指引仕候はゞ、格別御不益之儀も有之間敷樣に奉存候。右等之趣は尙更於若年寄方遂僉議可申候。將又人數は、當時御六尺欠人四人有之由に候間、右欠人高被召抱候樣聞番申聞候得共、三十人頭手前に而は、夫程に無之而も宜樣子に相聞候。此儀も猶更右頭遂僉議、人高相極可申達旨申聞候事。

十一月廿六日

一、渡六尺被召抱申渡候處、難有仕合奉存候段申聞候由、高木孫助より御請紙面、曁右御六尺年付等之別紙指出す。

御當地渡六尺部屋頭

五尺七寸	生國三州	歲四十	半七
五尺七寸三分	生國江戶	歲三十六	次郎吉
五尺七寸	生國武州	歲三十六	松五郎
五尺七寸五分	生國江戶	歲三十四	藤吉

右之者共、今般御六尺欠人爲代被召抱候段被仰渡候に付、則呼出見分仕召抱申候に付、御斷申上候、以上。

高木孫助

十一月廿六日

十月廿七日。石川郡本吉町奉行より手取川の水戸口に船舶の入津困難なる事情を上申す。

〔本吉文書〕

私支配所本吉湊の儀に對し、近郷方等へ渡世に可相成儀茂無御座候に付、濱手の儀に御座候へば、左迄不引合も、船商賣にて輕き者に至迄渡世仕候處、支配所手取川水戸口近年淺く御座候に付、船商賣にて渡世仕候者共の儀は、當所へ差船仕候得者、諸入用相掛、積來り候荷物賣捌方の儀は、於他國他所は何角勝手の筋も可有之候へ共、末々輕き稼人及大工・鍛冶、近在も繩・莚・菰、積込の瓜・茄子・大根等に至るまで賣捌方惡しく、下々小前の者共餘程難儀仕候に付、先役中村宅左衛門在役中、秋中用水堰口切落方の儀相願申候處、御田地方養用水の儀に御座候得者、容易に御聞届難相成儀に付、御詮議方も無御座候。然所當年支配所本吉手取川水戸口甚淺く御座候に付、夏中に乘廻り候船の秋末所へ着船の儀、去る子の年は本吉湊の船大小共都合六十艘計入津仕、相圍申候處、今年入船甚薄く相成、本吉・湊兩所にて圍候分、漸く小船迄都て三十艘に不滿、此方入川不仕候に付、無據渚より卷揚に仕候。二百石積以上の船とては、他國圍相成、所方澗入不相成、第一御役銀並三步半等御口錢上納方の儀、

子年は文化十三年

自ら相減じ可申道理に御座候。將又前段の通末々輕き者共等稼ぎの儀は勿論、進では金澤往來の宿方馬士等に至迄茂、支配所船揚場の荷物薄く相成候故、馬借方難儀仕候由、私度々出府仕節見聞仕罷在申候。猶又手取川筋在の者迄も、水戸口不宜候得者、鮭等漁り候者共に至る迄甚迷惑仕候間、秋中苅田の節、九月初より十月上旬迄の間入船の節、用水末堰切落候はゞ、本吉川入船有之、松前物等御口錢物、並に役銀相立候荷物自然と多く御座候間、右苅田の砌不指支節、用水末堰切落し、手取川筋に水懸流可申趣被仰渡候樣仕度候。勿論十月末御田地方各水懸流方には指支申儀無御座候間、此儀御詮議の上用水裁許の者共へ被仰渡御座候樣仕度候、以上。

文化十四年丑十月廿七日　　富永權左衛門

御算用場御中

十一月九日。前田齊廣幕府の老中を歷訪す。

〔横山氏日記〕

十一月九日　天氣吉

一、四時過御出、昨日被仰出候通御老中方等御廻勤、九半時前御歸殿候事。

一、御氣色段々御快被爲在、今日御老中方御廻勤被遊、恐悅之至奉存候。猶更奉伺御機嫌候

旨、助右衛門儀不破治部右衛門を以被申上候處、追付以同人御意有之候事。

十一月十三日。德川家齊使を遣はして前田齊廣の參覲を勞はしむ。

〔諸事留牒〕

十一月十三日　小雨

一、八時前上使酒井若狹守殿御越之旨、御小人目附罷越申聞候段聞番申聞候付、助右衛門殿熨斗目・上下に相改候事。

〔横山氏日記〕

十一月十三日　折々雨降

一、今日上使之御沙汰に付御殿揃刻限五時、助右衛門儀五半時前出席之事。

一、御前御痛邪幷御眩暈被爲在候付、今日御表江御出不被遊、上使之節御名代備後守樣江御賴被遊候段、表方江被仰出候事。

一、八時前上使酒井若狹守殿御越之旨、御當番御目附衆御申之由、御小人目付罷越申聞候段、聞番申聞候付、助右衛門儀服上下に改候事。

一、八つ七歩上使御城下之附人來り、續而昌平橋附人來候付、助右衛門儀大御門外右之方へ罷出、頭分御白洲江罷出、御取持衆等敷付へ内より左右に御出、御名代備後守樣御門外へ御

本文以下十月とするは誤なるべし

出向。追付上使御出、備後守樣御誘引に而御大書院ゟ御通、上意之趣被仰述。備後守樣御拜聽、追付御熨斗出。夫より御小書院ゟ御通、御たばこ盆等出之、御料理二汁六菜出之。御相伴幷向詰御持參備後守樣御吸物無之。御酒之上、御肴啓太郎樣御持參、御濃茶等出之。相濟、御請備後守樣被仰述。七時過御退出に付、備後守樣最前之所迄御送り、助右衛門・頭分等最前之通罷出候事。

〔三守御譜〕

十月十三日。上使酒井若狹守御越。御名代を以て上意御拜聽。

〔金龍公記史料〕

十月十三日將軍使老中酒井若狹守。來勞。

十一月十五日。前田齊廣病むを以て自ら登營せず、使を遣はして物を德川家齊に献らしむ。

〔橫山氏日記〕

十一月十五日　天氣吉

一、御參府に付而之御献上物、今朝兩御丸ゟ、御使者村杢右衛門相勤、聞番岡田十郎左衛門指添罷出、御首尾能被差上候事。

一、左之通以中務、助右衛門ゟ被仰出候事。

今度御參府被成候付、當十三日上使酒井若狹守殿を以被蒙上意、將又今日御參勤之御禮可被仰上旨、昨日御老中方より御奉書到來、且御家來二人御目見可被仰付旨被仰越、忝思召候。依之御登城可被成處、御持病之御疝氣等に付御登城御斷、御參勤に付而之御献上物、今日以御使者被指上候。此段可相達旨御意に候。

〔三守御譜〕

十月十五日御禮之奉書到來候所、依御疝邪氣等に御登城御斷、御献上物等御使者を以御差上被成。

〔金龍公記史料〕

十月十五日以疾不登營。遣使者献物。

十一月廿一日。前田齊廣、德川家齊に茶を献る。

〔諸事留牒〕

十一月廿日　夜前より雪積三寸餘降、今日は不降、午後晴

一、今日御茶請候に付、五半時過より出席、御居間書院上之御間、御床前御床之方を横にして、拙者罷出、御納戸奉行中村彌左衛門上之御間内御閾際に罷出、御茶堂・御細工人御緣側

本文以下十月とするは誤なるべし

拙者は横山藏人

に而御茶相詰認等出來候事。
一、御茶取出し初むかし・後むかし、且御詰茶御八寸にのせ、御袱子かけ、有澤才右衛門を以入御覽候處、以同人被返下。
一、御茶御壺ゟ詰、一壺は半分詰、今一壺は全詰にて、以小森源左衛門入御覽候處、以同人返しくださる。
但、此入御覽候節御印被渡下候樣申上候處、右御壺被返下候節御印御渡被遊候事。
一、全相詰一壺は口覆いたし、御袋ゟ入相認、一壺は口覆なし袋入懸候而、以小森源左衛門入御覽候處、以津田源三郎被返候事。
但、御合印御封紙一集入御覽候事。
一、右源三郎を以被返下候節御印返上。且御壺口御臺所同心押候節、誠に押候紙有之候に付、前々之通私手前において火中仕候間、此段も申上候樣申入候事。
一、右被返下候まゝに而、聞番呼立候而見分爲致候事。長瀨善左衛門・岡田十左衛門罷出、御伺書前々之通心得候樣申、善左衛門ゟ相渡候事。
一、聞番見聞相濟候上、御箱へ入、御封付候上、西丸分闕屋中務呼立引渡候段申渡、相渡候事。

一、御本丸分御長持江入、拙者封印いたし、西丸分は中務封いたし、御居間書院二之御間に指置、小森源左衛門江明日迄預置候段申述相渡す。

一、御細工者松本友右衛門・小原猪太郎、御茶堂市井榮仙・靑野德延罷出る。

十一月廿一日　快晴凝甚し

一、今日御茶御献上御使相勤候に付、六時過熨斗目・上下に而出席いたし候事。

一、拙者・關屋中務御居間書院江罷越、御近習頭江預置候御茶有澤才右衛門より請取、蔦之御間江為繰出封印切、御箱御封前相改、聞番大島三郎左衛門江引渡、五時前追付登城いたし、三郎左衛門同道之事。

一、右御献上御使相仕廻、九半時前出席、熨斗目・上下之儘、坂井要人を以御茶御献上首尾克相濟候、御使書は後刻可指上段申上候事。

一、御使書左之通

御茶　　一壺

鯛　　　一折

御目錄

右今朝大島三郎左衛門同道仕、御本丸江罷出、御茶・御肴御歩指添中之口より指上、坊主衆

江相渡、檜之御間江被上置、御目付衆江相達候由被申聞候。私儀大廣間溜に扣罷在候處、檜之御間江御用番阿部備中守殿御出、御目付神尾市左衛門殿御指引に而罷出、御目錄御奏者番高木主水正殿江御渡申候處、備中守殿江御達に付、口切之御茶献上仕候段申述候處、可被遂披露旨備中守殿被仰聞候。大目付曲淵甲斐守殿御出座被成候。

御取持坊主衆等之儀は、三郎左衛門より言上可仕候、以上。

十一月廿一日　　　　横山藏人

〔續德川實紀〕

十一月廿一日松平加賀守使して口切茶をたてまつる。

十一月廿二日。大聖寺侯前田利之金子借用を加賀藩に請ふ。

〔御在府中覺〕

十一月廿二日

前田主膳・野尻後藤太罷出候由御横目案内に付、坊主溜へ相通候樣申渡、罷出逢候處、左之覺書兩通之趣演說に付、應じ及挨拶置候事。

備後守樣御勝手方之儀、前々被仰上候通、御難澁至極に付、近年御仕法も被立候得ども、其砌も如被仰上候、元來御入方少御世帶故御辛勞被成候。然處當四月淺草御藏火之番被蒙仰、

過分之御入用共御座候之處、前段之趣故、御自力に而者相辨じ不申、あなた樣にも御逼迫之御時節御恐察御迷惑至極被成候へども、不被得止事精誠被遂僉議、二千兩御助力之儀御願被仰上候。過分之御願高には御座候へ共、當年は四月より火之番御勤之事故。御入用高先年与は餘程御金高も相違仕、其上年々御勝手方御不足相增候事に御座候へば、別而如何共被成方無御座、一入御難澁被成候間、宜御示談之上、全御許容被成進候樣御願被仰上候。誠萬端あなた樣御威光を以御勤被成候儀に御座候得者、此段各樣にも御深察被下、幾重とも宜御取成之程御賴被成候事。

十一月

別段

本文御願高御許容被成進候上は、火之番被蒙仰候砌、御振替被成進候二百金、御返上被成度思召候。尤御國元ゟは御在所御役人罷出、右御願之趣申上候筈に御座候間、何分宜樣御取成之程御賴被成候事。

十一月

十二月九日。德川家齊使者を前田齊廣に遣はして寒氣見舞の爲に檜重を贈らしむ。

〔諸事留牒〕

十二月九日　朝少々曇、五前より快晴になる。

一、今日上使之御沙汰御座候に付、御殿揃五半時、服紗小袖・布上下着用之事。

一、御前御疝邪御惡敷、其上御口中も御痛被遊候付、今日御表江御出不被遊、依而御名代備後守樣江御賴被遊候段、表方江以闘屋被仰出候事。

一、八半時前御城付人來、上下にする。上使御使番蒔田八郎左衞門殿御越、昌平橋付人來り候以前、助右衞門・藏人大御門前江罷出る。一刀に而、草履は三十人直し候事。

一、御大書院江上使御通り、例之所江助右衞門・藏人罷出る。上意之趣備後守樣御拜聽、助右衞門江被仰聞、助右衞門より申上。御請助右衞門承、備後守樣江被申上、御請に御出也。

一、上使江御熨斗出、御菓子・御吸物・御酒出候上、備後守樣御肴御持參、相濟御濃茶等出る。

　但、寒氣爲御尋檜重御拜領也。

御相伴は依田伊賀守殿也。七時前御退出。

一、御用部屋を以左之通被仰出、表方に而夫々申談有之候事。

今日以上使、寒氣爲御尋御懇被蒙上意、御檜重御拜領被成、忝思召候。右御菓子、明晝過各江頂戴可被仰付旨御意に候。頭分以上江も頂戴被仰付候間、此段夫々可被申聞候旨被仰出

候。

十二月九日

一、今日之例享保十一年・寶暦元年・天明六年にあり。

十二月十三日。前田齊廣能を演ぜしめて治脩夫人等を招請す。

〔横山氏日記〕

十二月十三日　天氣吉

一、法梁院樣・御前樣御表𛀙御招請之事。

一、備後守樣・啓太郎樣・鶴心齋老爲御見物御出、坊主衆も參上之事。

一、御前三笑被遊筈之處、少々御風氣に付今日者御能不被遊候段、拜見所に罷在候節、以不破治部右衞門被仰出候事。

一、八時過重而御能初り候事。

一、御能四時過相濟候付、助右衞門・藏人、坂井要人を以御禮申上追付退出之事。

十二月十八日。本年の產米損耗高を幕府に屆出づ。

〔御在府中覺〕

覺　　　　御屆下物十二月十二日聞番出之。

草高

一、三十萬七千七百八十石　御損毛高

内

二萬七千三百三十石　能美郡

四萬二千八百石　石川郡

一萬九千三百六十石　河北郡

四萬二千九百三十石　羽咋鹿島両郡

二萬三千二百石　鳳至珠洲両郡

六萬二百三十石　礪波郡

三萬八千九百七十石　射水郡

五萬二千九百六十石　新川郡

〆

外に二百四十二石　江州今津村・弘川村・海津中村町

右御領國御郡々當立毛虫付、幷海邊筋汐痛等、暨年季引免等御償米物成、御損毛高に直し、改作奉行大概相考候趣、前々中勘を以公儀に御書上被成候付、其趣を以相仕立申候、以上。

堀三郎左衛門等四人

丑十一月十日

甲斐守等十一人殿

〔御在府中覺〕

十二月十八日

左之御本紙聞番より昨日出之候付、今日以中務上之、翌日以吉左衛門被返下、即日十郎左衛門ゟ渡之。

覺　但下書は不入御覽。

一、三十萬八千二十二石　加賀・能登・越中・近江之内

右拙者領分之内、當夏以來立毛虫付・海邊筋汐痛等有之、當年之損毛高如此御座候。此段御屆申達候、以上。

十二月　御名

右折懸包上

損毛書

十二月十九日。前田齊廣參覲の後初めて登營す。

〔諸事留牒〕

十二月十九日　快晴
一、今朝五時過御登城被遊、八時過御歸殿被遊候に付、助右衞門一集に津田源三郎を以相伺御機嫌候處、同人を以御意。
但、寛政十年・同十二年御參勤之御獻物、御使者を以御上被遊候而、其後初而御登城之節相伺御機嫌候に付、今日も示談之上御機嫌相伺候事。

十二月二十日。來々年の參覲延期を許さる。

〔御在府中覺之抄〕
十二月二十日、左之覺書兩通中務別席へ持參に付、先以恐悅之至奉存候。金澤同席共へも可申遣旨及御請。御國へ申遣。
來々卯年御參勤御時節御差延之儀、近年御難之振等を以、御願書御用番青山下野守殿へ御差出之所、御同人方へ聞番御呼出、御願之通御用捨被仰出に而可有之旨、御附札を以被仰渡、忝思召候。此段御內々被仰聞置候。
但、追而御時節御伺之儀は、都而此前之通に而候。依而御內輪向を初爲御知不被遊思召に候間、此段相含み被在候樣被仰出候。

十　二　月

御參勤御時節御差延之儀御願之御趣意は、累年御勝手御難澁、御國民御救方も行屆不申、御在國之間茂無之而は何歟不行屆趣に付、御願によつて當春も御參勤御用捨、同九月中御參府之儀被仰出候。依而御仕置方夫々被仰付候へども、近年不作打續候故、百姓共自然と掟も立戻り候姿に而、御法則不行屆、殊近年御持病之御疝邪御難儀被成候處、去年以來別而御不出來、其上兎角御塞勝に而、御眩暈之御氣味も被爲在、思召通果敢取不申候。兼而者當年中迄に御成就も被成度御心底に被爲入候に付、乍御迷惑御參勤御指延之儀御願に而、結構に被仰出候處、其詮も無御座御迷惑被成候。是迄度々御願之上之事故、御定例之通御參勤も可被成處、右樣之御次第に而、御取懸之儀御成就も無之、今更立戻り候場に至り候而は、別而被仰譯も無御座儀故、此上御願之儀も御憚、且者御規定之處重々御迷惑に被思召候へ共、可相成儀に候者、來々卯年御參勤御差延、同年秋中御參府、翌辰年御定例之通御暇被仰出候樣御願之事。

十二月廿二日。前に大聖寺侯前田利之請ふ所の借金の一部を許諾す。

〔御在府中覺〕

十二月廿二日

前田主膳罷出候付、如例相通し、罷出逢候處、備後守樣淺草火之御番御勤御入用多に付、先

達而御願之趣未僉議之御間も有之候はゞ、先於此表千兩計御振替之儀御願被成置候。如何御僉議御座候哉。此節追々御物入も御座候付、罷出相窺候樣被仰付候旨申述候付、委細致承知候。兼而御申聞候樣、尤無油斷遂僉議候內、先達而御願之趣遂僉議、金澤より申越候故、其趣達御聽、被仰出之趣委曲覺書に相認之通候間、此段宜可被達御聽旨申述、左之覺書渡之候處、披見之上、委曲奉承知、備後守樣江可申上候。段々御僉議之上如此御許容被成進候上は、又々御願之趣も如何敷奉存候へども、以之外御差支に而、當暮抔御拂方と申は一圓無御座、其內公訴にも可及抔と申聞候者も御座候へども、無理に差押置候。當年之所は無是非儀に御座候間、先幾重に茂御手を合置可申候へども、來春に至り候はゞ又々御願筋も可有御座哉と奉存候。此段兼而御聞置可被下候。將又先達而申上置候通、御願之趣全御許容之上は、最前御振替之二百金は御許容高之內を以御返上之趣に相心得罷在候處、此御樣子に而は中々御返納之所江は行屆不申候。如何相心得可申哉之趣申聞候付、委曲致承知候。先年御勤之御時分は、御勤之間も無之、當年之儀は其御間も有之事に候へば、別而品能御許容も無之而難成儀。せめて御願之半金程も出來候樣にと存、委曲金澤表へ申遣置候處、段々僉議候へども、當節以之外御差支に候故、何分にも僉議不被致、漸如此取計候儀候へば、來春に相成又々御願之筋有之候共、迚も僉議も有之間敷存候。御願高とは餘程御減少にも候間、彼是御難澁之程奉恐

察候條、右二百兩御返納之儀は、相違御聽二・三日中是より以紙面成共可得御意旨申達候。

備後守樣御勝手御難澁至極に付、近年御仕法も御立候へども、元來御入方少御世帶故、御辛勞被成候。然處當四月淺草御藏火之御番被蒙仰、過分之御入用共御座候處、御自力に而は御辨難被成候付、二千兩御助力之儀先達而御願之趣、委曲中將樣江申上候處、宜遂僉議候樣被仰出、卽金澤表へ申遣候處、彼地江も前田大隅殿等出府、右御助力之儀、且酉年より二十ケ年賦を以御返納之分、幷三千兩之分當暮御返納高百八十五兩淀御願被仰上候旨等、安房守江被申聞候得共、此方樣にも近年別而御難澁至極、當春より格別之御省略も被仰出候處、元來過分之御借財に付不行屆、當暮之御手當も甚指支之族故、中々御願高程之儀は出來不申に付、五百兩計御許容、外に右百八十五兩當暮御返納之分淀之儀御許容可被成進哉之旨等、詮議之趣申越、卽相違御聽候處、此上は乍御心外右之通被成進候條、宜申上候旨被仰出候。此度は四月より御勤之事故、先年与は餘程御入用高も相違仕候旨等、無御據趣候へども、前段之次第に御座候間、此餘之儀は、あなた樣において御調達等を以御辨被成候樣にと存候。將又頃日御入用御差支に付、當分千兩御振替之儀此間御願之趣も卽相違御聽、種々僉議申、右之通金澤より申越候。尤前段五百兩之分は、御當用之內引負、於此表只今被進候事に取計申候。

右等之趣、宜備後守樣可被達御聽候。御受取方之儀は、前々之通可有御心得候事。

十二月廿二日。隱し室商賣の者に禁止を命ず。

〔留帳拔書〕

隱室致商賣もの共多く有之、役立罷在者共渡世に不相成、致迷惑候に付、當五月御扶持人共手前ゟ罷出及屆候に付、御扶持人ども詮議之上、隱室致罷在者共より、當年役立申付取立候樣いかゞ之趣に候哉、樣子も有之に付御扶持人共手前相尋候處、全躰役之上、上納不仕室商賣致候儀沙汰之限、役立之ものども氣請にも障り申旨。尙更組々裁許切綿密遂詮議候處、酒造人手前に室を入、又は仲間室、或は其村切自分味噌糀迄も入候樣之趣に而、押立商賣に致候儀共不相聞候旨等、御扶持人共申聞候。先以難辨趣に候。仍而是迄隱室致罷在候者ども呼出、嚴重相糺、咎可申付筈に候へ共、其儀令猶豫候條、文化九年以來役立候者之外一切爲指止可申候、以上。

丑十二月廿二日　　中村逸角

澤田九内

能州四郡十村中

十二月廿五日。大聖寺侯前田利之再び加賀藩に御納戸金を借用せんこと

を請ふ。

〔御在府中覺〕

十二月廿五日

備後守様より御近習頭を以、今度御願金高之内五百兩御許容、難有被思召候へども、何とも御難澁被成候。然共段々御僉議之上之事に候へば、此上表向御願も難被成候間、御例は無御座候へども、御納戸金之內御拜借被成度旨被仰上候。御納戸金無之と被仰遣候も如何に被思召候處、御次御貯用も無之候間、如何有之可然哉、表方ゟ可及示談旨御意之由。右之節吉左衞門演述に付、各僉議は如何と尋候處、一向御斷と申も如何に奉存候へども、御次に而は御貯用も無之故、取計方も無之候間、御表より請取候而も可相成候哉之由申聞候付、高は何程之御願に候哉と尋候所、高被申聞は無御座候。此間當暮先千兩御振替被成候樣被成度由も有之候間、今五百兩も被遣候はゞ可宜哉之旨に付、尤に存候。五百兩或は三百兩計に而も可然哉。三百兩計之儀に大方手筈も合可申哉と存候へども、爲念會所奉行承可申旨申達、遂僉議候處、治定之儀は難申聞候へ共、三百兩計は大方支申間敷候。五百兩と相成候而は如何可有之候哉、治定難申聞由翌朝申聞候付、其由吉左衞門ゟ申達。

是歲。鹿島郡竹町村に於ける藤內の由來を上申す。

〔眞館諸書物留〕

竹町村藤内由來

竹町村惣高九十七石、定免四つ、百姓九軒、藤内十九軒罷在。右藤内之内四軒は、往古より高所持仕居候所、享和元年高方御仕法に付、元來人非之者高爲持置候儀は不敬不相當候間、讓替爲致可申旨、御改作所より被仰渡に付、其段申渡候所、右高所持藤内之儀は、國主畠山家落城之時分藤内共方へ駈込人に而、城下武士町屋敷等打開、一村立被仰付候旨。然所共頃藤内共奥州仙臺へ賣藥稼に罷越候に付、右駈込百姓に成候者共賣藥仕入も仕、百姓も一集に奥州仙臺へ藥賣に罷越、自然与藤内与火の取遣も仕、其上貧窮之藤内、死人葬場村に賣申に付、右百姓買受、藤内を下人に抱爲葬候内、年暦も相立、いつしか藤内与申名目も付候得共、實は駈込人之子孫に付、人非に而者無之、竹町村開闢之百姓に候得共、難澁仕者切高、他村より追々入百姓被仰付候旨由緒申立、何卒不相替高作配被仰付置候樣願出候に付、舊記等相しらべ候所、高持藤内共申聞之通相違も無之躰。享保年中迄は、右高持藤内之内五郎右衞門抔は、村肝煎又は組合頭相勤候躰相見候に付、右願之趣由緒御達申上候所、以前は如何在之候共、當時人非之儀に候得ば、高爲持置候儀不相當、最前被仰渡候通り讓替爲致候樣被仰渡候に付、一石高三貫六百文充、其節竹町村相場を以居村百姓持添、併他村より入百姓へ讓替申候。

附、仙臺へは天明三・四年迄二・三人藥賣に罷越候得共、手前難澁仕相止候。亡父咄に者、中頃迄駈込百姓藤內緣組も不仕候得共、いつとなく藤內同事に成候事殘念成事と申聞候。右村段々難澁仕、相願引免被仰付置候。然所土佐守樣御勝手方御主付被遊、復古御僉議に付、藤內ども十八軒は西の方御林山跡等へ屋敷替、百姓は彌太郎之外東の方手頭へ屋敷被仰付、汚水を除、畢竟地味取直引免立歸方御僉議、過分之御仕入米新堤荒地起歸作御仕入被仰付候事。

文化十四年覺書　　良　氏

文政元年

正月朔日。前田齊廣病むを以て登營を辭す。

〔横山氏日記〕

正月元日　快晴

一、御疝邪に而御登城御斷被遊候付、御太刀御献上之御使藏人素袍着用、聞番大嶋三郎左衞門指添、御小屋より直に六時過御城江罷出。御廣間御老中方御列座、御奏者番森川紀伊守殿へ御太刀渡之。相濟、八半時罷歸、以津田源三郎達御聽、御使害者後刻指上可申旨申上候事。

一、御禮人揃刻限五半時助右衞門儀、例刻熨斗目・半上下に而出席之事。
一、今日備後守樣等へ御對顏不被遊。且鶴之庖丁全くは御覽不被遊候間、跡者助右衞門見屆候樣、以中務被仰出候事。

正月十五日。前田齊廣參覲後初めて德川家齊に謁見す。

〔諸事留牒〕

正月十五日　曇

一、左之通以關屋中務被仰出。

御疝邪氣等御快方に付、今日御登城御參府後初而御目見被仰上候處、御懇之被爲蒙上意、難有仕合思召候。此段可相達旨御意に候。

前々右御登城被爲蒙上意候節、御歸殿之上御前𛀁被爲召被仰聞候へども、爲御禮御老中方御廻勤も被成候處、御途中より御疝邪に而御難儀被成候付不被爲召候。且又金澤年寄中等𛀁も、被爲蒙上意之儀便に可申達、且請合頭分以上𛀁も、無急度被申聞候樣可相達旨被仰出候。

正月十八日。高齡者死亡の後その扶持米支給を繼續せしめたる河北郡十村市十郎の罪を議す。

河北郡十村
倉見村　市十郎

右之者裁許之内、同郡坂戸村肝煎四兵衛儀、同村長右衛門父長兵衛与申者、五年以前致病死候得ども存命に仕置、文化十三年九十歳に至り候旨、十二年書出、十三年三月、同十一月渡之御扶持米四兵衛へ取受、幷同村惣左衛門祖母なつ儀も、右十三年より九十歳之御扶持被下、同年九月病死之處、其儀不及斷に、十一月渡り之御扶持米四兵衛ゟ受取、私曲之樣子去年二月相顯候處、市十郎より御郡奉行ゟ書付を以、四兵衛儀右仕形は不屆に候得共、數年來村方之取扱等宜、殊に近年村方之爲に其身之持高をも段々切高にいたし相防候儀等有之、奇特之者に候間、前段私曲之儀は誠に心得違与、格別憐愍之取捌方も有之樣に与、御郡奉行ゟ相願、委曲御郡奉行より年寄中ゟ相達候得共、公事場ゟ可引渡旨右奉行ゟ被申渡。依之委曲御郡奉行より及斷に候故、四兵衛儀吟味之上禁牢申付置候處致牢死候。市十郎儀、右九十歳者ゟ御扶持被下候儀本人ゟ申渡候はゞ、四兵衛儀右體謀計者相成間鋪儀故、市十郎儀も先達而於公事場に相糺候處、前々より之流例を以、御扶持被下候儀本人ゟ不申渡、肝煎ゟ迄申渡候旨申。且又四兵衛儀、村方御收納不足之防に、自分持高を切高いたし候儀、四兵衛申分に而は、市十郎

より銀子一貫五百目借受、其形に村高二十石相渡、尤切高之法にいたし候得共、仕法高与申
而、右借用之元銀百目に付一匁之利足に相當り候程、米を指出候得ば、高作配は相成申由。
右百目に付利足一匁宛之圖に而代米指出候得共、村方江は百目に一匁五分宛之利足を以及指
引候旨申顯、敢而奇特之仕形にも當り不申。併市十郎に而は、四兵衞儀村方之爲に切高いた
し候事与相心得、志は奇特之儀与存候共、村方之爲に切高いたし、村方より之指引幾々相立
不申候時は、四兵衞之子孫迄も可及難澁に儀故、志は賞美いたし候共、持高不殘切高にいたし
候儀は、裁許之十村に而は思慮可有之處、其所之心付も無之、曁四兵衞私曲相顯れ候上は、急
度御縮方相立候樣可斷出處、前段之通奇特者与申立、格別之取捌方有之樣に相違候儀は、不
埒至極に付、御郡奉行江預置候。乍然九十歲者に御扶持被下候儀、河北郡に限り、十村共より
肝煎江迄申渡候儀、流例に相違は無之旨、先達而其御場より御申越。其餘は全く心得違に而、
敢而如在は無之躰に付、四兵衞私曲米高市十郎より返上爲仕、預置候儀御宥免も可有之哉与
詮議之趣、委曲年寄衆江相達置候處、伺之上、公事場詮議之通可申渡旨、御用番年寄衆覺書
を以被申渡候に付、今日市十郎召出委細申渡、預相宥、以來之儀急度相心得候樣申渡候。四兵
衞私曲米取立方之儀は、各より夫々可有御申渡候。右之趣、改作奉行江も爲承知御申聞候樣
に与存候。

一、九十歳者江御扶持被下候儀、御郡所江本人幷其者之子孫呼出申渡候處与、左樣には無之所与區々に付、以來諸郡共一同に御郡奉行直に申渡候趣に各より御申渡濟。能州之儀は御算用場之内に役所有之事故、是迄之通十村より本人幷子孫江申渡候樣可有御申談旨御申越置候故、其儀も年寄衆江相達置候條、能州之外諸郡共一統、直渡之儀夫々可有御申談候。且亦申渡方は右之通直に申渡候得共、在命に而無之者江御扶持被下候事は無之候得共、御扶持被下候上致病死候者を不及斷、其儘御扶持米取受候事有之候も難計候條、此儀は十村共に而遂詮議、御扶持被下候者病死之儀、押隱し置候儀難相成樣之縮方相立置候樣、一統御申渡候樣に与存候、以上。

寅正月十八日　　　　永原久兵衛

遠田誠摩殿

追而九十歳者御扶持被下候儀申渡之儀、能州は遠路之儀故、御算用場之内に有之役所江呼立之儀可及迷惑に与、是迄之通十村より可申渡事に御詮議之趣御申越置故、本文之通申達候得共、能州に而も加州同樣之里數候而、御郡奉行役所江呼出候儀可相成處は、召出申渡有之樣譯而被遂御詮議、御郡奉行江御申談置候はゞ可然与存候、以上。

是月は大盡なり

正月晦日。高齢者に扶持米を支給する際の手續を告ぐ。

〔國事雜抄〕

九十歳者江御扶持被下候初年申渡方之儀に付、公事場奉行より申來候趣有之に付、別帳寫之通御郡奉行江申達候間、以來之爲心得寫相達之候條、各支配九十歳者江御扶持被下候節、取捌方區々之儀も有之候はゞ別帳之振に可被相心得候。寫者披見後可被相返候、以上。

正月晦日　　御算用場

遠所町奉行等充名

河北郡坂戸村肝煎四兵衞与申者、同村九十歳者江被下候御扶持米私曲いたし候一件、於公事場吟味之上落着就被仰出候。是以後九十歳者江御扶持被下候初年、本人並子孫之者江各より直に申渡候樣可申談旨、別紙之通公事場奉行より申來候に付、九十歳者各役所々々江呼出、先年被仰出候趣直に可被申渡候。能州之儀も、珠洲・鳳至兩郡之分者、是迄之振に相心得、羽咋・鹿島兩郡之儀者、呼出可被申渡候。將又九十歳者病死之節、不及斷押隱候儀難相成樣之縮方者、各示談之上、諸郡とも同樣に取極可被申聞候、以上。

正月晦日　　御算用場

加州・能州・礪波・射水・新川郡奉行中

正月。使者を京都に派して女御入内を祝し奉らしむ。

〔金龍公記史料〕
十二月十二日女御入内。
正月。遣小原惟郭京師。賀大婚献物。

二月十四日。京都妙乘院より前田齊廣の女の縁談に就いて照會す。

〔御在府中覺〕
二月十四日
一、昨日以中務上置候京都妙乘院紙面等、今日以吉左衞門被返下。左之通也。
呈一筆啓上候。然者内々奉窺候。伏見宮若御所御方みやす所様、御結縁之御方未無御座候得共、當時三家之内にも無御座候付、大名方は難相成候へども、加州表之儀は三家同様之儀に候へば、御姫君様被爲在候はゞ御縁組相成間敷候哉。其趣向寄に加州表内々承合可申旨、伏見宮御内泉原左衞門尉殿を以被仰下候へ共、御屋舖表可奉窺候儀も如何敷奉存候故、朝倉左門へ申談、極内々貞琳院様御方迄奉窺候處、至極結構成御儀に候得共、左様成儀は役人中了簡に有之候へば、此方より何共可申儀難出來様御座候間、先見合罷在候處、舊冬土州様へ内々奉窺候者御座候所、何分相考可置様御沙汰宜敷候段、此節承知仕候間、右御縁談相調候儀候はゞ、幾重にも尊前様其御表御執成被下候儀奉願上候。宮御方は、小子前々より役方等

舊知も御座候。別而今度之儀は、小子根本蒙仰候儀御座候得共、御屋舗表へ申出候儀も相憚、見合罷在候儀御座候へども、外より出來仕候而は、小子彼是仕詮茂無御座候得ば、幾重にも相調候儀可然御執計奉希候。先は右得貴意以愚札如斯御座候。尙貴報奉待候、恐々頓首。

妙 乘 院

二月十四日

奇 掌 判

齋藤與右衞門様

玉 几 右

副啓

本文申上候伏見宮御縁談之儀、一昨年臘月泉原左衞門尉殿節々出會仕候所、其刻噂も御座候而、何分昨春旭和尙御同道に而御屋舗表へ罷出候者、其砌貴君様へ御內談申上度奉存候。ヶ様成儀故御直談之圖存罷在候處、小子和尙と同道に而罷下候儀、御地廣學寺不喜趣に而、和尙之御旅宿は致候得共、同道人は決而御斷之よし、正月末に申越候故、別宿もをかしからず、彼是仕候儀も如何敷、態与其節差扣罷在候故、ヶ様に及延引候儀に御座候。其後も持病氣に而御文音不仕族御座候。然る所昨冬のとやタイサン歸國之節、土州様へ內々被申上候處様子宜敷趣相聞候得ば、相調候儀候はゞ、何卒貴君様にも幾重にも御執持被遊可被下候樣奉希候。

返々內々之所打明申上候へば、本文御指支に相成候儀候はゞ、可然樣御調替被遊可被下候而可宜御沙汰奉願上候。

伏見宮御內

泉原左衞門尉　六位の大夫。みはらと申候。

右みはら左衞門尉殿は、御勘定御勝手に而御座候。先達而噂御座候節、御時節柄之儀に候得ば、相調候上御輿入等之所、何事も御國思召次第に被成候樣、種々物語御座候。何分太守樣御前如何と奉存候。猶追々萬々可申上候。先極內々御賴申上度、餘は重而可申述候、以上。

二月十四日　眞菅

吳柳樣

當月十四日之御紙面致拜見候。如仰餘寒甚敷御座候處、益御勇健被成御座珍重之御事奉存候。然ば伏見宮樣若御所御方御息所樣御結緣之御方樣未無御座、當時御三家之內にも無御座候付、御大名方は相成不申候得ども、加州表之儀は御三家同樣之儀に候得ば、姬君御座候はゞ御緣組相成間敷哉之儀に付、委細被仰下候趣承知仕候。於私共は上へ拘り候品取次等仕儀は、御內分たりとも堅く不相成趣、兼而主人より申付も有之、被仰下候趣御懇之御事には御座候へども、右一件は御應答にも及がたき仕合に御座候間、御斷申上候。右之趣故御紙面返上仕

侯。右爲貴報如此御座候、以上。

二月　　齋藤與右衞門

妙乘院様

二月十五日。前田齊廣の生母貞琳院病むを以て看護の爲歸國の許可を請はんことを議す。

〔諸事留牒〕

二月十四日　曇、今曉地震、晝地震、夕風高也。

一、貞琳院様去月二十五日より時候御觸被成候處、當月二日より御容子御宜無御座候に付、田中大元・高木覺順・鈴木立伯江御診察被仰付候處、何茂大抵同案に御座候由。少と御六ヶ敷御様子御醫師も申上候に付、六日に從御次不時立早飛脚申渡、夜前此表江着致候。され共九日迄御替被成候御様子も無御座候へば、不時には不申上候由申來候旨に付、此表御次よりも夜前不時立早飛脚に御見舞被仰遣候由等、闢屋中務江助右衞門より相尋候處申聞候由。

〔諸事留牒〕

二月十五日　雨

一、貞琳院様御様子、御前甚御案被遊候に付、內々以御用部屋被仰出候趣有之、未だ御隱密

此表は江戸

故暫留不申候事。

一、闢屋中務を以重而被仰出候は、先刻内々被仰出候趣、御道中奉行等江も不申聞樣被仰出候へども、今日御道中奉行江も申聞候而、夫々遂僉議候樣被仰出候事。

但、先刻被仰出之趣は、貞琳院樣御容子甚御心許なく被思召候に付、御願御歸國被遊、御看病被成度被思召候。依之曲淵殿江御内々以聞番御問合被成候處、御實母之儀に候へば公邊向に而も御指支之御事有之間敷旨被申聞候由。且御用御賴水野出羽守殿御家來土方縫殿之助江も、内分從聞番承合候處、縫殿助儀は一存に而は申上兼候、出羽守江相達明日に而も可申上旨申聞候由。依而御願被成度思召に被爲在候。來朔日・三日とも登城無之日に御座候間、當月二十八日御登城被遊、二十九日御發被遊度被思召候。右之通御願公邊向は不指支候とも、御内輪差支申候ては不相成候間、不指支樣遂僉議候樣御内々被仰出候事。且又若自然御病死被遊候ても、御披露無之、御看病之趣に而御歸國可被遊思召之由も、御用部屋申聞候由也。

二月十八日　快晴、風高也。

一、貞琳院樣御滯に付御療養御僉議、且御看病も被遊度被思召に付、御暇御願御差出被成候筈に御座候。御願之通被仰出候へば、二十八日御禮被仰上、同日夕方御發足、來九日御着可

被遊候間、夫々不指支樣可仕旨被仰出候事。

但、二十八日夕景と御座候而は餘り火急之事に付、二十九日に遊され候はゞ可然樣奉存候段、僉議之上以中務、助右衞門殿より被申上候處、公邊江被對候ても不宜候間、矢張二十八日御發駕可被遊旨、以中務被仰出候由也。

二月十六日。實子十歲以下なる者にあらざれば弟を末期內存の繼嗣たらしむるを禁ず。

〔御觸拔書〕

定番頭江

實子幼少・虛弱等に而、成立之程難計に付、弟等江名跡被仰付候樣仕度旨、末期內存相願置候人々、右實子十歲迄之者は、願之通被聞召屆候儀、近例茂有之候。十一歲以上之者は例茂無之儀に候間、以來右願方心得茂可有之儀に候。依之此段內談申聞候事。

寅二月十六日

二月十七日。町會所にて禁牢を命じたるもの丶年數計算法を公事場と同一たらしむ。

〔諸事留牒〕

文化十五年二月十七日

一、牢舍人出牢之儀、享保十五年被仰出、言上月より一ヶ年・三ヶ年与數へ候處、寛政六年格別御省略被仰出候節、禁牢月より數へ爲致出牢候樣被仰出、其後右通に相成候。然所右申渡之節、町會所に而禁牢申付候者は相洩候に付、今般町奉行より公事場承合、御刑法者同樣之儀に御座候間、以後禁牢月より數へ出牢可申付儀と相達候に付、其趣に申渡可然と遂詮議相伺、伺之通。

二月十八日。領內に於いて能美郡若杉產陶器を販賣せんとする者に便宜を與ふべきことを告ぐ。

〔國事雜抄〕

能美郡若杉村出來之陶器、日々出來多相成候處、引方少く、御國產引立兼候。依之御郡奉行より申聞之趣も有之、引方之儀遂詮議候處、御領國中可成丈け御國產相用候樣に有之度。右に付ては何れ之支配にても右陶器賣弘度望之者は、其所々にて人締有之候者には、右陶器代二季拂之趣を以、何程にても可相渡旨に候條、被得其意、望人有之候はゞ人締被申付候趣を以、直に加州御郡奉行可被示合候。

右之趣被得其意、先々ゟ被相廻、落着より可被相返候、以上。

二月十八日　　　　　　御算用場

遠所奉行連名殿

二月十八日。石川郡割出村頭振長四郎の妻三子を產む。

〔續漸得雜記〕

一、文化十五年二月十八日朝六つ時、有澤才右衛門方長屋に住居せる權內といふ者の妻女子一人を產す。同十九日夜四つ時に男女二人を產す。三子也。或人卽時の狂歌に、

三子うみ光りのどけき春の日に命はながや富貴ありさは

右に付仰渡され候御書立。

付札、御算用場奉行ゟ

年中

一、一人扶持宛

右石川郡割出村頭振長四郎妻腹に、前月十八日男子一人・女子二人致出生申段相達御聽候處、三人致出生候儀は希成儀に付、格別之趣を以一人ゟ一人扶持宛被下候條、此段御郡奉行ゟ可被申渡候事。

權內後に長四郎と出せり

戊寅三月二十五日

石川郡割出村頭振長四郎妻腹に、三子出生いたし候に付、一人へ一人扶持宛被下候段、別紙之通御用番年寄中被申渡候條、被得其意、此段可被申渡候、以上。

寅三月二十五日　　御算用場

永原進丞殿

內藤十兵衞殿

右三子へ御上より被下候名前、女子松枝、男子竹二、女子梅枝。

二月廿三日。幕府の老中より前田齊廣に不日就封の暇を賜はるべきことを告げらる。

〔金龍公記史料〕

二月廿日。以生母貞琳院罹疾。請就國看護。廿三日被許。

〔諸事留牒〕

二月廿日　快晴

一、今般御暇御願に付、右御願紙面に御老中付札に而相渡候由。依而右之趣被仰出候節、頭分ゟも可申聞旨被仰出に而可有之哉、其儀に及申間敷哉之旨、御用部屋より內意承度旨申聞

候に付、先例表方に而しらべ候處、先年御退府之節も御付札に而相渡り、其節は頭分江可申聞旨被仰出無之。依而此度も其儀に及ごﾞ不申儀と遂詮議、表方執筆を以御用部屋迄被申入候事。

〔諸事留牒〕

二月廿四日

一、關屋中務を以左之通被仰出事。

貞琳院様御滯に付、御看病も被遊度、依之此節御暇被仰出候様被成度旨、當廿日奥山主税助殿を以、御用番阿部備中守殿江御願書被差出候處、昨夕備中守殿江聞番御呼出、御願之通此節御暇被下に而可有之旨、御付札を以被仰渡忝思召候。此段被仰聞候。金澤表年寄中等江も、右之趣可被申遣旨被仰出候。

二月廿四日

二月廿五日。前田齊廣就封の暇を受く。

〔横山氏日記〕

二月廿四日　雨降

一、明廿五日上使兩御丸御兼被成、酒井若狹守殿御出之御沙汰之旨。且御臺様よりも御使桂山但馬守殿御越之段申來候由、表方江聞番申聞候事。

二月廿五日　雨降
一、助右衞門・藏人儀熨斗目・上下に而例刻より少早めに出席之事。
一、八時過上使若狹守殿御城下り之附人來候に付、助右衞門等御式臺へ罷出有之候處、八半時頃御出に付、助右衞門・藏人聞番大御門外ゟ罷出、組頭等御白洲ゟ罷出、御取持衆敷付へ御出。上使御下乘より御門際迄御先立聞番相勤。御前御門外へ御出向被遊、御誘引に而、御大書院ゟ御通、上意之趣被仰述候上、指續從右大將樣之上意被仰述、拜聽。

二月廿八日。前田齊廣登營して就封の辭見す。

〔横山氏日記〕
二月廿八日　晴、夕七半時過雷鳴雨降。
一、今日御暇之御禮就被仰上候、六時御出御登城、御禮御首尾克被仰上、御下り御老中方等御廻勤、九半時前御歸殿之事。
一、助右衞門・藏人儀、今朝六時前御小屋より熨斗目・半上下着用、直に御城ゟ罷出候處、於御白書院御目見被仰付、檜之御間ゟ御老中阿部備中守殿御出、兩人拜領物被仰付候旨被仰述。退、重而一人宛罷出、右拜領物御卷物五卷宛、御奏者番鳥居丹波守殿御渡、重而一所に罷出御禮申上候節、御同人御取合。相濟、西御丸ゟ罷出、御坊主・組頭指引に而檜之御間ゟ罷出候

處、御奏者番高木主水正殿御謁有之。退出、夫より御老中・若御年寄衆相勤、九半時過直に御殿江罷出候事。

〔續徳川實紀〕

二月廿八日、月次の拜賀例のごとし。松平加賀守はじめ就封のいとまを賜はるもの三人。加賀守は鷹・馬を下さる。

二月廿八日。前田齊廣江戸を發して就封の途に上る。

〔横山氏日記〕

二月廿八日　晴、夕七半時過雷鳴雨降。

一、七時御旅裝束に而御表江御出、於御居間書院備後守様・出雲守様江御暇乞被遊、新御廊下中程より藏人御先立仕、御小書院御勝手に而前田大和守殿等江御逢、御兩家様御溜より御小書院之方出口之御廊下に鶴心齋老御出御逢被遊。夫より御料理之間に坊主衆並居、御意有之。夫より御勝手座敷江御出、御客衆江御逢。夫より御廣間御緣頰通り御出、同所西之方に御一門様方御附使者列居、御中座被遊御返答之御會釋被遊。夫より御式臺江御出、御勝手之方板之間に、御扶持被下候後藤本阿彌・狩野家・吉岡因幡等伺公、備後守様・出雲守様等敷付二枚目御右之方へ御出、御出入衆御左之方江御出、夫々御挨拶有之。藏人内より左之方三枚

鶴心齋は前七日市侯前田利以

目被罷出、益御機嫌能御發駕被遊候事。

〔齊廣様御傳略等之内書拔〕

二月廿八日江戸表御發駕なり。是れは御家女貞琳院様御氣滯に依て御願、二月御發駕なり。御歸國被仰出候處、信州路・越後路共二月は雪途御通行御六ケ敷と申上年寄中等御請無之處、御用人岸忠兵衛一人は、公之思召次第にて雪途御通行不被爲成と申儀無之儀、明日御發駕被仰出候而も御指支無御座旨御請申上候に付、御發駕被仰出候なり。雪途馬足不立所筵を敷操返し、其上を馬牽候事岸指圖之由。無御滯同三月十一日金澤表御歸城なり。公御母堂ゟ御對顔、御双方之御喜悦不斜由。全忠兵衛が働と御意有之由なり。同日忠兵衛ゟ御用と申事ゆゑ罷出候所、結構之御書立御加增百石被下候なり。

〔御在府中幷御道中之覺〕

二月廿八日

一、七時過益御機嫌能御發駕、藏人御先立に而、御出入衆等へ夫々御逢被遊、御出之節備後守様・出雲守様敷附へ御出、織田出雲守殿鏡板へ御出、夫々御挨拶有之。助右衛門敷附内より左之方三枚目に着座（毎も二枚目に年寄共、三枚目に御家來罷出候へども、今日は一人に付如斯。）仕罷在、藏人も御先立に而、内より左之方敷附二枚目に扣、御近習頭等も其後ロに扣。（但大和守殿も備後守様等之後ロへ御出。）

一、御下屋敷へ御立寄、戸田村御小休。
一、御泊浦和へ四半時過益御機嫌能御着。
但、板橋御過被成候而及暮候事。
巣鴨邊より雨、夫より雷雹、戸田川御越被遊候頃より晴。
二月廿九日　夕方少々雨
一、今朝六時過浦和御發駕。
但、松平出羽守殿夜前上尾御泊に而、今朝浦和御通行之由に付御見合、出羽守殿御通濟候而御發駕。
一、大宮・上尾御小休、鴻巣御中休。
一、於御中休自分休所江神尾昌左衞門罷越、金澤より交代之足輕只今致着、中山邊雪之樣子申聞、先達而遣候足輕四人之口上も申聞候。牟禮より高田邊迄之間いまだ雪深く候故、割付候儀は中々出來不申。依而段々僉議仕候上、一体爲踏付、其上へ莚を爲敷候而、御乘物等御通行不差支樣に取計候旨申越候。雪も近頃又降候へども、春雪之事に候へば、御通行迄には上雪之分消可申樣に所之者も申候由、右足輕共申候。依而右之趣、御道中奉行へも委曲申達候故、相達候旨口演。

一、御泊熊谷へ七時過御着。

二月三十日

一、今曉七時過熊谷御發駕、深谷・本庄御小休、落合新町御中休、高崎御小休、御泊板鼻江七半時過御着。

三月朔日

一、今曉七時過板鼻御發駕、松井田御小休、坂本御中休、はね石・輕井澤御小休、碓井峠無御滯御越、夕七半時頃追分御泊へ御着。

三月二日

一、今曉七時過追分驛御發駕、馬瀨口・小諸御小休、海野御中休、上田御小休。

一、七半時過榊御泊へ御着。

三月三日

一、今曉七半時過榊御發駕、南原村御小休、丹波嶋御中休。

一、矢代御小休、御泊牟禮へ七半時過御着。

三月四日

一、今曉八半時過牟禮御發駕、柏原・關川・二俣御小休、關山御中休。

一、關川御關所歩行笠脫罷通る。柏原・野尻・關山・荒井御供頭分等乘物乘用之事。

一、關川宿御過被成、風高に付御供人野笠御免之事。

一、二本木御小休俄に相止、關山に而被仰出、其段前田銀右衞門斷也。荒井御小休、御泊高田へ四時前御着。

三月五日

一、今朝六時過高田御發駕、五智・有間川御小休、名立御中休之事。但高田御離以後風高に付笠御免、有間川御小休より又着用。

一、遠崎御小休、御泊能生へ御着之事。

三月六日

一、五半時能生驛御發駕、鬼伏御小休被遊、糸魚川へ九半過御着。

但、右之御坊常誓寺御宿之儀御請不仕候付、小林九郎左衞門方へ申付候由、御途中にて御橫目より以御歩橫目斷也。

能生川等假橋懸御通行之事。

三月七日

一、今朝姫川減水御差支無之旨言上に付、五時過糸魚川御發駕、青海御中休、外波・境御小休。姫川幷山之下難所々々無御滯御越、七半時御泊泊驛へ御着被遊候事。

三月八日
一、今朝五時前泊御發駕、入膳御小休、三日市御中休之事。
一、御泊魚津へ八時過御着。
三月九日
一、今曉七半時魚津御發駕、東水橋御小休、東岩瀨御中休。
一、下村・小杉御小休被遊、御泊高岡へ八時過御着。（下村・小杉之間に而笠御免。）
三月十日
一、今曉七時過高岡御發駕、福岡・今石動・倶利伽羅御小休、津幡御中休、森本御小休被遊候。七半時頃益御機嫌能御着城。
一、福岡より石動迄之間、風雨に付御横目へ（假御横目前田銀右衛門也。）以家來、往還並木危儀も可有之候條、重而强風有之候はゞ、暫く往還脇へ御除被成候而可然趣申達之。强荒に付今石動御小休へ罷出、以才右衛門相伺御機嫌候所、何之御差障も不被爲在旨、以同人被仰出。
一、福岡より石動迄之間、風高に付笠御免。石動より着用。倶利伽羅峠にて又風高に付御免、其以後雨具着用。

三月十日。前田齊廣金澤城に歸着す。

〔横山氏日記〕

三月十日　朝之内風雨四時前より晴、又折々雨降、八時過より晴る、暮頃雨降。

一、前月廿八日申の刻江戸御發駕、昨九日御着城之筈に候處、當六日越後姫川出水、御渡舟指支、同夜糸魚川驛に御逗留被遊候處、川明、翌七日同所御發駕被遊、夜前高岡驛御止宿、今曉七半時之御供揃に而右驛御發駕、津幡御中休、同所御發駕之御附人八半時過來候事。

一、七時過森下御發駕之御附人來、七半時前大樋ゟ御出之御附人來候付、年寄中三之御丸ゟ被罷出、御城代伊勢守御玄關御左之方ゟ被罷出、御家老中・若年寄中御式臺御右之方階下ゟ罷出、七半時過益御機嫌能御着城。伊勢守・御家老中等ゟ御意有之、夫々御請申上、式部儀進出有之、御先立相勤候事。

一、勝千代樣御式臺御出迎に、階下ゟ御出被遊候事。

〔諸事留牒〕

三月十日

一、中將樣當十日御機嫌克御着城被遊候に付、公儀向ゟは十一日曉天御着之御屆に而御使御指出之段、今朝中飛脚に而申來候に付、卽刻法梁院樣初申上、退出後兩御廣式ゟ罷出、御祝詞申上る。

三月十四日。製鹽を漕運する際その取扱を愼重にすべきことを命ず。

〔留帳拔書〕

御領國所々御詰鹽、幷富山御領江之御廻鹽積廻候節、近年難船有之に付遂詮議候處、於諸浦々御米船与は取扱方麁略之躰に相聞え候。運送者請負候得共、御米・鹽共差別は無之事に候得ば、聊麁略致儀は勿論有之間敷所、甚だ心得違之儀に候。尤以來潟入等之節、曁於沖合茂波高之節は、其浦々より手船等指出、萬事大切に可取扱、麁略之族於有之は急度申渡候條、此段支配所々浦々不相洩樣可被申渡候。且又新川郡幷射水郡百姓御貸鹽、曁放生津四十物鹽等、夫々裁許之者共直請鹽も、積越候節取扱方同樣たるべく、將又船頭共に而も、御荷物を申立我儘成儀於有之は、是又急度相糺候條、運送人共江も急度可被申渡候。

右之趣被得共意、先々江被相廻、落着より可被相返候、以上。

寅三月十四日　　　御算用場

中村逸角殿

澤田九内殿

三月十六日。前田齊廣の女勇姬疱瘡と診せらる。

〔横山氏日記〕

三月十六日　快晴

一、勇姫樣當十二日夜より御熱被爲在、昨日より御發物樣成もの被爲見え候處、今朝御醫者中診被仰付候所、御疱瘡之旨申聞、御順症に被爲在候段、御廣式頭音地清左衛門昨日罷出申聞候。依而今日退出より、各御廣式ゟ罷出、御機嫌相伺候。

三月廿五日。灰吹銀その外潰銀賣買と銀箔製造とに關する幕令を傳ふ。

〔留帳拔書〕

青山下野守殿御渡候御書付寫一通相達候間被得其意、答之儀は曲淵甲斐守方ゟ可被申聞候、以上。

二月十五日　　大目付

御各殿留守居中

灰吹銀共外潰銀類、銀座幷下買之者ゟ賣渡、銀道具下銀入用之者共銀座に而買請、他所に而賣買致間敷旨、先達而相觸候處、猥に賣買致もの有之趣相聞不屆候。先達而相觸候通急度相守、銀座幷下買之外他所に而賣買致間敷候。

一、銀箔之儀、銀座より株札幷箔下かね於京都職人共相立、世上ゟ賣出候處、他國に紛敷下かねを以銀箔打立候者有之由相聞え候。右は京都箔方職人之外於他所銀箔打立候儀は難成事

に付、一切致間敷候。右之趣先年より度々相觸候所、近來又々猥に相成、銀箔隱打致候趣相聞え不屆候。以來急度相改、灰吹銀共外潰銀之類銀座之外堅く商賣不致、銀箔之儀も京都箔職人之外他所に而打立候儀一切致間敷候。右に付天明度、江戸本兩替町ゟ京都より之銀箔賣場一ヶ所相建候處、寛政之度より中絶に付、此度江戸吳服町ゟ銀箔賣場再興致、右賣場において改之印致し賣出候間、望之ものは右賣場ゟ罷越買請、紛敷銀箔堅く賣買致間敷候。若心得違、灰吹銀共外銀具潰銀之類、銀座幷下賣之者ゟ不賣渡、他所に而賣買致候歟、又は銀箔隱打等致し候もの於有之は、吟味之上急度咎可申付者也。

右之通可被相觸候。

二　月

〔金龍公記史料〕

三月廿五日。布告幕府申令灰吹銀共他潰銀。除銀座外不得賣買。銀箔除京都工人外。不得造之。

三月廿七日。前田齊廣の女勇姫の疱瘡快癒す。

〔横山氏日記〕

三月廿七日　快晴

一、勇姬樣御疱御順快、今日御酒湯被爲引候に付、年寄中等出席切中將樣江御祝詞申上候筈之旨、月番演述有之候事。

但、常服に而御祝詞申上候旨も演述有之候事。

三月。金澤城石川・河北門外に於ける下馬・下乘の位置に就いて令す。

〔御觸拔書〕

付札、御橫目江

石川・河北御門外下馬・下乘之儀、兩御門共一之御門より二十間計下り段々下乘等有之候樣、前々申渡、天明六年に茂一統申渡候趣有之候處、近年違失之人々茂有之、一之御門江近く下乘有之、込合候樣子相聞候條、左樣之族無之樣、夫々可被申談候事。

三　月

三月。御算用場等より十村等に與ふる書狀の宛所認め方に就いて告く。

〔國事雜抄〕

從前々御算用者、遠所御用先において、諸郡御扶持人・十村を初、新田裁許・山廻へ諸書物宛所書放に調來候處、安永年中懸合之趣有之節、先役共より前々通書放に調候樣申渡置、天明年中又々懸合之趣、其節は當場詮議之趣年寄中へ相達置候得共、指圖も無之內、今度右宛所

之儀被申聞候趣も有之に付、格別に遂詮議、前々書放には候へ共、十村共之儀は、役百姓之内にても於御郡方不輕役儀之者之儀。御算用者よりは方文字書加申位にて可有之候へども、十村等之內には僭上之風儀に流れ、分限を取失ひ、御算用者へ對し無禮緩怠等、心得違者も中には有之躰に候間、向後右躰之心得違不致候樣嚴重申渡、方文字は爲書加可然旨年寄中へ相達候處、當場詮議之通被聞屆候間、夫々可申渡旨御用番甲斐守殿被申聞候條、被得其意、夫々不相洩樣可被申渡候。尤御算用場よりも宛所方文字書加、其餘取扱方心得も申渡置候。右之通方文字書加候事に申渡候上は、勿論身分之進み候譯にては無之、惣て御家人とは樣子も違申儀。前段にも如申於御郡方不輕役前之者に候得共、百姓之境界は不遁者之儀に候條、向々御用先等において、無禮緩怠等不作法之族無之樣嚴重被申渡、向後心得違有間敷旨請書可被取置候。右之通年寄中へも相達、指圖之上申渡儀、是以後心得違之者於有之は、其品詮議之上急度可申付候條、此旨も兼て可被申聞候、以上。

戊寅三月　　　　　　　　　　　　御算用場

三州御郡奉行中

改作奉行中

四月七日。一條治孝の內使金澤城に登る。

〔横山氏日記〕

四月七日　雨降、晝より晴

一、今日二條様御使者登城に付、表向一統五半時揃、各には四時前より服紗袷・上下着用に而、段々登城之事。

一、九半時過御使者登城に付、御玄關敷付江御大小將兩人罷出、御玄關階下江御大小將御番頭罷出、誘引に而御大廣間二之間江相通、追付御奏者番罷出、御口上承、御近習頭を以中上候由。

御口上書左之通。

前左府殿より中將様江

夏氣相催候處、彌御安泰珍重思召候。此御方何之御障無御座候。且今度御內々御使被差向候に付、時候爲御見舞、御目錄之通被爲贈之候。

四　月　　　　　　御使　隱岐播磨守

內府殿より中將様江

夏氣相催候處、彌御安泰珍重思召候。此御方何之御障無御座候。且今度御內々御使被差向候に付、時候爲御見舞、御目錄之通被爲贈之候。

前左府殿より中將樣へ
　八景和歌色紙一箱　　御菓子一箱
內府殿より中將樣へ
　五色和歌色紙一箱　　松風一箱
一、右御口上畢而、御內用之御書曁御內用之趣、織江罷出承之。

四月八日。珠洲郡松波村滿福寺と村方との持山爭議に就いて類例を調査す。

〔留帳拔書〕

珠洲郡松波村滿福寺一件吟味之內、村方に而轆ノ山与申場所幷六ヶ山与申場所、右二ヶ所滿福寺に而は庵之山・六貫山与申而、往古より滿福寺持分之樣に成來、村方之者は日野大納言殿御印山与申ならし候由。右日野家之寄進狀与申而古き書物二通滿福寺に有之、公事場ゟ取揚候處、日野家寄進与申儀も相譯不申、判等も無之、一圓難取揚品に候。是迄何等之詮議も起り不申事故、其通に成來候与申物に候得共、今般右之趣相顯候處、慥成書物も無之上は、改作方に而は右二ヶ所如何取捌可申格に候哉。且前々より寺庵拜領地は、御當家之御墨付を以

被下置候處も有之、亦左樣之品は無之候得共、往古檢地之節、奉行何之誰江相達候得ば、竿除に相成候与申持傳候樣子、公事場江も相知居候得共、是等は其寺々地面又は地續之所に候。滿福寺は別に二ヶ所廣き場所を持來候儀、於公事場先例も見當り不申。右躰書物無之して別に地面を持候寺庵、滿福寺之外には無之哉。改作奉行より急々夫々十村等相糺申聞候樣可有御申談候、以上。

別紙之通公事場より申來候條、村方より請山幷屋敷未進地之外、御當家之御墨付御印物等も無之、前々より持來候山等有之寺方有之候はゞ、其地面前々より御郡方に而取扱之樣子等、委曲相しらべ早速書出可申候、以上。

四月八日　　　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

四月十三日。武具の充實に關し稟議す。

〔諸事留牒〕

四月十三日　霽

一、左之趣主付玄蕃より相伺。

御武具出來等御入用文化七年被仰出之趣有之、以來堂形米三百石に別段二十貫目御渡、御仕

本年七月廿五日の條參照

切被仰付候處、右御渡に而は御弓・御鐵炮を初向々相渡候定式御入用、唯今迄之通相渡候儀出來不仕候に付、右御渡高に引合せ、新出來幷御修覆物、其外役所向御入用等を初、半減或三之一餘減、其内相止候而も不指支品は、當分出來方指止候事に僉議仕、伺之上共通申渡候不時御修覆物抔も多分相辨申候。右御米代は、毎歳十一月中堂形米直段を以御算用場より請取、別段御渡之二十貫目之分共、前々之振を以夫々町會所ゑ指預、貸付にいたし利足取立來申候處、右利足銀近年之分相增、且米直段之高下にも寄、當時之處に而は餘慶銀高も出來仕候。夫に付元來御鐵炮方等を初新出來等御入用、以前とは減方に相成申候付、御道具纔ならで出來不仕候。文化七年御仕切に被仰付、御渡高も相減候付、諸向御入用銀も共圖を以減方之儀、先右之通遂詮議申候得ども、御武器之儀は格別之御品に御座候間、追而は銀高增相渡候樣仕度旨、其節達御聽にも置申候。御當節之儀には候へども、御武器は要用之御品にも御座候間、近年格別相減候分は、右餘慶之内を以年により少々增相渡候樣にも可有御座哉。右之外不時御修覆物等當時不指急分は猶豫仕置候へども、其内には無據相聞、不被仰付而は相成間敷奉存候品も御座候間、是等も餘計銀之程相考、寄々出來之儀遂詮議可申与奉存候。依而此段一往奉伺候。伺之通被仰出候へば、猶更詮議仕、員數之儀は重而可奉申上候、以上。

四月十三日　　　　　　　　　津田玄蕃

四月十四日。金澤に地震あり。

〔横山氏日記〕

四月十四日　快晴

一、八時前强地震に付、年寄中・御家老中・若年寄中一列、於松之間二之間以人見吉左衞門相伺御機嫌候處、以同人御意有之候事。

但、出席切相伺候事。

四月十四日。能登・越中産の菜種に對し取締法を設くべきことを通牒す。

〔御郡典〕

御領國出來菜種、他國他領江賣出候儀御停止、他國より來候分は入津不指支趣、寛文中一統申觸置候處、其後從公邊被仰渡之趣有之、他國他領之菜種入津も不相成段、是又夫々觸置候通に而、出津・入津共堅く不相成筈に候處、相洩候向々も有之哉、當時菜種無數之由相聞候。就中石川郡村々出來菜種、川之あなた江少も指遣し不申筈に候處、是又相洩候躰相聞え候。菜種之儀縮方第一之品に而、村々肝煎・組合頭共誓詞申付、人々作高・出來高爲相改、十村手前帳面に記置、御郡出來何程と申儀相改、賣拂候刻は買人ども切手を取置、都合之勘定承届候旨、正徳年中山崎久兵衞より年寄中江相達候旨、兼而加州御郡奉行より書出置候。右之趣

無數は少數の義

みに候得ば、種高巨細に相知居可申處、當年抔種高不數之旨曰元申出候儀は、近年縮方相弛
申故与存候條、當新菜種出來より、跡々之通締方嚴重相心得、加州三郡村々菜種作出來高、
肝煎・組合頭に爲改、十村手前に而村々出來高帳面に爲記、當場ゟ可被指出候。其上に而賣
捌之儀可申渡候。若右帳面に相洩候菜種賣捌候者有之候得ば、種取揚置、其品詮議之上、村
方調理洩に候得ば、其村方役人咎可申付候。幷三郡共種高調理之上賣捌申渡候而は、村々及
迷惑候儀も有之候はゞ、賣捌度旨斷出可申種高承屆、指解可申候。能・越之儀、加州同樣取
扱候而は、里數も隔り候事故、下々迷惑之筋も可有之候間、菜種縮方相立、一圓不相洩樣之
仕法逐詮議、早速可被申聞、夫次第當場加詮議、以來之儀可申渡候、以上。

四月十四日　　御算用場

澤田九内殿

中村逸角殿

是月は大盡なり

四月晦日。二歩判金の新鑄に關する幕令を傳ふ。

〔御用番方幷御城方御用之覺〕

四月晦日

一、酒井若狹守殿御渡之由に而、四月十六日大御目付衆より到來之御書付二通之內、左之

通。但昨廿九日江戸より到來。

大目付江

此度世上通用之ため二歩判金新規吹立被仰付候間、右步判二つを以金一兩之積り、尤銀錢共兩替小判一步判同樣之割合に相心得、取交無滯可致通用候。

右之趣國々へも可觸知者也。

四　月

右之通可被相觸候。

五月朔日。野田桃雲寺內大佛堂再建に付き松材伐採のことを議す。

〔御用番方幷御城方御用之覺〕

五月朔日

一、桃雲寺大佛堂再建普請、此節取懸候處、墓山之外は思敷用木無之候故、此方墓所之內に有之松木五本計伐木仕度旨、同寺典座口上書前月出之。依之野田山墓地之方幷林之儀、御算用場奉行へ承候處、彼方に而郡奉行へ尋候得ば、野田山之內四町四方桃雲寺境內に而、材木も彼寺勝手に仕候へども、伐取候時分抔は寺社奉行へ相達、御算用場へ申來候上、御郡奉行へ申渡有之に付、山廻り等爲立會爲致極印候上ならでは伐取候儀難成候。大佛堂再建に付

而は、去年以來松木彼是三十本餘も伐取、墓所之外最早可然木柄無之故、次第に取入候事と相聞え申候。大佛堂建立与而、左而已多く木數可入儀に而もなく、彼山茂みも次第に薄く相成候條、可成儀に候はゞ不伐取樣有之可然旨申分之由。依之此方墓所之内に有之分指省き候樣致度旨、横目共より以紙面申達。

但、右建立に付先達而賴之趣有之、表向合力は及斷、内々二百疋遣之。

五月六日。前田齊泰、老臣長甲斐守の邸に臨む。

〔齊廣樣御傳略等之内書拔〕

五月六日勝千代樣御行歩御出、國老長甲斐守上屋敷ゟ御立寄、御成御門より御入なり。

〔日川雜記〕

御立寄は長氏邸へなり

五月六日

一、今日勝千代樣御行歩先き之趣に而御立寄、晝九時より暮頃迄御機嫌能被爲有御遊候。右去年九月御成之御沙汰御座候處、御延引に相成申候。夫に付御用主附は小原才記殿・杉野左助ゟ被仰付候。

〔見聞袋群斗記〕

五月六日御行歩御出、國老長甲斐守屋敷ゟ御立寄、御成御門より御入被遊候。右庭之泉水之

內銅製之立鶴御意に叶、御所望御持歸御秘藏、常に御居間先御泉水に御置御詠。御隱居金谷御殿江御引移之節も御持行、右御殿御泉水之內御置。又東京江御歸京之節も矢張根岸右御庭御置、御幼少より御持之御品之由御咄予奉拜聽。

五月九日。大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤に宿す。

〔橫山氏日記〕

五月九日　快晴

一、備後守樣夜前今石動御泊に而、今日此表江七時前御着被成、御使御近習頭上坂平九郞被遣候由之事。

五月十日　快晴

一、備後守樣今朝兩御寺江御參詣被成、九時之御供揃に而、八半時過此表御發駕之由之事。

〔御用番幷御城方御用之覺〕

五月九日

一、備後守樣前月廿八日江戶表御發途、當九日此表御着、翌十日御登城被成度思召候由、先達而前田主膳幷御在所御家老よりも申來候處、中將樣先頃以來御勝不被成、爲指御樣子には無之候へども、今以御保養中之御儀故、御登城被成候而も、迚も御對顏も難被成候。左候へ

ば長途之御旅行御隙取之儀も如何に思召候付、御登城之儀御斷被成度思召之旨、一昨七日以紙面御月番より主膳迄被申遣候處、被任被仰進御登城不被成由、今朝主膳返書到來之由。今日出席之上返書披見。

一、備後守樣明朝兩御寺へ御參詣、昔頃御發駕之由、町奉行より御用番へ達之。依而各明朝御旅宿へ罷出候筈也。

五月十二日。年號を文政と改められたる報金澤に達す。

〔御用番方幷御城方御用之覺〕

五月十二日

一、去四日御用番阿部備中守殿へ間番被召呼、年號文政と改元之旨に而御書付御渡之旨、翌五日發足町飛脚中使に傳附、修理より今日申來。但、前々中飛脚、去四日出飛脚御用所より御用有之差留置、翌五日發足中飛脚歩申渡候付、傳附申越候由也。來狀等御用番より被上之候處、何茂拜見可仕旨被仰出候付、各幷御家老中席に列座、御書付拜見。左之通。

折紙　文政

右御書付即日御用番より返上、前々之通一統相觸可申趣被申上候。尤拜見之御禮等は無之也。

五月。金澤城内樂屋多門の屋根を鉛葺とする經費に就いて議す。

〔御用番方幷御城方御勝手方御用之覺〕

一、御樂屋多門屋根大破に相成、土葺迄も朽入、最早御修覆之手段無之、葺替被仰付候樣仕度旨、去年三月晦日御作事奉行紙面出之、屋根葺替御入用六貫二百目計、鉛葺出來御入用三十二貫三百目、計〆三十八貫五百目計り懸り候由に付、御勝手方へ致示談候處、先當年は猶豫可然旨に而、去年相見合置候處、此儘に被成置候而は、裏板迄も朽廻り、甚御不益之儀候條、早速僉議有之樣にと、當二月二十六日御作事奉行重而紙面出之、御勝手方へ僉議有之處、今・來年へ懸御修覆被仰付候而は如何と之儀故、其段御作事奉行へ申渡候處、當年十九貫目相渡、（御算用場手續次第十一月迄に二・三度に相渡候而も不指支旨。）殘銀十九貫五百目は、來卯年相渡次第鉛葺に爲取掛可申旨覺書出之。（五月なり。）

但、文化十二年御幟以前棟通鉛瓦に成、其節惣樣先年之通鉛瓦に仕候儀も伺濟有之也。併其分之伺は、一時に鉛に相成候而は過分之御入用に候間、御作事向は手續次第、少々宛に而も毎年鉛屋根に可仕趣也。此一件紙面等今日引合見候故、前末之樣子爰に記之。

六月十二日。金澤寶圓寺に於いて昨今兩日前田重教の二十三回忌法會を

執行す。

〔横山氏日記〕

六月十一日　曇、七時過少々雨降

一、今明日於寶圓寺、泰雲院様三十三回御忌御法事御執行に付、御手詰左之通。

伊勢守　土佐守　三郎　又六

玄蕃　織江　式部

六月十二日　天氣吉、夕方少々雨降

一、御前今日御參詣不被遊候に付、御名代安房守被相勤、一先登城之上被申上、重而拜禮に被罷越候由之事。

一、勝千代様昨日御書立之通、今日御參詣不被遊候に付、御名代甲斐守被相勤候由之事。

六月十三日。石川・河北兩郡の大犬を追ふ爲鐵炮の空發を許す。

〔御用番方幷御城方御用之覺〕

六月八日

一、石川・河北左之村々之內、頃日大犬致徘徊、農人等に指障候旨十村共より及斷、おどし鐵炮爲打申度旨加州御郡奉行紙面。左右へ押札いたし以吉左衞門上之。十二日也。翌日以同人被返下候付申渡之。

石川郡　福留村　六郎右衞門組
高尾村　六郎兵衞組
村井村　六左衞門組
野々市村　吉郎兵衞組
河北郡　御所村　長次郎組
南森下村　三郎右衞門組
森　村　藤左衞門組

六月十三日
一、此頃御郡方大犬致徘徊おどし鐵炮うたせ度旨、去八日相達御聽候上、うたせ候樣則今日永原新之丞へ申渡候。頃日は町中へも入候躰に而、はなしも有之候處、房州屋敷內に而夜中家來之者兩三度見請候由。夜中之事故たしかには無之候へども、地犬と違餘程飛候所も見受候由。一兩日にも見屆候はゞ、鐵炮に而うたせ申度候、夜分之儀ながら苦かるまじき哉之由示談に付、不苦儀と存候、併御城近之儀候條、一往達御內聽置可申哉と申候所、申上候而も可然候はゞ申上吳候樣にと被申聞候付而、以吉左衞門申上候。

六月十四日。三子出生の場合の見屆け方を十村に令す。

〔御郡典〕

支配所三子出生有之節及斷候へば、其時々御用番ゟ相達、御扶持被下候儀、面々承知之通に候。仍而以來三子出生之節、其方共罷越、隣家之者に立會、得与見受、早速可及斷に候。右見屆方其方共及遲滯に、屆方及延引に候はゞ可爲越度候。勿論當病等に而難罷出候はゞ、急速最寄同役可申談候。右三子出生に事寄、紛敷儀も可致出來哉に付譯而申渡置候、以上。

寅六月十四日　　澤田九内印
　　　　　　　　中村逸角役印

能州四郡十村中

六月十八日。石川郡宮腰往還に於ける二匹繋の馬を禁ずることを議す。

〔御用番方幷御城方御勝手方御用之覺〕

六月十八日

一、御郡方馬之端綱長き儀制候處、宮腰之馬は二疋繋ぎ、且長き木抔付候故、自ら長く相成、同所町奉行手合に而は、先年御定も有之二疋續候抔と申候へども、慥成儀も無之、此儘に而は外々之制方障に成り候條、先達而達置候二疋繋之儀早速遂僉議候樣仕度旨也。

是月は大盡なり

六月晦日。馬術師範役淺川七太夫、淺野川馬場に於ける賃馬持との交涉

に就いて伺出づ。

〔諸事留帳〕

六月晦日

當七日定日稽古之節、賃馬持與三郎儀、對御弟子中賃馬之儀に付不分明之儀申聞候に付、詮議中與三郎馬指出候儀、御弟子中曁私申談指留置、近年振合之通其段諸稽古所ゟ演述仕候處、一統與三郎賃馬被指留候。然所當廿二日定日、淺野川賃馬持一統申談、馬不指出候に付、組合頭兩人共呼立、何等之趣にて今日一統賃馬不指出哉之旨相尋候處、右與三郎賃馬御指免無御座內者一統難指出段申聞候。賃馬持一統心得方難相辨、其段重而諸稽古所ゟ申談候處、當廿三日より同廿六日迄高桑善五郎殿等一統乘馬稽古被相止候。私儀學校師範等茂被仰付置候儀、乘馬稽古差支候儀不行屆之至奉存候。依而如何相心得可申哉、此段御達申上候。早速御詮議之上被仰渡被下候樣奉願候、以上。

六月晦日　　淺川七太夫

蓑輪彌次右衞門樣

寺尾宗兵衞樣

口達之覺

當月七日稽古定日に御座候處、金子與三郎与申者賃馬、御兩人乘馬御座候上、內藤十兵衛殿御舍弟彥左衛門殿乘馬可被成旨御申被成候處、此間中足引惡敷、今日乘心見に出候間、是切に而牽歸申度旨申聞候。足引惡敷乘試有之儀は、其方承知に有之儀、諸士稽古を以乘試与申儀は一圓難心得。左樣之儀に候者最初其儀可申斷、左候へば申入方も有之候處、其儀も無之不屆之儀与申入候處、何れも乘試に出候旨申聞候に付、以來稽古日に其方馬出候儀不相成、指留候旨彥左衛門殿曁私より茂申渡候。賃馬持右躰之不埒御座候而稽古日に不指出樣申渡候儀、以前者共稽古所切に御座候處、十ヶ年許以前より、何方に而も指留に相成候節、諸稽古所江相互に及演述候而、都而不指出事に相成申候而、是迄私方にも以前一度、此度に而兩度、其外高桑善五郎殿・明石數之助殿・佐野源藏・近藤幸左衛門方等に茂指留之儀御座候而、其時々諸稽古所共指留相成申候。然所同日夜中與三郎私宅江罷越、今日之始末彥左衛門殿江宜申達呉候樣に申聞候に付、私よりも申譯致可申候得共、明朝にも早速內藤殿江罷越致申譯候はゞ可然旨申入候處、明朝は御預之御馬馬場出に而不得罷越旨申聞候に付、左候はゞ今晚にも罷越候樣に申入候得共、今晚も難罷越旨申聞候に付、左候はゞ明晝後成共參じ候而可然旨申入置候處、同九日與三郎儀重而罷越、內藤殿へ申譯に罷越候へ共御聞濟も無之候。元來七日之儀は內藤殿御申聞之趣無理成儀与存候旨、與三郎申聞候に付、無理与申は何等之趣意に候

哉与相尋候へば、御兩人乘馬御座候に付、是切に而牽歸度旨馬割中ゟ申達候得共、强而彥左衞門殿乘馬可被成旨御申聞被成候而より、右之時宜に至り候旨申聞候に付、私儀も馬場へ罷出居候得共左樣之儀は承り不申。勿論馬割中ゟ相斷候儀を御聞乍被成、馬割も被成候而彥左衞門殿乘馬可被成与可被申筈も無之。其上先達而相斷置候事に候者、其座に而其段可申筈之處其儀も無之。曁內藤殿へ右躰に存候事に候はゞ、申譯に罷越候にも不及筈。何れ申分難相分、乍去左樣に申聞候談合に而者有之間敷与存候間、得与致思慮、幾重にも內藤殿ゟ相詫可然哉与存候旨申入置候。然所同十五日竹內長太夫儀、私緣類之者に付勝手ゟ罷越、組合之者共私に面談仕度旨に而罷越候旨申聞候に付罷出候處、長屋傳助・佐野德次郞・吉嶋權太夫・高木次助・片山與三吉・安田金三郞・太田吉之助・吉嶋與左衞門・山田傳右衞門・佐野橋兵衞・金子與三郞都合十二人罷越居、先日以來內藤殿ゟ與三郞申譯に罷越候得共、未御聞濟茂無御座、與三郞儀及渴命に候間、私共一統申談、與三郞指免無之內者、私方稽古日に賃馬難指出旨申聞候に付、其儀は不輕儀、一旦に右躰申聞候趣に而は有之間敷、一統馬不差出候へば與三郞渴命におよび不申与申儀にも有之間敷。左候へば事を求候申分に而、根元は與三郞馬を彥左衞門殿より被差留候に付、惣而之弟子中乘馬指支候与申儀は不容易儀。得与思慮有之候はゞ可然与申入候得共、其答はき与不相分何茂罷歸候。然處佃源左衞門殿御次男庄太夫不斗御越被成候

に付、右傳助等罷越申聞候趣內分及御示談、右躰之趣彌賃馬持共申聞候時は不容易儀に候間、私一人承受候儀に而は不相成。後々間違も有之候而も不相成儀に付、同日夜中權太夫・傳助兩人呼遣候へども不在合候に付、齋藤長八与申者呼に遣、先刻傳助等申聞候趣は、賃馬持一統与有之上は夫々示談之上之儀与存候。彌傳助等申聞候通相違無之哉与相尋候所、長八儀申聞候者、右之趣は都而申合、一統與三郎指免無之內は馬不差出事に何茂申居候得共、此儀は何茂心得違与存候間、賃馬持共手前之儀は長八引受夫々申入、無差支馬指出させ可申候間、傳助等先刻申聞候趣は是切に承置吳候樣申聞。且內藤殿江、與三郎之儀者私より宜申譯いたし吳候樣に申聞候に付、其儀は尙更追而內藤江致申譯可申与申遣、長八相返申候而、十七日學校江茂夫々馬指出申候。然所長八儀廿二日晝後罷越申聞候は、賃馬持共何茂、與三郎儀今以指免無之、此間引受居ながらヶ樣に日延に相成候儀者難心得旨申聞候に付、長八より相答候者、先日引受候より左而已日間茂無之儀。今日者稽古定日に候得者、馬割中茂出座可有之、尤馬割中示談も無之而は指免之儀も難相調候間、今暫相見合可申旨申述候處、何茂承引無之に付、左候時は長八儀引受候儀は難仕、何茂勝手次第可仕旨申入候由。且與三郎同人江申聞候は、右躰指免方遲滯之儀に候得者、今日之稽古には馬難指出旨何茂相心得居候樣子に相聞え候由申聞候。右之譯合に付、賃馬持共手前之儀引受候与先日私江申聞置候得共、以後扱が

たく、尤右躰に申居候躰に而者何茂馬指出不申与存候得共、長八儀はやはり馬差出候了簡之旨、併不食致候に付、廿二日之處は不得差出旨。勿論何茂馬指出不申儀は、前文意味之ため申述候事に而、何茂より定而何とか追付可申聞与申罷歸申候。然處外之者共より何等之事茂不申聞、其内夕七時過にも相成候得共馬不指出候に付、賃馬持共〻馬指出候樣、御弟子中之內御越被成御催促御座候處、多分馬持共留守に而、其內太田吉之助儀者追付馬可指出旨申聞候得共、一疋のみ指出候而者稽古茂難出來に付、重而相斷申候。且佐野德次郎一人有合、馬は今日より一統難指出旨及答候付、左候はゞ其段稽古所〻罷越可申聞旨被申置候由に候得共、德次郎不罷越候に付、呼遣候得共致他出候旨に付、町內組合頭淺川淸太夫・長屋平助申遣、其委曲相尋候處、夫々馬持共相糺可申聞旨申聞。翌廿三日淸太夫等より申聞候は、馬持共相糺候處、與三郎馬差免不申內は一統馬不差出旨申聞、外に趣意は無之旨に付、左候はゞ其段爲相調指越候樣申入候處、相調候儀は町御奉行衆〻御達不申候而は難相調旨申聞候に付、左候はゞ相達候上相調指越候樣申遣候處、町奉行衆〻相達候得ば、相調候にはおよび不申旨御申渡に付調差越がたき旨、重而淸太夫等より申聞候事。

六月。幕府の預地及び加賀藩領の百姓等互に切高・取高をなし懸作することを得しむ。

〔司農典〕
御預地村々百姓共ゟ、御私領村々より致切高候儀難相成事に候得共、御預地・御私領同様之御取扱に相成候に付、是以後御私領村々より御預地ゟ致取高、右切高之村々ゟ懸作百姓に相成候儀不指支趣に相極候。尤御預地之者致取高候節、其村裁許々々ゟ呼立候儀等、御私領格合之通可相心得候。
一、右之通御預地之者、御私領村々において懸作百姓に相成候上、御收納方に付何与歟不埒之趣等有之候はゞ、一往拙者共手前に而相糺候上、落着之儀は御預地方より申渡可有之候。
一、御私領村々百姓共にも、御預地より致取高、表向御預地之百姓に罷成候儀難相成振合に候得共、是亦自今御預地ゟ懸作百姓に罷成候儀指支不申候。御收納方に付何与歟不埒之趣有之節は、是亦一往御預地於役所に相糺候上、落着之儀は拙者共より夫々可申候。
右之通今般御預地方申談詮議之上、御算用場ゟも相達、以後如此相極候條得其意、一統可申渡候、以上。

戊寅六月　　改作奉行

能州四郡御扶持人・十村中

七月十日。旱魃なるを以て用水を濫用すべからざることを告ぐ。

〔御觸拔書〕

別紙之通一統相觸候付、爲御承知進之候、以上。

七月十日　　長甲斐守

當年永照にて、村々田地用水段々及減水、番水等に申付候得共、今以潤雨茂無之、所に寄飲水に茂指支申躰に付、水源に而隨分水致大切、少に而も流末𛀙到候樣可相心得旨、改作奉行より御郡方𛀙一統申渡候段、御算用場奉行申聞候。右躰之儀に候得者、侍屋敷之內相通候用水、幷金澤町・遠所町共家廻用水流通候所々、猥に打水等に仕候儀、人々心得茂可有之儀候事。

右之通被得其意、組・支配之人々𛀙可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配𛀙茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

七月十日　　長甲斐守

七月十四日。領國浦々に於ける出津・入津の物品口錢取立方に關して通牒す。

〔魚口錢浦口錢舊記〕

御領國浦々一統出津・入津之品共口錢取立方之儀に付、別紙御算用場廻狀寫幷帳面寫等遣之

候條、得其意、早速夫々不相洩様可申渡候。尤前段之趣に付詮議之筋も有之候はゞ、委曲書付を以可申聞候。承知之驗印形いたし可相返候、以上。

寅七月十四日　土肥嘉傳次

溝口藏人

御扶持人・十村宛

御領國浦々ゟ他國より諸品入荷物、幷御國より他國出し荷物、是迄其浦々に而口錢取立候所も有之、御領國中區々相成居候。仍之當場詮議之趣有之、以來は出津・入津之品共、別紙帳面之通御領國一統浦々に而口錢取立、小物成銀上納同様に、毎歳六月・十一月中上納之趣に可被相心得候。其所々役人等雜費入用之儀は、追而遂詮議可申渡候。勿論右帳面に相洩候品、幷帳面に調置候分に而も、指支之處は時々可申聞候。

右之趣御勝手方年寄中ゟも相達取極候條、來る八月朔日より夫々取立候様可被申渡、浦々に而取立人主附之儀、御郡方には先達而改作奉行より申渡置候。別紙名前之者ゟ可申渡候。所々町方之儀は、其所々詮議之通可被相極候。

一、出津・入津之品共、是迄之通潤改役人等舟方より斷次第早速罷出相改、少茂滯候儀無之様可相心得旨可被申渡、自然も滯候事有之候而は、口錢取立候に付而滯船之様に申唱、御仕

法之障に相成候間、是迄よりも速に出津・入津しらべかた無滯相心得候樣可被申渡、尤出役及延引、舟々迷惑之筋相聞え候はゞ、咎可申付候條、其段可被申渡候。

一、出津・入津共口錢取立候儀者、其所々舟宿より可被取立候。船宿之者は、右口錢取立候に付而も、地・他國共船手之者共船宿に而成限不辨之儀無之樣相心得、所賑に不指障之樣心得方之儀も可被申渡候。

右之趣得其意、先々早速被相廻、落着より可被相返候、以上。

七月八日　　御算用場

溝口藏人殿

土肥嘉傳次殿

猶以出津・入津之品、此度口錢取立に申渡候ても、出津御制禁之品は尤是迄之通、御縮方心得違無之樣可被申渡候、以上。

射水郡幷新川郡共

内嶋村　孫作

中川村　善左衛門

能州奥・口兩郡共

笠嶋村　八三郎

鵜川村　爲次郎

加州　　　淵上村　源五郎

右人々今般浦口銭取立方主附申渡置候事。

七月

諸浦諸賣物入津口銭取立高之事

但出津荷物之分者都而此口銭高之五ヶ一取立可申事

一、米　　一石に付五分宛
一、小豆　　同　五分
一、菜種　　同　五分
一、大角豆　　同　五分
一、稗　　同　一分
一、粟・豌豆　　同　四分
一、荏　　同　四分五厘
一、蕎麦・黍　　同　三分
一、胡麻　　同　八分
一、麻種　　一俵に付四分

一、綿種　　同　　三分
一、漆種　　一石に付二分五厘
一、紅花　　十貫目一箇にして四箇一駄に付三十目
一、放花　　同断一駄に付十五匁
一、蘇木　　一箇五貫目入に付三分五厘
一、かりやす　　十貫目に付一厘
一、黄柏　　十貫目一束に付一分五厘
一、古手　　一箇に付一匁五分
一、抜手　　同　　五分
一、藍玉　　一本二十貫入一匁八分
一、石灰　　大俵三斗入一俵に付二厘五毛、小俵一斗入一俵に付八毛
一、眞綿　　一箇六貫目入に付八匁
一、糸　　一把に付五分
一、呉服物類　　大箇八十本入に付六十目、中箇四十本入に付三十目、小箇二十本入に付十五匁

一、絹　一箇五十疋入に付十五匁
一、木綿　一疋に付八厘
一、縞紋類　同　一分三厘
一、織草類　一箇二十貫目入に付一分六厘
一、のし繼　一箇二十六貫目入に付一匁三分
一、生布　一疋に付一分四厘
一、晒布　一疋に付一分五厘
一、裂織　一端に付五厘
一、越後縮　一端に付六分
一、紙子　同　五厘
一、葉藍　十貫目に付二分
一、朱　百六十目一斤に付三匁
一、紅がら　一斤に付二厘
一、白粉　一箇十貫目に付六匁五分
一、明礬　十斤に付四分八厘

一、浮　粉　一樽九十袋入に付六分
一、ふのり　生十貫目に付三分、晒十貫目に付五分
一、玉　墨　一箇千入に付二分
一、蠶　繭　同十貫目入に付一匁八分
一、切石類　大坂越前戸前石一本に付一分、同五六土臺石板石一間に付二厘七毛、同六七一間に付四厘五毛、同尺六同斷七厘、同石流大石に付二分五厘、同同中石に付一分五厘、同同小石に付五厘、同石臼火櫃七厘
一、同斷小松・魚津・小木石　五六土臺石板一間に付二厘、戸前石一本に付七厘、六七土臺石一間に付四厘、尺六一間に付五厘、石臼火櫃二厘
一、井戸石　一つに付七厘
一、草槙・槻・桐・杉・朴并寸方　才石に付二分五厘
一、松・栗・雜木類　才石に付一分
一、網の筌(ウケ)　百本に付三分五厘
一、架(ハサ)木(ギ)　同　二分

一、船の座木（ザキ）　十束に付五分

一、小羽板　松百枚に付八毛、栗・楢（カシノキ）等百枚に付一分五厘

一、桶榑（クレ）　三尺一本に付五厘

一、酒樽　二斗入十に付五厘

一、竹　十貫目に付三厘

一、小竹類　三十本一束に付二厘

一、艫櫂　櫂三枚に付二厘五毛

一、牧木（バイギ）　大百束に付一分五厘小百束に付五厘

一、炭　六貫目一俵に付一厘五毛

一、薪木呂　半坪一間に付一分五厘

一、潰竹・杉皮　一間に付一厘

一、はねそ　三尺縄十しめに付三厘

一、階子　二間分に付四厘

一、戸・障子　板戸一間に付五厘、障子一間に付二厘

一、屏風骨　一双に付二分

一、戸　　桟　　一束に付一厘
一、梱　　　　一羽に付一分
一、索　麵　　一俵三貫目入に付一分
一、酒　　　　一斗に付二分
一、醬　油　　一斗に付七厘
一、酒　粕　　十貫目に付五厘
一、酢　　　　一斗に付六厘
一、味　噌　　一貫目に付一厘
一、氷砂糖　　一瓶六十五斤入に付三匁三分
一、白砂糖　　同　同　　二匁一分
一、黒砂糖　　一桶八十斤入に付一匁
一、干菓子　　十斤に付一分
一、干温飩　　百把に付二分
一、砂糖蜜　　一桶百斤入に付一匁
一、青　苧　　三十六貫目一駄に付十二匁

一、白　　苧　　右同断
一、金引苧　　一貫目に付一分
一、扱　　苧　　同　　一分二厘
一、山　　苧　　同　　六厘
一、またばき苧　　十貫目に付一分二厘
一、いちび苧　　同　　二分五厘
一、苧くそ　　同　　三厘
一、苧　　絈　　一箇二千に付十匁
一、鐵　　長割一駄二十貫目に付七分、中割同三十貫目に付八分
一、鋼　　鐵　　一束十三貫目に付五分
一、銑　　一駄三十貫目に付三分五厘
一、金床地　　一貫目に付三厘五毛
一、錫　　玉錫一箇十六貫目入に付十一匁二分、半錫一箇十六貫目入に付八匁宛
一、眞　　鍮　　一箇十六貫目入に付五匁六分宛

一、銅　十貫目に付二匁五分宛
一、鉛　山出二百目一斤に付二厘宛
一、とたん　十貫目に付四匁二分宛
一、板金　十貫目に付二匁五分
一、針金　鐵十貫目に付二匁五分、銅百目に付四厘、眞鍮百目に付六厘
一、鐵釘　十貫目に一匁
一、釘　一箇五貫目入二匁三分
一、前挽鋸　一箇五枚入に付二匁五分
一、金物打物　一箇八貫目入に付三分
一、錢　十貫文に付一匁宛
一、鍋　組合二升入一箇に付二分
一、古鍋釜　十貫目に付五厘宛
一、鹽釜　十鍔一枚に付二匁五分、淺釜一枚に付三匁五分
一、釜　一斗入に付一分五厘宛
一、小間物　大筒一ヶに付十五匁宛、中筒一ヶに付七匁五分宛、小筒一ヶに付

二匁三分宛

一、ひはだ　十貫目に付一分五厘宛

一、しな　同　一分八厘宛

一、伊豫・小松等竹簾　百枚に付一匁宛

一、糸　籆　百に付一分宛

一、杓　子　百に付五厘宛

一、傘轆轤　一箇三百入に付一分

一、綿　操　十挺に付一分五厘宛

一、荷　棒　百本に付七分宛

一、菅　笠　大筒百七十かい入八分五厘宛、小筒百かい入五分宛

一、竹子笠　百蓋に付二分五厘宛

一、鍬　柄　百挺に付三分宛

一、柳ごうり　飯ごうり百廿入に付五分宛、着替こうり一組に付一分五厘宛

一、籠　十に付一分宛

一、篩　十に付一分宛

一、箕　　十に付五厘宛
一、蓑　　くみ蓑一つに付八厘宛、菅みの一つに付二厘宛
一、傘　　四十本入一籠に付八分宛
一、こまざらへ　　百本に付一分宛
一、笠あて　　百に付五厘宛
一、木履・下駄　　十束に付三厘宛
一、足駄の歯　　百枚に付四厘宛
一、革緒　　百足に付二分宛
一、砥石　　但馬出砥十貫目に付三厘宛、大坂青砥一筒八挺入に付三分宛、京都合せ砥十貫目に付二分宛、長州新付砥十貫目に付一分宛
一、筆毛　　一箇十貫目入に付三厘宛
一、蒲はゞき　　百足に付二分宛
一、草履・草鞋　　千足に付三分宛
一、箒　　百本に付一分宛、椶櫚箒十本に付一分五厘宛
一、竹皮　　十貫目に付四厘宛

一、燈　心　三貫目一箇に付一匁宛
一、五培子　百三十目一斤十斤入に付一分宛
一、蠅取もち　一貫目に付三分宛
一、刻たばこ　百目一斤に付一厘宛
一、木　賊　百把に付一分八厘宛
一、土雛面等　一籠四百入に付一分宛
一、麥がら細工物　一箇に付二分宛
一、硯　石　一箱十貫目入に付七分五厘宛
一、扇　子　一箇千二百入に付二匁宛
一、網のいは　千に付一分宛
一、編　笠　一箇百枚入に付一分宛
一、附　木　百把に付一厘宛
一、杉　箸　一箇百把に付二分宛
一、乾(カラ)鮭　十本一束に付四厘宛
一、ぼう鱈　十本一束に付五厘宛

一、鰹節　十貫目に一匁三分宛

一、鰊（カズノ）鯑（コ）　同　三分五厘

一、魚（イ）汁（シル）　一樽一斗五升に付二厘

一、鶏卵　同　五百入に付五分

一、蒸鮑　百に付二分

一、熨斗　一把に付二厘

一、鹽鱈の子　一樽に付三分

一、鹽鯨　十貫目に付八分

一、鹽鰒　一樽に付二百枚入に付一分二厘

一、鹽鯖　一箇五百枚入に付一分五厘

一、鹽鰺　同　同　同

一、鹽鰯　同　千入に付五厘

一、刺鯖　十貫目に付二分

一、鹽烏賊　百に付一厘

一、鹽鰭　十貫目に付一分八厘

一、鹽鰤　十本に付五分
一、鹽鮪　一箇十貫目に付一分五厘
一、鹽鰹　同　五百枚入に付一匁五分
一、干鱈　同　三十枚入に付四厘五毛
一、干烏賊　夏二十枚一把一箇百把入に付二分、冬十枚一把一箇百把入に付三分五厘
一、干鰒　百枚に付六厘
一、鰍　一枚に付二厘五毛
一、かつをぶし　一俵に付一分五厘
一、小魚干物　一箇に付一分
一、生鰤　十本に付四分
一、生鮪　一本に付一分五厘
一、大魚　右同斷
一、生鱈　十掛に而二厘
一、生鰆　十本に付五厘

一、生　鯨　十貫目に付四分

一、筒　鱈　十掛に付一厘

一、生小魚類　一肩に付一分三厘

一、生　鮑　百に付一分七厘

一、鹽鰒子　一樽十貫目入に付五厘五毛

一、鹽　鱈　一箇三十本に付四分五厘

一、鹽　鯛　一筒五十入二厘

一、開鹽鱈　同　三十枚に付四厘五毛

一、開小鱈　同　百枚に付八厘五毛

一、かきさき鰒　一箇百枚に付五厘七毛

一、生　鰹　一笊百入に付一分宛

一、生　鰐　一本に付一分五厘宛

一、生まんたら　一本に付二厘宛

一、生　鯛　百に付二分宛

一、生　鯖　百に付一分五厘宛

一、鰤擦身（サツミ）　一箇八本入に付三分宛
一、生　鰯　一笊に付三厘宛
一、烏賊黒作　一升入十桶に付一分宛
一、鯡　十貫目に付一分宛
一、能生疊　十疊に付二分宛
一、能登疊　十疊に付三分五厘宛
一、備後表　一束に付二分五厘宛
一、小松表　同に付　一分五厘宛
一、氷見・越後・佐州表　同に付　五厘宛
一、琉球・七島　同に付　一分宛
一、緣　取　同　一分宛
一、筵　同　一厘五毛宛
一、笘　同　七厘宛
一、綱　一挺三十尋十挺に付一分宛
一、藁綱の子　十束に付一分宛

一、仕立厨子　一つに付二分宛
一、同長持品々組入　一つに付三分五厘宛
一、同簞笥品々組入　同　四分五厘宛
一、中盤折敷　百枚一荷に付三分五厘宛
一、松・杉・檜へぎ　二百枚一荷に付三分五厘宛
一、輪嶋椀・折敷　廿人前入大櫃に付三匁宛、十人前入小櫃に付一匁五分宛
一、魚津椀　一箇十二束入に付七分宛
一、佐州塗物　右同断
一、會津塗物　右同断
一、椀木地　十束に付一分宛
一、山中木地　一箇八貫目に付六分宛
一、太皷のどう　百に付一分宛
一、唐津瀬戸物　一俵に付筑前出三分宛、京・大坂出二分五厘宛、長州出五厘宛
一、瓶　赤間關一石に付五厘宛、越前太田一石に付三厘宛
一、半紙・杉原・薄墨・鳥子等　千枚に付一分宛

一、中折紙八寸・美濃・薄墨・奉書類　一丸に付四分宛

一、形から紙・色紙等　千枚に付五分宛

一、渡紙　一本二百枚に付一匁宛

一、散反古　十貫目に付七厘宛

一、漆　一桶一貫目入に付三分宛

一、柹澁　一斗に付五厘宛

一、萱　一束に付一分宛

一、生麻　五十束に付一分宛

一、楮皮　一束四貫目に付五匁宛

一、生蠟　一箇十四貫目入に付一匁三分宛

一、晒蠟　大坂一箇十六貫目入に付一匁一分宛、長州同十二貫目入に付七分宛

一、種油　一斗に付二分五厘宛

一、荏油　一斗に付三分五厘宛

一、魚油　一斗に付一分五厘宛

一、綿・種油・胡麻・油木・實油等　一斗に付一分五厘宛
一、鬢附　百六十目一斤五十斤入一箱に付一匁一分
一、胡猿油　一樽二斗入に付三分四厘宛
一、藥種　大筒二箇一駄に付三匁宛、中筒四箱一駄に付一匁五分宛、小筒一駄に付一匁
一、生藥　十貫目に付五厘宛
一、抹香　一俵五斗入に付四厘宛
一、合藥　十貫目に付二匁宛
一、蒟蒻玉　一俵十貫目入に付一分五厘宛
一、生姜　大俵一俵に付一厘宛、小俵一俵に付五毛宛
一、薩摩芋　一俵十五貫目入七厘宛
一、昆布　しのり昆布十貫目に付一分二厘、駄昆布右同斷、花おり昆布一把三百目に付六毛
一、あらめ　一箇二十貫目に付二分五厘宛
一、心太草　晒十貫目に付一分五厘宛、生草十貫目に付八厘宛

一、蜜柑　一籠千入に付一分宛
一、干瓢　十貫目に付八分宛
一、刻昆布　一箇二十貫目入三分宛
一、狗脊　同十二貫目入三分五厘宛
一、干大根　同百把入一分五厘宛
一、椎茸　一桶に付一分六厘宛
一、西瓜　十に付五厘宛
一、大根　百に付二厘宛
一、茄子　百に付一厘宛
一、串柹　一箇三十連に付一分五厘宛
一、葛粉　一斗に付一分宛
一、蕨粉　一斗に付一分五厘宛
一、ゐご　十貫目に付三厘宛
一、干物類　一箇に付七分宛
一、鹽のにがり　一樽一斗に付一厘宛

一、大豆播葉　十貫目に付三厘宛
一、濱防風　十貫目に付二分五厘宛
一、とうの芋　一俵に付六厘宛
一、蕨　同　一分宛
一、堅瓜　百に付八厘宛
一、梨子　百に付三厘宛
一、氷蒟蒻　一箇千枚に付一分宛
一、革　牛一枚に付三分宛、鹿一枚に付七厘宛
一、鮫皮　十枚一束に付五厘宛
一、胡獱皮　一箇五枚入に付三分
一、蛤貝から　一俵に付二厘宛
一、蜆貝殼　一俵に付一厘宛
一、焰硝　十斤に付三分五厘宛
一、瓦　一坪に付一分五厘宛
一、葉たばこ　百六十目一斤に付三厘宛

但、葉煙草口銭之儀、最前より取立役人有之。加州出來は鶴來に而取立、越中・能州出來幷加州より越たばこは、所々役人相廻口銭取立、越中浦・能州浦に而は他所より船積入津たばこ之分も取立來申儀に候間、今般本文浦口銭能・越浦に而は不及取立申候。加州浦に而は是迄たばこ入津口銭無之間、能・越より入津之分は本文之通加州浦において取立可申事。

一、砂干鰯　綿粕　種油　荏粕　緋　さゞめ　鮪骨　鱰骨　鰍骨　さゆべ　たばこ殻　鰯しめ粕　醤油粕　鱈干加　焚灰　粉糠　魚生屎　小麦粕　鰤骨　酢粕

此類田畑屎物に相用申品々に付、口銭取立申間舗事。

一、茶締綿・連保綿　近年諸浦において口銭取立申に付、今般之口銭方に指加へ不申事。

一、大　豆　一石に付五分宛

一、小　麦　一石に付五分宛

一、大　麦　一石に付二分五厘宛

但、麦・大豆加州にては宮腰・粟ヶ崎・大野・本吉・湊・安宅此六ヶ所、越中に而は放生津・氷見・伏木此三ヶ所、先達而口銭取立來候間、右九ヶ所において今般之浦口銭取不申筈に候。其外三州共浦々端浦とも、本文之通口銭取立可申事。

一、諸浦魚口錢之儀、生・塩共他國出津には是迄三歩半口錢取立申儀に候間、今般之浦口錢は取立不申筈。御國廻り之分は出津口錢取立可申候。入津には自・他共、前段諸魚品々條下に書記申通り、今般之浦口錢取立可申事。

一、前條書立候は、都而入津之浦口錢高に候。惣而出津之品は御國産に付、詮議之上右口錢高之五ヶ一取立可申事。

一、他所より入津之上、其所より積出、又候他浦ゟ入津いたし候儀可有之候。他方之品は不及申御國産に候とも、其浦々において、右極之口錢出入共不相洩樣取立可申儀に候事。

一、潤掛り・濱借り等之諸荷物は、致陸揚候共右浦口錢取立申間鋪候事。

右諸浦賣物、去々子年出津・入津之分相しらべ、僉議之上品々口錢高相極候。此内には其品物により大小或は上中下之差別も可有之候へ共、夫々平均を以相極申儀に候條、前條之通取立可申候。將又諸浦において往々出入之品々、是等に限り申と而者無之筈。今般都而浦方出入之賣物は浦口錢取立申候條、前段條數之內に無之品に而も、指掛り之時は先右口錢極之釣合を以、其品に應じ不相洩樣取立可申候。尙更押立申品々は、以後之取立高相極、追而可申渡候條嚴密に相心得可申事。

右ヶ條之通、當八月朔日より口錢可取立者也。

本年四月十三日の條參照

七月廿五日。重ねて武具製造のことに就いて議す。

〔諸事留牒〕

七月廿五日

一、左之通主附織江殿以御用部屋被相伺候處、廿六日伺之通被仰出候事。

御武具出來等御入用銀、文化七年御減少被仰付候付、新出來物等も右御入用高に應じ相減じ申候へども、當時町會所に預銀之分、餘計銀之高も出來仕候付、右之內を以少々增銀相渡候樣にも可有御座哉。且又前段出來物之儀に付、先々より相達置、其內には不被仰付而相成間敷品も御座候付、是等も寄々出來之儀遂僉議可申与奉存候旨等、先達而相伺候所、伺之通与被仰出候付、猶更向々江も相尋、重而左之通僉議仕候。

一、御鐵炮小具足御不足に付、出來被仰付候樣、別紙御鐵炮奉行紙面、御異風裁許奧書を以去年指出置、其後口達を以も每度申聞候に付、別紙之銀高に而は何程出來仕候哉と相尋申候處、重而付札之通申聞、大抵御鐵炮六百挺餘り之小道具出來可仕候。右之通被仰付候得ば、先大組御持方・御先手組之御渡高程にも可有御座哉之旨申聞候。乍然御鐵炮与違、小道具は出來方指急ぎ申渡候而も可相成、御入用も餘程相懸り候儀、旁先今年より一貫目計相渡候圖

に而、右品々割合せ出來高之儀遂詮議候處、重而紙面之通申聞候。此通承届、出來之儀可申渡哉と奉存候。

一、御細工奉行ゟ、文化八年より御武具出來方相減候得ども、其内には無據被仰付可然与心付之品も有之候はゞ、遂僉議相達候樣申渡候處、旗指脊割具足等五品書出、先此品々被仰付候樣申聞、委細紙面之通御座候。依之先今年より一貫目計相渡候圖に而、右品々出來高割合せ書出候樣申渡候處、重而紙面之通申聞候。此通承届、出來之儀可申渡哉と僉議仕候。

一、御射手裁許ゟも右同樣之趣を以申渡候處、文化八年御入用銀相減候付、御弓矢等皆出來可仕分、下地物に而指置候品々等、別紙之通書出。此儘に仕置候而は漆放れ等も出來、御不益之品も御座候間、少々宛成とも出來被仰付候樣仕度旨申聞候付、猶更御道具員數等之儀遂僉議候處、重而付札に記指出申候。紙面之趣に而は、品により御不益之筋も御座候間、少々充出來被仰付候はゞ可然、先今年より七・八百目計相渡候圖りに而、右品々割合せ出來高之儀相尋申候處、是又別紙之通申聞候。此通承届可申渡哉と僉議仕候。

但、右之外樟腦代之儀は、猶更遂僉議相計可申渡与奉存候。

右之通當分御入用銀相渡、出來之儀可申渡与奉存候。尤纔之銀高に候得ば、行届申儀に而は無御座候得共、御當節之儀先右之通遂僉議申候。猶更奉伺候、以上。

七月二十五日　　　　前田織江

七月廿八日。用水及び河川に於ける漁撈者の心得を令す。

〔御觸拔書〕

石川・河北兩郡田地用水川緣に、近年殺生人多入込、立毛並疇大豆等踏荒、百姓共及迷惑、畢竟御收納方に茂彈候之條、以來每歲七月より九月中迄、用水緣ゐ殺生人入込申間敷候。尤御留場之內堀々・俣川・不湖之分は、投網打候儀御停止、本川筋之分茂、每歲九月朔日より翌年三月晦日迄、投網等之殺生御停止之儀、前々申渡候通急度相心得申事。

一、才川・淺野川等所々川除御普請所竹籠等之上、殺生人曁水游人等往來、且殺生方に而荒し候事。

一、末々心得違之者、竹籠之石を拔取、或竹を折取、又は川除に障候場所之石掘取候躰之事。

一、殺生方に而瀨違或堰留、又は網殺生之內に而茂、鮎ねり網抔に付川を堰留、瀨筋を替、又川中に石を積、小屋掛躰を設け候儀は、川形に相障、出水之節入川有之候得ば田地相障候事。

一、殺生人之內淵々ゐ毒を流込、鱒・鮎等毒に當り死し候魚を取候者有之躰に候。右毒流候一淵に而も無之、流末之魚は死不申共必毒に當り申儀。川魚御用上り方に可相成儀茂難計、

左候得ば不容易儀に候。且又淺野川は川役銭茂不相立故、殺生人申合、川幅に簗を懸、兩岸之川除竹籠等以之外踏荒し候躰之事。

右躰之殺生人等多、次第に殺生方猥に相成躰に相聞え候。川々瀬違抔、元川を勝手に堰留候族、堀ずき抔与名付、小き引網樣之殺生茂堅不致樣、將又川除踏荒し不申樣、先達而申渡置候處、違失之人々も有之躰に候條、以來急度相心得可申候。此後若右樣之者於有之は、夫々相咎、名前等承屆候樣役人共江申渡候。末々之者竹籠折取等不埒之族於有之は、見請次第召捕候之樣申渡候事。

右之通被得其意、組・支配之人々、且又家來等江茂可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、共支配江茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

七月廿八日　長　甲斐守

右之趣可被得其意候、以上。

七月晦日。能登に於ける皮革は同國の皮多をして支配せしめんことを議す。

是月は大盡なり

〔御用番方幷御城方御勝手方御用之覺〕

七月晦日

一、河北郡淺野村領皮多肝煎茂右衛門等、御領國中猪・鹿皮等他國出等之縮方之儀仕法仕、御献上御鐙袋革指上、右之外にも御用之皮御座候時は定直段を以可差上旨仕法之趣、文化十一年御達申、御聞届之上夫々縮方等申付置候處、近年皮排底に相成、御用難相勤旨無據願之趣申聞候。然處能州奥郡・口兩御郡皮多共よりは、右先達而淺野村皮多へ縮方被仰付候振合を以、能州一圓縮方被仰付候はゞ、是迄淺野村等皮多共同様、御献上御鐙皮之分指上、右之外御用之分も定直段を以指上度旨等願之趣、澤田九內等添紙面を以申聞候付、淺野村之者御領國中縮之儀差解、能州之皮多共へ能州一圓皮之縮方申渡、御用之儀可申渡と奉存旨、前田才記紙面。廿九日日付。

八月十一日。前田齊廣家老等の任務を諭し、且つ病によりて數年の後隱退の意あることを告ぐ。

〔御親翰拜寫幷御請寫〕

文政元戊寅年八月十一日小森源左衛門を以被渡下御親翰寫

此方不肖至極に而政事行屆不申、士風昔にかへり質素を宗とし、および農工商は安堵之思ひをなし候儀、中々不行屆事に而、公邊は申におよばず、對先代候而も申譯も無之次第、兼々致心勞候處、近年病身に相成り、別而物事不行屆致心勞候。其上兼々近眼に候處、別而近年

不宜、物事見洩も出來、馬上ことく致難儀候。此兩條にて、公儀非常之御用も迚も不得相勤、且公儀御禮之節は、時に寄老中手にて會釋之差引有之事、萬一左樣之節見洩し不調法致出來候而者恐入奉り候事。其上是迄無難に相勤候處、今更不調法致出來候も迷惑至極殘念なる儀、且對先祖候而も申譯無之儀、甚以致心勞、去年江戶在府中も不相勝、長途之旅行も右之次第之上、痼症も加り候哉不一通致難儀候族に付、今般致歸國候。且は致決心候而奉恐入事には候得ども、四・五年引籠致保養、其上者存寄も有之に付、右樣之身分に相成候ゆゑ、身分を恐れ、歸國之上も政事方何事も年寄共僉議にまかせ、保養第一に罷在候。右之次第を段々年寄共へも申出候處、誠に無據次第を能致會得、公儀向難相勤譯合者能々致會得、此方心願通り畏候得共、政事之儀は何分存寄申出有之樣致度旨、達而申聞候得共、病身之此方公儀之御奉公難相勤相成候上者、欠道之身分と申すものに候得ば、とても政事之儀も可行屆樣も無之事に候故、右を以段々申解き、是迄之通りに致置候樣にと再三及懸合候處、幾重にも存寄通り申出候樣達而申越候に付、左候はゞ不及是非候間、保養中申出候事も氣兼に候得ども、兼々存付罷在候事どもを可申出と申し、是迄年寄共心得違候と存候事共段々申出、殊に當時安房守・助右衞門取捌等に、此方存寄に如何と存候事共有之候得共、彼は彼之流儀、此方は此方之存寄与申すものに候得ば、何れが是何れが非とも不被申儀。何れ彼是と人々存寄

欠道之本のまゝ

違候事入交り候而者事整不申儀、一筋に押し通候方可然と段々申出候處、何分にも此方存寄り通り申出候樣に与達而申聞候に付、猶更右之趣段々申入、安房守・助右衞門手前之儀、此方不審之趣段々申入、如此には候得共、いづれ彼は彼此方は此方之存寄に候間、各申合宜方に而押通し候方可宜旨段々申出候處、何分にも年寄共不行屆、別而安房守・助右衞門心得不調法至極之旨に而、何分此方存寄り通申出候樣に与之儀に付、右之次第故猶又入念に人別に請も取立、不得止時宜に相成候故、甚不好事ながら夫々年寄共手前昨日之通申付候事に候。右に付而者、是迄之樣成年寄共勝手次第之儀等、萬端相改め申事に候。右に付共方共重き加判も申付置候處、是迄は其詮も無之形ちに相見え候。以後は年寄共江少も無斟酌、政事用向之議論、並相互身分之儀に而も申合及議論可申候。是迄之處年寄共より之仕懸け茂不宜とは乍申、共方共にも手弱き事に候。以後少も無泥、たとへ年寄共僉議決定之事に而も、如何存る品者、强き可及議論候。心中に含み、前後之模樣を考、閉口有之事之無之樣相心得、加判申付置候共詮急度相立候樣申合可有工夫候。則此書面返却之上者、直に年寄共江爲見置候事に候間、共旨可被存候、以上。

八月十一日

家　老　中

〔御親翰拜寫并御請寫〕

坂井要人を以上る。

被成下御親翰、謹而奉拜戴候。以段々被仰出、御政事向思召通不被爲行屆趣等、且去年江戸御在府中より御氣色御勝不被爲遊、御難儀被遊候付、今般御歸國之上御決心被遊、四・五年も御引籠被遊御保養、其上は思召も被爲在候。此度年寄中江被仰出候趣等、段々御長篇之御親翰具に奉拜戴候。御趣意通私共初而奉承知、先以恐入申儀奉當惑候。私共に重職も被仰付置候處、不才之至に奉迷惑候。右御請之儀は、御親翰得と拜見、私共熟談之上、一兩日中に重而御請奉申上度奉存候。

一、御親翰者拜寫仕置候に付、御請・御指札・御封印共只今奉返上之候、以上。

八月十一日

前田權佐

前田內記

前田織江

横山藏人

津田玄蕃

八月十二日。村井又兵衞改めて產物方御用を命ぜらる。

〔御親翰留〕

一、寅八月十二日又兵衞江御親翰を以産物方御用被仰付。又兵衞江今般改而産物方申付候條、承知に申遣候。且又右に付井上井之助儀、産物方用与申儀可申付候間、役所之儀算用場中に相建候か、又は別に相建候か、何れヶ様之處僉議可被申越候、以上。

八月十二日

前田伊勢守殿

右御親翰之趣御請差上候事。

八月十三日。家老等前田齊廣の諭告に對する請書を呈す。

〔御親翰拜寫幷御請寫〕

八月十三日九時過不破治部右衞門を以上る。

一昨日被成下御親翰拜寫仕置、猶更得与奉拜戴候。御政事向思召通不相届、士風昔にかへり質素を宗とし、曁農工商は安堵之思ひをなし候儀、中々思召通り不被爲屆御事に而、公邊者申に不被爲及、被對御先代江而も被仰譯も不被爲在御次第、兼々御心勞被遊候處、近年御病身被爲成、別而御物事不被爲行屆御心勞被遊候。其上兼々御近眼に候處、別而近年不御宜、

御物事御見洩しも御出來、其上御馬上悉く御難儀被遊候。此御兩條に而公儀非常之御用も迚も御勤不被爲遊、且公儀御禮之節者時に寄、御老中方手に而御會釋之御差引有之事、萬一御見洩し御不調法御出來候而者御恐入。其上是迄御無難に御勤被遊之處、今更御不調法御出來も御迷惑至極御殘念成儀。且又被對御先祖樣候而も被仰譯無御座儀、甚以御心勞被遊、去年江戸御在府中も御勝れ不被遊、長途之御旅行も右之御次第、其上御癇症も御加り被遊候哉、不御一通御難儀被遊候族に付、今般御歸國之上御決心被遊候而、御恐入被遊候御事に候へども、四・五年御引籠御保養被遊、其上は思召も被爲在候付、御歸國之上も、御政事方何事も年寄中僉議に御任、御保養御專一に被爲在候。右之御次第を段々年寄中へも被仰出候處、誠に無御據御次第會得仕、公邊向御勤難被遊譯合者能々會得仕、御前思召通畏候へども、御政事之儀者何分被仰出御座候樣仕度旨達而申上候得共、御病身之御儀、公儀之御用御勤難被爲成に付而は、御政事之儀も可被爲行屆樣も無御座御事に候故、右を以段々被仰解、是迄之通仕置候樣にと再三被仰出候處、幾重にも思召通被仰出候樣達而申上候に付、左候はゞ不被及御是非候間、御保養中被仰出候御事御氣兼に候得共、兼々思召付被爲在候事共可被仰出与、是迄年寄共心得違かと思召候事ども段々被仰出、殊に安房守・助右衛門取捌等に付、思召に如何と御心付之事ども御座候得ども、彼れは彼れ之流儀、御前には御前之思召与申もの

に候へ者、彼是と人々存寄違候事入交り候而者事整不申、一筋に押通し候方可然被思召候旨等被仰出、安房守等手前御不審之趣段々被仰渡候處、何分にも年寄共不行届、別而安房守・助右衛門心得不調法至極に而、何分思召通被仰出候様にと申上候に付、右之御次第故、猶又御入念人別御請も御取立、不被得止事御時宜に相成候故、甚御好不被遊候事ながら、夫々年寄共手前今般之通被仰付事に候。右に付而者、是迄之様成年寄共勝手次第之儀等、萬端御改之御事に候。

右段々被仰出之趣に而、一昨日當座之御請も奉申上候通、今度之御内意通、初而私共奉承知奉恐入候御儀に御座候。先以御政事向思召通に不被爲行届御儀、重職も被仰付置候處、私共之不才故与可申上様茂無御座。且去年御在府中御氣色不被爲勝、今以御表御出も無御座御事故甚奉案事、表方に而者折々相伺御機嫌候へ共、關屋中務等へ御用之序に者、如何之御容躰と折々は相尋候處、御同様之旨申聞候。右に付而者御公用向御勤難被遊与、年寄中ニ段々御趣意等被仰出候而奉畏候上之儀に候得者、今更私式可申上様は無御座候得共、いまだ御壯年之御儀、何卒御保養御順氣等之御工夫被爲在、御快方に被爲移候様仕度儀奉祈候儀に御座候。將又是迄年寄共心得違かと被思召候儀、段々被仰出之儀、且安房守・助右衛門等手前御不審之儀も段々被仰渡候處、何分にも年寄中不行届、別而安房守・助右衛

門不調法至極に而、何分思召通被仰出之樣にと申上候に付、尙更御入念之上人別御請も御取立、不被爲得止事御時宜に相成候故、甚御好不被遊御事ながら、年寄中手前夫々今般之通被仰付候御儀、乍恐御尤至極奉存候。右に付而者是迄之樣成年寄共勝手次第之儀等、萬端御改被遊度旨奉承知、年寄中勝手次第之儀は如何躰之程も不奉存候へども、向後右等之所に私共得与相心得罷在、何とか會得仕兼申族見聞仕候者、時宜に寄奉達御内聽可申与奉存候。

右に付私共重き加判も被仰付置之處、是迄は共詮も無之形に被思召候。以後は年寄共へ少も無斟酌、御政事御用向之議論、相互身分之儀に而も申合及議論可申候。是迄之處年寄共より之仕懸茂不宜と乍申、私共にも手弱き事に思召候。以後少も無泥、たとひ年寄共詮議決定之儀に而も、如何と存る品者强き可及議論候。心中に含み、前後之模樣を相考、閉口不仕樣相心得、加判被仰付置候共詮急度相立候樣申合工夫可仕候。御親翰返上之上者、直々年寄中江拜見被仰付置候事に候間、共旨可奉存旨。

私共者重き加判茂被仰付置候處、共詮も無御座樣に被思召候儀奉迷惑候。勿論示談之品、私共存寄御座候得者、了簡之程申達候得ども、畢竟不才故、申入方も不行屆儀者、無是非恐入申儀に御座候。以後者少も無斟酌、御政事之議論、相互に身分之儀に而も可申論候。

ヶ様に段々被仰出候上者、尤以來急度存寄も可申入候得ども、彼手前に不會得等之趣有之、又私どもには其申聞辨兼候樣之儀も御座候へば、兼而被仰出も御座候通、私共勤向は御意味も御座候事に候間、右樣之節抔は、品に寄以來者折々奉達御內聽度奉存候間、其節は何卒御下知被爲在候樣仕度、兼而奉願置候。且年寄中より私共へ示談方、是迄之振に而者熟しかね申族も御座候。實に仕懸有之候樣仕度事に候間、何とか被仰出御座候者難有儀可奉存候。是等之趣は、其譯書解がたく御座候間、御序之節御直に申上度奉存候得ども、未御保養中御表へ御出も無御座候事、其上示談模樣迄之儀に御座候得者、追而中務等之內を以申上候而も苦間敷哉と示談仕置候。且又當時前田修理儀在江戶に御座候間、御親翰拜寫指遣、拜見之上追而御請指上候樣可申遣与奉存候。

右一昨日被成下御親翰御請上之申候、以上。

八月十三日

前田權佐
前田內記
前田織江
横山藏人
津田內藏助

右江戸表修理方へ拜寫指遣、別に同人より御請指上候事。

八月十五日。家老等政務に關し年寄の決定以前に意見を求められたきことを要求す。

〔御親翰拜寫幷御請寫〕

一、八月十五日奥之間において月番伊勢守ゟ各申達候者、是迄御示談之品御治定之所に而存寄も無之哉と御申聞に付、先は一通りに存寄申述來候。以後は何とぞ御僉議御治定無之以前に御示談有之樣致度、左候へば及ばずながら存寄御座候儀は無腹藏可申述候間、左樣御承知置被成候樣仕度。且先例等も引合見申度節抔は、留帳之內も披見仕度、品により入組候下書等は暫借用、別席に而同役遂示談候上、存寄御達申度旨相達候處、委曲致承知、外年寄中ゟも可及演述候旨被申聞候事。

一、八月十九日藏人人見吉左衛門を以、先達而被成下御親翰御請申上候節、御序に御直々申上度候へども、いまだ御保養中に被爲在候間、闕屋中務等內を以申上候而も苦かる間敷哉之旨申上置候へども、只今に而者御表へも御出被遊候に付、右之趣御序に可申上哉と相伺候處、二十二日以同人、中務等內を以申上候樣被仰出。

一、九月七日人見吉左衛門を以申上候趣左之通。

藏人は横山氏

先日私共へ御親翰を以被仰出候趣に付、當十五日奥之間へ相越、御用之序に月番伊勢守へ、以後私共ゟ示談方之儀、同役共何も申達候處、甚聞請も宜、此躰に候へば隨分存寄も無泥可申述儀に御座候。猶更外年寄中へも可申談旨同人申聞候。右之通に候へば、只今之所に而は先何之被仰出も無之而も宜奉存候。是迄之振は、都而年寄中手前に而決定之趣相調爲見候而、何茂披見仕候へば、存寄も無之哉と申聞候へども、尤僉議決定之上に而存寄も難申出樣之仕懸に付、多分存寄無之旨申述。中には存寄申出候而も請も不宜、存寄通りも立不申候族に付、何となく先扣申樣之形に相成候。何を申候而も、年寄中は年寄中之權に御座候。私共勤向者、御威光に而無之而者、年月も相立、若前之風に相戾り可申と、此處無覺束、左樣相成候而者被仰出之詮茂相見え不申、私共も被仰出候儀も御座候處、其儀も相通り不申而者、寔以恐入迷惑成儀に御座候。何れにも此處は御威光之趣無御座而者、又物事相泥申處ゟ至り可申事決定に御座候故、此所深く恐居申候付而者、奥之間示談方立戾候樣之儀も御座候節は、折々相願度筋も可有御座与奉存候。內記儀も尤同存に御座候。未風氣不宜、今四・五日も見合に御座候。餘り延引に相成候に付、今日にも申上候樣申越候に付申上候段申上置。

一、右之序に蔦之間奥之間狹く、執筆ども罷在候而、奥書院御緣側指支候節は、別席ヶ所も無之に付、示談之上不苦儀に候者、御居間書院御緣側において示談も仕候。此儀も御序に申

當十五日は八月

上候樣申談置候事。

八月廿五日。前田齊廣、寺島藏人を轉職せしめたる理由を述べ、老臣の政務に偏執の念なかるべきを諭す。

〔御親翰帳之内書拔〕

一、左之御親翰九之丞を以被渡下。

昨日寺嶋藏人儀重而轉役之儀申出候處、先達而御手前より藏人儀改作方勝手方江取り被申度旨被申越候儀、此方存寄に叶ひ不申哉与被存候躰に而、昨夕傳左衞門迄被申聞候趣承り候。曾而此方存寄に叶ひ不申に而は無之候。御手前より被申越候儀も尤と存候故、改作方等申付候事に候得ば、是則此方之申付候と申者に候。然處今般申付候横目は、何分一才力器量有之もの申付度存候へ共、一向心付も無之內、藏人改作方勝手方に罷在候而は、何か此節事整甚六ケ敷譯も有之儀承候に付、此度藏人改作方等申付候時宜に無之事与、此方之仕損を相改候心得に而、最前申出候通横目に申付候事に候。曾て御手前被申越候儀存寄に叶不申事は無之候間、此處安氣之ため申遣候。且又是迄各之取捌之樣子相考候處、少し仕損有之候而も、一度被申渡候事は押付候樣に相成、あやまちを速に相改申渡直し有之儀は、先は無之樣に存候、別而近頃安房守・助右衞門などは、一度申渡候事は何分押付、少し無理と乍心附も押付

御手前は老臣某

藏人は改作方を命ぜられたる後一日を隔てゝ横目に轉ぜしめられたるなり

候様に相成候様に被存候。右之通に而は、何分下には不會得に有之筈之事に候。然ば其節速に仕損之取捌に候得ば、其内には一・二ヶ條も仕損も可有之儀は必然之事に候。誠に多端之趣下江も申諭し、改直し候儀は随分可有之事に候。今般などは別而是迄之癖等一時に夫々相改候事故、別而多端之事に候へば仕損もまゝ可有之、其節速に改直し候へば別而下々可致心服事与存候。乍序此段も申遣候事に候。此方いつも〳〵申候通り不肖之事に候へば、其後とても取捌にまゝ仕損じ可有之、其時々速に改直し候存寄に候間、各にも是迄之様に無之、仕損之儀は其趣下江被申聞、速に改直し有之候様に与存候、以上。

八月廿五日

九月四日。藩の收納米及び給人米の納方に關して告ぐ。

〔留帳拔書〕

三州御收納米幷給人米納方之儀に付、今般改而別紙之通改作奉行江申渡候に付、寫相越之候條、被得其意、各支配藏宿共江も右紙面之趣急度相心得候様、夫々急速可被申渡候。且又藏宿共之內には心得違之者も有之、納米吟味方に事寄せ、私之奸事を含百姓を爲迷惑、或は百姓申談不正之取組等も有之躰に相聞候。此上右様之取扱等相正不申候而は、別段百姓難儀におよび候様之儀も有之、却而申渡候趣意致相違候場江可至儀に候條、ヶ様之所は猶又各手

前において得与勘辨有之、藏宿共心得方不正之族無之様、何分嚴重可被申渡候、以上。

九月四日　　　　　　御算用場

中村逸角殿

三州御收納米幷給人米共納方之儀は、古來御定も有之、其後追々心得方等申渡置候通に候處、近年納方等猥に相成、米性等吟味方不行屆、先以御得失にも拘り候儀に付致中絶居候。御米改役人茂相立、且米性幷干立方等吟味方精誠を盡し、無手拔可致御藏納旨等、委曲近年厚く申渡置候通に候。然處納方行直り候向者誠に稀成儀に而、行直兼候躰に相聞候。近年申渡候趣意、各より御代官相勤候御郡御扶持人・十村等は不及申、末々百姓心得方之儀は、小作之者に至迄も入念被申渡候に而可有之候所、右申渡候最初より五・六年におよび候得共、今以不行直儀は、一統心得方等閑之故に候。既に滑川御藏・町藏米共、米性等吟味方不行屆、惡名も申立候程之場に至り居候得共、近年納方等吟味茂順々行屆候躰に而、昨年之納方に至り候而は多分行直り候哉、當春以來は舟手も相進候場に至り候。右は魚津下裁許之內より年々令出役遂吟味候故、昨年に至り多分納方行直り候に而可有之候得共、滑川九郎右衛門等納方手代多十郎与申者、近年申渡候主意令會得、格別骨折納方遂吟味候に付、同所御藏外納手代共も被引立自ら相働、惣様納方多分行直り候場江も移候趣等、委曲御米改之人々よりも

申聞候に付、多十郎𪜈之申渡方別紙を以申談候。此迄は一統自然に不宜風儀仕癖に茂相染り、心得違之族も可有之哉に付、厚く心得方等申渡、追々行直り候場に移候樣取扱來候得共、前段之族は格別申渡候主意一統不致會得、等閑に相心得候故に候條、此末不行直向々御代官藏宿は勿論、其向御扶持人裁許々々十村曁納下々百姓下々に至迄、綿密遂穿鑿、品に寄無用捨急度可申付候條、此段兼而被申渡。近年格別申渡置候趣共不令違失、嚴重相心得候樣、今度改而夫々可被申渡。別而當年之儀は彼是無申分作柄之儀に候條、米性幷干立方等聊麁抹之族無之樣、是又譯而可被申渡候。尤當年御米改方之儀、曁此末年々御米改方心得、別段詮議之趣御米改之人々𪜈茂重々申渡置候。

一、河川御藏米等、漸々去年納方に至り、米性等多分直り候与相聞え候に付、諸向𪜈之聞旁、前段之通り文中に顯申渡候得共、彼向御代官等令油斷候而は、忽以前之悪習𪜈立戻り、近年骨折候詮も無之儀に候條、格別申渡置候趣不令怠慢、嚴重相心得、猶又納方精誠遂吟味候樣夫々可被申渡候。

右之趣被得其意、三州御扶持人・十村を初御代官相勤候人々、幷百姓・小作之者に至迄、一統不相洩候之樣夫々可被申渡候。此節苅入・干立方等最中之儀候條、急速可被申渡候、以上。

寅九月　　　　　　　　　　　　　御算用場

改作御奉行中

御收納米納方之儀に付、御算用場より別紙相渡り候付、寫相渡候條可得其意候。元來御收納方之儀は、寛文四年被仰渡候趣、御藏所々々懸札有之候得共、猶又米撰方等之儀に付毎度申渡置候趣も有之、別而文化元年仕法も相改、其後同十一年にも嚴重申渡置候處、手代共之內心得違之趣も有之、今以こぼし米抔致候躰粗相聞え候。畢竟主人々々等閑に相心得、手代まかせに致候故、不正之儀も致出來、不屆至極に候。今年は作躰も宜候故、こぼし米厭不申樣之形も有之候而者沙汰之限りに候條、嚴重相心得可申候。此上自然心得違之者有之、手代ども等不正之族於相聞え候者、人別遂穿鑿無用捨咎可申付候。且又百姓ども米拵之儀、毎々申渡置候通、彌無麁略相心得候樣可申渡候。出來立宜候而茂、干無甲斐候得者、畢竟ふけ痛米に相成、御不益之場にも至り候間、百姓共何分正路相心得、米仕立方精誠念を入、相納候樣可申渡。尤右之通百姓共にも米仕立方等致入念、其年之正米を相納候を、代官共之內心得違之者も有之何与歟申立、納方遲々におよび、或はこぼし米抔致申者も候はゞ、百姓共より直に訴出候樣可申渡候。

右之趣一統可得其意候。尤百姓中に相當り候儀は、頭振等迄も不相洩樣可申渡候、以上。

寅九月　　　　改作奉行

九月十二日。鰤十分一銀の徵收を忽にすべからざることを告ぐ。

〔御郡典〕

鰤十分一銀之儀は、古來より之定格役立に候處、中古以來右上納方次第に減候。右は年々取揚高之數量も有之儀に候之處、十分一銀取立高相減候儀は、浦々役人共獵師等ゟ馴合、右躰にも相聞え候。既に文化十年魚方役人御領國中相廻り候節も、彼是混雜之趣有之躰、粗相聞え候。畢竟浦方役人共取締不埒之儀に候條、右樣之不埒成者共之儀は被指替、嚴重遂吟味候樣可被申渡候。右十分一銀之儀に付、享保十二年一統相觸候趣も有之處、近年別而等閑に相成候儀、御締方如何に候條、當年よりは格別に遂詮議、於浦々に取揚候鰤之員數嚴密に相調理、有躰に書出、洩魚無之樣浦方役人ゟ可被申渡候。尤此段散役裁許ゟも改而申渡候。且亦近年之振も有之、今年格別十分一銀相增候儀を厭ひ、白地に難書出抔之儀も可有之哉。此儀は別而不埒之儀に候。勿論是迄之儀は令用捨候條、年々獵之多少は格別、魚數高有躰に書出之樣可被申渡候。品に寄、浦々廻村之役人申付候儀も可有之候條、夫々嚴重被申渡、若獵師等之內奸曲之族も有之候はゞ、早速遂吟味、委曲可被申聞候。則享和十二年相觸候寫一通相達之候。

一、他國出三分半口錢之儀も右に准じ、縮方嚴重相心得候樣、是又澗改役人等ゟ嚴重可被申渡候。

右之趣被得其意、浦々津々嚴重申渡、請書取立可被指出候、以上。

九月十二日　　御算用場

中村逸角殿

九月十三日。能登幕府領預地の者變死の際に於ける取扱に就いて告ぐ。

〔留帳拔書〕

御預地者幷土方勘兵衞殿領分之者、各支配所に而變死之節取捌は、時宜に寄申事故、前方には難極置旨寛政六年申達置候得共、御預地者取扱方近年御私領同樣に被仰渡候故、御檢使方茂御私領同樣に相當り可申哉与當四月被申越候故、御預地方茂遂詮議候處指支不申、併御預地村役人共手馴不申事故、御私領方ゟ立合に出候節不案內之儀も可有之候間、及示談候はゞ致助言遣候樣兼而申渡置候樣致度旨、前田才記より申越候條、其旨相心得候樣各支配十村共ゟ可被申渡置候、以上。

寅九月十三日　　藤田求馬

中村逸角殿

右御預地方取扱之儀、御私領同様に相成候に付、檢使取捌之儀公事場江及懸合候處、如斯返書申來候條、得其意、本文之通不相洩樣可相心得候、以上。

中村逸角

能州四郡十村中

九月廿八日。前田齊廣の女諗姬本鄉邸に生まる。

〔齊廣樣御傳略等之内書拔〕

九月廿八日江戸御廣式於御本宅御姬樣御誕生なり。御生母は御書院番加藤傳左衛門娘於登佐之方なり。

九月廿九日。前田齊廣政務の改善に意を致すべきことを令す。

〔御觸拔書〕

別紙一結二通一統申渡候付、爲御承知進之候、以上。

九月廿九日

村井又兵衛

今般被仰出之趣、別紙一通相渡之候條、同役中傳達、組・支配之面々江可被申渡候。組等之內裁許有之人々は、其支配江茂相達候樣可被申聞候事。

寅九月

今般御國民成立之儀、格別被仰付度思召候而、彼是御役人等御指替被仰付候得共、御上御難澁に付、全思召通り不被爲行届候。其上五・七年之中には、追々莫大之無御據御入用有之儀は、何れ茂奉察候通に候。依之人々精誠志を勵、前々より成來候品、幷是迄被仰出にも無之儀共に、下として御格之樣に相心得、改がたき事之樣に存罷在候儀も多有之躰に候。是等之趣に而、おのづから多端に押移り候儀も有之候。か樣之所相改、無用之御費無之樣可相心得、諸向振合或は御格式に拘り候品は、雖改儀茂可有之候。乍去惣躰一役々々において、萬端心懸世話仕候はゞ、隨分易簡に可相成事に候。品により御用番ゟ茂相達、相改候樣可相心得候。猶又心付候儀共は、新役之者に而茂古役之人々ゟ對し相扣不申、存付無泥可申上候。

右等之趣拙者共より可申達旨被仰出候。

寅九月

十月四日。前田齊廣の女鈐姫七夜の祝儀を行ふ。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

十月四日、御七夜御祝有之。御名法梁院樣より被進候なり。十一月朔日御血忌明御祝有之なり。

十月四日。雞卵の產出を奬勵すべきことを告ぐ。

〔御郡典〕

鷄卵之儀、他國より多入込致賣買候躰に相聞候。右は於三州いかにも澤山に出來候樣有之度事に候條、都而町・在共鷄多飼置候はゞ、自ら交易も手廣く相成、一段之事に候間、裁許之者共より末々迄申諭爲飼置可申事。

産物方役所

右御紙面私共ゟ御渡被成候に付、寫相廻候間、御郡々御寫、夫々御申談可被成候、以上。

十月四日

笠嶋新村 八三郞

淵上村 源五郞

諸郡御詰番中樣

十月四日。質商賣に役銀を徵し株立とすべきことを告ぐ。

〔御郡典〕

當時質商賣いたし候者共、以來一軒三十目宛御役取立、株商賣被申付候。依而人數高相調理、帳面に仕立、當月廿日限無遲滯可指出候、以上。

寅十月四日

中村逸角

能州四郡十村中

十月六日。諸士養子を爲したる後實子を得たる場合の跡目相續者選定に關して令す。

〔御觸抜書〕

別紙寫兩通之趣定番頭江申渡候に付爲御承知進之候、以上。

十月六日　　前田土佐守

定番頭江

諸士養子に罷成候後、養父に男子出生、右二・三男等養父存命中他江養子に遣、又者病死之者有之、末子相殘り居候而、養父致病死跡目被仰付候迄、右養父之末子を嫡子に相立不申人々も有之候得共、以來者末子たり共正統之筋目に候間、養父之實子を嫡子に相願可申候。乍去養父之末子幼少に而、養子之せがれ相應に成長之者有之分は、願之品茂有之候者、遂僉議可申候。將又是迄前段之通、養父之實子を嫡子に不相立置分も、他江養子に遣候儀勝手次第に可仕候。

右之通可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江茂相達候樣可被申聞候事。

右之通一統可被申談候事。

十月

天保元年十月十四日の條參照

十月七日。三條西實勳の內使金澤に來りて年寄の邸を訪ふ。

〔橫山氏日記〕

十月七日　天氣吉

一、昨日表方より演述之通、今日三條樣御使者御用番宅ゟ相勤、各ゟ御口上有之。御迯り物御目錄持參之旨に而、土佐守より各宅ゟ、右御口上手扣寫・御目錄被指越候付、大浦屋幸右衞門方ゟ夫々使者遣、品物受取事。

御家老中ゟ

彌御堅固可爲御勤達珍重被存候。此度御賴之儀に付、內々使者被差出候間、時候御見廻被申入候。隨而目錄之通、御染筆一包宛被相贈候事。

三條宰相中將殿使者

河村筑前守

十月八日。町人・百姓が人馬繼立に堂上方の名を假る等のことを禁ず。

〔御郡典〕

近年町人或は百姓共之內、堂上方等先觸等を以、道中人馬繼立、帶刀に而致旅行、紛敷族之

者折々有之候。右樣之儀無之樣、兼而從公儀被仰渡有之候處、猥成躰に候。且又御家中之人々暨寺庵等より、町人等繪符・傳馬帳抔借受、致旅行候儀も不相成事に候。以來心得違無之樣可被申渡候。其上にも心得違之者於有之には、嚴重被申付候條、此段遠所町奉行・御郡奉行等江可被申談候事。

十月

右之通御用番年寄中江申聞候に付、寫相廻候條、被得其意、夫々可被申渡候、以上。

十月八日　　　　御算用場

中村逸角殿

十月十二日。諸士出仕の際列居を遲緩すべからざることを告ぐ。

〔横山氏日記〕

十月十二日　天氣好

一、左之通今日於表方人持筆頭本多勘解由江申渡有之、各江も爲承知指越事。

出仕之面々列居遲々無之樣、且御用向示談等不致諸席江入込居不申筈に、前々より申渡置候處、相ゆるみ、急に列居無之躰に被聞召候。依而向後者御横目より申談次第、早速列居に相廻可申、其上にも遲々之人々有之候はゞ、御横目・御大小將横目之内より、名指を以御用番

江相違候様可申渡旨被仰出候條、被得其意、以來列居遲々無之様可被相心得候事。

十月十二日

十月十二日。役人を推薦する者の心得を諭す。

〔御親翰帳之内書拔〕

十月十二日

一、左之御馬廻頭等江可被仰渡趣覺書下ヶ、今日掃部を以上之候處、同十四日同人を以被返下、窺之通被仰出、至當与申處不相當者も有之与引直し可然旨被仰出候段、同人演述之事。

御馬廻頭等江可被仰渡趣

組・支配之侍人品行狀等之儀、常々相考可致差引儀は勿論之事に而、諸役相應之人柄を考置、役人撰之節、此者此任に應じ候と存込候者をも書出に而可有之候得共、中には至當不仕者も有之哉に相聞え候。平士役之內にも、多く之人支配等いたし候役儀も有之、心得方不宜、存違等有之候而は、假初之取捌之上において下々及迷惑候儀等有之事に候。役人撰方は第一頭・支配人之手前に有之事に候。猶更無油斷心懸可申候。

十月十六日。浦口錢のうち改定したる條々を告ぐ。

〔留帳拔書〕

本年七月十四日の條參照

浦口錢取立方之儀、先達而御定之通り候處、其内重而御詮議之上、今般御極之品々左之通り被仰渡候。

一、出津口錢之儀、入津口錢之五ヶ一可取立御定に御座候處、今般御詮議之上、米之外は諸品共、都而出津口錢之分御用捨之事。

一、米之儀新川米等地廻り迄之分に候得者、出津に而浦口錢一石に付二分五厘宛取立、指紙を付爲積出、於入津は無口錢之事。

一、能州奥郡江者前々他國米入込候得者、此分浦口錢入津に而一石に付二分五厘宛取立可申。若又其所より他所江積出候儀有之候はゞ、出津口錢一石に付五厘宛取立可申事。

但、奥郡に而も地廻米之分は、尤入津口錢無之候事。

一、魚方口錢之儀は、六八瞖三分半口錢も相立申儀に付、御詮議中浦口錢は御猶豫之事。

一、八百屋物之分は、是迄於浦方問屋より口錢取立候儀故、今般浦口錢御用捨之事。

右之通重而御極之趣、産物方御役所より被仰渡に御座候。尤此餘之品には、最前御定帳之通入津口錢取立可申儀。其内先達而浦々より御窺達有之候品々は、夫々御指圖御座候通、不相洩樣取立可申旨被仰渡に御座候間、此段早速御申渡可被成候、以上。

寅十月十六日　　內嶋村　孫作等五人

三州浦方御裁許御扶持人十村中樣

十月十九日。祠堂銀を借用する諸士にその返辨を確實にすべきを告ぐ。

〔御觸拔書〕

御寄附祠堂銀之儀者、不輕御かねに而、借用之人々返納方心得方も可有之筈。既返納方等之儀、先達而一統被仰渡置候處、兎角返納方遲滯に相成候人々も御座候に付、時々名書を以御達申候儀茂不容易故、其頭等ゟ再往及催促等、渡方等甚指支申候。以來證文期日無遲滯、元利共致返納候樣、猶更一統被仰渡候樣仕度。其上に茂及遲滯候人々茂有之候はゞ、無是非名書を以御達可申候。此等之趣も一統被仰渡置候樣仕度奉存候、以上。

十月十九日

青山將監
永原左京
山崎庄兵衛

前田土佐守樣

寶圓寺を初御寄附等祠堂銀借用之人々、文化元年御仕法相改、月三朱利立相成、每歳七月元利取立、十二月者利足迄取立來申候。然所去子の歳より當寅年迄十五箇年返納相濟、當時殘元高少銀に相成、其内には利足高誠に少分に而座封付け兼、品に寄鳥目を以指出候人々茂有

之、取立方混雜仕候間、來卯年より皆濟未之年迄五箇年之間、元利毎歲七月一度取立候得者可然儀与詮議仕候間、此段夫々被仰渡御座候樣仕度奉存候。御聞屆之上者、三朱利足引當て米、當年一作藏解狀は請取に向次第爲相渡可申候。勿論月一分利立祠堂銀利足者、是迄之通毎歲七月・十二月兩度取立申候、以上。

十月十九日

青山將監

永原左京

山崎庄兵衞

前田土佐守樣

十月廿四日。鹿島郡所口附近の商荷を邑知潟により漕運を禁ずる前令を守らしむ。

〔留帳拔書〕

所口幷支配之村々より商荷、大町村或金丸村𛀁指出、潟下しいたし、羽咋村塵濱村𛀁着け、夫より人馬を以付送り候躰に付、以來御藏米幷町藏米・木竹炭薪之分は、其裁許々々より縮方申付可爲致潟下旨、文化六年委曲申渡置候通に候。然處近く諸品勝手に潟下し致し、其內には夜中積出候品も有之躰粗承及候。右等之趣沙汰之限りに候。依而嚴重可遂穿鑿候得共、

先令猶豫候條、以來文化六年申渡置候外潟下し致候者於有之は、其品取揚嚴重咎可申付候條、此段一統江可申渡候。尤舟主之所茂同樣咎可申付候條、潟緣村々江不相洩樣嚴重申渡、受書取立可差出候、以上。

寅十月廿四日

中村逸角

有賀甚六郎

能州四郡十村中

十月廿九日。藩内一般に調達銀に應募すべきことを勸め、尋いでその仕法を定む。

〔坂井留記〕

御勝手向從來御難澁之所、近年別而御手繰六ヶ敷、必至与御指支被爲至、被成方も無之に付、諸士江者御借知被仰付、町・在江者御借銀をも不被仰付而者、御運方御仕法無之に付、御勝手方も御改被成候程之儀に候。御家中難澁之躰も御心痛被思召候得共、思召通不被爲行屆候。依之第一御家中勝手成立、曁町・在御救方、其外非常御手當之ため、今般御調達銀仕法被仰付候。是迄御家中より指上置候御借知之分、右仕法銀之内江振向候而、畢竟銘々足りにも相成候樣被仰付、且又町・在之儀者、近年每度御借銀被仰付可爲難儀、御心勞被思召候。依而

共御沙汰は御指止之趣に被仰付、今般身元相應之者江御仕法御調達被仰付候間、利分は有之間敷候得ども、畢竟は一統勝手向取續之手當にも候間、無麁抹一統可奉心得候。仕法之儀者、御算用場より可申談候。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十月廿九日　　前田土佐守

武田數太夫殿組三役

別紙を以申談候通、甚御逼迫に而、何歟御取救方も被成兼程之御儀、無據御仕法被仰付候御趣意に候條、精誠を盡銀子可指上候。是迄指上置候御借知より增銀指上候儀、幷小祿之人々は近年御借知金被返下置候得者、右之通押而上方申談候譯に而は無之候得共、志を以指上度、或者後年爲手當相願申者は、尤可爲勝手次第候。町・在之儀追々御借り銀等も被返下、何歟御救方可有之ため之御仕法候條、身元相應之者は何分出精致させ、御趣意全相整候樣可申談候。

一、足輕共之儀も、志を以銀子指上度旨願出候儀、可爲勝手次第候。御救方等之儀、追而思

召被爲在候條、左樣可相心得旨可被申渡候。
一、此度被仰渡候御仕法者、御制禁之賴母子にも似寄候得共、格別之御趣意を以被仰渡候事に候條、此度何茂能會得有之、右御仕法に付前段御制禁之品相弛不申樣、是又夫々可被申談候事。
右之通可被得其意候事。

十　月

〔舊記拔書〕
今般御仕法御調達被仰渡、一統承知之通に候。依之別册仕法帳相達之候條、各支配身元厚薄に寄、精誠志を勵、銀子爲指上可被申候。
一、別册仕法帳之通、一人一貫目宛之圖を以、一手合一册分六十人に相定、鬮取を以每歲七月・十二月兩度に割合之通追々被返下。依而身元宜敷者は、一貫目之圖を以幾人分爲指上可申候。且又一貫目に不滿分者、五百目或は三百目又は二百目与歟精誠指上候分、一貫目結込、都合一手六十人に爲組合、帳面幾册に而も、精誠を盡し、銀高相增候樣被遂詮議可被指出候。
一、所柄に寄、精誠出銀仕候上、幾重にも一手六十人に滿不申分は、人數揃限り帳面に仕立

可被指出候。於當場外手合与組合可申候。
一、當暮銀高相揃候上、人々ゟ被返下候銀子鬮取之儀者、人數相揃候上、追而日限等之儀可申談候。
一、右御調達銀、當年迄之儀に而も無之、以來年每に被仰付、追々銀高も相增候に付、共內御運方も相立、且致出銀候者共ゟ被返下候銀子も繰々に相成候譯故、御算用方宜敷儀に候條、是等之處一統會得有之、致出情候樣厚く可被申諭候。
右之通被得其意、取仕切詮議有之、來月五日迄帳面等可被指出候。猶又難被致會得趣も有之候はゞ、當場御仕法御調達方役所ゟ可被承合候、以上。

十一月　　御算用場

帳面上書　御仕法御調達銀

六十人組を以一人一貫目宛指出。

一、六十貫目　第一番寄銀高
內、二貫五百六十目　鬮取を以兩人ゟ被返下候分
內、二貫目　兩人より指出候分
六十目　六ケ月先利百目に付五朱

五　百　目　　　　　被下銀

殘人數五十八人、一人九百五十目宛指上。

一、五十五貫百目　　　　第二番寄銀高

內、四貫三百九十六匁　　鬮取當る兩人ゟ被返下候分

內、三貫九百目　　　　當會迄指上候分

九十六匁　　　　　　前會之指上高に六ヶ月之利百目に付八朱

四　百　目　　　　　被下銀

殘人數五十六人、一人九百目宛指上。

一、五十貫四百目　　　　第三番寄銀高

內、六貫二百八十三匁二分　鬮當り兩人ゟ被返下候分

內、五貫七百目　　　　當會迄指上候分

二百八十三匁二分　　　前會迄指上候高に六ヶ月八朱利幷前會利合高

三　百　目　　　　　被下銀

殘人數五十四人、一人八百五十目宛指上。

一、四十五貫九百目　　　第四番寄銀高

內、八貫百五十六匁八分　　鬮當り兩人ゟ被返下候分
內、七貫四百目　　當會迄指上候分
五百五十六匁八分　　利前に同
二　百　目　　被下銀
殘人數五十二人、一人八百目宛指上。
一、四十一貫六百目　　第五番寄銀高
內、十貫十二匁　　鬮當り兩人ゟ被返下候分
內、九貫目　　當會迄指上候分
九百十二匁　　利前に同
百　目　　被下銀
殘人數五十八人、一人七百五十目宛指上。
一、三十七貫五百目　　第六番寄銀高
內、十一貫八百四十四匁　　鬮當り兩人ゟ被返下候分
內、十貫五百目　　當會迄指上候分
一貫三百四十四匁　　利前に同

但、十貫目以上被下銀無之。

殘人數四十八人、一人七百目宛指上。

一、三十三貫六百目　　第七番寄銀高

內、十三貫七百四十八匁　　鬮當り兩人江被返下候分

內、十一貫九百目　　當會迄指上候分

一貫八百四十八匁　　利前に同

殘人數四十六人、一人六百五十目宛指上。

一、二十九貫九百目　　第八番寄銀高

內、十五貫六百十九匁二分　　鬮當り兩人江被返下候分

內、十三貫二百目　　當會迄指上候分

二貫四百十九匁二分　　利前に同

殘人數四十四人、一人六百目宛

一、二十六貫四百目　　第九番寄銀高

內、十七貫四百五十二匁八分　　鬮當り兩人江被返下候分

內、十四貫四百目　　當會迄指上候分

三貫五十二匁八分　　　利前に同

殘人數四十二人、一人五百五十目宛指上。

一、二十三貫百目　　　第十番寄銀高

內、十九貫二百四十四匁　　　鬮當り二人ゟ被返下分

內、十五貫五百目　　　當會迄指上候分

三貫七百四十四匁　　　利前に同

一、三百九十九貫七百六十目　　　第十一番四十人ゟ被返下高

但、一人ゟ九貫九百九十四匁當り

內、七貫七百五十目　　　指上候銀高

二貫二百四十目　　　右利足

以上

右之仕法を以、年中兩度御調達被仰付候。尤鬮取當り候人々ゟは右割合之通被返候事。

但、閏月有之年者利足相增候事。

〔御郡典〕

十月。領內空閑の地に樹木を植栽せしむべきことを令す。

今般格別之御趣意を以、産物之儀御詮議被仰付候に付、第一三州共山野指障無之不毛之地に、夫々植物申付、下々爲成立可申、其品に寄、畢竟生育之上は、御國産にも可相成儀。依之此度植物等三州共主附申渡、專遂詮議事に候間、何も申談、厚く心懸可致出情候。勢子方取扱によつて、下々情不情可有之儀。新たに申付候儀は、下々煩數儀に相心得、指泥申儀も可有之。一端之事は泥候而も、成立之上は下々之潤に相成候條、是等之處申諭、主附之者共は不及申に、一統格別に存込、何分御趣意に相叶候樣、精誠相勵可申候。先年被仰出候趣も有之候條、一統不相洩樣夫々申談可相勤者也。

寅十月　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　産物方役所

諸　　郡

十月。諸士の町會所より銀子を借用する者は公用以外濫に外出すべからざるを命ず。

〔御觸拔書〕

定番頭ゟ

御家中小身に而難澁之人々、勝手爲成立、於町會所仕送り被仰付置候處、近年者大身之人々茂追々仕送り相願、次第人多に相成、御逼迫之內より御取替銀等を以取計來候處、左樣之恐

察も無之、中に者勝手相應之者も、町會所仕送りに相成候へば、町方借銀等都而年賦に相成候而、手廻宜敷事故願出候族も有之躰。近年次第不調達に相成候者、町人共右等之泥も有之哉に相聞え、旁以不可然儀に付、以來仕送可被指止哉に候得共、左候而者、小身に而實に難澁之人々者、必至と指支之所ゟ茂至り可申哉に付、先此儘に被成置候。就中頭分抔、其身勝手仕送り願置候譯に而者、其組勝手之指引方茂不行届筈に候。旣に御定に、無故茂進退不成族者可爲曲事旨被仰出置候得者、可爲頭分者は別而可有其覺悟事に候。依而自今頭分曁五百石以上之人々、仕送り願者不承届候。元來御逼迫中御難題を相願申儀に候得者、急度心得茂可有之處、尋常に參會等仕候儀者、一圓有之間敷儀に候間、都而仕送り中之人々は、御用之外外出遠慮可仕候。若何ケ歟無據子細有之、外出仕節者、其段御横目ゟ相達外出可仕候。尤指懸り候節は跡屆に可仕候。且又勝手引取度段申出候者、是亦容易に不承屆候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配ゟ茂相達候様可被申聞候事。

右之通一統可被申談候事。

寅十月

十一月八日。旦那寺の件に關し頭寺より在家の者を召喚するも直に之に

應ずべからざることを告ぐ。

〔御郡典〕

近年諸寺庵之內、別而一向宗後住相續方曁宗意方等之儀に付、旦那之者共頭寺等ゟ罷越、其內には頭寺等より在家之者共御用之由申立呼出候節、直罷越候者も有之躰承及候條、以來旦那寺故障等之儀に付、頭寺等呼立候節、御用抔与相心得罷越候儀一圓不相成候。尤直ぐ不罷越而は不相辨儀有之候はゞ、其時々裁許ゟ被及屆、指圖を受、村方諸事御用不指支樣可爲心得旨、夫々不相洩樣可申渡置候。右等之趣申渡候之上、心得違之者於有之には、嚴重咎可申付候條、此段も兼而可申渡置候、以上。

寅十一月八日　　有賀甚六郎

中村逸角

能州四郡十村中

十一月十二日。石川郡の十村倉谷金山の沿革を上申す。

〔倉谷銀山之事〕

以紙面得御意候。然者今日金谷樣より被仰聞候者、倉谷銀山之濫觴委細書出候樣被仰聞候故、右金山之儀者先年金出候に者相違も無之、今以金かす等有之候得共、濫觴之儀別にはきと申

金谷は改作奉行金谷佐太夫

儀無之様覺候旨申上候。□□町は何村領に有之、何□金山譯何等に而も先年之様子是非相しらべ申上候様被仰聞候間、早々可被仰越候、以上。

十一月八日　　　福留村　六郎右衛門　判

白山村　又八郎様

〔倉谷銀山之事〕

石川郡倉谷村銀山出方濫觴之様子相知申候者、委細申上候様被仰渡候に付、舊錄等承り傳候品、有增左に申上候。

一、倉谷村銀山初り慶長十三年に而、其後元和九年之頃はせ立て隆盛に出申旨に御座候。

一、字木焼原与申、銀多有之山之由に御座候得共、水貫之手段無御座旨に而、此山寛文八年之頃相止申由。尤其頃より休山に相成申旨承り傳に御座候。

一、銀山町居所者、銀山初之頃者、倉谷村より奥に本重倉与申所に家建仕候由に御座候處、右場所倉谷川縁に而、出水之時分水付に相成候故、其後いつの頃歟慥成儀者舊錄等茂無御座相知不申候得共、右水付に而重而二又村領村端ゟ家建替仕、安永五年迄右銀山町掘子家一軒相殘り居候得共、同年より退轉仕。尤右地子銀として毎年銀一枚半上納仕候得共、是も同年より上り不申候。

一、銀山盛之時分者、銀山町家數二百軒計御座候由承傳に御座候。

右御尋に付相知申趣申上候。尤年久敷相立申事故、委敷儀者相知不申候得共、承り傳候趣等有增申上候、以上。

寅十一月　　　　白山村　又八郎　判

御改作御奉行所

文政元年十一月十二日上る。

十一月十八日。百姓等の擅に旦那寺より往來札を得て領外に旅行することを禁ず。

〔御郡典〕

付札、御算用場奉行ゟ

三州御郡方百姓幷頭振、他國ゟ出候儀不相成儀に候處、諸國神社爲拜禮無斷他國ゟ罷越、相煩或は致病死候もの毎度有之。右は旦那寺ゟ相願、諸國往來一札を乞受、村方を竊に立出、所々徘徊いたし候に付、以來は旦那寺より相對を以往來一札不指出樣仕度旨等、所々御郡奉行より以紙面申聞候。尤是迄百姓等容易に他國ゟ罷出候儀不相成儀に候處、近年他國ゟ罷出候者多有之、畢竟御難題に相成候族、不屆之至に候。依之以來右往來一札、相對を以願出候

者有之候共、一圓不指出樣諸寺庵江急度申渡候樣、寺社奉行江申渡候。併御郡奉行手前におゐて、詮議之上不指支者之儀は、御郡方役人より願人之旦那寺江相達、往來狀申請候筈之旨にも申渡候條、此段所々御郡奉行江被申談、遠所町奉行江も爲心得可被申聞置候事。

十一月

右之通御用番年寄中被申聞候條、被得其意、各支配所不相洩樣可被申渡候、以上。

十一月十八日　　　御算用場

有賀甚六郎殿

中村逸角殿

十一月廿七日。藩製造の鹽硝を賣却して武具の充實を圖るべきことを建議す。

〔諸事留牒〕

十一月二十七日　雨

一、左之通今日相伺。昨相伺候處御用部屋御前に付、昨日之日付に而今日人見吉左衞門を以上る。

越中五ヶ山より、生鹽硝千三百六十八貫目充每歲御買上に相成、於土淸水筒藥に調合仕出來、

殘り年々之分過分に有之、次第に水氣出、御不益之儀に付、先例も御座候間、一萬貫目計も寄々御拂に被仰付、代銀取立、貸付にいたし、右利足銀等を以、土淸水搗藏東臼等定御修覆御入用等之請取、藥合奉行手前に而引請修覆出來申付度、是迄御作事所ゟ申遣候而は、彼是御修覆及遲々候付、調合方も自然と手後れに相成、御不益之趣に付、旁右之通に相成候はゞ可然旨等、文化十一年御異風裁許堀萬兵衞等僉議之趣得御內聽候上、右御拂方之儀私共ゟ申聞候に付、鹽硝之儀は御縮方有之品に候得共、先年御拂被仰付候儀も度々有之候間、指支申間敷与遂示談、其段達御聽にも、是迄寄々御拂申付、當時三千六百貫目計御拂に相成申候。右代銀町會所ゟ預置、七朱之利を以貸附にいたし、右利足を以、前段搗藏御修覆等品々御入用に相渡、筒藥增調合之儀申渡、近年大躰千貫目內外出來仕候。是又右御拂代銀當時五十貫目計も御座候處、此儘に仕置候も如何に奉存候。夫に付御武具之儀は餘之品とも違ひ、何分御手厚に被仰付置度儀与兼而存付罷在申候間、右御拂代銀を以、來年より達御聽候迄、御武具惣員數之儀は私共得与承知不仕候故、當時何々御不足などゝ申儀は難申上奉存候間、彌被仰付儀に御座候はゞ、其品可被仰出哉、又は御細工奉行等ゟ申聞遂僉議可申上哉。此儀は御様子次第に可奉心得候。前段搗藏御修覆等御入用手當も有之儀に御座候間、右銀子不殘拂切候儀は相成兼可申候得共、先三十貫目計御武具出來之方ゟ振向候而も、敢而指支も無御座

達御聽候迄の次脫文あるべし

候。尤右鹽硝御拂殘いまだ餘程御座候間、猶又僉議之上追々御拂に仕候得ば、又々銀高も相增申候儀、旁右之趣御僉議被仰付間敷哉。

十一月廿八日。人持組横山藏人芝居及び茶屋町創設に反對の意見を上申す。

本文は横山藏人の意見なり

〔諸事留牒〕

十一月二十八日

一、遊里被仰付候樣町奉行より相達、所は大衆免淨光寺と御中間地之間小家買潰、一ヶ所は後泉町六斗林之間廣き地面有之、且又芝居ヶ所川上新町小名御亭町と云處に可相建旨僉議有之。右は被仰付可然儀とは一向不被存候。先以御國は三都と違ひ、他邦之者入込不申儀、畢竟遊民多く相成候而、農工商之其業を怠り、困窮之處江至り可申儀与被存候。風俗惡敷相成候儀は、分而不申共必然之儀候。猶了簡書別に調置候事。

十一月。諸郡御扶持人等明春より大に漆苗を增植せんことを建議し、產物方の容るゝ所となる。

〔留帳拔書〕

今般産物方、植物之儀別而御勢子被仰渡御座候に付、詮議仕候處、漆之儀御國方出來寡く、他方より入漆・入蠟多御座候間、何卒山里共相勸め、爲植殖申度儀に奉存候。勿論近年格別之被仰渡も有之候而、川除土居等に爲御植立、且又所々に而漆苗仕立方も被仰付置候所、右川除土居等御植立之分、當年之永旱に而多枯痛申候間、此所々來春に至り右仕立苗夫々爲植移、其外一統村々畠畔・屋敷續・山際等、土味も有之作物にも不指障所に植立候樣申渡、百姓持山惣山等可然土地遂詮議夫々爲植付、培養方勢子仕度奉存候。近年御仕立置之漆苗も夥多におよび居申候。來春は所々ゟ引移候樣被仰付、尚更此末仕立方之儀も重々被仰渡候者、追々數十萬之木數及盛木可申儀に奉存候。左候得者漸々他國入相減、御國方通用自由に相成、村々助益之筋にも相成申儀に御座候間、其節に至り爲冥加運上銀爲指上度奉存候。依而來春植付木數等之儀、一組切相調理、委細書上申度儀に奉存候。右産物方に付植物之儀先達而被仰渡置候故、重々詮議仕候所、惣而植物之儀は土地土風茂御座候儀に而、御郡々且鄉々により相應之品々も有之儀に付、尚更追々遂詮議可申候得共、先私共詮議仕候趣書記、相達之申上候、以上。

寅十一月　　　　諸郡御扶持人連名

産物方御役所

御付札
本文之趣一段之儀に候間、夫々詮議之通成限り爲植付、無油斷致勢子、植付候員數一組切相しらべ、當秋可書出者也。

十二月二日。鳳至郡輪島に漆座を立つることを許す。

〔留帳拔書〕

輪島町塗師屋共手分買入候漆、年々相場相立不申、時々直段違有之、搔子共爲に不相成。仍而輪島町に而漆座相立、所々より指出候漆右座江相集、中買ども呼寄致商候はゞ、直段順道に相成、搔子共迷惑之筋無之、小前之塗師屋共勝手宜、依而漆代銀百目に付二匁宛賣人より取立度旨、願書に奥書を以被指出候に付、遂詮議、産物方年寄中江も相達、承屆候條、此段被申渡、仕法帳取立可被指出候、以上。

十二月二日　　産物方役所

有賀甚六郎殿
中村逸角殿

十二月六日。金澤町奉行に芝居座開設を許可し得べきことを令す。

〔官私隨筆〕

十二月六日

別紙寫之通定番頭へ申渡候付、爲御承知進之候條、御組へも御觸可被成候、以上。

十二月六日　　　　前田伊勢守

奥村助右衛門様

定番頭江

末々輕き者共稼も薄難澁之躰に付、芝居狂言・物眞似様之類一・二ヶ所、町奉行切承屆可然旨及指圖候。是迄右躰之場所へ、御家中之人々も心得違之者は罷越候哉に相聞え候。右様之場所へは、小身之人々家內たりとも罷越申間敷候。尤帶刀之者は、又家中・家來末々迄も堅罷越間敷候。自然心得違之者有之候はゞ、召捕候様改方等へ申渡候。

右之通被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配へも相達候様可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

十二月

十二月八日　前田齊廣老臣等に明年九月參觀すべき命を得たることを告ぐ。

〔横山氏日記〕

十二月八日　晴れ、晝過より風雨

一、御參勤之御時節御伺之御奉書、追而拜見可被仰付旨被仰出置候處、今日於表方席、年寄中・御家老中一列御奉書拜見被仰付、相濟若年寄中同所〻被呼立、拜見被仰付、畢而年寄中・御家老中一列、於同所以人見吉左衛門、御奉書拜見之御禮申上候事。

御札令披見候。公方様・右大將様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候。將又參勤時分之儀、以使者被相伺之候。及上聞候處、參勤時節被遊御用捨候。來年九月中可致參府由被仰出候條、可被存其趣候、恐々謹言。

十一月二十二日

大久保加賀守忠眞
水野出羽守忠成
阿部備中守正精
青山下野守忠裕
土井大炊頭利厚

松平加賀守殿

十二月十三日。前田齊廣の女從姫金澤に生まる。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕
十二月十二日子の刻於二の御丸御廣式御姫樣御誕生、御生母は直姫樣御產婦之方なり。
〔橫山氏日記〕
十二月十三日　雨降、朝之內晴、折々雪氣
一、左之通以鬮屋中務表方ゟ被仰出、若年寄中表方席ゟ被呼立、演述有之候事。
但、御家老中者表方に而承知に付、別に演述無之候事。
勝千代樣御產婦之方、今曉平產御女子樣御誕生被成候。思召有之、先達而被仰聞者無之候。
此段可相達旨御意之事。
十二月十三日

十二月十九日。前田齊廣の女從姬の七夜の祝儀を行ふ。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕
十二月十九日、御七夜之御祝有之。御名從姬樣と中村木工より奉指上なり。
〔橫山氏日記〕
十二月十九日　曇、晝過より折々雨降
一、左之通以岩田傳左衞門表方ゟ被仰出候事。

十二日夜なり

但、若年寄中表方江被呼立、月番演述有之候事。
今般御出生之御女子樣、御名從ヨリ姬樣与唱候樣被仰出候。此段何茂江可被申聞旨御意に候事。

十二月

十二月廿一日。前田齊廣病むを以て明年年頭の禮を受けざることを告ぐ。

〔宮私隨筆〕

中將樣一兩年御疝邪等御難儀被爲在候內、別而去年御在府中より、今以爾々不被爲在候。右に付年頭御禮之儀は、種々御作法等も有之、前々よりの御規式通りを、思召を以御省略被爲遊候御事も不御本意被思召候。且又日に寄俄に御不出來之儀も被爲在候御事、指懸り御禮不被爲請候而は、何も迷惑可仕儀、旁乍御心外御禮不被爲請段被仰出候。尤當時何れも格別に奉案事候御容子には不被爲在候間、此段可申聞旨被仰出候。
右之趣被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配へも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。
右之趣可被得其意候、以上。

十二月二十一日　　前田伊勢守

十二月廿八日。收納米の皆濟前に籾を質入にするを禁ず。

〔筒井觸留〕

近年御郡方百姓共、籾等質入置、皆濟方色々申立候躰。其外無指之米質に入置候儀有之。口郡者先達而金澤改方より縮方申渡置候儀も有之、不埒之趣沙汰之限りに候。以來無指之米者不及申、皆濟不仕內、籾等質に入置候もの於有之者、其品取揚、質屋共急度迷惑可申付候條、此段百姓共曁質屋共ヘ嚴重に可申渡置候、以上。

寅十二月廿八日　　　　中　村　逸　角

能州四郡十村中

十二月廿九日。前田齊廣、諸士の家族をして芝居見物せしむべからざる等のことを告ぐ。

〔御親翰帳之內書拔〕

町方輕き者共稼薄く、賑ひ無之に付及難儀候一件に付、今般町奉行切に而承屆、一・二ヶ所に而芝居狂言・物眞似類之儀爲致候儀、各承屆可被申旨被申越、此間其通申出候。右に付相考候處、是迄も左樣之儀有之節は、家中小身之人々など心得違之人々は見物にも罷越候躰。且

家內も行歩などに事寄せ、見物に遣候人々も有之躰に承及候。右に付、今般は別而各も聞濟に而相催候事故、家中之人々も心得違之面々は、家內等見物に遣候而も不苦事之樣に存候輩も可有哉も難計候條、家中之人々其家來迄も一刀を帶し候者は、堅く罷越候儀無用。且家中之人々は、婦人女子に至る迄堅く差遣候儀不相成趣に、急度縮方相立候樣各工夫可有之候。且又支配之頭々江譯而得与可被申談候。尤組頭江は格別に直にも以書面可爲申聞哉とも存候得共、左候而は其上に萬一心得違之人々有之候而は、其頭も其分に難成筋故、何分此趣意組頭初江各より重々可被申入候。當國之儀外々に勝れ、前々より芝居躰之儀且遊處躰之儀堅く令制禁候儀は、國風餘國よりは女色婬風に流れ易き國風人氣故之事与存候。既町之婦人衣服惰弱奢侈に相成り、夫よりして家中之家內江も押移り、折々嚴重之申出有之候而も、又いつしか如元相成候儀前々不少。其上嚴重之糺も有之候へば、表を素にして裏に榮耀をかまへ、家居等も外を麁相にして內に奢侈を加へ候やから、誠に悪風俗之至に存候。畢竟衣服等美を好み候は、根元惰弱婬風より事起り候事に而、耻辱至極之事に候。町家はいか樣に候共、家中之家內は質素を宗として麁服を用ひ、甲斐々々敷古風成儀を好可申儀に候處、其々町家之時風を見習ふ儀嘆敷事に候。惣體右之風俗に成り易き人氣に候得ば、別而芝居躰之儀は下々之者幷婦人女子之好み候もの故、別而婬風に流れ候憂有之候。風俗之大害にも相成申事に

候間、此趣意堅く會得有之樣可被申渡候。右之次第故、芝居躰之儀は此方には至而嫌ひ申事に候得共、下々之賑ひ之爲無是非申付候事に候間、此段得与可被申談候。且又今般芝居之所業致候人々、平日町家等江相交り候而は、別而下々右之所業致候者多く相成り、町家之風俗も惡敷相成候間、今般改而右樣之所業致候者は、何者之子共にても、不殘非人頭之支配に申付候はゞ平人之交りも薄く、おのづから右樣之儀好み候若き人々も、おのづから嫌ひ申樣に相成り、婬風に流れ候害薄く可有之哉にも存候。何れ平人之交りは決而不可然儀之樣に存候。是等之處取極可被申越候。

此度下々賑ひ之爲、芝居等町奉行切聞屆候付、段々思召之程具に被仰出、私共にも奉至極候。仍而は組頭等江も心得方可申諭之旨、段々御書わけ被爲在、第一私共を初、此度之御樣子に寄彌以忽にも可押移哉と之御底意にも被爲在旨、段々御懇之趣は難有仕合に奉存候。猶右等之趣を以組頭等にも心得方申談私共にも兼而相心得可申段奉畏候。此等之趣宜被達御聽可被下候事。

寅十二月廿九日

十二月。代官が貸米等藏納の際目拂米を受くるを禁ず。

〔留帳拔書〕

代官共之内心得違之者有之、御貸米等御算用場印之切手を以御藏納に相立候節、目拂米取受不申而は難致御藏納旨申立、若其儀不致會得百姓共ゟは、皆濟狀等及遲々に、斗下百姓共甚致迷惑候之躰承及候。納方之儀に付毎度申渡之趣も有之處、沙汰之限り候條、以來右樣不埒之族無之樣、急度可相心得候。此上心得違之者有之候はゞ、百姓共より直に斷出候樣、裁許々々より可申渡候、以上。

寅十二月　　　　改作奉行

諸郡十村諸代官中

十二月。領内產の牛馬取締方及び馬市の仕法を定む。

〔留帳拔書〕

御領國出生牛馬御縮方幷馬市仕法帳

今般御領國出生之牛馬牝牡共賣買之儀、以前之通馬市被仰付候條、左之通御仕法被仰渡候上は、村方曁博勞共惣躰之潤にも相成候間、馬持共等何分相勵、駒數茂追々多致出生候樣心懸可申事。

一、例年駒撰爲御用御馬役等相廻り候儀、是迄与は三十日計繰上げ致發足候間、御用切早く相成、馬持共勝手可宜候。右御用馬之分は前々之通に候。其餘先百疋計茂市馬に相撰、市日

前日迄に牽出候様可申渡筈之事。

但、牝馬并牛之分市掛りに出候儀は無之候。併右市場相建候上、金澤近在或は他國等より茂牛馬買入多相集、賣買之手廻し宜く相成候はゞ、持主等より牽出、右市において致商賣度候者、市日十日之外別段一日相建可申事。

一、右御馬役等撰方に相廻候節御用掛り、并市馬之分銘々毛付・持主名前等相記候札相渡置可申候間、金澤ゟ牽出候節右札可致持參候事。

但、他國出之分、右札に御馬奉行等致裏印、口留爲致通行候儀末に記之。

一、右御馬役等來年より四月朔日限金澤致發足候條、能美郡三歳御用懸之分、四月十五日限りに金澤ゟ牽着可申、能・越二歳之分は閏四月十日限りに牽着可申事。

但、二歳之分來々年よりは五月十日限りに牽着可申候。是迄牽着候日限共時々申渡候得共、今般御仕法相改候條、以來は譯而不申渡候間、右之通相心得可申候。市馬牽出候儀は、駒主直に牽出候共、又は市場罷出候博勞共之内ゟ相賴牽出候とも、駒主勝手次第に候事。

一、毎歳御用切之駒并牝馬・牛之分、初め一度賣買之節、馬料高下に不拘、一疋に付左之通口錢賣人より取立候。右之外幾度賣買有之候共、口錢に不及候事。

二歳駒牡二匁　三歳駒牡三匁　牛牝牡共五分
　　　牝一匁五分　　　　牝二匁

但、右口錢裁許之十村方ゟ取立置、毎歳七月中御郡所ゟ可指出候事。

一、何方ゟ茂賣放不申內致斃馬候者、其段可及屆候事。

一、馬により痛所等有之賣買相成がたく、譬ば價も不申請遣り遣候分茂可有之候。右共駒之樣子可及斷候。村役人・博労遂見分、何方ゟ成共手放爲致可申候。尤口錢取立申間敷事。

一、他國ゟ出候牛馬共爲御縮、以來上口・下口において改所相建候に付、通行札無之分指留候條、御郡奉行共向寄宜ヶ所に而、通行札取受可申候。札料左之通取立候事。

馬之分駒里調・牡に不拘一疋に付二匁、牛之分一疋に付一匁。

但、通行札之儀は、牡馬之分は毛付・歲付幷持主名前迄相記、裁許之十村迄書付指出候はゞ、十村加奥書、御郡所御厩之內へ相達候はゞ、通行不指支樣裏書印章を以可相渡候。尤其節札料相添可指出候。右通行札は口留所に而引揚候筈之事。

一、御領國出生之駒牡馬之分屆方、是迄之通猶更不相洩候樣嚴重に相心得可申候。且牝馬幷牛之儀は毎歳十二月員數相しらべ、毛附に不及、持主手前迄帳面に相認め、翌正月十六日迄之內、其村々裁許之十村より御郡奉行迄可相達候事。

一、市場之儀は於闘助馬場、五月中旬三歳駒五ヶ日、二歳駒五ヶ日相建候。里調之分は右十

但、市日限幷市場作法之儀は、別帳に有之通可相心得候事。

一、爲市馬御用爲牽出候駒之内、賣殘候分江は、金澤近村之外、逗留中五日分飼料代可相渡、日之内入交賣買之事。

三歳駒一日三匁宛、二歳駒二匁宛之事。

但、能・越二歳駒之分は牽出候道程日間も相懸り候事故、爲牽料一疋に付七匁宛可相渡候。

且右駒他國牽出度候はゞ、最前御駒役等より渡置候札を以、口留通行之儀相願候得者、御馬奉行・御郡奉行之内致裏印可相渡候。札料指出に不及事。

付札に、本文牽料之儀茂尤市において賣殘候分迄之事。

一、三歳駒幷里調等は、兩馬場博勞共厩へ相對を以牽宿可申、二歳駒者春日町石動屋彌兵衛・三つ村八左衛門等手前江、是又相對を以牽宿可申事。

但し、逗留中駒主江失墜相懸り不申樣可取計、尤大勢之儀に候條、申分等無之樣互に嚴重に相心得、都而穩便に可罷在候。若口論ヶ間敷儀於出來者、急度咎可申付事。

一、道程一里以下近村、三歳駒市場に相撰候分金澤止宿に不及、其村々より日々市場へ牽出可申事。

一、市場に相撰不申馬に而も、市場相望、自分に牽出候儀は勝手次第に候。尤其段博勞改所

へ及斷可申事。

但、自分として牽出候分、尤飼料代不渡候事。

一、御帳懸り駒之儀は、御用相濟候上年寄衆等ゑ牽候儀、只今之通相心得、其內殘り候駒は御家中商是又前之通相心得、其餘は於市場商勝手次第之事。

一、御領國出生之駒之內、宜馬に而茂、唯今迄何となく直段相定居候樣に而、馬主勵有之間敷、今般馬市被仰付候得ば、他國博勞も罷越候儀、市中は買人より直乞いたし候事に相極可申間、馬により格別高價にも賣捌可致出來、左候得ば第一馬主ためにも相成可申事。

一、於市場賣買有之分、馬料に應じ三十分一口錢取立候條、兩馬場博勞共之內致取次候者ゑ、賣人より指出可申候。致取次候博勞より、毛附・年付等右口錢に相添御廐ゑ上納之事。

但、本文口錢之外、賣人より博勞等ゑ、世話料等は一圓指出申間敷候。若博勞等心得違に而非分申懸候者於有之は、急度可申付候條、駒賣上人より其裁許ゑ及斷事。

一、來年より駒市相立候儀、其向寄より他國博勞ゑ致演述置可申事。

一、御領國中牛馬商賣、唯今迄押立候博勞無之に付、賣買混雜之躰にも相聞え候之條、以來者博勞株に可申付候。左候はゞ爲冥加受取候口錢之內を以、一人前より年分銀二十目宛可致上納候。尤是迄申請候口錢之分、增方申募候儀等堅不相成候。仍而向後口錢取扱之儀、銀高

別紙に申渡候通り可相心得候事。

但、村方之内人柄宜敷博勞相撰、一郡兩・三人宛指目博勞申付、村々出生之駒等員數しらべ方、其外御縮方之儀申渡し、御給銀も可被下候事。

一、右博勞世話を以、自然商方整がたき品も致出來候節は、駒主相對賣に而相辨、博勞江可遣口錢之分、裁許之十村迄可指出候。其時宜に寄可及指圖。且村方隱商有之於相顯は、急度咎申付候條、右之族無之樣嚴重可申渡候事。

一、牛馬運上銀、往々上り高有之候得ば、駒方爲仕入其村々御貸渡も可有之事。

以上

文政元年十二月

御馬奉行

三州御郡奉行

十二月。天明四年以降金澤に於いて芝居・輕業・曲馬等の興行を許可したることを調査上申せしむ。

手合は町奉行の役所なるべし

〔川上芝居一件〕

天明四年之頃より此節迄、御城下に而芝居・輕業・曲馬等之賑ひ之品々相催候儀、御用番等へ相達聞屆候上申付、或は其手合切に而承屆申付候儀等可有之候間、其年月等委曲被書記可被

指出候事。

文政元年十二月

十二月。金澤以外の地に於いて芝居等の興行を禁ずべきことを告ぐ。

〔御郡典〕

付札、御算用場奉行ゟ

世上不景氣に而、小前之者共稼方も薄く、難澁之躰に付、芝居樣之類町奉行切承届可然段及指圖に候。御城下は格別之御様子も有之に付、右之通及指圖候。遠所町等において右躰似寄候儀相催候儀は、堅不相成儀に候條、被得其意、此段遠所町奉行・御郡奉行ゟ可被申渡候事。

寅十二月

十二月。地舟裁許宮腰屋久右衞門の配下をして輸出米の改装に從事せしむべきことを告ぐ。

〔御郡典〕

御家中給人米、一重俵之分買請、致船積候節、一重俵之分二重に仕立方等之儀、是迄浦々に、船手之者より所々之者ゟ、拵方等頼置候躰に候處、今般浦々船持共より願之趣有之、詮議之

上產物方年寄中江も相達、以來は津出商米二重俵に仕立方之儀、地舟裁許宮腰屋久右衞門江主附申渡、是迄手馴候者共右久右衞門下裁許に相立出來方之儀、兼而上結繩皮等用意爲致置、舟向之節不指支樣積出方等吟味いたし候條、御國船持共二重俵仕立度望之者者、久右衞門下裁許之方江申達、問屋切相對に而一圓取扱不致、萬事御米同樣相心得候樣可被申渡候。尤船積之節人足賃銀等之儀は、是迄商米定之通致置候。久右衞門下役之者江相渡、勿論其浦定之外不筋之族有之候はゞ、船持共より及斷申筈に候條、惣而旅人迷惑不致樣取計、無遲滯出帆爲致候はゞ、畢竟給人米も引立申儀に候條、此段船持幷問屋等江可被申渡候、以上。

十二月　　　　　　　　　產物方役所

有賀甚六郎殿

中村逸角殿

十二月。河北郡の十村等河北潟の排水口を疏通せしめたるを以て經費の補助を求む。

〔大野町文書〕

覺

一、二貫三百目　　　　御舟小屋前より大野新川切口迄、川掘入用。

一、六百二十七匁五分　古川口堰留鳥足五十組、土俵幷川入人足等入用。

一、百四十四匁　當春揚申鳥足九組、重而入申に付、棚木土俵人足賃等入用。

一、一貫二百八十三匁　右堰留前岸堅め振杭暨橋下も北岸水除張出杭木等千六百本入用、幷横竹杭木振立人足賃等入用。

一、五百六十五匁二分五厘　水戸口西の方波除長三十五間、土俵三俵重ね、小口積二遍、一間に付三十俵宛、〆千五十俵、外に九月九日荒にて相損じ候足し土俵五百八十俵、都合千六百三十俵、幷波請砂除垣二遍仕立方入用。

一、五　十　目　南岸字日和山出張の所、砂流し申人足賃等。

一、百四十一匁七分七厘　水戸口西の方より南江打通高垣百五十間、枕木箕竹繩等入用。

〆五貫百十一匁五分二厘

內二百十一匁五分二厘　古川堰留入用等、大野村より仕候內勸進に爲致可申候。

一貫四百目　潟廻り村々より爲差出可申候。

殘而三貫五百目　御加銀奉願候。

右大野川水戸口相曲り、水引不足、其節御見分茂被成下候通に御座候處、其後水戸口馳埋め

候砌、直川に切替仕候得共、砂川之儀、岸堅等不仕而は又々最前之通り相曲り、切替仕候詮茂無御座候に付、當春以來、再三私共罷出見分仕、詮議之上、夫々岸堅め等普請爲仕候處、右之通入用高に相成。共上御船小屋前川掘入用之儀は、先達より御達し申上候通り、近年毎歲過分相懸申儀に御座候。彼是何分潟廻村々に而相辨兼申儀に御座候間、格別御詮議被成下、諸郡打銀之内を以、右銀高御加銀御聞届被成下候樣奉願上候、以上。

文政元年十二月

田井村　次郎吉
福富村　六郎右衞門
淵上村　源五郎
相合谷村　喜兵衞
御所村　長次郎
笠島新村　八三郎
南森下村　三郎右衞門
森村　藤右衞門
倉見村　一二郎

御改作御奉行所

文政二年

正月朔日。前田齊廣病むを以て年頭の禮を行はず。

〔横山氏日記〕

正月元日　折々雪降

一、御前御疝邪等御難儀被遊候に付、御禮不被爲請旨、舊臘書立之通に付、年寄中等五時過より段々登城之事。

正月廿二日。御郡方の者の芝居狂言を觀覽することを禁ず。

〔御郡典〕

舊臘以來金澤町奉行於手前に縮方申付、芝居狂言興行有之候。尤御郡方之者共、右樣之場所江見物に罷越候儀一圓不相成候之條、嚴重可申渡、自然御用等に而致出府罷在候者之內、心得違に而罷越候者も於有之者、急度咎可申付候間、村役人を始召仕候下人に至迄、不相洩樣急度可申渡候、以上。

卯正月廿二日　　有賀甚六郎
　　　　　　　　中村逸角

十二月は文政元年なり

能州四郡十村中

正月廿九日。本畑に甘蔗を植うべからざる幕令を傳ふ。

〔留帳拔書〕

近來於諸國砂糖製作相增、右に付而は猥に本田畑江甘蔗を作候儀停止たるべく旨等之儀に付、從公儀相渡候御書付寫一結二通相越之候條、被得其意、所々御郡奉行等幷江州御知行所江茂被申觸、御請可被出之候、以上。

己卯正月廿九日　　前田伊勢守
長甲斐守

前田才記殿
遠田誠摩殿
大地縫殿左衛門殿

靑山下野守殿御渡候御書付寫一通相達候間、被得其意、答之儀は石谷周防守方江可被申聞候、以上。

十二月十二日　　大目付

松平加賀守殿留守居中

大目付江

近來於諸國砂糖之製作追々相增、大坂表其外國々江積送り、商多分之趣に相聞候。右に付而は、自然本田畑江甘蔗を作り、米穀にかへ砂糖製作を専らにいたし候儀は不可然事に候。依之自今以後、猥に本田畑江甘蔗を作り候儀停止たるべく候。

但、荒地或は野山をひらき、米穀不熟等之地江作り候儀は可爲格別事。

右之趣、御料は其所々奉行・御代官、私領は領主・地頭より急度可申付候。

十二月

右之通可被相觸候。

二月朔日。本年より再び馬市を開催するを以て諸士の心得を令す。

〔官私隨筆〕

別紙寫之通定番頭へ申渡候付、爲御承知進之候條、御組へも御觸可被成候、以上。

二月朔日　　前田土佐守

奥村助右衛門様

定番頭江

從當年以前之通於鬮助馬場馬市就被仰付候、其節他國者等も入込可申候條、諸士幷子弟等稽

古方曁見物に罷越候人々等、都而猥に無之樣相心得候樣、家來末々迄可被申渡候事。

一、市中責馬等朝夕共、中之口より下之方二筋に而有之筈に候事。

右之通被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、共支配へも相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

卯　二　月

二月八日。他國產綿弓弦の販賣を禁じ、商品の價格を一定す。

〔留帳拔書〕

當町綿弓弦問屋赤倉屋八郎兵衞より賣出候綿弓弦之外、他國弦取扱候儀停止之趣先年中觸置候處、中には善惡等申立、他國洩弦取扱候者も有之、咎も申付弦取揚候得共、今以心得違之者も有之、畢竟下賣之者相立置、直段高直にも相成候哉と聞候に付、此度格別遂詮議、以來左之通直段相極、下賣之者指止、八郎兵衞よりうり子相廻候樣申渡候。

弦直段

一、鯨　筋　改　印　一懸に付　代七匁一分

一、鯨　筋　極上白印　一懸に付　代六匁八分

本年十月六日の條參照

一、鯨筋入鹿筋入交　天印　一懸に付　代五匁八分
一、入鹿筋　熊　印　一懸に付　代五匁六分
一、入鹿筋　梅　印　一懸に付　代五匁一分
一、入鹿筋　金　印　一懸に付　代四匁七分
一、鯨　筋　極　印　一懸に付　代六匁四分
右之外八郎兵衞より賣出候分無之候。然上者商賣人共嚴重に相心得、他國弦一圓買請申間敷。勿論綿商賣人不限、是以後若他國弦致取扱候歟、若又右直段より高直に賣買いたし候者、急度咎可申付候條、是等之趣一統江嚴重可被申渡候、以上。

卯二月八日　　　　産物方役所

有賀甚六郎殿
中村逸角殿

二月十二日。賣買を假裝して物品を預り、高利を以て金錢を貸與することを禁ず。

〔官私隨筆〕

隱質之儀は御停止に候處、近年道具商賣人等心得違之者も有之、不埒之取組を以、道具・着

類等賣切候證文取請、二ヶ月或は三ヶ月之限月相極、買返之趣を以品物を預り、高利之銀子貸付いたし候躰相聞候。品物を預り候儀は隱質に相當り、しらべ方紛敷、御縮方に指障候間、以來右躰之取組いたし候者於有之は、嚴敷相咎、品物取揚、隱質同樣に取捌可申旨、盜賊改奉行及斷候に付、自今右樣心得違之者無之樣、夫々申渡候條、被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配へも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

二月十二日　　長　甲斐守

二月十六日。能登產の木炭商賣を株立とし、運上銀を徵することを告ぐ。

〔留帳拔書〕

能州出來炭幷小羽等買集候者共株商賣取縮方之儀、鳳至郡輪島村傳兵衛願出候に付、御算用場ゟ相達候處聞屆有之、猶又仕法帳差出候に付、相達候處其通に可相心得旨、今十六日產物方役所聞屆有之候。仍而傳兵衛儀村々相廻り、右商賣仕來之者共ゟ株札相渡、右商高に應じ運上銀取立候筈に候條、得其意、不相洩樣夫々嚴重可申渡候。則別紙相渡候、以上。

卯二月十六日　　中村逸角

有賀甚六郎

二月十八日。會所銀過借の分の貸附及び取立方を定む。

〔官私隨筆〕

會所銀過借之分、以來利足紙面之通り取立可申御仕法御改に付、御勝手方前田伊勢守殿御押紙面御渡、御一統江私共より可申談旨、昨十七日被仰渡候に付、別紙御押紙面寫一通指進申候條、御承知被成、御同役・御同席御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且御組等之內裁許有之面々は、其支配江も相達候樣御申談可被成候。會所銀借用證文幷上納切手調方、借用人より直會所江承合候樣、是又御申談可被成候。早速御廻達、落着より御返可被成候、以上。

二月十八日　　岡田求馬等

覺

會所銀過借之分以來御貸附幷取立方左之通。

一、會所銀知行當之外過借之儀、以來貸渡候其月より、一ヶ月百目に付五朱宛之利足銀、御知行之人々は七月取立、御扶持方・御切米之人々者三月取立可申候。翌年より五ヶ年之間、百石に付二十五匁宛之圖を以、元利幷利足銀とも取立、六ヶ年目に至り證文爲相改、百石に付二十五匁宛無利足を以每歲取立可申候。知行高等に寄、過借少銀に付五ヶ年に不滿皆返上

之分は、尤其通り取立可申候。
一、百石に付二十五匁宛無利足返上之前借有之人々者、地廻り・他國當とも、過借之元銀利足相添返上之內者、右無利足知行當り返上之分取立申間敷候。尤過借銀借用之年者利足銀迄取立候間、過借銀借用年者無利足知行當り返上之分取立可申候。
但、過借之利足取立候內、五ヶ年之間に皆返上之砌、元銀知行當りに致不足候とも、其年は知行當りに不足之儘取立、翌年より前借無利足返上之分知行當り取立可申候。
一、前借無利足返上有之人々過借利足立之分、五ヶ年目元銀幷同年上納期月迄之利足銀取立候上、前借無利足返上銀に爲打込、一紙證文に爲改可申候。
但、五ヶ年目元銀皆返上無之人々者、殘銀其年十二月迄之利足、五ヶ年目之上納期月繰上取立可申候。
一、他國當り借用之節者、右過借利足立之分前借無利足へ爲打込、無利足を以取立、改而過借貸渡可申候。
一、地廻り之分重而借用之節者、前借地廻り過銀皆返上爲致、改而貸渡可申候。
右會所銀過借之分、以來御貸渡方等當分如此被仰付候條、被得其意、夫々可被申談候事。

己卯二月　　　　　前田伊勢守

會所御奉行中

二月廿二日。能登内浦に於いて紀伊の漁民に鯨獵を許したることを告ぐ。

〔御郡典〕

能州内浦において鯨獵業之儀、先達而被仰渡候通、紀州浦之者共罷越、於彼地に捕方を以爲致獵業、夫に付先づ鵜川沖合三・五里程出、左右は九里程も散々に相守居、鯨相見え申所ゟ寄集り、もりを以打留、迯行に相隨前後先々駈拔、もり打重捕揚候に付、何十里程にも難相定、尤渚ゟは二・三里充も相隔り候業に付、外獵業に指障候儀も無之筈に候得共、猶更心得方之儀、紀州浦獵師共等ゟも急度申渡置候。尤諸浦獵師共にも其心得有之、猥に鯨獵業に不指障樣可被申渡候。且亦風波之模樣に寄、何方浦ゟ引寄申儀も難計候條、取揚候はゞ其所役人罷出、縮方無手拔樣可被相心得候。尤手傳人足等相雇候儀も候はゞ、其時々賃錢可爲相渡候。右之趣夫々可被申渡候、以上。

二月廿二日　　　　　　　　　　　　産物方役所

有賀甚六郎殿

中村逸角殿

二月廿三日。犀川に於いて見合札を有せざる者の投網・小目網・流網を用

ひて漁撈することを禁ず。

〔官私隨筆〕

別紙寫之通一統申談候様、御横目へ申渡候付、爲御承知進之候、以上。

二月二十三日　　長　甲斐守

奥村助右衞門様

御横目江

犀川魚殺生請負、犀川下川除町富木屋彌助と申者、去寅年より來る午年迄五ヶ年之間相勤、川役銀上納仕候處、無札之殺生人多入込、請負人代合申故、彌助請負人之儀は表立不申抔与申立、見合札取不申迷惑仕候付、前々之通投網・小目網・流網仕者は、川師より見合札取請罷越、無札之者は右等之殺生不致様仕度旨、町奉行申聞候條、前々申渡置候通宜敷可相心得候。

右之趣一統可被申談候事。

二　月

二月廿五日。前田齊廣使を發して仁孝天皇の御惱を奉伺せしむ。

〔横山氏日記〕

二月廿四日　雨降

一、戸田五左衛門儀御使爲御用、明日京都江發足仕候旨及屆候事。

但、禁裏御疱瘡に付御機嫌御伺之御使也。

二月廿五日。婦人の衣服等に關する前令を勵行すべきことを通牒す。

〔官私隨筆〕

女共衣類等之儀に付咎方之儀、前田五左衛門へ申渡候處、別紙之通諸頭等へ申談候寫一通指出候付、爲御承知進之候、以上。

二月廿五日　　長　甲斐守

奥村助右衛門様

衣類等之儀に付、去々年三月被仰渡方有之候處、近く又々心得違之者共有之に付、今般又々改方へ咎方之儀被仰渡、心得違者見請候者名前爲承屆、其主人等へ申達候歟、又品に寄頭・支配人へ相達候樣被仰渡候故、猶更頭・支配人へ被仰渡方之儀、存寄之趣及御達候處、先達而被仰渡置候趣に候へば、此度改而は諸頭等へ不被仰渡候間、拙者より此段各樣へ可及御演述旨被仰渡候條、御同役御傳達、御組・御支配御申渡、且又御組等之內裁許有之人々は、其支配へも不相洩申渡有之樣御申渡可被成候。右之趣家來末々迄得与御申渡、來月廿日迄全く

相屆候樣御執計可被成候。其上に而於改方役人共へ申渡方有之候間、此儀分而得御意候、以上。

卯二月　　　　前田五左衛門

諸頭樣

二月廿七日。學校を改築するを以て本日より授業を停止す。

〔觸留〕

今般學校御建替就被仰付候、今廿七日より右御普請中、兩學校稽古相止候事。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配江も相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談事。

二月

別紙寫之通、定番頭へ申渡候付、爲御承知進之候之條、御組江も御觸可被成候、以上。

二月廿七日　　　　前田土佐守

前田伊勢守樣

〔學校繪圖註記〕

寛政三年亥十二月四日地鎭祈禱被仰付、同四年春落成。
文政二年二月隣地奥村故豐次郎舊邸地ゟ被遷。
同五年三月仙石町大槻内藏允邸跡ゟ再轉被仰付。

二月廿八日。前田齊廣退隱の意を家老等に傳ふ。

文政二年二月廿八日神尾孫九郎を以被渡下。

〔御親翰拜寫幷御請寫〕

御卷目之上、家老中

去秋からと申遣候通り、近年痂邪、其上癇症故に候哉多病に相成り、出外等萬事無覺束、とても長途之旅行等は不存寄儀。兩三年も此躰に而者、所詮公務難相勤儀。左候得ば無據心定も有之候。其上に便々と當居住に罷在候儀も不本意之儀。差懸り候而者猶以不可然儀。其上深慮之趣も有之、學校片寄申儀に候。是等之趣、其方共は格別之儀に付申聞候。兎角鬱氣勝ちにて、長篇之調筆令難儀致文略候。年寄共ゟ者數度此方存念得与申含、何れも能會得之事に候間、書外不審之趣も候はゞ、年寄共可被相尋候、以上。

二月二十八日

猶以其方共へ此通りに申出候趣を以、此紙面年寄共へ爲見置可被申候。

〔御親翰拜寫幷御請寫〕

廿九日淺加九之丞を以て上之。

昨日被成下御親翰奉拜戴候。去秋ちらと被仰出之通、近年御疝邪、其上御癇症故に御座候哉、御多病に被爲在、御出外等萬事御覺束なく被思召、とても長途之御旅行等は不被寄思召御儀。兩三年も此御容躰に而者、所詮御公務御勤難被遊儀。左候へば無御據御心定も被爲在候。其上にも當御住居に被爲在候御儀も不御本意儀。指懸り候而者猶以不可然御儀。其上御深慮之趣も被爲在、學校片寄被仰付候。是等之趣、私共には格別之御儀に付被爲仰聞候。兎角御鬱氣勝ちに而、御長篇之御調筆御難儀被爲在候に付、御文略被遊、年寄中へ者數度思召通り被仰出、何茂能會得之事に御座候間、御書外不審之趣も御座候はゞ、年寄中へ相尋可申旨、段々被仰出之趣奉承知、御追啓に被仰出候通、御親翰年寄共へ拜戴申談候處、奉拜戴、去年以來段々被仰出候御趣意之儀も申聞、奉承知、誠に奉恐入御儀に而、年寄共よりも數度申上候處、御深慮を以段々被仰出之上に候得者、此上可奉申上儀も無御座候。私共に者御格別之儀に付、被爲仰聞候旨奉承知、難有仕合奉存候。前田修理江者御親翰拜寫指遣、拜見可申談与奉存候。

一、御親翰奉返上之候、以上。

二月廿九日

前田織江
前田權佐
前田內記
前田中務
横山藏人
津田玄蕃
今枝民部

是月は大盡なり

二月晦日。與力及び同心の知行總額を計算す。

〔金龍公記史料〕

二月晦記。當春與力惣帳之表人員二百八十八人。祿額七萬六千三百二十石。內三萬七千六百十石現在與力祿。三萬六千二百十石定額。九百石預知。千六百石同心知。

三月六日。前田齊廣改作法を修正勵行せんことを告ぐ。

〔御親翰留〕

近年豐作打續き候處、貧民成立得不申、年々離散之民多く有之躰及承令心痛候。萬一凶歲之節には如何可致覺悟儀に可有之哉。兼而覺悟無之而は、餓死之所に可至儀、不容易事に候。

畢竟改作奉行等心得方不正候故貧民多相成候。取箇も減少せしめ候。早速詮議有之、第一貧民成立之儀、且取箇向も工夫可有之候。此儀においては詮議隙取り申候而は、時節相後れ候間、急速可被致詮議候、以上。

三月六日

長甲斐守殿
前田伊勢守殿
前田土佐守殿

申述之覺

各兼而存之通りに而、多病に相成り公務難相勤、隨而政事も不行届事奉恐入、心痛至極之事に候。右に付此方不肖至極とは乍申、はからざるに歷代に連り候事に候得者、我身の冥加を存付、一つには國家之補益とも可相成事、其功無之而者重疊多罪之事に候。依之積年存込罷在候一儀、今般存切取懸り可申候。餘之儀に而も無之、微妙公御深慮を以被仰付置候改作方之儀、數年相立候事故おのづから流失に至り、日夜令心痛候。依之今般補綴せしめ候條、各にも今般之儀は何分精誠を盡し、成就之儀相勵可被申候。微妙公誠に格別之御才德を以、數年之御工夫を以御成就之儀。今般者左程之大業に而者無之候得共、今般之儀も不容易事に候へ

者、不肖之此方一力に、行届兼候條、偏に各初其向力を合せ、成就之儀希所に候。將又數年流れ來候習俗一時に改候事に候へば、愚昧之下々集り候樣之儀も可有之候得共、左樣之儀各にも少しも相厭被申間敷候。此段は少し關邊江も其次第申入置方も有之候間、無泥急速取懸り、夫々趣意通速に可被申渡候。初めは少種々騷々敷儀も可有之候得共、貧民成立之趣意に候得者、畢竟國民安堵之所江至可申筋合に候條、少も無泥、時節後れ不申樣早々可被申渡候。

右御親翰前田掃部・人見吉左衞門を以御渡、翌七日應御請指上候事。

関は九郎兵衞、當時齊廣の御近習番

三月七日。盜賊改方御用の藤內に御郡方一般に止宿を許されんことを申請す。

〔國事雜抄〕

盜賊改方御用相勤候藤內頭仁藏・三右衞門、並右兩人手代共等廻村之刻、御用之折遠所へ手先役人共指遣候砌、以前は藤內共爲同宿候處、天明之頃より藤內儀は、近村藤內罷在候村方へ爲致止宿事に相成、近村藤內有之村にては格別難澁之儀も無之候へ共、所により役人共止宿仕候場所とは、二・三里も相隔り、前後と進退仕藤內有之村迄罷越止宿仕候に付、甚及迷惑申候。其上指懸り召捕者抔之時分は、別て御用支にも相成候て、彼是指支申筋合多く御座候間、以後御郡方町・在共、藤內より御用先之儀申斷次第爲致止宿候儀不指支候樣、御郡方

町・在一統へ被仰渡候樣仕度奉存候。尤止宿方平人同樣相心得候儀は有之間敷候。勿論藤內身分を押隱致止宿候儀は、堅不仕樣申渡置候間、此段も被仰渡候樣仕度奉存候、以上。

卯三月七日　　　前田五左衞門

前田伊勢守樣

三月十三日。家中の者の能登・越中の浦方に於いて魚類を買入るゝ場合の納税及び運送手續を令す。

〔官私隨筆〕

別紙寫之通定番頭へ申渡候付、爲御承知進之候條、御組へも御觸可被成候、以上。

三月十三日　　　前田伊勢守

奥村助右衞門樣

定番頭江

能・越浦方に而、御家中之人々魚買入取寄候節は、其浦に而役立相濟候趣、浦々魚方役人より指紙を請取、夫を以金澤町端に魚問屋より指出置候役人へ申斷、指紙を爲見可罷通儀。且右魚荷物御用之外者、宿々自分雇に而可罷越筈之處、才領附傳馬を以引寄候人々も有之躰に候。右樣有之候而は、宿役御法も猥に相成、曁浦方役洩にも可相成儀に付、以來右之族於有

之者、指押へ置及斷候筈に候條、御家中等より魚取寄候人々、心得違無之樣相心得可申候。右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配へも相達候樣可被申聞候。

右之趣一統可被申談候事。

卯　三　月

三月十九日。加賀・能登・越中の十村廿八人に入牢を命ず。

〔橫山氏日記〕

三月十九日　天氣吉

一、加・越之十村共勤方不屆に付、廿八人入牢被仰付候旨、御算用場奉行江月番より申渡有之。其外十村共村替被仰付候者共も有之由。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

是の年三月廿日御趣意之趣有之、三州之十村之內左之人々禁牢被仰付、御郡方御仕法之儀被仰出有之なり。

能美郡　寺井村　宗右衞門　犬丸村　與右衞門　〆二人

石川郡　福富村　六郎右衞門　淵上村　源五郎　〆二人

次郎三郎は次郎四郎なるべし
幸左衛門は幸右衛門なるべし

河北郡　御所村　長次郎　　笠嶋新村　八三郎
　　　　南森下村　三郎右衛門　　御所村　源兵衛　〆四人
口郡　酒井村　一樂　　荻谷村　七左衛門　〆二人
奥郡　折戸村　源助　　馬場村　喜右衛門
　　　　中居村　三郎兵衛　　稲舟村　藤太　〆四人
礪波郡　内嶋村　孫作　　戸出村　又八
　　　　内嶋村　小豊次　　宮丸村　次郎三郎　〆四人
新川郡　沼保村　幸左衛門　　山田村　祐三郎
　　　　石佛村　重右衛門　　天正寺村　七郎
　　　　神田村　小左衛門　　神田村　七郎右衛門　〆六人
射水郡　加納村　兵衛　　下條村　彌二郎
　　　　嶋村　善兵衛　　大門新町村　七右衛門　〆四人

右之人々牢揚屋江被入置候。

新川郡　沼保村　彦四郎
奥郡　馬場村　八左衛門　　中居村　三郎右衛門

右之人々宿預け被仰付候。

四月廿六日

寺井村手代　彌　助

右は勤方不宜候に付徘徊指留候事。

能美郡　粟生村肝煎　小松地方肝煎

右肝煎役御指除之事。

同月廿八日

福富組手代和右衛門　同人悴要三　三階組手代彌兵衛

右三人共役儀御指除之事。

右之通り被仰付、御郡方ひつそりと致候。是の年調理之三州之十村帳を見るに、

無組御扶持人十村　八　人　組持御扶持人　〆十一人

組持御扶持人並　〆十九人　平十村　〆五十人内六人並列

新田裁許　〆二十三人内一人並　御扶持人山廻り　〆八人

山　廻　〆　七十人　無役御扶持人　〆七人

外に御旅屋守　東岩瀬勘兵衛　浦山村榮助

都合百九十八人なり。

右百九十八人皆謂れ有家柄、代々十村に進べき家筋之者也。菅原村行長・若山村延武・上戸村眞頼・大谷村頼兼、是等は能州にて先祖は平家之落武者之由にて、今に實名を俗字として相用る。皆月村彦・澤川村田畑兵衞・生地村前・鮻目村太間抔由緒有之。田畑兵衞は利家公より末森御合戰之節、山三里四方代々拜領世上咄有通也。

〔累年雜記〕

文政二年諸郡大變に而、三月十六日比御扶持人等御用、同十九日晝時より御役所始、翌廿日五つ時比迄改作に而被仰出候。爲百姓共成立、樣子有之。依而上り屋被仰付、則公事場假牢へ廿八人被仰付候。御僉議も無之右之仕合に候。

〔御親翰帳之內書拔〕

三月十九日

今般十村等入牢一件之儀に付、御手前心付幷土佐守も心付之趣追々被申聞、大慶不過之候。先以今般農家之一儀、此方大業に各も格別に存込被申同心之段、國病快氣之きざし本懷之至に候。是迄此方身分之儀は謙退のみ申遣候得共、只今に而は存切り此方存寄申遣候。此入牢之儀に付而は、仁不仁之處君事場合、いまだ各には趣意會得違有之候。猶委細掃部江申含候

間、承可被申候。

三月二十日。天德院靈堂增築の工を起す。

〔金龍公記史料〕

三月廿日創工。增營天德院靈堂。

三月廿四日。大田敷馬・山本又九郎・寺島藏人私に政事を議するを以て遠慮を命ぜらる。

〔横山氏日記〕

三月廿四日　雨降

一、左之通申渡有之由。

甲斐守殿

大田數馬

右數馬儀、格別才力有之に付、何分御用にも被相立度、是迄種々役儀も被仰付候而御試被成候處、兎角不預儀を陰に而取組候族相聞え、尤御譜代之儀何事も御爲第一与之趣意に者無相違候得共、其致方心得甚不可然、此儀は性質与被思召候。此御時節左樣之儀、彼是御政事向に指障、無是非思召候間、役儀御指除遠慮被仰付候旨被仰出候間、可有御申渡候事。

卯三月廿四日

山本又九郎

右又九郎儀、格別才力有之に付、何分御用にも被相立度、是迄種々役儀も被仰付候而御試被成候處、兎角不預儀を陰に而取組候族相聞え、尤御譜代之儀何事も御爲第一与之趣意には無相違候得共、其致方心得甚不可然、此儀は性質与被思召候。此御時節左様之儀、彼是御政事向に指障、無是非思召候間、役儀御指除遠慮被仰付候旨被仰出候間、可有御申渡候事。

卯三月廿四日

寺嶋藏人

御手前儀、格別才力有之に付、何分御用にも被相立度、是迄種々役儀も被仰付候而御試被成候處、兎角不預儀を陰に而取組候族相聞え、尤御譜代之儀、何事も御爲第一与之趣意には無相違候得共、其致方心得甚不可然、此儀は性質与被思召候。此御時節左様之儀、彼是御政事向に指障、無是非思召候間、遠慮被仰付候旨被仰出候間、可有御申渡候事。

卯三月廿四日

先達而役儀被指除候付、役儀御指除之文面無之。

寺島藏人は正月廿七日役儀を除かる

三月廿五日。前田齊廣藩吏の政務の機密を漏洩することを戒む。

〔御親翰留〕

近年政事等隱密之儀、不顯以前に其事を指し申觸し候族、畢竟相洩安き處も有之故も候哉、又は下に而相考評論して、たしか成る事に申ならし候儀可有之候得共、畢竟政事之方を內評仕儀は、其役に無之者においては甚不心得之至に候。重職なる者にも政事方を洩し申者も有之由。其風押移り、諸役人且無役之者共、將又末々町・在之者に至る迄、互に政事之隱密いまだ不顯先に聞出し、申通候者共其名前等も逐一相聞、沙汰之限に候。是迄敢而申出候儀も無之に付、先宥免致置候。向後政事方相洩候においては、申通候者も聞受候者共も、急度咎可申付候條、一統町・在に至迄夫々不相洩樣、急速可被申渡候、以上。

三月廿五日

年　寄　中

右御親翰に應じ、御請伊勢守・甲斐守・土佐守より差上候事。

〔官私隨筆〕

近年御政事等御隱密之儀、不顯以前に其事を指申觸し候族相聞え、畢竟相洩安處有之故も候哉、又者考之儀をたしかに申成候哉、いづれ御政事を內評いたし候儀者、其役に無之者においては甚不心得之至に候。諸役人且無役之面々、將又町・在之者に至迄、御隱密之儀を聞出

候哉、互に申通じ候族有之儀、逐一相聞え沙汰之限に被思召候。是迄は先御宥免被成置候へ共、向後御政事方申觸候族於有之は、申通候者も聞請候者も、急度御咎可被仰付候事。

右之通被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配ゟ茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

三月廿八日　　　　　　　　前田伊勢守

三月廿五日。百姓の衣食住に關して告ぐ。

〔御郡典〕

今般百姓成立之ため、格別之御趣意を以、萬端被仰付候儀に候得ば、先以風俗相改不申而は、成立にも不宜与思召候。其風俗を相改申儀は、十村共之心得相改り不申而は末々不相改儀。是迄之十村共之中には、自身に田畝ゟ踏込、鍬抔持申心之者も無之、上﨟之樣に相成、衣食住奢侈に相暮し、遊藝抔而已心懸、百姓之成立も不存付躰に被聞召、沙汰之限に被思召候。向後右樣之役人に罷成候者ども急度可相心得、若不埒之儀有之候得ば嚴敷越度に被仰付候。

一、木綿布子・木綿袴・小倉帶・木綿羽織着用可致候。十村之儀は紬可指許候。絹或は唐晒染、木綿或はちゞみ・晒布之類不可致着用候。且布上下之外無用に候。

一、家內妻子前文同樣。白き下帷子・絹之肌衣無用、帶・腰帶・半襟絹可指許候。
一、紫・紅色二品、模樣附候着類、振袖無用に候。
一、京島・京木綿等不可用、妻子手織可相用候。
一、足袋不可用候。
一、櫛・笄、朝鮮鯨眞鍮之外無用に候。
一、青傘・蛇目傘不可用候。
一、三味線・尺八・碁・象戲・茶湯抔、農業之妨に可相成儀不可致候。
一、家作前々被仰出候通、急度可相守候。分限不相應之家作等有之躰、右樣之奢侈於有之には、嚴重御咎可被仰付候。
一、長脇指不可帶候。
一、對武家無禮致間敷候。
一、米不可致常食、だん子・うち置・大とう・いり粉・めくず等喰可申候。
一、すいき・大根菜、心懸屋腰に掛干置可申候。
一、厚味之肴不可致食用、あら仕事仕者にはすじゆるみ不宜候。
一、なら漬香物不可致候。

一、草花植不申、尺地にも食用之品或は柹・栗之類植可申候。

右之條々向後無違失相守、在來之分も早く可相改。無左而は舊染之風俗不相改儀に候間、急度此段可申渡旨被仰出候條、早速夫々可被申渡候事。

百姓共等風俗方等之儀に付仰出之趣、別紙之通御用番年寄中被申聞候に付、右寫一通相達之候條、被得其意、一統不相洩樣急度可被申渡候、以上。

三月廿五日　　御算用場

能州御郡奉行中

三月廿五日。小松梅林院天滿宮の開帳を金澤に行ふ。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

三月廿五日、小松梅林院天滿宮三十三年之開帳、卯辰觀音院に於て開帳、御代參被仰付候なり。

三月。十村等吉事の際に於ける祝儀の品目を定む。

〔司農典〕

共方共儀、吉事之節祝儀音物之儀、近き一類は鰑五把を限可申、共外同役たりとも取遣之儀可爲無用。若組方等より貰請候においては、嚴重越度可申付候事。

卯三月　改作奉行

諸郡御扶持人・十村・新田裁許中

三月。十村等の入牢に關し百姓の歎願することなかるべきを告ぐ。

〔御郡典〕

付札、御算用場奉行江

此度百姓共爲成立、御樣子有之、十村共之内牢揚屋江被入置候。萬一是迄之よしみに、歸役等之願、組下之者共より願出申抔之儀無之樣、御郡奉行江可申渡置候。追而は思召有之候間、一統耕作方出情相勵可申候。此御主意小前之百姓・媥等之者迄、早速夫々可申渡候。

右之通被仰出候條、被得其意、早速可被申渡候事。

卯三月

三月。御郡方の者の武家に出入し、又は城下に長逗留するを禁ず。

〔留帳拔書〕

近年御郡方之者共、寺社幷町家等之向寄を以武家江致出入、又は申込等いたし候者共有之樣子承及候。右は元來御定も有之處、違失之躰沙汰之限りに候。以來其方共は不及申、百姓末々迄心得違不仕樣、嚴重可相心得候、且亦百姓・頭振・妻子等御城下抔江罷出、長逗留いたし

候者も多在之躰。此儀も前々申渡置候趣も有之處、違失之躰相聞え候。以來出府等不致而不相成儀有之分は、其組裁許十村江、何日切歸村之趣、曁何々により罷出候譯一々申斷、十村於手前綿密相糺承屆可申候。自然如此申渡候上、心得違之者有之脇より相知れ候はゞ、嚴敷咎可申付、今度右に付蔭聞役等申付置候者共も有之候。

右之趣得其意、一統江嚴重申渡、請書可指出者也。

己卯三月　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

三月。御郡方等の博勞を株立とし役銀を上納せしむ。

〔留帳拔書〕

敬白靈社起證文前書之事

一、今般御郡方等遠所博勞之儀株商賣に被仰渡、御役銀年分二十目宛指上候に付、私共博勞被仰渡、右株札一枚宛御渡、無麁抹相心得候樣被仰渡、奉得其意候事。

一、馬賣買之儀百姓中等より申聞候節、双方聞立、馬相應之直段を以買人江賣渡可申候。下馬追銀等之儀、成限り相働、馬主不勝手之儀無御座樣取計可申候事。

一、毎歲牛馬運上銀之儀、先達而被仰渡候御仕法帳御ヶ條之通、初め一度賣買之時分賣人よ

り御定之口錢御取立に付、以來博勞世話料之儀も、御書取を以被仰渡候通相心得、此外少し
に而茂不筋之銀錢取請候儀一圓仕間敷、勿論心得違之者於有之者、商賣御取放急度御咎可被
仰付旨奉畏候事。
一、是迄馬賣買代銀遲々仕候族茂御座候躰及御聞之旨。在馬之儀は耕作方に付專要之品に候
處、右樣之趣有之候而は代り馬求兼候儀も出來可仕、左候而は百姓中等甚難儀之筋に候間、
自今賣買之節賣人・買人に博勞兩人宛相加り直段相究、代銀幷博勞世話料卽座に相渡賣買可
仕候事。
一、博勞株札所持不仕者馬商致候者、其段御斷可申候事。
一、博勞相止候者等は、御渡之株札早速御裁許迄差上可申候事。
右條々於相背者、忝茂左に申降す神罰冥罰各可蒙罷候。依而如件。
文政二年三月

四月二日。大聖寺侯前田利之參覲の途金澤に宿す。

〔官私隨筆〕
備後守樣昨朔日御發出、松任御旅宿、今日此表へ御着に付、御對顏之儀可被仰進處、中將樣
先達而以來御勝れ不被遊候付、御登城被成候而も御對顏は難被遊候間、御斷被成度旨被仰

進、御登城は無御座候。且又御旅宿へ爲窺御機嫌、各今日退出後罷越申候間、御出難被成候

者以御紙面御伺可被成候、以上。

四月二日　　　　　　前田土佐守

奥村助右衛門様

四月十六日。行路に發病したる婦女の取扱に就いて告ぐ。

〔留帳拔書〕

別紙之通御用番年寄中被申聞候に付、寫相達之候條、被得其意、各支配所江不相洩樣可被申

渡候、以上。

四月十六日　　　　　　御算用場

有賀甚六郎殿

中村逸角殿

伊勢參宮或は諸國神社參詣等之女、於旅中煩出、宿送りを以本國江罷歸り度旨願出候得者、

宿々送遣候儀是迄仕來に候處、去亥年秋越後市振庄屋より越中境町役人迄、煩女宿送り等之

者以後難請取旨申越候に付、高田表役人迄及懸合候趣等、富田小與之助より相達候に付、榊

原遠江守殿御留守居爲承合候處、遠江守殿御領分之者共市振御關所入候儀不指支候得共、通

抜候儀關川・鉢崎兩御關所に而指支候故難請取、是迄繼迯り候儀も有之候得共、全心得違之取計之由申來候而、是以後煩女之分遠江守殿御領分之者は指支候筈。若越前筋より迯り越候而も、右之趣申達候而請取申間敷。於御領分煩出候者共所介抱致置、先々御領主役人江尋遣、親類等請取差越候樣及懸合可申候。尤男之分是迄之通に候。此段遠所町奉行・所々御郡奉行江可被申談候事。

四　月

四月十九日。前田齊廣・齊泰父子能を演ず。

〔横山氏日記〕

四月十九日　天氣吉

一、今日御能被遊、五時過より始り候事。

一、九半時頃御能拜見可被仰付旨、以神尾孫九郎被仰出、主付中務若老市三郎江申述候に付、難有仕合奉存候旨申述、玄蕃初に及演述候事。

一、御能八半時過相濟、松之間二之間において、年寄中・御家老中・若年寄中一列遠藤數馬を以御禮申上、勝千代樣江御附頭中村武兵衞を以御禮申上退出之事。

〔金龍公記史料〕

四月十九日奏能樂。公演羽衣。世子演舍利。

四月廿四日。領國内の寺社に於ける制札の調査を命ず。

〔國事雜抄〕

御領國之寺社家境内に制札有之候分、いかゞ之由來に而何頃より建來候哉、委曲可書出旨御用番被申聞候條、制札有之候寺社家より、早速文書寫等可被指出候。尤配下之分取立可被指出候、以上。

卯四月廿四日　　山崎庄兵衛

四月。遠所町奉行等、行路病者を介抱したる爲その本國より贈られたる謝儀を受くるを禁ず。

〔御郡典〕

遠所町奉行等支配所において、他國者致病死等候節、右奉行又は御郡方役人共より、當人本國役人迄病死等之様子委曲申遣、右本國役人より爲挨拶与、町役人幷死骸葬候寺或は療治いたし候醫師等江、金銀等送り物有之候へば、受納方之儀右支配所之内に而は、是迄區々に相成居候躰に候。仍而以來右様之儀有之節、寺幷療養いたし候醫者江之送り物は爲致受納、村

方等ゟ相達候分は品能及斷相返候樣可申渡置旨、遠所町奉行・所々御郡奉行等ゟ可被申談。御領主等より被下物有之節は、其時々相達候次第可及指圖候條、此段も可被申談候事。

四　月

四月。諸浦に於いて砂錢を輸入するを禁ず。

〔御郡典〕

付札、御算用場奉行ゟ

諸浦共、他國戻り船抔に砂錢買請積來候躰に而、入錢多に付、惡錢致取扱間敷趣、先年一統申渡置候之處、今以砂錢多入込候躰に候。以來急度申渡、惡錢入津彌緊密指留候樣、御郡奉行等ゟ可被申渡候事。

卯　四　月

閏四月四日。公務の爲に廻村する役人は十村の家に宿泊すべきことを諭す。

〔官私隨筆〕

是迄廻村等御用罷越候人々、四分二分之拂を以平百姓方へ致止宿候付、主從三人之入用方、

萬雜には百目より二百目計迄茂一宿之入用相懸り候由に而、村方難儀に相成無用之費に候條、道程一里内外に十村罷在候者、右十村方を致定宿に、食事は一汁歟一菜歟指出、村方萬雜に相掛申間敷候。十村者鍬米・代官口米も有之儀に候間、是程之事は仕候而も可相成儀に候。是迄は平百姓方に致止宿候付、十村初肝煎手代迄も打寄、多飲食之費を相掛け申躰。以來十村方に致宿候得者、此等之惡癖相直り可申、肝煎等寄候共、尤別宿等取不申、十村方に可指置候。右道程之儀者、御用品により遠近之辨理可有之候得共、可相成だけ十村方に可爲致止宿事。

一、百姓方に止宿之節は、所柄等にもより可申候得共、主從共一人に付一匁より二匁を限り萬雜相極可然、以來は一汁歟一菜歟之中可相用候。且一汁或一菜与申にも、數品に倍候品有之ものに候間、此處無相違、其處に有合申廉品可相用、百姓家之事に候得者品物、獵漁之場所に候得者魚物も用可申候。

右之通可申渡旨被仰出、御算用場奉行より所々御郡奉行等江申談候條、被得其意、以來遠所爲御用罷越候人々止宿心得方之儀、夫々可申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

閏四月四日　　　　　　前田伊勢守

閏四月六日。前田齊廣、家中よりの借知は尙前年通り繼續すべきことを告ぐ。

〔御家老方御隱密之留〕

去年仕法調達銀申付、是迄之借知之分振向け候樣申出候得共、家中勝手相應之宜敷人々に、上げ銀無之人々も多く有之樣に相聞候。中に者精誠之志を以差出候人々も有之候得共、實情からず人々も有之躰。畢竟ヶ樣之處はいつも〳〵申出候通り、此方不德誠に殘念成る事に候。家中初不信用故之事に候。夫に見習町・在迄も不信義之心得に相成候。依而郡方ゟ者別段に申遣候儀も有之候。夫に付指障之趣も有之候條、家中之人々借知之儀、當七月之處に而夫々申渡方無之時は、猶以欺き之樣に一統にも可存候條、此儀は樣子有之是迄之通申付置候。又追而は可申出儀も可有之候。此段先申遣候、以上。

閏四月六日

前田伊勢守殿

閏四月六日。前田齊廣御郡方より差出したる仕法調達銀の不成績を責む。

〔御親翰帳之内書抜〕

去年仕法調達銀申付候處、郡方差出銀、誠に輕少至極之分を取集差出候樣に相聞え候。先以此方趣意を如何相心得罷在候哉。兼而身元相應之宜者共も有之儀、大數承り置候處、右之次第に而は、左程に難澁に而、誠に輕少ならでは不得差出族に候はゞ、右銀子可相返候。然上は衣食住且祭禮・佛事等に至る迄、一々相改め急度制度可有之儀。檢置候而取扱方不致僉議事は、先以其役人々々油斷之至沙汰之限に候。算用場奉行・郡奉行等、右樣之事に而諸郡相應与存候哉難辨候。如此申出候儀を平常事与心得、等閑に相心得、不實儀候事に而は萬端思ひやられ候。實儀之取扱に候はゞよもヶ樣には有之間敷候。此書面右奉行等江も爲見、委細各より申諭し可有之候。依而此段申遣候、以上。

檢置候云々本のまゝ

閏四月六日

前田伊勢守殿

閏四月六日。淺野川・犀川兩馬場の土手を毀損すべからざることを告ぐ。

〔御觸抜書〕

別紙寫之通定番頭江申渡候に付、爲御承知進之候、以上。

閏四月六日　　前田伊勢守

定番頭江

淺野川・犀川兩馬場、近年加修覆候處、右馬場之内土手を越致往來候者有之、土手損じ候旨、町奉行及斷候條、御家中之人々等右躰之儀無之樣、家來末々迄急度可申渡候。若右躰之族有之候はゞ、馬場番人より急度相咎、名前等承り、夫々相達候樣申渡候。

右之通被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配江茂相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

閏　四　月

閏四月八日。盜賊改方より十村等を召喚する場合の手續に就いて定む。

〔杉木氏御用方雜錄〕

付札、御算用場奉行江

十村共盜賊改方江呼出候節、身分之䆳方等には御郡奉行江紙面を以申達呼出、裁許方之儀は直に十村共江申渡呼出候振合に候處、裁許方たり共御郡奉行江紙面を以不申達候而は難指出旨御郡奉行申聞。右一件先達而双方より申聞候趣有之、重而先役前田五郎左衛門指出候紙面相渡、御郡奉行等手前遂詮議被申聞候樣申渡候處、右奉行幷改作奉行紙面取立、添書を以被

出之候。仍之裁許方之儀に付而は、直に十村共呼出候儀、改方役所仕來之通り相心得候様、志村平之丞江申渡候條、被得其意、御郡奉行曁改作奉行江可被申談候。自然指懸り候御用有之、指出方及遲滯申儀有之節は、右奉行より平之丞江掛合、双方御用支無之様相心得候様可被申聞置候事。

己卯閏四月

十村共盜賊改方江呼出候節、身分之尋方并裁許方に付而之呼出とも、右役所より各江不申達而は難指出旨等、先達而被申聞候趣等相達置候處、今度別紙覺書之通御用番年寄中より被申聞候に付、寫相達之候之條、被得其意、裁許方之儀に付而は改方より直呼出之儀仕來之通被相心得、尤指掛候御用有之、指出方及遲滯候節は、改方江各より懸合、双方御用支無之様可被相心得候、以上。

卯閏四月八日　　御算用場

三州御郡奉行中

改作御奉行中

右之通就申來候、寫指遣之候條、得其意、以來御覺書之通可相心得候。尤改方より呼出之儀申來り、指懸り候御用有之及遲滯候節は、其段急速拙者共迄可及案內候、以上。

卯閏四月十九日　　　　　　　　　　御用番　小堀八十太夫

礪波・射水御郡御扶持人・十村中

閏四月十三日。金澤川上新町の芝居小屋附近に檢使を派遣する場合の分擔を通牒す。

〔川上芝居一件〕

今般川上新町之内芝居小屋御申付、小屋廻圍切、其内茶屋等相建、右圍上下二ヶ所入口に木戸相建、木戸より内は廻り方役人等は格別、見物人之分は都而無刀之者外入込不申樣御申付。就夫圍内において自然故障出來、檢使遣申儀有之節、町方之者は假令家下を離れ候共、都而町同心被遣、尤他支配人或は他國者之故障は、前々格之通公事場より檢使指遣候事に被相極度、指支之儀も無之哉、爲御内證委曲御紙面之趣致承知候。右圍内迄之儀に候得ば、公事場において敢て差支候儀も無之候條、御申越之通可有御心得候。御内談に候得共、檢使方之儀に付、同役示談之上、表向及御返書候、以上。

閏四月十三日　　　　　　　　　　富田外記

山崎小右衛門殿

高畠木工殿

閏四月十四日。學校を改築するを以て所屬足輕・小者の員數を減ずることを命ず。

〔學校方覚書〕

文政二年文學校御建替に付、學校附足輕・小者減方一巻、前田土佐守と上書有之帳之內。

今般學校御建替に付、學校附足輕・小者人數相しらべさせ候所、學校附足輕十五人・同小者十八人、幷割場足輕都合十三人請取候內、小頭代四人に學校付足輕・小者之指引も爲致來候之由申聞候。元來御時節柄是迄御人過にも御座候旁、別冊足輕・小者交名帳之通以來相極め、今般北村儀左衛門・木村喜藏兩人、學校附足輕小頭に申渡、佐野嘉右衛門儀者三俵御增米被下、學校附小者甚兵衛同足輕へ立身申渡候儀、幷割場足輕十一人相返可申趣、學校頭手前等段々遂詮議候上、御勝手方等へも被示談候處、甲斐守等存寄も無之旨に付、夫々可申渡と奉存候。學校御草創之後、學校附足輕・小者立身之儀無御座候。學校根付之者に付、以來も學校方より奉伺可申渡と奉存候。則學校頭より指出候足輕等交名帳、幷別紙九通、曁申渡候下物共都合十一品奉入御覽候。猶更被仰出次第奉心得候、以上。

卯閏四月十三日　　　　前田土佐守

右以人見吉右衛門上之、翌日以同人伺之通被仰出。

閏四月十四日。前田齊廣、十村等の身分不相應なる家屋を毀たしむべきことを嚴命す。

〔御親翰帳之内書拔〕

閏四月十四日

一、左之御親翰武太夫を以被渡下。

今度十村共心得方、幷衣食住奢侈に暮し申間敷旨申出候に付、諸郡奉行幷改作奉行共より差出候別紙、算用場奉行次え持參差出候付、則相渡候。右に付此方存寄左に申遣候條、此書面算用場奉行え爲見被申、主意之趣右奉行共え得与申諭し候樣可被申渡候。右郡奉行共紙面之內、通行之節旅泊相勤候者、幷鷹野之節休み候爲に、不相應之家建も爲致置候旨有之候得共、是等は氣之毒千萬なる心得に候。元來鷹野は曾て慰にあらず、農家之盛衰・貧富、土地之善惡、下民之爲躰、且所々之支配申付置候人々支配方行屆候哉否を直覽之爲に候へば、休所に相成候迚不相應之家建爲致置候事など、先以本意にあらず候。國主は其地之士民之爲に被立置候事に而、國主一人之爲に被立置候士民に而は無之事は、古今相知れ申事に候。然ば上之休候爲とて、不相應之家居しつらひ其所に休み候迚、上之快存る儀は無之候。百姓は百姓相應之賤敷家居にいたし、分限々々相應之所を見受候事こそ、政事之行屆申与申ものに候。殊

年具は年貢なるべし

に鷹野等之節、百姓家之貧家賤敷住居に相休み、下々之爲躰を知り、下情をも辨へ可申本意に候處、郡奉行共右樣之心得は、敬するに似候へ共甚道理相違之事に候條、左樣之費堅く可爲無用候。且又巡見上使之儀も申聞候得共、前に調候通り之譯に候得ば、巡見之節見聞にも、百姓は百姓相應之賤敷住居見聞に候はゞ、公邊之首尾は一段可然事に候。百姓不相應之家居等を巡見上使見聞候而は、上之制度不行屆、且は其役々之人々萬事ゆるかせにいたし置候儀相顯れ、甚恥辱之至に候。且又百姓公事出入・年具等に付、時々村役人多く相集り候節難辨旨も調有之候得共、其爲には土間にいたし、入用之節はむしろ敷可相辨候。左候へば常に田畠物・農具等置き、又は米拵等にも可然事に候。諸郡奉行等是迄之習俗に而、下より申聞候儀難默止存じ、且は常人之情難忍譯合も有之、彼是相泥み存切得不申處も相察し候へ共、左樣之處に拘り不申儀專要之事に候。且又急々爲取毀候而は、右仕抹方に雜用差支候など申儀は、皆以本意を取失ひ候ゆゑ、ヶ樣之儀は申立に相當り候。何れ延引与申儀は有之間敷筋に候。中にも別紙名書之人々、百姓には不似合家居之旨承りおよび候。其中沼保彥四郎方は、年々旅泊に候故能見覺え居候。堀樣之儀も有之、馬場に似寄候所、或は茶事圍樣之無用之所なども有之候。是に而其他は思ひやられ候。尤左樣之處急に相改め、野菜類に而も爲植可申、門構等立派にいたし候儀不可然。畢竟砦之形にも似寄、甚以いぶかしき事に候。此等之趣、

夫々其奉行共得与致會得候樣可被申渡候。畢竟此方病身に而久々鷹野にも出不申、近年別而外出難致相成候故、隨而政事も不行屆、元より不德之上右之次第故、諸役人迄も勵み之志薄く相成候處、全く此方之一人之不德に歸し申事に而、實以無是非存る事に候。乍併此方も歷代に思はざるにつらなり候事に候得ば、其冥加にも少しは物事相正し、其功有之樣に致度儀心願に候間、何れも其奉行にも人撰にて申付候人々に候得ば、此主意何分にも致會得、相勵み候樣呉々も可被申渡候、以上。

閏四月十四日

前田伊勢守殿

閏四月十六日。本日より鬮助馬場に於いて馬市を開催す。

〔官私隨筆〕

今般於鬮助馬場、馬市被仰付、當卯の閏四月十六日より二十日迄三歲駒市、同廿一日より廿五日迄二歲駒市、里調之分者右日數十日之內へ入交爲指出申候。市馬望人見物所は、兩馬場博勞共へ割渡置候條、馬相望罷越候御家中之人々等、博勞共之內へ申付爲誘引、馬場上之口より往來可有之候。市中混雜に付警固足輕相立、無用之者指留候間、前廉博勞共之內より小札取請置、持參可有之候樣仕度、市場之內從者召連方、若黨一人・草履取一人召連、殘り從

者之分は馬場前通り之外、何方に而も殘置候樣、此段夫々被仰渡候樣仕度奉存候、以上。

三　月　　神尾昌左衞門

丹羽八郎右衞門

前田土佐守樣

閏四月十八日。町地に人別を有する者を召抱へ又は解雇したる時の手續を通牒す。

〔官私隨筆〕

別紙寫之通定番頭へ申渡候付、爲御承知進之候條、御組へも御觸可被成候、以上。

閏四月十八日　　前田伊勢守

奥村助右衞門樣

定番頭江

町人・町醫者幷町地に罷在浪人等、家來に召抱候節屆之事。

一、町地に家持或は致借宅罷在奉公人、暇遣候節屆之事。

但、右奉公人又他へ召抱候節は、當主人より屆可申候。且又本文暇遣候儀屆無之候者、其者浪人に而罷在故障致出來候共、先主人より取捌之儀に相心得、町奉行致貪着間敷候。

一、町家に罷在御家人暨奉公人之宅に致借宅罷在候者、召抱或暇遣候節届之事。

一、小者躰之請人宅を宿分にいたし罷在、送狀も無之分は、都而届に不及候事。

右者是迄多分主人より届無之、尤町奉行支配之者主取いたし候節は、前廉右奉行へ願出、承届不申而は主取不致筈に候得共、中に者勝手に宜敷譯茂有之故、町役人茂不知樣、內々奉公人に相成居申者茂有之、故障等之節に至り相顯、彼是混雜いたし、町方人別分業縮方相立不申候間、是以後前段三ヶ條に調有之通、家來に召抱又者暇遣候節茂、主家より共者居町組合頭迄紙面を以及届候樣致度旨、町奉行申聞候條、被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配江も相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

閏　四　月

閏四月廿五日。前田齊廣老臣等にその藏する管絃時計を觀覽せしむ。

〔諸事留牒〕

閏四月廿五日　晴

一、今日年寄中被相願、管絃時計拜見に付、御家老中にも相望候はゞ拜見可被仰付旨、人見吉左衛門玄蕃殿江演述。依而御居間書院於御緣側何も拜見。寸崎寶二郎罷出、御時計扱候

事。

閏四月。鹽釜の灰を船積にて運漕する際の手續を定む。

〔留帳拔書〕

鹽士共釜屋灰賣出、船積を以引候節、灰に事寄船手之者与取組、洩鹽致し下積灰与僞、不法を働躰重々沙汰之限に而、畢竟猥之風俗に流、炭・薪木等之船にも毎度紛敷儀有之様子、相違も無之哉。鹽者要用之品之所、請方人家不致符合候。依之炭・牧木等に至迄、船積方作法申渡品も有之候得共、秋末よりは暫時之内荒等に向、出航隙取様之儀有之候而は、稼之逼に相成儀与、先是迄之通に指置候。灰之儀は船積主付人相建、別紙に書立候通を以可積渡候。是以出津・入津改方嚴重行屆候へば、別而申渡筋無之候得共、甚等閑之族。第一潟改人落度糺之上可及其沙汰候得共、當時之者共にも不限儀与相聞え候條、先是迄之儀は其分に候。以來之儀は急度相心得、何船に不寄出津・入津船中綿密に相改可申、無沙汰之振廻於有之は咎可申付候。將又先年御鹽問屋等川筋之もの共出情可致旨等申渡置候得共、其後其沙汰無之、年古き事故自然与潟改人之外は不預事之様成行候躰に而、次第に御締方相弛、潟川等に姦曲之船々夜中忍入、不屆之族有之様子。向後浦々役人共は不及申、御鹽問屋共も格別心を附、疑敷見請候者何船に而も無泥船中得与相改、不屆者捕置可及斷候。右之趣被得其意、於能州

灰主付人相建候儀、其外口郡等灰賣買之ヶ所は、別紙に書立候通縮方可有之候。尤船商賣人共茂、灰に不限炭・牧木等都而船積之品、綿密に改を請候樣嚴重可被申渡候。且別紙書立候通、能州於內外浦灰主付人相立候ヶ所、暨右主付人被相撰候名書可被書出候。將又去々年御鹽引印等之儀に付、役人共心得方委曲申渡候得共、何等心付之儀も不申出、引方方今共縮も無之候。此度者役人共幷御鹽問屋共改方等心付之儀、有無共書付を以可申聞旨可被申渡候、以上。

御算用場

閏四月廿八日

中村逸角殿

有賀甚六郎殿

一、灰主付人能州奥郡內浦に而四人、同外浦に而三人、都合七人相建、右主付人鹽士村々之灰船積等可取捌、村割・村組割合不同無之、順能申談可相勤事。

但、是迄下に而建置候問屋有之候者、共者指除、御縮方行屆候者相撰可申付候。且又從前々灰中買人所々に有之由、幷當時越中六渡寺村に灰津入主付人有之由。是等之儀者不及貪着候事。

一、灰買集船積を以引候節、船宿より灰主付人ゟ相斷、俵每右主付人改を請候上可致船積

事。

一、荒等に而滯船候節は、主付人罷出、船中得与相改、且村々致掛積候者、右主付人致上乘、次之手合主付人江可引渡候事。

一、出艀屆之儀は、積仕廻之手合主付人より裁許十村江申斷、十村裏書、津出・津入之浦方潤改人宛所に而、津出紙面相渡、潤改人積荷得与見屆出艀可申渡候。若隱積等不屆之儀於有之は、尤曲事可申付事。

但、夜中は勿論、及夕景積荷見分りがたき節は、船積幷出艀指留可申候。

一、灰主付人口錢之儀、灰一俵に三文宛買主より可請取、右口錢之外別に被下方等一切無之候事。

但、潤改人江口錢之儀は、是迄仕來之通たるべく候。

一、口郡幷越中於鹽浦、鹽稼之者共等灰賣出船積等、右に准じ可有縮方候事。

右灰御田地屎物に越中江積廻候に付、灰賣買直段共外船積人足賃等夫々之儀、先達而十村共改作所江申斷取極候之趣有之由。右は尤御縮方紛敷趣に而は有之間敷、今更彼是与不致貪着候。船積改方之儀は、右ヶ條之通改而申渡候條、不致心得違候樣可被申渡候事。

卯閏四月　　　　　　　　　　　　御算用場

閏四月。石川郡土清水に於いて製造する鹽硝の額を調査す。

〔御在國諸事日記略留〕

一、毎歳御買上に相成候鹽硝、土清水において調合出來、殘之分多有之由に而、當時何程有之候哉。且年々上納いたし候高何程に而、調合出來高何程に候哉。右員數夫々調指上候樣、先達而人見吉左衛門を以被仰出候付、左之通調以同人上之。

越中五ヶ山より生鹽硝千三百六十八貫目充毎年御買上相成、於土清水調合仕候。

一、右鹽硝近年增調合之儀申渡、一ヶ年大抵千貫目内外出來仕候。

一、右調合殘り生鹽硝御在高一萬九貫目計御座候事。

卯閏四月

閏四月。寺院又は神社に於いて百姓の租納皆濟以前に齋米を賣ることを禁ず。

〔留帳拔書〕

鹿嶋郡小竹村一向宗瑤泉寺より、所口町批商賣人中挾屋與四右衛門無指米買請候に付、於改方相糺候處、右瑤泉寺齋米之旨申出、齋米相違無之候得共、紛敷致方に付詮議中咎申渡置、

今度落着申渡候。右賣出方之儀遂詮議候處、都而寺社共齋米等賣拂候儀者可有之筈に候得共、百姓皆濟已前に賣出候に付、無指米同様に相成紛敷候間、以來諸郡共百姓、皆濟以前寺社齋米等賣拂候儀不相成段可被申渡候。乍併無據儀有之相拂候分は、頭寺等江及斷、差紙相添賣出候樣御申渡置可有之候、以上。

閏四月　　　御算用場

宛所

閏四月。芝居に於ける道具・衣裳等に贅澤の品を用ふることを禁止す。

〔川上芝居一件〕

傳馬肝煎

彌三次

芝居に用ひ候襖、金張付に致し候風聞有之に付、右襖取寄遂見聞候所、本金に而者無之候得共、金張付之名目人口難止事に候。最初より如此物事長じ候ては、畢竟芝居之期も難續儀に候條、早々批取可申候。少しの壽抔之儀者、先其分に見逃し置候。以後長じたる儀有之候者、道具方之者共曲事可申付候。衣裳方抔も右に准じ可申候條此段可申聞置候。

右之通可被申渡事。

批取はへぎとりと訓む

閏四月。芝居座區域内の定書を交附す。

一、芝居座圍中定書左之通相渡、肝煎六左衛門等へ被申渡候樣に同心中へ申渡す。

〔川上芝居一件〕

定

一、圍中居住之者共、互に申談、火之元嚴重相心得可申渡候。
一、自然芝居小屋より出火有之候者、其節之番人、五十日可爲牢舍事。
一、若圍内宅々より出火有之候はゞ、過料銀二枚取揚、所拂に可申付事。
一、圍近邊火事有之節は、上下入口木戸押開、火防人數無滯可相通候。尤帶刀人等改に不及候。火鎭り候上、組合頭圍内相しらべ候上、木戸〆切可申事。
但、洪水之節も同斷。
一、於茶屋男女出合猥ヶ間敷儀無之樣相心得、出合女等堅指置申間敷候事。
一、於圍内不法亂行之者有之候はゞ、圍内之者共捕へ、縮所へ入置可及斷事。
右之條々急度可相守者也。
卯閏四月

五月六日。金澤川上芝居開演せらる。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

五月六日より川上芝居出來、右芝居相始候なり。役者は皆地役者に而、座本は中山新平なり。

五月九日。御仕法調達銀上納方に關して告ぐ。

〔官私隨筆〕

別紙一結之趣夫々相觸候付御達申候、以上。

五月九日　遠田誠摩

奧村助右衛門樣

御仕法御調達銀、舊臘御家中之分人少に而、御仕法通組合方指支に付、別帳之通仕法相極、於當場御橫目立會、御仕法方役人ゟ爲鬮取候處、品川主殿・橫濱右門鬮當りに付右兩人ゟ者舊臘申達候へども、去暮日詰に相成、其段各ゟ不申達候に付此節申達候。

一、當年よりは每歲七月・十二月分鬮取、於當場席緣上鬮開、其時々鬮當人ゟ迄申達、鬮當り無之人々へ者分而不申達候條、鬮當り人等之儀承度人々茂候はゞ、其節々當場御仕法方可被承合候。

一、御仕法御調達銀、當七月第二番上げ銀一口分四百七十五匁に候條、當七月二日・四日・六

日・八日之內、座封名印を記上納可有之候。且又二口・三口茂相加り候人々は、銀高引〆何貫何百目何之誰幾口分与上切手に調可被指出候。

一、當十二月より以後上げ銀之儀、分而一統へ不申達候條、別紙仕法帳之割合を以、毎歳七月・十二月二日・四日・六日・八日之內上納可有之候事。

五月十二日。百姓の家作に對する制限を令す。

〔御郡典〕

先達而被仰出を以申渡置候在方衣食住之制度、猶更無油斷急度相心得可申候。四民其職を不取失、農家は農家之分を守、古來之質朴に立戾り候得ば、人々奢侈榮耀等之費も無之、自ら難澁薄く、成立に相成可申儀は上下幸甚に候得共、深く舊來之流俗に墜、次第に難澁深く相成候儀は、誠に歎ケ敷儀。此所を厚思召被爲寄、此度御仕法被仰付候儀は、誠に以難有儀に候條、右御趣意不取失樣、其方中能令會得、夫々末々迄可申諭候。就中別而家作前々御定有之儀は、一統承知之通に候得共、猶更覺書相渡之候。此度之御趣意に相叶候得ば、人々不朽之可爲安堵候事。

右之趣得其意、一統不相洩樣可申渡候、以上。

卯五月十二日　　御郡奉行

能州四郡十村中・新田裁許中・山廻り中・
山廻列中・無役御扶持人中

覺

一、門構等立派に飾申間鋪候事。
一、馬場に似寄候場所之事。
一、長押作幷書院床等尤無用、戸障子等並物相用可申事。
一、疊多分無緣可相用、無據分迄麁品に而緣り附可申事。
一、壁之儀者下品之中壁を限り可相用候事。
一、圍廻り之儀無據分は土塀或は竹木之内を以垣等いたし、縮方而已に相心得、飾ヶ間鋪儀少も致間鋪候事。
一、庭之儀、無用之木石等取拂、植物等は農家要用之品而已差置可申事。
一、家作之儀、茶事圍樣之儀榮耀ヶ間鋪類、早速取拂、御用方等入用之外手廣過候分も尤取毀ち、且臺所向に相當り候勝手は土間にいたし可申事。
一、屋根之儀、成限藁・萱之類相用、葺替之時分田畠養之用を可具事。

右荒増相記之候。惣而建具・家具・屏風等に至迄右に准じ、麁品相用可申候。高多く致作配候者之儀は、內場等廣ぐ無之而は、米拵等にも差支可申儀に候條、無味に家作取狹め申儀に而は無之、前段農家に不相當榮耀ヶ間鋪作事は、早速取毀可申、且御旅館曁上使宿等之儀は別段申渡候事。

五　月

五月十四日。紺屋刷毛の輸入を禁ずべきことを告ぐ。

〔御郡典〕

當町宮保屋次兵衛儀、紺屋刷毛出來商賣致し候處、上方下り之刷毛より出來宜候に付、今般詮議之上、能・越より出候鹿毛、右次兵衛に為指出、取縮方申渡候。御領國入用刷毛不指支候に付、是以後他國入之分指留候間、其段一統被申渡、當時他國より入込居候分所持いたし居候者有之候はゞ、何程有之哉ヶ所々々員數書取立可被指出候。且捌方之儀は、追而可申談候間、此段も可被申渡候、以上。

五月十四日　　　　産物方役所

有賀甚六郎殿

中村逸角殿

蓮池は今の兼六園

勝千代の住居といふは口實にして實は齊廣の隱棲に當てんと欲したるなり

五月廿二日。前田齊廣蓮池內に居館を設くるの許可を得たることを告ぐ。

〔御親翰帳之內書拔〕

五月廿二日

一、學校江蓮池を御圍込被成候儀、先達而公邊江御達被成候處、御聞濟之段被仰渡候旨、吉左衞門演述之事。

但、御老中水野出羽守殿江、左之御窺之通下物を以被仰込候處、共通御指圖に而、前月之御月付の儘、當月四日御表向御願書御差出被成候處、同十三日以御付札被仰出候付、爲承知拜見被仰付候旨に而、以吉左衞門同廿四日被渡下、何茂拜見仕候上、同人を以奉返上候事。

拙者居城城外西之方に屋敷有之、前々より嫡子幷隱居致住居來候處、右之場處甚之濕地に而、是迄兎角病人多出來致難儀候。依之東南之間城外用屋敷有之に付、外に家中侍屋敷之往來道圍申付、右地面に輕家作致し、嫡子勝千代爲致住居度、此段相伺申し、御差圖被成可被下候、以上。

閏　四　月　　　　御　　　　名

御付札

可爲伺之通候。

是月は大盡なり

五月廿八日。前田土佐守蓮池に於ける御殿造營の主任を命ぜらる。

〔橫山氏日記〕

五月廿八日　曇、夕少々雨降

一、左之通演述。

學校御園中御用地に御造營被仰付候儀、公邊御伺被爲濟、右御用主付拙者㊁被仰付候。爲御承知申達候事。

五　月　　前田土佐守

五月晦日。人別・戶數等の調査に從ひたる地子町の組合頭に賞賜す。

〔國事雜抄〕

金百疋充　　地子町與合頭百二十五人

今度人別帳改に付、出情相勤、人別方役所へも度々罷出、且又町問・家數等初、明細書出候儀、彼是何も骨折相勤、全出來に付右之通遣候事。

卯五月晦日

五月。前田齊廣功を賞するに職を以てするを戒む。

〔金龍公記史料〕

五月老臣等。以高山定功奉仕及數十年。欲陞用爲學校奉行。請之。公乃批曰。夫立官設職。非供褒賞之用。一人之耳目不足以給細大事務也。故使人從其才能小大。授官分職。使政令達下也。然卿等似欲以官爲褒賞之資。其奈國家。何況學校養人才之地。而以不堪其任者。置衆人子弟之上。事之尤大不可者也。卿等思此義。更議其人。

六月二日、高野山天德院の住僧金澤城に登る。

〔御在國諸事日記略留〕

六月朔日

一、明二日高野山天德院登城に付、諸役人五半時揃、年寄中等四時頃出席有之、出席之上服上下に相改候筈候旨、月番より演述之事。

同　二日

一、四時過天德院登城、御大廣間二之間に着座、御茶・たばこ盆出之。追付年寄中一切、御家老一切罷出逢候事。右相濟、餅御菓子等被下之、御意之趣以奏者番申述。退出之刻は御用番又兵衛一人被送候事。

天德院獻上物　熊野白蜜一箱　吉野榧油一箱

六月五日。蓮池の御殿造營方役人を命ぜらる。

〔御在國諸事日記略留〕

六月五日　曇、夕方雨降晴

一、左之人々蓮池上之御殿御造營方御用主付被仰付候由之事。

土佐守席　木村勘六
　武田秀平
　篠田五左衞門
伊藤內膳等席御用定番頭並　人見吉左衞門
御奧小將御番頭　九里覺右衞門
御表小將橫目　遠藤數馬
組外御近習御用　吉川昌九郎
御次執筆御算用者　坪內金左衞門
同　金岩宗藏
御先弓頭御作事方御用　岸忠兵衞
御作事奉行　野村隼人

御大工頭　井上庄右衛門
同　山上善右衛門
物頭並御普請奉行　神田一平
前田三內
不破勘太夫
豐嶋小十郎

一、左之人々居屋敷御造營方御用に付、立退被仰付、代り地追而可被下旨、土佐守申渡有之候由之事。

六月六日。學校の改築成るを以て本日より授業を開始す。

〔觸留〕

今般學校御建替就出來、當六日より稽古相始候事。

右之通被得其意、組・支配之人々ゑ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配ゑも相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申渡候事。

六　月

別紙寫之通定番頭ゟ就申渡候、爲御承知進之候之條、御組等ゟも御觸可被成候、以上。

六月朔日　前田土佐守

前田伊勢守樣

六月六日。領國内町見御用の爲石黑信由を巡回せしむることを御郡方に告ぐ。

〔國事雜抄〕

高木村　藤右衞門

右御領國町見御用被仰付候間、相廻候者手合ども夫々不指支樣御申渡置候事。但御預地方之儀も不指支樣御心得候事。

右之通人見吉左衞門申聞候條、各支配所相廻り候節、夫々不指支樣可被申渡置候、以上。

六月六日　御算用場

三州御郡奉行等連名殿

六月八日。學校に出席すべき諸士及び子弟の怠慢を戒む。

〔官私隨筆〕

文武之學校は、第一御家中之諸士暨子弟等敎導之ため被建置候處、近來者文武共惣躰出座寡

く、講日組當り抔は別而人少に候。勤仕有之者は指支候事も可有之候へども、宮暇には心懸可申、爲子弟者は勿論無懈怠相勵可申儀に候。此段嚴重相心得候樣可申渡旨被仰出候事。

右之通被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。——尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

六月八日　　前田土佐守

六月十日。仕法調達銀を藩に差出したる者に相當の手形を發行し得ることを告ぐ。

〔留帳拔書〕

別紙寫之通、御用番年寄中被申聞候條、被得其意、支配之內望人有之候はゞ、早速名書可被書出候。札調方等之儀可申談候、以上。

六月十日　　御算用場

有賀甚六郎殿

中村逸角殿

付札、御算用場奉行江

今度被仰付候御仕法御調達之儀は、年々打續指出申儀に付、銀主共精誠指上度心得候而も、

金銀所々日々運方に相成居申品に付、後々之處何歟無覺束相泥可申儀に付、御格別之御詮議を以、御仕法中別紙之通可被仰付御詮議に候。手形通用之儀は甚不容易品に候得共、氣請能相整候得者一統之運方に相成、輕き者も潤澤茂有之儀に候條、所々役人は不及申、何茂能令會得、何分通用方辨利能相整候樣相心得、少しも邪情之族無之樣嚴重可申渡。若難心得儀等於有之は、急度御紀被仰付候事に候條、此旨等能々可被申渡事。

卯　六　月

三口以上指上候者は、願次第時々指上候銀高之手形通用可承屆候。依而利足八朱之內五朱者銀主〻相渡、三朱は致添印候兩替等〻可相渡事。

一、右手形は相願候者より仕立可指上候。仕立方は五ヶ年半に而指上銀請取候月を限月に調、兩替屋共之內一人銀主より申談、其身并右申談候兩替屋之者、各印章相用可指出候。右手形に場印等致し可相渡候條、銀主より勝手に可爲致通用事。

但、遠所之儀は其所々手寄之兩替可申談。手寄之兩替無之所々は、奉行人手前に而身元慥成者相撰、兩替代り手形引替人之儀等、遂詮議可申聞候事。

一、右手形上納に指上申事は、上納人之名印右札之內〻書入可指上候。其身之上納に、自分之手形は取立不申事。

一、御領國兩替一統江銀主より申談次第可致加印。依而百目に付三朱宛可相渡、幷手形に用申場印之印鑑可相渡候條、右印章等得与相改、何分辨利致通用候樣可取扱旨、嚴重可申渡候事。

但、兩替共印鑑之儀は相互に取合置可申事。

一、鬮取當り候者、其身之手形を右銀高取集可指出。銀高相渡、手形取揚合消印可相返候。併取當り候銀子共儘、改而之御仕法方江指上申儀に候はゞ、手形之儀は二・三ヶ月中取集可指出、改め可相渡事。

一、舊臘指上置候者共も、右之趣相願候者可承屆事。

右之御趣意に候條、尙於御算用場遂詮議、夫々可被申渡事。

六月十日。能登の漆搔に鎌役を徴することを定む。

〔御郡典〕

輪島町に商いたし候漆、御役立に相成、右御役銀取立方主附同町漆座伊左衛門江申付置候段、先達而申渡置候通に而、今度改而右漆搔子鎌役に申付、一人之鎌一枚与極、一人より御役銀十兩宛、暨搔子半分程ならで相稼不申者、半役五兩宛取立可申趣に、産物方役所詮議之上聞屆有之候之旨申來候に付、此段伊左衛門江申渡置候。尤搔子共江伊左衛門より商札相渡

置筈に候條、札所持不致者漆賣捌不申、尤不正之賣買不致樣、搔子共幷塗師共江も嚴重可申渡置候。尤仕法帳之通麁抹無之、嚴重相心得候樣伊左衞門江可申渡候、以上。

六月十日　　中村逸角

有賀甚六郞

折戶村　源右衞門

能州四郡十村中

六月十二日。金澤に地震あり。

〔橫山氏日記〕

六月十二日　快晴

一、今夕八半時少過强地震に付、年寄中等追々登城。玄蕃儀以坂井要人中將樣江、御機嫌御指障茂不被爲在候哉相伺候處、同人を以何之御障も不被爲在候旨御意有之。

六月十二日。一向宗の僧侶が昇進の爲にする寄附金の勸誘に應ずべからざることを告ぐ。

〔御郡典〕

一向宗之寺庵昇進を相望、旦那之者共ゟ右入用致割符、不心服候而も押而取立候躰に付、右樣之儀一圓承引不致樣、前々より數度申渡置候通に候。然處近く昇進を相企候寺庵も有之躰に而、旦那者共より金子調達致候由承及候。依而今度改而申渡候條、得其意、一圓取持等致間鋪候。尤寺庵之内にも、强而調達等申懸候はゞ、其寺號等可申聞候。此段不相洩樣夫々可申渡候、以上。

卯六月十二日

中村逸角

有賀甚六郎

能州四郡十村中

六月十二日。新開所の免合は新田裁許之を査定し十村連名を以て上申すべきことを通牒す。

〔留帳拔書〕

新開所御免圖り之儀に付、御別紙御渡被成、以來御紙面之通相心得候樣被仰渡候間、御一統御承知可被成候。就夫是迄右圖り帳面、御扶持人連名を以奉願候振合に付、此儀如何相心得可申哉与御窺申上候處、是迄連名いたし申儀に候はゞ、其通相心得候樣被仰渡候。此段私より得其意候樣被仰渡に付如斯に御座候、以上。

卯六月十二日　　野々市村　又左衛門

諸郡御扶持人様・十村中様

諸郡共新開所免圖り之儀、是迄中に者、其方中幷手代ゟ相談之上取圖り有之候躰に候得共、元來新開所免附之儀は、新田裁許勤向之儀に付、以來新開所免合之儀は、都而新田裁許了簡限にて取圖り候樣先達而申渡候條、得其意、先々急速可相廻候事。

卯六月　　金谷佐太夫

富永權左衛門

諸郡御扶持人・十村中

六月廿五日。金澤川上新町の芝居小屋を改造する爲本日より興行を停止す。

〔川上芝居一件〕

一、當廿五日切に而一先芝居爲指止候。右に付自・他國役者一統、暇遣候段可申渡旨、主附肝煎權右衛門へ申渡、翌十七日夫々申渡候段罷越申聞候事。

六月十六日

〔川上芝居一件〕

芝居懸り

權右衞門

安右衞門

長作

六左衞門

彌三次

川上新町芝居小屋建方怪敷、冬向甚危候に付、今般右小屋町會所へ引揚建替申付候間、普請中繰々見廻、普請取懸り而より、一人充詰に申渡候事に可申付候。建方之儀は追々可及指圖候。右小屋引揚候段、小屋方之者共へも可申渡候。未入用銀全取返不申に付、不足之分は追而町會所より償可相渡候條、此段も可申聞置事。

右之通可被申渡候。

七月

六月廿八日。諸浦漁獲徵稅の仕法を改め、その吟味人を命ず。

〔魚口錢沛口錢舊記〕

中屋九左衞門

橋本屋　安右衛門

右諸浦魚吟味人申付候處、近年浦々魚方猥に相成、洩魚等有之由粗相聞候に付、今般仕法立替、於浦々所散賣、幷鹽干物獵場より直に他國出等之分、暨是迄所に寄、地・他の諸魚冥加銀指上取縮いたし候ヶ所も有之候得共、今度都而一統に仕法相改、且又鰤十歩一銀取立方とも、右兩人江主付申付候間、夫々不相洩樣可被申渡候。尤爲取縮追付浦々江、右兩人召連當役所御用御算用者出役いたし候筈に候條、猶更其砌仕法之趣可申渡候間、可被得其意候、以上。

卯六月廿八日　　　　産物方役所

溝口藏人殿

土肥嘉傳次殿

右之通申來候に付、寫相越し候條、得其意、夫々不相洩樣可申渡候。承知之驗致印形、早々相廻從落着可相返候、以上。

七月二日　　　　溝口藏人

土肥嘉傳次

向寄十村中

是月は大盡なり

六月晦日。昨今兩日前田齊敬の二十五回忌法會を天德院に執行す。

〔官私隨筆〕

觀樹院樣二十五回御忌御法事、當月廿九日・晦日於天德院就御執行、御射手・御異風稽古幷諸組弓・鐵炮稽古之儀、御法事初前日より御法事中相止可申事。

一、鷹野其外諸殺生、且又鳴物之儀、廿八日より晦日迄三日可有遠慮候事。

一、普請作事之儀、廿八日より晦日迄指止可申事。

但、指急候普請等之儀者不及遠慮候。

右之通被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配へも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

六月十日　　村井又兵衞

御所村長次郎はこの後牢死

六月。先に入牢を命じたる十村等を流刑に處することを告ぐ。

〔萬聞書〕

一、同年六月御改作より御觸御紙面之寫左之通り也。

犬丸村與右衞門・寺井村宗右衞門・福留村六郎右衞門・御所村長次郎・同源兵衞・南森下村三郎

牢死者の内に折戸村源助を脱す

右衛門・笠嶋新村八三郎・中居村三郎兵衛・荻谷村七左衛門・戸出村又八・宮丸村次郎四郎・内嶋村小豊次・加納村兵衛・嶋村善兵衛・沼保村幸右衛門・山田村祐三郎・天正寺村七郎・神田村小左衛門・大門新町七右衛門・沼保村彥四郎。

右之者共不正之儀、吟味被仰付候而者不輕事共に付、思召を以不及其御沙汰、能州嶋之內江流刑被仰付、仍之右與右衛門等二十人、幷に先達而致牢死候馬場村喜右衛門・內嶋村孫作・稲舟村藤太・下條村彌二郎家財者、同居之骨肉之者幷妻子江被下候。妻・同居之者無之者は一類之內江半分、且那寺江半分可遣候。持高之儀は其村惣家數割符、御預高に被仰付置候條、尤御納所可爲嚴重候。

一、與右衛門等脇刺・鼻紙袋等、其方中に指預置分、都而家財同樣たるべき事。

右之趣得其意、夫々可申渡候、以上。

卯六月　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

六月。十村番代等にその勤方を愼み質素の風俗を守るべきことを告ぐ。

〔留帳拔書〕

其方共儀、中に茂勤方不宜者も有之躰粗及見聞候。元來其方共儀者、十村之召仕之者に候得

者、萬端百姓素朴之風俗に可罷在所、畢竟御城下に罷在候故、奢侈之風俗を見習、夫より自ら在方も右樣之風を移可申哉、前々仕來り候流俗を相改兼、不筋之族に癖付來候趣、何れ知共非不相改儀者沙汰之限に候得ば、速に番代可取放儀に候得ども、格別詮議之上、先是迄之儀は令用捨候間、以來猶更萬事正路に相心得、御用方綿密に相勤可申候。此上心得違之者於有之は、急度可申付候條、相互に勵合、聊も不正之儀有之節は、互に致蔭聞、拙者共江可及內達候事。

卯六月　　　　改作奉行

加越能番代・手代幷手傳

七月二日。石川郡土清水焔硝藏の地內に於いて土中より火を發す。

〔諸事留牒〕

七月三日

一、咋晝後か、土清水焔硝藏邊がけぶち之方御圍之近邊、六疊敷計の大きさに土燒出候に付、藥合奉行罷越、近鄉百姓呼集水を懸、暮合に消留候處、又夜中五時より燒出、又々百姓共七・八十人計寄集水を懸候處、漸今曉鎭火。御使番等も罷越、月番方に而御郡奉行江申渡、右之所爲掘候處、下之方江掘行候へば彌土氣あつく、火は只今に而は燒やみ候へども、未火氣

は有之由之事。

七月五日。能美郡釜清水村等に猪・鹿驅逐の爲火藥を下附せしむ。

〔御在國諸事日記略留〕

七月五日

御算用場奉行江

三十一斤　筒藥

右能美郡釜清水村組等奥山三十ヶ村、猪・鹿致徘徊作物に相障候付、鐵炮に而爲追拂申度候問、筒藥相渡候樣願之趣、十村書付に御郡奉行等奥書いたし、各添紙面を以被指出候。依而願之通承届候條、御異風裁許申談請取候樣、御郡奉行へ申渡候事。

七月九日。前田齊廣、退隱の志願を達する爲前田伊勢守に江戸に赴き斡旋すべきことを告ぐ。

〔御親翰帳之内書拔〕

一、左之通御親翰、御封印無御座、以吉左衛門被渡下。

別紙御手前出府之儀申出候程に、追々心願之儀事整、誠以生涯之大慶に候。右に付猶又退隱

致し不申而は難叶無據譯合、左に相調候。兼々申聞候通之容躰に而、近頃は別而萬事心に懸り、思慮事多念に相成候而、彌增氣鬱增長、用事向承り居申候内に外之事にも多念に相成、何を承候やら覺も無之樣成事有之。右に付而は各より伺之品々も、是も得与思慮いたし可申与存候内打わすれ、申出も遲候樣成る儀近頃はまゝ有之。心外懈怠に相成候儀、心勞至極いたし候。日々掃部等三人呼用事承り候も、誠にわづか半時一時に不過程之間にて、其他は日夜隨意に致保養罷在候事、各にも嘸々不安心与、是等之處甚以致心勞、一入に氣鬱いたし、氣も忘々然といたし致當惑候。畢竟退隱之決心、いまだ身分も誠に片付不申ゆゑ、彌心に懸り一向保養之便り無之、勿論藥驗も無之候。右等之次第故、近頃は子共側ゑ參りさわぎ申事抔さへ、せは〳〵敷存じ心に障り候樣成事共に而、次第に心鬱之處、少々づゝは增長之樣に、自身にも覺え致心勞候。依之一日も早く願通り蒙仰候而致安心候はゞ、格別心も落付き、保養之一端に相成り、又各政事之示談も心靜に致出來候儀も可有之哉与、此のみ露之賴に存候。右等之次第に候間、段々此處御手前相含み被申、出府之上は何分にも心願通り早く蒙仰候樣、相はたらき被申候樣、偏に賴み存候。尤是等之趣、同席中ゑも序に此書面之趣被相咄候樣に与存候。

七月九日

七月十六日。年寄村井又兵衞等前田齊廣の退隱事情を公布することに就いて議す。

〔官私隨筆〕

七月十六日

一、今夕九半時過、又兵衞殿自分宅へ被罷越、先達而より承知之通、中將様御所勞に而爾々不被遊、折々は御痂邪御指引等被爲在、其以來御表へ御出も無之、各御目見も不被仰付、とかく御心配被遊候へば御指障に相成候故、自分御政事方御勵みも不被任思召、御心外に被思召候。右に付而は御退隱之儀、先達而より略承知も仕候通、段々御僉議之上、左之通御治定之由に而書面、幷甲州等連名公儀へ可被上書立之振ともに被出之。此趣品不輕事故、今日房州方へも甲州被罷越示談有之候。存寄も無之哉と御申聞に付、誠に奉恐入御事には候へども、段々各様よりも被仰上候上之儀に候へば、此上尤存寄無之旨申達之、別紙は被取歸也。

但、御兩家様へも御相談有之候由。

淡路守様には思召も有之御様子に候へども、各より段々被申上候趣御聞被成、此上は强而被仰上筋も有御座間敷旨也。

自分は奥村榮實

淡路守は富山侯前田利幹

明日は頭分へも申聞有之由。

中將様御儀、御年若之節より御疝邪御難儀被遊、其上御氣塞之御症に而、折々御外勤等之節、俄に御持病之御塞御指發、御難儀被遊候付、種々御療養被爲在候得共、年々御增長被遊候へども、御快躰は不被爲在、其上長途之御旅行別而御難儀被遊候得共、是迄押而御勤被遊候處、此四・五年以前より大に御難儀被遊、一昨年秋御國許御出立前御疝邪等御難儀に付、其後御出府被遊候へども、御在府中御滯、去年御歸國以後も御不出來勝に而、當春御家中年頭御禮も不被爲請。依而は中將様御內存には、此御様子に而は御參勤等も難被遊、御隱居も被遊度御心願に被爲在候得ども、勝千代様御儀未御幼年之御儀、其上御病氣之儀は又御療養被遊候へば御快氣も可被爲在處、御隱居と申儀如何に被思召候へども、御心底に者御參勤等も不被遊、御在勤之御姿に被爲在候儀、誠に御恐入被遊。且御自身公邊向御不勤に被爲在候而は、御家中之御示も難被遊、左候時者御國政も御行屆不被遊、被對公儀重々御恐入与一圖に思召被爲詰候故、彌增御氣塞之御疝御募り、此御様子に而は猶御病氣も御增長可被遊哉。右に付而は未勝千代様御幼年之御儀、何分御快氣も被遊、御國務御後見に成候様に被遊度御心願に被爲在候。依之水野出羽守殿へ御內意被仰入置候。御様子は御計難被遊候へ共、御差圖次第早速右御願書御差出可被遊候。此段先各へ內々可申聞置旨被仰出候事。

右は御隱居之儀、甲州等より奉願と之趣也。趣意は大方右被仰出之通に而、此上は御病氣御養生之爲、御家中一統奉願上之事也。

七月十九日。花火禁止の前令を守るべきことを告ぐ。

〔宮私隨筆〕

花火之儀、前々より御停止候處、心得違之者有之、淺野川筋於家近花火立候由相聞え候。若此以後右之族於有之は、急度可爲曲事。

右之通被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配へも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

七月十九日　　前田伊勢守

七月廿五日。主人を迎ふる爲城中の腰掛に在る小者等の不作法を戒む。

〔宮私隨筆〕

別紙寫之通御横目へ申渡候付、爲御承知差進申候、以上。

七月廿五日

付札、御横目江

御城中於腰掛、主人迎等に罷越居候者共之内にも候哉、眠居、御作法呼候儀も承付不申躰之者有之。且又眠不申共、腰懸居候而下座不仕者も有之様子相聞え候。文化九年にも一統申渡候處不心得之儀に候。以來右躰不心得之儀無之樣、主人々々より家來末々迄嚴重可申渡候事。

右之趣一統可被申談候事。

七　月

八月十一日。入牢中の十村一部を能登島の向田に流す。

〔萬聞書〕

犬丸村與右衛門・嶋村善兵衛・御所村長次郎・下條村彌二郎・笠嶋新村八三郎・沼保村幸右衛門・淵上村源五郎・天正寺村七郎・福留村六郎右衛門・戸出村又八・山田村祐三郎・石佛村重右衛門・內嶋村小豐次・神田村小左衛門・酒井村一樂・神田村七郎右衛門・加納村兵衛・御所村源兵衛・馬場村喜右衛門・寺井村宗右衛門・稻舟村藤太・荻谷村七左衛門・中居村三郎兵衛・大門新町村七右衛門・折戸村源助・南森下村三郎右衛門・宮丸村次郎四郎・內嶋村孫作、都合廿八人之者、御樣子有之旨に而、牢揚り屋江被爲入候者文政二年三月廿日也。廿八人之內六人者牢死、御所村長次郎・下條村彌二郎・馬場村喜右衛門・稻舟村藤太・折戸村源助・內嶋村孫作也。御免に而出牢之人々は石佛村重右衛門・酒井村一樂・神田村七郎右衛門・淵上村源五郎四人之內、淵上

流刑者は沼保村彦四郎を加へ十九人なり

向田に流されたるもの外は尙こるのべ二人あるべし文政三年六月二十七日參照

は出牢之上早速病死也。殘り十八人者同年八月迄牢揚り屋に罷在候所、能州嶋之内江流刑被爲仰付候。其節之御先觸等左之通。

當十一日流刑八人嶋之地江被遣候條、別紙泊り付等相越候間、諸事不指支樣可相心得候、以上。

卯八月八日

小寺雅右衞門

中村逸角

加州津幡より能州二宮驛迄

宿々問屋

追而宿人馬請取申儀も有之べく候條、其心得可致候、以上。

覺

一、八人　流刑

一、二十人　指添足輕

內四人　小頭

一、二人　賃銀拂足輕

外八人　籐內召連途中幷旅宿に爲相詰候。

津幡書
十一日　高松泊
子浦書
十二日　武部泊
十三日　所口着
右之通御先觸也。
〔累年雜記〕
一、八月十一日流罪被仰付、御扶持人十村、能州嶋之地向田村に二間に十間計之小屋建十村を被遣候。

八月十四日。前田齊廣の子爲三郎金澤に生まる。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕
八月十四日申の中刻、於二之御丸御廣式御男子様御誕生、御生母は御馬廻組安田理右衛門娘御中﨟於里之方なり。御墓目御用は奥村助右衛門なり。
〔金龍公記史料〕
八月十四日公子生于金澤。稱爲三郎。生母安田六平女。

六平は理右衛門に同じ諱は忠義

八月十五日。前田齊廣諸士に男子を擧げたることを告ぐ。

〔横山氏日記〕

八月十五日　天氣吉

一、左之通今日以伊藤内膳、表方ゟ被仰出候に付、若年寄中表方席ゟ被呼立、月番演述有之候事。但、御家老中者表方に而承知に付別に演述無之候事。

御廣式懷孕之方、昨十四日夕平產、御男子樣御誕生被成候。思召有之、先達而被仰出者無之候。此段可相達旨御意に候事。

八月十八日。入牢中の十村九人を能登島の曲村に流す。

〔累年雜記〕

一、八月十八日平十村九人曲村へ被遣候。

八月廿二日。前田齊廣の子爲三郎の七夜の祝儀を行ふ。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

八月廿二日御七夜御祝有之、御名爲三郎殿と大脇六郎左衛門より奉指上。

〔横山氏日記〕

文政三年六月二十七日參照

八月廿二日　天氣吉
一、左之通表方江被仰出候事。
今般御出生之御男子様、御名爲三郎殿と奉稱、殿付に唱候様被仰出候。此段何茂江可申聞旨御意に候事。

八月廿六日。細工奉行、石川郡八幡村の竹林を檢閲せんことを稟請す。

〔諸事留牒〕
八月廿六日　曇
一、横山次郎兵衞申聞候は、八幡村竹近年中薄に相成、竹もほそ目に相見申候。文化六年迄は御細工奉行見分に罷越候處、其後相止み候に付、當時罷越不申候へども、右竹は外御用にも無之、御撫竿に相成候所、中には餘程細目なる分も御座候。依而今年は見分罷越申度奉存候。是迄は四・五日も逗留爲伐申候に付、會所銀も拜借仕候へども、今年は次郎兵衞儀罷越、曉天出立、夜を籠罷歸候はゞ、隨分一日懸に見分出來可仕候間、會所銀も借用不仕罷越申度奉存候。右之趣同役共示談之上相違候。尙出立候節は分而可申聞旨も申聞候事。

八月。能登島の流刑人を乘船せしむべからざることを告ぐ。

〔御郡典〕

能州島之内向田村江流刑　犬丸村與右衛門等　十人
右同所曲り村江流刑　山田村祐三郎等　九人
右之者共流刑被仰付候條、向後右浦江船着岸之刻、右之者共船に乘度旨相願候与も、堅爲乘申間敷候。惣而不見知者船に爲乘之間鋪候。
右之通得其意、組々船持共不及申に、水主之者迄も嚴重申渡、組切請紙面可出之候、以上。
卯八月　玉井權作
口郡十村中

八月。鰤網の漁獲を窃盜する者の制裁に就いて告ぐ。

〔留帳拔書〕

御領國浦々鰤網等下し置、鰤等致網入候節、同村幷近浦々より手傳之趣を以、網入いたし候鰤舟毎に盜取候樣之儀有之に付、相集候魚自ら洩散、網主より彼是申入候得共、是非を不論非法之致方有之、誠に海賊に似寄之躰承および、沙汰之限に候。尤可相糺候得共、暫致猶豫、品により追而可及詮議候。且是以後右に似寄候仕業有之候はゞ、具に及斷候樣申渡置候間、斷次第遂穿鑿、盜取候鰤代銀を以取揚、爲過怠六步口錢倍し、取主網主江可相渡候。家財賣拂候而も右價不足有之候はゞ、親類之者より可取立候。名前難相知者追而相顯候はゞ、役人

之越度に相成候間、都而之過怠役人より可取立候。尤鰤に不限、諸魚共盗取候者は右之振合に候間、夫々無違失様、諸役人等へ嚴敷可被申渡置候事。

己卯八月　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　産物方役所

九月五日。前田齊廣の子爲三郎歿す。

〔横山氏日記〕

九月五日　快晴、夜中より雨

一、爲三郎殿昨曉より御氣塞御滯被成候處、次第に御指重、被爲及御大切候段、爲承知靑地淸左衞門等より月番甲斐守方ゟ申來候由。依而追付御廣式ゟ罷出、爲三郎殿御機嫌相伺、且中將樣ゟも御機嫌相伺候旨。當病等之人々は、以紙面相伺候筈之由。今朝月番より御家老中・若年寄中・龍山・誠齋方ゟ、夫々以紙面演述有之候事。

一、爲三郎殿御儀昨曉より御滯被成候處、次第に御指重、今曉御卒去被成候旨、只今人見吉左衞門を以被仰出候段、九半時頃表方席に而各ゟ、月番甲斐演述有之候事。

九月七日。鳥構場の松枝を除かんとする時は山方役人の許可を得べきことを告ぐ。

〔御觸抜書〕

鳥構場之內松木枝下等之儀に付、加州御郡奉行より諸頭〻申談候旨に而、別紙指出候に付、寫一結二通爲御承知進之候、以上。

九月七日　　　　　　　　　　長　甲斐守

鳥構場之內挾竹等に相障申、松枝下之儀に付、委曲先達而御達申上候處、御聞屆に付、別紙之通諸頭〻申談候間、御同席等御面々〻茂御通達被下候様仕度奉存候、以上。

卯九月四日　　　　　　　　　　內藤十兵衛

　　　　　　　　　　　　　　　小寺雅右衛門

長甲斐守様

石川・河北兩御郡山々、御家中鳥構場之內、松枝茂り構難成箇所、松木枝下申付候處、近年山方等松木無數に相成候に付、御仕立林御仕法之趣有之、旁右枝下指留置候得共、詮議之趣有之、今般相改、場之內挾竹等に相障候松木小枝下申付候。依而右枝下之儀、場主願次第、山方役人指出爲致見分候上、無據分は可承屆候。併箇所に寄枝下指支候山方も有之候間、右枝下願有之度面々は、御郡所承り合可申事。

一、右鳥構場之內、家來等心得違之者有之躰に而、毎度松木等故障有之候。已來右松木に相

店張は店開なるべし

障、都而山荒候儀有之候はゞ、見合次第山方役人共幷村役人共等、急度及斷候樣、改而夫々申渡候。尤斷有之上、場主手前急度遂僉議、時宜に寄場取揚候事。

一、右鳥構場道印之躰に而、山入口より場之内迄、往來左右之松木に疵付、或は引場等之松木根元に火を焚、中には大木過半焼木に相成居候分有之、御締方において不輕儀に候。依而以來右躰之族無之樣、尤此上新たに右樣之族有之候はゞ、其筋に有之構場遂僉議、是又取揚候事。

右今般鳥構場之内松枝下仕法、前條之通相極候事。

己卯九月

九月八日。前田齊廣の子爲三郎の葬儀を執行す。

〔官私隨筆〕

爲三郎殿御遺骸、今晩六時之御供揃に而金谷御門御出、夫より堂形前通廣坂へ御上、御自分樣御門前より石引町通、天德院へ被爲入候。御通道辻々警固指出置、往來指留候。町家往來掃除之儀幷店張申に不及旨夫々直に申談候旨、人見吉左衞門演述に御座候。此段爲御心得申進候、以上。

九月八日　　長甲斐守

奥村助右衛門様

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

九月五日御卒去に付、同八日御葬式天徳院境内江御收り、御法號は月光院殿玄霜正海童子。

九月九日。足輕・坊主・小者の子弟及び町・在の者の學校に出席の手續を簡易にせることを通牒す。

〔官私隨筆〕

別紙寫定番頭へ申渡候に付、爲御承知進候條、御組へも御觸可被成候、以上。

九月九日

足輕・坊主・小者子弟共幷町・在之者、毎月廿八日講日に聽聞罷出申候。以前は右講日廿七日に而、町役人共等も人多に出座仕候様子之所、廿八日に相成候以後一向出座不仕候。廿八日は町會所式日に付、自ら町役人も出座不得仕哉、偶日は諸役所有之日故足輕等も出座不得仕哉と奉存候。其上右足輕等是迄講日に罷出申度者は、其頭・支配へ相達、頭等より私共へ相屆候上出座仕來候。右屆方等面倒に存、自ら出座不仕者も有之様子承知仕候間、以來講日廿九日に日を替、足輕・小者・坊主子弟、町・在之者講釋聽聞罷出度者は、誰組・支配居町所附名書小紙に記、平町人は裁許肝煎名も肩書に記、人々直々學校へ持參、私共へ相屆候へば屆方

も事輕に相成候故、輕き者出座も仕易可有御座哉と、私共詮議仕候付御達申上候。猶御詮議之上夫々被仰渡候樣仕度奉存候、以上。

八　月　　　　　　　　松原伊織

前田土佐守様

九月十三日。金澤川上新町の芝居座木戸の取締方を定め本日より再び興行せしむ。

〔川上芝居一件〕

木戸之定

一、町下代芝居中爲縮方、折々見廻る筈に候事。

一、町附足輕・改方足輕之分は、晝夜に不限、何時にても可相通事。

附り、公事場附足輕・御郡方足輕並年寄衆廻り方役人、芝居中は斷次第可相通事。

一、芝居懸り肝煎・組合頭、晝夜に不限可相通事。

附り、町年寄・横目肝煎、不時に爲見廻候儀可有之事。

一、關之內居住之者、病用に付醫者招き候節、斷次第可相通事。

右之外は一切帶刀人相通間敷候。風呂敷包たりとも、無心元品は改候上可相通事。

一、駕籠並笠籠相通間敷候。
但、病人等有之難致歩行者は、懸り肝煎・組合頭より斷を受可相通事。
一、早朝人顔不見分內は、くゞりより相通可申事。
一、見物人暮六時迄に出切候上、木戸〆切可申事。
右之通急度可相守者也。
卯九月
（朱書、此分板に書調番所之高に懸置可申事。
右犀川河上新町芝居小屋建改、九月十三日より始候に付、九月十二日に被仰渡候。）
〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕
是の年五月六日より川上芝居相始候處、芝居小屋不手廻し之由に而普請有之、今一遍結構に修理有之、此度より上方役者永續芝居興行被仰付也。小屋前通り十三間・奥行二十五間半、高場棧敷片側十三、うづら同斷、しきり坪數九々八十一なり。茶屋は左右向側三方に相建、其家作り美々敷、尤二階作りにして、不殘一間々々に提灯を釣り、淡雪・くつは・一力・葉櫻を初め、茶屋方十餘軒なり。入口二ヶ所有之、木戸守兩人充勤番致す。木戸之高に制札有之、此木戸之內惣而帶刀之人入べからずと有之。依而木戸之外茶屋に帶刀預り所有之、格別好み

之人は是ゟ帶刀預け參る者有之由なり。芝居小屋入口には町附足輕幷主付町肝煎等相詰、尤縮り方嚴重ゆゑ口論等曾而無之、上之御仕入芝居なれば尤左も有べき事なりと世上之咄也。同年九月十三日より重而芝居相始る。上方役者なり。

九月十九日。聖堂銀を借用せるものゝ返濟方法を改む。

〔官私隨筆〕

聖堂銀之儀に付會所奉行より觸出候別紙一結五通、爲御承知進候條、御組へも御觸可被成候、以上。

九月十九日　　　長　甲斐守

奥村助右衞門様

今一通のみを擧ぐ

〔官私隨筆〕

聖堂銀文化九年より同十三年迄御貸附之利足立、文化八年・同九年無利足三十ヶ年賦被仰付置候分ゟ打込、今年より無利足三十ヶ年賦被仰付候間、御格之通一紙證文相改取立可申事。

但、利足銀者當七月迄之分、御知行・御切米共取立可申候。

一、享和三年無利足被仰付候分、幷去暮御貸附之分は、是迄之通取立可申候事。

右之通被仰出候條、被得其意、借用之人々ゟ夫々可被申談候、以上。

卯九月

上坂平九郎
中村木工
淺加九之丞

會所御奉行衆中

九月二十日。昨今兩日江戸傳通院に於いて前田吉德夫人光現院の百回忌法會を執行す。

〔官私隨筆〕

當十九日・廿日光現院樣百回御忌に付、御法事於江戸傳通院御執行有之。御當地於如來寺も、御在國之事故廿日朝輕く讀經被仰付候事。

但右に付、於御當地鳴物不及遠慮候。廿日は御日柄に付十九日・廿日御鷹出候儀は勿論、年寄中等鷹出候儀遠慮仕候趣前々之通候事。

九月

〔横山氏日記〕

九月廿九日　晴る、晝より雨降

一、光現院樣百回御忌御法事、當月十九日・廿日於傳通院御首尾能相濟候段、江戸表より申

來候に付、於松之間二之間、年寄中・御家老中・若年寄中一列、以澤田九内恐悅申上候處、以淺加九之丞御意有之候事。

十月朔日。指扣の如き輕罰を受くる者といへども外部との交通を禁止すべきことを通牒す。

〔官私隨筆〕

別紙寫之通定番頭へ申渡候付、爲御承知進之候條、御組等頭之者へ御申聞、寄々申談候樣御申渡可被成候、以上。

十月朔日　　　　長甲斐守

奧村助右衛門樣

重き御咎被仰付置候人々には、尤有之間敷候へども、輕き御咎指扣等被仰付置候者之方へ、至而心易人々は竊に罷越逢候族も有之躰相聞、不心得之至に候。右躰心得違之儀無之樣、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配へも相達候樣可被申聞候事。

右之趣寄々一統可被申談候事。

卯十月

十月六日。綿打に他國製の弓弦を用ふるを許し、役銀を徵することを定む。

本年二月八日の條參照

〔御郡典〕

御領國國中綿打弓弦取縮主附、當町赤倉屋八郎兵衛江申渡、他國弦取扱不致樣可被申渡旨申達置候之處、御國製弦弱き旨に而、他國弦取扱之儀願出候ヶ所も有之に付、詮議之上、產物方年寄中江も相達、是以後綿打一人より年中六匁宛役銀取立、弓弦勝手次第取扱候儀承屆候條、此段夫々可被申渡、尤各手合々々において可被取立候。當分は半役取立、當十二月廿日切當役所江上納いたし、來辰年より本役銀取立、每歲十一月中上納いたし候樣、是亦可被申渡候、以上。

卯十月六日　產物方役所

有賀甚六郎殿

中村逸角殿

十月七日。前田齊廣病むを以て本年十二月頃まで在國するの願を許さる。

〔横山氏日記〕

九月十一日　天氣吉、夜中雨降

一、當春御參勤御時節御用捨、九月中御參府被成候之樣被仰出候付、當月御出府可被成處、先達而御屆之通、御病氣に付御出府難被成、尤無御油斷御療養御加被成候得共、御疝邪幷御氣塞之御症次第御增長、少も御快躰は相見え不申、迚御難症に而、當時之御樣子に而は中々長途之御旅行難被遊に付、何卒先十一・二月頃迄御在國御療養被成度、此段御願被成候。尤少茂被致御快氣候はゞ、早速御出府可被成旨、御使札御指出被成候。此段被仰聞置候之事。

〔宮私隨筆〕

九　月

御疝邪等爾々不被爲在、長途之御旅行難被成に付、何卒先十一・二月頃迄御在國御養生被成度旨、今度御老中方迄御使札御指出之處、當月七日御願之通御奉書相渡、昨日致到着候旨、以人見吉左衞門被仰出候付、爲御承知申進候、以上。

十月十四日　　　村井又兵衞

奥村助右衞門樣

〔三守御譜〕

當年御病氣に付、追々御願御參勤不被遊。
九月東覲せらるの處、御病の故を以て、先十二月頃迄國に在せられ保養せらるべき旨御願、許命あり。客歳今春東覲寛期の命あり。
〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕
是の年公御所勞に依て、御先例通り御願繼ぎ御參勤御用捨に相成なり。

十月八日。前田治脩夫人法梁院の逝去を發表す。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕
九月晦日江戶表梅之御殿に於て法梁院樣御卒去。御都合有之十月八日に御發有之。追て御內實九月晦日に御忌日御改之事に被仰出有之なり。十一月六日御葬式下谷廣德寺境內ゟ御收りなり。御法號は法梁院殿金岳妙剛大禪定尼と奉申なり。御年御五十六なり。
〔橫山氏日記〕
十月十四日　雨降
一、江戶表氏部方より早打御使、御小將組橫地虎十郎、當八日發足、御前樣より之早打御使、同御廣式御用人中嶋七郎儀同日發足、今朝六半時頃兩人共着。
法梁院樣當八日卯の中刻御逝去之旨申來候。依而月番より各方ゟ紙面被指越候得ども、最早

出席刻限に付、出席前到來不致方々茂有之、出席之上右之趣致承知、則表方に而御家老中右紙面披見、畢而若年寄中表方ゟ被呼立、右紙面披見被申談候。右に付於松之間二之間、年寄中・御家老中・若年寄中一列に而、澤田九内を以御機嫌相伺候處、何之御指障不被爲在旨、有澤才右衛門を以御意有之候事。

〔御年表〕

御室松平遠江守利道女、御名俊トシ。明和八年四月廿八日御緣組御內約、同年七月廿一日御緣組御願之通被仰出。安永七年正月八日於大聖寺御疱瘡。未御結納御祝儀不被爲濟候に付、御大小將御使者にて御見廻被仰遣。天明五年二月十一日御結納被進、同月十五日自大聖寺金澤御廣式。寬政五年七月御水痘。同年十二月十一日御名正姬と御改、同十一年四月四日金澤御發輿、江戶表へ御出府、同月廿八日御婚禮。寬政十一年五月六日正姬樣御婚禮御整之上は、御前樣と奉稱候儀申渡有之。

文政二年十月八日東都御屋形於梅御殿御卒去。文政二年十二月御忌日御振替九月晦日と改る。法梁院殿金岳妙剛大禪定尼、江戶廣德寺。

〔三守御譜〕

小君正姬君明和元年十一月大正持にて御誕生。御母は加藤甚五大夫組外並女。享和三年四月十

御室は前田治脩の室なり

八日御四十之賀御祝。公薨じ玉ふに付、文化七年正月廿一日薙髪法梁院様と被號、文政二年十月八日薨ぜらる。追て御忌日九月廿九日に改めらる。御年五十六。法號法梁院殿金岳妙剛大姉と申奉る。十一月六日下谷廣德寺に葬り奉る。

十月十四日。金澤に於いて前田治脩夫人の逝去したることを告ぐ。

〔御觸拔書〕

法梁院様御氣色御滯被成候處、段々御指重り、不被爲叶御療養、當八日御逝去被成候段申來候。依之諸殺生・普請・鳴物等可有遠慮候。日數之儀は追而可申渡候。

一、右に付頭分以上之面々者、爲伺御機嫌明十五日可有登城候、幼少・病氣等之人々者、御用番宅迄以使者可申越候。

右之通得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配江も相達候様可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十月十四日　　村井又兵衛

十月十六日。前田治脩夫人逝去したるを以て幕府の發したる弔慰の奉書

金澤に着す。

〔横山氏日記〕

十月十六日

一、左之御奉書到來、於表方席年寄中・御家老中拜見、相濟若年寄中表方席に被呼立拜見、若年寄は右御禮月番引請被申上候事。

養母死去之段及上聞候處、可爲愁傷与被思召候。此由可相達旨、依御意如此候、恐々謹言。

十月九日

大久保加賀守

水野出羽守

阿部備中守

青山下野守

土井大炊守

松平加賀守殿

十月二十日。諸村萬雜の取扱に關する不正を詮議すべきこと等を命ず。

〔留帳拔書〕

村々萬雜等不正之儀相聞え候に付、表向詮議方被仰出、先達而改作所より申渡有之筈に候所、何与歟相泥候儀も有之候哉、果敢取劣躰に候。元來村方不正之雜用相嵩候而は、下々無謂難儀之筋に付、是迄不宜仕癖相省候得ば、畢竟村々成立之ため第一之儀に候條、其筋々裁許之十村別而無油斷相心得可申候。殊に是迄不宜趣可有之候得共、其儀は强而御穿鑿在御座間敷、是以後嚴重相改候樣、取仕切可遂詮議段被仰出候間、格別之御趣意可奉恐服候。尤今般萬雜しらべ之儀、改作方に而詮議治定之上は、猶更以來如此相改申旨、拙者共手合ねも可申聞候。且又見計返上米等之儀、其年作方善惡により御手當又は御取扱之爲に候得共、幾重にも詮議方可有之處、毎歳指定り候樣に仕來候儀は、不穿鑿之至に候條、重々可遂詮議旨被仰出候間、拙者共手合にも、右に類し候返納方或は延御拂米等不時願方之儀も、其心得にて精誠遂詮議、實意を以末々會得宜樣取扱可申儀專要に候事。

右之趣今般夫々可申渡旨被仰出候に付、其方共心得等之儀入念申渡置候條、得其意、村々末々迄得与申諭、以後不正之族無之樣急度相改可申候。且村萬雜しらべ方之儀、此上にも及延引候はゞ、其筋役人可爲等閑旨被仰出候間、裁許は勿論、村役人共等無油斷嚴重相心得可申候、以上。

卯十月廿日　　　　中村逸角

能州四郡御扶持人・十村中

十月廿二日。奧村助右衞門家臣の邸地、學校地內に建築せらるべき殿閣に接近するを以て之を献納せんことを出願す。

〔官私隨筆〕

十月廿二日

一、今度學校之所に御造營有之候所、自分居屋敷續元寶幢寺坂高家中程近く候付、家來共爲立退候而可然樣之御樣子も有之候はゞ、爲知有之樣に仕度旨、先達而土州へ申達置候處、昨日自分宅へ被相越被申聞候樣有之。依之今日左之覺書以木村勘六達之。自筆也。

今般學校之御地面に御建物被仰付候御樣子に御座候所、私居屋敷續家中、右御地面与甚近く、若不敬之儀抔有之候而は奉恐入儀に御座候間、居住仕候家來共爲立退、右地面指上申度存候。依而先及御內談申候。御指圖次第表向相願可申候事。

右覺書は、先達而前田三內居屋敷指上候節、勢州より被相達候覺書左之通之由に而、土州被相渡候付、是を以認候也。

今般學校之御地面へ御建物被仰付候得者、末家前田三內儀居屋敷、右御地面と甚程近く、若

不敬之儀抔有之候而は奉恐入候儀に御座候。三內家者火消役被仰付候而も、蓮池御庭幷學校之內見越候付、櫓も揚不申、別而今般之御樣子に而は甚程近く相成申儀。且是迄學校へ御出之節は、同人方へ案內有之に付、諸事爲相愼置候族に御座候間、外地面へ屋敷替被仰付候樣に仕度儀奉存候事。

〔官私隨筆〕

拙者居屋敷續家中之內北之方、家來之者差置候地面、幷右續空地共、今般差上候付、家等取拂候間、右地面御請取候樣致度候、以上。

己卯十一月十六日　　奧村助右衞門

神田一平殿

橫山義六郎殿

奧村彌左衞門殿

村田九郎右衞門殿

津田木工殿

〔官私隨筆〕

覺

一、六　百　目　　三上庄左衛門
一、二百五十目宛　　瀨　尾　平　進
　　　　　　　　　千　田　庄　太　夫
〆一貫百目　文丁銀
右拙者居屋敷續家中之地面、今般御用に指上、居住之家來右庄左衛門等爲立退候處、御定之通引料銀、右之者共へ被下候段被仰出候。依而庄左衛門等名前之切手を以爲受取候間、渡方不差支樣夫々被仰渡候樣致度候、以上。
十二月廿七日　　奥村助右衛門
長　甲　斐　守樣
前田伊勢守樣
前田土佐守樣
村井又兵衛樣

十月。金澤河原町鶴來屋次郞吉等越中高岡製の傘を一手販賣する爲その仕法書を提出す。
〔大鋸文書〕

高岡傘等賣物仕法書上申帳

河原町 鶴來屋次郎吉
御門前町 山上屋吉兵衛
同 町 吉谷屋茂兵衛

高岡表にて出來之傘、御當地江持來り、小間物屋抔買入候分、近年引方不宜由に而、時節により現銀賣買指支、懸賣同樣に相成、其振賣中小間物屋江預罷歸候儀有之、賣捌人足數日逗留止宿、并貸送り申傘代銀日合懸り、旁引合兼候に付、今度彼地之傘商人重立候加納屋忠兵衛示談之上、已來振賣を指止、御當地に而現銀に買入賣捌可仕者有之候者、直段是迄より一割方下直に、傘出來吟味仕、一集に指越申度旨則私共江及内談候に付、出來方等之儀委曲承糺、以來右傘私共方江引請賣捌申度奉願候處、今般御聞届に付仕法左に申上候。

一、高岡傘是迄直段、上之分二百三十文、中百八十文、下百五十文、其外小傘者右に準じ直段相立候分、已後一割方下直に仕指越可申に付、代銀は傘指越次第相渡、尤私共よりおろし方右に準じ直段引下げ申候事。

一、右傘買入所は、私共之內吉谷屋茂兵衛方手寄も宜候に付、茂兵衛方江悉皆引請、朝每に青物辻邊に而賣弘申候事。

一、小間物屋等ゟおろし賣に仕外、小賣は一切仕間敷事。

一、小間物屋等に唯今迄買入申傘所持之分、賣捌に指障り申儀茂出來可仕候間、格別仕入仕商人共ゟ私共より渡合、賣捌不指支様品能示談可仕候事。

一、高岡傘迄買入申与も、年中大底三萬本計も可有之、并地出來之分茂買入申儀に而、何程之數量に可罷成哉難計に付、仕入銀拜借奉願候處、御調達銀之内十貫目御貸渡被下旨被仰渡、難有奉存候。右御銀返上方、御利足一ヶ月百目に付一歩之御利足を以、當暮より毎歳七月・十二月兩度に而利足上納仕、御元銀者當年より五ヶ年之間置居に而、五ヶ年目一時返上可仕候。

一、右に付爲御冥加御用傘、來辰年より毎歳五十本宛指上可申候。上げ方之儀は被仰渡次第差上可申候。

一、高岡表加納屋忠兵衛初同商賣人は、右仕法承知之筈に候得共、以來金澤ゟ指出候分、吉谷屋茂兵衛方迄指越、外小間物屋等ゟ持參不仕、且私共方ゟ指越候傘員數、指紙面相添指越候様、猶更高岡表右職人共ゟ被仰渡書可被下候様奉願候。

一、賣買方算用之儀、月々に仕立指引相極置、時々御役人之見屆請申度奉存候。

一、右直段引下げ候儀は、彼地より罷越候人足共賣捌方に數日逗留之雜费、暨懸賣之日合等

を除、下直に相成申儀に御座候。元來高岡表之傘職人は、先仕入候竹・紙・木地・糸細工手間等悉皆省略、利潤薄數多仕込、惣高に而勘定を立申振合に而、上中下与取寄見分仕候處、傘下品に手を拔候樣之儀も無御座、御當地出來之分も細工方に品違候儀無之、右竹等品々買入物に吟味仕、細工に得手練、多數出來爲引合申道理に御座候。御當地傘商賣人八十軒計、其外內職に仕賣出申傘之仕入、幷手練之業不行屆儀有之、數も出來不仕、剩高直に成可申哉。猶更高岡表之職方之樣子、同商賣人幷惣弟子共江も爲見習、出情爲致可申奉存候。

一、地傘內職之分等も、私共方江持參次第買入、猶更下直に出來可申渡と奉存候。

一、高岡傘今般私共引請買入申儀に候間、振賣傘与は一々撰立吟味可仕候事。

右高岡傘賣買方等仕法書上申候、以上。

文政二年十月

傘商賣人　河原町　鶴來屋次郎吉

同　御門前町　山上屋吉兵衛

同　同　吉谷屋茂兵衛

十一月四日。鳳至郡中居村の孫左衛門に內浦產の眞珠取締を許す。

〔御郡典〕

各支配所中居村孫左衛門儀、能州内浦に而取揚候眞珠取締致度旨相願候に付、産物方主附十村中居村三郎兵衛等より願書付指出候に付、遂詮議、産物方年寄中江も相達、承届候條、其段被申渡、仕法帳指出候様可被申渡候。且又爲冥加、毎歳八月中上納之儀も承届候條、當年分は當十二月中致上納候様可申渡候、以上。

十一月四日　　　　　　　　　　産物方役所

有賀甚六郎殿

中村逸角殿

十一月十二日。曩に御召米としたる家中諸士の收納米に對し本勘定を遂ぐべきことを告ぐ。

〔官私隨筆〕

當七月御家中之人々收納米之內、直御召米被仰付、代銀地米四十五匁、遠所米四十目圖を以相渡置候。右直段箇所に寄四十目に不滿分過銀被下切、四十目より高直之箇所は不足銀相渡候樣被仰出候。依而其節町方御召米被仰付候箇所々々直段を以、本勘指引相極候付、則直段書幷草案帳面も相進候條、當廿日迄可被差出候。

右之趣被得其意、組・支配之人々へも可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配へも申

談候樣御申渡、尤同役中可有御傳達候、以上。

十一月十二日　　　　御算用場

十二月九日。婚姻を愼重にし濫に離緣せざるべきの令を通牒す。

〔官私隨筆〕

別紙定番頭へ相渡、組・支配有之人々へ申談候樣申渡候付、寫一通爲御承知進之候、以上。

十二月九日　　　　前田土佐守

奧村助右衞門樣

定番頭江

御家中之人々緣組願之通被仰出候上、不筋之離緣等候者多相聞候付、頭・支配之人々急度心付可申旨、先年被仰出置候處、近年離緣之斷多有之候。尤無據分も可有之候へども、中には不筋之儀も有之躰、且未引請内離緣之儀等は、畢竟熟談不行届故之儀と相聞候間、以來頭方急度心得方も可有之儀に候。勿論頭・支配人手前においても、心得も可有之儀、等閑之儀は有之間敷候へども、右被仰出有之所、近年別而多如何に付、猶更申達候條、彌可被相心得候事。

卯十二月

十二月十四日。前田齊廣の女芳姬名を恒姬と改む。

〔横山氏日記〕

十二月十四日　晴、晝より快晴

一　左之通今日表方ゟ被仰出、若年寄中ゟ演述有之樣、且出席無之人々竪龍山・誠齋方ゟも可申遣旨、月番演述に付、則夫々主附より及演述候事。

但御家老中は表方に而承知有之。

芳姬樣御事　恒姬樣与御改。

十二月廿六日。前田齊廣の女忠姬及び次姬金澤に生まる。

〔官私隨筆〕

十二月廿六日

一、今夕求馬方へ罷越居候所、從御用番紙面到來、今曉御女子樣御兩方御出生被成候旨被仰出候條、罷出御祝詞可申上旨申來、則求馬方より直に罷出候處、葉目被仰付候由、以鬮屋中務被仰出、委曲別記に留置候事。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

十二月廿六日於二之御丸御廣式、御姬樣御誕生なり。御生母は直姬樣御產婦之方なり。同日

本文奥村榮實の事に係る

御同腹に御姫樣御誕生、御同日御出生なり。

〔金龍公記史料〕

十二月廿六日。公女生于金澤。名壽々姫。初忠姫。同日公女次姫亦生。雙生也。生母小野木氏。卽榮操院。

十二月廿八日。能美郡若杉に石燒の陶器を產するを以て他國より輸入することを禁ず。

〔御郡典〕

加州能美郡於若杉村に燒立候石燒陶器、相應に出來いたし候に付、來春より他國入石燒陶器都而指留、若杉燒を以御國用相辨候趣、詮議之上產物方年寄中ゟ相達、被承屆候條、被得其意、早速夫々可被申渡候。仍而以後心得違之者有之、他國燒陶器船積等を以取扱候之儀相顯候はゞ、其品取揚咎可申付候。此段兼而可被申渡置候、以上。

十二月廿八日　　　產物方役所

有賀甚六郎殿

中村逸角殿

十二月。町會所に於いて銀札を發行することを告ぐ。

〔國事雑抄〕

今般御領國爲融通、於町會所銀子手形印紙被仰付、當町松任屋清兵衛・宮津屋七左衛門手形主付申付候條、諸上納を始、米方並諸商賣人無滯可致通用候。

一、正銀入用之節、手形引替之儀は、偶日町會所右手形主付於役所、朝五半時より八時迄引替可相渡候。

一、手形銀高之儀は左之通。

五百目印紙　三百目印紙　二百目印紙
百目印紙　五十目印紙　三十目印紙
二十目印紙　十匁印紙

右之通町中一統可被申渡候事。

卯十二月

是歳。越中高岡瑞龍寺の山門を再建す。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

是の年高岡瑞龍寺山門御再建被仰付、御成就なり。御大工山上善右衛門、棟梁幸右衛門。大

工は都而金澤より參り御用相勤なり。

文政三年

正月朔日。前田齊廣病むを以て年頭の禮を廢す。

〔横山氏日記〕

正月元日　曇

一、御前御疝邪等御難儀被遊候に付、御禮不被爲請旨、舊臘書立之通に付、年寄中等五時過より段々登城之事。

一、松之間二之間において、年寄中・御家老中・若年寄中・誠齋一列に而、御近習頭遠藤數馬を以、年始御祝詞申上候處、追付同人を以御意有之候事。

一、頭分以上登城、年寄中ゟ謁、四半時過退出之事。

正月七日。前田齊廣本年一・二月の交まで參覲延期の願を許されたることを告ぐ。

〔横山氏日記〕

正月八日　天氣好

一、昨日左之通吉左衞門を以被仰出候。
中將樣御病氣に付、先十一二月迄御出府御延引之儀御願被成、種々御療養被成候得共、御疝邪幷御氣塞之御症、寒氣に向彌增不御宜、坦長途之御旅行難被成候付、猶更來二・三月頃迄御在國御療養被成度、尤少茂御快候者、早速御出府可被成旨、御願書付御指出被成候處、舊臘廿六日御願之通以御付札被仰出下、此段被仰聞候事。

正月十二日。大聖寺侯前田利之登營して本年三月以降時々の出願により前田齊廣の參覲を延期すべき幕命を受く。

〔御家老方御隱密之留〕

正月十三日
一昨十一日水野殿江備後守樣御家來被爲呼、昨十二日御登城前爲御逢備後守樣御出被成候樣御達御座候間、則昨朝備後守樣御出被成候處、御逢之上出羽守殿仰には、御本家御病氣に付御參勤御用捨之儀、段々及評議候處、御新例之儀、御三家方にも御例無之甚六ヶ敷、元御參勤之儀者將軍家御直約之御儀に付、不輕御規定に候得共、御家柄之儀、且は御病氣之躰無御據御筋に茂候間、格別之思召を以別紙書取之通被仰出候間、御安心御保養可被成、參勤に無心置与申儀は誠に不輕御儀、御格別之御儀候條、此段譯而加賀守殿江可被仰遣との仰に付、

備後守様御答には、御書取之趣申遣候はゞ誠難有可奉存、且は是迄段々之御深切之御取扱共無哉忝がり可申、先拙者において段々之御世話御深切之趣千萬忝仕合、本家々來之者共へも爲申聞候はゞ誠難有がり可申、猶又追而御禮茂可被仰上与被仰述候處、重而出羽守殿仰には、先達而も加賀守殿御隱居可被成との御底意之趣被仰聞、御尤之儀、御志は御奇特之至、尤御趣意は及上聞候故、今般格別に被仰出候間、勝千代殿御出府迄は御安心緩々御加養可被成、勝千代殿御出府之上者御心願之通御隱居茂相濟可申幾重にも御取持可仕との仰付、誠重々御深切之至厚忝仕合、具に申遣候はゞ忝がり安心茂可仕、猶又隱居相濟候迄は追々相願之儀も可有御座、何分に茂宜与被仰述候處、出羽守殿仰には、無御腹藏可被仰聞、幾重に茂御相談致可申旨被仰聞候段、御歸殿之上私共御居間江被爲召、御直々御意被成、尤御直書を以被仰上候得共、私共よりも此段可申上旨被仰出候。

一、正月十三日御渡之御書取寫

病氣に付急速難致本復病症之趣に候間、先例より願繼方相延し、當三月より五・六ヶ月毎參府延之儀御用捨被相願、參勤無心置保養可有之事。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

正月十一日、中將樣御所勞速に快氣を得られ難き御病症之趣に依て、御先例により御願繼を

十三日は十二日なるべし

十一日は十二日なるべし

差延られ、當三月より五・六月毎に御參府延願出候處、參勤に心置なく國許に於て御保養有るべしと台命有り。此後時々御願繼ぎ有之なり。

正月十四日。前田齊廣老臣に風炮を觀覽せしむ。

〔諸事留牒〕

正月十四日　小雪

一、以九里覺右衞門、玄蕃迄被仰出候は、風砲と申物御取寄被遊候間、望み候はゞ拜見可被仰付旨に而、追付御居間書院御緣頰において拜見、則覺右衞門風を込徒放いたし爲見候事。

御禮同人迄申述候事。

右風を込候へば、二十放計は打て申由。玉目は一匁五分、五六分之板は鐵炮之通に打拔候由之事。右は阿蘭陀より渡り候而、公方樣に而御留に相成可申由。依御留に不相成以前に御取寄被遊候由之事。

正月二十日。前田齊廣新造の殿閣を蓮池上の御住居と稱せしむ。

〔御親翰留〕

今般申付候蓮池上之住居、當時名目蓮池上之御殿御造營と相唱候。尤此儀者先達而御手前より伺被申、共通申出候得共、猶又相考候所、右住居事輕に申付候主意之處、一統御殿御造營

と相唱候而者少耳立、事重に相聞候間、以後蓮池上之御住居御普請与相唱可然候條、此段主附頭初可被申談候。

右御親翰辰正月廿日土佐守ゟ被成下候處、應御請差上候事。

正月廿一日。天德院に於ける前田氏の新靈堂成り遷座の儀を行ふ。

〔官私隨筆〕

正月廿二日

一、天德院新御靈堂出來之所、昨日御遷座相濟候由に而、御備之御菓子一包、幷御靈堂御位牌御列位書一通、使僧を以被差越之。御列位書左之通。

慈恩殿御位牌御列位

松雲院殿　　天德院殿　　天珠院殿

新靈德殿御位牌御列位

大應院殿　　陽廣院殿　　觀樹院殿

以　上

天　德　院

二月八日。能美郡若杉に土燒の陶器をも產するを以て他國品の輸入を禁

文政二年十二月廿八日の條參照

ず。

〔國事雜抄〕

加州能美郡於若杉村燒立候陶器、相應に出來、御國用相辨候に付、石燒陶器他國入指留候儀、去暮申達候通に候。然處土燒之分も、右石燒同樣致出來候に付、是又詮議之上產物方年寄中江相達候。土燒大瓶之外都て他國入指留候條、去暮石燒之分差留候振を以、一統不相洩樣夫々可被申渡候。若是以後心得違之者有之、船積等を以取扱候儀相顯候者、其品取揚咎可申付候。此段兼て可被申渡候、以上。

二月八日　　產物方役所

二月十四日。前田齊泰初めて馬術・讀書を學ぶ。

〔溫敬公記史料〕

文政三年二月十四日始學馬術讀書。明石數右衛門爲馬術師範。曾田左助爲素讀師。市川三亥爲習字師範。

二月十五日。前田治脩夫人法梁院の遺物を老臣等に頒つ。

〔御在國諸事覺書略記〕

二月十六日

一、法梁院様御遺物之御道具、年寄中等被下之候旨、大村武次郎等より舊臘十八日之狀先達而到來。御品物は昨日到來之由に而、各宅江指越候付及返書。右御禮中將様江明日各出席之上可申上候。當病に而難罷出人々は、以紙面申上候筈之旨、月番より演述有之。

〔横山氏日記〕

二月十七日

一、法梁院様御遺物之御品被下御禮、於松之間二之間年寄中・御家老中・若年寄中・誠齋一列に而、坂井要人を以申上候事。

一、御品物左之通之事。

御懸物　古今集	長　甲斐守
御懸物　俊成卿九十賀記	前田伊勢守
御懸物　唐かね御香爐	本多安房守
御懸物　伊勢物語	前田土佐守
御懸物　建盞御水指一箱	奥村助右衛門
塩燒文章　御菓子入	村井又兵衛

御懸物　御硯箱　横山求馬
御懸物　建盞御天目　奥村内膳
御懸物　御花生　村井又六
御丁子釜公家衆寄合書百人一首　前田近江守
三十六歌仙御手鑑葵唐草御花生　玄蕃
御硯箱　詠歌大概　藏人
御懸物　廣嶋御花生　織江
三十六歌仙御手鑑瀬戸物御花生　中務
御懸物　御香盒　修理
御懸物　瀬戸物御花生　內記
伊勢物語　御硯蓋　權佐
御懸物　御小廣蓋　掃部
曾我物語　御小蓋　市三郎
御懸物　蛙御手あぶり　龍山
御懸物　唐かね御花生　誠齋

二月廿四日。前田齊廣武具土藏の增築を命ず。

〔諸事留牒〕

二月廿四日　曇

一、左之通此間闕屋中務を以主付より伺之處、伺之通被仰出。

御武具納置候御土藏、寶暦御類燒以前は都合八筋御座候處、當時は四筋ならで無御座候。然處御道具次第に相增、風抜も不宜、自ら損物多、御不益之趣に付、今一筋新出來被仰付候樣仕度旨、每度御武具奉行曁御細工奉行よりも申聞候。御道具追々相損候ては、被仰付候詮も無之、御不益之儀に付、今一筋被仰付候はゞ可然、御入用之儀、鹽硝御拂代銀之内を以相辨可申旨等、去夏奉伺候處、御土藏一筋出來御入用相しらべ可申上旨被仰出、則御作事奉行ゟ申渡遂僉議候處、二十貫目計相懸候旨申聞候。且場所之儀は、御武具奉行役所後通り餘程空地御座候。此所ゟ被仰付候得ば、北請に而第一風抜宜、濕氣も無御座、御道具之爲に宜候間、此所に被仰付候樣仕度旨御武具奉行申聞候に付、御城代方ゟも及示談候處、存寄無御座旨に付、右等之趣重而達御聽候處、當春に至可被仰付、其節所等之儀も猶又相伺之樣被仰出置候。依之彌右之通可被仰付哉。此節より取かゝり候得ば、長日之時分に候間はか取可申候。御入用之儀は鹽硝御拂代之内、去年御次ゟ指上候殘銀を以相辨可申旨奉存候。右之趣奉伺候。則

去年入御覽候御作事所圖書幷繪圖、且又御武具奉行役所後通繪圖共、重而奉指上候、以上。

二月廿二日　　　　　　　　権　佐

三月二日。御郡方の者の公事出入及び他國旅行等の儀に就きて令す。

〔留帳抜書〕

近來支配御郡中、公事出入等之儀に付、其手筋を離れ脇之口申込抔いたし候族多有之。就中心得違之者は、賄賂ヶ間敷儀茂有之躰。且郡方役人を相望候者、或は下々願事等茂前段同様に申込之便宜を求め、色々取組申儀も有之樣子に相聞え候。右之通、脇々より之申込に依而事整ひ可申樣に存居候而は、次第に人氣騷々敷相成、自然与姦邪之徒等其折を見込、事善惡に付色々謀計を構、無謂取沙汰等を以人氣を損ひ候儀、御郡方第一之憂に候。尤右躰姦曲之次第相聞候者は、速に召出追々可遂吟味候。元來右樣之不屆者致出來、不正之取組致流布候儀は、御郡之者一統心得方不宜、人情輕薄に相成候故与被存候。いづれにも其道に不相當儀を以、一端之辨利宜敷も有之共、後を遂不申儀に而、畢竟其者終身之害与相成譯に候條、是等之趣末々迄一統不相洩樣得与申諭、人々篤實之心躰相勵候樣何分心懸可申候。

一、御郡之者賣買方或は伊勢參宮等に他國ゟ罷越候節、夫々及屆、上口・下口御關所等通り切手致持參、尤歸村之限月無相違可罷歸候。女之儀は他國ゟ罷越候儀難相成趣、是迄承知之通

りに候。然處下々難澁之者共、外稼も致兼、乞食同様に相成、御領國中致徘徊、其末々より直に他國江罷越煩故障等有之、先々より夫々申來、彼是御上之御難題に相成候族有之、不屆之至りに候。是等も畢竟村役人等勢子方も不行屆、且は親類之見繼方も深切からず故、居在所を立出、中に者無據右様之仕業に至り申者茂可有之哉。左候而は歎ヶ敷儀に相聞え候。尤先々において故障等有之候得ば、第一御外邊向御難題之儀、曁所方一統面倒之筋に候條、親類は勿論、常々組合申談、不賴之者共出來不致様有之度事に候。

右之趣此度譯而申渡候條、可得其意候。御郡中末々迄仁厚之風俗押移候儀は、御政要之事に候間、銘々身分を初、幾重にも心懸、輕き者共會得致易き様時々申諭、無由斷可有裁許候、以上。

辰三月二日　有賀甚六郎

中村逸角

能州四郡御扶持人・十村中・新田裁許中

山廻り中同列中・無役御扶持人中

三月六日。曩に仕法調達銀を上納せる町・在の者に銀子手形を貸附すべきことを告ぐ。

御領國御仕法御調達銀就被仰付候、今般爲融通、右御仕法銀之內を以、當町手形主付松任屋清兵衞・富津屋七左衞門名前を以手形出來に付、貸渡方左之通手形相渡候。日限等之儀は追而可申談候。

一、去暮三州町・在之者共より、當り之通御仕法銀指上候ヶ所、幷依願惣銀高之三の一或は四歩・五歩割合減方を以指上候銀高に應じ、別紙割合を以貸渡候事。

一、手形引替銀者當町會所ゟ相渡候に付、偶日每に町會所ゟ相向候得ば、引替銀相渡候事。

一、貸渡候手形銀高百目に付、一ヶ月一匁二分宛之利足付を以貸渡、利足は每歲七月・十二月當場ゟ取立候事。

一、手形之銀高は百目・五十目・三十目・二十目・十匁・五匁・四匁・三匁・二匁・一匁・五分・三分与調有之候。右手形を以諸上納指支不申候條、上納之節は手形裏に上げ人名印相記可申事。

一、右手形を以諸品賣買等、尤無泥取扱候樣可被申渡候。且正銀引替、當町會所迄に而は遠路之者不辨に候はゞ、其所之身元相應之者詮議有之、其者より先引替相渡置、手形銀高にも相成正銀入用之節は、當町會所ゟ相向引替候樣可被申渡候事。

右之通に候條、各支配所において夫々被遂詮議、相望候者有之候はゞ、當月廿日迄に有無可

〔郡方御觸〕

被申聞候。尤以後迄も相願候得ば追々詮議之上貸渡候條、此段も可被申渡候、以上。

三月六日　　御算用場

有賀甚六郎殿

中村逸角殿

別紙寫之通申來候條、得其意、夫々申渡、相望候者有之候はゞ遂詮議、有無之儀早速可申聞候、以上。

有賀甚六郎

能州口郡御扶持人中・十村中・新田裁許中・山廻中

三月八日。前田齊廣參覲を本年八・九月の交に延期することを許さる。

〔横山氏日記〕

三月十七日　雨降

一、中將樣御病氣に付、御願此節迄御在國被加御療養候へ共、御疝邪並御氣塞之御症御治し不被成、御快氣之躰不被爲在、迚長途之御旅行難被成に付、猶又八・九月頃迄御參府御用捨之儀、當月七日御用番阿部備中守殿江御願書御差出被成候處、翌八日御奉札を以、御願之通被仰出候。此段被仰聞候事。

三月十二日。鑑札を所有せざる者の烟草取捌を嚴禁せしむ。

〔御郡典〕

前々は能・越ゟ越後より多葉粉入込候得共、近來加州鶴來烟草多入込、其上切烟草之分は認樣に而調理方紛敷候に付、文化十年より多葉粉取扱候賣人幷切屋共ゟ、木札相渡爲賣買來候。然る處札不致所持致賣買候者共も多有之、縮方不行屆之段口錢取立方主付、當町割出屋次平等より及斷に候。右之通猥に相成候而は、餘品之縮方にも指障り、口錢取立方も不行屆候條、是以後木札不致所持者共、多葉粉取扱堅く不相成趣、改而一統ゟ嚴重可被申渡候。仍而以後無札之者見付候得ば、次平等下役之者共より相咎、斷出候筈に候條、此段も可被申渡置候、以上。

三月十二日　　産物方役所

有賀甚六郎殿

中村逸角殿

三月十四日。狩獵者の獲たる鹿皮は悉く河北郡淺野村の革多に賣拂ふべきことを命ず。

〔留帳拔書〕

覺

一、一貫文　男鹿

一、五百文　女鹿

右之通り大抵定直段にいたし、狩人共より買入度旨願出候間、承届置候條、狩捕鹿皮不殘淺野皮多共江賣渡候樣可申渡候。無左而は御細工所御用皮指支候間、嚴重に取縮有之候樣にと存候。若右御用皮を申立、押買等いたし候儀有之候はゞ、早速相斷候樣可被申渡。其內狩人狩捕候皮、御領國皮多之內何程買入申度申聞候處、淺野皮多何程に買入可申旨申聞、何程之損分に相成候与申儀有之候はゞ、其段茂申聞候樣是亦可被申渡候。右之通申渡候上、隱賣いたし候はゞ其皮取揚候樣申渡置候間、此段可被申渡候、以上。

三月十四日　　產物方役所

有賀甚六郞殿

中村逸角殿

三月廿三日。前田齊廣、金澤卯辰・石坂兩所に茶屋女を許さんとすることを告げしむ。

〔御親翰帳之内書抜〕

三月廿三日

一、女出合宿所々に有之、當時に而は九・十ヶ町許も相増候躰に候。ヶ様有之候而は、御縮方も相立不申候。仍之卯辰・石坂兩處に被仰付、尤遊女与無之、水茶屋女与歟或はめし盛与歟申名目に而被仰付、且去々年芝居被仰付候節被仰出候通、帶刀之者罷越候儀不相成旨等御勝手方より伺有之。伺之通被仰出候に付、此段爲承知被仰聞候旨、吉左衛門を以被仰出候事。

四月朔日。前田齊廣、世嗣齊泰の敎養の任に當る者の心得を諭す。

〔藤懸頼善手記〕

御親翰拜寫

勝千代事、近々に者表住居に相成候儀、別而作法等正敷成立不申而者不叶儀。文武等無油斷稽古無之而者不相成事。いまだ幼少之儀、其身存立出情之心も無之もの故、別而附添罷在候人々心得有之、文武之稽古に進み候樣に相心懸け可申。此方儀當時保養中に而、參勤茂御用捨奉願罷在候身分故、甚所行柔弱至極、起寢共婦人之手に無之而者不安心之族。夫故三時之食茂奥に而給、湯あびも婦人之手に無之而者不安心故、湯も奥に而つかひ、彼是甚柔弱至極に而、其上武道茂文道も打捨保養のみに懸、平日所行とても或は草花幷鳥抔のみ慰にいたし、

たまさか能などいたし候計に而、誠に取にたらざる所行に而、是等を萬一も勝千代、ケ様之ものと心得候而者志之相違に候間、當時は此方心願も有之身分、殊に保養中之儀、旁少し心有ていたし罷在候事に候得者、是を宜き事と心得候而者甚以相違之事に候間、誠に此方所行は心願成就迄はわけもなき所行に候間、此段を呉々も勝千代會得之成やすき樣に、日々にも可申聞候。殊に當時奥取次なども奥江通、醫者なども毎晩伽に出候事など、是等も當時保養中ゆゑ之事に候間、一圓見習には難相成事に候條、是等之所得と寄々咄に可申聞候。此方部屋住に而北之居宅に罷在候節、日々武藝等致出情候節之儀相咄可申候。且又家督之上日々居間書院等江出候節之儀など、寄々咄可申候。當時之所行は誠に柔弱不埒に候間、是等は且而少も眞似無之樣時々可申入候。少し存寄有之、心願成就迄者如斯候間、此處其方心中に納め置、此方當時之所行を勝千代見習不申樣呉々教可申候。近々引移に付此段其方心得に申聞置候。

右は文政三年四月朔日關屋中務を以御渡、藤田平兵衞・改田主馬奉拜戴候。

御幼年に被爲在候に付、御成立等心得第一之御時節之儀者、各初聊油斷無之儀には候得共、猶更存寄之趣、先に各江書取を以大綱之處申談候に付、奥取次中を初夫々被申談候由。然處右に付而御成立方心得存付之處、人々其志を申立不一樣、中には深く遠慮之趣を以申聞候人

も有之躰。依之打返し直に存寄も承候所、いづれ御爲大切に相心得之申聞之譯は尤之事に候。前段心得方不一樣儀は、其趣意有之儀に候得共、末然を以申聞之品に候得ば、只今一決いたし申談候儀は不容易事に而如何に候。乍併何も御大切と存込申聞之所は一躰に候間、先其儘に押合被相心得、彌以無油斷御守護可有之候。然上にも打捨置がたき時宜に至候はゞ、夫々申談候儀も可有之候。此等之譯合を以、議論を相立不申相勤候樣可被申談候事。

四月四日。町奉行の稟請に基づき金澤卯辰・石坂兩所に茶屋女を許したることを通牒す。

〔官私隨筆〕

別紙寫之通定番頭へ申渡候付、爲御承知進之候條、御組へも御觸可被成候、以上。

四月四日　　　前田土佐守

奥村助右衞門樣

定番頭ゟ

此度犀川筋・淺野川筋兩所において場所相極、追々茶屋申付、女を指置候儀、町奉行申聞候趣有之に付承届候。右場所へ帶刀之者は、又家中・家來末々迄も堅罷越間敷候。自然心得違之者有之候へ者、入口番人指留候筈に候條、不法之族有之間敷候。

右之通被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配へも相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

辰　四　月

〔觸　留〕

出合宿の儀は御制禁に付、前々より毎度被仰渡有之、相顯候得者嚴重御咎も被仰付候得共、兎角密々宿引いたし候者有之哉に相聞え、風俗にも指障、且又輕き者共困窮に迫り、御停止与乍存、不得止事娘等他國江年季奉公に遣候族も有之、御縮方も立兼候に付、兼而內存之趣御達申置候處、近年町方末々輕き者共困窮におよび候に付、輕き者共渡世の爲旁、此度場所相極、茶屋女抱置候儀御指解有之候。仍之場所之儀、上筋は石坂町邊、下筋は卯辰茶屋町邊江振分可申付候條、是迄內々右宿仕候者共、舊惡御宥免を以、茶屋商賣可申付候間、委細之儀は、懸役人まで承合可申候。尤右之通り御差解之上は、以後外場所に於て、內々右宿いたし候歟、隱密女指置候はゞ、時々役人相廻り、綿密に相しらべ取糺之上、嚴重に咎可申付候事。

一、右場所御差解候とも、奢侈成儀は聊仕間敷、家居等も當分は在成にて申付候條、急度相

守可申事。

右之通町中江可申渡儀に候得共、先當分之所肝煎・組合頭迄心得罷在、一統可申觸儀は猶更追而可及指圖事。

文政三年四月

〔齊廣樣御傳略等之内書拔〕

是の年卯辰・石坂兩所に、遊女町兩曲輪共方一町四方餘之圍を付、卯辰は三番町之方に木戸を付、石坂は野町二丁目下に木戸相建、帶刀人は廻方役人之外は一人も不通、番所を構へ晝夜兩人宛勤番致し、尤おやま・藝者地・他之美婦人を買請、木戸外江は曾而不出、地・遠所町家之身元宜しき者之子弟、或は番頭・手代抔を引入、晝夜共酒宴三絃太鼓、誠に其陽氣なる事三都にも劣らざる事どもなり。是も村井殿幷山崎之取計ゆゑ願相叶候抔と、世上之取沙汰なり。右兩所曲輪内に鎮守を建立、春秋是を祭る由。其神名は村山大明神と神號を付、一統是を信崇すると聞。然れば右頭之字を合し祭りしか、又は村山之社號外に謂れ有るか、追て穿鑿すべき事なり。

〔綿津屋政右衛門自記〕

一、茶屋町ゆう女御免しくだされ候せつの御やく人樣がた、御年寄御用番は前田土佐守樣・

八月とあるは三月なるべし

村井豊後守様、御用部屋岩田傳左衛門様、町奉行山崎賴母様・宮崎信次郎様なり。きもいりはふぢや甚のじやう。たはらやとうすけ、いぬゐや六左衛門、くみあひがしらよそべゑ・六べゑ・さへゑ・十次郎なり。ころはぶんせい三うのとし八月二十四日御めんにて、十四ねんのあひだ、しやうばいさかんにいたし候。みぎ御めんのせつおほせつけられ候は、まちかたにごけ・やもめおほくこれあり。みぎのものどもなんじうにおよび、まちかたへいでふしやうのしやうばいいたし、まちかたふうぞくあしく、またはたいとうのめん〳〵のうちにも、おやどもむすめこれあり、なんじうにてほうこうもいたさせかね候ものも有之よしにつき、おやどもをこしらへほうこういたし候へば、さうほうのためすぢにつき、おほせつけられ候。もつともたいとうのごめん〳〵、ならびにひやくしやうはあひならずのむね、おほせわたされ候。みぎにつきたいとうのかたは、きどぎはにて、まはりのものあづかりどころと申かしよ御ざ候。さて町かたしよ〳〵かこひ女ゐ候を、まち御ぶぎやうしよへ、のこらず御ひきあげにて、百五十人ばかりの女を一とうに、わたづや忠藏・のとや宗助・茶屋太郎兵衛等へ、無きうぎんにて、くだしおかれ候。この女のうち、よろしきは五匁、中は三匁、下は百文にうり、みぎ女まかなひりやうは、一人ぶん百文あてにりやうりやへわたし候。下略

一、さい川にてはいしさか、あさの川にては茶や町と、二ケ所御きゝとゞけになり候。右の

町かたたいかにてきん主いたし候へども、ゆきとゞかず候につき、一人ぶん銀五百めあて、かぶりやうとして御とりあげなされ、いへしつたいのうへ、御さげわたしこれあり候。右のかねにてそれ〳〵かこひでき申候。さてもんにはたいとうのもの、またはけさ・ころも着し候ものいるべからずと、御せいさつ御たてなされ候。きどばんのまへには、てじやう・ゐがらぼう・まんりきなどかざり、げんじうの御事に候。もしまたきやくじんのなかにも、あしきものまゐり、御やくにん御てむかひのせつは、せどぐちにて一人〳〵かほを御あらため、きどをいだし候事。なかにもかほをあらはす事ならぬきやくじんだちは、いろ〳〵にしてかくれかへり候ふぜい、まことにをかしきことに候。くるわのいへ〳〵にては、やぶんは四かくなるあんどうに、かめいをかきだしおき、ひのうちは、じやうもんつきのれんをかけ、まへぐちはのこらずそろひのかうしにいたし、町中うらゆきとりきはまり、そのうちまつや伊右衛門いへは、みがきのしらきにて、さんかまちは、なみにうさぎをほりすかし、のとや宗助いへは、二かいのこらずゐてんでうにて、これもみぎのとほりびれいなるいへに候。右伊右衛門いへは、ちや屋町中みせびらき相すみ候うへにて、町御奉行御けんぶんこれ有。そのせつ、みぎのほりもの御さしとめにて候。

一、きやく人のなかにも、はらひいたさゞるものは、をけぶせとて、ひとまにいれおき、かへしまうさず。そのなじみあひの女を、をり〳〵みまひにさしつかはし候事なり。なかにはていしんの女、かねさいかくしてさしいだし、きやくをすくひいだし候事もこれあり。またをなごどもおやもとへぬけまゐり候へば、つれかへり、七日のあひだゆあがり一つきせて、きどにさらし、そのうへにてしやうばいいたさせ候。またふはんじやうの女は、とやまはたごまち・くしとうへつかはし候こと御めんに候。

くしは能美郡串

〔雜　記〕

廓女郞圓

第一のぼせを引上げ、難儀を調へ、内をさわがし、亭主下人、丁稚迄もうつゝになる事妙なり。一通り用ひ、家内を損じ、奢りを調へ、過分なる金錢を費ひ、内福の者も畢竟零落して駈落いたし、あしき病を受け、終に身を害する事疑なし。或は勝負に募り、かゝを去り、一門不和に相成事顯然たり。然りといへども、世の人此藥何ほどか呑めば、樣子よしと心得あるべし。年中に四・五度程用ひて然るべし。用ひやうは、酒・肴・小ぶた・羹物・菓子だてにてよし。若急病ならば、切店にてもよし。

調合所　金澤　道樂軒

金澤卯辰茶屋町
　賣弘所　東　屋　百　藏
金　澤　新　地
　同　　石　坂　新　造

近年所々に於て、右に似寄り紛敷女賣出し候者もこれ有由に付、此度改めて能書出し申候間、御望みの御方、向寄にて兩所木戸を御見當に御求め可被下候。尤も御求之節、本能書添差上可申候、以上。

禁物　帶刀・他國芝居役者・近火・御遠慮。

右之外にも差合方有之候へ共、委しきは本能書に記す。

〔謠曲萬壽抄〕

放下僧

面白の、加賀の都や江戸にきくとも及ばじ。東には、祇園茶屋町落ち來る客の、音羽の追出しに宵の御客はちり〴〵。西は寶久寺。下の昌安町廻らば廻れ、水車の輪の仁藏あたりの川浪。河原乞食は水にもまるゝ。袋畠は船でもまるゝ。身請の客はくるわにもまるゝ。太鼓持はうんてらかひにもまるゝ。實まこと、忘れたりとよ踊り子はちんちきちやんにもまるゝ。

踊り子の、二つの袖の、臍をかゝへてうちをさまりたる御代かな。

四月八日。鞍月庄用水及び大野庄用水を諸士の邸内に導くことを禁ず。

〔官私隨筆〕

鞍月庄用水

但、犀川之上藤棚下より取入、御厩橋より下者惣構通下折違橋へ通候分、幷小幡式部門前相通候安江用水とも。

大野庄用水

但、犀川大橋下五枚町より取入、長町御荷川下者三社町に而取分候二筋之分とも。

右用水川々、御家中之人々屋敷廻に川幅仝堰留、屋敷内へ取込候様子、中に者遠く相廻り行衞相知れ不申分茂有之躰。元來用水取入候儀は不相成儀に候處、右躰猥に相成候而者耕作之指障に相成、百姓ども及迷惑候。依而當時堰留有之候箇所は、無構堰爲取拂候筈候之旨。且川筋惡水通之儀、御普請會所へ相達候上、溝掘通候躰に候へども、右用水川筋は以來改作奉行へも相達、聞屆次第相心得候樣に有之度旨、御算用場奉行申聞候條、被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配へ茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候、以上。

右之趣可被得其意候、以上。

四月八日　　前田土佐守

四月十三日。金澤の芝居座中の一を遠所町にても興行せしむべきことを告ぐ。

〔諸事日記〕

別紙之通夫々可申渡旨、今日御用番御助長甲斐守殿被仰聞候條、御承知被成、御同役・御同席方等御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之内裁許有之面々は、其支配へも不相洩相達候樣御申談可被成候。早速御廻達、落着より御返可被成候、以上。

四月十三日　　岩田傳左衞門

付札、定番頭ゑ

末々輕き者共爲渡世、當分芝居狂言之類於御當地一・二ヶ所町奉行切承屆候旨等、去々年申渡候通候。然處右二ヶ所之内一ヶ所之分は、遠所町ゑも遣、二・三ヶ月程充所を替爲賑候筈に候條、右場所ゑ御家中之人々曁家内たりとも罷越申間敷、尤刀帶之者又家中家來末々迄も堅罷越申間敷候。自然心得違之者有之候者、召捕候樣改方等へ申渡候。

右之通被得其意、組・支配之人々ゑ可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配ゑも相達

この時芝居座は尚一ヶ所に止りしが如し

候様可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

辰　四　月

四月廿二日。前田齊泰石川郡粟ヶ崎に行歩し次いで宮ノ腰に赴く。

〔御在國諸事覺書略記〕

四月廿二日

一、勝千代様五時之御供揃に而粟ヶ崎へ御行歩に御出、夫より御船に被召宮腰へ被爲入、中山主計方江御立寄被遊候。右に付修理儀御供に罷出候に付、今日出席不仕旨申來候。

四月廿五日。前田齊廣の女鈴姫江戸駒込富士社に宮參を行ふ。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

四月廿五日、於東武鈴姫様駒込富士社江御宮參、同日御祝有之なり。

四月。郡地の戸數・人口等を御郡奉行・改作奉行以外に屆出づべからざることを令す。

〔留帳抜書〕

御郡地一村之家數幷人數・高數・免・拵方之様子等、何方より承合候共、御郡奉行・改作奉行之外江は一切書出申間敷候事。

一、村迄りを以紙面又者荷物等相届候儀は、古來御定も有之候條、十村不致指圖儀者堅相届申間敷候事。

右兩様之趣、近年猥に相成候躰に茂相聞え候。御縮方に指障候條、急度相守候様、村役人は不及申、百姓・頭振末々迄締密申談候様、夫々可申渡候、以上。

辰　四　月　　改　作　奉　行

諸郡御扶持人・十村中

五月二日。馬市の取締方に就いて上申す。

〔官私随筆〕

馬相望市場へ罷越候御家中之面々等、博勞より小札取請木戸相通候様、昨年御届申上置候へども、當年より無札に而往來指支不申事に相極申。乍併入口警固建置申候間、召連候從者之儀去年定之通相心得、其外家來末々之者猥に入込不申様、兼而主人々々より嚴重申渡御座候様仕度。且又日により人多に相成、市場内混雜仕候節は、入口爲〆切申候儀も可有之候。三歳駒・貳歳駒共御用之分於市場相撰候節等、入口〆切置、掛り之者之外出入差留申筈に御座候。

右之趣夫々被仰渡御座候樣仕度奉存候、以上。

五月二日

神尾昌左衞門

丹羽八郎左衞門

前田土佐守樣

五月五日。金澤尻垂坂より小立野石引町に至る道路の通行を許す。

〔官私隨筆〕

前田土佐守

奥村助右衞門樣

別紙之通一統申談候樣、御横目へ申渡候付、爲御承知進之候、以上。

四月晦日

御横目江

尻垂坂より小立野石引町之方へ往來指留置候處、今般右坂之上より前田三內等上地後通候道附替、夫より奥村助右衞門家中上地に而折曲り、石引町へ通り候樣道修理出來に付、來月五日より右道往來不指支候事。

一、寶幢寺坂より助右衞門家中通り、是迄日之內往來仕來候處、此度右坂より石引町之方へ

直通り道修理被仰付候間、出來次第晝夜往來不指支候事。

四　月

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

四月五日より今之尻垂坂往來となるなり。其先は前田三內屋敷なり。堂形前前田內藏助先代なり。又法幢寺坂八坂と云は其頃奥村伊豫守殿下家中にて夜中は往來無之候。前田三內之隣に不破勘太夫屋敷有り、五百石なり。是も同じく立退き、堂形前田屋敷之向替地被下るなり。

四月五日は五月五日なり

五月九日。大聖寺侯前田利之江戸より歸邑の途金澤を過ぐ。

〔橫山氏日記〕

五月九日　曇

一、備後守樣御歸邑、夜前今石動御泊り、今八半時前此表ヘ御着に付、御使御近習頭澤田九內被遣候由之事。

〔官私隨筆〕

一、備後守樣今日四時前御發駕被成候由之事。

五月九日

一、今日備後守樣八時過此表御着之御樣子に付、七時前御旅宿へ罷出、以淸水八郎左衛門竊

御容躰候處、入念之儀被成御大慶候。御逢被成筈に候得共、追付御寺へ被成御參詣、御取込に付其儀無之旨仰之趣演述之儀、御懇之仰忝仕合奉存旨申述之、追付退出。

五月十五日。是日以後金澤に大雨あり。

〔歲々略曆〕

五月十五日より大雨にて、六月九日迄降り續く。十日より晴上る。尤此間に兩川洪水五度。

五月二十日。前田齊廣老臣等に水揚道具を觀覽せしむ。

〔諸事留牒〕

五月廿日　雨天

一、九里覺右衛門を以被仰出候は、御代官小谷彥四郞殿より水揚候道具被上候間、拜見被仰付旨申聞候に付、難有仕合に奉存候、猶更同役共江も可申談旨申聞、追付於奧書院拜見、同人罷出右水あげ之譯合申聞候。於同所同人江御禮申上候事。

五月廿九日。放銃の技に達したる足輕に賞賜す。

〔諸事留牒〕

五月廿八日

一、左之通以關屋中務入御覽、相伺置。

享和三年大組足輕坂井彌平次与申者千打いたし、中茂宜、元祿年中以來無之稀成者に付、寬之上白銀五枚被下之候。其後文化六年大組足輕中梶丈右衞門与申者致千打、於御次御褒美被下候由、同十一年にも大組足輕吉田常之丞儀千打いたし、中も宜に付、金三兩被下之候。本文兩通之通中りも宜候間、近例之通四人之者共江も、金三兩充御褒美被下候哉与遂僉議申候事。

一、玉千、中九百二十、星四百五十八　田中甚作

一、玉千、中九百十八、星五百一　安田三郎右衞門

一、玉千、中八百八十六、星四百十七　磯野權太郎

一、玉千、中九百十七、星二百二十二　今村甚太郎

〔諸事留牒〕

五月廿九日　晴

一、千打御褒美伺之通被仰出候事。

五月。犀川に於いて鑑札を有せざる者の漁撈を禁ず。

〔御觸拔書〕

御橫目江

才川魚殺生請負人、才川下川除町富木屋彌助与申者、去寅年より來る午年迄五箇年之間相勤、

川役銀上納いたし候付、前々之通投網・小目網・流網仕者は、川師より見合札取請罷越、無札之者は右等之殺生不致樣仕度旨、町奉行申聞候付、其段去年二月中申渡置候處、投網等之殺生無札に而いたし候者多有之躰に相聞え、前々申渡置候處不心得之至に候。向後右樣心得違之者於有之は、夫々相咎、名前等承屆候樣改方役人共江申渡候間、其節不法之儀有之間敷、尤名前等承屆候上、身柄之人々に候者共時々及斷、身分輕き者は其時宜に寄改方役所江召連候樣申渡候事。

右之趣一統可被申談候事。

五月

五月。上方役者の芝居座に關係ある足輕等の居宅に廻勤するを禁ず。

〔川上芝居一件〕

芝居懸り肝煎へ

上方役者共御當地へ罷下候上は、町附足輕並改方足輕、或は奉行兩人之家來方へ相勤候樣子に候。右者以前芝居樣之儀も難相成時分、內々に而仕候節之類例に而可有之、當時は押立呼下し候儀に候へば、以前之例は不相當、其上町中度々爲致徘徊候儀不宜候條、此度より廻勤仕儀は指留候。其外芝居懸り役人たりとも、主付肝煎・組合頭之外は、爲相勤申間敷候。此

段役者共へも可申渡置候事。

五　月

六月九日。大雨により犀川・淺野川の橋梁を損ず。

〔横山氏日記〕

六月九日　大雨

一、今曉より之大雨に而才川・淺の川共滿水、兩橋共橋杭拔損、往來相成不申。曁淺野川小橋流失。其外町中所々水付損家も有之由。夕方より追々減水之事。

〔日用雜記〕

六月九日

一、五月十五日より雨降、六月九日迄は一日も晴上り不申、され共其内少々之晴は一日之内にも少々宛は有之候得共、全躰宜氣色と申は無之候。六月八日は大降りに而、兩橋往來留に御座候。九日も殊外成大降りに而、兩橋共橋杭四・五本も拔、往來留り申候。一文橋は不及申、小橋は流申候。觀音町より一文橋え參候町四軒町、觀音山崩れ人家多く潰申候。了願寺と申淨土寺、是も潰申候。され共一人も人損は無之由。天神町寶圓寺之境内崩れ落、大木など投付、人家多潰れ、人損も多く有之由。八坂雲龍寺近く立直し候而、未皆成就に而も無之

處、是も高みより崩れ込潰申由。いまだたしか成事は承り不申候得共、右之通相違無之様子に候。

六月十三日。前田齊泰居を金澤城二ノ丸御殿の御居間書院に移す。

〔齊廣様御傳略之内書拔〕

四月六日、勝千代様二之御丸御表ゟ御引移り、御書院御住居之儀被仰出。六月十三日御住居御補理替御出來に付御引移り有之なり。御年御十なり。

〔官私隨筆〕

勝千代様御表御住居御座候様可被遊候付、二御丸に而御相殿に可被爲在旨、先達而被仰出、御居間書院に御住居被遊候筈に候處、夫々御間圍等出來、今十三日四半時之御供揃に而、只今御引移被遊候。依之中將様・勝千代様へ御祝詞申上候間、御自分様にも追付御登城御申上可被成候。若御當病等に而御出難被成候はゞ、御紙面を以御申上可被成候、以上。

六月十三日　　前田伊勢守

奥村助右衛門様

〔横山氏日記〕

六月十三日　曇

一、今日勝千代樣御表〻御引移に付、御殿向一統御步並以上布上下着用之事。

但、御城中御番人等は常服之事。

一、九半時頃勝千代樣御供廻り之案內承り、何茂表御式臺階下〻罷出、御附方甲斐守・修理御左之方、年寄中等・御家老中・若年寄は御右之方〻罷出、追付御數寄屋唐御門より松坂通、御臺所前より表御式臺〻被爲入、何茂〻御意有之。伊勢守御請申上、修理儀少進出罷在、御先立相勤、竹之御間御廣緣御小書院横御廊下より、御居間書院代御奥書院連雀之御杉戶〻被爲入。

一、御着座被遊候上、御熨斗御側小姓持出上之、御祝被遊候由之事。

六月十九日。皇子降誕を賀する爲前田齊廣使者を命ず。

〔橫山氏日記〕

六月十九日　天氣吉、少々曇、暮合雨雷

一、女御御平產、若宮御降誕に付、爲御祝儀御使者駒井宇右衞門被仰渡候旨、同人及屆候事。

〔金龍公記史料〕

五月十七日。皇子降誕。六月遣駒井守眞于京師。奉賀獻物。

六月廿七日。諸奉行人等の出仕・出勤時刻に遲延するなかるべきを告ぐ。

〔御觸拔書〕

佳節・朔望等出仕を始、諸奉行人等役所ゟ罷出候刻限、從跡々御定も有之處、近來漫りに相成候條、自今無遲滯罷出候樣可申渡旨被仰出、寛政二年一統相觸候處、近年又候漫りに相成候躰に候條、彌無違失相心得、遲參仕間敷旨被仰出候事。

右之通被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配ゟ茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

六月廿七日　前田伊勢守

六月廿七日。去年能登島に流されたる十村十八人を宥すべきことを告ぐ。

〔横山藏人日記〕

六月廿七日

一、左之通今日表方に而、所口町奉行ゟ以紙面申渡有之由之事。

覺

能州嶋之內向田村ゟ流刑

犬丸村　與右衞門

福留村　六郎右衞門

同　曲村江流刑

笠嶋新村　八三郎
中居村　三郎兵衛
戸出村　又八
宮丸村　次郎四郎
内嶋村　小豊次
嶋村　善兵衛
沼保村　幸右衛門
山田村　祐三郎
天正寺村　七郎
神田村　小左衛門
御所村　源兵衛
大門新町　七右衛門
南森下村　三郎右衛門
荻谷村　七左衛門
寺井村　宗右衛門

沼保村　彦四郎

右十八人、去年流刑被仰付置候所、御免被成候條可被申渡候。

〔萬聞書〕

右人々文政二年八月より來辰六月迄、嶋之内向田村・曲り村兩村に而流刑小屋有之、兩所に罷在候所、六月御免に而、十六日地方所口迄渡り申候。同十八日所口出立、人々歸郷有之。于誠一統之喜び申計も無之、親類・知音・迎人大勢罷越、所口町出立之砌夜に入申所、灯燈所口より八幡村國下橋之邊迄續き申候。小生も十六日より出立之夜迄所口迄罷出、右同夜犬丸村與右衞門同道歸宅いたし候。犬丸與右衞門は彌左衞門伯父に而候事。

附り、右十九人之内加納村兵衞は、嶋之内向田村配所に而病死いたし、御免之節歸宅いたし不申、何れも殘念之事に存候事。

一、御所村長次郎は卯六月流刑被仰渡有之候後、牢中に而病死有之候故、流刑に者參り不申事。

辰は文政三年

加納村は射水郡

六月。金澤川上新町の芝居座圍外の茶屋等にて長刀・笠籠等を預ることを禁ず。

〔川上芝居一件〕

肝煎
長助
六左衞門

芝居座圍外茶屋等において、長刀・笠籠等預り候風聞有之候。右品預り候儀は致間敷儀に候間、以來足輕共へ申渡爲改候條、若預置候はゞ共品取揚、急度咎可申付候條、此段右近邊之者、不相洩様可申渡置事。

六月

七月十一日。金澤寶幢寺坂の開鑿成りたるを以て通行を許す。

〔官私隨筆〕

一、左之紙面到來、不在合候付翌日返書遣之。

津田宇兵衞

奥村助右衞門様

寶幢寺坂道修理就被仰付候、當六日より往來指留申候。此段御案内申上候、以上。

五月四日

寶幢寺坂道修理出來仕候付、明十一日より往來指支不申候。此段御案内申上候、以上。

本年四月晦日の條參看

八月六日。河北潟に於ける卷網の漁法を改む。

〔河北郡八田村卷網獵業一件〕

其方組河北郡八田村卷網之儀、去る文化二年先役之者共詮議之上、網大さ四十六尋、網目九節限り、船二艘に而獵業いたし、是を一流与相極、十流相用ひ、役銀は一流に付十一匁八分一厘宛毎歲致上納來候處、去々年以來右先年之定を等閑に相心得、船四艘にて卷立候躰に付、諸魚之障に相成、外村々一統之迷惑にも相成候族故、同年六月右獵業詮議中指留置候。然其後先裁許南森下村三郎右衛門より、種々願之趣も有之に付、以後之儀入念申渡指解候。然所又候同七月下旬并去年五月下旬にも、四艘卷之躰紛敷族も有之、重々不埒之趣に付、猶又右獵業指留置候處、八田村に而者、卷網不致獵業而は輕き者必至与及迷惑候之間、指解き吳候樣、尤以來之儀嚴重可相心得旨每度相歎之由、譯而申聞之趣も有之に付、今般格別之詮議を以以來左之通相改候。

一、卷網大さ四十六尋、網目九節限り、船二艘に而是を一流与相定、十流相用可申候。尤舟之間五十間程宛相隔、一流宛散々に相成、每歲九月朔日より翌年二月晦日迄之內可致獵業候。

但、役銀之儀は、一流に付先年相定候銀高三つ割一分三匁九分三厘七毛宛、毎歳可致上納候。其餘三之二者、潟緣八田村之外村々より爲冥加上納爲致候樣申渡候。

右之通御算用場江も相達、聞屆之上申渡候之條、以後違失無之樣嚴重申渡請書取立可相達候、以上。

辰八月六日　　淺香伊織

內藤十兵衞

相合谷村喜兵衞

八月十六日。五ケ年省略を實行するを以て諸士の風俗に關して令す。

〔橫山氏日記〕

八月十六日

一、御勝手連々御難澁に付、五ケ年御省略被仰出候に付、御家中風俗之儀被仰出之趣、今日諸頭江申渡有之。

〔御觸留〕

御勝手連々御難澁に付、天明年中以來每度御省略之儀被仰出、一統江申談候得共、兎角行屆不申、御勝手御取直之處江不被爲至儀者、一統承知之通に候。當時に至り候而者、御借財も

莫大に相嵩み、如何共被仰付方も無之候。依之當年より五ヶ年格別に御省略被仰付、御運方御詮議被仰付度被思召に候得共、御身分を初御内輪之儀は、是迄御省略被仰付候度々、萬事御事輕に被仰付候儀、此上御省略被遊候ても纔之儀に可有之候得共、御逼迫至極之儀、段々達御聽候に付、格別に思召立被爲在、無御據今般五ヶ年御省略被仰付候。右に付而者累年人氣も下り、風俗も不宜候付、ヶ樣之處ゟ御省略之儀被仰出候而も、又毎も之事と心得一通に成行候而者、被仰出候御詮茂相立不申故、先人氣風俗之儀より被仰出度思召候へども、御身分御病身に而御勉強茂不被遊御事故、下を御責被遊候儀正理に於て甚御忍難被遊候得共、打捨被置候而者彌增に風俗人氣も流れ候事故、此所も又御心外に思召候に付、則組頭等被爲召、段々思召茂被仰入、何茂了簡茂被聞召候所、何茂申上候者、御前に者御勝れ不被遊候得者、御身分御勉强難被遊儀は何茂奉承知候事に候得者、其所に無御泥、風俗等之儀は無御構被仰出候樣仕度旨申上候人々多分有之候に付、今般五ヶ年御省略被仰出、御序に夫々左之通被仰出候。

一、御上御難澁至極に被爲至、且御家中茂一統難澁之趣に被聞召候に付、兩組頭御前近く被爲召、委細人々存寄も被聞召候處、中に者ヶ程御難澁に被爲至候儀は、初而奉承知候。御家中一統難澁之上、近年打續米直段茂下直に付、彌增一統難澁迷惑仕候故、御救も可奉願程之

心中に御座候處、今般必至与御難澁之趣委細奉承知候上者、何分御上之御難澁に者難替候間、以前之通御借知可被仰付哉、又者今般は格別之御難澁に付、半知に茂被仰付候而も、彼是奉申上候了簡者無御座旨申上候面々茂有之。又御家中之御借銀高書上等被仰付候者、一統難有がり可申抔与申上候面々茂有之候へども、御上之思召に而者、如何躰に候とも此二ヶ條者被仰付候思召は不被爲在候。依之御家中之人々も、御借知不被仰付儀を難有安堵仕り、夫々今般被仰出候風俗之儀、御家中を初末々迄、御主意通り之宜風俗に少し宛成とも追々押移り、人道之信相立候得者、誠御大慶御本懐之至り思召候段被仰出候。

一、是迄御省略被仰付候度々、諸場・諸役所御買上げ物抔、たとへ五つ御買上之所三つに相成候程之儀に而、一圓御足に相成候程之儀は是迄曾而無之。依之今般は御買上物之多少御損益よりは、先是迄之習俗を改め候事先務に相心得、其場其役所に懸り候末々に至迄、習俗を離れ正路奇特之者を撰み、御主意通明らか成風俗に移し可申候。

一、一統年功・勤功に而御加恩願・拜領物指押へ有之候得ば、一統不進に相成候風俗故、役頭々々より指たる年功・勤功無之とも、左様之儀願不申而者不働之様に配下共申を恐れ而、公之所を取失罷在候故、いつしか立戻り如元相成候儀有之候。併此儀は御賞美御惠之儀故、御上より御指留は無之道理に候へ共、何分頭々之心得可有之事に思召候。御上より之御賞美

を、頭之働之様に下へ爲存込可申様之存念者、先以正理本意を取失ひ罷在候事に而、能々存じ辨へ候得者赤面之至り可有之事。

但、配下之人々とて、左様之願を宜と存候事は、全我身之利欲に而、たとへ輕き者たりとも志有之者は、此理致會得候者、心中不潔儀相辨、恥入可申事に候。

一、御次内幷表向に而茂、少々不時御用相勤候とて、盆暮拜領物之願指出候儀、近年段々致増長候。元來何故何茂夫々其役被仰付置、相應之御扶持又者御知行等被下置候哉。皆々爲其被下置候事に候へ者、其役に付候儀、如何躰之事に而茂不時御用与者難申出筋に候所、ケ様之心得違年々惡風俗に押移候事に候。其役に當らざる不時成儀被仰付候はゞ、不申出とても御上より御取捌は有之事に候。全躰下々より拜領物等之儀申出候は、人々心中恥入赤面可仕事に候之所、誠本意を取失ひ候事に而、恥敷心底与申ものに候。役頭々々より其配下人品勤功之儀致言上候得ば、其上之御賞美は御上に有之事に候。右に付先ケ様之風俗諸頭初存付、押直し申所ゟ至らずては、全き所にも至り申間敷与被思召候。依之今般五ケ年御省略被仰出候得ども、諸場・諸役所共、是迄之様に押而御入用御減少之儀者、拙者共よりも不申渡候間、一統右被仰出之御主意を奉會得、下々先々より御爲に相成候儀申出候様、志をはげみ申候様、夫々可被相心得候。

一、侍之儀は女子に至る迄も、麁服麁品に而甲斐々々敷有之儀は本意に候所、兎角婦人より町家を見習候事に相成候躰、見苦敷風俗に相成候。以後者町家之女共如何躰之はやり風に移り候とも、武士之女子者風を替不申儀を手柄と相心得可申候。且又武士之女子に琴・三味線覺居候者は有之候得ども、讀書きを專に爲習候儀薄く候故、御奥御右筆御用之節、御用立候樣成者一圓無之候。以後は女子も武士之分は、讀書き且縫針を專らに爲致修行可申候。琴・三味線之儀は格別に不致樣可相心得候。爲稽古男女之盲目猥りに心易相招候儀、町家抔与違不可然事に候。

一、是迄御省略且風俗之儀被仰出候節、町家に至る迄質素可爲麁服旨被仰出候得共、町家之儀者武士与者品之違候儀に候間、惡敷風俗に而無之候得者、着服等之儀御定之外者如何共分限に應じ可爲勝手次第候。

一、右之趣に付而は、以後侍之女子時之はやり風、又美服に而茂いたし、町家に似寄候躰之者は、何方に而も町人之會釋たるべく候。

一、惣而美服者常人之好む處に而、俗人之目を迷はす品、美味花麗茂衆人之望む處、麁服麁食質朴は常人之不好事に候。其衆人之不好麁服麁品を堅相守、不動所が侍之本意規模に候。此所輕き町家与侍与之違目者、ヶ樣之所に候間、美服等を好み、或は時之はやり風を好み候

者可耻之第一に候。
一、御家中に茂六・七十年以前迄は、式臺を構候屋敷纔に數へ候程ならで無之、中に者古風之人々者、繩簾掛置候樣成人々も有之躰に候處、太平久敷相成候故、段々僭上奢侈に押移り、當時者式臺無之所者甚稀に相成、御歩組風情迄も式臺樣之儀間々有之躰。且又御家中小身之面々中に者、平士にても稽古所と歟申立、舞臺に似寄候間など取繕申者も有之躰。其職之者は師範に付、小身に而も稽古所も所持可仕儀、一通に而者小身之面々者、稽古所すら分限に者遠慮も可有之儀に候。況や舞臺形之間取は、甚榮耀僭上分限不相應之了簡心得違に候。舞臺抔者先十萬石以上之事に而、其家に家格も備り候程之分限に而無之而は難相成筋に候。亂舞之儀者、當時者日本之樂之形ちに而、公邊奉初諸侯方押立候御大禮之節、御饗應被仰付候品に而、急度式之相立候得者、常之歴々茂高知之人々は格別、馬持以下之小身に而は、シテ・ワキ・四ッ物全く相揃慰に仕候儀者僭上之至りに候。
一、家作・飮食・衣服・器物不應分限事ども有之儀を、其儘に致置、勝手難澁之段申出候節、頭々心付不申、組・支配難澁に付、御取救ひ無之而者難相成趣に相達候儀、根元之本意等閑成事に候。分限相應に相暮し候上、無據儀共有之及難澁候人々は、品に寄御取救も可被仰付候得共、人々分限より過分之暮方いたし罷在、難澁之儀申立候而も、頭々共穿鑿も不致、組

等之人々より申儘に御上へ申上候儀は、可奉恐入儀に可有之候段、前々被仰出候御定之通急度相心得、是以後家作等可申付候。若御定に相違、過分之家作等仕者有之候者、其頭々より可為取挊候。是迄數年分限打忘れ、只今迄流來候所、俄に嚴重に頭々より申入候事、難忍存候面々茂可有之候得ども、左様之處に相泥候而は、何分思召通に者難整事に候。

一、御家中諸士娘等爲致嫁娶候節、近年拵方分限不相應之儀、且拵料抔与申趣に而、金銀遣候儀有之、中には娘等爲致嫁娶、勝手及難澁候族も有之旨、前々被仰出も有之所、不心得之至に思召候。以來者可成限事輕に双方申談、頭・支配人江一々及示談、指圖を請可申事。

一、親跡目・轉役等被仰付候節、親類縁者之外者相招不申様、近年被仰出も有之候。猶更彌相守可申候。參會等之儀茂、無用之參會無之様相心得、若無據致參會候共、至而事輕に相心得可申事。

一、御家中之人々召連候從者、以前者人々了簡次第召連候様子に候處、近年は同役大躰同様に無之而者不相成様心得候人々茂有之躰、一向左様に而者有之間敷儀に候。從者之多少者、人々了簡可爲次第候。

一、御家中之人々曁子弟等之內、深笠・半合羽着用、無僕に而途中致往來候人々有之、且輕き末々之者にも同様之者共多、何者に候哉難相分、人柄甚紛敷、御縮方にも指障、心得違之

至、悪敷風俗に候間、右躰之儀堅く指止可申候。以來右樣之者は、何方に而も下郎之取扱たるべく候間、下賤之者慮外等有之候而も、不拘理非越度に可被仰付候。且見物之場所江、右躰姿を替入込候はゞ、及言上候樣改方江被仰渡候事。

一、山河を駈廻り身を固め候儀は、先年より被仰出も有之事に候へども、近年諸殺生甚致增長。右に付而者不時成費も多有之候へども、左樣成所より勝手難澁に至り候而者、本意致相違候事に候條、是等之趣相心得、岩乘之仕方心得も可有之事に候。

一、他國詰等被仰付候人々、發足之砌餞別等いたし、且罷歸候節土産之品等贈り候儀、無用たるべく候旨前々被仰出候處、別懇之人々江者左樣之貌無之而者、餘り踈遠無味成樣に存、難相止存候人々も有之哉、今以其姿有之躰相聞候。左樣之儀を以親□与心得候事に而者有之間敷候。親みは互に信を盡し候儀に而、不用之贈り物等を以別懇与心得候儀者、本意違ひ申儀に候。ヶ樣之處致會得、一切指止可申候。

一、先年より御省略被仰出候節は、只御難澁与計一統江申渡候へども、今般は格別左之通委曲一統江爲申聞候樣被仰出候。

御國幷三都御入用圖り

一萬千二百六十貫目餘　　御國幷三都指定候御入用等當年分御不足高

内四千六百貫目餘　　大坂幷御國に而御調達御手當有之分

殘而

六千六百六十貫目餘　　御不足高

但、此分追々御調達之圖りに候得共、莫大之銀高に付出來方甚無覺束、御指支に相成可申哉之旨、御算用場奉行より申上候。

本文之外

四萬三千八百四十三貫目餘　　江戸・大坂・御國御舊借之分、年賦御返濟之分殘元高

三萬六千九百三十貫目餘　　江戸・大坂・御國御新借元銀置居、御利足迄御渡之分、但御手繰次第御元入可有之分

二口〆八萬七百七十三貫目餘

但、年賦渡り幷利足銀一ヶ年當り之分者、本文御圖り高之內ゟ立込有之事。

右之通之御借財高に候所、御手當一圓無之、御手繰御危迫至極に付、何とか御手繰も出來、追々御取直に相成候樣之儀不被仰付候半而者難相成、御上御手厚に無之而者、一統ゟ之御惠みも不被爲成場に至り可申。左候而者御賞罰は御治國之根元に候所、其儀不被爲行屆候者、御政事も難相立、甚御心勞思召候。右に付何れ御運方御取返之御手段致出來候樣、心付有之

人々は人別に可奉申上候。且又御家中は不及申、輕き町・在に至る迄、御國恩奉存付、志之人々も有之候者、何分心付之儀可申出候。諸方より言上之分御引集、御詮議可被仰付候。

一、前段之通御難澁に候處、去年以來蓮池上之御普請被仰付候儀者、御家督之砌より思召被爲在被仰付候儀に而、御別段之御事に候得共、今般格別御省略被仰付候付而者、先づ是切に而可被指止旨被仰出候。乍然是切に被指止候而者、却而御費之筋も有之候故、拙者共より申上候趣有之に付、被爲任其儀、御住居向迄被仰付、其餘御指止被遊候。是等之趣も一統爲承知申聞候。

一、右御省略被仰付候條、京都等より被召寄候御手役者抔も、御返可被遊旨被仰出候。乍然一統承知之通、御疝邪御痼症に而久々御勝れ不被遊候に付、御參勤も御延引に而、一圓御行歩等も不被爲在、御保養に被爲成候儀無御座故、御順氣之爲にも可被爲成候間、此儘に被指置候樣、拙者共より達而奉願候處、此上强而は不被仰出候間、被任其儀候旨被仰出候。此段も一統爲承知申聞候。

一、右之通久々御勝れ不被遊、御身分御勉强難被遊に付、下斗を御責め被遊候而者、道理相背き、御忍難被遊故、何事も御打捨御決心被遊候御儀に候所、今般追々御難澁に被爲至候付不被爲得止事五ヶ年御省略被仰出候付而は、風俗之儀も兼而御心勞に思召候御事共不被仰出

而者、彌増風俗不宜儀に流行候故、當時御保養中に而不被爲行屆候得共、爲御國家被仰出候御趣意に候之條、一統此所能々可奉會得候事。

〔御觸留〕

御勝手連々御難澁に付、毎度御省略之儀被仰出、一統申渡候得共行屆不申儀は、先々會得無之儀をも押而申渡候故与思召候。段々御借財も相嵩、如何共被仰付方も無之候。依之猶又當年より五ヶ年中、格別御省略御運方御僉議被仰付候。就夫諸場・諸役所共御入用方、是迄之仕癖に而存外之入增有之躰も相聞候。是等之儀都而奉行人等綿密心配遂僉議候者、無謂不時成御入用相嵩申儀は無之筈に候條、都而御役人和熟いたし、御爲第一に存込、役所々々成癖等之處、急度遂穿鑿相改可申候。無左候而者、萬事御省略之道事整不申事に候。第一諸士之心得相改り不申而者不行屆儀故、委細別紙帳面之通被仰出候條、一統得与奉會得、急度相改可申事。

右之通被仰出候條、被得其意、得与遂僉議、心付之趣遮而可被申聞候。且拙者共よりも、追々遂詮議申渡儀も可有之候。

右等之趣被得其意、同役中傳達、組・支配之面々江可被申渡候。組等之內裁許有之人々者、其支配へも相達候樣可被申聞候事。

八月十八日。本日より士庶共に百間堀通の往來を許す。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　前田伊勢守

〔官私隨筆〕

　　奥村助右衞門様

別紙寫之通御横目へ申渡候付、爲御承知差進申候、以上。

　八月十五日

付札、御横目江

蓮池上之御用地御建物就被仰付候、同所御庭御取込之筈に候。右に付只今迄學校前通往來之者共可爲難儀候。依之當十八日より坂下御門・紺屋坂御門・新坂柵御門往來、御家中を初一統可被仰付旨被仰出候事。

　但、朔望佳節不時登城之刻、出仕相濟候迄往來差留候筈候事。

一、御家中一統往來曉七半時より夜四時迄、其外男女往來朝六時より暮六時迄之事。

　但、火事之節は夜中茂都而往來不差支候事。

一、殺生道具且背負荷等之類相通不申筈之事。

右之趣被得其意、夫々可被申談候事。

八　月

〔官私隨筆〕

新坂柵御門等御家中初一統往來に相成候付、右柵御門幷腰掛脇紺屋坂下御門番人、明日より年寄中等登城之節御作法呼不申樣申渡候旨、御城方より演述に付爲御承知申進候、以上。

八月十七日

〔齊廣樣御傳略等之内書拔〕

八月十八日より、坂下御門より新坂柵御門通り百間堀之往來相初るなり。其先は廣坂見付御門の所より蓮池後通り、以前之尻垂坂ゟ往來有之なり。今度竹澤御殿御造營に付、右往來地面御圍内ゟ御取込に相成候なり。

八月廿一日。堤防缺壞の修理は今後一層鞏固に行ふべきことを告ぐ。

〔留帳拔書〕

今日御改作所より御内々被仰渡候は、定檢地所御手合川除御普請之儀、諸郡共非常之洪水仕、御普請所切損入川等仕候分は、是迄御手之及丈けは一時に御普請御取掛被成候得共、左候而は自ら御普請方堪兼候族も御座候間、今般格別之御詮議に而、大躰之出水いたし候ても全堪

候樣、勿論寬急大小御撰被成、丈夫に被仰付度御詮議に御座候て、是迄之振とは違、追々丈夫に御普請被仰付候得ば、畢竟は村方爲にも可宜候得共、指掛候所々甚迷惑之筋も可有之儀。依而御改作所においては、是迄之通無據所々一時に御普請御取掛被成度思召に而、押立被仰渡がたき御趣意。併迚も御手之および兼候儀候間、何分今度定檢地御役所格別之御詮議通之趣意、兼而諸郡御扶持人・十村中心得有之候樣、私より不表立諸郡組裁許御面々、得与御心得申談置候樣、御入念被仰渡候間、左樣御承知可被成候。

右得御意度如此に御座候、以上。

八月廿一日　　田井村　次郎吉

諸郡御扶持人・十村衆中

追而本文之趣村方江被仰渡候譯に而は無御座候。不心服成村方も御座候はゞ、其節に至り本文之趣御申諭被成候御事に御座候。何れ定檢地所御詮議方御手障に不相成樣、御心得御尤に奉存候。且此紙面早々御廻し、落着より私方江御返可被成候、以上。

八月廿三日。藩侯の學校に臨む際は便門より出入するを以て諸士の下馬下乘に關して定む。

〔官私隨筆〕

別紙寫兩通之通定番頭へ申渡候付、爲御承知進之候條、御組へも御觸可被成候、以上。

八月廿三日　　　　　　　　　　　　前田土佐守

奥村助右衛門様

定番頭江

別紙寫之趣被得其意、組・支配之人々へ被申渡、組等之內裁許有之面々は、其支配へも相達候様可申聞候事。

右之通一統可申談候事。

八　月

學校へ御出之節、辨門より御往來に付、以來御出之節は學校へ罷出候人々辨門外柵門前に而下馬下乘、惣從者之分同所に相殘、柵門內へは平生辨門內へ召連候供數之外召連申間敷事。

一、辨門內へ召連候從者之分者、辨門外下馬に爲溜、門前に相殘候從者之分は、石川御門外下馬に爲溜可申事。

右學校へ御出之節、辨門通り御往來に付、下馬下乘等之儀右之通僉議仕候。尤警固足輕指出置候間、右足輕指引候通相心得可申旨、家來末々迄嚴重申渡候様、一統へ被仰渡御座候様に仕度奉存候、以上。

八月

前田土佐守様

木村兵部

八月廿五日。城下惣構御堀筋その他各河川に塵芥を捨つることを禁ず。

〔御觸拔書〕

御作事所道橋方、御普請所惣構御堀筋を始御荷川等、其外川々塵芥捨申間敷旨等之儀に付、委曲別紙之通御作事奉行申聞候。前々より毎度相觸候處、猥成儀候。尤御作事所川廻り之者爲相廻、心得違之者は見咎、品に寄及斷候様申渡候條、右族無之様家來末々迄急度可申渡候。則別紙寫相越之候條、被得其意、組・支配之人々迄嚴重可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配迄茂相達候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

八月廿五日

前田土佐守

道橋方、御普請所惣構御堀を始、御荷川筋等、其外川々近年猥に塵芥打捨、川中埋り、水流不宜、大雨之節者水溢往來支に相成、曁川緣損、積石ゆるみ崩落、其上所に寄橋臺・石垣・根石際迄砂利等取上候故、石垣ゆるみ崩落、剩其石共致紛失、御修覆之節御不益之筋多く御座候間、以來右躰之族無之様、嚴重相心得可申旨被仰渡御座候様仕度奉存候、以上。

辰八月三日　　　　　津田宇兵衛
　　　　　　　　　　野村隼人
　　　　　　　　　　淺香主稅
　　　　　　　　　　淺井主鈴
　　　　　　　　　　服部五郎左衛門

前田土佐守様

九月朔日。金澤尻垂坂高より寶幢寺高に至る間に死人・縄懸等を通過せしむるを禁ず。

〔御觸拔書〕

別紙寫之通一統申談候樣、御横目江申渡候に付、爲御承知進之候、以上。

九月朔日　　　　　前田土佐守

御横目江

尻垂坂高通り、寶幢寺坂高折曲り角迄は、死人・縄懸等都而不敬之者は往來指扣可申事。

但、石引町より寶幢寺坂江之往來は不及扣事。

右之趣一統可被申談候事。

九月六日。金澤卯辰及び石坂の茶屋町に檢使を派遣する場合の分擔に就いて協議す。

〔兩茶屋町一件〕

此度犀川石坂町之內並卯辰茶屋町邊に茶屋相建、抱女も指置申に付、兩所とも茶屋惣廻圍切、二・三ヶ所入口に木戶申付、木戶より內は、廻り方役人並懸り町役人之外は、帶刀人は脇刺を帶し候とも一切爲入込不申筈に、木戶番人へも申付置候。就夫右圍內に而自然變死人等有之、檢使を遣申儀、先達而芝居小屋惣圍內之通、町方之者は家下を離れ候とも、都而町同心檢使指遣、尤他支配人或は他國者之故障は、前格之通公事場より檢使被遣事に相極置申度御座候間、御指支無之哉、爲御示談如斯御座候、以上。

文政三年九月六日　　高畠木工　印

山崎頼母　印

石野雅樂助樣

九月九日。前田齊廣病むを以て更に參覲の時期を延ぶべきことを許さる。

〔官私隨筆〕
中將樣御病氣に付御願、此節迄御在國被加御療養候へども、御疝邪幷御氣塞之御症御治し不被成、御快氣之躰不被爲在、長途之御旅行難被成に付、猶又來二・三月頃迄御參府御用捨之儀、當月六日御用番青山下野守殿へ御願書御指出被成候處、同九日御付札を以御願之通被仰出候旨、以伊藤內膳被仰出候付、爲御承知申進候。右に付明日何茂相窺御機嫌申候間、御自分樣に茂御登城御伺可被成候。御當病等に而御出難被成候はゞ、以御紙面御伺可被成候、以上。

九月十八日

九月廿三日。諸向より江戸等に差立つる御用荷物等は發送前日中に會所へ出すべきことを告ぐ。

〔官私隨筆〕
諸向より江戸等へ指出候御用荷物、會所へ指出方遲刻に相成候儀に付、會所奉行より一統觸出候別紙寫一結二通、爲御承知進之候條、御組へも御觸可被成候、以上。

九月廿三日　　長　甲斐守

奥村助右衞門樣

諸向より江戸等へ指出候御用荷物會所へ指出方、遲刻に相成候儀に付、別紙之通御勝手方村井又兵衞殿被仰渡候付、寫一通指進候條御承知被成、御同役・御同席御傳達、御組・御支配御申談可被成候。御組等之內役掛り之面々、別段其役所々々へ不申談候間、其段譯而御申談可被成候。且又御組等之內裁許有之面々は其支配へも不相洩相達候樣御申談被成、早速御回達、落着より御返可被成候、以上。

九月　　　飯尾吉太夫

林武左衞門

付札、會所奉行江

諸向より江戸等へ指出候御用荷物等寄物、會所へ指出候儀、夕七時過候者請取申間敷旨、天明六年申渡候所、相ゆるみ候付、享和三年にも委曲被申聞、承屆候上諸向へ被申談置候。然處又々以前に押移り、當時は七半時過にも指出候所も有之躰。右寄物は取揃候迄夫々相しらべ、其品々多少に應じ上箱申付、諸合下認等いたし、其上貫目見屆、町飛脚へ相渡候故、短日に出物多節は夜半頃迄茂相掛り、第一御不益之筋茂有之旨等、委曲紙面被指出承屆候。五ケ年格別御省略茂被仰出候間、少茂御費之筋無之樣可相心得儀候條、以來は於先々成限り前日御用狀等相認置、出日當日八時限御用荷物等會所へ可指出候。右刻限過候はゞ請

取被申間敷候。自然右刻限より遲り候御用狀等有之候者、其子細時々御勝手方席へ可及届候。

右之趣被得其意、夫々嚴重可被申談候事。

庚辰九月

九月廿四日。諸士の家作に關する制限を通牒す。

〔官私隨筆〕

別紙寫之通組頭へ申渡候。諸頭へも申談候樣申渡候付、爲御承知進之候條、御組へも御觸可被成候、以上。

九月廿四日　　長甲斐守

奥村助右衞門樣

組頭へ申聞候趣

今般被仰出候趣、書立を以先達申渡候通に候。夫に付家作之儀、式臺等屋根、附母屋唐破風外桁作之分は、爲取毀可申儀に候へども、年久敷分は先其通、追而修復等之節取毀可申候。長屋は附母屋不苦候。且又式臺之内にも、廣く候而殊之外目立候分有之候へども、御定に相違無之分は、是又只今爲取毀候には不及候。是以後家作いたし候ものは、頭・支配人於手前

得与僉議、分限不相應之分は爲取拂可申儀、先達而被仰出候通に候事。
一、離れ舞臺之分爲取拂可申候。屋根續に而疊入置候分は、舞臺与申にても無之候間不苦候事。
一、自分知三千石以下之人々、押召連候儀爲指止可申事。
一、近年金紋鞍覆用候人々有之躰に候。以來無用候事。
一、御城中幷御間之內に而も、襟卷いたし候面々有之候。以來差止可申事。
右之趣被得其意、今般段々被仰出候之趣に付而は、各にも心得も可有之候へども、先如斯申渡候條、右等之品々指止候樣夫々可被申談候。此外にも遂僉議追々申渡儀も可有之候事。
〔官私隨筆〕
家作等之儀に付組頭へ申渡候趣覺書寫指進候。右之內舞臺之ヶ條之所重而僉議之趣有之、別紙之通書加組頭へ相渡候付指進申候、以上。

九月廿七日　　　　長　甲斐守

奥村助右衞門殿

一、離れ舞臺之分爲取拂可申候。やね續に而疊入置候分は、舞臺と申に而茂無之候間、萬石以上之人々者不苦候事。

〔官私隨筆〕

家作等之儀に付組頭へ申渡候寫、先達而指進申候。然處別紙寫之文面、重而僉議之趣有之、相省き組頭へ申渡候付、爲御承知指進申候、以上。

九月晦日　長甲斐守

奥村助右衞門殿

且又式臺之內に茂、廣く候而殊之外目立候分有之候へども、御定に相違無之分は、是又只今爲取毀候には不及候。

是月は大盡なり

九月晦日。前田治脩夫人法梁院の一周忌法會を寶圓寺に行ふ。

〔橫山氏日記〕

九月晦日　天氣吉

一、法梁院樣御一周忌に付、今日於寶圓寺御茶湯有之候事。

但、御參詣不被遊候に付、御名代又兵衞被相勤候由之事。

右に付御家中普請は不及遠慮、諸殺生・鳴物等之儀は、當廿八日より晦日迄自分に遠慮可然旨、先達而表方に而觸出有之。且御鷹等扣之儀、當廿四日より晦日迄、御國・江戶共七日宛相扣候樣、若年寄方に而申渡有之候事。

九月晦日。衣類・家作・祝儀等に關する心得方を令す。

〔御觸抜書〕

組頭より着服等人々心得方之儀、別冊之通組・支配之人々江可申渡旨申聞候付、相達御内聽候上、別冊通申渡候樣及指圖申候。御家來心得方も可有之儀に付、右寫一緘爲御承知指進申候、以上。

九月晦日　　長　甲斐守

御馬廻頭覺書寫

一、衣類之儀紬・木綿着用尤に候。帷子も右に准じ、越後縮上品之物は用間敷、成限り下直之處用可然候。袴は京奥嶋以下、幷小倉類より宜品は無用、夏は川越平・葛布類之外は無用。近年川越平与名付宜品取扱候躰に候間、右等之族無之樣、兎角儉約之實意に叶候樣可相心得候。

但、絹之儀は、在合之品抔一向用ひ申間敷儀に而は無之候得共、絹之名目に而も品宜もの用ひ候而は、實意に叶不申儀に候間、可有其心得候。袴之裏者以來茶字遠慮、何に而も麁品可相用候。

一、近年子弟等稽古之時分、着服等宜柔弱に相見え候。勤仕之人々すら前條之通に候間、猶

更麁服麁品、勿論綿衣可然候。併異粧野躰に不相見様、質朴之心得尤に候。
一、女向之衣類、爲禮服共成限麁品可相用。夫は外を勤候而さへ綿衣抔用申事に候得者、妻子之儀者勿論之事に候。箇様之處父・夫等能會得有之、嚴重可申示候。尤召仕候女者、爲絹共可爲無用候。
但、銀笄等尤堅無用、たいまい等上品高料之分是又無用。ちやうせん類不加榮耀品爲用候事に可相心得候。
一、家作之儀は、前廉繪圖等を以頭々江可及示談候。
一、婚禮之儀拵等之趣、頭々江前方先申聞、指圖を受可致治定候。
一、一通り音信贈答堅無用、親子・兄弟等吉事之節茂、鯣三把取遣、其他一切可爲無用候。
一、年頭勤合之儀身當り頭・相頭・一類幷同役・同相組、曁親敷者之外可爲無用候。
但、暑寒者頭等・一類迄可相勤候。
一、三月雛等・五月菖蒲兜抔、至而麁品を相用、初雛・初幟とて右之品取遣堅無用候。
一、葬式之儀、近年餝多、却而不本意に候。以來者尤致省略、行粧等之様子委曲頭江申聞、指圖を請可申候。親子・兄弟等茶湯之節、香奠・精進物類等送り候儀、成限輕可相心得候。
一、近年殺生之具、色々物數寄も有之躰、費之至心得違に候。以來右様之儀堅無用に候。勿

論殺生にも、毎度罷越申儀は可爲遠慮候。

一、親跡目・轉役等被仰付候節、當日一類之外祝に罷越候樣申遣間敷候。右一類之分は、輕く一汁・一二菜之掛合可出之候。同役・同相組之外者、普爲聽も申遣候儀可爲無用候。

但、右御禮之節は、家內迄に而相祝、一類たり共相招候儀指止可申候。且表立候祝事さへ如斯に候得者、無據儀に而一類打寄候節抔、別而可有心得事候。

以上

九月。文化十三年以後利子の支拂を中止したる諸郡調達銀に對し每年少額の米穀を與ふべきことを告ぐ。

〔上田觸留〕

御勝手累年御難澁に付、文化七年以來御算用場印切手を以、御調達銀追々御返濟有之候得共、御手繰六ヶ敷故、先利足迄御渡被成候處、同十三年七月よりは利足も御渡無之候。併不足御渡方無之儀甚以如何之儀、尤御手繰六ヶ敷故無據右之通に候得共、議定之筋も相立兼候に付、打返遂僉議、御郡方に而御調達御返濟、當時殘り銀高六百六十四貫目餘之內四百五十三貫五百目餘之方へ、當年より每歲御米四百八十石宛相渡、殘而二百十一貫目戶出村茂兵衞御調達銀之方江、同二百五十石宛相渡、改而證文可相渡候條、先達而相渡置候御算用場印切手可指

出候。右之通りに而は、永年賦にも相當り、一統迷惑に可存候得共、御當節之儀僉議方無之候間、幾重にも致會得候樣可申渡候、以上。

庚辰九月

千羽彦太夫
永原貢
在大坂　小竹茂右衛門
同　大村友右衛門
原倉所太夫 役引
木村彌右衛門 役引

諸郡御扶持人・十村中

但、右之御米加州御藏所に而申請、代銀に而諸郡配當いたし候也。

九月。金澤兩茶屋町の茶屋女に關する規定を公布す。

〔觸留〕

金澤卯辰・石坂兩茶屋町

茶屋女御定書之事

一、茶屋店上中下三通り分而、上茶屋・中茶屋・下茶屋に相極、女直段竝衣裳大體左之通。

一、金壹歩、衣裳御國出來縮緬迄、帶織物類。
但、此分追而全盛之者出來候上相定可申。尤右は上中下何れの茶屋に出來候とも、參會は
上茶屋迄に限り候事。
一、銀拾匁、衣裳大體右に準じ可申候事。
一、同貳朱、衣裳絹・紬等之內、下着は縮緬、帶は織物類。
但、此分は相互に入交り、一座可然、勿論鳴物儀は勝手之事。
一、銀五匁、衣裳糸入島、時宜により紬類迄、帶は縮緬より下品糸織相用候事。
一、同三匁、衣裳糸入島、帶は縮緬迄。
但、兩樣は相互に入交り一座可致。勿論鳴物三味線迄相用、其外禁可申事。
右直段之五通り之女、何れ之茶屋に上中下抱置候共、其儀は無差別候。若下茶屋に十匁之女
有之候共、下茶屋に而座敷不相成、上茶屋幷中茶屋迄出し可申。若上茶屋幷中茶屋に五匁之
女有之候共、其茶屋に而は是又座敷不相成、下茶屋に出可申候。
附、假令十匁之女勤方劣候はゞ、直段引下げ可申候。五匁之女たりとも、勤方上等候はゞ
直段引上げ可申。尤座敷出方之儀は、本文に倣ひ可申候事。
一、勤方刻限、朝六つ時より晝八つ時迄一座、晝八つ時より暮六つ時迄一座、暮六つ時より

夜四つ時迄一座、夜四つ時以後一座。都合晝夜に四會之定に相心得候事。

一、大體一座小ぶた類之内吸物・さしみ類迄に相心得可申事。尤右樣に不及分も有之、又は客之好を受、出し候儀は不苦、何れ一座之模樣見計可申候。何分押而出候儀、堅仕間敷候。

一、客罷歸り候節は、若模樣により送り申儀に候はゞ、木戸際迄は不苦。木戸より出候儀は堅禁候事。

一、座中女共互に內談、或は自分外客江立行候而嘲咄等、堅仕間敷候。ひたすらもてなし而已相心得、都而無禮無之樣、常々急度可申付候事。

一、夜具之儀は、女方より出し、持參可致候事。

一、客より送物取候儀は、其品物見計、爲祝儀一割、茶屋江心付可致候事。

一、惣而女直段之內、本方茶屋小割幷に御役所除銀之御定等割、冊帖面之通急度相守可申候事。

一、客方・本方茶屋取引之日限、三月十日・五月十日・七月十四日・九月十日・十二月晦日、右に相極可申候事。尤茶屋方より花方へ對し不差引有之時は、客方より指引に無貪着、店に名前帖面拔出し、差引相濟迄女取引無之事。

一、惣而女門外致候刻は、上茶屋當町十四軒之內兩人月番相定置、右月番之內申入、通札を

給可申候。尤上茶屋印鑑爲見合、兼而より木戸番所江出置可申候事。貳朱以上之分門外之節者一人に一匁にて、同五匁以下之分門外之節者一人に三分にて相渡、請取可申候。尤除銀は毎月遂勘定、上納可仕候事。

附、親病氣故障共有之外出之儀者、其段及斷、札を受可申迄に而、出銀出し申に不及候。

併歸宅は夜五つ時を限り、若夫より遲刻に及候はゞ、木戸番・月番より相糺可申事。

一、客方若年親懸り之人、或は手代主人持之者は、分限を見計可申、猥に引込不申様、茶屋中相互に急度吟味可仕候事。

一、客方見知らざる者は、一切仕間敷候。若同道之者見知有之候而請人に取候者、可仕候。尤名前帖面に記置可申事。

文政三年辰九月

惣茶屋中江

十月四日。算用場奉行その支配の者に對し省略の心得を諭す。

〔被仰出之趣御書立〕

附札、御算用者小頭中等江

今般五ヶ年御省略且諸士風俗等之儀、具に被仰出候趣先達而一統江申渡候通に候處、支配之

人々之内心得方等致會得、宜き人々も相聞え候へども、人多之儀に候へ者、其内には心得方未致會得人々も可有之哉。依之人々著方等心得に可相成儀遂僉議申談候。

一、支配之人々者御公界向之勤仕者無之、都而御勝手向御財用方而已相勤候事に候へば、平生衣服之儀麁服に而も不指支事に候。尤麁服被用候人々も有之候へども、猶更以來者綿衣着用、帷子も右に准じ、越後縮抔上品之分者用間敷候。禮服には絹等茂着用不苦候。袴は下直成小倉織等・葛布類着用可有之候。乍去江戶等江相詰候人々、御用向に寄御外邊も有之儀に候得者、是迄之通分限相應に可被相心得候。

一、年頭勤之儀、拙者ども幷小頭、曁一類・同役親敷者之外可爲無用候。暑寒は拙者共等・一類迄可相勤候。

一、家內妻子衣服之儀、近くは高料成品々も爲相用候人々も有之候樣風聞いたし候。尤其父・夫等之服に順じ着用可有之候。中には禮服に、地黑之上着など着用致させ候人々も有之候由。右は御目見以上之家內之服に而、必有間敷事に候。全く心得違に候間、以來者地白之上着幷絹・紬等之外、宜き品堅く相用ひ申間敷候。尤可成たけ綿衣着用可有之候。女子は其程合之辨へも無之ものに候得者、父・夫等より能々致會得候樣可被申談儀に候。

但、銀之笄等尤堅無用、たいまい櫛等上品高料之分是又無用、ちやうせん類不加榮耀品爲

用可申候。

一、三月雛等至而麁品を相用候儀は格別、初雛とて雛等取遣一切可爲無用候。五月之幟抔も是又可爲無用候。

一、中には家來男女召仕候人々も有之樣に相聞え候。少祿に而は格別人少に無之而は、男女兩人者難召置筈に候。畢竟僭上之心得より發り候事に候。右樣之幕方に而は次第に及難澁、小頭中奥書等之借用銀等を以取續申候外無之候。段々難澁に逼り候得者、自ら御奉公之筋も心外等閑に相成申所〻至り、甚恐入申事に候。加樣之處以來被相改、御切米之人々は、一人家來召仕候ものも小僕召置候へば、亭主は勤仕も有之晴雨之節何か爲にも可相成、是等之儀家内之者心得方專要之事に候。少祿之家内は兼而覺悟も可有之筈に候得者、内輪切之儀下女之仕業も働候はゞ、全く世帶行屆可申哉に候。且又女子に三味線など稽古致させ候人々も有之候。是等者無用与心得候而も可然、幼少より隨分讀書・縫針等爲致、小祿之世帶をも不持兼樣に仕立可被申候。御切米取に而琴・三味線など翫候樣成世帶、先者無之候。將又妻女等、寺庵等〻年頭・盆中等之外は參詣有之間敷儀に候。中には每度寺庵〻致參詣候方々も有之樣に相聞え候。女者内輪切之世帶而已前文之幕方に罷在候へば、每度寺參詣抔之隙者無之筈に候。尤其主じ之了簡急度可有之事に候。

一、家作之儀、近年分限不相應成普請致候方も有之様に風聞いたし候。此儀は別而被仰出も有之候へば、得と詮議之上品に寄追而可申渡儀も可有之候。猶更以來家作致候歟、又は古家たりとも求候はゞ、委曲繪圖面被取立、拙者どもゟ可被申聞、其上可及指圖候。

一、緣組・養子願書指出候以前、双方示談相整候はゞ、取遣等之儀先各被承、格別相替儀も無之候はゞ願書請取可被申候。

一、葬式之儀、近年飾多却而不本意候。以來者尤省略いたし候趣、委曲各被承屆可有指圖候。

一、先祖等年回に付寺ゟ爲茶湯料、銀十五匁を限可遣候。內佛においても右に准じ、輕く茶湯有之、精進物類等送り候儀も候はゞ、至而輕く可相心得候。

一、親跡目等被仰付、又は被召抱候人々、當日一類之外祝に罷越候様申遣間敷候。其餘者仲間たりとも、普爲聽紙面等指遣申間敷候。祝候品は小ぶたに酒指出可申候。若時刻移り候はゞ、一汁一菜之賄輕く出可申候。尤深更におよび候迄何も長座有之間敷候。親類等より爲祝儀干肴類一種相送り可申、たとへ者鯣三把より過不申程之品相送り可申候。二種は無用に候。

但、右之通表立候祝事さへ如斯に候へば、無據儀に而一類等打寄候節抔、別而其心得可有之事に候。

一、親類等之內他國詰等之人々發足之刻餞別等致し、且罷歸候節土產物等贈候儀無用之旨、前々被仰出候通、急度可被相心得候。別而今般被仰出候上は、猶更嚴重可被相心得候。

一、近年被召抱候人々之內、書算等未熟に而全く御用立兼候人々も有之樣に相聞え候。拙者共夫々見分之上、相願被召抱儀に候得者、誠に拙者ども〻心配之至に候。年若成人々は其心付も無之、被召抱候上は兎角入情も無之樣に相聞え候。是等は其父兄等之甚油斷に候間、猶更可被相心得事に候。且又書算等爲稽古、相弟子等打寄申儀も可有之候得共、稽古に事寄無用之參會有之間敷候。如何にも入情、終日等稽古之節者尤燒飯持參可有之候。

右之條々拙者ども格別遂詮議、御樣子も有之儀に付、重而右之通申渡候間、此上不被相改人々も有之候はゞ、其段可被申聞候。品に寄不得止事可及言上儀も可有之候。御家中勝手向之儀は、今般格別御心勞被爲遊被仰出候へば、無勿躰も是迄之風俗等は嚴重に一統不相改而は、冥加にも盡果候儀に候條、此上心得違有之候而は、各儀は不及申、拙者共にも甚不行屆儀に相成、致迷惑候間、人々會得之程專要に可被相心得候。猶又追々心附候品可申渡候へども、先存付候品迄申渡候。支配之人々爲にも可相成儀、各にも被心付候儀有之候はゞ、無泥被申聞候樣有之度候。是等之趣一統江被申談候上、夫々請書取立可被指出候、以上。

右之趣各並之人々江も承知可有之事。

辰　十　月

今般被仰出之趣に付、拙者共存寄別紙覺書一通相渡之候條、被得其意、一統へ被申談、各を初請書可被指出候、以上。

十　月　四　日　　　　　　遠　田　誠　摩

小　頭　中

同　並　中

十月四日。能登の生海鼠漁獵に就いて令す。

〔留帳拔書〕

付札、能州御郡奉行江

御獻上御進物御用串海鼠、十ヶ村に而捕揚候所、近年無數、御用數全く相揃不申儀も有之候。依而御用之員數相濟候段、所口町奉行より浦々十村共江申遣候迄は、生海鼠獵業致入情、串海鼠師手前江賣渡候樣、十ヶ村獵師共江可被申渡候。若紛敷取扱方有之において、爲跡々所口町奉行手前江取揚、樣子相糺候上、咎申付候儀も可有之候間、此段各よりも被申渡、御縮方相立候樣可被相心得候事。

庚　辰　十　月

右寫之通御勝手方御年寄衆より御渡に付、相越之候條、得其意、右村々獵師共江嚴重に可申渡置候、以上。

辰十月四日　　有賀甚六郎

能州十ヶ村裁許有之十村中

十月五日。町會所より仕送銀を受くる諸士にその放漫を戒む。

〔官私隨筆〕

別紙寫之通定番頭へ申渡候付、爲御承知進之候條、御組へも御觸可被成候、以上。

十月五日　　村井又兵衛

奥村助右衞門殿

定番頭江

町會所仕送之人々、次第に不時入用願多相成、近年盆・暮には必不時入用受取候事之樣に心得、其上にも例年定式不時入用銀何程充請取候へ共、當年は別而不時入用多、例年之請取高に而は指支候間、何程增請取度抔と申儀追々致增長。元來仕送り之儀者、誠に難澁至極に而勤仕茂指支候人々、格別仕送被仰付候御趣意に候へ者、如何にも難澁に相暮可申處、暮方自由に成候へ者、自然与不時願茂多、貸附高茂相嵩み、小祿之人々は二・三年之收納高茂前繰

に相成、中々勝手取直之期茂不相見故、早く引取申度了簡茂無之、色々与申立を以、不時銀餘分可請取工夫而已之躰に相見え、其上二季に定式渡り方も多分前廉繰上請取、一旦之手廻には可相成候へども、畢竟跡引に相成候貌に而是等貸附高相增候基に候へ者、身爲にも不相成、且又一兩年米價下直に而、拂米代過分入不足に相成、町會所調達方も指支候。今般風俗暮方等之儀段々被仰出茂有之上者、仕迯り之人々急度心得有之、圖り帳之表相守り、早く勝手取直し方專一に相心得、何分不時願暨繰上げ成限請取不申樣可相心得候。尤町奉行へも、不時願等容易不承屆樣申渡置候。右之通申渡候上にも、不心得之請取方有之人々は、町奉行より可及言上旨被仰出候條、以後自由之請取方有之人々は、品に寄御咎被仰付候條、其趣に可存候事。

右之通被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配へも相達候樣可被申聞候事。

右之通一統可被申談候事。

庚辰十月

十月十日。五ケ年間省略の爲式服に大紋等及び長袴の着用を廢せしむ。

〔横山氏日記〕

十月十日　快晴、夜中少々雨降

一、左之通今日表方より御家老・若年寄に演述有之。

御横目江

當年より五ヶ年中御省略被仰出、年頭之御規式等も御差略に付、諸大夫之面々大紋等着用指止、一統長袴着用之儀茂相止可申候。且又年頭を初、都而御禮人幷披露役等之面々、熨斗目・上下等時々相改候に不及、在成を用可申候。

右之趣不相洩樣夫々可被申談候事。

十　月

十月十一日。年頭の作法・儀式等に就いて省略の法を定む。

〔官私隨筆〕

今般年頭御作法・御規式等御省略就被仰付候、年禮勤之儀も差略之儀、別紙之通相窺候處、伺之通と被仰出候付、爲御承知進之候條、御組へも御觸可被成候、以上。

十月十一日

年禮勤之事

一、年寄中相互勤合之事。

一、年寄中嫡子同席勤合無之事。
但、續有之分は勤合候事。
一、御家老中は組頭迄相勤候事。
一、年寄中組・支配之人々は相勤候事。
一、御用番支配之內、常々心安頭分年頭罷越候而茂、爲返禮相勤不申、使者指遣候事。
一、組・支配之外人持等御用番支配之外、頭分幷平士若相勤候而も、返禮に及不申事。
一、跡組之分は支配之年寄中迄相勤候事。
一、組・支配之人々嫡子は年頭迄組頭へ相勤可申候。尤二男・三男者相勤候に及不申候事。
一、在江戸等之人々より年頭等書狀指越候而も、親類・緣者・組・支配等之外へ者不及返書等之事。

十　月

十月廿二日。大村壯助等不行跡を以て流刑に處せらる。

〔横山氏日記〕

十月廿二日　曇

一、左之通今日表方に而頭々江申渡有之候事。

松田五郎兵衛江

大村壯助

右壯助儀所行不屆至極、不埒數を盡し、沙汰之限りに付、越中五ヶ山之內に流刑被仰付旨被仰出候條、可被申渡候。

但、流刑被仰付候迄之內、一類共江御預被成候條、急度縮仕置候樣可被申渡候。尤一類共交名可被申聞事。

庚辰十月廿二日

小泉十郎右衞門・木梨左兵衞江

星野九右衞門弟 傳藏

與三次郞

右兩人不埒至極、諸人之害に相成候儀、沙汰之限りに付、越中五ヶ山之內江流刑被仰付旨被仰出候條、可被申渡候。

但、流刑被仰付候迄之內、九右衞門幷一類共江御預被成候條、急度縮仕置候樣可被申渡候。尤一類共交名可被申聞候。

庚辰十月廿二日

青山將監等へ

貞琳院樣附御用人　粟田與左衛門せがれ　與　八　郎

右與八郎儀、不埒至極無十方致方等有之、沙汰之限りに付、能州嶋之内流刑被仰付候條、可被申渡候。

但、流刑被仰付候迄之内、親類共へ御預被成候條、急度縮仕置候樣可被申渡候。尤交名可被申聞候。

十月廿七日。明年以降三歲駒市と二歲駒市を各別に開くべきことを告ぐ。

〔官私隨筆〕

馬市の儀、來年より四月三歲駒、五月二歲駒と、兩月に市相建申儀等、御馬奉行より別紙寫之通申聞、一往相伺候上、其通相心得候樣申渡候。右爲御承知、別紙繼立一通進之候、以上。

十月廿七日　　　　前田土佐守

奥村助右衛門樣

市場仕法、三歲・二歲と兩度分相建候はゞ、自ら賣買多に相成、自然自・他國共進み宜敷旨博勞一統相願候。右趣意は、越前等都而上方筋は、四月中旬より五月初迄耕作馬烈敷入用之樣子に付、別紙之通三歲市繰上候へば、賣買多に相成、三歲駒主共旣明候上二歲駒相求候付、

萬端手廻宜人々進相成候躰、御馬奉行・加州御郡奉行手合に而又々遂僉議申候。依而別紙仕法之通、飼料代等被下候而も御費にも相成申間敷。依而却而市馬賣捌等都合宜儀も可有御座と奉存候間、彌其通可被仰付哉、猶御指圖御座候樣仕度奉存候、以上。

九月　　御馬奉行

三州御郡奉行

一、撰御用相廻り候御馬役等、近例之通二立に仕、三月朔日・二日頃、近村三歲駒於堂形御馬場是迄之通爲相撰、同五日能美郡へ發足、同十六日頃中歸、同所三歲駒同二十三日御當地へ爲牽揃、左之通御召上幷爲致市賣買可申候。市相濟候上、右御役等四月十二日爲致發足、越中二歲駒爲相撰可申候。能州へ罷越候御馬役等は、三歲市に不拘、四月朔日頃爲致發足可申候。以來撰方之儀は、去年之通三歲・二歲共、御用駒・市御用駒と分而爲撰可申候。

一、能美郡三歲駒、三月二十三日御當地へ爲牽揃、同二十五日近村三歲駒と一集に遂內見候上、若年寄衆御見分、其後御召上被仰付、殘駒之分市場相建候前日迄に、御年寄衆等御望之御方々へ爲牽廻可申候。四月五日より市場相建、十一日迄日數七日爲致賣買可申候。御用駒之分御召上相濟候上、御年寄衆等御用事も無之候へば、市場へ爲引出可申候。其上に而も賣殘候節は、逗留二十日計に相成、一疋に付六貫文餘失脚相懸候間、飼料代三十目宛可被下、

市懸之分は四月二日頃爲牽揃候に付、賣殘之分は定式之通十五匁宛飼料代可被下候事。

一、越・能二歳駒御用懸之分、五月四日爲牽揃、同六日遂内見候上、若年寄衆御見分、其後御召上被仰付、殘駒之分、市場相建候前日迄に、御年寄衆等御望之御方々爲牽廻、十六日より市場相建、同二十日迄日數五日爲賣買可申候。御用駒之分御年寄衆等牽廻相濟候上は、市場へ爲牽出可申候。右之通申渡候得ば、二歳駒御用懸之分逗留十八日計、一疋に付六貫文計失脚相懸り候間、右之駒へは當年之通都而金百疋宛御廐方より可被下、御年寄衆等御用事無之、市場に而も賣殘候節は、市懸賣殘り駒と同樣、別段十七匁宛可被下候事。

十月廿八日。仕法調達銀上納及び返濟の期限を明後年以後更に五ケ年間延期することを告ぐ。

〔留帳拔書〕

御家中を初一統勝手爲成立、去々年以來御仕法御調達銀被仰付置、來る未・申兩年には右濟方可被仰付處、過分之御出方に付、尙更御議定相懸候樣綿密に遂詮議可申旨に而、今度私共主付就被仰付候、打返遂詮議候處、當時御勝手向以之外御危迫、其上今般五ケ年格別御省略被仰出、曁當時世上一統銀支之躰に而、乍少分上げ人手前も指支可申候間、濟方五ヶ年繰下之儀、御勝手方御年寄衆へ御達申上置候處、被相達御聽、都而私共詮議之通、何分嚴重に濟

方之儀遂詮議可申旨被仰出候段、村井又兵衞殿被仰渡、此段御一統江私共より可申談旨被仰聞候に付、私共詮議書一通相添指進候條、御承知被成、御同役・御同席御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之內裁許有之面々は、其支配江も不相洩相達候樣、是又御申談可被成候。御順達落着より御返可被成候、以上。

十月廿八日

木梨左兵衞

竹田彥六郎

有賀甚六郞樣

左之通詮議相改候。

一、御家中を初一統御仕法銀、兼而極之年限より末五ヶ年繰延之割合を以、當十二月上高より減少に相成候。併末年迄之惣上銀高之儀は、最前圖り高之通之事。

但、割合等之儀は、春に至り御仕法方役所承合可申事。

一、是迄御仕法方より貸付銀は利一步、手形銀者一步二朱之圖りを以貸付來候得共、當十二月貸付より以來は、都而八朱之利立を以貸付可申候。尤人々江被返下候節も、先達而極之通八朱利立に候事。

一、御仕法貸付銀年賦に相成居申分、都而是迄極之通相心得可申候。末年賦不相極分は、都

而當年より六ヶ年賦を以可致返上、元銀當月幷正月より六月迄之利足共七月十日迄、同七月より十二月迄利足銀は十二月廿日迄に御仕法方江可致返上候事。

但、今年當元銀之分は、當十二月廿日迄御仕法方江可致返上候事。

一、御仕法外一作上銀、幷年賦を以指上候分共、來る丑年に至八朱利付を以可被返下候事。

但、去々年以來年賦を以指上候分も、五ヶ年繰延に指上可申候。併最初相極候年限に指上度人々者、勝手次第に候。尤其人々は來月十日迄に無間違可有御書出候事。

一、御仕法幷御仕法外に指上銀仕置候人々之內、無據筋に而是迄指上置候分上げ切に仕、已來難指上願候而格別承届有之分、幷當人病死仕舊宅茂難澁に付、以來不得指上旨依願承届置候分、此兩銀來る丑年に至り、無利足を以、上げ置候分迄可被返下候事。

但、諸式退轉組柄之人々は、病死後難指上願可承届候得共、追而名跡被召抱候上、先代上來候通指上候人々は、來丑年八朱利足を以元利共可被返下候。先代指上來候分致上切に、引續指上不申分者、來丑年元銀迄可被返下候事。

一、每歲兩度鬮取之儀は、於御仕法方役所、私共幷御步横目立會見屆候事。

一、御仕法外一作上げ銀等仕人々之內、一作上げ切に仕候段紙面に記有之分も有之候得共、多分一作指上申度与迄記有之、上げ切又は御仕法濟に上置候分請取度との文面不分明之上切

之人々江者、詮議之趣有之候間右兩様之内上置候人々手前御聞糺、來月十日切に御仕法方役所へ御書出し可被成候事。

右之外都而是迄相極居候通之事。

辰　十　月

右之通申來候條、可得其意候。猶又御仕法所承合、追而可申渡儀も可有之候、以上。

有　賀　甚　六　郎

能州四郡御扶持人・十村中・新田裁許中

山廻り中・山廻り列中・無役御扶持人中

十月廿九日。家中の諸士請地をなすもの丶地子銀上納期限を守らしむ。

〔官私随筆〕

別紙寫之通定番頭へ申渡候條、爲御承知進之候條、御組へも御觸可被成候、以上。

十月廿九日

定番頭江

御家中之人々請地地子銀、御定之通毎歳可致上納處、近年難澁を申立、期月上納相滞候人々も有之、時々御普請奉行より頭・支配人等へ及催促候へども、速に上納無之、勘定方難相立、

御不益之筋茂有之候旨等、御普請奉行申聞候條、向後右等之趣相心得、等閑之儀無之、毎歳三月・七月・十一月、右三ヶ月二十日切御知行・御扶持方・御切米之人々共、無間違可致上納候。且跡目等被仰付追取立之分も、御普請奉行指圖之通、無相違相心得可申候。右之通被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配江茂相達候様可申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

辰十月

十月。金澤卯辰・石坂の茶屋町に郡方の者の遊興を禁ず。

〔留帳拔書〕

金澤犀川筋・淺野川筋於兩所、場所相極茶屋出來、女を指置候儀御聞届相濟、追々出來之躰に候。右場所江御郡方之者堅罷越申間敷候。若心得違之族有之候得ば、急度可相糺候條、無違失相心得候様一統嚴重に可申渡置候。

右之趣可得其意候、以上。

辰十月　　有賀甚六郎

御扶持人・十村中・新田裁許中

山廻中・同列中・無役御扶持人中

〔兩茶屋町一件〕

付札、町奉行江

犀川・淺野川兩所に場所相極、茶屋出來、女指置候付、右場所へ御郡方之者ども入込候儀は、公事場において貪着無之、御郡奉行等之詮議次第に有之度旨。且茶屋抱女之外、他より女を召連罷越候儀指免し、抱女等園外へ相雇候儀等は、一圓不爲仕候得共、假令佛參等に茶屋より人を添遣候儀は差免し置可申候。公事場において賊等之懸合有之候はゞ、其儀まで吟味有之様致度旨被申聞候。御郡方之者どもの儀右場所へ不罷越儀、御郡奉行等嚴重に申渡置候儀に候條、吟味方に而相顯れ候節は、公事場において御格之通取捌候様に申渡候。且抱女之外他より女を召抱罷越、暨抱女佛參等に茶屋より人を添出候儀は、可爲其通候。右之趣相達御聽にも、公事場奉行へ申渡候條、可被得其意候事。

文政三年辰十月

十月。河北郡淺野の革多等癈馬を藩外に出すことの禁止を稟請す。

〔留帳拔書〕

加州・能州斃之牛馬等、重き御趣意を以私共可爲裁許旨等被爲仰付置候。元來牛馬之儀は、第

一御軍用且御平日御用等之品に而、先年より御定之趣も御座候而、全斃牛馬取縮等仕來候所、近年斃牛馬等拂底に而、御收納皮等指支候儀も御座候得共、遠國等所々欠廻り、右牛馬皮等買集奉指上候儀に御座候。然處加・越・能博勞中老牛馬等悉く上方江牽洩賣買仕候由に而、先年より堅御停止之儀に而、私共夫々相咎、時々御達申上、御詮議等被仰付候得共、就中御當所馬方御仕法被仰付候に付、御口錢を以博勞中若馬之中江右老馬等入交、能美郡牛馬御改所を通抜、或は山道裏傳抔仕、老牛馬悉く牽洩候儀に御座候。牛馬之儀、若き間耕作之働に飼置申儀に候得者、斃死迄は飼可申筈に御座候所、老牛馬に至り博勞中江手放し仕、他國江賣出候儀、前段申上候通堅く御停止之儀に而、御縮方等相立不申、且御用皮等之指支に相成、私共職方次第に薄く相成、難儀至極仕候間、何卒加州・能州博勞中江嚴重に被仰渡被下候樣奉願上候、以上。

辰　十　月　　　　　　　　淺野村皮多肝煎　清　三　郎

　　　　　　　　　　　　　同　　組合頭　安右衛門

淺野村肝煎　彌右衛門殿

御口錢を以ての次脫文あるべし

十一月四日。綿打職の半役上納の件を通牒す。

〔留帳拔書〕

綿打半役願先達而御書出に付、其節御達申上、頃日奉窺候處、御書立之通、冬春耕作透之時分綿打候者は半役取立可申旨、御郡所より被仰渡に御座候間、左樣御承知、夫々御申渡、御取立上納可被成候。先々飛逕りを以早々御順達、落着より御返可被成候、以上。

十一月四日

高田由五郎

三階覺右衞門

仲間宛所

十一月十日。文化十四年町・在より借上げたる銀子の年賦返濟を本年より省略中延期すべきことを告ぐ。

〔筒井觸留〕

御勝手向累年御難澁与申內、御借財高も相嵩み、誠に被成方も無之族に付、今般五ヶ年中格別御省略被仰出、諸向御入用方追々相減可申候得共、第一莫大之御借財に而、御利足迄御渡高も過分至極之儀。幾重に御省略被仰付候而も、右之通に而者御運方出來兼申候間、重々御詮議之上、文化十四年三州町・在御借り銀年賦御渡方、幷先年書上銀等之方へ御渡銀共、五ヶ年中御猶豫之儀、先達而及御達候處、今般御手繰方等之儀奉恐察、町方之者より爲冥加銀子等指上度旨申出候處、御上より御渡方ヶ樣に有之候而は如何に思召候而、今一往遂詮議候

様被仰出候。乍去一統恐察之通り、不一形六ヶ鋪、御運方如何共取計方無之、第一御借財高之仕法無之而は、可也に御運方出來之處江も至り不申儀故、詮議之趣重而御達申上、不得止事當年より御省略中御猶豫之儀、當所町奉行江も申談候間、右繰延之儀、各支配所品能夫々御申渡有之候樣に与存候、以上。

省畧中は本年より五ヶ年なり

十一月十日　　　　御算用場

有賀甚六郎樣

中村逸角殿

御勝手御難澁に付、今般格別御省略被仰付候へ共、御運方御指支に付、文化十四年御借り銀年賦御渡方、幷先年書上銀等之方へ御渡銀共、五ヶ年中御猶豫之儀、別紙之通り御算用場より申談有之候條、得其意、夫々可申渡候。元來御勝手御難澁、御借財高も過分至極に而、御手繰御指支之御樣子者、先達而も段々被仰出之趣、一統奉恐察罷在候儀。殊に右御返下銀御猶豫之儀、再往御穿鑿被仰出候儀も不容易御事に候條、是等之趣何も得与奉恐察、何分致心服候樣、裁許々々手前において、右銀主共江品能可申渡候、以上。

辰十一月廿四日　　　　有賀甚六郎

能州四郡御扶持人・十村中

十一月十二日。他國産紺屋刷毛の輸入禁止に就いて通牒す。

〔留帳拔書〕

御國製紺屋刷毛出來に付、他國入刷毛指留、且是迄取寄置候刷毛員數取しらべ被指出候樣申渡候。夫々取しらべ被指出置候分、御當地刷毛主付宮保屋次兵衞相廻り極印打候段承屆候條、右之趣夫々被申渡、賣殘り候分極印不洩樣可請置間、是又可被申渡候。發足時節之儀は追而可申達候、以上。

十一月十二日　　　　　　　　産物方役所

有賀甚六郎殿

中村逸角殿

十二月十三日。經費省略の爲に料紙の使用を減ずべき方法を講ず。

〔横山氏日記〕

十二月十三日　夜前より雪降、今朝より晴

一、左之通演述有之に付御家老・若年寄方茂同樣相心得候段、關屋中務を以申上置候事。

但、執筆を以中務ゟ申入候事。

今般格別御省略被仰出候に付、私共席料紙遣方減少之儀僉議仕候。就夫奉伺候紙面等、品に

より下書之儘に而奉伺候はゞ、少分ながら料紙相減じ可申候。御加筆可被成下窺紙面は、尤本紙に而奉申上候。安永二年御省略之儀被仰出候節、御用所抔にも料紙省略方之儀、僉議之上月並御献上物等之儀伺紙面、直に留に仕候様小紙に調奉伺、今以共通に御座候。右等之振も御座候に付、一往奉伺候事。右御用番より被相伺候處、伺之通与被仰出。且御加筆も被成下品に而も、反古に而も御貪着不被遊候間、御省略に相成候様被仰出候間、此段御家老方・若年寄方江為承知被申達候旨、原篠喜兵衛を以演述之事。

十二月十四日。諸浦魚口錢の上納を嚴重に調査すべきことを告ぐ。

〔國事雜抄〕

去秋諸浦へ申渡候魚方仕法、當二月以後右仕法通、一統嚴重に相守可申處、中には心得違之ヶ所も有之哉に相聞え候。其中魚津抔は、仕法通嚴重に相守居候躰にて、口錢も時々綿密に指出候。自然心得違之ヶ所も有之候而は、魚方御仕法締方不相建儀に候條、諸浦共當二月より之獵魚高に應じ、綿密に取しらべ口錢可指出候。此上心得違之ヶ所は、役人共相廻、嚴重に爲遂穿鑿候條、此段も兼て可被申渡置候、以上。

辰十二月十四日　　　　産物方役所

遠所奉行連名殿

十二月廿一日。他國に使者を勤むる者の貸渡金高等に就いて告ぐ。

〔御觸拔書〕

別紙寫之通定番頭江申渡候に付、爲御承知進之候、以上。

十二月廿一日　村井又兵衞

付札、定番頭江

他國江之御使人、振離御一門樣方御國許等江之御使者は、於先々萬事不辨之儀故、先可爲是迄之通候。是以遂省略候而不指支品は、相省可申候。江戶・京都江之御使之儀は、於彼地萬事自由之儀候間、旅中行粧減方有之可然候。依而是迄定式御貸渡高之外、不時願一圓不承屆候。併格別非常之物入等有之分は、其時々可遂僉議候。京都江御使之儀者、於彼地之行粧等は是迄之御振も有之候間、其趣を以彼地詰人手前江引請取捌、御上より可被仰付候。

一、御使人御貸渡金高、以來左之通被仰付候。

人持三千石以上	四百兩
二千石以上	三百兩
千石以上	二百兩

諸頭是迄之通。

平士八百石以上　　諸番頭之通　六十兩

右以下者　　是迄之通　五十兩

但、江戸・京之外遠國江之御使被仰付儀有之節者、其節猶又可遂詮議候。當躰寄途或は急發等之申立に而、不時願之儀一圓不承屆候。

一、御内輪之御用に付江戸表江出府之人々、品に寄是迄御使並御貸渡金有之候得共、以來被指止、請人並會所銀借用被仰付候。

右今般格別御省略に付、御使人行粧省略等之儀、相伺候上如此被仰出候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配江茂相達候樣可被申聞候事。

右之通一統可被申談候事。

庚辰十二月

十二月廿八日。富田景周藩政の釐革に關して建言す。

〔富田痴龍上書〕

今般御勝手御危迫に被爲及候に付段々被仰出、且就夫心付之儀は人別に可奉申上之旨被仰渡

候。有徳院様江戸日本橋に高札被爲建、御政事に於て少しにても御爲と心づき候儀は、無遠慮言上可仕旨被仰出候。此儀は今誰彼申傳、舊記にも相見え、拔群の御大量と奉感賞候。又荻生惣右衛門などへも被仰付、享保中無泥了簡通り政談に書したゝめ献上せさせられ候。其後ヶ様之儀曾而承及不申所、今度心付之人々右可奉申上之旨被仰出、誠に暗符仕候御明君之御揆、書經にも好問則裕也自用則小と有之、難有御儀奉存候。私儀元より管見にて、愚者之一得だも無之、其上其位にあらざれば其政を謀るべからず。越俎の罪奉恐入候へども、此節指扣へ心附之趣不申上も、御恩深く及極老、隱居まで結構に被仰付候自分、却而失本意候様に相當迷惑仕候故、御頓益之御捷徑には無之候へども、御命令にまかせ献芹之愚誠謹而左奉記上候。

一、凡國政は、何を本とし何を規矩として行ふと云事を第一儀とす。されば人君は公を主とし遠略を宗とし、其大本を見、人情を恕りて寛簡の政を行ひ、先王の聖教を規矩とすべし。人君みづから私智を用ひ、繁苛叢脞の法令を企て、しば〳〵更張の政あるは、先以上信を失ふのみならず、人民の心動き、愈おのれ〳〵が利得を失ふまじと僻み狐疑用心するより、上下互に靜ならず、隨て財用の費も多くして、是貧困の基を招く媒也。扨右の大本と申は他事にも無御座候。乍恐御前いかほど御聰明にて、御聖徳の御智見あらせられ候とも、三州の

廣き士民の多き、御一人の御力にて萬事御經濟を御取、人毎に悅ばしめさせらるゝものにあらず。しかれば才智德行の人を御目利を以て擧用ひ給ひ、之に其職々を御授、末事に御自から勞し給ざるぞ君上の御度にて、是を知人と申て人君の大智と仕候。是卽ち堯舜の道にて、書經に知人と有之は此儀に御座候へば、莫大之人々の其々人々の器量德行才識等、夫々被爲知召事は至而むづかしく、夫故知人は堯舜も難しとの玉へる也。殊更德ある者は名を賣不申故、外よりは容易に見分けがたく御座候。乍然此儀は君上の御職分に御座候へば、書經のする所の九德の法、及び孔子の其所以其所由其所安を以て、觀人の法又人の過ち各其黨に於て觀る法などを御考合被爲遊、いかにも御偏聽なく、衆言の公を以て其人の行事の實に御目を附させられ、親疎內外の御差別なく、先づ一人德行誠廉學文有之、さのみ頓知は無之とも取曖方も意得、第一行狀よく年高く、人情世態に通達し、多言ならず、諸人歸服可仕者を御撰み擧被遊、扨卿大夫の內一人思召に隨ひ候者を御政務樞要に委任被仰付、それに彼者を御指副、萬事是と相議し、古政之善跡を規矩とし之を履み、御政事の精粹と奉存ものを定めて申上、御聖斷を受け取曖き、夫より次第に賢才をすゝめ、末々役人に至る迄擇み被仰付候はゞ、畢竟御上には格別の御煩勞も無之して、御政事思召通りに行屆、御富國と可相成と奉恐察候。是卽北辰居其所二十八宿の綱維をなすと一致に御座候。左候へば善惡の御政多分は

執政有司たるものゝ手に出候故、とかく其人不徳にては何事も難整候。右其擧賢の御處置に貴賤の差別は無之儀に候へども、御國風は昔より禮儀を貴び候故、今更細川家の堀平太左衛門の如く、微臣より俄に登庸被仰付候ては、諸人の視聽を驚かし氣請よからず。其者も何なと器量有之も妬をうけ、全う勤候儀先は仕得まじく候。君子重からざれば不威と申て、身分輕からず威ある持操の人物は、自然と下々氣請よく候。されば頭分以上のうち先づ御選みも可然哉。但し私愚見には、人持之人々は勿論、諸頭の人々とても當時いづれも不學至極にて、聖道の意味の深長なるを窺ひ知らずゆゑ、御政務の本はいかなるものとも辨へ不申躰に御座候。偶才智の者も聖王賢臣の仕かたを規矩とも致さず、只自分の瑣細吝かなる小見を以て、今日指懸り御財用は小利を目にかけ候事のみにて、御上御仁愛の尊慮を下々民間にても押及ぼし、下々歡心を結びて和同し、冥加至極に難有奉存、各心底より御報恩を彌陀佛を思ふやうにおもひつめ、御難澁と承りてはわが身のうへの事よりも猶おそれ奉り、自分の損分は不厭、何をしても御益になるやうに、何を被仰渡候ても御益とあれば違背不仕、内より畏り勵み候樣の御仁法を立候事は露も無之、只百姓は年貢を盜み候樣に察し、少々にても作物の利得あらば爲上候樣に辛くあつかふを手がらと存る輩、十人には八・九人御座候。夫故下々の者、上は恩をはなれ利を好めると見るより、下は元より利に工みなれば、上よりもいたく物

我相立、上下交も爭ふ利病を生じ、御爲に相成候躰は一圓不相見候。しかのみならず、是を行ふごとに君の御威風を笠に着、命令と稱して申附候故、其怨みは君に歸し、役人の罪は無之事に成行候儀は、恐れても猶おそれある事に奉存候。せめて辛き取噯きは役人の所爲となり、御仁政のことは君に歸するやうに仕度儀に御座候。左候はゞ後々被仰出之御爲に可宜奉存候。しかれども惡き習俗にて、旣に數十年來さまぐ〵世智かしこき刻薄なる役人替々出候て、年々からき御號令を出し、下々よろこばざれば、民共國用の本たる地力を盡さず故、御取箇增事非ず。增ても亦一方に御損失ありて、御勝手御取直しの計策も益なく、彌增年々御難澁の場に至候。是は小利は大利の賊と云古語をも不存、全く當座の小利をみて、人情を察せず、上下和同なく、誠の御有益出來不申故と奉存候。又且其起りは、只今諸役人不學の費に御座候。詩經にもかゝる類ひを刺る詩多く見え申候。若は上下和同の道を謀るに、三州千萬人の心、御上御一人の御心になる御國の爲候と存じ、士は質素古代土着の風俗をしたひて節儉を守り、民は土產を事として民力を盡し國益を悅び、工商も亦各之に准じて御爲と勤るにおいては、元來御大國と申、何一つ御不足無之御國に候へば、十年を不經とも御勝手御取直し可有之道理に御座候。然るに相公樣御時代より、諸士の爲の難有學校被爲建置、厚き御教育之思召之所、右御意氣通りを御家中之人々等閑に奉存、諸役をはじめ學校出座相學候

者、諸士を數へ十ヶ一も無之躰に承り候。夫を格別の御咎も無之故、彌懈怠候を常に仕候。何れも左のみ恐候躰も無御座候。夫故自から無學文盲を求め、通鑑一部見通候者さへ無之體に候へば、この輩のうちより多くは被仰付候役人故、元より和漢古今年々政苛政の行はれし其所以をも尋ず、繩墨なしに家を作るごとく、只おのれが見る所をみて當座の利に昧み、前に記候樣なる御仁化の御治體は迂遠にして、中々今の世態には埒あかず、又危急の場にはまだるしと思ひ、とかくかの刻薄の小量を以て、後難の來る分別詮議もなく、利口を振て妄りに押はかり、農は國の本なる御舊制を革め武斷を以て、虞害に所謂罪の疑しきに里正等を退け、寒業に勞苦せる貧民を虐げ、商估よりあるにもあらぬ種々の運上を取立て、物價貴騰諸人の難儀に及ぶを辨へず。歌舞伎・遊里鄭衞の婬風を扇ぎて、むかし松雲公御代には、日本の國風は一加賀二土佐と天下の諺にさへ申なし、諸國に秀で文質彬々たる御國にて、上樣にも御賞美ありしかくれなき御國體を亂し、かの刻薄を御爲と目前は便利を播言し、之を最上々の事とおもひ、何れも口を揃へ恐れも不顧、理知らしく申上候故、御上には御正直に被爲在候故、御爲の申上と被爲思召、夫に御任せ被遊候へども、聊是迄其有益の印不相見、次第に御逼迫に至り、下々は御上御仁心と耳に承るのみにて、百姓などは其聚斂の己が身に辛く、民その譯を蒙らざれば、心中には左のみ難有がり候躰も相聞え不申候。仁政を迂遠と見誤候

て國不治儀は、孟子に多く御座候へば御考被爲遊相知れ申候。其頓益に非ずして迂遠に似申仁術に無之ては、全き場には至りがたく候へども、是は無學の者の合点不行儀に御座候。下を枯し取揚候樣なる貨は亦悖て出申、殊に近頃節儉をも被爲勤候御樣子は、漢の文帝にも稍ひとしく、此御仁澤にては疑もなく士民御德に懷き、御國富豐不申ては難叶理に候へども、有司の仕法區々にて其信時々違ひ候故、御優恤の御意氣通り中には折け、上下路塞り下達せず、民の情鬱々として上へ通ぜず、命令信なし。されば民懷かず、是卽ち唐の貞元二年趙光奇が家にて、德宗の問に百姓答る所と同じ。如此上下和融不仕故、御利益の道も行れず、次第に御危迫に至り、諸事思召に齟齬仕儀此所甚殘念至極、常々竊に嘆泣肝を痛め申事に御座候。とかく御政事は井水にて旱草を灌ぎ候樣の一旦の防にては始終遂ず、雨露の惠みのごとく深く民草心中より潤はざれば御益の筋は立申間敷候。されば護國公御代より旋間年をへ、左に轉じ右に換へ、さまゞゝの御利政被仰付候へども、御勝手曾て御取直し無之、證據まのあたり諸役人存知ながら夫にもこり不申、又候何れも重き御役人を初め刻薄の主意を立て、其事の不遂跡を追ひ、民日に瘠せ、國家の元氣日に朘剝せるを不顧は、いかなる手段とも難辨奉存候。新序にも德莫大於仁而禍莫大於刻と見え候。何分此上は人情を御恕り、上下和同の術を先とし、何事も不被仰渡候はでは、表面は畏り候ても、心中の誠より不出候故、千變

萬化品をかへ候ても御益に至り候筋は御座有まじく奉存候。上より信を専とし、下を疑ひ欺き候事さへ無之候へば、下の情は感活しやすく、既に文化五年御城御燒失之節、三州之人々世擧て恐感し、金銀等を指上度と各願候にて、大概人情の義切なるに至りては、邪ならざる證據相知れ候事。只今にても御仕法立さへ宜敷候はゞ、此御急迫の御時節各御恩を感じ、猶以誠の底を振ひ金銀米錢を指上げ、猶御國用不足の品は他國拵を仕才覺を以也とも、乍恐御救奉申上にて可有御座と奉存候。右之次第は今日御危迫之術には不當候へども、是永久萬世の御基にて、畢竟御取直の善術此處に止り申儀と奉愚案候。

一、諸士も今般被仰出候通以之外風俗を取失ひ、第一士の宗と仕る武文の道を忘却いたし、末過分の御知行を榮耀の慰事に費して自から困窮、猶其上に御救ひ御貸銀所を相待輩多く、末々に及候ては着類の具足さへ所持なく、弓・鑓の業しらぬなどの者も有之爲躰に相聞え候。是は全く其士のみの罪にも無之、御上よりの御穿鑿も薄く、第一御預被爲置候其頭々等閑に打捨置、武藝武具學問所業の穿鑿一圓不仕、幼少より其者どもの心任せになし置候故、其弊風終に其性となり候。且其内まれ〳〵武具を嗜み武藝を勵む者候ても、其賞譽無之、善惡一致に見通し申故、義忠を立晝夜致稽古候ものは却而物數寄の樣になり行候て、是より質朴の風俗を失ひ、益々奢侈柔弱にうつり、當時小祿の面々などにに至りては、多分は殺生ばな

し、さなければ金銀の利不利、飲食逸遊の噂より外なく、文武の穿鑿などは夢にも無之躰、甚野鄙の至り論もなき儀に御座候。是と申も無學にて、大學・論語の片端も自得不仕、學問といへば只かたき事むづかしき事とのみ心得、義理を明らむる道具たる事を辨ぜず候。されば此度嚴重の被仰渡に畏り謹み、一旦其行ひをあらため候とも、不學にて心中より謹の主意合点不行候へば、少にても弛み候はゞ舊癖又起可申候。其頭々是迄其不埒を制し不申も、是亦其頭とても同じく、只々組子にも惡まれず、よき頭と呼ばれ、はやく轉役を心懸候のみと相見え候。凡そ御家中の爲躰先づケ様に御座候間、此處を御考被爲在、何かも古代質素の風俗に立戻り、聖賢の道を學び、其義理を磨きて、實用精誠の御奉公申上候様に漸く御仕立御座候はゞ、十年前後には必士風も正敷可相成候。夫も只今急に被爲仰付候ては迷惑人も可有之間、今より十年・十五年を限り、寛々御法を立させられ、其頭の時々無油斷穿鑿を遂、文武の道不怠様御法被仰付候はゞ、畢竟誠の武士も出來、急度御用にも可相立、その內には拔群の人傑も出可申候。此名教中より出る人傑にて、誰彼其德義をしたふに至りては、夫より大小身にかゝはらず、是を御取揚、かの御政務樞要の席へ御加へ御座候而、衆人信從仕候はゞ、御政事の御裨益と可相成奉存候。衆人不信ものは、賢老といふとも御政事向には御用立不申候。

一、右擧賢の一事萬一尤に爲思召候而、此聖法を御用ひの事に御座候へば、最初にも申述候通、其御法初之處にては、身がら輕き輩は縱令賢才たりとも、諸役人及び下々迄信從は仕まじく、信從不仕候へばはや御法崩れ可申候。されば人持組は高知にて人望も自然と可有之間、先づ人持の分二・三年も御敎育御仕立被仰付、其内に學問に志厚く、聖賢の道によりて義理を明らめ、之を能其身に行ひて、忠義は勿論、親に孝行に兄弟にしたしく交り、友に信ありて身持よく、人々信じて世のそしりなき者を、能々御穿鑿の上御取擧げ、小瑕は御見捨被遊、右の御政務の助けに先御置被爲遊候はゞ、事整ひ可申与奉存候。私儀七十三歳まで此組に罷在候へども、大概當時人持の人々暮方諸事、其身持之爲躰見聞仕候處、習風あしく、餘りに何れも諸事不案內、氣毒に奉存候故、此十年計以前若き面々のためせめてもと心付、下學老談と申二冊相綴り、寸志に示置く族に御座候。今般任尊令愚意申上候においては、尙以其人々の善事に可趣御仕立方の次第乍恐左に相記候。

一、學問とは乍恐被爲知召候通、さのみむづかしき譯にては無御座、先四書五經の敎を學び候事にて、夫を取つゞめ候へば仁義禮智孝忠信にて、日用常行の中を出不申候。左候へば是を幼少よりよき師匠を撰びて學び勵み、義理を明らめ、是を身に行ひ家を治め人にも信ぜられ、又勤向役向において寸分の私なく、忠信を主として御奉公を專一に申上るにおいては、

誠に賢臣とも可申、御用被仰付候てもうはべの才智に無之、聖訓の陶冶中より來候德に候へば、御心被爲置候事なき御國寶に御座候。人持組は高知ゆゑ、書籍等に聊事かき候儀無之、寛暇は多く自由自在にて、世話なく學び易き事共に御座候。夫を是迄可學物とも不存、只榮耀にのみ日を暮し、四十・五十に至るとも其名聞ゆる事もなく、御用にも立事なく、奴僕同様に一生を果し候といへども、今の世無能者共の推合にて、さのみ夫をみづから恥辱とも不思儀は、甚なげかしき儀に御座候。何とぞ是より其頭々へ被仰渡、其組の人々と常々熟懇に仕り、學文は不及申、御世務の有増をも目前において其了簡通を討論させ、其優劣之次第を聞き、器量をはかり、漸く撥當を入て善知に進め仕立候はゞ、人はもと性善に候へば、畢竟善き御役人に可相成者共出來可仕、夫を見習ひ各大小の器量一ぱいに進み可申と奉存候。當時のごとく頭との間疎遠にて、三・五年にも物いひかはし候事さへ無之、只々頭の權を以て組の者を押へかしこまらせ候取噯きのみにて、何一つ面接に教育の事なく、組方役人の家來にて事すますやからにては、文武の勵みもなくなり、いよ〳〵心まかせに光陰を費候內、自然と惡風にはうつり、善事には遠ざかり、賢臣出來の所へは思ひもよらず、過分の御知行被下置候共詮も無く、勿體なき次第に御座候。何分今より其頭々は勿論、御上よりも每度人別に御譽め御しかり夫々御座候はゞ、臣たる者の君の御心に叶はん事をねがふは、人情の常に御座

候へば、各あらそひて諸事にすゝみ、御用に可立人々も追々出來可仕儀と奉存候。但し老人之分は是まで成癖に候へば、今更改る事も出來かね可申間、是等は御寛眼に御見通あそばさせられ、年若き輩を御はりこみ被仰付候はゞ、いづれも無此上身にとり難有奉存、我先と心をあらため相進み、自然と惰弱奢侈の習俗も命令を待ずして相息（ヤミ）可申。此時に至りては、かの御政務の席へ副へ可被爲置人物も可有御座と奉存候。

右學問の一事は、學校も被爲建置候上は、於此所穿鑿も可有之儀に候へば、是は經文の論辨には可然候へ共、御世務方或は御平生方の扱においては、助教を初め常々不預の者ども無背にて、御時政の味ひは不及故、經文を之に引あてがひ、御政務かたの機會（ケアヒ）よく教育之術は合點いるまじくと奉存候。

一、聖經の學問は不仕候とも、幼少より義理の明斷に心をよせ、文章算勘達用にて、御國古今の御定目或は御舊記或は御代々樣御政事之趣、且是まで善き御役人の取噯等之事を相詰、畢竟何御役被仰付候ても不指支樣之者になり立候へば、是亦一方の人物に御座候。これは其人の得手にて、ケ樣之事好み候生質に無之ては、縱令敎こみ候ても其地には不至儀と奉存候。左候へば其人才を見立、幼少より其得手に隨ひ教育候はゞ、是に當る勤向之使人に被仰付、甚可御用立候。

一、其性質無口にて才鈍く、學文仕候てもその道明らめえぬ人御座候。されども篤實にて道に不背物に馳過ず、無麁末何事も大事と間違不仕、曲りたる事は誰申とも不受、大納言樣御時代之岡田長右衞門と申樣なる人がら有之者に御座候。且亦御用ひ所可有之、かゝる人は頭も別て心を付吟味無之ては、徒らに謙退を愚人と見誤り、一生を冷官にて果候。君子不棄人とて、皆々其一能を取用ひ候事、君子の所作に御座候。

一、生質至て怜悧にして、才氣有之、一を聞き二を知る樣のもの御座候。如此才子は尙更學文を進め、內外相兼候へば人傑に至り可申候。無左そのまゝに成長させ候へば、才にほこり人を見下し、夫より色々工み事など仕出し、後には世評の嘲りを招き、終には御用にも不立者に成行候。かゝる者は猶以仕方大事にて、善にも惡にも移やすく候間、實學を勤る事肝要に御座候。

一、少學文を心得高慢にて、少し詩歌にても作り覺え候へば、夫を鼻にかけ、ひたもの人を見下し、辯舌を以て理を非に云かすめ、或は御政事など評し、或は世間の事をも非に見なし、我獨物しれるやうにこゝろへ候人も有之候。是等は學者の罪人にて、可惡輩に御座候。詩歌は聖賢君子玩物に候へ共、其心得違ひ候へば高慢の媒をなし申候。但し今日何も仕らず、棋・象戲・三味線などを事とし暮し候にくらべ候へば、詩歌にても覺ゆるが宜しく御座候。かゝ

る人もその頭より漸く異見教訓仕候はゞ、もと其性鈍根にも無之候へば、却て御用立人に可相成候。

一、太平年久候得ば、武事疎くなり候は的然の理に御座候へ共、治に亂をわすれざるを武士の嗜み第一可仕儀に御座候。近世魯西亞艦西國邊陲に來候時分、諺にぬれ手に粟と申如く、俄に武藝に驅馳し武具を拵候爲躰、外聞見苦敷候。左候へ者今日御靜謐の御時節其支度無之而は、急なる御用に立がたき事目前の事に御座候。然れば幼少より無懈怠武藝を勵み、武具をも貯へ候はでは不叶事、其頭々より毎度其組・支配人の武藝を遂見分候て、善惡を沙汰し、其上にて御聽にも入可申事可然候。武具も每歳春秋に頭遂見分、先年の火にて燒亡當時知行當り所持無之分は、十年か十五年を期と定め、少々の榮耀をもうち欠、漸くに相整へ候樣仕方を立候指圖有之候はゞ、畢竟全く不整儀はあるまじく候。尤榮耀拵をことごとく省き、實用を專らに拵しに於ては、さのみ過分の入用もかゝるまじく候。如此頭も入情に仕立候はゞ、武事はもと質素易簡なる故、自然と驕奢の心相止み、朴實の古風に立かへり可申と奉存候。何分頭々へ被仰渡、無油斷せりこみ、十年・十五年を經候はゞ、必武藝に勝れ候輩出來、武具も全く整ひ、其所業もいつとなく常事と相成、丈夫なる御家中に相成可申。是則先達而被仰出之子弟之成立とも相成可申儀と奉存候。

右相記候御仕法立共之儀、萬一御取用ひ御座候へば、猶更是等に預候心付之趣ども可申上候へども、此手段とも迂遠にて、御急用に不相立無益之談と被爲思召候へば、事長くだ〳〵敷相記候も徒言にて、且は御目障にも可相成と、先づ其心附候本立つ所を撮み、其餘は閣筆仕候。極老之儀氣憶も薄く相成、文義も前後重複も仕、不敬之書法共可有御座と奉恐畏候。是等之次第は可然各御取計ひ之樣致度候、以上。

十二月廿八日　　　　富田痴龍

伊藤宇右衛門殿

闕屋中務殿

人見吉左衛門殿

附録年表

文化八年　辛未　　皇紀二四七一

正月 ○朔日前田齊廣金澤城に於いて年頭の儀を行ふ。(一)
○十八日老臣等に二ノ丸御殿造營竣功するを以て儀式能を觀覽せしむべきことを告ぐ。(二)
○廿二日人持組以下の諸士に儀式能を觀覽せしむべきことを告ぐ。(二)
○廿四日儀式能擧行に付き觀覽者の心得を令す。(四)
○廿五日前田齊廣石橋の能を演ず。(一二)
○廿八日殿中に演能の行はるゝ日は不急の上申等を指扣ふべきことを告ぐ。(一二)
○廿八日足輕・坊主・小者にして先に造營の資を献上したる者に之を返却すべきことを告ぐ。(一三)
○廿九日儀式能擧行の當日に於ける石川・河北兩城門番人の心得を定む。(一三)
○廿九日江戸に於いて外交を職とする諸士以下の手當支給を停む。(一五)

二月 ○二日第一日の儀式能を擧行す。(一五)
○六日第二日の儀式能を擧行す。(二四)
○七日繪師狩野休岱二ノ丸御殿造營の用を終りたるを以て白銀を賞せらる。(二七)
○十一日第三日の儀式能を擧行す。(二七)
○十三日第四日の儀式能を擧行す。(三〇)
○十五日第五日の儀式能を擧行す。(三三)
○十八日最終日の儀式能を擧行す。(三五)
○廿二日前田齊廣その側室の懷孕を祝して能を催す。(三八)
○廿三日德川家齊の前田齊廣に贈れる鶴金澤に着す。(三八)
○廿三日使者の任に當るものは努めて雜費を要すること勿らしむ。(三八)
○廿四日德川家基の三十三回忌法會を神護寺に營む。(三九)

閏二月 ○二日二ノ丸御殿の造營成就せるを以て今明兩日城下に盆正月を行はしむ。(四〇)
○二日祝賀の爲百姓に一日の休業を命す。(四一)
○四日慰能を演じ諸士をして觀覽せしめんとすることを告ぐ。(四一)
○八日家中諸士にその陪隷の宗門屆出を嚴にすべき

ことを命ず。(四五)
○十日第一日の慰能を擧行す。(四六)
○十三日第二日の慰能を擧行す。(四九)
○十六日第三日の慰能を擧行す。(五〇)
○十九日第四日の慰能を擧行す。(五一)
○廿二日第五日の慰能を擧行す。(五二)
○諸士以下の知行・扶持高等を調査す。(五三)
○郡奉行・改作奉行等出張の際百姓の特に手數を費すこと勿らしむ。(五三)

三月

○朔日西本願寺に於ける宗祖の年忌に百姓の上洛するを禁ず。(五四)
○二日箕に徳川家齊より贈られたる鶴を諸士に頒つ。(五六)
○六日金澤城内の越後屋敷再建成れることを告ぐ。(五七)
○十一日百姓の湯治と稱し藩外に出づるを禁ぜしむ。(五八)
○十四日前田齊廣參覲の爲金澤を發す。(五九)
○十五日金澤城外紺屋坂の足輕番人、本多安房守に不作法なるを以て罰せらる。(五九)
○廿一日大聖寺侯前田利之參覲の途金澤に宿す。(六〇)
○廿六日前田齊廣江戸に着す。(六〇)
○廿八日徳川家齊使者を遣はして前田齊廣の參覲を勞せしむ。(六一)
○改作奉行、十村等に改作法復古の事に關して告ぐ。(六一)

四月

○朔日前田齊廣登營して參觀の禮を行ふ。(六二)
○四日十村等に命じて乞食の取締を嚴にせしむ。(六三)
○五日前田齊廣の江戸に着したる報金澤に達す。(六四)
○五日石川郡白山宮の神主、百姓の御手洗川等を汚さゞるべき命を發せられんことを請ふ。(六四)
○十五日淺野川大橋の改築に着手す。(六五)
○十六日河北郡荒屋の海にて珍魚を捕獲す。(六五)
○廿四日博勞の高足又は板付草履を穿ちて諸士に對することを禁ず。(六六)

五月

○四日諸士にして家作又は緣組の際町會所の銀子借用を請ふことを禁ず。(六七)
○廿一日昨今兩日前田治脩の子利命の七回忌法會を寶圓寺に營む。(六八)
○廿四日十村等の由緒帳を提出すべきことを命ず。(六八)
○諸士の聖堂銀を借用する者にその返濟方を告ぐ。(六九)

六月　○二十日行路病者の取扱に關して令す。(七〇)
○廿五日金澤城内七十間御長屋を修理するを以て通行を禁止す。(七一)
○晦日前田齊敬の十七回忌法會を金澤天德院及び江戸廣德寺に執行す。(七二)
○漁船の解體に關する手續を勵行せしむ。(七二)

七月　○十日前田齊廣の子齊泰金澤に生まる。(七三)
○十三日諸士登城して前田齊廣の世嗣の生誕を告げらる。(七三)
○十六日前田齊泰の七夜の祝儀を行ふ。(七四)
○煙草・菅・藺等を本田に栽培すべからざることを令す。(七六)

八月　○四日金澤に於ける諸役所に儉約を令す。(七七)
○十五日老臣等前田齊泰の生誕を祝して物を上る。(七九)
○十八日前田齊泰の生誕を祝して金澤町に今明兩日盆正月を行はしむ。(七九)
○廿二日前田利常の女富姫の百五十回忌法會を天德院に執行す。(八〇)

九月　○三日前田齊廣江戸平尾の下邸に赴く。(八〇)
○七日鹿島郡所口に火災あり。(八〇)
○十五日前田齊廣登營の際迂路を取る。(八一)
○犀川に於いて鑑札を有せずして漁撈を行ふを禁す。(八一)

十月　○二日郡奉行に令し領内の産物を記載上申せしむ。(八二)
○五日金澤の米中買座暴民の爲に襲はる。(八三)
○六日代官口米を代銀にて支給したる從來の法を改む。(八四)
○十四日德川家宣の百回忌法會を金澤如來寺に執行す。(八五)
○廿五日前田齊廣登營して德川家宣百回忌法會終了の爲に行はれたる能を觀る。(八七)
○御算用場より新番頭及び御步頭の書面に措者と認むべからざることを通牒し物議を釀す。(八七)

十一月　○朔日七十間長屋の修理成るを以て通行を許す。(八九)
○九日昨今兩日前田治脩の三回忌法會を寶圓寺に於いて豫修す。(八九)
○九日前田治脩の三回忌法會を江戸廣德寺に於いて豫修す。(八九)
○十五日前田齊泰老臣等に物を與ふ。(九〇)
○廿八日領内の航海業者に長崎に於いて煎海鼠・干鮑を密賣することを禁す。(九〇)

十二月　○二日前田齊泰、齊廣夫人の養ふ所となる。(九一)
○十三日前田齊廣、齊泰を嫡子とし、三歳に達した

りとして幕府に屆出づ。(九二)

〇十五日前田齊泰、高松侯松平頼儀の女と婚を約す。(九三)

〇廿一日德川家齊夫人、前田齊廣に歳暮の祝儀を贈る。(九三)

〇廿八日深雪なるを以て往來の便を計らしむ。(九三)

〇廿九日前田齊泰、高松侯松平頼儀の女と緣組を許可せらる。(九四)

文化九年　壬申　皇紀二四七二

正月

〇朔日前田齊廣江戸に於いて年頭の儀を行ふ。(九四)

〇朔日前田齊廣自ら勸農に關する計畫を書して與ふ。(九五)

〇三日前田齊廣上野の御宮等に參詣す。(九六)

〇四日江戸辰口に於いて前田齊廣の行列、川越侯松平大和守の行列と衝突す。(九六)

〇十二日江戸に於ける能役者金春三郎右衞門の觸頭たることを停止す。(九八)

〇十三日金澤に於いて諸士に前田齊泰の緣組の許可せられたることを告ぐ。(九八)

〇廿四日前田齊廣治民の要を書して與ふ。(九九)

〇廿六日小倉侯小笠原忠固使を遣はして前田齊廣の女直姫をその嫡子に配せんことを求む。(一〇二)

〇廿七日德川家齊、前田齊廣に鶴を贈る。(一〇二)

〇改作方復古の爲難澁の部落を撰擇する方法を告ぐ。(一〇三)

二月

〇四日羽咋郡羽咋村の九兵衞藩米出船の取扱を鄭重にするを以て鳥目を賞賜せらる。(一〇四)

〇六日金澤城鼠多門を修理するを以て通行を禁止す。(一〇五)

〇十一日學校の生徒たらんことを出願する手續を簡易にす。(一〇五)

〇十四日前田齊廣の女直姫、小倉侯小笠原忠固の嫡子忠徵と婚約す。(一〇六)

〇廿二日阿波侯蜂須賀治昭父子本鄕邸に來りて前田齊廣の演能を觀る。(一〇六)

〇改作法復古に關する趣旨を諭す。(一〇七)

三月

〇二日珠洲郡飯田村に大火災あり。(一〇九)

〇五日白江金十郎の女若黨と情死す。(一〇九)

〇八日前田齊廣その夫人等と共に平尾邸に赴く。(一一〇)

〇十三日前田齊廣就封の暇を受く。(一一一)

〇十五日前田齊廣登營して就國の辭見す。(一一一)

〇十六日前田齊廣江戸を發して歸國の途に就く。(一一一)

〇十九日犀川川上新町等に火災あり。(一一三)

〇十九日前田齊廣の女直姫、小倉侯小笠原忠固の嫡

子忠徵との緣組を許さる。（一二三）
○廿五日鼠多門長屋の修理成るを以て通行を許す。（一二三）
○廿八日前田齊廣金澤に着す。（一二四）
○廿八日前田齊廣初めて世子齊泰を見る。（一二五）
○廿八日藩侯に對し禮を失ひたる中川儀兵衞亂心を以て逼塞を命ぜらる。（一二五）
○石川郡の十村等農業取捌方その他に關する諮問に答ふ。（一二五）
○諸郡、金澤城造營の爲上納したる冥加銀を藩が償却せんとするを辭退す。（一三〇）

四月

○朔日金澤に於いて諸士に前田齊廣の女直姫緣組の許可を得たることを告ぐ。（一三一）
○九日石川・河北二郡に降雹あり。（一三三）
○十四日昨今兩日能を催して前田齊泰の嗣立等を祝す。（一三三）
○十八日能登口郡に製産する四ヶ布の判押賃收納の手續を改む。（一三三）
○十九日前田齊廣の歸國を祝して能を催す。（一三四）
○廿五日前田齊泰の幟を建つる期間は土橋門内の往來を禁止することを告ぐ。（一三五）
○廿七日去々年足輕小森彦三郎と爭鬪したる坂井斧吉に蟄居を命ず。（一三五）
○廿八日酒造役・紺屋役・室役・鍛冶役を改めたるを以てその營業者の書上を命ず。（一二七）
○鳳至郡總持寺の伽藍を再建するを以て外作事奉行をしてその工を監せしむ。（一二八）

五月

○朔日本日より城内に於いて前田齊泰の幟を建て衆庶をして觀覽せしむ。（一二八）
○五日大聖寺侯前田利之江戸より歸邑の途金澤城に登る。（一三一）
○八日城内腰掛に於ける諸士の從者等に不作法の擧動あることを戒む。（一三一）
○八日瓦燒商賣人を役立とすることを告ぐ。（一三二）
○十日水島茂左衞門 金澤 尾張町に於いて町人を斬る。（一三三）
○十四日前田齊泰の側小將たるべき幼年者を求む。（一三六）
○十七日月次四書講義の竟宴を行ふ。（一三七）
○廿四日曩に越後屋敷成るを以て作事奉行に賞賜す。（一三七）

六月

○十四日江戸詰人、物價高直に苦しむを以てその救濟を稟議す。（一三七）
○二十日犀川・淺野川の川除普請を破壞すべからざることを命ず。（一三九）
○廿四日前田齊廣の夫人等江戸兩國附近に行歩を行

七月

ふ。（一四〇）
○四日二條治孝の使者藤木右衛門金澤に着す。（一四一）
○六日石川郡土清水の焔硝調合所より出火す。（一四五）
○十一日二條治孝の使者藤木右衛門金澤城に登る。（一四六）
○十一日江戸詰の諸士に金子を貸附す。（一五二）
○十三日二條治孝の請に應じて助成米を繰上げ贈進すべきことを告ぐ。（一五三）
○十七日金澤尾張町の町人越中屋喜助自家に放火す。（一五三）
○十八日足輕小森彦三郎流刑に處せらる。（一五四）
○金澤城松坂御門を公用にあらずして通行することを禁ず。（一五五）
○能登口郡に用水溜池を築造せん爲に費用の下附を藩に請願す。（一五六）

八月

○十日豆腐役を改定したるを以て營業者の人名書上を命ず。（一五七）
○廿八日百姓の納入する米質及び俵装等を粗悪ならざらしむべきを告ぐ。（一五八）

九月

○四日石川郡泉村頭振市左衛門等梟首の刑に處せらる。（一五九）
○十日前田治脩夫人、齊廣夫人と共に平尾邸に赴く。（一六〇）
○十四日前田齊廣、齊泰に鞍置馬等を贈る。（一六一）
○十五日石川郡柴原村の田地より奇石を出す。（一六三）
○二十日茶問屋を定め口錢を徴すべきことを告ぐ。（一六三）
○廿二日前田齊泰金澤觀音院に宮參を行ふ。（一六五）
○廿二日遠所に出役する諸士及び金澤に出役する遠所奉行の心得を諭す。（一七二）
○廿三日前田齊泰宮參を終りたるを以て老臣に物を賜ふ。（一七三）
○廿六日前田齊泰宮參を終りたるを以て能を催す。（一七三）
○租米皆濟以前に賣却する新米の取締を嚴にせしむ。（一七四）
○能登口郡の製鹽産額及び代價を上申す。（一七五）

十月

○廿七日幕府前田齊廣に參覲の期を延べ、明年九月を以て出府すべきことを命ず。（一七七）
○諸役所入費の決算を遲滯せざらしむべきを命ず。（一七八）

十一月

○四日本鄉邸地震により小破す。（一七八）
○六日十村等の用ふる消防器具を華美にすることを禁ず。（一七九）
○十一日諸士に前田齊廣明年の參覲を九月に延期せられたることを告ぐ。（一八〇）

十二月　○十五日前田齊廣その飼ふ所の鷹を觀る。(一八二)
○十五日前田齊廣參覲の期を延べられたるを以て幕府に謝使を發せしむ。(一八二)
○御小將頭より米價下直なるを以て配下諸士の困難する事情を上申す。(一八二)
○十四日町奉行に依り判決したる罪人の磔刑を、公事場奉行の執行する件に關し意見を上申す。(一八三)
○二十日本年封内の損耗米額を幕府に屆出づ。(一八六)
○廿一日德川家齊夫人、前田齊廣に歳暮の祝儀を贈る。(一八九)
○廿三日富田景周越登加三州志を上りたるを以て賞賜せらる。(一九〇)
○廿五日紫野芳春院使僧の請により能を觀覽せしむ。(一九一)
○廿八日降雪多きを以て交通の便利を圖るべきことを命ず。(一九一)
○高田屋嘉兵衛の船舶に乘組める鳳至郡劔地村の水主仁兵衛より口書を徵す。(一九二)

是歳　○大雪降る。(一九九)

文化十年　癸酉　皇紀二四七三

正月　○朔日前田齊廣金澤城に於いて年頭の儀を行ふ。(二〇〇)
○十四日前田齊廣夫人の祖父鷹司輔平薨去の報金澤に達す。(二〇〇)
○晦日深雪なるを以て諸士に乘物を用ふることを許す。(二〇一)

二月　○十日前田齊泰髮置の儀を行ふ。(二〇二)
○十日舊本吉湊裁許中村宅左衞門治績あるを以て祿を加增せらる。(二〇二)
○十二日前田齊廣心祝の爲に能を演ず。(二〇三)
○廿七日前田齊廣本年の參覲時期を變じたるを以て道中繼立人馬に關して幕府に稟請す。(二〇三)
○十村等、諸郡に出役する役人の待遇費用に就いてはその監督を一任せられんことを求む。(二〇四)
○能登に於ける大坂登せ米の船宿に關する件を答申す。(二〇五)

三月　○十五日御馬廻組中村獺十郎城内に於ける作法を誤り次いで自分指扣を行ふ。(二〇六)
○十八日大聖寺侯前田利之參覲の途次金澤に泊す。(二〇八)
○十九日前田齊廣御馬廻組神保銕五左衞門をして能を演ぜしむ。(二一〇)
○廿七日先に外作事奉行を廢せられたるを以て御作事所御橫目足輕の事務を改む。(二一一)
○晦日定番御馬廻組井上九内酒狂により亂行す。(二一一)

〇江沼郡内の地理に關し答申す。(二二三)
〇御郡方火災の際使用する水旗に就いて十村等より答申す。(二二四)

四月

〇二日前田齊廣奥舞臺に於いて慰能を催す。(二二六)
〇四日前田齊廣奥舞臺に於いて慰能を催す。(二二七)
〇十日越能加三州志の編纂が林大學頭の推賞を得たることを著者富田景周に告ぐ。(二二八)
〇十一日前田齊廣の女芳姫金澤に生まる。(二二九)
〇十三日領内に烈風あり。(二三〇)
〇十八日芳姫出生七夜の祝儀を行ふ。(二三一)
〇廿一日盲人の支配に關する幕府の令を領内に傳ふ。(二三二)
〇朝鮮信使來聘に要する費用を十ヶ年賦に上納すべく諸士に命ず。(二三三)
〇家中三千石以上の士の下屋敷外郭に擅に門を設くることを禁ず。(二三四)

五月

〇朔日此の日以降前田齊泰の爲に幟を建て之を觀覽することを許す。(二三四)
〇六日珠洲郡小木の薩摩屋德兵衞に海豚の筋買入主附を命ず。(二三七)
〇七日前田齊廣の女勇姫金澤に生まる。(二三八)
〇十三日勇姫出生七夜の祝儀を行ふ。(二三九)
〇十三日金澤の人越前屋安兵衞篤行を以て大坂町奉行より表彰せらる。(二三九)
〇十七日前田權佐の家士横川幸左衞門四人を殺傷す。(二三二)
〇二十日昨今兩日高岡瑞龍寺に於いて前田利長の二百回忌法會を執行す。(二三三)
〇二十日御醫者池田養中に上洛して小兒科を學ぶべきことを命ず。(二三六)
〇廿四日前田利長の二百回忌法會終るを以て瑞龍寺等を招請して能を觀覽せしむ。(二三七)
〇廿四日家族の宗門を異にする場合に許可を得べき前令を布告す。(二三八)
〇廿六日犀川・淺野川の川除に塵芥を捨つる等のことを禁ず。(二三九)
〇廿九日河北御門の當番與力等御近習頭の通行切手を拒みしを以て逼塞を命ぜらる。(二四〇)

六月

〇十日與力中山宅左衞門その妻及び妹を殺害す。(二四二)
〇十二日繭を領外に賣出すことを禁ず。(二四三)
〇十四日朝鮮信使來聘に付き諸士より上納すべき高役銀の割合を示す。(二四三)
〇十六日朝鮮信使來聘の爲百姓より上納すべき國役銀の割合を示す。(二四五)
〇二十日江戸に於ける大聖寺藩の下屋敷火災に罹

る。(二四六)

○二十日金澤天神町の斷崖崩壞して家屋住民を害ふ。(二四六)

○廿四日石炭試掘の爲め能登に人を派すべきを告ぐ。(二四七)

○廿四日攝津多田院の勸化銀を知行割として上納すべきことを告ぐ。(二四八)

○廿九日寶圓寺等の祠堂銀を借受けたる諸士に契約の如く返辨すべきを命ず。(二四八)

七月

○朔日金澤城奥舞臺に於いて素舞・一調等を演ずること八十餘番に及ぶ。(二四九)

○十日御普請奉行等に對し儉約勵行を命ず。(二五三)

○十二日御次廻に對し經費の省略を命ず。(二五四)

○十七日儉約の方法に關して御勝手方に調査を命ず。(二五五)

○廿一日盛岡侯南部利敬使を遣はして自今諱に利字を用ふるも前田氏の許諾を請はざるを告ぐ。(二五五)

○廿八日味噌・醬油の外數種の營業者に新に運上を課し株立とす。(二五六)

○前田齊廣夫人禁裏・仙洞へ物を上る。(二五九)

○金澤の町人嶋田屋吉兵衛等常芝居興行の許可を請ふ。(二五九)

○百姓にして先祖の扶持を受けたる印物を所有するものは之を藩に提出せしむ。(二六〇)

○金澤中島町に於いて相撲を興行す。(二六一)

八月

○三日金澤城内に落雷す。(二六一)

○六日前田權佐の臣横川幸左衛門、先に人を殺せるを以て磔刑に處せらる。(二六三)

○十三日儉約實行の爲武具の製造を減ずべきことを定む。(二六四)

○十四日鞍細工人中西重藏の鞍木を求むるが爲能登を巡回すべきことを告ぐ。(二六四)

○十六日御郡奉行、儉約の實行に關する意見を御扶持人十村に求む。(二六五)

○二十日役銀奉行鈴木半藏所管の銀子を費消したるを自首す。(二六六)

○廿二日中村八兵衛役銀奉行在勤中職務を怠りしを以て指扣を命ぜらる。(二六八)

九月

○十三日年寄村井又兵衛產物方主附御用を命ぜらる。(二六九)

○十四日前田齊廣金澤を發して參覲の途に上る。(二七〇)

○廿五日臼井虎右衛門その小者を手討とす。(二七二)

○廿六日京都河原町に於ける加賀藩邸の隣屋を買得す。(二七三)

○廿七日前田齊廣江戸に着す。(二七六)

十月 ○朔日前田齊廣登營して參覲の禮を行ふ。（二七六）
○十五日前田齊廣の女芳姬盛岡侯世子南部利用との緣組を內約す。（二七七）
○十六日越中高岡に於いて一時講と稱する富突の初會を催す。（二七七）
○百姓及び頭振の金澤に出でゝ止宿せんとするものは十村の指紙を受くべき前令を勵行せしむ。（二七八）
○非人小屋に收容せらるゝ者の私に蓄錢するを禁す。（二七九）

十一月 ○三日能登口郡の藩有竹林に關し意見を上申す。（二七九）
○七日前田齊泰と緣組を約したる高松侯松平賴儀の女歿す。（二八一）
○八日是日以後能登口郡の百姓等貸米の不足を訴へて騷擾す。（二八二）
○晦日能登幕府領の百姓、加賀藩の算用場に來りてその支配方法に關し請願す。（二八六）
○諸役所勘定方の書類を整理すべきことを命す。（二八七）

閏十一月 ○二日與力中山宅左衞門刎首の刑に處せらる。（二八七）
○四日前田齊廣、大聖寺侯前田利之の邸に臨み能を演す。（二九〇）
○十九日後櫻町上皇崩御せしを以て金澤に於いて普請・鳴物等の禁止を命ず。（二九〇）

十二月 ○二日後櫻町上皇崩御せしを以て弔使を金澤より發せしむ。（二九〇）
○五日德川家齊、前田齊廣に鶴を贈る。（二九一）
○十四日前田齊廣の子齊泰・芳姬及び勇姬の婚約を許さる。（二九一）
○十九日河北郡百坂村に於いて磔刑を行ふ。（二九二）
○廿二日博奕類似の行爲を禁ずる前令を嚴守すべきことを告ぐ。（二九二）
○廿四日是日以降三日前田齊廣の子齊泰・芳姬及び勇姬の婚約を許されたるを以て金澤の町民に盆正月を行はしむ。（二九三）
○廿五日前田齊廣の子齊泰・芳姬及び勇姬の婚約を許可せられたることを金澤の諸士に告ぐ。（二九三）

是歲 ○石川郡宮腰の外所々に歌舞伎を興行す。（二九四）
○犀川河原に昌安町起る。（二九五）

文化十一年　甲戌　皇紀二四七四

正月 ○朔日前田齊廣登營して新正を賀す。（二九六）
○十七日本年より大坂廻米運漕に關する仕法を改めたることを告ぐ。（二九七）
○廿二日前田齊泰に對する作法等を令す。（二九九）
○廿二日諸浦に於いて從來大坂廻米の船頭より徵收したる費用を記載して提出せしむ。（三〇一）

二月

○往還筋に於ける松並木を補植すべきことを命ず。(三〇二)

○七日金澤城石川門の樓櫓を修造するを以て通行を禁ず。(三〇三)

○十三日前田齊廣當春歸國の際東海道を經ることの許可を受く。(三〇三)

○十五日前田齊廣歸國の際供奉の士の行粧を華美ならしめざるべきを告ぐ。(三〇六)

○廿二日廣島侯淺野齊賢の使者金澤に着し、去年父重晟卒去の際に於ける懇志を謝す。(三〇七)

○廿八日藩醫江間篁齋等江戸に於いて蘭人の旅館を訪ふ。(三〇九)

○廿八日長崎大通詞辻助次右衛門等に藩邸に出入することを許す。(三〇九)

○能登口郡の御扶持人十村等座頭・瞽女の難澁を救助せられんことを求む。(三〇九)

三月

○十四日徳川家齊、前田齊廣に就封の暇を與ふ。(三一一)

○十六日前田齊廣登營して就封の辭見す。(三一一)

○十六日前田齊廣歸國の途に就き品川に宿す。(三一三)

○十七日前田齊廣品川を發して神奈川に宿す。(三一四)

○十八日前田齊廣神奈川を發し鎌倉・江之島を經て大磯に着す。(三一五)

○十九日前田齊廣大磯を發して三島に着す。(三一七)

○二十日前田齊廣三島を發して吉原に着す。(三一七)

○廿一日前田齊廣吉原を發し府中に着す。(三一八)

○廿二日前田齊廣府中を發し金谷に着す。(三一九)

○廿三日前田齊廣金谷を發し濱松に着す。(三二〇)

○廿四日前田齊廣濱松を發し吉田に着す。(三二〇)

○廿五日前田齊廣吉田を發し岡崎に着す。(三二一)

○廿六日前田齊廣岡崎を發し鳴海に着す。(三二二)

○廿七日前田齊廣鳴海を發し起に着す。(三二二)

○廿八日前田齊廣起を發し柏原に着す。(三二三)

○廿九日前田齊廣柏原を發し木本に着す。(三二三)

○廿九日金澤城石川門の樓櫓略竣成したるを以て通行を許す。(三二四)

○晦日前田齊廣木本を發し今庄に着す。(三二五)

○藩が鹿島郡所々に於いて釀造せしめたる酒を江戸に輸出す。(三二六)

○小松城の屋根方修理を嚴にすべきを命ず。(三二七)

○藩の年寄中が東海道等關所を乘輿のまゝ通過するを許されたるを幕府に謝す。(三二八)

○觀音院神事能の際無用の者の樂屋に入るを禁ぜしむ。(三二八)

四月

○朔日前田齊廣今庄を發し府中に着す。(三二九)

○二日前田齊廣府中を發し金津に着す。(三三〇)

○二日前田齊廣が着城する際に於ける途上の附人を定む。(三三〇)

○三日前田齊廣金津を發し小松に着す。(三三一)

○四日前田齊廣金澤に着す。(三三三)

○七日能登諸郡に宮林等の竹木伐採を出願するも容易に許さゞるべきを告ぐ。(三三四)

○七日百姓の居村を離脫せんとするものを嚴に取締るべきを命ず。(三三四)

○七日百姓又は頭振の濫に別家せんとする者の取締を命ず。(三三五)

○八日本年に限り能登一般に他國よりの入津米を買ふことを許す。(三三六)

○十日金澤城石川門の樓櫓竣成したるを以て大工等に賞賜す。(三三七)

○十日賭博を行ひたる者を其の村方より申告せざる時は過怠免又は過怠錢を課すべきことを告ぐ。(三三七)

○十四日本願寺の負債を償ふが爲諸國に募緣するの風說あるも之に應ずべからざることを豫告す。(三三九)

○廿八日御詰米御用として代官廻村の際宿主に入用銀を支拂ふを禁ず。(三三九)

五月

○四日足輕吉田常之丞鐵炮の技に達するを以て賞賜せらる。(三四〇)

○十日石川郡大豆田村に火災あり。(三四一)

○十一日大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤城に登る。(三四一)

○十七日今江潟・木場潟等に於いて諸士の漁撈を行ふことなかるべきを告ぐ。(三四二)

○廿六日金澤城御廣式の井戸修理の人夫井中に墜落す。(三四三)

○廿七日鹿島郡所口に災あり。(三四四)

○頃日浮浪の徒にして領内を徘徊する者多し。(三四五)

六月

○十三日前田齊廣能を演じ老臣等に觀覽を許す。(三四七)

○十六日村井又兵衞城代以下の諸職を免ぜらる。(三四八)

○二十日前田綱紀の側室預玄院の五十回忌法會を江戸長元寺に營む。(三四八)

○十村等に家政を豐にして專ら職務に盡瘁すべきことを諭す。(三四九)

七月

○朔日前田齊泰と婚約せる富山侯前田利幹の女銈姬逝去の報金澤に達す。(三四九)

○四日御馬廻組原治太夫越中五ケ山に流刑を命ぜらる。(三五〇)

○四日御馬廻組中村八兵衞牢死の後越中五ケ山に流刑を宣告せらる。(三五三)

○四日御馬廻組鈴木半藏牢死の後縛首の刑を宣告せ

らる。(三五四)
○九日犀川に於いて鑑札を有せざる者の漁撈を行ふことを禁ず。(三五六)
○晦日伊勢松木神主叙位せられたるを以て相對寄進を許す。(三五七)

八月　○二日金澤城に於いて禁裏の樂人に樂を奏せしむ。(三五七)
○二日能登に於ける唐竹を藩外に賣出すことを禁ず。(三六一)
○五日酒屋の店頭にて飲酒し又は不法の行爲ある者の取締を稟議す。(三六二)

九月　○二日鐵炮の取締に關して調査すべきことを告ぐ。(三六四)
○五日嫁娶の際その家に石を投ずることを禁ず。(三六四)
○廿七日前田齊泰、秋田侯佐竹義和の女と縁組せんことを議す。(三六五)
○藩の財政逼迫するを以て百姓に手上高・手上免等を勸奬す。(三六五)
○鹿島郡府中村の惣右衛門質營業を許さる。(三六七)

十月　○十七日前田重教夫人壽光院の十三回忌法會を江戸廣德寺に修す。(三六八)
○十八日領內に於いて狩獵する鹿皮・猪皮の取締を命す。(三六八)
○廿五日郡方に寺社の勸財に應ずべからざることを告ぐ。(三六九)
○廿七日能登口郡より輸出する苧絈に役銀を徵するを以てその員數を調査せしむ。(三七〇)

十一月　○晦日遊行上人金澤玉泉寺に來錫す。(三七一)
○四日郡方の男女過書の下附を求めずして上方筋に赴く者あるを戒む。(三七一)
○十五日前田齊廣明年の參覲を秋期に延ぶることを許されたる報を受く。(三七二)
○廿八日河合良溫石川郡湯涌溫泉の記を作る。(三七三)
○廿九日前田齊泰、秋田侯佐竹義和の女利瑳姬と婚約することを許さる。(三七四)

十二月　○六日金澤五枚町に火災あり。(三七五)
○十三日六組御歩の缺員を補充せんことを議す。(三七六)
○二十日能登に産する海鼠の加工品に就いて上申す。(三七九)
○廿三日足輕の弓術に長ずるものに賞賜す。(三八〇)

是歲　○雪大に降る。(三八一)

文化十二年　乙亥　皇紀二四七五

正月　○朔日前田齊廣金澤城に於いて新正の賀儀を行ふ。

(三八一)
○二日松囃子の儀を行ふ。(三八四)
○十八日御馬廻組多羅尾左一郎等處罰せらる。(三八六)
○廿一日金澤に地震あり。(三八七)

二月

○三日前田齊廣寶圓寺及び天德院に參詣す。(三八七)
○十六日金澤城內東照宮の外遷宮を行ふ。(三八八)
○十八日廻來の遊行上人金澤より發足す。(三八九)
○十八日鳳至郡淺生田村の山岳崩壞す。(三九〇)
○十九日將に前田齊泰の着袴式を行はんとすることを告ぐ。(三九〇)
○廿二日前田齊泰着袴の儀を行ふ。(三九一)
○廿三日老臣の言上紙面に漉返の使用を廢することを上申す。(三九五)
○晦日德川家繼の百回忌を如來寺に執行す。(三九六)
○能登口郡に於いて他國米買入の許可手續を簡單にせんことを出願す。(三九七)
○能登幕府領の製鹽を加賀藩民の他國に輸出することを禁ず。(三九八)

三月

○四日觀音・寺中の兩神事能にツレ師等の濫にシテ役を勤むることを禁ず。(四〇〇)
○十六日石川郡の 往還筋に 苗松を 植うることを命ず。(四〇一)
○廿四日昨今兩日前田綱紀夫人松嶺院の百五十回忌法會を江戶廣德寺に行ふ。(四〇五)
○廿五日線香小賣人に鑑札を與へ他國產のものを取扱ふこと勿らしむ。(四〇六)
○廿六日能登の鹽士が淺釜鑄造出願の手續に付いて令す。(四〇六)
○廿八日金澤大衆免より火を失す。(四〇七)
○能登に於ける十ヶ村所產の串海鼠及び生海鼠を藩內の用に供することを許さる。(四〇九)
○鹿島郡八幡村等 砂防の爲 諸郡打銀の 支給を 請願す。(四一〇)

四月

○五日金澤城內東照宮の正遷宮を行ふ。(四一二)
○五日紫野芳春院の影堂再建に關し京都・大坂詰の步橫目に命令す。(四一三)
○十日能登所口の火災に纏類似の器具を携へたる者あるを以て之が調査を命ず。(四一四)
○十四日能登より鹽を搬出する船舶に關して令す。(四一五)
○十五日前田齊泰の爲に幟を建て觀覽を許すことを告ぐ。(四一五)
○十七日昨今兩日德川家康の二百回忌法會を金澤神護寺に執行す。(四一六)
○十八日前田利家の女幸姫の二百回忌法會を玉龍寺

に執行す。(四一八)

○廿四日禁を犯して女出合宿を營むことを戒む。(四一九)

五月 ○廿四日山廻にして十村の名義を借り書狀を送達せしむるものあるを戒む。(四二〇)

○七日河北郡谷内村附近に狼徘徊するを以て打拂を命ず。(四二〇)

○十二日火災の原因を調査する際告ぐるに實を以てすべきことを命ず。(四二一)

○十三日前田齊廣、日光廟の法會終りたるを祝し能を興行せしむ。(四二三)

○廿八日老臣村井又兵衛の邸雷火に罹りて燒失す。(四二三)

六月 ○七日新開の地境に柳を植うる前令を實行せしむ。(四二三)

○十二日前田齊廣の女寛姬金澤に生まる。(四二四)

○十八日前田齊廣の女寛姬七夜の祝儀を行ふ。(四二四)

○十八日盜賊改方本行の十村召喚に關して令す。(四二四)

○二十日能登幕府領の百姓等藩の算用場に密集す。(四二六)

○廿三日富永數馬の家來伊藤彌左衞門、九里波江の家に侵入して斬らる。(四二七)

○諸商人の破産したるものはその資財を擧げて債務に當つべきことを命ず。(四二八)

七月 ○五日能登幕府領の百姓鎭靜に歸したるを以て加賀藩の者の之を輕侮すべからざるを告ぐ。(四二九)

○八日金澤石坂より火を失す。(四三〇)

八月 ○朔日御廣敷用達小野木助三、前田齊泰の生母の父なるを以て祿を增さる。(四三二)

○十六日割場奉行がその支配下の足輕に與ふる文面を被付とすることに關し議す。(四三二)

○廿一日大聖寺侯前田利之金澤に宿し、登城を辭す。(四三三)

○米穀の乾燥・俵裝等を嚴重にすべきことを告ぐ。(四三三)

九月 ○十四日前田齊廣金澤を發して參覲の途に就く。(四三六)

○廿六日前田齊廣江戶に着す。(四三六)

○廿八日德川家齊使を遣はして前田齊廣の參覲を勞せしむ。(四三六)

○金澤に於ける町人の孝義を旌表す。(四三六)

十月 ○朔日前田齊廣登營して參覲の禮を行ふ。(四四一)

○五日前田齊廣の江戶に着したる報金澤に達す。(四四二)

○六日金澤に於ける禪宗の僧數人女犯を以て刑せらる。(四四二)
○九日前田齊廣の登營したる報金澤に達す。(四五一)
○金澤桂岩寺の小者長助篤行を以て賞せらる。(四五二)
○羽咋・鹿島兩郡に青米を生じたるを以て、十村等その租米を別積にせんことを出願す。(四五三)

十一月 ○九日昨今兩日前田治脩の七回忌法會を寶圓寺に修す。(四五五)
○廿二日鹿島郡小田中の皮多に獸皮の仕法に就いて告ぐ。(四五六)
○廿四日處刑せられたる寺僧の所有する綸旨の處置に關して議す。(四五六)
○廿七日能登幕府領の百姓にして先に騷擾したる者の處分に關して議す。(四五八)
○能登口郡の十村等藩用の串海鼠を缺乏せざらしむる諸問に應ふ。(四五九)

十二月 ○廿九日幕府、上野本坊の造營成就せるを以て加賀藩に進物を命ず。(四六三)
○領内に出役したる者の雜費及び勤向に付き村役人より報告を要すとの前令を廢す。(四六四)
○藤内が改方の用務に出張する際の服裝・宿舍等に關する諸問に應ふ。(四六五)

是歲 ○領内の産米損耗高を屆出で、幕府よりその減額を命ぜらる。(四六六)

文化十三年　丙子　皇紀二四七六

二月 ○五日藩有の鹽硝を拂下ぐる件を議す。(四六八)
○十日先に製鹽に溫釜の使用を勸奬したるを停止す。(四六九)
○十四日地舟裁許宮腰屋久右衞門を各浦に派して渡海船に極印を施さしむべきを告ぐ。(四七〇)
○十五日德川家齊、前田齊廣に鶴を贈る。(四七〇)
○廿八日製鹽用淺釜その他の鑄造を自由にすべきことを命ず。(四七〇)
○本年以降登せ米の仕法を改むべきことを告ぐ。(四七一)
○能登所口に於ける煙草買入主附の商人を廢せんことを求む。(四七八)

三月 ○煙草の耕作を本田に於いてし、又は增歩せざるべきことを告ぐ。(四八〇)
○十三日前田齊廣就封の暇を受く。(四八一)
○十五日前田齊廣登營して就封の辭見す。(四八三)
○十六日前田齊廣江戸を發し歸國の途に就く。(四八五)
○廿二日博奕及び賭の諸勝負を禁ずる幕令を傳達す。(四八六)

○廿七日前田齊廣金澤城に着す。(四八七)
○諸郡の川除堤防に漆を植うることを命す。(四八七)

四月

○朔日金澤城東ノ丸の太鼓塀を取拂ひたるを以て善後の處置を議す。(四八八)
○六日前田齊廣の金澤に着したる報江戸に達す。(四八九)
○十六日徳川家齊右大臣に陞りしを以て使を本郷邸に遣はして物を賜ふ。(四九〇)
○十八日諸士の疾病によりその子が勤番を代理する場合に於ける出銀上納に就いて令す。(四九二)
○十八日金澤城鼠多門を自今玉泉院様丸御門と唱ふることゝす。(四九三)
○晦日難破船の乘組に溺死者等ありたる時は十村等先づ郡奉行に届出で指揮を受くべきことを命す。(四九三)

五月

○二日金澤城石川・河北兩門の番所の與力が下番の足輕を使用することに關して議す。(四九四)
○十日大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤城に登る。(四九六)
○十二日前田齊廣、石川・河北兩門の下番に關し再議せしむ。(四九七)
○十五日城内鶴之丸の釣鐘墜落す。(四九八)
○廿五日前田齊廣高齢者を殿中に召して賞賜す。(五〇〇)

六月

○朔日前田齊廣卒都婆小町の能を演ず。(五〇〇)
○八日防火用具として龍吐水を下附すべきことを告ぐ。(五〇一)
○十五日前田齊廣、徳川家齊より贈られたる物を老臣等に頒つ。(五〇一)
○十六日是日以降石動山に於いて泰澄大師遠忌法會を營む。(五〇二)
○廿八日郡方の走人届方の文例を定む。(五〇二)
○廿八日七夕を祭る爲過大の裝飾を附したる枝竹を用ふるを禁す。(五〇三)

七月

○七日朝鮮信使來朝に對する本年分の高役金支出を命す。(五〇三)
○十一日百姓等土藏を物置と稱する件に就いて議す。(五〇四)
○十六日前田利家夫人芳春院の二百回忌法會を金澤寶圓寺及び京都芳春院に執行す。(五〇五)
○犀川川除町の區分に就いて告ぐ。(五〇七)
○能登より輸出する苧絈の取締方を改む。(五〇七)

八月

○米穀の乾燥を充分にする爲架掛にすべきことを命す。(五〇九)

閏八月

○四日犀川・淺野川の水暴溢す。(五一〇)
○廿七日江戸詰人等先に貸與せられたる救方金返上

の延期を請願す。(五一二)

○領内に於ける煎海鼠及び串海鼠の取扱に就いて令す。(五一三)

○河北郡八田村・大根布村に疫疾流行す。(五一五)

○諸郡の婦女にして善光寺及び身延山に參詣する者の順路を調査す。(五一五)

九月 ○十二日一橋齊敦卒去の報至るを以て金澤に於いて普請・鳴物を停止す。(五一六)

○十五日領内の人口を調査して幕府に屆出づ。(五一七)

○十九日金澤町奉行、兩替屋酒屋宗左衞門等の發行する銀子手形の處置に闗し稟議す。(五一七)

○廿二日前田齊廣の女芳姬・勇姬・寬姬觀音院に宮參を行ふ。(五一八)

十月 ○六日本年難作なるも租米を精選して上納すべきを告ぐ。(五一九)

○十一日幕府老中の奉書を町飛脚に傳附する件に闗して議す。(五二〇)

○十三日加賀藩に寄託せられたる幕府領の施政を私領と同一とし、又その收納を金納とすべきことを告ぐ。(五二一)

○祠堂銀借用の諸士にその返濟方に闗して告ぐ。(五二二)

○領外の者を入牢又は入墨の刑に處する時はその生國に通知すべきことを定む。(五二四)

○能登口郡の潤役徵收に闗する慣行を上申す。(五二五)

○幕府に藩の國役金を納入す。(五二七)

十一月 ○二日前田齊廣明年九月を以て參覲すべき幕府の命を受く。(五二八)

○三日能登の幕府領預地の仕法改革實施を急激ならしめざるべきを告ぐ。(五二九)

○三日諸郡船舶をして嚴に極印を受けしむべきことを告ぐ。(五二九)

○七日江戸の詰人等物價高直なるを以て救濟を請ふ。(五三〇)

○十六日能登幕府領預地の者の養子・緣組等の取扱に就いて告ぐ。(五三一)

○十八日前田齊廣安宅延年舞の能を演ず。(五三二)

○廿八日明年以降諸役所の經費二割を節減すべきことを令す。(五三二)

十二月 ○五日武具方の經費は二割減の限にあらざることを定む。(五三三)

○六日在江戸の諸士に、前田齊廣が明年參覲の期を緩にせられたることを告ぐ。(五三四)

○八日金澤を中心とする三里四方の地に於いて天の

綱を用ふる捕鳥を嚴禁す。(五三六)
○十六日能登の幕府領百姓と加賀藩領百姓との緣組を郡奉行にて許可せんことを議す。(五三七)
○廿二日淺野川・犀川兩馬場の費用を家中諸士より徵收することを告ぐ。(五三七)
○廿二日領內釀造の酒を江戸に廻漕することを廢し、これを幕府に屆出づ。(五三八)
○廿五日領內の作毛損害高を幕府に屆出づ。(五三九)
○廿六日能登口郡に製產する苧絈の改方吟味役を命じたることを告ぐ。(五三九)
○廿六日江戸詰人難澁するを以て金子を貸與す。(五四〇)
○廿七日江戸詰人の組頭等更に貸附の金子を增額せんことを請ふ。(五四二)
○廿九日江戸詰人等に救濟の爲金子を增貸す。(五四二)

是歲

○紀伊の淨土僧德本上人金澤如來寺にて化導す。(五四四)

文化十四年　丁丑　皇紀二四七七

正月

○朔日前田齊廣金澤城に於いて年頭の禮を行ふ。(五四四)
○二日例によつて金澤城に松囃子を行ふ。(五四六)
○十一日前田齊廣の子他龜次郎金澤に生まる。(五四七)
○十八日前田齊廣の子他龜次郎の七夜の祝儀を行ふ。(五四八)
○二十日郡奉行より用銀の上納を十村等に命す。(五四八)
○延拂及び現銀拂米指留の前令を勵行すべきことを告ぐ。(五五〇)

二月

○十日德川家齊の前田齊廣に贈れる鶴金澤に着す。(五五〇)
○十五日金澤犀川川上新町に火災あり。(五五一)
○廿四日先に德川家齊の鶴を贈りたるを謝する爲使者を金澤より發せしむ。(五五二)
○廿四日江戸邸內に於いて足輕・小者等の無作法なる者あるを戒む。(五五二)
○廿七日江戸に於ける火消方は他役所の入用銀節減の例に倣はざるべきことを告ぐ。(五五三)

三月

○四日藩の借銀を調達せる者に賞詞を與へしむ。(五五四)
○六日前田重教の側室慧照院歿す。(五五五)
○十九日大聖寺侯前田利之參覲の途金澤城に登る。(五五六)
○廿二日婦人の衣服調度を華美にすべからざることを命ず。(五五七)
○廿八日金澤城石川・河北兩門外にて下馬下乘すべ

き位置を嚴守せしむ。(五五九)

○廿八日城内の會所盗賊の爲に襲はる。(五六〇)

四月

○十三日寺社にして故なく田畑等を有するものを屆出でしむ。(五六一)

○十四日前田齊泰、城外小立野に行歩を試む。(五六二)

○十六日大聖寺侯前田利之幕府より淺草御藏火消を命ぜらる。(五六三)

○十九日金澤城の惣構御堀筋等に塵芥を捨つることを禁ず。(五六五)

○廿二日諸郡御扶持人等を召して引免復舊の方法を講ずべきことを命ず。(五六六)

○廿二日引免を復舊するが爲十村をして各支配地の實情を上申すべきことを命ず。(五六九)

○廿八日圖り免新開の田にして地味の古田と等しきものは免合を增さしむべきことを命ず。(五七一)

○前田齊泰の側小姓三人を選定す。(五七二)

○金澤片町の町人堂後屋家道振はざるを以て役銀の免除を請ふ。(五七二)

○百姓等に分限不相應の奢侈をなすことを戒む。(五七三)

○能登邑知潟の周圍に千九百餘石の新田を開墾せんことを出願す。(五七三)

○鹿島郡和倉溫泉懸札等の件に關し上申す。(五七八)

五月

○朔日前田齊泰及び弟他龜次郎の爲に幟を城内に建つ。(五八一)

○十日犀川に於いて鑑札を有せざる者の漁撈に從ふを禁ず。(五八一)

○十七日西本願寺の使僧宗意安心を教諭する爲來らんとするを以て寺庵の心得方を告ぐ。(五八二)

○廿一日昨今兩日前田利命の十三回忌法會を寶圓寺に修す。(五八四)

○廿二日能登の幕府領へ菜種を賣渡し得ることを定む。(五八四)

○廿三日江戸詰の者に物價高直を理由として救濟を出願することを禁ず。(五八五)

○廿四日西本願寺使僧下向の際之を出迎へ、及び教諭披露の節門徒惣代以外の參詣を禁ず。(五八七)

○能美郡小松町等に赤痢流行す。(五八八)

六月

○七日富山藩の吏江戸に於いて加賀藩に金子貸與を求む。(五八八)

○廿五日家中の者拂米の際不都合の行爲なかるべきこと等を告ぐ。(五九一)

七月

○八日前田齊廣の參覲發途翌日、御臺所奉行を供奉せしめんことを議す。(五九二)

○八日納租の皆濟以前百姓の新米を賣出すべからざることを告ぐ。(五九三)

○十二日江戸邸に於ける割場附小者等銀子貸附を得んとして騒擾す。(五九四)
○十三日道中御供人の乘用は老齡者の駕籠を用ふる外、乘懸馬によるべきことを告ぐ。(五九七)
○十五日江戸に於いて欠落立歸者を禁牢に處す。(五九八)
○十七日參覲往來等の際沿道町民及び宿舍に當る者の心得を告ぐ。(五九九)
○廿六日諸郡に引免立歸又は手上高を勸奬せしむ。(六〇〇)
○廿六日公事場奉行御郡方に於いて九十歳以上の者に支給したる扶持米の取扱方法に關して照會し、尋いで御郡奉行はその取締を嚴密にすべき事を命す。(六〇一)

八月

○百姓に銀子を貸與して利子を收むるを禁じ、利足貸の分は元利差引することを許す。(六〇六)
○朔日前田齊泰初めて能を演す。(六〇七)
○五日幕府の米穀を輸送する船舶能登沿海に難破せしを以て郡奉行に出張を命す。(六〇九)
○六日江戸に祇役する者に餞別し又は歸國の際土産物を齎すを禁する前令を嚴守せしむ。(六〇九)
○六日非人小屋の收容者中健康なるものを郡方に歸らしむべきことを告ぐ。(六一〇)
○十八日町方の組合頭に人別の調査を命す。(六一二)
○二十日非人小屋より歸村せしめ得るものに小屋懸等の費用を給することを命す。(六一二)
○廿三日幕府、仁孝天皇即位式の期日治定せることを告ぐ。(六一三)
○廿六日金谷門を修理するを以て御廣式より石川門を通過することあるべきを議す。(六一三)
○村方の者の請酒を販賣し及び空米相場を行ふことを禁止す。(六一四)
○道路に於ける馬の取扱に就いて諭す。(六一五)

九月

○朔日遠所御旅屋疊替の費用を減ずべきことを議す。(六一六)
○二日近年西本願寺一派の僧俗の上京を禁止したるを解除せらる。(六一六)
○六日前田齊廣夫人の姪逝去の報金澤に達したるも七歳未滿なるを以て鳴物を遠慮せず。(六一七)
○十四日前田齊廣病むを以て、本月參覲の爲出發すべき豫定を延期す。(六一八)
○十四日寶圓寺後住決定に關し、開番なし、幕府の意を伺はしむべき命令江戸邸に達す。(六一八)
○廿一日前田齊廣參覲出發を延べたいとの報江戸に達す。(六一九)
○廿五日鹿島郡高田村頭振彦右衛門の居敷より小判

を掘出したることを屆出づ。(六二〇)

○廿六日前田齊廣參覲の爲に金澤を發す。(六二一)

○江沼郡山中の醫王寺にて長谷部信連の遠忌法會を營む。(六二二)

十月

○二日前田齊廣使者を金澤より派して仁孝天皇の卽位を賀し奉らしむ。(六二三)

○五日前田齊廣の金澤を發したる報江戸に達す。(六二四)

○九日前田齊廣江戸に着す。(六二四)

○十日大小將辰巳要人江戸に於いて自殺す。(六二六)

○十四日石川郡宮腰附近の商人にして魚類の拔荷を金澤に運ぶ者あるを戒む。(六二六)

○十四日能登の製鹽を脫漏せしむべからざることを告ぐ。(六二七)

○廿七日江戸邸に於いて陸尺の部屋頭を雇傭せんことを議す。(六二八)

○廿七日石川郡本吉町奉行より手取川の水戸口に船舶の入津困難なる事情を上申す。(六三〇)

十一月

○九日前田齊廣幕府の老中を歷訪す。(六三一)

○十三日德川家齊使を遣はして前田齊廣の參覲を勞はしむ。(六三二)

○十五日前田齊廣病むを以て自ら登營せず、使を遣はして物を德川家齊に献らしむ。(六三三)

○廿一日前田齊廣、德川家齊に茶を献る。(六三四)

○廿二日大聖寺侯前田利之金子借用を加賀藩に請ふ。(六三七)

十二月

○九日德川家齊使者を前田齊廣に遣はして寒氣見舞の爲に檜重を贈らしむ。(六三八)

○十三日前田齊廣能を演ぜしめて治脩夫人等を招請す。(六四〇)

○十八日本年の產米損耗高を幕府に屆出づ。(六四〇)

○十九日前田齊廣參覲の後初めて登營す。(六四二)

○二十日來々年の參覲延期を許さる。(六四三)

○廿二日前に大聖寺侯前田利之請ふ所の借金の一部を許諾す。(六四四)

○廿二日隱し室商賣の者に禁止を命ず。(六四七)

○廿五日大聖寺侯前田利之再び加賀藩に御納戸金を借用せんことを請ふ。(六四七)

是歲

○鹿島郡竹町村に於ける藤内の由來を上申す。(六四八)

文政元年　戊寅　皇紀二四七八

正月

○朔日前田齊廣病むを以て登營を辭す。(六五〇)

○十五日前田齊廣參覲後初めて德川家齊に謁見す。(六五一)

○十八日高齢者死亡の後その扶持米支給を繼續せしめたる河北郡十村市十郎の罪を議す。(六五一)

○晦日高齢者に扶持米を支給する際の手續を告ぐ。(六五四)
○使者を京都に派して女御入内を祝し奉らしむ。(六五五)

二月 ○十四日京都妙乘院より前田齊廣の女の縁談に就いて照會す。(六五六)
○十五日前田齊廣の生母貞琳院病むを以て看護の爲歸國の許可を請はんことを議す。(六五九)
○十六日實子十歳以下なる者にあらざれば弟を末期内存の繼嗣たらしむるを禁ず。(六六一)
○十七日町會所にて禁牢を命じたるもの丶年數計算法を公事場と同一たらしむ。(六六二)
○十八日領内に於いて能美郡若杉産陶器を販賣せんとする者に便宜を與ふべきことを告ぐ。(六六三)
○十八日石川郡割出村頭振長四郎の妻三子を産む。(六六三)
○廿三日幕府の老中より前田齊廣に不日就封の暇を賜はるべきことを告げらる。(六六四)
○廿五日前田齊廣就封の暇を受く。(六六五)
○廿八日前田齊廣登營して就封の辭見す。(六六六)
○廿八日前田齊廣江戸を發して就封の途に上る。(六六七)

三月 ○十日前田齊廣金澤城に歸着す。(六七二)
○十四日製鹽を漕運する際その取扱を愼重にすべきことを命ず。(六七四)
○十六日前田齊廣の女勇姫疱瘡と診せらる。(六七四)
○廿五日灰吹銀その外潰銀賣買と銀箔製造とに關する幕令を傳ふ。(六七五)
○廿七日前田齊廣の女勇姫の疱瘡快癒す。(六七六)
○金澤城石川・河北門外に於ける下馬・下乘の位置に就いて令す。(六七七)
○御算用場等より十村等に與ふる書狀の宛所認め方に就いて告ぐ。(六七七)

四月 ○七日二條治孝の内使金澤城に登る。(六七八)
○八日珠洲郡松波村滿福寺と村方との持山爭議に就いて類例を調査す。(六八〇)
○十三日武具の充實に關し衆議す。(六八一)
○十四日金澤に地震あり。(六八三)
○十四日能登・越中産の菜種に對し取締法を設くべきことを通牒す。(六八三)
○晦日二歩判金の新鑄に關する幕令を傳ふ。(六八四)

五月 ○朔日野田桃雲寺内大佛堂再建に付き松材伐採のことを議す。(六八五)
○六日前田齊泰、老臣長甲斐守の邸に臨む。(六八六)
○九日大聖寺侯前田利之歸邑の途金澤に宿す。(六八七)

六　月

〇十二日年號を文政と改められたる報金澤に達す。(六八八)
〇金澤城内樂屋多門の屋根を鉛葺とする經費に就いて議す。(六八九)
〇金澤寶圓寺に於いて昨今兩日前田重教の三十三回忌法會を執行す。(六八九)
〇十三日石川・河北兩郡の大犬を追ふ爲鐵炮の空發を許す。(六九〇)
〇十四日三子出生の場合の見屆け方を十村に令す。(六九一)
〇十八日石川郡宮腰往還に於ける二匹繫の馬を禁ずることを議す。(六九二)
〇晦日馬術師範役淺川七太夫、淺野川馬場に於ける賃馬持との交渉に就いて伺出づ。(六九二)
〇幕府の預地及び加賀藩領の百姓等互に切高・取高をなし懸作することを得しむ。(六九七)

七　月

〇十日旱魃なるを以て用水を濫用すべからざることを告ぐ。(六九八)
〇十四日領國浦々に於ける出津・入津の物品口錢取立方に關して通牒す。(六九九)
〇廿五日重ねて武具製造のことに就いて議す。(七二四)
〇廿八日用水及び河川に於ける漁撈者の心得を令す。(七二六)
〇晦日能登に於ける皮革は同國の皮多をして支配せしめんことを議す。(七二七)

八　月

〇十一日前田齊廣家老等の任務を諭し、且つ病によりて數年の後隱退の意あることを告ぐ。(七二八)
〇十二日村井又兵衞改めて產物方御用を命ぜらる。(七三二)
〇十三日家老等前田齊廣の諭告に對する請書を呈す。(七三三)
〇十五日家老等政務に關し年寄の決定以前に意見を求められたきことを要求す。(七三七)
〇廿五日前田齊廣、寺島藏人を轉職せしめたる理由を述べ、老臣の政務に偏執の念なかるべきを諭す。(七三九)

九　月

〇四日藩の收納米及び給人米の納方に關して告ぐ。(七四〇)
〇十二日鰤十分一銀の徵收を忽にすべからざることを告ぐ。(七四四)
〇十三日能登幕府領預地の者變死の際に於ける取扱に就いて告ぐ。(七四五)
〇廿八日前田齊廣の女鈴姬本鄉邸に生まる。(七四六)
〇廿九日前田齊廣政務の改善に意を致すべきことを命す。(七四六)

十月 ○四日前田齊廣の女銈姫七夜の祝儀を行ふ。(七四七)
○四日雛卵の産出を奬勵すべきことを告ぐ。(七四七)
○四日質商賣に役銀を徴し株立とすべきことを告ぐ。(七四八)
○六日諸士養子を爲したる後實子を得たる場合の跡目相續者選定に關して令す。(七四九)
○七日三條西實勳の内使金澤に來りて年寄の邸を訪ふ。(七五〇)
○八日町人・百姓が人馬繼立に堂上方の名を假る等のことを禁ず。(七五〇)
○十二日諸士出仕の際列居を遲緩すべからざることを告ぐ。(七五一)
○十二日役人を推薦する者の心得を諭す。(七五二)
○十六日浦口錢のうち改定したる條々を告ぐ。(七五三)
○十九日祠堂銀を借用する諸士にその返辨を確實にすべきを告ぐ。(七五四)
○廿四日鹿島郡所口附近の商荷を邑知潟により漕運を禁ずる前令を守らしむ。(七五五)
○廿九日藩内一般に調達銀に應募すべきことを勸め、尋いでその仕法を定む。(七五六)
○領内空閑の地に樹木を植栽せしむべきことを令す。(七六三)
○諸士の町會所より銀子を借用する者は公用以外濫に外出すべからざるを命ず。(七六四)

十一月 ○八日旦那寺の件に關し頭寺より在家の者を召喚するも直に之に應ずべからざることを告ぐ。(七六五)
○十二日石川郡の十村倉谷金山の沿革を上申す。(七六六)
○十八日百姓等の擅に旦那寺より往來札を得て領外に旅行することを禁ず。(七六八)
○廿七日藩製造の鹽硝を賣却して武具の充實を圖るべきことを建議す。(七六九)
○廿八日人持組横山藏人芝居及び茶屋町創設に反對の意見を上申す。(七七一)
○諸郡御扶持人等明春より大に漆苗を增植せんことを建議し、産物方の容るゝ所となる。(七七一)

十二月 ○二日鳳至郡輪島に漆座を立つることを許す。(七七三)
○六日金澤町奉行に芝居座開設を許可し得べきことを令す。(七七三)
○八日前田齊廣老臣等に明年九月參覲すべき命を得たることを告ぐ。(七七四)
○十三日前田齊廣の女從姫金澤に生まる。(七七五)
○十九日前田齊廣の女從姫の七夜の祝儀を行ふ。(七七六)

○廿一日前田齊廣病むを以て明年年頭の禮を受けざることを告ぐ。(七七七)
○廿八日收納米の皆濟前に籾を質入にするを禁ず。(七七八)
○廿九日前田齊廣、諸士の家族をして芝居見物せしむべからざる等のことを告ぐ。(七七八)
○代官が貸米等藏納の際目拂米を受くるを禁ず。(七八〇)
○領內產の牛馬取締方及び馬市の仕法を定む。(七八一)
○天明四年以降金澤に於いて芝居・輕業・曲馬等の興行を許可したることを調査上申せしむ。(七八六)
○金澤以外の地に於いて芝居等の興行を禁ずべきことを告ぐ。(七八七)
○地舟裁許宮腰屋久右衞門の配下をして輸出米の改裝に從事せしむべきことを告ぐ。(七八七)
○河北郡の十村等河北潟の排水口を疏通せしめたるを以て經費の補助を求む。(七八八)

文政二年　己卯　皇紀二四七九

正月　○朔日前田齊廣病むを以て年頭の禮を行はず。(七九一)
○廿二日御郡方の者の芝居狂言を觀覽することを禁ず。(七九一)
○廿九日本畑に甘蔗を植うべからざる幕令を傳ふ。(七九二)

二月　○朔日本年より再び馬市を開催するを以て諸士の心得を命す。(七九三)
○八日他國產綿弓弦の販賣を禁じ、商品の價格を一定す。(七九四)
○十二日賣買を假裝して物品を預り、高利を以て金錢を貸與することを禁ず。(七九五)
○十六日能登產の木炭商賣を株立とし、運上銀を徵することを告ぐ。(七九六)
○十八日會所銀過借の分の貸附及び取立方を定む。(七九七)
○廿二日能登內浦に於いて紀伊の漁民に鯨獵を許したることを告ぐ。(七九八)
○廿三日犀川に於いて見合札を有せざる者の投網・小目網・流網を用ひて漁撈することを禁ず。(七九九)
○廿五日前田齊廣使を發して仁孝天皇の御惱を奉伺せしむ。(八〇〇)
○廿五日婦人の衣服等に關する前令を勵行すべきことを通牒す。(八〇一)
○廿七日學校を改築するを以て本日より授業を停止す。(八〇二)
○廿八日前田齊廣退隱の意を家老等に傳ふ。(八〇三)

三月
○晦日與力及び同心の知行總額を計算す。（八〇五）
○六日前田齊廣改作法を修正勵行せんことを告ぐ。（八〇五）
○七日盜賊改方御用の藤内に御郡方一般に止宿を許されんことを申請す。（八〇七）
○十三日家中の者の能登・越中の浦方に於いて魚類を買入るゝ場合の納税及び運送手續を命す。（八〇八）
○十九日加賀・能登・越中の十村廿八人に入牢を命ず。（八〇九）
○二十日天德院靈堂增築の工を起す。（八一三）
○廿四日大田數馬・山本又九郎・寺島藏人私に政事を議するを以て遠慮を命ぜらる。（八一三）
○廿五日前田齊廣藩吏の政務の機密を漏洩することを戒む。（八一四）
○廿五日百姓の衣食住に關して告ぐ。（八一六）
○廿五日小松梅林院天滿宮の開帳を金澤に行ふ。（八一八）
○十村等吉事の際に於ける祝儀の品目を定む。（八一八）
○十村等の入牢に關し百姓の歎願することなかるべきを告ぐ。（八一九）
○御郡方の者の武家に出入し、又は城下に長逗留するを禁ず。（八一九）
○御郡方等の博勞を株立とし役銀を上納せしむ。（八二〇）

四月
○二日大聖寺侯前田利之參覲の途金澤に宿す。（八二二）
○十六日行路に發病したる婦女の取扱に就いて告ぐ。（八二二）
○十九日前田齊廣・齊泰父子能を演ず。（八二三）
○廿四日領國内の寺社に於ける制札の調査を命ず。（八二四）
○遠所町奉行等、行路病者を介抱したる爲その本國より贈られたる謝儀を受くるを禁ず。（八二四）
○諸浦に於いて砂錢を輸入するを禁ず。（八二五）

閏四月
○四日公務の爲に廻村する役人は十村の家に宿泊すべきことを諭す。（八二五）
○六日前田齊廣、家中よりの借知は尙前年通り繼續すべきことを告ぐ。（八二七）
○六日前田齊廣御郡方より差出したる仕法調達銀の不成績を責む。（八二七）
○六日淺野川・犀川兩馬場の土手を毀損すべからざることを告ぐ。（八二八）
○八日盜賊改方より十村等を召喚する場合の手續に就いて定む。（八二九）
○十三日金澤川上新町の芝居小屋附近に檢使を派遣

する場合の分擔を通牒す。（八三一）

○十四日學校を改築するを以て所屬足輕・小者の員數を減することを命す。（八三二）

○十四日前田齊廣、十村等の身分不相應なる家屋を毀たしむべきことを嚴命す。（八三三）

○十六日本日より關助馬場に於いて馬市を開催す。（八三五）

○十八日町地に人別を有する者を召抱へ又は解雇したる時の手續を通牒す。（八三六）

○廿五日前田齊廣老臣等にその藏する管絃時計を觀覽せしむ。（八三七）

○鹽釜の灰を船積にて運漕する際の手續を定む。（八三八）

○石川郡土清水に於いて製造する鹽硝の額を調査す。（八四一）

○寺院又は神社に於いて百姓の租納皆濟以前に齋米を貰ることを禁す。（八四一）

○芝居に於ける道具・衣裳等に贅澤の品を用ふることを禁止す。（八四二）

○芝居座區域内の定書を交附す。（八四三）

五月

○六日金澤川上芝居開演せらる。（八四四）

○九日御仕法調達銀上納方に關して告ぐ。（八四四）

○十二日百姓の家作に對する制限を令す。（八四五）

○十四日紺屋刷毛の輸入を禁すべきことを告ぐ。（八四七）

○廿二日前田齊廣蓮池内に居館を設くるの許可を得たることを告ぐ。（八四八）

○廿八日前田土佐守蓮池に於ける御殿造營の主任を命ぜらる。（八四九）

○晦日人別・戸數等の調査に從ひたる地子町の組合頭に賞賜す。（八四九）

○前田齊廣功を賞するに職を以てするを戒む。（八四九）

六月

○二日高野山天德院の住僧金澤城に登る。（八五〇）

○五日蓮池の御殿造營方役人を命ぜらる。（八五一）

○六日學校の改築成るを以て、本日より授業を開始す。（八五二）

○六日領國内町見御用の爲石黑信由を巡回せしむることを御郡方に告ぐ。（八五三）

○八日學校に出席すべき諸士及び子弟の怠慢を戒む。（八五三）

○十日仕法調達銀を藩に差出したる者に相當の手形を發行し得ることを告ぐ。（八五四）

○十日能登の漆搔に鎌役を徴することを定む。（八五六）

○十二日金澤に地震あり。（八五七）

○十二日一向宗の僧侶が昇進の爲にする寄附金の勸誘に應ずべからざることを告ぐ。(八五七)

○十二日新開所の免合は新田裁許之を査定し十村連名を以て上申すべきことを通牒す。(八五八)

○廿五日金澤川上新町の芝居小屋を改造する爲本日より興行を停止す。(八五九)

○廿八日諸浦漁獲徴税の仕法を改め、その吟味人を命ず。(八六〇)

○晦日昨今兩日前田齊敬の二十五回忌法會を天德院に執行す。(八六一)

○先に入牢を命じたる十村等の流刑に處することを告ぐ。(八六二)

○十村番代等にその勤方を愼み質素の風俗を守るべきことを告ぐ。(八六三)

七月

○二日石川郡土淸水焔硝藏の地内に於いて土中より火を發す。(八六四)

○五日能美郡釜淸水村等に猪・鹿驅逐の爲火藥を下附せしむ。(八六五)

○九日前田齊廣、退隱の志願を達する爲前田伊勢守に江戸に赴き斡旋すべきことを告ぐ。(八六六)

○十六日年寄村井又兵衞等前田齊廣の退隱事情を公布することに就いて議す。(八六七)

○十九日花火禁止の前令を守るべきことを告ぐ。(八六九)

○廿五日主人を迎ふる爲城中の腰掛に在る小者等の不作法を戒む。(八六九)

八月

○十一日入牢中の十村一部を能登島の向田に流す。(八七〇)

○十四日前田齊廣の子爲三郎金澤に生まる。(八七二)

○十五日 前田齊廣諸士に 男子を擧げたることを告ぐ。(八七三)

○十八日入牢中の十村九人を能登島の曲村に流す。(八七三)

○廿二日前田齊廣の子爲三郎の七夜の祝儀を行ふ。(八七三)

○廿六日細工奉行、石川郡八幡村の竹林を檢閲せんことを禀請す。(八七四)

○能登島の流刑人を乘船せしむべからざることを告ぐ。(八七四)

○鰤網の漁獲を竊盜する者の制裁に就いて告ぐ。(八七五)

九月

○五日前田齊廣の子爲三郎歿す。(八七六)

○七日鳥構場の松枝を除かんとする時は山方役人の許可を得べきことを告ぐ。(八七六)

○八日前田齊廣の子爲三郎の葬儀を執行す。(八七八)

○九日足輕・坊主・小者の子弟及び町・在の者の學

校に出席の手續を簡易にせることを通牒す。(八七九)
〇十三日金澤川上新町の芝居座木戸の取締方を定め本日より再び興行せしむ。(八八〇)
〇十九日聖堂銀を借用せるものゝ返濟方法を改む。(八八二)
〇二十日昨今兩日江戸傳通院に於いて前田吉德夫人光現院の百回忌法會を執行す。(八八三)

十月

〇朔日指扣の如き輕罰を受くる者といへども外部との交通を禁止すべきことを通牒す。(八八四)
〇六日綿打に他國製の弓弦を用ふるを許し、役銀を徵することを定む。(八八五)
〇七日前田齊廣病むを以て本年十一二月頃まで在國するの願を許さる。(八八五)
〇八日前田治脩夫人法梁院の逝去を發表す。(八八七)
〇十四日金澤に於いて前田治脩夫人の逝去したることを告ぐ。(八八九)
〇十六日前田治脩夫人逝去したるを以て幕府の發したる弔慰の奉書金澤に着す。(八八九)
〇二十日諸村萬雜の取扱に關する不正を詮議すべきこと等を命ず。(八九〇)
〇廿二日奥村助右衞門家臣の邸地、學校地內に建築せらるべき殿閣に接近するを以て之を献納せんことを出願す。(八九二)
〇金澤河原町鶴來屋次郎吉等越中高岡製の傘を一手販賣する爲その仕法書を提出す。(八九四)

十一月

〇四日鳳至郡中居村の孫左衞門に內浦產の眞珠取締を許す。(八九七)
〇十二日曩に御召米としたる家中諸士の收納米に對し本勘定を遂ぐべきことを告ぐ。(八九八)

十二月

〇九日婚姻を愼重にし濫に離緣せざるべきの令を通牒す。(八九九)
〇十四日前田齊廣の女芳姬名を恒姬と改む。(九〇〇)
〇廿六日前田齊廣の女忠姬及び次姬金澤に生まる。(九〇〇)
〇廿八日能美郡若杉に石燒の陶器を產するを以て他國より輸入することを禁ず。(九〇一)
〇町會所に於いて銀札を發行することを告ぐ。(九〇二)

是歳

〇越中高岡瑞龍寺の山門を再建す。(九〇二)

文政三年　庚辰　皇紀二四八〇

正月

〇朔日前田齊廣病むを以て年頭の禮を廢す。(九〇三)
〇七日前田齊廣本年二・三月の交まで參覲延期の願を許されたることを告ぐ。(九〇三)
〇十二日大聖寺侯前田利之登營して本年三月以降時々の出願により前田齊廣の參覲を延期すべき幕命を受く。(九〇四)

○十四日前田齊廣老臣に風炮を観覽せしむ。(九〇六)
○二十日前田齊廣新造の殿閣を蓮池上の御住居と稱せしむ。(九〇六)
○廿一日天徳院に於ける前田氏の新靈堂成り遷座の儀を行ふ。(九〇七)

二月

○八日能美郡若杉に土燒の陶器をも産するを以て他國品の輸入を禁す。(九〇七)
○十四日前田齊泰初めて馬術・讀書を學ぶ。(九〇八)
○十五日前田治脩夫人法梁院の遺物を老臣等に頒つ。(九〇八)
○廿四日前田齊廣武具土藏の増築を命ず。(九一一)
○二日御郡方の者の公事出入及び他國旅行等の儀に就きて令す。(九一二)

三月

○六日竟に仕法調達銀を上納せる町・在の者に銀子手形を貸附すべきことを告ぐ。(九一三)
○八日前田齊廣參覲を本年八・九月の交に延期することを許さる。(九一五)
○十二日鑑札を所有せざる者の烟草取捌を嚴禁せしむ。(九一六)
○十四日狩獵者の獲たる鹿皮は悉く河北郡淺野村の革多に賣拂ふべきことを命ず。(九一六)
○廿三日前田齊廣、金澤卯辰・石坂兩所に茶屋女を許さんとすることを告げしむ。(九一七)

四月

○朔日前田齊廣、世嗣齊泰の教養の任に當る者の心得を諭す。(九一八)
○四日町奉行の稟請に基づき金澤卯辰・石坂兩所に茶屋女を許したることを通牒す。(九二〇)
○八日鞍月庄用水及び大野庄用水を諸士の邸内に導くことを禁ず。(九二七)
○十三日金澤の芝居座中の一を遠所町にても興行せしむべきことを告ぐ。(九二八)
○廿二日前田齊泰石川郡粟ヶ崎に行歩し次いで宮ノ腰に赴く。(九二九)
○廿五日前田齊廣の女珍姫江戸駒込富士社に宮參を行ふ。(九二九)
○郡地の戸數・人口等を御郡奉行・改作奉行以外に届出づべからざることを令す。(九二九)

五月

○二日馬市の取締方に就いて上申す。(九三〇)
○五日金澤尻垂坂より小立野石引町に至る道路の通行を許す。(九三一)
○九日大聖寺侯前田利之江戸より歸邑の途金澤を過ぐ。(九三一)
○十五日是日以後金澤に大雨あり。(九三三)
○二十日前田齊廣老臣等に水揚道具を観覽せしむ。(九三三)

六月

○廿九日放銃の技に達したる足輕に賞賜す。（九三三）

○犀川に於いて鑑札を有せざる者の漁撈を禁ず。（九三四）

○上方役者の芝居座に關係ある足輕等の居宅に廻勤するを禁ず。（九三五）

○九日大雨により犀川・淺野川の橋梁を損ず。（九三六）

○十三日前田齊泰居を金澤城二ノ丸御殿の御居間書院に移す。（九三七）

○十九日皇子降誕を賀する爲前田齊廣使者を命ず。（九三八）

○廿七日諸奉行人等の出仕・出勤時刻を遲延するなかるべきことを告ぐ。（九三八）

○廿七日去年能登島に流されたる十村十八人を宥すべきことを告ぐ。（九三九）

○金澤川上新町の芝居座圍外の茶屋等にて長刀・笠籠等を預ることを禁ず。（九四一）

七月

○十一日金澤寶幢寺坂の開鑿成りたるを以て通行を許す。（九四二）

八月

○六日河北潟に於ける卷網の漁法を改む。（九四三）

○十六日五ヶ年省略を實行するを以て諸士の風俗に關して令す。（九四四）

○十八日本日より士庶共に百間堀通の往來を許す。（九五五）

○廿一日堤防缺壞の修理は今後一層鞏固に行ふべきことを告ぐ。（九五六）

○廿三日藩侯の學校に臨む際は便門より出入するを以て諸士の下馬下乘に關して定む。（九五七）

○廿五日城下惣構御堀筋その他各河川に塵芥を捨つることを禁ず。（九五九）

九月

○朔日金澤尻垂坂高より寶幢寺高に至る間に死人・繩懸等を通過せしむるを禁ず。（九六〇）

○六日金澤卯辰及び石坂の茶屋町に檢使を派遣する場合の分擔に就いて協議す。（九六一）

○九日前田齊廣病むを以て更に參覲の時期を延ぶべきことを許さる。（九六二）

○廿三日諸向より江戸等に差立つる御用荷物等は發送前日中に會所へ出すべきことを告ぐ。（九六三）

○廿四日諸士の家作に關する制限を通牒す。（九六四）

○晦日前田治脩夫人法涼院の一周忌法會を寶圓寺に行ふ。（九六六）

○晦日衣類・家作・祝儀等に關する心得方を令す。（九六七）

○文化十三年以後利子の支拂を中止したる諸郡調達銀に對し毎年少額の米穀を與ふべきことを告ぐ。（九六九）

○金澤兩茶屋町の茶屋女に關する規定を公布す。（九

七〇）

十月 〇四日算用場奉行その支配の者に對し省略の心得を諭す。（九七三）

〇四日能登の生海鼠漁獵に就いて令す。（九七八）

〇五日町會所より仕送銀を受くる諸士にその放漫を戒む。（九七九）

〇十日五ヶ年間省略の爲式服に大紋等及び長袴の着用を廢せしむ。（九八〇）

〇十一日年頭の作法・儀式等に就いて省略の法を定む。（九八一）

〇廿二日大村壯助等不行跡を以て流刑に處せらる。（九八二）

〇廿七日明年以降三歲駒市と二歲駒市を各別に開くべきことを告ぐ。（九八四）

〇廿八日作法調達銀上納及び返濟の期限を明後年以後更に五ヶ年間延期することを告ぐ。（九八六）

〇廿九日家中の諸士請地をなすものゝ地子銀上納期限を守らしむ。（九八九）

〇金澤卯辰・石坂の茶屋町に郡方の者の遊興を禁ず。（九九〇）

〇河北郡淺野の革多等簑馬を藩外に出すことの禁止を稟請す。（九九一）

十一月 〇四日綿打職の牛役上納の件を通牒す。（九九二）

〇十日文化十四年町・在より借上げたる銀子の年賦返濟を本年より省略中延期すべきことを告ぐ。（九九三）

十二月 〇十二日他國産紺屋刷毛の輸入禁止に就いて通牒す。（九九五）

〇十三日經費省略の爲に料紙の使用を減ずべき方法を講ず。（九九五）

〇十四日諸浦魚口錢の上納を嚴重に調査すべきことを告ぐ。（九九六）

〇廿一日他國に使者を勤むる者の貸渡金高等に就いて告ぐ。（九九七）

〇廿八日富田景周藩政の釐革に關して建言す。（九九八）

就業

侯爵前田家囑託 日置謙

昭和十四年二月十一日印刷
昭和十四年二月十五日發行
（非賣品）

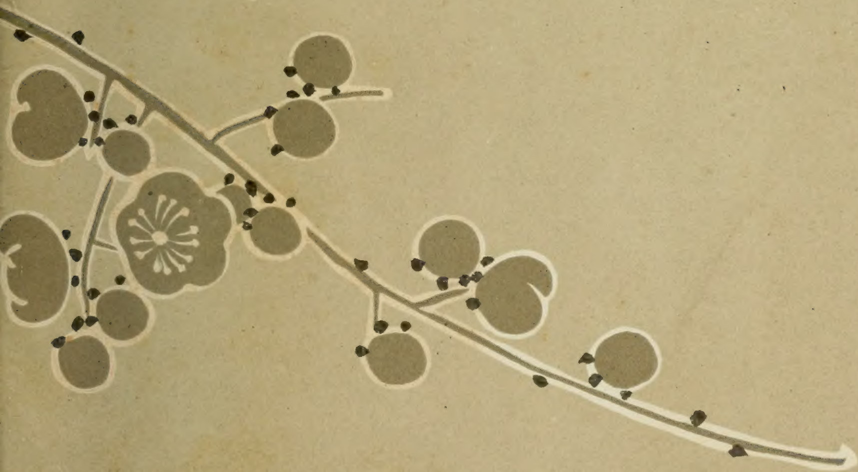
東京市目黒區駒場町八百六十一番地
著作者　侯爵前田家編輯部

東京市淀橋區東大久保町二丁目三百十七番地
發行者　石黒文吉

石川縣金澤市高岡町九十番地ノ二
印刷者　高橋覺吉

石川縣金澤市高岡町九十番地ノ二
印刷所　明治印刷株式會社






EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03017 5608